

ポケ×ぎじ 蒼鋼少女

緋枝路 オシエ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

目次

Segment・mono	1	始まり
Segment・mono	17	ジツク
Segment・mono	32	邂逅
Segment・di	45	黒と蒼
Segment・di	57	〔Valest ein〕
Segment・di	72	実力
Segment・di	191	大きい蒼と大 旅路
Segment・tri	164	好物
Segment・tri	157	危険な女
Segment・tri	133	V S 爽羽佳
Segment・tri	115	V S ネリ
Segment・tri	94	きい青

Segment・tetra	眺望と	クネーム	287
躊躇い	200	Segment・tetra	ぬくも
Segment・tetra	勝負の	り	308
合図	210	Segment・penta	仮想仮
Segment・tetra	女の武	面	323
器	227	Segment・penta	黒ノチ
Segment・tetra	猛火の	カラ	336
兆候	239	Segment・penta	ネリ
Segment・tetra	レゾナ	ルートの場合:	362
ンス	253	Segment・penta	爽羽佳
Segment・tetra	邪暁な	ルートの場合:	371
る火焰	269	Segment・penta	メコン
Segment・tetra	【ニツ	ルートの場合:	378

Segment・penta—無名無 439
 舞—
 Segment・penta—秀麗闘 427
 ジョン—
 Segment・penta—リビ 417
 Segment・penta—∞ 409
 は食材だけじゃない—
 Segment・penta—焼くの 399
 りこなさまーばけーしょん?—
 Segment・penta—かたく 385
 ヴイとさまーばけーしょん!—
 Segment・penta—ヴィ

k i e 一— 572
 Segment・hexa—
 ケツキング— 561
 Segment・hexa—音ゲ—
 Segment・hexa—もうひと
 Segment・hexa—再戦 513
 Segment・penta—捲土重
 来— 490
 Segment・penta—闘 468
 Segment・penta—力戦奮 452
 形—

Segment・hexa―ヤベー奴
 と可憐毒 ―― 582
 Segment・hexa―何も考え
 ず済む方法 ―― 592
 Segment・hexa―コンテス
 ト決着! ―― 607
 Segment・hexa―お怒り
 フォルムの内側 ―― 627
 Segment・hexa―カード
 だったらTAG TEAM ―― 638
 Segment・hexa―スーパ
 メコンメコンタイム ―― 662
 Segment・hexa―心のル

ビツクキューブ ―― 682
 Segment・hepta―白銀の
 きぎはし ―― 696
 Segment・hepta―蒼き鉄
 槌 ―― 701
 Segment・hepta―葵の歌
 姫 ―― 712
 Segment・hepta―蒼冥茫
 のクラウドニー ―― 719
 Segment・hepta―歓談な
 る老練は帰還した ―― 729
 Segment・hepta―白執事
 と巫 ―― 736

Segment・hepta——召喚

747

Segment・hepta——エス

パーと酷似する『ノーマル』—— 756

Segment・hepta——『角』

『封』『守』『縛』—— 763

Segment・hepta——飛翔し

たポテンシャル—— 773

Segment・hepta——完璧な

戦術—— 780

Segment・hepta——起死回

生の一撃は—— 789

Segment・hepta——サテラ

イトラストと20年前の：—— 801

Segment・hepta——メイド

の海底実家—— 819

Segment・hepta——rec

overly—— 832

Segment・hepta——Re

sonance—— 852

Segment・hepta——〔C〕

〔S〕—— 857

Segment・hepta——蒼と冥

—— 869

Segment・hepta——気持

ちは伝わる確実に—— 881

Segment・ennea — [S r
 め ————— 934
 Segment・octa — かりそ
 ラゴン ————— 923
 Segment・octa — 最強のド
 e f f ————— 914
 Segment・octa — [h
 再会 ————— 906
 Segment・octa — ∞との
 チツクな語り手 ————— 898
 Segment・octa — エキゾ
 ニテイ・トラベラー ————— 889
 Segment・octa — エニグマ

Segment・ennea — [l ————— 939
 しい ————— 944
 たま

Segment・mono——始まり

この世界にポケットモンスター、縮めてポケモン、不思議な生物が発見されて以降、人間達の生活にはポケモンが、いて当たり前となる。

その種類は初期に発表された、一五一等を等を超えて二〇〇、三〇〇、四〇〇……こうしての間にも、新種と接触しているトレーナーも、居るかも知れない。

太古からポケモンと共存してきた人間は、トレーナーとなり旅をする若者、十歳に満たない者だつて認められさえすれば、誰もが免許を持ち、相棒や仲間達と一緒に世界を駆け巡れる門出が開かれる。

ポケモンを生業に生計を立てる少年、少女はこの世界で珍しくない。

謎を解明しても明日になれば、新たな謎が生まれ完全に解析するのは、不可能かもしれないと各地方の研究者は言葉を揃える。

捕獲用のアイテム、モンスターボールでゲットしたポケモンを戦わせ、協力し合い、時には反発し、相容れないポケモンも存在するけど、悪者では無い。この星に住まう欠片の一部で、欠かせぬ構成物。

人間だけの星がいつしか「人間とポケモンの星」になり、ポケモンを使った犯罪など

まった。

モンスターだから許されていた、見逃されていた事も、人型になれば事情は変わる。市民権も与えられ、住民票の登録もされている。

もう人間とは何ら変わらない、だが彼ら／彼女らはあくまでもポケットモンスター、神秘でミステリアスな生き物。

この様な姿を取れるようになった原因は、今のところ不明。創造神と称えられる存在の、気まぐれだとか冗談半分で噂されていたり。

少なくともポケモン達は、人の姿になれる現状には好意的だ。

おや：． トレーナーが所持しているポケモンは、本来の姿から人型を自在にコントロール出来るが、トレーナーを持たぬ野生のポケモンは、人型になれる個体も居ればそうでない個体も居るらしい。

この辺りも解明には時間が掛かりそうだ。

「本来の姿」と表現しているが、人型自体がイレギュラーなので、ありのままを蔑ろにしてはならない。

どちらの姿であつても、ポケモンは人間のパートナーであり、道具では無い。

例えばゲットされようと、気持ちまでは縛ることは出来ない。その関係を望まなければ、自ら去ることも出来る。ポケモンの権威である博士は述べた。

“りくちのさいはて うみのはじまり”

陸と海の玄関口となる、ホウエン地方東部の有名な観光地、ミナモシテイ。

主な施設は郊外のサファリゾーン、美術館、コンテスト会場、とあるお偉いさん方が泊まる民宿、ファンクラブに巨大なデパート。

ホウエンでも一、二を争う広さの街は行楽スポットがいっぱい！ ジョウトやカントーからの旅人も気に入ってしまった、在住してしまう賑やか、だけどゆったりした雰囲気。

沖にデツキチエアを置いて、さざなみとキャモメやタツツの鳴き声をBGMに、お昼寝なんてしちやったら……

自然のエネルギーが満ちあふれ、温暖な気候と広大な海域、名称由来である「豊かな緑」に偽りの無いホウエン。

この物語の主人公を務める一人、彼もまた自然豊かなだけでなく「ポケモンと人の縁の大切さ」、ホウエンの由来となったもう一つの意味を実感し、ポケモン達との旅を一区切り付けて、憧れのこの地へ拠点を築きあげた若きトレーナー。

「よいしょ〜！ お洗濯の時間ですよ〜！ 日差しの強さも位置も良好です！ホ

ウエン地方は毎日くがお洗濯日和！ ゆーきリンリン♪ げんきハツラツうくく♪
きよーみシンシン♪ いーきヨウヨウおー♪」

……の前に、チルタリスよりゴキゲンに、ハミングしちやつてるこの子。

彼が最も頼りにして最も長い付き合いとなる、一匹のポケモンを紹介しよう。

澄んだ水色はホウエンの海模様と、ホウエンの空模様を凝縮した物。

男性永遠のロマンと拘りを詰めた、ロングタイプメイド服は、二段フリルのペチコートでフワッフワに広がって、彼女の性格を体现している。自分で自分の性格を、よくご存じのよう。

主人に頼まれたから着ているのではなく、彼女が人化した際の衣装から、自らの役割に相応しい形へと独自改造。

一般に知られている彼女の容姿とは異なるが、個体差や本人の意思がある。

ひんやりした肌を包むのは天の川、もしくは「ホウエンのウユニ潮湖」と、呼び声高い一二〇番道路の水面に映る夜空を、彷彿とさせる抽象的な星型刺繍を施したエプロンスカート。

本来の姿の背ビレや胸ビレを連想させる、リボンブローチ。

全体的に重装備、露出はほぼ皆無と言いたいところだが、ワンピースのデザインは肩部分や胸元の一部がカットされ、これまた本来の姿形のイメージや、彼女のふんわり

ポワポワおっとりな、性格を明確に表した特大特盛りな胸が強調される。

彼女の種族は大きめとなっているが、ここまでの大きさまで成長を遂げてしまうとは……進化して一気に実って、レベルが上がれば上がるほど衣装もミツチミチで、たくわえるを使つてないのに女肉がたくわえられる。

何度自分の胸が原因で破壊してしまつたか。決して胴回りがちよつと太いとか、ふつくらしてるとか、そういう理由では無いと、身を振らせながら彼女は紅色の玉より紅くなる。

水色ロングヘア頭頂部にはヘッドドレス、みよくんみよくと海風につられ、チリンみたいにゆらり風流を感じさせるかもしれない、二つの突起はアホ毛——であつたが、最近は三つ編み風にアレンジ、感情によつて様々なパターンを見せる、発行器官。

レモンイエローのブーツを履いた脚を、檜で作られたお洒落で頑丈なベランダを歩き回り、ゆつたりとした仕草で丁寧に仲間と、親愛なる主人の洗濯物を干し終え——

「はわわっ……ジツクさんの下着ですう……何時になつてもドキドキしちゃいますよお……」

あ、これも何時もと変わらぬ日常の一コマです。何年も家事をしてるのに、異性の下着を視野に入れるのはハズカシイ。

大得意かつ自分が受け持ち他の誰にも渡せない！洗濯、炊事、掃除、清潔な印象なが

ら、どこか甘美な美少女は戦うメイドさん。

初心だけど、たまくに積極的、それが可愛いライトポケモンのランターン。

ニツクネームは「メコン」

メロンみたいなおっぱいだから、って意味合いはないよ？ ホントだよ？

各地方に兄弟がおり、物忘れっぷりをポケモンと共感すれば、ナントビツクリ、忘れられない秘伝技ですら、思い出せなくなる。

ポケた顔してやつてくれる、毎日ホウエン中からトレーナーが来訪する、技忘れじいさんのお家近く、ミナモの北西がメコンが慕うご主人様の拠点だ。

南国諸島のコテージのように丸太組み、日差しがたっぷり注がれるロフトへの階段で、探索心を擽られる。効率的に風を取り入れ、コミュニケーションもし易い吹き抜けを採用。

手持ち皆の個室を完備して、成人前の少年が所有者だとは、この世界ならば特に珍しくは無い。

旅に出て、または街の施設に貢献し、お金を稼いで自分とポケモン達の居城を、手作りしてしまった一一歳児も居るくらいだ。ポケモンと一緒に頑張れば、なんだって出来る！

全ての洗濯物を干し終えたら正午を回り、お昼ご飯の時間帯。

ベランダからでもお腹を刺激される香りが、アッチコッチから漂ってお腹が鳴りそうだった。はしたないので他の子達の前では絶対に聞かせられない。

「私としては、もう少し腰付近を絞りたいのですが……エクササイズをしても効果の程が見えないのですう……」

ベランダへ続く螺旋階段を降りながら、種族特有の「プニ感」を持っている身体を、メイド服越しに触れる。

彼女は胸がすんごくおつきい、膝枕されたら触覚しかお見えになれないってくらいおつきい。

モンスタールボールを仕込んで、底上げする人間やポケモンも密かに居るが、メコンのHカツプはモンボなんかじゃ到底賄えない。

マルマイン（たかさ一・二m）を直突つ込みしている？ それとも底抜けに甘くいカイスの実？ 耐水加工が施されたこの服でなみのりすれば、透けはしないけどピツタピタに抱き枕ボディに張り付き、あんなラインやこんなラインが鮮明に現れ、艶めかしいラバースーツとなる。

ようちえんじのシヨタは、早くも巨乳に目覚め、たつじんのお爺ちゃんは、保養を超え長生きの源となる。おっぱいこそせいぎのこころ！

「ネリさんにはエッチって言われましたが……そんな気は全く無いのですけど……」

ハピナスなら色々デカい、バチユルだったら色々小さい等、勿論例外や個体差は沢山あるけど、種族柄仕方の無い事、諦めが肝心な件はあるツ。それでもメコンは♀、スマートに見せたいな〜って乙女心があるんです。

「ジツクさんに「そのままのお前が好き」って抱きしめられちゃいましたから……お言葉に甘えちゃおうかなあ……／＼／＼」

主人に尽くすことに生き甲斐を感じているメコンは、お情けとして撫でられたり、ギユツと手を回されたりするのが大好き。

カントリーテイストなタイルを埋め込んだ、キッチンで自分ともう一匹の、お昼ご飯を作りながら数日前の行為を思い出してしまふ。

いえ、あの、決して成人向けの描写はありませんよ？ 気にしている腰回りに手を置かれながら、肩に顎を乗せアクアブルーのロングヘアを、ヨシヨシされただけ。だけっただけっ！

「ぼっ~~~~~~~~………?」

喜びや悲しみの感情をもたらした、伝説のエムリットさんでも今のメコンの感情を、読んだら甘ったるすぎてゲボる。ご主人に対していつだってメロメロ状態、メンタルハーブなんざ効果ないのだ！

「で〜きま〜した〜！ かたくりこさあ〜ん！」

イチヤラブな思い出に浸っても、プロ級ハウスキーパーである彼女は、料理を焦がすことはしない。

カイナシテイから輸入して貰った、魚介類とハジツゲタウンで収穫された、トマト（トマトの実ではない）を入れた蒸し鍋。出汁たっぷりカタプラーナ！

「ミノツ!!? ミノツ! ミノオ〜♪」

「はいっ、いただきましょー! いただきましょー!」

ゴクリンみたいな顔して屋根のてっぺんで、ビタミンDを生成な光合成。いやしのすずじやないけど呼びベルをチリリンツ♪

あんだけグースカしてたのに、びよんびよこ身体を跳ねさせ椅子……には座れないから、直接お鍋をマルノーム……も出来ないから、閉じ込められた素材の旨味をじっくり堪能、ハフハフしながら眼をまん丸くさせる様子を、メコンはほんわかした笑顔で見つめながらミナモ市場で買った、輝かしい銀の食器を動かしている。

みのむしポケモンのミノムツチ、センス抜群のニツクネームは「かたくりこ」
ログハウスに住んでいる四匹のポケモンで、唯一の性別♂。

しかも人化出来るにも関わらず、頑固なに本来の姿から可変させようとしない。

ミノの種類は砂地、何となくお察しかもしれませんが、言葉は「ミノツ」「ムツチ」程度しか喋れない。人間で表せば0歳〜一歳くらい。

性格はのーてんき、大体がぬぼおくとゴクリンフェイス。寝る事と食べる事と遊ぶ事がお仕事。働ける年齢でも容姿でもないけど……

シンオウ地方の旅の途中、ロストタワーの近くに居を構えるズイタウンの、育て屋さんから譲り受けたタマゴから誕生した経歴を持つ。

バトルにも参加する事は無い……のだが、全てのタイプに変化するめざめるパワー、やたら威力の高いあたりを覚えている。

ミノムツチの戦闘力は、お世辞にも高いとは言えないのに、たった二つの技で野生ポケを粉碎つ、玉砕、させる後ろ姿はこわいかおよりも怖かった。

特殊なポケモンなのだろう、戦うよりも前述した日光浴やフーセンガムを膨らませること、*“女性陣のおっぱいに包まれる事”*のが好きらしい。羨ましい奴だ……子供だから許されている。本人もスケベ心より純粋に、柔らかい胸の感覚が好きだから、入り込もうとするのだろう。タブンネ。

「ちそ〜さまでした!」

「ミノツ、ミノ〜!」

あたかも対局を終えた棋士、深々とお辞儀をし手を合わせマナーであり、感謝の気持ちを示す。かたくりこは手が無いので、砂をそれっぽく動かしただけである。コレが出るだけで普通のミノムツチとは、一線を画している。

食器を洗い終えれば、主人を始め他の仲間が戻ってくるまでは、任せられていたお仕事が無くなった。暫し休憩タイムだ。

背筋を伸ばせば、かたくりこのみならず♂ポケの、相当数がかくれんぼしたいHカツプはテンガン山で、シロガネ山。

この標高だけに持ち主の苦労は、進化してから死ぬまでは耐えぬ事は無いだろう。憧れの視線で見られても重くて、動きづらくて、下着もあんまり可愛いが無いし、首と肩も凝るし。

でも主人は好きって言うてくれるから……？

尾びれをパタパタさせながら、妄想を噴火させているメコンに、かたくりこは何を想うのだろうか？ また始まったよ……かもしれない。

「ミノツ、ノノノツ……♪」

特等席は俺の物、主人だつて物理的に入り込めないスペースに、すっぽり覆われながら満悦状態。

湯気を出しながらフーセンガムを、リズミカルに膨らませ、電気タイプだけに谷間の発電所（笑うトコです）、しっとりお肌に微弱な電流でボディマッサージ。地面タイプなのでダメージは無いが、ミノを刺激されてアへる一歩手前だったりする。

子供とは言え♂のとか誰得だ……

かたくりこを谷間に収納するのは、慣れたけど最初の頃は主人にも聞かせた事の無い、ポケモンの技であるなきごえとは別の、オンナとしての「鳴き声」が意志を無視して発せられたり、追い出したいけど追い出せないもどかしさで、妙に甘い息遣いになってライトが、キャバレーの看板みたいにハートマークの光を放ったり……

(今でもちよつと気持ちいいとか、思ったりするのですけど……)

ホラ、邪の欠片も見当たらない子供は、ねむるは覚えられないのに眠っちゃった。

「私も眠くなつて来ましたが、食べてすぐに寝るのは……でも昼食後はOKと、ホウエンのおとも」で見た気が……いえ、我慢しましょう！」

ムツチリ肉感ボディを隠す、衣装表面からおへそ回りを揉んでみる。他の子が痩せ型だから意識しちゃうだけで、主人も言っていたが特別太くは無いんだけど、種族が種族なので現状を維持しよう、そうしよう。

木製壁に取り付けられた、大画面のテレビを付けゆつたりとしたお昼過ぎ。

人数が多く賑やかな街なのに、波打ち際に生息している水辺ポケモンの、鳴き声がこの場所まで——バイノーラルで余計眠くなつてしまいそう。

「ふわっ……あう、平和ですう……」

生中継番組にはホウエン有数の大都市、大企業ビルが整然と密集した摩天楼の中心部、デボンコーポレーションからの重大発表。

カントー地方の大企業、世界に名だたるシルフカンパニーとの共同開発で、ポケモンを電子空間のボックスへ預かり、管理するシステムの新規プロジェクトの概要。

各地方のシステム管理人も友好的に、協力を申し出て参加。ボックス内部は快適な環境を約束されているが、より広く、より多機能に、よりポケモンが喜べる物になるのなら、それに越したことは無い。

ポケモンによつては肌にあわず、ボックスに入る事を嫌つたり勝手に出てきてしまうケースもあるからだ。

人化したポケモン達は、人間とそう変わらない尊厳を保持するので、何が何でも閉じ込めておく事は出来ない。トレーナーの腕の見せ所であり、本人達との交渉で改善されたり、納得する。

「トレーナーまで同じ空間に入る事が可能になるかもしれない……へええ！ 凄いですっ！ イツシュ地方のドリームワールドも一味違った世界でしたが、寝ている事が前提でしたからね。膨大なエネルギーを消費してしまうから、サーバーがダウンして少しの間はイツシュのポケモンが閉じ込められて、大混乱だった事件もありましたね」

絶対の自信を持ってリリースされたが、不思議な力を秘めたポケモンを扱うのだ。

予期せぬ事態となり、我々が知っている事など極々僅かではないと、研究者や世界各国のトレーナー達が考えを改めるに至った。万が一、復旧されなければ個体データが

デリートされ、電子の残骸と化し永遠に夢の中を彷徨う事になっていたかもしれないから。

「また事故が起きなきゃいいけどな！」

そんな批難を受けているのは、インタビュアーの二人組。ドリームワールドの一件があるので、トレーナー誰しもが賛同している雰囲気ではなさそうだ。この男は被害者だったのかもしれない。

「ポケモンちゃんと同じボックスに入れるなんて、素敵じゃないですか〜！」

マイナンとプラスルの幼女をたかいたかいたかいる、大好きクラブの夫婦。ピンクとビツパを抱えている、ブリーダーのカップルも職業柄ポケモンの気持ちを捉える事が上手い。

同じ気持ちを共有する為に、利用出来るのならしてみたいのだろう。実現したら主人と一緒に、電子の海でなみのり使って……何処までもイケちゃうかも？ ホウエンの海よりも広そうだ。

「やつ、やあ〜ん、私つたら……？」

胸間に収納するノーテンキなゴクリン顔を、起こさぬように撫でながらまた紅くな

る。妄想癖のあるはソノオのはなばただ、アハハーウフフーから、ウバメのもりで○
○××まで多岐に渡る。
ああ、本日も晴天なり、平和なのはイイコトだ。

Segment・mono——ジツク

ミナモからヒワマキへ向かう途中、海岸沿いだが浜辺は無く、草むらが入り込んで迷路状となっている一二一番道路。

ホウエンの慰霊の地、おくりびやまが近い影響からなのか、ゴーストタイプのポケモンも生息している。

ふかふかのつちで他のポケモンと遊んでいる、微笑ましい光景が見られるスポットでもある。

中々紹介しがいのある道路だが、最大のトピックはサファリゾーンだろう。ポケモン同士を戦わせるのではなく、専用の道具やボールを駆使して捕まえる。ここでのしか出現しないポケモンも居るので、収集家は避けて通れない。

「ダートエリアの、ポロック置き場のメンテナンス終わりました！ ポケモン達の異常も見当たりません、皆元気でしたよ。」

「おおー。ありがとうねジツクくん。お客さんが遠方からも来てくれるのは、嬉しいんだけど従業員が不足しちゃってね、手伝ってくれて凄くありがたいよ！」

ミラクルサイクルで譲り受けた、悪路も崖もなんのその！ スピードは低いが走破性

能はマツハよりずっと上、コンパクトに折りたためばリュックにもすっぽり！ 最新式ダートじてんしやに乗って、従業員用玄関口に戻ってきたのは、サファリゾーンでアルバイトしている少年。

依頼でホウエン各所を来訪するので、ファッションは実用性を重視しながらも、年頃の男性らしくお洒落を捨てていない。

太いベルトを通したカーキ色のカーゴパンツ。ストレッチ素材で動きやすい、オーダイルを意識したとかで沢山のポケットを備えたオーダーメイド品。

ズボン同色のVネックがインナー、温暖地方に合わせて爽やかな装いの薄生地、七分丈の麻混シャツは吸水性・通気性が良いホワイト。ランニングシューズのカラーは、その日の気分に合わせてセレクトされる。

明るい印象をもたらすライトブラウンのメンズショート、根元から捻って立ち上げるように付けたヘアワックスで、フロント&トップへ長さを残し額から分け目のラインを、ワンポイントに入れている。

耳元に髪が掛からず洗いやすく、渴かしやすいのも利点だ。サンドパンやハツサムと共に経営する、遠くの地方で修行を重ねたヘアスタイリストにオーダーした甲斐があった、すごく気に入っている！

「ありがとうございます！ またお世話になりますので、宜しくお願いします

！お先に失礼します！」

本日の報奨金を受け取り、感謝の意を示す上体を四五に傾けお辞儀。そんな丁寧にしなくたっていいのに、サファリスタツフが言うも当然の事ですからと、譲らずに出口前でもう一礼。

基本拠点を築いたミナモでのんびりしながら、政府から要請された依頼や、求人募集のサイトで短期、または長期のポケモンに関わるお仕事をごなし、報酬を得て暮らしているのがメコンのご主人様である。「ジツク」

出身地はホウエンではないが、家族旅行の際にミナモシティを訪れ、とある事がキツカケでゲットしたメコンを最初のポケモンに、トレーナーとして旅がしたいと強く訴えたのが10歳の出来事。様々な地方を冒険し、それなりの実績を残しポケモン政府にも貢献、積んだ経験と知識を活かして将来の夢を模索しながら、日々を過ごしている。

「よつと、ホイツと、ダニエルするの久しぶりだけど鈍ってないぜー」

ダートじてんしゃには、ウィリーやウィリーのままジャンプが出来る、ダニエルという機構が備わっているが、練習も無しで行える程甘いテクニクじゃやない。通常のじてんしゃと同じで、転んでは立ち上がって、それくらいの意気込みと柔軟な運動神経が必要とされる。

なのでどうしてもアクションが取得出来ない人が、ダートじてんしゃが必要な場所に

ある道具や、ポケモンを取ってきてくれ!

なんて依頼も登録されている。旅で身につけた細マッチョは見てくれじゃない、実証する運動神経があるからダートエリアでの、メンテナンスや清掃巡回を任せられたのだ。

「特にシンオウ地方は気象の変化も激しいし、険しい地形が多かったな。そこで一気に鍛えられた気がする、サバイバルエリアとキツサキ周辺は、今でも良く切り抜けられたなあって、自分と手持ちを褒めてやりたいよ」

シンオウで仲間に加わった手持ち、その内一匹はかたくりこ、もう一匹の仲間も帰ってくる予感がするし、カントー方面で仲間になった子も仕事を終えた時間帯か、ポツポツの活動は消えてホーホーが活動するお時間。

捕獲したポケモンは多いが、ログハウスで共に過ごしているのは現在のところ四匹だ。

彼女らの希望もあるが、あまり人数が居ても支障が出てしまう状況もあるので、フルの六匹に揃えないトレーナーも一定数存在する。愛を誓い合った一匹を連れたりとか、ハーレムしたいから六匹全員♀とか……各々の趣味や拘りや信念がある。

生息しているエイパム、マッスグマ、クサイハナ達に手を振り自宅を目指す。サファリゾーンも含めて周辺には、人化しているポケモンは見られず、本来の姿のままポ

ケモン達は暮らしている。人化したポケモンにボールを投げる、トレーナーによつては罪悪感を抱く行いだらう。

人化が確認されて二〇年経過したが、まだまだ不確定な規律が山積みなのも現状だ。各トレーナーのモラルに任せたり、直接ネゴシエーションしたり。

サファリゾーンは昔から設営されている「そういう」施設なので、ボールに捕獲されていないポケモン、つまりトレーナー管理下に置かれていないポケモンは、人化を遮るジャミング機器がゾーン内に配置されている。

政府から認定されている施設外での、使用は絶対に禁止。無断使用した者はトレーナー権限を永久剥奪されてしまう。本来の姿でなければ飼育や、お客さんが捕まえにくいとご尤もな意見が、相次いだので苦渋の決断で作成されたのだ。

「難しいよな、人の姿を得てもポケモンはポケモン。だけど俺達と殆ど変わらない尊厳を持ち合わせている。協力し合ってるけど管理下に置かれて、トレーナーに従う。でも心までは縛れないから自主的に逃げる事だつてある……」

上手くやっていけている気はする、けど全てが円滑つてワケじゃない。

ジツクも疑問に思う事や、深く考えさせられる事例と直面する事がある。

人の姿を取れるからこそその問題、本来の姿ならば気にならなかつた事も、人の姿だからこそ眼に入る、気がついてしまった。都合のいい解決策など、ヤドキングやフリーデイ

ンが熟考しても導けないだろう。理屈じゃ無い、見て見ぬフリの方が互いの幸せに繋がる事だつてある。

(でも今だつて、いい関係だとは思うんだ)

ヘッドホンをした尖り髪の女性、人化しているライボルトの隣に座り葉巻を吸うジェントルマン。長年連れ添った相棒なのだろう、漂ってくる雰囲気夫婦のソレ、ライボルトも葉巻を取り出せばジェントルマンが、自然な動作で火を付けてあげている。

どつちが上とか下とか、そんなの関係なく寄り添っている。ああいうのが理想の関係なのかもしれない……



雨避けのあるサイクルガレージには、自身がペインティングしたマツハじてんしゃと、今し方乗ってきたダートじてんしゃを収納。折りたたんで運べるけど、数日に一回はメンテナンスしているので、夕食を取った後に行うつもりだ。

ミナモシティに、沈む夕日よお〜♪

……は、有名な歌詞。とつくに夕日は沈んでいる七月の上旬、本日も一日お疲れ様。

「ただいま〜！ おお〜、いい香りだ〜！」

「おかえりなさい、ジツクさん♪ 丁度夕ご飯が出来ましたよ！ ネリさんと爽羽佳さんも、お戻りになられてます♪ えいっ！」

小走りで誰よりも先に彼女、最初のポケモンであるランターンの前は出迎えてくれる。

ふつくら（悪い意味ではない）ボディを隙間無く押し込みながら、女性としては高い身長がジツクの胸元へ埋まる。背に両手を回せばひんやりした肌が、加速度的に熱を発生させていく。

「えへへ〜！ ギュツ〜ってして欲しいですっ……っ？」

彼は女性だからと無碍に扱わず、かと言って持ち上げすぎない。

メコンにハグされて、甘えられるのは何百回もされている。慣れたハズだが18歳の男子だ、こやしいらずに実り熟された天然のカイスのみ、明らかな好意を持たれた美少女に巨乳、いや爆乳をもにゆんもにゆん。

「ほらっ、ギュツ………も、もういいかな？ この体勢でこれ以上は……」

「あつ、あつ………申し訳ありませんっ！ またやってしまいましたよ……」

無意識におっぱいを彼のおっぱいに、擦らせてしまうのは困った癖（？）だ。

時偶「あざとい」と苦言を呈されるが、彼女は全くのナチュラル。

「続きは後でやっただげるから、な？」

「……………／＼／＼」

彼にご奉仕し、お情けを頂いている立場なのに、無意識のまま彼を求めてしまう。

何時だってメロメロ状態なメコンは、抱き枕としてベッドで二人きりになったり、膝枕を施すのも大好物。この身体を彼に使って欲しい……と、文面にすればとんでもなくR—18禁制、そこまでの描写はございません。ギュツとして、ギュツとされるだけです。

ホントですよ？ 健全ですよ？

「マニユハハハッ！ ご主人を独り占めするとは、いい度胸ニヤ！ ネリちゃんもじーさんばーさんのトコで収穫頑張ってきたニヤ！ びよーどーに抱きしめて欲しいにやし〜！」

小皿はジャグリング、大きめのお皿はマニキュアで塗装した爪を皿底に当て器用に、木製ダイニングテーブルまで回し続ける大道芸。独特な笑い声、少し頭が弱そうなしやべり方。キャラを確立するネコの語尾。八重歯。

園芸家憧れの地、一二三番道路のきのみ小屋に住まう、老夫婦の元でのお手伝いや火山灰に負けない野菜を！ がキャッチフレーズの農村で種蒔き&植え込み。またある

時はミナモのカフェでウェイトレス、非常に広い範囲で労働契約を結んでいるのは、かぎづめポケモンマニユール。

ニツクネームは「ネリ」

年齢に換算すると15歳、親が居らずシンオウ地方各所で盗みを働き、生計を立てていたが「とあるポケモン」にボコボコのぐちゃぐちゃにされ、更生。

そのポケモンと共にジツクにゲットされ居場所を与えられた。

弱らせてボールを投げられたのではなく、スカウトに近い交渉を持ちかけられた。彼女は見た目に拘るお洒落さんなので、スタンダードなモンスターボールはお断りし、出現時の時計のエフェクトや、銀と赤のハイテクカラーに釘付けとなりタイマーボールに収納される事を望んだ。初対面なのに容赦ない凶々しさ、彼女が「ししよ」と尊敬する(ボコボコにされたポケモン)子も、特殊な用途のボールを「デザインが気に入った」から、選んだのでししよの、価値観が伝染したのかもしれない。

光が差し込まないブラツクのショートヘアに、本来の姿の扇状の髪飾り。左側のみピンを混ぜた赤いメッシュを施した、サイドテールは彼女独自のアレンジ。動くのに邪魔そうな装飾は、長いけど♫ではない。

服装はなんとメッシュ同色に縁取りされた、黒のビキニ！ 黒をベースに紫色のグラデーションが入ったパーカーは、本来の姿を象った耳がフード部に付いている。

ボトムは見せ下着だから恥ずかしくないもん！ 鼠径を辛うじて隠す超ショートパンツからは、トライアングルなインナーショーツが丸見え。

（お色気もネリちゃんの武器にやし！）

それにしても過剰すぎるとの声が相次ぐ。同じくらい支持を得ているし、そもそも本人はやりたい様にやるのがモットーだから、気にしてない。そうじゃなきや萌えをプラスする、縞々ニーソックスなんて履いてません。

こんな衣装だから、生きる術として自然と身についた機動力を損ねぬよう、シエイプされた腰のくびれは悪タイプ故に、効果は薄いけどロックオンして、したでなめたいとカフエの常連客は熱望する。

さぞやド貧乳かと思えば、期待を裏切るように申し訳ないDカップと、意外なたわわをお持ちで……ちよいロリ巨乳。ネリからすれば胸も薄い方が、もつと素早くなれそうって、聞く者が聞けばちようはつ紛い。この中途半端に大きいおっぱいを、あの子のBカップとすりかえしたい。

「ご主人、ちいっす〜！ 私だつて朝から働きっぱなしの飛びっぱだつたんだからね？

後でマツサージして♪ トバリのマツサージ師さんよりも、ご主人にされる方が好

き〜！ まっ、お疲れなのはお互い様だから、私をご主人にもお返しリフレしてあげ

る♪」

J Kリフレ、危うくそんな単語が飛び出そうな軽く、ギャルい、現代（いま）をトキメキ都会を根城に闊歩してそうな少女。

ネリが低学年なら、こちらは高学年のJK、くちばしポケモン、オニドリル。

ニツクネームは〔爽羽佳（そわか）〕

人間に換算すれば17歳って、マジのJKみたいだ……カントー・ナナシマのみずのさんほみちで、ジツクがゲットしオニスズメから進化。

簡易エピソードを語ると、両親が過保護過ぎて6のしま以外の外出は許されず、爽羽佳から突撃する形で強引に捕まり懇願、ジツクと共に実家の両親を説得し渋々認めてくれた。

当初は自分が外に出れるのならば、主人など誰でも良かったけどムクホークの様な攻撃性も無く、オオスバメの様な個性も無く、ヨルノズクの様な打たれ強さも無く、ピジョットの様な人気も無い。そんな自分を大切に育ててくれたジツクに、好意を抱くのは多感な女子なので至極当然。

ベージュとアイボリー色のグラデーションを持つ翼を背に、フロントジツパーなライダー風スーツを常時着用。大体が胸元まで下ろしているが、全開時はヘソまで下ろせる。スレンダーなボデイラインが浮かび上がる程、ピッチリ身体に張り付いた破廉恥な衣装なのに、下着を着けていないのは下ろされたジツパーから覗くも、肌色以外の色彩

は見えなかったので確定事項。下は流石に穿いてると信じたいが果たして……

彼女曰く「飛行する時に一番空気抵抗が無くて、気持ちが良いから」

素肌が裏地に擦れて痛くないのだろうか？ ネリが同じ真似をしたら、めちやくちや痛がっていたけど。

毛先が胸の辺りまで伸びたセミロングは、旬のヘアスタイルらしくキンセツシティの激重予約ご免の美容院でレイヤーを入れて貰った。

アクティブな連想をさせる赤いトサカは、手持ちとして慣れて来た際に下ろし、右目を完全に覆い隠すメカクレ属性を手にしてしまった。モヒカンとか言われるのが嫌なんだとか。ムクホークさんと被るのが特に……

一日中飛び回れる能力を活かし、飛行手段を持たないトレーナーや荷物の運搬などをメインにした、フリーの運び屋として活動中。偶にキンセツシティで音ゲーしたりプリアクラ撮ったり、やつぱりJKじゃないか！

H、Dと来て爽羽佳はB。ネリは交換したがついていたが、爽羽佳はそんなでもないらしい。速度低下とか、胸以外にも武器があるとかそんなのだろうか……勝手にジツパーが下がる事も無い。

イケイケのスカイアッパーテンション、気安く絡んで時には誘惑紛いの言動や、ボデイタッチをしてくるがコチラから攻め込んだら、妙にアタフタし一気に余裕を失う。

可愛い。

「ホイホ〜イ！ グレン風火山ハンバーグう！ ……じゃなくって、爆裂ハードマウンテン風ハンバーグでございませう♪」

各自のお皿に盛り付けた爽羽佳が、運んできたのは小高いライスに濃厚なデミグラスソース、火の玉を模した爆弾コロツケはマカダミアナッツをまぶし、食べ応え抜群の手ごねハンバーグのダブルバトル。

躍動感あるどころか現在進行形でポゴポゴ音がなって、煮立っておりますがフーフーフーフー食べれます。

胡椒がキメ手のポテトサラダに、梅ドレッシングの大根サラダ。お肉を食べたら野菜をいっぱい食べればいいじゃない。

デザートは冷菓が得意なメコンが、繊細な良妻技術で加工したフレッシュフルーツジュレ。1人と4匹のイメージカラーを取り入れた色合いが、段を形成し食べるのが勿体ない、だが食べなくちゃ勿体ない！ ぷるっぷるんの食感はまるでおっぱい……言うま

皆でいただきますしてから、とりとめの無い話、近況報告、本日の感想など。食卓を囲むお父さんとお母さん、娘×2と生まれたばかりの赤ん坊、そう捉える事も出来るが某メイドの、妄想が止まらなくなってしまうので話題を振らない方が賢明である。

ジックのVネックには、手持ちのシルエットがプリントされている。

つまりランタン、オニドリル、マニユール、ミノムツチ、この四匹と暮らすようになってデザイン会社に依頼した一品だ。

さらに七分丈のシャツで隠された裏側には……

「ご主人、明日のお仕事に支障が出るのやだから、特に翼の付け根辺りをやさしくね
！」

「抜け駆けすんニヤ、ネリも可愛がるにやしい！褒め称えるにやしい！」

「あの、あの……先程の続きを……／＼／＼」

「ミノツ、ノノノツ！」

最後だけはなんて言ってるのかワカランが、ジックが皆を大切に想って信頼していれば、彼女達も一般トレーナーへの枠を超えた想いを秘めている。応えてやるのもトレーナーとしての役割。

「身体は一つだけだから順番な！ じゃんけんで決めてくれ」

ご飯中だつてのに、目付きがマジになった四匹が椅子から立ち上がり、ブツブツ何を繰り出そうか呟きながら、この右手へ全てを込める！

負けたらやらないとかじゃなく、順番が前後するだけなんだが……平和な一軒家での平和な戦い。

この後も「誰が彼の疲れを解すのか」で、またプチバトルが始まってしまふのだが、暴れることも家が壊れることも無く、じゃんけんで決める平和的な争いを勝ち上がり、勝利の美酒代わりにジツクの逞しいお背中を、微量に電気を流しながらの指圧。裏オプシオンは御座いません、至つて健全なポケモンとトレーナーの微笑ましく、甘酸っぱい、当たり前前の触れ合いです。

Segment・mono——邂逅

「民宿跡地から謎の光が？」

依頼者は毎日ミナモシテイの北東付近を、ウロ付く老紳士から。自らが育てたきのみを哲学的なセリフと共にくれる、いい人なのは覚えていてる。

「私のパートナーと『夏の夜はまだ宵ながら』、灯台前で小さな波を感じていたんじゃが、民宿跡から蒼白い光が出て来てな……」

きのみを育てる時だけでなく、彼の生活にも欠かせない存在となつた人化ホエルコとゼニガメ。この子達も怖がっている、メコンが撫でて落ち着かせているが、間違いなく心霊現象だとハットで顔を隠しながら、紳士の嗜みである高級ハンカチで生温い汗を拭う。持ち主の心境に同調したのか、再び泣きそうな表情で、今度は老紳士の脚元にひつついた。

「解りました、探索してみます」

「ありがとうジツク君……頼んでおいて何を言っているのかと思うかも知れないが、気をつけてくれ……報酬は弾ませて貰うからね……」

本来のスマートな動作も陰りがある、頭を下げてからジツクの住まうログハウスから

退散した一人と二匹。

「あの民宿は十数年前から廃墟になってる、おくりびやまから流れてきた、ゴーストポケモンの住処になってるから、特例で放置する事になった……ゴーストポケモンの悪戯だと思うが、頼まれたからには行くしか無い」

NPCから課せられるミツシヨン、クリアすれば報酬やストーリー進行のトリガーとなる。ゲームに例えればそんな感じ。

ポケモン政府から許可を得ているので、報告書を作成すればお礼は、全て個人で受け取って構わない。しあわせタマゴとかサンのみとか……滅多に手に入らないアイテムを貰ってしまった時は、慌てて政府へ確認電話をした物だけだ。

報酬だけを目当てで今の仕事をしている訳じゃないけど、ある程度のご利益が無くては只のボランティア。これで生活している限りはやはり、相応の見返りはあるべき物。

「幽霊と言えば夜、フルメンバーで探索したいと思うけどメコンは？」

「承知しました！ ネリさんが居るのでしたら例え襲われても、問題なさそうですし」

まず間違いなく、他の三匹も賛同してくれるが念の為。悪タイプのネリが一緒に、大抵のゴーストはつじぎりで追い払われる。爽羽佳もノーマルタイプが付属するので、お得意の霊技は通らない。

使えそうなアイテムも可能な限り持ち合わせるに超したことは無い。歩いて10分

の距離でも依頼は依頼、準備は万端にしておく。

「ミツノ？」

「お前は戦えないだろ」

謎が謎を呼ぶ強さのミノムツチ、だが積極的に戦わないので実質的には三匹で挑む。置いていく理由も無いのでジックが、リュックサックに身体を入れるマスコット代わり。万一の最後の砦になりうるかもしれない。

ミノムツチが切り札のトレーナーが、果たしてハウエンには彼以外居るのだろうか？ 依頼なんてしーらない、等の本人はフーセンガム膨らませながら街全体から見渡せる、海を守る標識である白い灯台、その麓に佇むかつて繁盛していた民宿の抜け殻を、見通すかのように、何時ものヌボツとした表情より、少しだけ違う気がすると主人公とメイドは言葉無き言葉を交わした。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

さあ、幽霊退治？のお時間だ。

民宿跡地に苦労なくたどり着いたジックは、二つのモンスターボールを緩やかに地面へと投げた。

爽羽佳とかたくりが現れたのを合図に、手首のスナップをやや利かせたカーブ、時

計が回るエフェクトと共にネリが登場し、最後の水色・青・白の寒色系で纏められたカラーリングは、水に棲むポケモンへの捕獲率が絶大なダイブボールだ。

透き通った水しぶきのエフェクトが非常に人気があり、水タイプ以外への採用例が雑誌に掲載され「オシヤレボールのスタンダード」とまで、評価され品薄かつ、値上がりした時期もあつた。

このボールは上空へ投げれば、エフェクトと共にメコンがスカート抑えながら登場。初めてのポケモンだけあつて、どんなボールに入れようか悩んだ末に、結局はチョンチーであつた彼女と相談、故郷を思わせる海の配色がお気に入りだとか。

「報告書作つたから大丈夫だよな、アレやつてくれネリ」

「まっかせるニヤ！ こーして、あーして、くるんツ、はいよゆ〜！」

南京錠にマニキュアを塗つた爪を突っ込んで、物の5秒足らずでガシヤツ。この民宿跡の扉を開閉する鍵は、ミナモ自治体に確認したところいつの間にか消えてしまつていたらしい。

ゴーストポケモンは実体が無い、壁抜け能力を持っている個体が殆どなので、鍵があるのがなからうが関係ない。だがそれ以外の種族や人間が入ろうとすれば、当然鍵は必要だ。

「マニユハハハッ！ ネリのピッキングは最後の鍵よりも高性能ニヤ！ 元盗賊舐めん

ニヤー」

「今回は特別だからなつ、普段は絶対使おうんじゃないぞ!」

液体金属でその爪は出来ているのか、その気になれば世界中のタンスの中を荒らし回るこの子の特技。

ネリのとくせいはプレッシャーではなく、生まれ持つての才と合わさったわるいてぐせ。

高額な品物やお宝、レアアイテムを見てしまえば身体がウズウズしてしまう。一つしか無い希少な道具を勝手に使って、怒られてしまった事もあった……

更生した彼女はもう悪用する事はない（ハズ）

「そんじゃ入ろうニヤ、ネリを先頭にしとけばあつという間に片付けてやるニヤッ」

久しぶりに特技を披露出来て嬉しいのか、あばらが浮かぶくらい肉をそぎ落としてるのに、胸だけは背丈のわりにご立派なD。偉そうくに胸を張ればたわつ、青少年が待ち望んでいた擬音が人気どころか、ポケ気の無い建物へ侵入。

「……なんかさ、ゴーストの住処って聞いたけど、何も心配が無いんだけど?」

「ええ、ヨマワルさんやカゲボウズさんは、以前集まっていたと目撃情報があるのですが、今はそれすらありません……」

てつきりゴーストポケモンが「いらっしやうい!」と、歓迎するのかと思いきや、悪

戯の為に身を隠している訳でも無い、生き物としての反応が何も感じられない。

「二階建てだから上に何かあるのかな？ 警戒して進もうぜ」

かかっ来て来いニヤ！ つめとぎしながら氷の手裏剣（こおりのつぶて）をジャグリングする余裕なネリ。緊張感も警戒心の欠片も無いが……

懐中電灯で注意深く辺りを照らすジツク、すぐ後ろには彼の袖を人差し指と親指で掴み、視線をなるべく床に落としている爽羽佳。タイプ上は相手の主力攻撃を無効化できるが、ポロポロになった家具やズレ落ちた絵画、ポケモンを模したぬいぐるみが乱雑に散っており、ホラーな雰囲気少し怖いらしい。

メコンは頭の触覚を適切な明るさに保ち、シンオウ地方のもりのようかんを思い出していた。

その時の心霊現象はテレビから出られなくなったドジっ子ロトムが原因だった。

今回も似たような物かと予感していたが、自分達以外が入り込んだ気配もなければ、暮らしているポケモン達の存在感が皆無。もりのようかんではゴースがウヨウヨ居たのに。

かたくりこはジツクのリユックサクから、頭だけ出して寝てた。

「な〜んなんニヤ〜？ ポケモンの一匹も現れニヤいどころか、お宝の一つも眠ってないとは、あのじーさんにネリの足の裏を舐めさせてやらニヤあ、気がすまニヤい

ニヤアア〜!!」

クローゼットを物色するが、服の一枚もないっ！つかえね〜だの面白くね〜だの、お前は何しに来たんだと爽羽佳が代表として、脇腹をつつくすれば、センシティブな反応と艶声を出しながらコケそうになる。防御力は紙つぺらと比喻されるだけに、敏感肌なのだろうか。

「どうしましようにジツクさん？ 探索を終了させましようか？」

「これ以上何かを待っていても無駄な気が……逆に違和感あるけどねえ、ポケモン一匹もないのは」

親玉と戦闘、もしくは大量のゴーストポケモン達が襲い掛かる？

準備は完璧だっただけに、何も起こらずジツクとしても拍子抜けだ。あの老紳士の勘違いだったのか、ちよつと報告し辛いかも。

しかし爽羽佳の言う通り、ゴーストポケモンの住処なのは住民誰もが周知の事。一匹も現れないのは確かに違和感バリバリだ。これでは何の為に跡地が残されているのか不明瞭に。

(別の場所に移動した、それか本来の住居であるおくりびやまに帰った？ 蒼の光なんてあれば絶対見逃さないのに)

それが無いって事は、やはり見間違い。灯台の光が反射したりとか、誰かのポケモン

が放った技が偶然目に入り、場所が場所だけに誤った捉え方をしてしまった。申し訳ないが――

「……ミノツ、ミノオオオ!!」

「えっ? どうしたかたくりこっ!?」

黙り込んでいた、つてか寝ていたから収納されているアイテム扱いだったかたくりこが、前触れなくリュックから飛び出したかと思えば、朽ちた床とか関係なくスイスイと、氷タイプのジムに良くある仕掛けに乗っているかのスケート移動。

「なんニヤあれ? ご主人の『カメツクス型シューケーキ』でも、食らいに戻ったのかニヤ? あれは既にネリの胃袋に入ったにやし♪」

「俺も分からな……お前、ネリこらツア!! パクったのやっぱりお前じゃねーかつ!!」
「ふニヤはふうウ!! ほっぺつねんニヤいでええ〜!! ごめんニヤさいい〜!!」

シュー生地を甲羅に、巻きチョコでハイドロキヤノンに仕立て上げ、左右斜めから豪快にズボツ。メコンが内緒で作ってくれた試作品なのに……ジツクの部屋の冷蔵庫に入れてたのに、かすめ取る奴はコイツしかいない。

し〜らニヤい♪ とか、ホラ吹きやがって!!

「ふニヤあ〜〜ふニヤはあ〜〜! ご主人に虐められたニヤアア!」

「ハイハイ、うそなき使わない。私らもさっさとかたくりこ追いかけて帰ろーよご主人

「？」

ホンツト、狡賢いと言うか欺くのが好きってか。ギャルつ子同士仲良しな爽羽佳は、ジョブチェンジしたって根幹はシーフな、ダチ公の演技を適当にやり過ぎし帰宅を催す。静寂こそもつとも不気味なのだ。

「アハハツ……今度はみんなの分も作りますからね。あの子は私達とは違った能力をお持ちですし、気が付かなくなった物を見つけたのかもしれないね」

手癖の悪いネリがパクってしまうのも想定範囲内。怒らず、そのHカップに詰まった母性はモーモーミルク何本分でしよう。

青いメイドさんが指差す方面は、一階への階段。降りればかたくりを発見し、幅を広く取った脅威の跳躍力（足無いけど）で、入り口とは真逆の方向へ移動している。

「えっ……地下への扉……？」

「ミノツ、ミノツ！」

なんだと、この民宿に地下室があるなど一度として聞いてはない。間取り図を確認したって「地下」の文字は書かれてない、業者の入力ミスであればと願いたかったが。

「そうじゃないよなあ……これは俺の「勘」だけど、もしかして後付けされた物だったりしてな」

誰が、どうやって、なんの為に、は無視するがそうとしか考えられない。かたくりこ

が「早く開けて」とでも言っているのか、急かすようにミノを跳ねさせている箇所こそ、隠し扉、隠し部屋への入り口。

カクレオンの迷彩能力よりも、巧妙な隠蔽だ、床と完全に溶け込んでいるを通り越し、隔絶されている。これでは警察に所属されている、熟練の嗅覚を持つガーディですら欺けるだろう。

（マニユハハツ、面白くなって来たニヤ〜！ お宝を守るボスが居るのはお約束ニヤ、サクツと倒してネリがゲツトしちやうのニヤ〜♪）

デカイヨノワールか、ゲンガーか、霊狩りのネリからすればニヤんでも来い。

絶対の優位性を誇るネリだけは、他の四名と相反するかの如く緊張感の無さ。そしてお宝しかもう頭がない。ロリな雰囲気を保ちながら鋭い眼光、それがおまもりこぼんの形に点滅している。KYであるがこれがネリの良いところでもある……

狭苦しい回廊だ、メコンは胸がつかえてしまうので邪魔しないようにと最後尾に回っている。

（人為的な電脳空間……??？ パソコン転送システムが頭に浮かんだが……）

降りた先には蒼いルービックキューブが、緑色の十六進コードが、流動する粒子と幾何学なラインが。

コンピューターの内部へ入り込んだ、発光ダイオードのようなシグナルが、妖しく点

滅し嫌でも地上世界とかけ離れた、仮想空間であると認めざるを得ない。

その仮説が当たっているかは兎も角、普通の空間ではないのは確かだ……お宝しか頭になかったネリですら、現実離れた光景に「ニャ」の一声も出ない。

探索しようと思っただが、かたくりこが魔法陣のような紋章が浮かんだ、クリアグリーンの階段をよじ登る。

「上に何かあるってのか？ かたくりこは初見で感じ全然しない……この場所を知っている？」

妙に張り切っている、何が待ち構えているのか知っていて、誘導してくれているのか？

「やつ、そんな訳ないっしょ。こんな場所私らどころか、ミナモの人達みんな知らないっしょ？」

爽羽佳の言う通り、不思議な空間に突入してしまい、テンションがやや不安定になっているのか、口調はそのままながら早口だ。

かたくりこが先導するように、階段をピョンピョン登っている。実にスムーズで無駄のない動作、周りの電脳ネットワークな風景など目にも止めていない。

「登りきった先に何かあるのでしょうか……ここから伺える形状は箱……のように見えますが」

ジツクと各地方、様々なダンジョンを攻略してきた。あの世に近い場所、海の底、極寒の島、古代の遺産。どれも非常識だったがこのサイバー空間、未来に続くのか過去を遡るのか、それとも平行線上から動いていないかもしれない。広すぎるのか狭少すぎるのか、空間認識力が鈍くなってくる。

それほど長い階段ではなかったが、景色がチカチカするし無重力のような、フワつく足場に苦戦したので登り終わり次第、かたくりこ以外の者は電子回路基板に座り込む。

「ミノミノツ！」

休んでる暇はないぞ、早くコレ見てよ。

彼の言葉が何となくだが伝わる、疲れを見せず興奮した面持ちは、普段のヌボツとゴクリンフェイスではない。かなり真剣……と思われるが、かたくりこの真剣な顔は見た事ないので推測だ。

「揺りかご……の中に女の子が!？」

登り切った果て、電子のカーテンに囲われていたのは、銀色のライトが等間隔で埋まり、蒼い色彩を持った揺りかごとしか思えない物体だ。

変なのが入ってたら嫌だなあ、こんな意味不明な空間に置いてあるし。

大方の心境は一致していたが、慎重に中身を覗いたジツクは、ハプニングに次ぐハプニング、これから何が起こっちゃうんだ……セットした髪型が若干崩れてしまうほど、

頭をかいてしまった。

だって揺りかごで横向き姿勢のまま、眠っているのは各部位の特徴からして、恐らくは……

人化メタグロスの女の子なのだから。

Segment・di——黒と蒼

これはジツクが謎のメタグロスの少女を発見した、一時間後の出来事……

夜行性のポケモンが活発になる時間帯。

日中は何処へ隠れていたのか、ズバット達が省エネ街灯の周りを巡回し始め、誘われるように紛れ込んだモルフォンと軽く羽を接触させて、ご挨拶。

珍しくおくりびやまから散歩してきた、ムウマまで現れて世間話でもしているのか、本来の姿と人化したポケモンが入り交じるが、どれも主を持たぬ野生という点が共通している。

両目が完全に覆われるまでに、前髪を伸ばしたズバット少女がこつそり、近くの一軒家のベランダを覗く。

そこでは柔道着を羽織り、手持ちより自身で戦った方が勝てるのでは？ と、指摘したくなる肉体へと鍛えながら、まだ足りないときようせいギプスを装着し、自動カウンター機能搭載のソーナンス型サンドバッグを、相棒のエビワラーと共に拳を打つトレーニング中の空手王。

(あつ！ カウンターくらってしま……あゝあ、痛そうですね……でもたのしそーです)

反撃を受け流すトレーニングだったが失敗、倍のダメージを返されて戦闘不能となった一人のトレーナーと一匹のポケモン。

きょうせいギプスで動きを抑制されていなければ、難なくクリア出来たが抑制状態でクリア出来るかが課題だった。

戦うのはトレーナーじゃない、なんでトレーナーまで一緒に特訓してるんだろう？

ズバットはそれが分からない、野生ポケモンである自分はおやを持つポケモンの気持ち。

だがエビワラーのあの表情、失敗したのに空手王と笑い合って、もっかいするかと立ち上がった。

よく分からない、けど楽しそう。

木の枝に逆さになりながら、密かにこの二人を観戦する楽しさを見つけているズバットの少女は、いつかトレーナーとこんな事をしたい、一緒に夜のお散歩したいと、叶う確率が高そうな将来ビジョンを描きながら、朝までジツと、静かに二人を見守っていた。

▼▼▼▼▼

「ふむっ、反応があつたから来てみたが……」

船乗り場が設けられているミナモシティは、別地方からの来客も頻繁で、ホウエン一回りツアーなる物も開催され、なみのり用のポケモンを持っていても家族や手持ち全員

で、のんびりクルージングし海と緑の広さを味わう、夏休みの思い出作りとして特に人気のプラン。

ホウエン屈指の歓楽街としての地位を不動の物に築き上げているミナモは、この時間帯になれば人もポケモンの寝床に入るシダケや、キナギなどの住民数が少ない町と比べて、狭小地マンションや宿泊地はまばらだが明かりが消えずに、灯台からミナモ全貌を見渡せば窓文字にも似て、何らかのメッセージにも捉えられるかもしれない。

「さて、どの様なポケモンであるのか」

そんな物どうでもいい、灯台の頂上部から飛び降りた人型シルエツトが……二つ。

着地すればガシヤツ、独特な音を鳴らした持ち主は全身を黒で塗りつぶしており、正体は全くの不明。

頭頂部にはフードを深々と被り表情も窺えず、額に位置する場所には金色に耀く単眼模様を刻んだローブ姿。

人型、であるが人たる生命エネルギーを感じずどこか非物質的な雰囲気は、只者ではない。

「……住み着いていたゴーストポケモン達は、おくりびやまに帰ったか、ミナモ近辺に散らばったままか」

民宿跡地に辿り着いたもう一人の人型が、片手を扉に掲げれば施錠されているに関わ

らず、とけるを使った痕跡も見当たらない、海に落ちた水滴のように何事も無く吸い込まれた。

民宿跡地の鍵は無くなっているのに入り込んだ。

ネリと同じくピッキングを使った訳でも無い、地まで届く丈であるのに動き辛さを微塵に思わず、内側には複雑怪奇な電子信号処理を張り巡らせたコートに、顔全面を覆わせた仮面は一見すれば妖怪「のつべらぼう」

表情変化が薄い、表情が垣間見えない、そんな次元の話じゃない。

顔のパーツが抹消され真つ平らになっているのだ、眼も鼻も口すら必要無いと、可視化させたウィルス媒体が感染し失わせた……不気味さよりも生理的嫌悪感を与える、サイバースフィアは異世界からの侵略者か？

材質不明なフードを、金色単眼と同じく被っているが、こちらは球体仮面で隠しているのでオマケのような物。

「……………」

熟練のかぎわける使いでも、ほごしよく以上に空間とは渾然一体。

この世とは隔離されているに等しき、隠し扉をさも当然に見つけ出し、金色単眼より二回り近く積み上げられた太い層を持つ右脚で、乱暴に蹴飛ばせばドットや電子記号、精神状態がトリップする強烈で眩しいコントラストが蔓延る仮想空間を、繋ぐ架け橋を

無言で下る。

「ほう」

めまぐるしく変化する、ネットワークグラフィックに惑わされず、神秘的な銀色ライトに囲まれた蒼い揺りかご。

やはり無言のまま電子基板の階段を淡々と昇ったが、この電腦空間に入り込んでから最初の言葉は、素直に驚愕を表現するに値した。

「……………」

途切れなくぎつしりと、張り詰めた筋肉質の両腕を組む球体仮面に対して、金色単眼は何もリアクションをしない。

「目覚めたのか。探し出して保護をしたいのだが、既に何者かに保護をされたのか。この場に入り込める者が私達以外に存在するとは」

かろうじて人型と分かる黒衣の二人組は、広大無辺で果ての無い、しかし海に例えるならば水深が極めて浅い場所に過ぎないこの電腦層。

消えてしまったポケモンの行方が分からぬまま、やむを得無しに踵を返して何事も無く、侵入の痕跡を残さずに民宿跡地から消え去っていった。



そして黒衣の二人組が現れる一時間前、揺りかごで眠るメタグロスの少女を発見し、どうしたものかと悩める一人のトレーナーと、四匹のポケモン。

どうしてこんな場所で眠っている、しかも強力なポケモンと共通認識のあるメタグロスだ。

器用万能がピタリと当てはまる文武両道、超優等生。

現在判明しているポケモンの種類は五百を超えているが、上位にランクインする攻撃力、守りの要である鋼タイプと、異能力の代名詞であるエスパータイプを併せ持ち、頭脳明晰でありながら武力も群を抜き装甲も厚い……メタグロス使用を禁止するレギュレーションで開催される、公式大会すらありうる圧倒的ポテンシャル。

そもそも進化前のダンバル、メタングですら入手が大変困難であり、メタグロスまでの進化チャートも途方も無く長い。

高性能に相応しく、選ばれしトレーナーしか所持出来ない。仮にダンバルを譲り受けてもメタグロスまで進化させられるトレーナーが、米粒程度に居れば上等だろう……

「メタグロスって、野生でいるモンなのかニヤ、ご主人？」

謎の電腦空間に突入以来、呆気に取られお口あんぐりしていたネリ。

まだ現状を飲み込めないってか、飲み込みたくない要因は沢山あるけど、旺盛な好奇心を刺激されたのか、思い出したのか、鋼鉄とは真つ向対立するプニプニの卵肌ほっぺ

を、折りたたんで攻撃力を下降させた爪は日常生活に支障を無くすためである。

「……………」

頬をツンツンしても反応無し。

一般に知られるメタグロスの人化は、男女問わず体躯は大柄である。

本来の姿では性別すら不明だが、コイルもビリリダマも人化すれば男女どちらかに、または男の娘やら……ニツチな属性も多少なり含まれるが、必ずどちらかの性別を手に入れる。

研究段階であるが、性別不明の分類は人間が勝手に決めていたのであり、本来の姿でも実は♂や♀に区別出来たのでは？ 人化現象が発見されてから唱えられた論文を発表。

検証と解明の為に積み上げてきたデータをもう一度作り直す、ポケモンの謎と疑問は増えてしまえばかりだ。

「イツシュ地方で見かけたって、証言はあるが定かじやないな。世界の何処かには生息しているかもしれないけど、簡単には見つけられないだろ、メタグロスは」

ジツクは一般的に知られる容姿と、あまりにかけ離れた可憐で小柄な眠り姫を熟視する。

鉄足を模した大きなツインテールは、青銅のリボンで纏められ、毛先には六角形のク

リアブルーリングを、絞るような形に止めている蒼から銀へ、神聖な質感と洗練されたシャープな印象を与える、クールな組み合わせで流れるグラデーションを作っている。

「子供のメタグロス？ 身長なんて百五十も無いんじゃないこの子？」

マトモに戦えば勝ち目の薄い、タイプ相性で不利の鋼タイプの重鎮も、威圧感が皆無では爽羽佳も警戒心を解いてしまう。

爽羽佳の推測通り、百五十四であるネリよりもさらに一回りはミニマムだ……が、見逃せないモノがある。

（小さな身体には不釣り合いなくらい、おつ、大きいですね……）

まるでスクールライフを楽しむ学生、メタグロスのボディカラーと同じ、青銅色のダブル型ブレザーベストの制服は種族を印象付ける × マークが多く配置されていた。

膝上20cmものミニスカートの下部、縦に四つずつ並ぶボタンを交差する止め方、ブラックのショートソックス上部などに × 印。

髪飾りともなる装甲にもバツテン模様が入り、彼女がメタグロスなのは明白である。

「ミノツ、ホホオ〜♪」

カップ数では流石にメコンには劣っているが、ミニマムボディを考慮すればアンバランスなまでに胸部装甲が盛り上がっている！

ブレザーと組み合わせられる上品な黒いブラウス、スカートまで届く長さのピュアホワ

イトのロングリボン、中心部には本来の姿の瞳と同じ、数少ない弱点である炎よりも深紅に、稼働エネルギーを維持させるコアを想起させる、紅の宝玉が埋め込まれている。

……ギョツと締め付けているからなのか、そんなの関係ないのか、やたらと存在を主張しながら重力に抗う、双実をお持ちであった。

装甲を身につけていても、攻撃を受ければ朽ちてしまいそうな華奢であるのに、早くも胸に潜りたそうにフーセンガムを噛み続ける、かたくりこも絶賛なロリ巨乳。

他部位の脂肪を吸い取ったからなのか、小さい身体なのに男が劣情をそそられ性的な魅力を感じてしまう、巨乳とは対照的に手や脚、ボディラインなどは肉感が不足している。

バランスなど考慮せず胸部だけ強制的に肥大化させてしまった賛美両論。

小さい子は胸も小さいからいいんだろツ！ 愚の骨頂だ！……と、必死の叫びが何処からか聞こえそうだが、クーロリフェイスと母性の象徴のギャップに、不覚にもジツクは外面では伏せつつも内面では心惹かれる要素だと、素直に認めざるを得なかった。

ネリもロリ巨乳カテゴリーに食い込むが、この子はこの子で別の魅力を感じた。上手くは言えないけど。

別の角度から良く見るために視線変更すれば、横向き姿勢も相まって下着が見えつ

……

「つと、保護するぞ」

ヤバイヤバイ、思わず覗いてしまうとところであつた。

各地方を旅して経験と実績を積んだ、誠実なジツクでも多感な十八歳。

自分からセクハラはしないけど、手持ちにハグを求められたら応じるし、偶然眼に入つてしまえば「仕方ない」と申し訳なく思いながら、ラッキーであると自覚もある。

偶然パンチラしてしまつたらしようがない、けど自分からスカートを捲つたり覗ける位置に移動するのは、相手が手持ちだろうが野生だろうがとても失礼な事だ。潔く、勢いよく、下半身から視線をズラす。

……それでも「どんな下着だろう？」とか、思春期の少年らしい予測をしてしまうのは許して欲しい。

「ボールに入れるのですか？」

「ボールは使わない、この子の意思を尊重したいからゲットだのは、目を覚ました後だな」

無遠慮に弱らせて捕獲する者も居れば、馬鹿正直に「これから捕まえさせて貰いますね」と、一礼するトレーナーまで流儀は様々。

特に人化現象が起こつた世代の少年少女は顕著、ジツクはなるべくスカウトやネゴシエーションに近い形で、仲間を増やして「ゲット」の形を取っている。

かたくりこだけはタマゴから孵化したが、その他の子は漂流から助け出したり、田舎から脱出したいから特効してきたり、レアなアイテムにつられたり……面白そうだと加入した子も。

「とりあえずポケモンセンターまでは、俺が背負うよ。他には何も無いだろうしな……」
民宿の地下にこんな空間が広がり、こんなポケモンが眠っているだけでお腹いっぱいだ。

自分ら以外のポケモンや人、アイテムの気配も無いので眼がチカチカするこの場から出よう。

（依頼人にはどうやって報告しようか、それと政府への書類にはなんて書けば……よっ！ うッ!? ヴァッ!?）

ギユムツ……?!

蒼き少女をおんぶして、改めて思う。

「どーしたニヤご主人? グロスつて言えば五百kg超えてるニヤ、その子もめっちゃ重いのかニヤ? あつ、それだと圧死されてるニヤんね! マニユハハッ!」

女の子に「重い」は禁句であるのだが……同性だから辛うじてセーフにしておこう。
（スゲエ……おっぱい柔らかいんだけど……）

体重は軽い、全然軽い!

ネリよりも軽量級なメタグロスってどういう事だろうか。かるいしでも所持していればまかり通るが、この子は天然のヘビーボール×二以外は何も所持していない。

超重量級のメタグロスも、人化すれば見た目相応となる。

それでも小柄で軽量で——胸は除くと付け加える——幼い女の子は、あまりに背中に入力される圧が希薄だ。

やっぱり胸だけはもの凄い圧を入力してくるのだけど。こんなトコだけ重量級って、エッチだ……

Segment・di——【Valestein】

「……………」

少女は弱っている訳ではなさそうだが、ミナモシテイのポケモンセンターに緊急輸送する。

ポケモンの治療・回復は無料で三百六十五日、二十四時間、年中無休で営業するシフト制の公共施設だ。

どの街にも必ず建てられており、ポケモンと共存するトレーナーの職業として憧れられている、最重要施設と言ってもいいだろう。

ボールに入れたポケモンを預ければ、短時間で全回復するマシンが在る受付ロビーはご存じの通り。

だが個別に分かれた病室にはトレーナーはあまりお世話にならない。

大半のポケモンセンターの二階には、身寄りの無いポケモンを一時的に面倒を見たり、酷くダメージを受けているポケモンを救出し、回復まで療養してもらう為の環境も整えられている。

それ以外にも簡単な勉強スペース、飲食スペース、復帰訓練スペース、オペ室、各種

最新式治療システムの導入……など、そのポケモンの特徴やタイプに応じてさらに枝分かれしているの、外観からの予想よりずっとド肝を抜かれる規模が凝縮されているのだ。

何時目覚めるかは分からないけど、十四時頃にお見舞いに行くことにしよう。この子がどうするのか、何故こんな場所で眠っていたのかなど、事情聴取はしたいが教えてくれるかはこの子次第。

耐性が全タイプ中最大数を誇る鋼嫌いすら、心変わりさせコレクターが「一度でいいから所有したいポケモンランキング」で、トップクラスを長年維持するメタグロスは、とてもレアで強力なポケモン。持っているだけでステータスになってしまう。

センターに預けるまではいいいけど、この子はトレーナーに捕まえられてない野生、貰い手として挙手する列が遊園地のアトラクションの如く、群を作るアイアント並の人波になるのは想像に難くない。

（出来れば俺が保護してあげたい気持ちはあるが……）

自慢したいとか邪な想いはないけど、ピンツと来たポケモンを仲間にしたくなるのはトレーナーを志した者の本能だ。そうでなくとも居場所を探してあげなくては、この子を見つけた責任感がジツクにはある。



「ジツク様、メコン様ですね、こちらにどうぞ」

昼食を食べている時も、メタグロスで気が気でなかった。

十五時に面会する予定を桃色髪の女性と、助手でありパートナーでもある寸分違わぬナース服&ニーソックスを着用した安産体型の、人化タブンネに伝えていたが、一時間もフライングし迷惑にならないよう、メコンだけを連れて「三百七十八号室」へ案内された。

（ポケセン来る度に思うけど、看護師がニーソックスつて不味いんじゃないか……ナ二がとは言えないが）

季節や行事によってコスチュームを変化させるセンターも、この世界の何処かにあるのだとか。ソレに比べれば可愛い物だが、医療崩壊しかねないキワドイミニ丈……政府のお偉いさんが許可しているので規制はされない。

「悪夢を見ている訳ではありません、心地よくも深い眠りにしているだけで、体調や神経などに異常は見当たりませんでした。間も無く目覚めると思いますが、タブンネ！」

ハイ、お決まりのセリフでした

一礼してから各部屋前に備え付けられている、透明で電話ボックスと瓜二つな機械に入り込み、煙に包み込まれれば一秒で全身消毒を完了させた。

ポケモン／人間両用の高速消毒装置は、ホウエンの科学技術都市であるカナズミが設計・開発し、各センターに配備された代物だ。

何日間も風呂に入っていない者や、あくしゅう特性のダストダスだって、この装置を使えば一秒で僅かな汚れすら許さない姑みたいなチラーミイにすら、完全無欠なキレイキレイの称号を捧げられる事例があった。

……なのでベトベトンやらマタドガスやら、汚いが命であるポケモンに関しては消毒不要だったりする。清潔こそ病気を悪化させる原因だの、これはこれで扱いが難しいポケモン達だ。

「失礼します」

「失礼します」

堅苦しく威圧感のある、灰色コンクリートの外壁とタイルは、鋼タイプが使用する病室であるとの証。そのタイプ毎に本能で好む材質や色彩で演出されているらしい。

メコンは病室に入るのが初めてなので、地下牢に閉じ込められていると思えば、まあまあ、人もポケモンもあくびを誘い、松果体からメラトニンを分泌させる優しい日差しが入り込んでるので、「そういえば二階でした」と少し恥ずかしくてテヘペロ。このポーズを取っただけで胸がたゆんっ！

他のタイプの病室内装も興味あるが、なるべくお世話にならないに超したことはな

い。

「起きた……？　ここはポケモンセンターだよ」

室内を見渡している内に、あの子が眼を覚ました。

深紅に開く瞳は怯えた様子はなく、ジツクの言葉への返答もない。

精巧な人形を思わせる羞花閉月な顔立ちだが、メタグロスらしい無機質さとは別の無

表情で無感情。

「俺はジツクというポケモントレーナー、こっちはランタインのメコン、キミは？」

名を呼ばれ会釈するメコンだったが、メタグロスの少女は視線を向けることもなかった。

というよりも、メコンの存在に気がついてないのか、深紅の瞳を横一線したジト眼で、正面に居るジツクを見続ける。

……そのまま時計の秒針が動く「チクタク音」しか聞こえぬまま三分と四十秒が経過。

その間に視線をズラせばメタグロスの少女も後を追いつ、ジツクが上を向いたら彼女もシンクロし、ジト眼のまま天井を見つめる真似をした。

ちよつと面白いかも……

「……………人間」

漸く聞こえた彼女の大声は、あまりに抽象的な名詞だった。

熱伝導など感じない、凍てついたニツケルのように冷たい言葉だが、とうめいなすと似たクリアな声質。

「わたし、何故ここで寝ていたのですか？」

先程の和みの一面を見てしまったからなのか、別のセリフを聞いたからなのか、節々にアニメ声優を演じているかのようになり、ロリ甘な音源が混じり室内に響く。

耳を通り越し、心に直接咳かかっているみたいでゾワゾワしてした……妙に恥ずかしくなったメコンは、にっこり顔のまま後ろに下がってしまう。

「キミは別の場所で横たわっていた、俺達が見つけて保護としてポケモンセンターの1室に泊めさせて貰った。俺らこそ何であの場所に居たのか分からないんだけど」

大部屋じゃなくて良かった、民宿跡地の地下空間の存在は恐らく、自分とこの子、手持ちの四匹と後付けしたであろう制作者にしか、認知されていないはず。

依頼人である木の実を分けてくれるジェントルマンには、異変は見つけられなかった”と、心苦しい表情で報告した。

(あの空間、確証なんて切れっ端も無い、俺の直感で独断に過ぎないけど、あのままにしておいた方がいい)

なんせメタグロスの少女が生息……とは違うけど、見つかってしまう異質な迷宮だ。

もしも政府へ報告すれば世界中へ情報が発信され、ポケモン政府専属の仕事人や、

レアで強いポケモンを求めるトレーナー、異空間の解析に鼻息荒くする研究者がミナモに殺到するのは、考えなくたって分かる、大パニックに陥るのが。

他にポケモンの気配はしなかったけど、万一がある。

仮にあの場所がメタグロス達の住処だったならば、喉から手が出るほどゲット欲を刺激するポケモンだ、本来の姿や人化問わず乱獲、バトルに次ぐバトルでグチャグチャだ。

……そつとしておこう。ジツクも冒険心と探究心がそられたが、それでもだ。

なのでジエントルマンへ嘘を付いてしまった形となり、政府へ提出する資料はそれっぽく細工を施す事に。

二重の罪悪感で申し訳なるジツクへと、ミツシヨン失敗に等しいのに「異常が無ければそれでいい、それを判明してくれたジツク君は見返りを求めてもいいのだよ」と、ギフト券袋を手渡してくれた。

成功の有無に関わらず、老人の見間違いかもしれないのに引き受けてくれた、ジツクへは渡すつもりだったらしい。縁がある者からの祝い品らしいが、数ヶ月前にゼニガメとホエルコと宿泊したばかりなので……有効活用してくれるだろうし、ちよつとゴージャスな休暇にもなるだろうと、遠慮無く頂いてしまった。

その宿泊券の話題はまた今度に……クリアでクールでロリ、拒否反応を引き起こさず整合性を生み出し、見事に調和させたのがこの子の声。

「今度は俺からの質問に答えて欲しい、キミの名前は？」

「な、まえ……」

野生のポケモンだとすれば、種族名で統一されて呼ばれる。彼女の場合は言うまでも無くメタグロス。

家族や仲間が居るのならば、独自のネームを持っているポケモンも居るが、種族名があるから名前など必要ないとするポケモンも多い。

また、トレーナーの手持ちになったからと言って、必ずニックネームを与えないといけない訳でも無い。その辺りは意思の尊重や拘りとししか補足出来ない。

「種族名……メタグロス……ですが名前はありません……わたしは、どうしてそのような場所に居たのか……分かりません……」

記憶喪失……か？

戸惑う訳でも無く、絶望に打ちひしがれる訳でも無く、対岸の火事のような淡々とした口調で述べる蒼き少女。

年齢は人間に変換すれば十三か十四か、余計なバイアスをかけず現実を直視できる、れいせいな性格とジツクは培ってきた経験と勘で推測したが、小さなボディで世界を何周も旅してきたと比喩できそうな揺らぎの無さ。

いや、最初からルーチンを埋め込まれて、コチラに応じたパターンを選び出したに過

ぎない、それほどまでに生き物としての温度を感じさせない。

「他に覚えている事はあるかな……？」

室内をキョロキョロ、見渡し始めた少女はやつと青いメイド服を着たランターンに気がつく。

「……………」

あつ、もう一人居たんだ。とても雰囲気でするもやはり表情変化はゼロ。

メコンは軽く笑みを浮かべたが、その意味が分からず少女は小首をかしげた。クールでありながらその仕草は、リトルカップに参加可能な小ポケモンチック。

「覚えている事……固有名詞なのか不明ですが、数少ない情報として【Valestein】……このワードは覚えていきます。どの様な意味があるのか……分かりませんが」
私^が覚えている範囲は以上となります。

クールに告げた少女は微動だにせず、深紅の瞳をジツクへと定め続けている。

もしかして、おっぱいが背中に当たっていた云々の件で、相当怒つてたりするのかわ？
彼女は完全に呼吸以外の機能を停止させていたので、それは無いし不測の事態だったが悪いことをしてしまった。

……それを直接謝罪するのもどうかと思うので、黙っておくが。とりあえず怒りどころか感情変化が見られないので困る。

「ヴァレスタイン、キミの名前じゃないのかな？」

「違います、名前ではありません。仮定するとなればシリアルコード、または暗号の類いかと思われませう」

やたらキツパリ言い放つ辺り、そこだけは本当に覚えており間違いはないのだろう。スタイリツシユな英名を与えるだなんて、この子の家族や仲間はハイセンスだ。

「なかま？ かぞく……？ そのような記憶はございません。トレーナーを持たない野生です。人間……、その腰に付けているのがモンスターボール、わたし達ポケモンを捕獲するアイテムですね？」

「人間じゃ無くて、ジツク」だよ。ん、確かにトレーナーの管理下に置かれていれば、ゲットサインは点滅しないから、野生ポケモンなんだね」

人間と呼ばれる事自体は、野生が相手であれば特別珍しくは無い。こちらだって種族名を叫んでいる訳だし。

今回は自己紹介済みなのだが、無遠慮にスルーしてくる少女。名前に興味が無いのか、同じく自己紹介したメコンにまで「そのランタン」と、言い放つたのは自分が馬鹿にされるのは我慢するが、仲間を馬鹿にされるのは寛容できないジツクなので、良い気分では無かったが……

空のモンスターボールを取り出せば、中心部が赤く点滅し「このメタグロスゲット可

能です」と教えてくれている。

トレーナーが捕獲済みのポケモンには、如何に捕獲率に優れたボールを投げようが絶対に捕まえられない。

気の知れた相手同士がジョークで投げるのは許容範囲だが、捕まえられないと言え真剣なバトルを求めているトレーナーのポケモン相手には、笑いの一つも起きずに速やかに政府に一報され、謝罪だけで収まればマシな方だろう。

なのでボールの開閉スイッチが点滅した、つまりメタグロスは小数点以下の確立かもしれないけど、ボールを投げさえすれば捕獲は出来る状態にあるのだ。

その捕獲率を高める為に、状態異常にしたり体力のギリギリまで弱らせたり……これも常識だ。

「俺は投げない、キミに『仲間になりたい』意思があるなら兎も角ね。まだ聞きたいことは山のようにあるけど、キミはこれからどうするつもりだ？」

「どう……する……？」

「重傷を負っているポケモンを誰かが見つけたとしよう。救出して、預けられて、手厚い処置は行われるけど、完治するまでしか面倒は見れない。その先は野生に帰って元通り暮らすか、おやとなるトレーナーを探すか……」

特にこの子は瀕死の状態でもなく、深い眠りについていただけなので、遅くても二十

四時間以内に目覚めてはいた。結果論ではあるが。

肢体が動かないなどの後遺症があれば、話は変わるが五体満足の状態でポケモン独自の異能力、わざも使える。

「どうすれば、いいんでしようか……？」

この子を見つけた電腦空間、あの場所は生活できる環境ではない。

言葉では発さないが、家族も仲間も居ないのならば戻る必要性は無いはず。

だからと言って草むらへ逃がせば、レアで強力なつあしポケモンだ。

嗅ぎつけてしまう地元民、報道するテレビ局のレポーター、辺鄙の地からでも彼女を捕獲するために続出するトレーナー。

「……俺の意見を聞いてくれ。俺は暫くの間キミを保護したい、ゲットするんじゃない、一時的な保護だ。嫌になったら逃げ出しても構わない……キミの今後が定まるまでは、俺の家に住めば良いよ」

「ジックさん……！」

ご主人様ならそう言ってくれると思っていた。

他の地方を旅している時にも、似たような出来事があり、その助けられたポケモンも結構な希少種。

野生に戻るよりも、他のトレーナーに捕まるよりも、ジックの下に居た方が安全だし、

楽しいし、別の感情も混じっていた気もするが……そのポケモンの意思でジツクの手持ちとなったのだ。

ある程度の選択肢は提示する、それはヒントのような物でありジツクからは決して強制をしない。

選ぶのはメタグロスの少女自身、最適解は誰も教えてくれない、エスパークタイプに未来予知して貰って選ぶ物でも無い、一つ一つの心に宿る意思で決定せよ。

「……………」

スーパーコンピューターをも超える演算処理性能を持つ頭脳は、四匹のダンバルが合体したので脳も四つ所有している事になるが、人化したら一体どうなっているのだろうか？

そのままの姿勢、目線、表情のまま数秒で導いた自らに合理的な判定結果とは。

「暫く人間、あなたの下で保護されることを、わたしは希望します」

安全対策、種族：メタグロスを取り巻いている境遇、メコンが話してくれている環境設備などを考慮し、この選択肢が最も自分に不利益が無く、防衛に適していると判断した。

「分かった！ トレーナーである俺、手持ち用の部屋、合計で七つあるし必要な物品は、明日にでも買ってきてあげるよ。キミの今後が纏まるまで、暫くよろし……の前に、そ

ろそろ俺の事はジツクと呼んでくれないかな？ こっちのランターンもメコンて呼んでやってくれ。そうじゃなきゃこの話は折る」

なんでもかんでも優しくすれば、イイってモンじゃない。

一時的にだがジツクが建てたマイハウス、そこへ住まう事になるのだからある程度、規則は守って頂けないと困る。同じ屋根の下暮らす手持ちの皆だって守っているのだから、この子だって例外には出来ない。

「了解しました……ジツクさん……メコンさん……よろしく、です」

折られてしまったら面倒、ここは従おう。

立場を理解し敬語のまま、お望み通り名前で二人を呼びツインテールごと頭を下げ、頼み込む。

全く誠意を感じない形だけ、眉をミリ単位も動かしていない無表情ではあるが……そこまで細かい事は言うまい。

ネリは「絶対手持ちに加えるニヤ〜！」とか、軽く申ししていたが名も無き少女の今後が決まるまでは「半分手持ち」

正式なトレーナーとして扱われていないので、様々な制限に引っかかる。

わざとマシンの使用不可、公認大会の参加不可、一部施設の利用不可など、預かるトレーナーにとっては「ボールに入れられない」はデメリットでしかない。

謎に包まれたメタグロス、あの場にずっと居たのか、それとも……なのか、保護すると決めたからには責任を持つ。

Segment・di—実力

「初めましてニヤツ！ キュートでセクシーでファッショナブルなマニユーラの、ネリちゃんニヤツ〜！ よろしゆうにやし〜！」

「ハロハロ〜！ 私はオニドリルの爽羽佳だよ〜♪ 仲良くやつてこーねグロスちゃん♪」

「ミノノミノ、ミノノノノ！」

温暖な気候が特徴なホウエン地方だからって、秋も冬もビキニにローライズのショーパン。

痴女って言われても致し方ない衣装を好むギャルと、素肌にライダースーツとマツチヨ漢よりも、漢らしくジツパーは胸元まで下げられ、慎ましくも北半球を形作り、やっぱ痴女スタイルだわ……

唯一、本来の姿を頑固なに崩さない蓑虫は以下略。同類でもほぼ解読出来ないので、ファイリングで察するしかないのだ。

「ネリさん、爽羽佳さん、かたくりこさん、よろしく、です……」

ブーバーンの装飾が成された、パーテイクラッカー「はじけるほのお！」がバンバカ

弾け、赤、黄、青の模様替えグッズ風船までも、何時もより多めに割って歓迎しております。

「ハア……」

紙吹雪や紙テープがツインテールに落ちようが、まるで喜怒哀楽の変化を見せない。

もしかして感情を抑制する装置でも付けられているのか？

そんな物は検査結果取り付けられてないと分かってるけど、ポケモンではなく感情がインプットされてないロボットみたいで……

(メタグロスはメカチックだけど、ロボットではない、ポケモンだ。だけどこの子は言動も思考も機械じみている……見た目は女の子なんだけどな……)

少しくらい反応があっても良い物だが、ツインテールを弄った程度に終わってしまった新人(?) 歓迎会。

掃除や片付けはされているが、インテリアが何も置かれてないし、替えの衣類なども持ち合わせていないので、明日購入して貰うまでは他の子から貸して貰い、部屋もメコンと今晚限り同室となった。

設計も建築費も手間の掛かった南国風ログハウス。家賃は0円で三食の食事付きとは、破格の待遇だ！

「では、わたしはこれで……」

「ちよつくと待つニヤツ！ 新入りメタグロス娘く〜！」

最も、彼女は安堵やら感謝ではなく、安全を確保出来たからリビングに居る必要は無
いと、さも当然のようにメコンの部屋で引きこもる気であった。

愛想が無く、敬語は使っているが皆の気遣いを知らず、少女も気を遣おうとは思つて
も無い。

「宿をお借りします」 拝謝の心も言葉も、圧倒的に足りていないが、少女はそういう
性格なのかもと決めつけるには、違和感があった。

「……なんででしょうか？」

「ここに住むからには新人く〜？ お手並み拝見ニヤツ、メタグロスとバトルする機会
なんて滅多にニヤイし、お前の実力を知らしめてみるニヤツ！ 夕飯前の運動にもニヤ
るよお〜？」

負ける気はこれっぽっちもニヤいけどニヤ♪

少女の襟首に爪を引っかけ制止させ、ジツクらは予想出来ていたがバトルの申し込み
であった。

ポケモンと言えばバトル、古来からの命題でポケモン同士の争いから始まり、何時し
か人間と共存する世界となつてからは、人間がポケモンを巧みに操つて勝利を掴むス

ポーツであり職業であり、権力でありコミュニケーションの一種でもある。

戦う事はポケモン側からしても密接な間柄、戦いたい、強くなりたい……という気持ちは本能からの叫び声でどんなポケモンにも多かれ少なかれ備わる。

「バトル……わたし達ポケモンを人間が操り、戦わせる行為……わたしはマスターに値する人間がいませんが……ネリさん、貴女の種族はマニニューラ、氷タイプです。わたしは鋼タイプを所持してますので、貴女の氷技は半減です。さらに加えますと貴女は防御力が低く、わたしは攻撃力に優れた種族です。一撃で貴女は戦闘不能になってしまます……戦わずして勝敗が決まっているので、行う必要がありません」

突然饒舌になったと思いきや、ネリ個人だけじゃなく「マニニューラ」とされる種族を根底から蔑んだ言動。

確かにメタグロスとマニニューラ。タイマンバトルすれば大方の予想通り、勝利するのは九割前者であるのはジツクにも異論は無い。

生まれ持った属性や能力の差は大きく、簡単に覆せないがそれを補い、利用し、運も味方として引きずり込めばマニニューラにもチャンスが巡るのがポケモンバトル。

絶対に勝てるだなんて、勝敗が見えているバトルなど一つとして無いのだ。その一手が勝利へと繋がるかもしれない、その一手で大逆転を許してしまうかもしれない。理屈以上に奥深いのだ。

(なあくにこの子！ メタグロスだからって王者気分なのかな!? 感じ悪いぞ〜お説教したげるんだから〜！)

(あくらニヤ、れいせいな性格らしいのになまいきニヤ〜ね。ちようはつされたのかと思っただけど、グロスはちようはつ使えないニヤ、リアルで貶されたんニヤね〜！ マニユハハハ！)

オニドリルである自分は、どれだけ鍛錬して努力しても、メタグロスとの相性と地力の差を埋めるのは至難の技。

だからって〜、ダチが馬鹿にされて黙っていられる大人しい子じゃ無い！ 少女は居候の身なのに態度がデカすぎるし！

羽を広げ始めてつつき掛かろうとする爽羽佳を、意外にもせき止めたのはネリだった。

こつちも外観だけで判断すれば、頭に血を上らせて一緒に飛びかかっても可笑しくない、ちよつとオツムが弱い子なのに(凄く失礼)土壇場や、然るべきシーンでは大人の対応ができてしまえる。ダテに元盗賊としてキャリアを積んではいけない、嫌われて当たり前、耐え忍ばなくては即座に死ぬと直感する事は何度もあった、獣道で生き抜いてきたんだ、それくらい慣れてる。

「わたしは事実を述べただけですのぞ」

「怒ってニヤァよ？ そつかあ、ネリや爽羽佳じや相手にニヤらんかあ、んじや、メコンなんてどうかニヤ？」

「えっ!?! 私ですかっ!?! ど、どうでしょうか？ メタグロスさん……?」

どうでしょうかって……雰囲気と流れに誘因されて、メコンがメタグロスに評価される番に以降されてしまう。

後は任せた、この場は譲ると、端から見ればネリはとんずらしたとしか思えないが、ジツクと一番付き合いが長いメコンこそ、適任だどご主人とのアイコンタクトでやり取りしていたのだ。

メタグロスにはトレーナーが居ないから、ネリもジツクに指示を貰わず自己判断で勝負するつもりだったけど……

「……………タイプ相性では可も無く、不可も無くですが総合能力では私の圧勝です。わたしはメコンさんの弱点を突く技も所持しております、ネリさんよりは多少試合時間は長引くかもしれませんが、残念ながら結果は変わりません」

よくもまあ、ここまで慇懃無礼な態度を取れるモンだ。

耐久力がちよつと高いだけ、負ける気がしないとズバリ言われたメコンは、コミカルチックな表情で「ガーンッ!」と涙目だが、トラウマになる程のダメージじゃない。心と胸の鷹揚がデカイ子なので、寝て起きれば忘れてる。

「本当にキミは、メコンと戦って自分は方に一つの負けは無い、そう言い切れるんだね？」

「ハイ、わたしの負けはありえませんが」

「そーか、じゃあ試してみないか？俺もキミの、メタグロスの実力を見せて欲しいと思うしね」

「実行する必要性が感じられません」

「公式認定のバトルじゃないから。キミがメコンに稽古付けてあげる感覚でいいからさ、な？」

今度はメコンとアイコンタクトをするジツク。

「ご主人様の意図は把握した！」

唯一にして最高のトレーナーであり、命の恩人のジツクをひたむきに慕いご奉仕する青いメイドさんは、数多くの男性トレーナー理想の手持ちポケカもしれない。おっぱい
おおきいし！

「お願いします、メタグロスさん！」

「メコンもこう言ってるしさ、一戦だけでいいから」

この家の主人とハウスキーパーが、二人揃って居候ごときに頭を下げているシユールな光景。

かたくりこが吹き出したが、直ぐさまネリにイアのみを 3 な口の奥に突っ込まれた。

このきのみはとつてもすっぱいぞ〜……ミノごと悶えてるから砂が剥がれかかってイヤーン♪

「……………了解しました、一戦だけ……………」

誰得なミノムシはほつといて、少女には理解が出来ない、負けると確定しているのに視線を合わせ頷くランターンとそのトレーナーの脳内アルゴリズムが。

実力を見せればいらしいが、負けたくても負けないので普通に戦えばいいはずだ。

「それじゃ、模擬練習スペースでもある庭に移動しようか」

一軒家だけでなく集合住宅に住まうポケモンの為にも、自由に使用可能なバトル練習用スペースが確保されている。

ちよつとした運動や技の調整、鉢合わせした者とそのまま非公認の試合が始まる、なんて展開はしよつちゆうらしい。



四方に目隠しフェンスを設置した、奥行き五十メートルほどの面積、障害物は無く真つ正面からのバトルに向けたフィールドとして製作して貰った、ジツク家専用スパー

スだ。

インテリアなどは一切省かれているので、練習時以外は基本的に立ち入られていないが、定期的に異常が無いかチェックを入れているので、今回のように突発バトルが行われても不備は無い。

「公式認定じゃない、あくまで実力の確認、後は手ほどきつて事で……いいよねメタグロス？」

「異論ありません」

努めて機械的にフィールド中心ラインに立ち、無意味な体力と時間の消耗だと、品性に欠けた小さな独語の後に両手が蒼白い光に包まれる。

刹那、本来の姿である四肢とツメを模した手甲を具現化させた。戦闘態勢となった彼女の武器である。

「いけっ、メコン！」

ダイブボールを彼女と対峙させる距離を計算して投げ、水しぶきのエフェクトと共に全身に区間少女は礼儀正しくペコリ。

「わたしにはトレーナーが居ません。メコンさん、貴女にはトレーナーが付いてますが、結果は覆せません。わたしにトレーナーなど必要ありません……ではっ……」

バトルスタート！

指示をする者と指示を受ける者、そんな事をせずとも己の判断の

みで戦った方が手っ取り早いし合理的。

ポケモンバトルにおいてのトレーナーの必要性、メタグロスの少女には理解が出来ない、一緒に戦ったから何だと言うの难道？

「一撃で終わりです」

冷徹に言い放つ少女は開始早々、ワンターンキルを狙っているらしい。

先手を取った少女は左腕の手甲を地面に接触させ、小範囲の地脈を乱し周りの全てをズレ動かす。

「いきなり良い技繰り出すニヤ〜」

あの技はじしん。自分以外を攻撃するので命中範囲が広く、威力も安定している抜群の汎用性を持つメジャー技。

本来は望まれない自然現象なのに、アツチでグラグラ、コツチでグラグラさせているこの世界の住民はなんというか……凄い。

「あらっ？」

ランターン種であるメコンは、電気と水の複合と珍しいタイプ。弱点が少ないので数値以上の打たれ強さも特徴となる。

その数少ない弱点が、地面と草タイプの技。

少女が無表情で選んだじしんは、メコンを倒すのに最も最適な回答である。

攻撃力がとても高いメタグロスが、弱点となる物理に属した地面技を放てば、地を揺さぶられた衝撃で空へと逃げた爽羽佳以外、指示をするジツクや観戦しているネリにまで影響を及ぼし、身体が立って入れなくなり、咄嗟に身を屈めてやり過ごす。

「ミノツ……?」

かたくりこは爽羽佳の前開きされた、ライダースーツの胸元へ埋め込まれているので、鼻ちようちんとフォーセンガムを同時に膨らませるくらい、余裕で無駄に器用な特技を見せていた。

ちなみに、爽羽佳のお胸は「ムニユツ」より「ふにゆつ」な気取らない大きさだが、ジツパーに挟みこまれているから落下は免れている。

(私以外、あの子も含めて皆大きいんだよね〜！ それはそれとして、ご主人の推測が正しければ——) ばかりなのに、じしんを覚えてるってどういう事になるんだろ……)

自分には胸以外の武器もあるし、あんま気にしてないけど。

この場にそぐわぬ女性特有器官の話題で、脱線したが蒼と青、二人の対峙は終わってなどいかなかった。

「ダメージを……受けていない……」

震源地であるバストへのパラメーターが偏り過ぎた少女は揺れず、各部に盛り込まれているが一部分のみ天元突破して、「ズシタプーンツ、ムキュツ、ムチツ」なスリーサイ

ズの少女は、地震が起きたら色々な意味で大変な姿になってしまう。

「とびはねる、です！」 地面タイプの技を無効化しちゃいますよ」

「……………」

ポケモンバトルの基本は、相手の弱点を突くことだが弱点技を繰り出せば、必ず勝てる底の浅さだとすれば世界が熱狂する、ワールドチャンピオンシッパなど開催されないだろう。

弱点を突かれるのは当たり前、じゃあ繰り出されたらどうするのか？ を、考えるのがトレーナーの役割。

耐えるのか、避けるのか、無効化するのか。

繰り出される前に先手必勝、それもまた作戦。ポケモンだけでは思いつかなかったり、技のタイミングを見切れなかったり、アシストするトレーナーの存在がポケモンを強くするので、野生よりも手持ちになった方が一般的に強力なポケモンに育つ。

プライドが高い種族でも「強くなれるのなら」という理由で、トレーナーの元を選ぶ野生の存在も確認されているのだ。

（あの子がじしんを使うのは分かった、弱点を付く技”って、サラツと漏らしてたしな…………）

無意識に言葉にしていたのか、メコンより序列の上に居座っていると見下したからな

のか、情報を明るみにしてしまつた致命的なミス。

スーパーコンピューター並の知性を持つ、メタグロスなので抜け目の無い罠の可能性もあつたが、身構えていた初手で放つてくれたお陰で、指示の余裕は十分に出来ていた。地面技対策としてでんじふゆうが候補だったが、残念ながらランターンは覚ええないので、他の技で代用した「擬似的なでんじふゆう」状態。

でんじふゆうよりタイミングはシビア、衝撃が収まるまで浮かび漂う形になるので持続力も強化させなければ、途中で墜落してしまうし半浮遊状態では、その他の技を使えない為使い勝手はあまり宜しくない。

それでも手痛い一撃を避けられるので、重宝しておりこの技を習得させて、一緒に鍛錬したからこそ得られた勝利の味は別格だ。

とびはねるといふマイナー気味の技も、ランターンが野生として暮らしては決して修得出来ない。トレーナーの元で暮らしている利点の一つ、思いも寄らぬ技を授かり欠点を補強すれば、本来不利な相手でも逆転は夢じゃ無い。

じゃあ何故、『野生のハズであるメタグロスが、じしんを修得しているのか』新たな疑問が湧き上がった。今は熟考している暇は無い。

「な……」

着地時は九十を容易にオーバーしている、女性ホルモン分泌を抑えられないHな球体

が縦方面へ、おはじきみたいに弾かれる。

副産物……真面目に鍛錬しているのにおっぱいがおっぱいが……いやらし目的じゃないのに、ラッキースケベ的なトレーナー特権。慣れたはずだけで若干紅潮させてしまいうジツクは、女の子に一番興味のあるお年頃だから許してやってください。

同じ手は通じない。で、あれば接近戦でカタを付ける。

青へ駆け出した蒼は、手甲をさらに硬化させ助走とウエイト代わりになった右腕の勢いに任せて、あらん限りの力で前方へ叩きつけた。

格闘タイプのアームハンマー。メコンの弱点を突ける技では無いが、じしんが通用しない、得意の鋼技も水タイプを含んでいるので半減される、最もダメージソースとなり得るのがアームハンマーだと、彼女は判断したらしい。

(あたり……ないっ……)

一撃目は後退、二撃目は顎を引き、三撃目は地を蹴って逃れられた。

そのポケモンが生まれ持つて備える、種族的な能力ではランターンは大した早さを持たないはずだ。

ただど苦労した様子も無く先読み……いや、見てから余裕な反応で三発も意味の無い技を振るってしまい

(反動で自分の素早さが下がってるニヤ、一発目を避けられた時点でそれ以降は命中率

が低下してんのと同じニヤね。おっぱい大きいからニヤのか、あの子の速力予想よりも遅かったニヤ)

——負ける気はこれっぽっちもない——

ネリの発言は強がりでもなければホラでも無かった。

相性はかなり絶望的だが、マニユアル通り首尾良く進まないのもポケモンバトル。

(……………ッ！)

自分の攻撃が掠りもしない。演算的で合理性の塊の少女が、陰りを見せ動揺していると後先考えず、大振りになっていく鉄拳から表情こそ見繕っているも、隠し通せていないに等しい。

(やっぱりな、彼女は地力こそ素晴らしい、流石はメタグロス。だが経験の差は如何ともしがたいな、技を使うだけで全く使いこなせていない)

失礼ながら彼女のセリフを引用すると「負ける要素は無い」

メタグロスと対戦、この一言だけで初心者にはビビるか胸を借りる気持ちで突撃するか。

しかしジツクはハウエン以外の地方を、仲間達と冒険し政府への貢献もそれなりに行っている、実績のあるトレーナー。メタグロスだろうが怖気づく対戦素人じゃない。

彼女が繰り出す技は、そんじよそこらのポケモンは一撃粉砕可能なパワー。共に修羅

場を超えてきたメコンだつて、当たつてしまえば「当たれば」の話だが

……

（このランターンの戦闘力は分析完了済み……回避動作も予測完了しています……当たらない理由が無い……にも関わらずノーダメージ……？）

（凄い威力だけど動作が直線的過ぎだ。よつぽどじゃない限り当たらないよ、冷静沈着と思いきやブレが生じるまで早かつたな）

エスパータタイプでもないメコンに、未来を見透かされているかの反応でスルー。

メコンは能力柄、攻め込むよりも攻撃を耐えてから反撃に転じ、おっぱいのように豊富な耐久力を活かした持久戦の方が得意。

何回も相手の攻撃を避ける素早さは持ち得ていないのに、それが実行出来てしまうのは……そういう事だ、受けなくたっていいと。

「みずでつぱう」

後退と共にメタグロスとの距離が開いたので、始めてこのバトルでメコンが攻撃技をぶつける。

「……………？」

掌から真つ直ぐ噴射されたのは、水タイプの基本技で威力も低い技。

彼女こそ避けるまでもない、高い装甲を備えた手甲でのガードを——正確には避けも

防御姿勢にも入れなかったのだが——行わず肩関節に当たったが痒い、所詮タイプが一致しても低威力。

しかし……

「みずでつぼう」

「くー あッ……!？」

みずでつぼうは低威力と引き換えに、攻撃までの動作が素早い利点がある。

ダイナミックな怪力と理詰めの頭脳が合わさる、メタグロス種にしては大雑把で隙だらけ。

感情にも幾つものブレが発生し、勝利への方程式など崩れ落ちた彼女は、低威力技のダメージを身体へ蓄積させていく。

それどころか攻撃しようとするればキャンセルされ、常に射程外へ逃げられている。さらに付け加えればアームハンマーの代償、素早さの低下が嬉しくない形でアンチシナジー。

「ハア、ハア……ハア……」

「今だ、でんじは」

本人は気がついていないが、数少ない攻撃チャンス後も躊躇めいてしまっている。

パワー以外はからつきし、基礎能力だけに頼っている、そんな言葉が浮かびつつも、搦

め手を使用するメコン。ちなみにメタグロスの少女はこのバトルで、攻撃技しか使用していない。

最初の内はこちら側が舐められているから、攻撃だけで倒すつもりかもしれないと予測するも、念の為にどの補助システムを実行されても慌てない気構えはしていた。

が、目の前の相手を攻撃する以外の手段を忘れてしまったのか、実行してくる様子が……いや、思考する余裕も無いのかもしれない。

射程距離は短い、当たってしまえば確定で麻痺状態を付与させるでんじは。踉跄めいた隙に浴びせるなど、メコンにとっては簡単な物だった。

(……………ま、ひ……………に……………つ)

膝が折れる、股関節が上手く動かない、戦いの最中ペタンと可愛らしく、M字開脚を強いられ後少し、角度が右側に数度ズレていたらミニスカートの中身、エデンの園を無修正のままジツクに晒すハメになっていた。

人化したポケモン同士のバトルは、このような嬉し恥ずかし赤裸々な自体が多発する。

この点だけでポケモンを集め出したトレーナーも存在する。不純な動機だがジツクは男なので、表だつて言わないけれど理解はある……

「危ねっ、際どいなもうっ……手を緩めずにあやしいひかりだ」

ロングの三つ編みを結う、誘引突起を模した球体アクセサリから妖しげな光彩が、円環状に構成されメタグロスに命中した際には、一瞬全身がモノクロへ退色、GBカラーを連想させ懐かしい。

「……………??……………?」

「あくらニヤ、キマっちゃったニヤ」

例えあやしいひかりが失敗しても、最初から勝敗は決していたのだが。

身体の重心が分からなくなる感覚。

立ち上がろうとしたら重くなり、またしても盛大にM字を作ってしまうが、手甲を地に叩きつけながら跳躍し、脳震盪を引き起こされたように額を支えたら、視界が反転。

「—#Σ? Ω……………oπ、ん?—γoπ??」

翻訳不可能な異世界の言語、もしくは何らかを訴える暗号として変換したのか、無表情ながら焦りを醸し出す行動を連発していた彼女の吐露なのか、深紅の瞳が渦巻き状なコミカルな形になって、正面にアームハンマーを食らわせるが、メコンは彼女の背面でジツとしている。

幻覚を見せられ正面にターゲットが居ると、誤認識している。効果時間は短いが命中すれば殆どのポケモンは確率で、イメージにそぐわない混乱した描写を露呈されてしまう、恐ろしい技だ。

「……………ハッ、あ、の、ラン……………タ、ン、は……………」

脚を伝わせている地面には、突起物など皆無で動きやすいフラット。ドジっ子だって転ばないのに方向感覚も狂ったメタグロスは、棒が倒れるように自らの両脚を支点に、受け身もなく倒れ込んだ。

この衝撃で混乱状態が解けたのだが、もう遅い。

「ハ、攻……………撃が……………ッ……………」

顔を上げたメタグロスの視界には、両手に水のエネルギーを溜め込んでいるメコンの姿、発動までに時間の掛かる大技、ハイドロポンプの作動ポーズ。

無防備な自分に対して、魅せ付けるように構えており妨害も防御も、何も出来ず食らうしかないのです、目を鋭利に細めて睨むのが精一杯の抵抗か。

大技だがランタンの攻撃性能は高くは無い、自分の装甲なら一発耐えようと、高速で演算したのだが……………

技が繰り出される直前に、その手が一層青色に染まるっ！

持たせていた「みずのジュエル」は一度だけの使い捨てになるが、好きなタイミングで水タイプ技の威力を大幅に増強させる効果を持つ。

「ああああッ！、ッ！、あ、あ、あ、あッ!!」

計算を絶対に外さない、複雑な戦略を瞬時に練り上げ冷静に実行する戦闘マシン、そ

れが強者メタグロスの謳い文句として、雑誌では紹介されている。

いとも簡単に、こうもあっさりと言算が外れて最後の望みも絶たれた清らかな水爆流。

「ごめんなさいね！」

ゴグル越しの優しげな瞳、しかしマスターの指示により水の力を封じ込めた宝石を砕き、最大火力でフェンスまですつ飛ばした。

戦闘意欲と共に体力ゲージはゼロにしたメコンの勝利である。

それはもう観戦してる爽羽佳やネリが、同情しちやうくらい完膚なきまでに、圧倒的に圧勝、メコンは一ダメージも受けてないのだから……

「ゴボツゴボツ！ ガハツ……ケフツ、ケフツ……ハァーハァー……ま、け……た……？」

ジュエルハイポンを食らい、二、三十メートルは吹き飛ばされ体内に水が混入しても、現実を受け止めきれず思考回路が理解を拒否してる。

ランターンとメタグロス、種族的数値では自分が勝っていたのに、負ける要素は無かったのに負けた？

いや……あのランターンと、指示をするトレーナーは足りてない物を暗喩する戦闘の仕方であった。

「俺達の勝ちだね、気がついてると思うけど、俺達は見抜けたよ」

Segment・di——大きい蒼と大きい青

吸水性に優れる大判タオル、弾むようなポリウレームの馬鹿売れ新商品「エルフーン印のモフモフコットン☆タオル」を手に、メタグロスの少女の元へ近寄ったがブレザー制服が、身体にピチツと張り付いてロリ巨乳ボディが引き立てられて、非常に目の毒だった。

幸い、下着は見えていなかったが。

プラスとマイナスの境界線に立っている、相反する魅力を持っている……など、心の中だけに留めておき、本題に入る。

ペタン座りしながら洩々タオルを受け取り、ツインテールを覆う形に広げる少女に追い打ちするようだが、明瞭にしたほうがこの子の為になる。

「戦いの途中で気がついたんじゃないかな、自分は一度も戦った事が無いって。どれだけ頑張っても今のメコンには勝てないって」

「……………」

無言ながら肯定の意。

最適と思われる技を使用するも、その技の潜在能力を全く引き出せず、数打ちや当た

るも通じない。

確かに当たってればメコンも只では済まなかったが、少女には悪いがジツクもメコンも「当てられる気が一ミリ足りともしなかった」のが本音。

「みずでつぼうを覚えさせている理由、威力が低い基本技だけどその分エネルギー消耗の効率が良いんだ。鍛えればそれなりのパワーにもなる、トレーナーとポケモンの努力次第でね」

整然と配備された脳内ネットワークデータベースには、そんな仕様は見当たらず「この程度なら」と、意に介さず防御より攻撃を優先させていたが、ダメージ蓄積量が計算結果よりも遥かに早かった。

それはみずでつぼうのダメージが、データベースに表示された数値よりずっと高かった、数発受けて防衛行動の優先順位を上げなければ、思わぬ事態に陥り簡単にメコンからの接近を許してしまった訳だ。メコンは歩いて距離を詰めただけに関わらず……

「……………」

「ペース配分も考えてなかったように見えた、無闇に攻撃して体力が消耗すれば自ずと戦闘力は減る、知らなかったでしょ？」

「……………（コクンツ）」

トレーナーを持たぬポケモンという点が土台にある配慮をしても、彼女の戦い方は非

効率の集合体。

スパコン並みの頭脳を持つメタグロスは、例え野生だとしてもトレーナーと互角以上の頭脳戦を繰り広げる……は、野生としての目撃情報が不確定なので推測に過ぎなかったが、駆け引きなんてあつたモンじゃない。

「俺はメコンに指示を与えただけ。完璧に実行してくれたメコンは偉い！ キミはトレーナーと一緒に戦うポケモンを侮っていたけど、一緒に戦うってこういう事なんだって、武力行使みたいになつて申し訳ないけど……理解して欲しかったんだ」

（ジツクさん……？ 私には心から信頼しておりますから……二人の力で呼び込んだ勝利……二人の共同作業……ポツ……？……？）

発光器官が天然のピンクキャバレー、ヒウンシティの裏路地に在る大人だけのお・み・せ。

ジツクに抱きしめられて、優しい言葉を耳元で囁かれ、○○○の×の妄想してるんだつて分かりやすい……清纯な見た目ながら、オスというオスを誘惑するHカップ、ご奉仕するのが大好き……締め切りに追われているドーブル先生が、薄い本のモデルにしたいて、トンデモ依頼してくるエロい子なのだ。当然ジツクは断つたけど少しだけ興味あつたなど言えない！

瞳孔にハート模様を刻みながら、自分で自分を抱きしめながら、尾ビレを左右へプル

プルさせてるメイドさんは放っておいて……

「メタグロス、キミは……生まれたばかりなんじゃないかな？　そう考えたら色々辻褄は合う」

彼女を発見した電腦空間。あんな場所で生活していたとは思えない。

「Valestein」なる英名のみ覚えていた。記憶喪失の類かと思っただけと違う、生まれたばかりだから本当に何も分からない、知らないだけなんだ。

その「Valestein」だけ覚えている理由は不明だが……あの戦闘方法から分析するに、パワーはジツクのどのメンバーよりも高かった。

しかし避けられるよりも単純に当てられない、技の使い方があまりにも拙劣で、防御の姿勢も取れずメコンからの攻撃はノーガードで受けっぱなし。

脳筋、は言い過ぎだがハイレベルの地力だけに、頼って鎮圧させる事しか出来なかったのだろう。

アームハンマーでの攻撃後、自らのパワーを制御しきれないのか体勢を乱しており、次のアームハンマーを繰り出すまでの動作も長く、やろうと思えば既にメタグロスを戦闘不能に出来ていた。

それも生まれたばかりで戦い方を知らないと考えたら、納得だが。

「……戦っている内に、違和感を覚えました……いくつかの技は所持しております、しか

し力の使い方をわたしは理解していない、戦った経験が無い……記憶になくとも身体が教えてくれました……」

戦闘不能になった少女へ、自然治癒力を意図的に瞬間向上させる、すごいきずぐずりのスプレーと、麻痺症状を速やかに取り除けるまひなおし、無言ながら頷いてくれた彼女の了承を得て、全身に散布及び塗布していく。

じしんを放った時。これはまだ相手が奇策を繰り出したと解釈できたが、得意である……ハズの打撃戦でも当たらない、当てられない。

特別回避性能に優れてないランタン相手に、ポケモンが技を繰り出す源、パワーポイント略してPPの息切れ間際まで振るつたのに、結果は自分が疲れただけであった。「自分の思った通りに身体が……動かなかつたんです……距離や空間なども計算しているにかかわらず……ランタン、いえ、メコンさんの方がずっと速く動いていたと勘違いしておりますが、わたしの攻撃が鈍かった……精度に欠けていた……そう、ですよね……?」

幼くも透き通って鼓膜を撥られる、クリアなロリボイスもバトル前よりメラニコリツク。

疑問が確信へと変わり、何らかの現象が起こり電脳空間にて生まれついた。

最強という呼び声すら在るメタグロス種とて、全くの戦闘経験皆無ならば戦いに慣れ

て、適切な鍛え方をされ、種族以上の力を引き出せているメコンに敵いつこない。

メコンが最初から本気（ジユエルハイボン）を繰り出していたら……避けられない、耐えられない、無残な物だっただろう。

「装甲も……恥ずかしながらわたしが『焦る』感情を浮かべてしまつてから、性能が落ちた……みずでつぼうの威力が上昇したのではなく、わたしの防御力が低下していたのですね……とくせいはクリアボディなのですが、心的な問題が……」

HPは全回復、状態異常も取り除かれたが、あれだけ無表情だった少女が目線を落とし、何処へ断腸の思いを発散すればいいやら、拳を握りしめるあまり細胞を構築する磁力が、蒼い電流の如く零れ出す。

「強く……なりたい……ですっ……わたしはどうすれば強くなりますか……う？」

メタグロスとしてじゃない、この星に生まれた不思議な生き物、ポケモンとしての本能が行く末を決定づける事になろうとは。

「メタグロス、キミにその気があるなら俺は努力させて貰う。キミを強くしてみせるっ、今は何もしらないだけ、これから知っていけば良い！ 視野を広げれば良い！ 俺だけじゃなく皆も教えてくれるからさ！」

「そーニヤそーニヤ！ 仮住まいするんニヤらついでに強くなつちまえばいいのニヤ！ ネリが戦闘教授してやってもいいニヤ♪」

「そだね〜！ ギスギスした雰囲気ってのは嫌だし、これを機に仲良くやってけたらなーと思うよ。貴女が今後どうするか、決まるまでこの家に居るんだから、出来る時になら付き合ってたげるよ！」

「ホホホ……ミノホホホ……」

「私も賛成ですよ！ 是非とも私にリベンジしてください♪ 明日は日用品の購入にミナモデパートに行きましょう！ メタグロスさんは少なくとも暫くはこのお家の住人です、お仲間です！ 一緒に協力して行けたら嬉しいですよ♪」

一匹だけ理解不能な輩は居たけど……

生まれたばかりで演算処理もミスだらけ、欠陥コンピュータ。

戦闘も呆れかえるほど情弱な自分に、居場所を与えてくれた。

メタグロス種特有、強ポケとしてのプライドは在るが、こんな現状ではビッグマウス。今の自分は弱い、野生として生きていくにしても強い事にデメリットはない。

現実から目を逸らさず、この者達の下で納得いくまで住ませて貰い、強くなる為のプロセスを学ぶ。効率を最重視した上で自分には何が足りていないのか、打算的に導き出したのが

「……お願いします、メコンさん、爽羽佳さん、ネリさん、かたくりこさん、ジツク……」

さん、無礼な発言、態度をお許し……ください……わたしを暫く預かって貰いたいです……強く、なるまで……」

手甲を取り外し初対面より誠意を感じられる、立場を弁え可愛らしくツインテールが垂れ下がった。

こんな時でも無表情だけど、明らかに彼女は感情を持っている、自らの意思が在る。生まれた……と言ひ換えるべきか。

ジツクはメタグロスが最短距離で自己能力を開花させる為に、利用されていると気づいているけど別に良い。

少しの間かもしれないけど、名も無きこの子と過ごしてみたくなつたんだ。出生も分からず機械的かと思えば、不安定な面があまりに多く、恵まれた潜在能力を引き出せず苦難するこの子を。

このままサヨナラ、そんなの出来ないつ、放つておけない、ちよつとでも支えたくなつてしまう湧き上がる何かがある。

「じゃあ改めてよろしくっ！」

手を差し出す一人と人化三匹、器用に砂ミノを凝縮変化させ棒、のような物体を作る一匹。

代わる代わる握手、行為の意味は理解しながらも強さとは結びつかない。

「よろしく……です」

流れ作業のように握手を交わす。種族が生まれながら持ち得る能力では、自分が圧倒しているのにこの人達は自分より強い、掌から感じ取れる熱量。このミノムツチだつて自分より……

最後のジツクとの握手でも、彼女は混乱時の渦巻き顔など黒歴史だと、言わんばかりの無表情っぷりだったけど、「この人の元で修行すれば強くなれる」と、メタグロス種には縁の無い言葉「直感」した。

強くなつたら出て行く、ボールには入らない、共存法の定めはあるが、彼女の立場は「半分野生」なので意思を尊重し無理矢理ボールに押し込めない。

要するに「貴方の手持ちになりたい」意思を通わせ契約を交わすのがゲットだとすれば、彼女は強くはなりたい、が、手持ちになる気はサラサラ無い。ボールを投げたつて呆気なく弾かれてしまうだろう。

ゲットするのが目的じゃないんだからいい、だけど暫くは仲間として扱う。彼女が納得すればその時は野生に帰るなり、他のトレーナーを見つけたるなり……好きにすればいい。

こんなイレギュラーも発生するから、部屋をすっかり作っておいて良かったと、自画自賛したくなる出来映えのマイハウス。

喜色満面しながら腕を組むも、氷タイプ並の身体の冷たさと、生き物としての、延いては女の子としての芳香がメタグロスには存在しなかった。言い換えれば体温と体臭、生き物として身につけていて当たり前の要素が彼女には無かった……負ぶった時から気がついていたけど、鋼鉄の身体だから冷たいという理由じゃないだろう。

まるで少女の心境を表すかのように……



蒼き少女の専用部屋は、シングルベッドが殺風景の空間中心に、ポツツと置かれているだけなので、今晚だけは青き少女と同室。

メタグロスの少女は気にしないと、部屋よりも空虚に発するが半分お客さん扱いなのでそういう訳にもいかない。

「……メコンさん」

「は〜い、なんででしょうか？」

各住人の個性が溢れる私室。メコンは水タイプに相応しく浅瀬、中層、深海をテーマにした原寸大アクリウム。

サニーゴやヒトデマンのクッション、天井につるされた半透明のブルンゲル型照明器具。

勿論彼女の種族、ランタンや進化前のチャンチーを象ったオブジェを配置し、幻想

的な空間を演出。

淡いブルーと濃いブルーのグラデーション加工されたウォールペーパー、薄型カーペットはブルー&ホワイトグラデーション、ソファやルームチェアはマットグレーでシックに纏めている。

ハウスキーパーとして毎日お掃除しているので、髪の毛一本たりとも落ちていない。かたくりことジック以外の部屋だけは各自に清掃を任せているから、場合によっては散らかっていたりするけどメコンはそんな心配は無い！ 彼女を泊めるには適任だ。

「貴女は何故、ジックさんの手持ちに？」

戦い疲れた身体を木の香りが堪らない、サウナも備えた極上ユニットバスでご入浴。剥き出しとなった丸太を組み合わせ、背もたれの角度や浴槽の深さまで、家主や手持ちに合わせている尋常で無い拘りようだ……

ツリーハウスが特徴的のヒワマキシティ出身の大工さんと、相棒のドツコラーさん達に感謝を。

部屋の隅つこに敷かれた折たたみマットレス上で、ネリから借りているキャミソールとショートパンツは、黒地に青紫のストライプが縦並びに入っており、右端にはデフォルメされたネリの似顔絵がデザインされている。家事を一手に引き受けるメコンが取り付けた物だ。

少女には着替えが無い、胸やら身長やらの関係でネリのルームウェアでも少しサイズがマツチしてないが、明日まで我慢。

それだけならまだしも、何と少女は

「下着も付けてない」

……あんなに動き回っていたミニスカロリ巨乳美少女。見えそうで見えなかったが、実際はいてない。つけてない。ので、全年齢向けギリギリの描写であった。

水浸しになった彼女の色々な部分が透けなかったのは、まさに洋服がリアルタスキ。妖怪一足りないが最高の仕事をした。

なので、無防備にも体育座りしてるから、お肉の盛られない鼠径部が隠されず、本人も脚で隠そうとする気が毛ほどもなく（別の意味でも）、同性なのに顔面クリームガンなメコン。

「……えつくとですね、私はジツクさんに助けられたのです。水タイプのポケモンは溺れる事はありません、ですが」

メコンのは大きすぎる、ネリは下はいいけど上は足りず、爽羽佳も同じ。

残念ながら胸の攻撃力の高さその他の部位が比例しないメタグロスの少女は、身体に合うブラジャーを付けられず、ミナモデパートで購入するまではノーブラとなつてしまおうが、本人は下着の必要性が分からなかったらしい……服を着ているから問題ない

と。問題大ありです……

「私の実家はトクサネシティの近く、百二十七番道路から百二十八番道路に存在する海底なのです」

まだチョンチーであり、どこもかしこもロリだった少女はメイドっぽくもなければ、メコンという名前も無かった。

父と母、家族で楽しく海底のお散歩中に、とても大きな渦潮が発生し、おおきなしんじゅやハートのウロコ、ビビットカラーのかけらなどが宝物のように落ちていたこの一帯は争い毎も起こらずのどか、両親達も安心して遊ばせていたが突如、巨大な渦潮が彼女達三人を巻き込み海の底に広がる景色、碧く神秘に輝ける宝石を破壊しながら、トクサネの海岸近くで漸く収まった。トクサネに避難勧告が発表され、殆どの住民が氾濫を覚悟し逃げる準備を終えていたくらいに驚異であった。

後日判明した事だが、強大な渦潮の正体は伝説のポケモンが関連した現象であったらしい。

伝説のポケモンにもチョンチー一族やトクサネ住民を、破滅させる意思は無く力が強すぎるあまり、ごく稀にこういった驚異が襲いかかることがどの地方でも在るらしい。

だからこそ簡単には見つからぬ場所で、静かにひっそりと、暮らす……存在すら曖昧に、概念その物が意思を持った“伝説は伝説のままであつて欲しい”……とある海神が

遺した悲しくもあるセリフ。

トクサネは無事だったが、飲み込まれたチョンチー一家は広大な海で散り散りに。

泳ぐことも許されず気絶してしまった一匹のチョンチーは、ミナモの浜辺に漂流し――

「助けてくださったのが……一人の男の子、十歳の頃のジツクさんだったのです……！」
家族旅行でハウエンに訪れていた幼きジツク。水タイプが日光浴でもしているのか、もしかしたら友達になれるかも？

子供らしい純な想いを秘めながら、ドキドキして近づけば……遊んでるって雰囲気じゃ無い。

もう少してポケモントレーナーとして認められるのにつ！ まだボールを持つことが許されていない少年は、考えるより先にチョンチーを背負い両親の元へ駆け出していた。

「手厚く看病してくださいました……あの方は命の恩人です、ジツクさんは「治したのはお父さんとお母さんだよ!？」と、仰りましたけどそれでもですつ、何れ両親の元を離れて一人立ちするのであれば、今がその時ではと」

利益を顧みず必死で背負ってくれた少年の背から、気を失いながらも想いが伝わり家族と離ればなれになった不安な心が安らぎを得ていく。

代金は大人になったら利子付けて返すからっ！ 無茶言つて乗り込んだのは、海上を滑るように爆走するボートにはジックとチョンチー。

旅行が終わるまでの間、やりたかつた事も行きたかつた場所も犠牲にして、だだっ広いホウエンの半分以上を占める海で呼びかけていた、この子の両親は何処ですかつて。

「見つかつた……のですよね？」

「ええっ……！ 最後の最後に、夕焼けのミナモシテイの浜辺で！ 偶然にも私達が出会つた場所にお父さんとお母さんが噂を聞きつけて、見つけてくれたのです！」

身体を締め付けずシルエツトを太く見せてしまふが、寝心地優先なりツプル素材の長袖パジャマに着替えたメコンは、詰め物でも入れてんのかつて女子から泣きつかれて揉みし抱かれてしまふ ザ・ビッググバスト。

デパートにはメコンにフィットするサイズが、取り扱っていないのでワンオフ品として設計され、プラスとマイナスが集まり、一つの大きなプラス記号とマイナス記号を形成し、電流が流れるエフェクトが袖口と尾ビレの開口部にプリントされている。結構ポツプだ。

自分サイズ……なのに、中心部のボタンを二つ程閉められなくなっているから、みちみちの乳袋に追従する谷間のダークホール……これは 命中率100%の いちげきひつさつわぎ！

なんか硬くて太そうな物体を差し込めそうだが、そんな展開にはなりません。

太ったのではなく「また成長しちゃった」のだろう。胸がデカけりや苦勞もデカい。「私もジツクさんも、両親を説得して承諾してくださいました。あの方の初めてのポケモンとして八年間ずっと過ごしてきました……イツシユ地方やシンオウ地方への旅も得て、再びこの地に戻り拠点を作り上げたのです」

二人が出会った思い出の街、なんと運命的なのだろう。

メコンの実家ともアクセスが可能で人口率も多く依頼要請もし易い。人口が多ければバトルを挑まれる確率も高く、それだけ経験を重ね強くなれるし、戦うだけがポケモンではないとバトルとは異なった育て方、戦略を求められるコンテスト会場、メコンの下着以外が困らず大体何でも取り扱っているデパートなど。

ここしかないだろう、貯金も一気につき込んで真に自立した証を、大切な仲間達と共に暮らせる場所、そして帰るべき場所。

「……メコンさんにとって、大切なんですね、ジツクさんは……」

「ええ、とつても！ 旅は一段落しましたが私はずっと、ずっとあの方と共に在ります」

メコンとは今日出会ったばかり、ほんの僅かしか彼女を知らないけど礼儀正しくお淑やかな女性であり、ジツクを心から慕っていると、興奮気味に語り二の腕でおっぱいを

挟み込んでいる姿からも分かる。

ジト目で三つ目のボタンが外れるか否か、冷静に観察している少女も、サイズがマツチせず切り落とされた形状になってしまふ、キャミの上半分からE……いやFくらいはありそうなバストを露出させているのだが。縦縞なので余計に段差が強調され……この部屋エツチすぎる。

「旅の途中に爽羽佳さん、ネリさん、かたくりこさん、ここには居ませんけど沢山のポケモンと知り合つて、仲間を迎えて、何時も上手くいった訳じゃありませんけど、トレーナーの下で生きる喜びを感じました」

「トレーナーの……下で生きる喜び……？」

「人もポケモンも、一人と一匹の力だけでは限界があります。伝説のポケモンなら話は違ふかと思いますが、私は伝説ではありません、特別な能力も持たないランタンです。みずでつぼうだつてジツクさんと旅に出るまでは、下手な物でしたよお……的に届くまでに途切れてしまつたり……」

「トレーナーの下に居れば強くなれる……」

それだけじゃない。

自分だけでは入国すら出来ず、憧れるだけであつた別の地方への進出。

海に住むポケモン以外、毒タイプに炎タイプに虫タイプ、仲間や友達と遊んで戦って、人化した利点を活かし働く事もあった。

ポケモンは人間よりもずっと強い生き物。だが人間と一緒に暮らせる生き物。

人化したって変わりない、彼らと、彼女らと共存して人間は生きている。どちらも欠けてはならないんだ。

「一番嬉しいのはニツクネームを授けてくださった事、ですかね！」

ジツクと共に歩むことを選ばなければ、自分は一生涯「チョンチー」か「ランターン」で幕を閉じていたかもしれない。

ポケモンと人間は感性が異なる点があるので、ポケモンからすればわざわざニツクネームを付ける必要が無い。大勢の群れでも周波数を使い分け同じ「ランターン」呼びでも、ポケモン側からすれば一匹一匹別の「ランターン」なのだから。

ニツクネームを与える、つまるところ新しい人生の始まり……は言い過ぎかもしれないが、一つの種族としてでなく、存在として扱われる意味がある。

あの二人だって同じ、「ただのオンドリル」と「ただのマニユーラ」から、「爽羽佳」と「ネリ」、トレーナーの手持ちとなる事を選んだから、唯一無二のネームがアイデンティティとなったのかもしれない。

(名前……ニツクネーム……必要性が感じられません……そんな物が無くても強くなれ

るハズです)

少女にはまだ理解出来ないだろう。正式な手持ちでは無いし一ヶ月後には姿を消している可能性も捨てきれない。

彼女がジツクの手持ちになる選択肢を取るなら、それはメコンにとつても嬉しいけど……

ジツクは強制しない、俺の手持ちになればと強引にボールに収める真似はしない。

約束したからには少女に戦闘経験を積ませ、技の洗練度を上げて、非常に恵まれたポテンシャルをフルに発揮できる努力をするだろう。

その結果、少女がこの家から消える事になつたとしても……意思を尊重して引き留めようとは思っていない。

「さつ、お休みしましょうかメタグロスさん！ 明日も貴女にとつて良い日でありますように！ スヤアア……」

デパートで少女に必要と思われる品、特に下着は入念にスリーサイズを計って貰わなくては……

サイドテーブルに「パニプツチよりあまくてつめた〜いお菓子特集」というグルメ雑誌にカラフルな付箋が挟まれ、氷菓をいっぱい食べてるから胸があんなに……？ い

らん勘違いをしているメタグロス。

ポケモンの技をイメージした秘密基地模様替えグッズ、〇〇マットを作り出している会社から、同じ模様の掛け布団が発売されたのがメコンが使っているなみのリデザイン。

爽羽佳はそらをとぶ、ネリはネコにこぼん……覚えねーだろという突っ込みは受け付けていないらしい。かたくりこはむしくい、不良品じゃありません、こういうデザインなんです！

「早いっ、もう寝てしまったみたいです……おやすみ……です……」

いっばいねるから おっばいもそだつ

フニャ顔ランターンには寝ていても、しつかり声は届いたようでライトを数回ピコピコ点滅。

ジツクに発見されるまで眠りについていたが、いざ起きている状態から布団に入ってみれば、どうやって寝ればいいのか分からない。

真似をして目を瞑れば、フツ……とスイッチが停止したような、深い場所へ潜つていくかのような、外界へ連れて行かれる気持ちを感じたが悪くない。

(これが寝る……なるほど、こうやって一つずつ知っていけば……つよ……く……) なんて、どうするんだろう。

やせいとして、ひとぎとはなれたばしよで、いきっていけばいいのかな。

夏は夜、バルビートが仄かな光を月へとたゆたう、旧暦は文月。

彼女のフローチヤートには「強くなる」以外の記入は無い。これから見つけるのか、必要無いと無表情に下すか。

思いも寄らぬ会遇を果たしたジツク達と、感情表現が希薄なメタグロスの少女。

寝息は一切聞こえなかったが、メコンが朝ご飯を作り終えるまで、目を覚ますことは無かった。

Segment・trii——VSネリ

爽やかな汗が男女平等に、薄らと滲むミナモシテイは、百二十四番水道からベタつく潮風ではなく、船を気持ちよく動かしてくれる、サラツとした日方が七月の気温を和らげてくれるだろう。

「いけつ、ネリ！」

「ぴょい〜んつと！ ボールの中は快適だけど退屈ニヤんね！ さあ来いニヤ、メタグロス娘！ ネリちゃんに自慢のパワーを振るって見せるニヤ〜！」

帰るあての無い生まれたばかりのメタグロス、無機質無感情の戦闘メカかと思えば、メコンに完敗し「強くなりたいです」と明らかに悔しさの感情を露わにしていた。

それはポケモンとしての本能か、自我を確立しきつていない使命感からの訴えなのか。

「じゃあ行くぞ、ネリとメタグロス？」

強くなる為のプロセスとして、ジツクの下に身を置いて修行をさせて貰う。納得の行く強さが手に入るまではログハウスに、居候扱いとして世話になる。

ジツクも不安定な少女を放っておけず「強くなる為の努力をさせて欲しい」と、約束

したので最善を尽くさせて貰う。手持ちの皆も概ねジツクと同じ意見だ。

「では……………」

小柄だけど胸部だけは大人顔負けの蒼、情欲を刺激させてしまう衣装を好む黒、それぞれの右耳にはワイヤレスの超小型ハイテクイヤホンが取り付けられている。

デボンコーポレーションがお手頃価格で、看板商品の一つであるポケナビとセット販売しており、自分の手持ち同士を戦わせバトルや技の練習をする時に、指示が入り辛かったり互いに戦略が筒抜け前提で動くしかなかったりと、中々難しいご意見を解決させたのがデボンイヤホン。

ポケナビの機能は日々アップデートされており、ユーザーからの意見を反映し、欠点を克服したり、他企業では真似できないデボンならではの、ハイエンドでコアコンピタンスな技術が、すし詰めされたアイテム。

既にポケナビを購入しているユーザーにはサービスとして、ポケナビ付属のシリアルナンバーをメールに送れば、送料無料の即日配送でゲットが出来る！

(そこでコメントパンチ！ネリもわざと受ける必要はないぞつ、不利にならない距離を保つために右に跳ねろっ！)

携帯電話を早撃ちする要領で、ポケナビに後付けしたキーボードを叩き、打ち込まれた二つの電子信号がメタグロス、そしてネリのイヤホンへと音の壁を超過する速度で到

達するので、ポケモン達は反応に遅れることは無いが、トレーナーは相応しい速度で指示を打ち込まないといけないので、コツを掴むまでは練習あるのみ。

初心者よりもバトルを極めたい上級者や本格的に上を目指したくなった中級者向け。万人向けのシステムにするにはまだ改良が必要だが、初心者は「自分の手持ちと戦わせる」よりも、他トレーナーや野生ポケモンに相手して貰った方が、力を付けられるので別に問題ないという意見もある。

「了解ですつ、コメット……パンチッ！」

メコンとも戦った障害物などは配置されず、プレーンでフラットな五十メートル四方のバトルフィールド。

始めッ！ の、合図と共に何故だかジャンプした魚類系メイドさんは、ズッシリたつぷり、第三と第四の突起物が盛大に持ち上がってはバウンドを数回行い、鎮まったおっぱいよりもゴーグルがズレてしまった事を気にしている。

「うわ〜おッ!? あぶねーニヤ！ 当たれば確かに木っ端微塵ニヤ〜ね……」
「ええッ!? このフィールドすつごく頑丈で、ドサイドンやカビゴンが落下しても少し傷が付くくらいなのに……」

メコンとのバトルでは、相性の関係により繰り出さず仕舞いだったが、ジツクの指示によりメタグロスの代名詞、彗星のエネルギーを拳に集中させ、数多の彗星が流れ落ち

る勢いで殴りつける問答無用の主力技。

「避けられ……ました……」

一世を風靡し続けるメタグロスの一致技は、一定確率で自らの攻撃力を上昇させる効果を持つ。

ただでさえ攻撃力の高いメタグロス……高威力のタイプ一致技をぶつけられるだけでも脅威なのに、攻撃にバフが掛かってしまえば誰も耐えられない……そこで投了してしまつたバトルが全国中継され、あれだけのトレーナーと手持ちでも、そんな判断を下さざるを得なくなるのだと、中継を見ていた者達はメタグロスの超スペックに打ち震えながら、子供達には憧れのヒーローポケとして不変なる人気が右肩上がりとなつた。

（ドンだけの破壊力ニヤ……当たらなければどうとでもニヤいけど、一発でも掠つたらそのままネリちゃんも落ちるニヤ！）

（避け重視で行くぞ！ お前はメタグロスとの相性がかなり悪い、けど経験値不足が祟ってまだ攻撃を当てるのは難しい、その隙を突こう）

頑丈な床材にクレーターを作るパワー。

恐らく直撃を許せばネリを纏めて四〇五匹分は仕留められるだろう……

（メタグロス、キミの次の手は……）

二匹同時に指示を送りながら、ステータスチェックを確認。

これもポケナビに内蔵されている機能、無料アップデートを重ねて刻一刻と、変化を遂げる対戦状況が一目瞭然な優れもの。

コメントパンチのPPが少しずつ減っている、ファクションと機動性能を重視した結果、果衣装まで薄くしているネリは、ドーセ種族柄防御力は紙つぺらなので、やられる前にやれを地で行く速攻型。

で、あるが

「ん、ニ、ヤッ!？」

(また避けられましたか……マニユーラ種はこんなにも速い……なるほど、戦ってみなければ本当の力は分からない、物差しや電卓だけでは判断が出来ないのですね……)

攻撃動作に移っていたメタグロスの拳は、余裕を持って首を横に倒したが、拳圧によつてパーカーが吹っ飛びそうだった!

「ひエ……当たったら死んじやうかもしれニヤいなあ……おつけくニヤご主人、ネリちゃんも攻撃開始始い〜!」

「……………チツ」

「そこで舌打ちは洒落にならんニヤ!? こおりのつぶてー!」

当たつていれば倒せたのに、無表情のまま指示通り彗星拳を繰り出す少女は演出なのか、無自覚なのか、獲物を仕留め損なつた捕食者のように、深紅の瞳とリボンに埋め込

まれた深紅の宝玉を点滅させながら、遠く離れた位置に跳躍したネリを睨んでいた。

反撃に転じるネリは、小さな氷塊を一瞬で生成し、さも懐から取り出したようにメタグロスへ投げつける。

「……………」

形状はネリの好みで手裏剣を象っているが、低威力・高スピードの技としての性質には何ら影響しない。

指示に従い、とりあえず防御姿勢を取ったけど低威力の氷技、こんな物ガードするまでも無い——が、メコンのみずでつぼうで痛い目を見たので油断はせず。

「避けるだけでは勝てませんよ」

「当てなきや勝てないニヤ」

かたや一発でも命中すれば勝ちは確定するが、その一発が当てられない鋼超タイプ。

かたや動作の素早い技でチクチクと、ダメージを稼ぎながら圧倒的な回避性能を魅せる悪氷タイプ。

実は戦況で不利なのはメタグロス側。少量だが蓄積されたら大きな傷となる……塵も積もればナントヤラ。

ジツクとメタグロスの少女も分かっている、だからこそ避ける位置を計算させて撃たせているのだが、そう易々と読まれてやる程ネリも優しくない。

「んニャアア!! 脚を挫いたニャしいい〜!?」

「討ち取りますつ、コメット——」

身体を捻ってからの右脚軸ダツシユ——

グキツ、コメデイチックな擬音が響いた瞬間、蒼白く右手を煌めかせるメタグロスは、待ったのポーズを掲げるも聞き入れられず容赦なく、両膝を重ねながら涙目で許しを請うネリへと着弾させる。

が——

「……………マニユハツハツハツ! ネリちゃんは攻撃一辺倒じゃニヤいのニャ! チミは今通るはずだった攻撃が通らなくて、不機嫌な想いを微かに、でも確実に抱いているのニャ♪」

「……………ツ」

転んだのはジツクが命じた演技。欺くのは盗賊として生きてきたネリの得意技。

メタグロス相手に真つ向からぶつかり合う気など、ハナっから無い! 利用できる物は何だつて利用する! それがネリの流儀!

まもるといふ単純極まりない名称を与えられた技は、効果も単純極まりないが非常に強力だ。

あらゆる攻撃をシャットアウト、即座に繰り出せるので時間稼ぎの耐久型から、ネリ

のように一撃が致命傷に繋がる速攻型まで、幅広く愛用されているが欠点は連続使用が出来ない点である。

自分だけを覆うドーム状の結界を即時張る為に、多量な防衛エネルギーを消耗するので、ある程度時間を置かなければ拒絶反応が起こってしまう。

それでも一回使えただけで十分、二回目を使うまでに勝つ！

ドームが消える間に内側を蹴り込んで、いつ破れるか本人以外はハラハラ物な黒ビキニに守られているDカップが弛み、バク転しながらまたしてもメタグロスから三十メートル距離を取って着地する。

更生してからは投げ銭で暮らしていた事もあるネリは、アクロバティックな全身運動や、ジャグリングを始めとした曲芸も得意なのだ。暇を持て余していると氷の手裏剣をお手玉しながら、わるだくみしているぞ！

「あ・て・て・み・ろ・ニヤ〜〜！」

「……………」

精神的な揺さぶりを掛ければ、段々と真一文字に結んだ口を横方面へ開いていき、冷静な顔つきも次第に眉間に皺を寄せ険しくなっていく。

（彼女はまだ精神面も幼い、性格はれいせいでも場数が足りていないから崩れるのも早いんだ）

不思議な女の子だ。

機械的な言動に動作、ポケモンではなく本当に自我を持たないロボットと遜色なかった五分前。模擬練習の詳細を聞いている間も、深紅の瞳は何を見据えているのかも分からず、言葉を感じしたら反応するだけ、感情を封じ込められたマネキンのようであったのに。

(メタグロスツ、ネリからちようはつされているのは分かるだろ？ 焦らなくてもいい、平常心をしつかり持って！)

(わたしは……至って平静ですつ、早く攻撃の指示をください)

紫に桃色に毒々しいまでのモスグリーンなどのマニキュアで、カラフルに彩色されたツメを数度折り曲げながら、嘲笑の眼差しを向けられたメタグロスは、ジツクが指示をするも苛立つ感情をコントロール出来ず、”とある補助技”を実行出来ずに終わった。

ジツクが与えた指示を即座に反映させていれば、補助系統の技を封ずるちようはつの前に——を初使用だが出来ていたかもしれないのに……

イヤホンからの伝達は一方通行だ。

トレーナーからポケモンへはキーを媒体に言葉が通るも、ポケモンからトレーナーへはそれが出来ない。

彼女らがどんな気持ちになっているのかは直に判断するしか無い。

デボンの技術を持ってしても、心を見通すのは難しいのかプライベートを考慮したのか悪用を防ぐ為にわざと備えなかったのか……エスパークタイプならば【念話】という特殊能力でコミュニケーション出来るのだが、生まれたてのメタグロスがそんな高等能力を扱えるはずも無く……

「つぶてえ！　つぶてえ！　どーしたニヤーマタ娘？　勢い任せじゃ勝てるバトルにも勝てないニヤ〜よ？　このバトルはネリちゃんのもんニヤけど♪」

「くっ………防ぎきれませんっ……」

一発、一発当たれば勝てるのに！

その思いが先行して、ジックが打開する案を伝えても、彼女は命令を無視して小馬鹿にしながら氷の手裏剣をあらゆる方向から投げってくる、マニユーラを追い続ける。

（やっばこうなつてしまった……！）

もう技とも呼べない、何の効果も伴わない鋼の手甲による打撃。

「ほくれニヤー！」

「あウ、!?………」

ネリが持っていたのは古代の民の者が、国を治める王へ忠義の証として作らせたときれる——けど真相は謎のままなおうじやのしるし。

つむじへと正確に投球されてしまい少女の動きが停止する。

アイテムによつて様々な効力を得る、扱いの難しいわざ、なげつける。

おうじやのしるしは、結構手に入りづらいアイテムだが、ネリの自前である。特性がせいしんりよくでない限り、あらゆるポケモンを怯ませてその隙にやりたい放題、盗み放題、これもネリのお芸当。

「マニユハハア！ 岩石も靈魂もバラバラに引き裂くネリちゃんスラッシュュー！」

バトル初心者相手にだつて容赦はしない、そういう約束なのだしジツクも二匹を勝たせる為に指示をしているのだから。

「——うアアツッ！！~~~~ツッ！！」

きゆうしよに あたつた！

怯みから覚める前に切り払われたメタグロスは、何が起こつたか理解出来ず反射的に斜め上へ、爪痕を刻まれたブレザーベストを押さえ込む。

血液の代わりに磁力が身体を巡る少女の脇腹から、雷雲を連想させる物質がバチバチと吹き出すも、グロテスクな代物では無くサファイアよりも綺麗な蒼に染まる粒子であつた。

彼女達が人の身体を手にしながら、人では無い明示的なまでの立証である。

彼女の身体中に滾り、構成しているであろう蒼が付着した爪を舐めながら、一撃でキメる予定で無防備に突っ立っている少女の脇腹を狙わせて貫つたが、体力ゲージを黄色に留めているじゃないか。

「ネリちゃんのおつじぎりを急所に受けても、倒れこまニヤいとは。まあ予想の範囲内だけどニヤ、あつ！ この蒼いの結構美味しいニヤし！ ペロペロ♪」

「くア……つう……！」

鋼タイプなので防御力には自信がある。

その性能を完全に引き出せてはいないが、未成熟な状態でもコレだ。

秘められたポテンシャルの解放が待ち遠しい、そうなたらネリは勝てるだろうか？ 彼女の事だから誰が相手でも「負ける気は無い」と言い切るか、ヘタれるフリをして油断を誘うか……どちらにせよ、このバトルはネリが支配した。

（深追いするな！）

（で、ですが……ッ！）

聞こえるわけ無いのに抗議してしまう。

指示を素直に聞かず、途中から完全にオート戦闘となってしまう、少女の判断に任せられなくなってしまう。

ジツクのトレーナーレベルが低いのではない、シンオウやイツシュなどの各地を旅し

て、政府に貢献しながら大きな事件の解決にも一役買った少年だ。

物静かで感情に左右されない印象を与える容姿と心を持つているが、戦いとなれば負けん気が強く素直に従わないのは、精神面も未成熟だからだろう。

それか彼女の性格の問題か……

「覚えとけニヤ、メタグロス娘？ 感情を剥き出しにしてもいいんニヤけど、百で染まるのはダメニヤ。一でもいいから冷静な自分が居ニヤければ——」

「いっつ!!」

「敵対心が警戒心を薄れさせちまうのニヤ！ つじぎり！ 五芒星ver!」

「あああああああつ!」

「……うっくん、ネリちゃんカツコイイ〜!」

脱兎する勢いで逃げ回るネリが、柵に衝突寸前でターンし向かい合う形で交差、メタグロスは攻撃のチャンスだと捉えるが、ここは防御態勢に入るべきであった。

ジツクはそのようにイヤホン越しに指示を、思わず口で叫んでしまいそうな程に身を乗り出していたのだが遅い!

黒い紐下着、三角形の幅やV字がショーパンからはみ出しているもお構いなし、足払いと言う名のローキックを受けて、すってんころりん、メタグロスのミニスカートが……翻らない!

まさに「鉄壁ガードの女の子」

……まあ、人化した現状なら、パンチラ対策も大事なかもしれないが。

ちなみに下着は練習が一段落してお昼ご飯を食べてから、ミナモテパートに購入する予定だ。ていうか今の彼女穿いてないし！

扇情的な口リボイスで喘ぎ……いや、喉が締め付けられる悲痛に帯びた叫びと共に、悪魔崇拜の象徴である逆向きになった五芒星型の刻印が制服に切り刻まれる。

刻印パターンは何個か持っているが、どれを食らってもダメーヅには影響しない。元盗賊なのに目立ちたがりな彼女らしい遊び心だ。

「ハア………ハア、ハア………まだ………です………っ!？」

「もうおくしまいニヤ！　そーいうルールニヤし♪」

ギリギリで堪えている、ステータスエツカーで表せば赤ゲージ耐え。

バトルはまだ終わっていない………とりたいが、どちらかの体力が赤になったら止めるルールなので、メタグロスの首に鉤爪を当てながら、降参を催すネリ。

「………わかりましたっ、わたしの負け………ですっ………」

「あー、後もう一個教えとくニヤ。チミは一時的とは言えマスターを得た訳だニヤ、自分だけではどうにもならないのを助けてくれるのがマスターニヤ、ご主人はどっちも勝たせるつもりで指示を与えていたんニヤから、しっかりと指示は聞くものニヤ♪　命令

無視してたら本当に勝てる物だって零しちまうニヤシ」

「……………真摯に……………受け止めます……………」

反論の余地は無かった。ジツクの命令に背いていなければ結果は同じでも、後悔はしなくて済んだ試合であつただろう。

卵のツルツとした質感を持つ肌、お腹周りを逆五芒星型に露出させながら、蒼い手甲を地面に力無く打ち付ける。

機械人形では無い、幼い少女らしい一面を見られて、実はここに居る誰よりも起伏が激しく豊かな感情を持っているのかもしれないと、すごいきずぐすとPP回復系のアイテムで処置をしながら推測するジツク。

メコンの料理を食べても無反応だった少女が、バトルでは呆気なく乏しかったハズの感情が露わとなる。彼女と仲良しになるには、バトルが鍵を握っているのかもしれない。

そう、彼女はまだ不安定なんだ。

(……………まだ彼女が俺のポケモンになると決まってるけどな……………)

ジツクに手当をして貰う間、悔しさが収まったのか再びふぶきで氷漬けになった表情に戻ってしまった。

ペコツと、ツインテールと一緒に可愛らしく頭を下げたが、形だけであの時と同じく

誠意が欠片も無い。彼女はこういう子だと分かったので、気にはしないが。

「少し休憩するかい？」

「いえ……大丈夫です、戦えます」

ジツクと目線を合わせているけど合わせてない。

まだまだ心の距離感は遠い、命令を無視されたのだから彼女のせいだけではない、自分の努力不足が原因でもあると分析している。

彼女が暮らすようになって、まだ二十四時間も経過してないので仕方は無いが、少しずつでもいいから縮めないと頭打ちになってしまいうだろう。

「これは俺が指示した訳じゃないけどさ、肌が見える形になっちゃってごめん！」

「……………」

指摘されて気がついた少女は、視線を落とし胸以外は幼児体型に近い彼女の、若干山になったお腹ライン……所謂「イカ腹」を一目ただけで無言のまま立ち上がる。

女性への配慮として目を逸らしただけ、ジツクは損をってしまった。実はもうちよつとだけ眺めていたかった……健全な少年である。

例えスカートの中身が見えようが（穿いてないけど）、ご立派な胸を晒されようがノーリアクションである可能性……無きにしても非ず。あの叫びは痛みが走ったからであり

……

（一見するとネリちゃんはノーダメ勝利ニヤ……けど、最後にあのメタグロス、防衛本能からか反射的に技を繰り出していたんニヤ！）

ギャル友である爽羽佳とバトンタッチ、立て続けにメタグロスとの相性が不利だが、何とかやってくれるはず。

肝心のメタグロスは気がついてない、ネリの爪がボロボロである事を。

ブ厚い装甲に攻撃を入れる度に、マニキュアが剥がれていき最終的には、爪自体がポロツ……すぐに生えてくるけど物哀しい……塗り直さなければ……

（ダメージ自体は受けてニヤいけど……なんだかニヤあ、ノーダメとは言えないニヤ）

お尻から転倒したメタグロスに接近する際に、彼女の瞳が一段と輝きを増し、鋼の他にもう一つ備わっているエスパーの主力技、強力な念力を能動的に巻き起こし地形や射程を選ばず攻撃できる、サイコキネシスを無意識の内に使用していたのだ。

悪タイプにエスパー技は効果無し。

入門トレーナー以外は誰だっけ知っているこの世の摂理。ネリを止める事だけを考え、脳内に警報がけたたましく鳴り響いていた彼女は、タイプ相性などすっかり忘れ反射的にサイコキネシスを浴びせた。

ダメージは無い……が、真の目的はネリの腕部を制御しつじぎりを反らす事。

皮膚に覆われない部分、搔つ捌く為に伸び行く鉤爪のみに食らわせたが、初めて使った影響からかパワーは軟弱で反らす事は失敗。

原色からパステルまで不規則に塗るのも魅せテクらしい、マニキュアを施した爪が砕けたら人間であれば、痛いの一音では済まされぬ。激痛のあまりそのまま死ぬだろう。

それを「痛いニヤ♪」で済ませちゃうんだから、やはり彼女達は人間ではない、れっきとしたポケモンだ。

(もしかしてメタグロス娘、戦闘を重ねれば段々と覚醒して、技が使えるようになるのかニヤ?)

Segment・tri——VS爽羽佳

傷は癒えたが制服は破けたまま、戦闘には差し支えないらしいのでラウンド二の開幕だ。

（今のわたしは弱いです……ですが戦わなければ経験値が入りません、演算と実践では何十ものズレ、ブレが生じてしまうのだとメコンさん、ネリさんとの戦闘で理解しました。………今度は負けません）

（なんかめっちゃやる気満々だし！こりや全力で行かないと覆されちゃうかもねえ）

表情こそ取り繕ったままだが、脇を締めて拳を構えるファイティングポーズの少女は、どこか鼻息が荒くなっているというか負けられない意思が今までより強い。

鼻息を荒げようがフンスツ……！ キュートでロリな雰囲気なのも変わりなし。

メタグロス種だからと下に見ていたランターンにマニユーラ。立て続けにノーダメ敗北し自分は弱いと余計なバイアスを掛けず素直に認めて、格付けを組み替え直したのだろうか。

赤い鶏冠を下ろして右目を完全に覆い隠す「メカクレ」属性を新たに所持したオニド

リルの少女、爽羽佳だって、普通に考えたら、自分の圧勝のハズ。

だがその考えは通じないだろう、マスターの前に半分と付いてしまうけど、自分を預かって強くすると約束したジックの手持ちなのだから、自分の方が勝ち目は薄いくらいだ。今回こそ秘めたる力を発揮させて勝利を手にしてみたい。

「オツシ！ 準備完了〜！ かたくりこ〜お願い〜！」

明るい明度を持つ茶色、仄かに黄色かかった象牙色、二色の翼を広げながらイヤホン
を耳に差し込む。

「ミノノミノ？ ミ〜ノ！」

多分『合意とみていい？ ヨーイドン！』

……なフィーリングなのだろう。かたくりこがジャンプからの着地した瞬間、バトル
スタート。

「飛行タイプの利点は地面技を無効に出来る、だけじゃないって教えてあげる！」

（上空から攻撃を仕掛けてくるぞ、メタグロス、キミが覚えている技の中に………が
あつたけど出来そうか？）

火蓋を切つて落とされて早々、飛翔した爽羽佳はメタグロスの攻撃範囲から離脱。

公平を期す為にジツクからは、メタグロスの所持技を教えて貰っていないが、獲物は近距離にししか届かない手甲であり、彼女が使用した技も近接に関連する物ばかりだ。

メコンとネリのバトルを観戦していたから、今まで使用した技どれが出て来ても、何とかしてやれる自信はある。相手の攻撃を食らわない空の領域は、地べたの面積の影響を受けない飛行タイプが持つメリットだ。

「卑怯じゃないかねー！　飛行タイプの戦い方ってこんな感じだかねー！」

急降下、造波抵抗や摩擦抵抗で身体が熱くならないライダースーツに付属する、蹄を意識させていたライディングブーツが目にも止まらぬ早さで、微妙に湾曲しつつ細長く、先端が尖ったシヤムシールやシヨテルにも似ている形状に変化していた。

「グロスちゃんが拳なら私は蹴りだよ！　ドリルくちばし！」

「……ふッ！」

本来の姿の嘴に見立てた鋭利なブーツを軸として右回転、遠心力を利用し螺旋状に生まれ変わった爽羽佳が、メタグロスの少女目掛けて後方から低空突撃。

（いい動き、サイコパワーを駆使して軌道を読まれた？　んんっ、彼女はエスパ―技覚えているけど使わなかっただけなのかな？　ネリは悪タイプだし）

どうやらサイコネシスの件は、直に食らった本人と指示を与えていたジツクにしからぬらしい。

エスパ―技が使えたとすれば厄介だ、射程外からの一撃離脱で削る以外に自分が勝つのは厳しい。

射程を選ばずに攻撃が可能ならば、飛行手段が意味を成さなくなり旨味が消える。

「……………」

「おおっと、逃げさせて貰うよ！　こうそくいどう」

地上に降り立った隙に少女が、拳を振り上げる……前に羽をカーテンのように撒き散らしながら上空へと向かい出す。

身体のを抜いて身も心も軽く、素早さがぐーんと上昇するだけでなく、緊急待避にも使える技は専用のビデオカメラでなければその姿を捉えきれない。

公式大会などではあまりにも高速で飛び回るので、停止しているようにしか見えないテツカニンですら視聴者の肉眼に収めることが出来る、大変金の掛かった大経口・大解像度のカメラが必要なのだ。不正を暴くためにもしっかりと記録に残すのは重要なのだ。

「……………こうそくいどう」

「ぬ、あへ、えッ!？」

次の攻撃に移る為に上空へ留まっている爽羽佳の真下から、ジェット戦闘機のエンジン音が聞こえて思わず、美少女が発してはならぬ色気無縁な妙ちくりんボイスが素で飛び出た。

（あの子のステータスを調べてみたら。野生とは思えないくらい技が豊富だった。上手く発動出来たらいいな！）

ポリューミーなツインテールを絞る形で装着されている、六角形のブルークリアリングから毛先に掛けて、少女が爽羽佳と同じ技を咥けば蒼白い光りが噴射し、飛行タイプと互角に渡り合える推進力を手にするロケットブースターに変化していた。

メタングの時点で地球との磁力反発を利用し宙に浮かび上がり、最高時速百km/hの空中疾走が可能である。

メタグロスである彼女はより高速に、磁場が発生する空間であればそれを燃料に変換、推力を発生させて超能力を使わずとも遠く離れた相手へ瞬時に接近でき、何処へ逃げようが彼女の攻撃範囲にもなる。

「かみなり……パンチ」

まるでイツシユ地方の「白陽伝説」に語られるレシラムの尻尾、蒼き炎を思わせながら光沢感もある粒子を纏わせ跳躍した彼女は、自身が彗星になったかの如く絢爛なるライオンを曇り無き海空へ射す。

「また私が見てない技あ!? ひゃあつ!」

「れいとうパンチ」

「のわあ、あ、あつとお!! なんて私の弱点ばかり使ってくるのお〜!」

「……………今までのバトルでは使う機会が無かったただけですので……………弱点を突くのは極めて効率的で論理的だと思いますが」

自分と同じ技を使われて後方から迫るメガグロスは、電撃を込めたパンチを右腕から、冷気を込めたパンチを左腕から繰り出す。

飛行タイプとその他のタイプが、飛翔、または浮遊する際の違い。

飛行タイプは特別に技を使わずとも、生まれながらに備わっている翼を使えば重力から解き放たれて、自由を手にすることが出来る。

願っても願っても、飛行手段を所持出来ない者からすれば、飛行タイプと言う時点で恵まれているのだ。

おおぞらは おまえのもの

まいあがれ そらたかく

いまこそ かぜつかむとき

昔、爽羽佳が好きだった絵本で、特に印象的なセリフはずっと忘れない。

そのセリフに憧れていたから狭っつい田舎などで、一生を過ごすくらいなら焼き鳥にされた方がマシだった。

無理を承知の上で我武者羅に突撃、そのトレーナーが……

「つてー！ 回想してる暇は無いですケドー!!」

「かみなりパンチ、れいとうパンチ、かみなりパンチ、れいとうパンチ、かみパン、れいパン、かみP、れいP……………」

几帳面なまでに交互の属性パンチに潜り込むようにして、耳をつんぎく爆音がメタグロスの後頭部から生じて、消えて、また生じる。

彼女は翼を持たずに飛行手段を手にした種族。

しかし生粋の飛行タイプである爽羽佳が、技を使わずともフライト出来てしまうのに対して、メタグロスは「常に技を使わなければ飛行出来ない」

ポケモンは余程のイレギュラーを除き、何らかの技を繰り出している最中に別の技は使用できない。

なので、攻撃技を使用する際には、飛行手段となっているこうそくいどうを自己キャンセルしなければ攻撃には移れないのだ。

(アヂ、ッ!? 弱点とは言えカスっただけで……)

まさか空の領域まで侵入出来ないだろう。

爽羽佳の思惑を呆気なく裏切ってくれた少女は、見事に飛行手段を手に入れたが如何せん初使用なので、ピッチやロールなどのコントロールにまだ課題はある。

それに加えて爽羽佳に追いついても、飛行手段を解除しなければ空中での攻撃が不可能なので、まさに落ちながら攻撃するしかない。

メタグロスは悪条件の中で、姿勢制御の感覚を迅速にメモリに記録させフィードバック、素早い種族柄ネリ並のスピードは無い爽羽佳の動きに付いていけるようになってきた。

「ほオ……りやアアツ！　せえつ！　りやア！　そう易々と食らつて、あげない！　よ
ッ！」

「……………」

パンチを繰り返される度に練度が上昇していく。

初撃こそ驚いてしまいギリギリで避けたけど、別段勢いが無く二撃目のれいとうパンチでも、また私の弱点技だよと喫驚こそしたが、氷塊が掌に集まっていると察せたので予め回避の動作は作れていた。なので見た目と逆に内面ではクールに対応できていたのだ。

（キミの肘や掌を蹴り、及び突くことで攻撃を逸らせて来る。だが爽羽佳には少しずつダメージが通っているぞ。直撃した訳じゃ無く纏わせていた冷氣や電撃が、通り過ぎただけで……キミの攻撃力って本当に凄いなだね……）

（……………早く指示を）

褒め言葉のつもりだったのだが。

ジト目で合図する少女は、目の前のオニドリルを倒して勝利という揺るぎの無い結果

を得て、メタグロスたるプライドを取り戻し——後は、何かがあったハズなのだけど
……

(なぜ、わたしは、強さに拘っているのでしょうか……?)

四つものブレインが内蔵されている少女は、自分が求めている物へのブーツを探りつつ、爪先が嘴に可変したブーツによる、みだれづきをジツクの指示に大人しく従って、装甲で全てを受け止めた。

カンツ、カンツ、カンツ、カンツ、カキンツ

五回当たったが、鳥だけにダメージなど雀の涙。無いよりはマシ程度。

「メツチャ硬いしく！ 相性最悪なのは分かってたしいく！ 諦めんなあくもういちようツ！」

ノーマル・ひこう。

どちらも鋼を大の苦手とするタイプ、メタグロスが例えばメコンと戦った時と同等の戦闘力しか持ち得ていなければ、どうとでもなったけど……

「……………つ、ハアツ……………」

今の彼女は明らかに強くなっている！

たった二戦を終えただけで、見違えるほど冷徹なる戦闘マシンと比喻されるポテンシャルを引き出しながら、場数では圧倒的に上である爽羽佳を押ししている。

「やっぱダメえー！ 一点に集中して穴を開けるのは無理だこりゃ！ ご主人どーすんの？ 私に勝ち目ナツシン……？」

後方へ振り返ると同時に、後ろ蹴りの要領でみだれづき。

落下するメタグロスに飛びかかる勢いで繰り出すも、手甲を横へと払われ突きが弾かれる。

地上へと激突する一メートル手前で、再びこうそくいどうを使用して、ツインテプースター（ネリが勝手に名付けた）も作動、上昇する爽羽佳に一步も引かぬ速度で追われる側が、追う側に。

（これで、こうそくいどうのPPが切れてしまった……次の手はネリとのバトルで無意識に繰り出していた——）

ポケモンは無限に技が使える訳では無い。

どんな技にも「使用制限回数」があり、強力な技ほど消耗が激しい。

休息すれば次第に回復していくが、バトル中にPPの回復は出来ないの、何としてでも全てのPPが切れるまでに決着を付けなくてはならない。

わるあがき、なぐんてしているポケモンの姿は、誰も見たくないからだ。

「……………ハッ、ハッ……………ハア……………」

「ゼー……………ゼー……………ちよお……………マジ、シンド……………はあ……………」

メタグロスのこうそくいどうが、使えなくなったと同時に、箱庭フィールドへ降り立った爽羽佳も息を切らしており、今にも立ちくらみを起こしそうに鶏冠で隠れた、右目付近を手で押さえている。

ちなみに胸はほつとんど揺れず、ジツパーの隙間から東半球と西半球がコンニチハする事も無い。

メタグロスも疲労はあるが、高速で滑空しまくった影響からであり、ステータスチエツカーに記されている体力ゲージは、まだまだ全然余裕だ。

ちなみに胸は深く呼吸をする度に、「攻撃力とはこういう物だ」と、ロリでありながらグラマラスボディ、五百五十シ級おっぱいを上下へと揺さぶらせている。地震が使えるだけに震源地……ココニ在リ。

(鋼……ズルい……タイプ相性……修正して……)

どのパーティにも一匹は欲しい、それが最大の耐性数を持つ鋼タイプ。

ズルいとオニドリルだけに、囁つてしまう爽羽佳の気持ちに共感する者は多いだろう。

打開策は増えたけど持たないポケモンは、本当にどうしようも無くなり所謂「詰み」に陥る。

(あるっ！ 爽羽佳には一つだけ鋼に有効な技が！)

彼は二人の少女に指示を与え、二人の少女を勝たせるつもりで案を練る。

優位ではあるが笑みは浮かべない、そもそもが無表情であるが……

スピードでは爽羽佳に分があるので指示を待たずともなく、選択する技は決めているが——

(……………)

ネリ戦であんな事になったので……このバトルではジックが命を下すまでは何もしない。

バトルでは独断で動かずに、大人しく彼に従った方が最短距離を辿って、強さに直結するだろうと合理的な演算処理の結果をブレインコンピューターで、導いたから。

強さを見て、強さを知り、強さを盗めばいい、それまでの辛抱であると言いついて聞かせて。(サイコキネシス！)

天翔る二道の翼を撃墜するつ、血の気の通わぬ少女が鮮血よりも深紅の瞳を煌めかせ、少女の意思により組み立てられた不可視の超念力。

「キヤア！ これってサイキネツ!? あ、あ、ッ——う、ぐッ！」

上空二十メートル地点の爽羽佳に命中!

片側の羽を丸め身体を覆う防御姿勢を作る——のをジックからの指示が飛んできた瞬間に取り止め、キーとなる攻撃への布石とある技を使う為に、タイプが一致した

エスパーの最メジャー技をド直球に受けてしまい、墜落。
(爽羽佳っ！)

(い。ッ……………たいっ……………しい……………けど、しゃくなしっ！ 私がメタ子ちゃんに勝つ方法って、ソレしか無いんだもんっ！)

かなりのダメージを受けたけどまだまだア…………

オニドリル最大の持ち味は、一度飛び立つと丸一日降りなくても平気なスタミナ。

瞬発性はネリやムクホークにオオスバメなど、やたら強く恵まれた才能を持った後輩共には譲ってあげるけど、逆境にも屈しない気合い！ 気合い！ 気合い！ の三K！

これだきやく譲れない！

スポ根論だけど耐えられないハズの攻撃ですら、見た目を裏切る持久力から変換したミリ耐え、リアルタスキ状態で踏みとどまって何度も逆転してきた。

「サイコキネシス…………」

(見えない念波へ飛び込めッ！)

エスパーや極一部のポケモン以外は、視認不可能な波打つ念力空間が届く前に——
「自ら技の中へ…………」

ヒット&アウェイ、一撃離脱が主な戦法だけど

近い場所まで運んでくれるんだから、地に吸い寄せられ吸い上げられる地面属性付与の技が命中する。

地面から力を借りる爽羽佳のドリルライナーは、対象が地に脚を付けていなければ効果が無い。

なので相手が空中に居ては発動したくても出来なかつた。

まずメタグロスのこうそくいどうが使えなくなるまで耐える、飛行手段を失ったならば自分次第だ！

「……………!?」

避ける事は出来ない。サイコキネシスから次の攻撃へ移るまでにはラグが生じる。

キャンセルし、胸の前で両肘を重ねて防御の姿勢をジツクの指示に従い、先読みの如く早さで作り上げた。

爽羽佳にこの手甲を砕く事が出来るのか。

いや、彼女の外装甲は傷一つ付かなくてもいい、一発逆転の狙いは――

「ツ、ツ、――これっ、は、――」

内面への干渉だ。

「ツ、――ああああ、あ、あ、あ！あああツ、――!!」

きゆうしよに あたった！

空中へと突き出された少女は、動力コアに亀裂が走ったとまで思わせる痛みが内側へ走り、受け身も取れぬまま仰向け姿勢で落下した。

一方、爽羽佳は起死回生の一撃がキマって、鋼の重鎮を赤ゲージまで減らせた（ルール上の勝ち）高揚感で頬を緩ませながら、あざといまでにギャルギャルしいまでにハングルース！

そして三点着地……するも、上体が倒れかけてしまい、羽を飛ばたかせて女の全財産である顔を、地べたにキスさせるのは避けたけどポロポロだ。

「きい……わどいけど私の勝ちイ！ ご主人を信じていれば不可能も可能となるのだ！ ……あつ、も、ダメ……横にさせて……オウフツ……」

メタグロスと並列する形で仰向けに倒れ込む。彼女の言葉通り、ルールでは爽羽佳の勝ちであるがギリツギリ。

雀の涙であつたみだれづき、つつく。

僅かながらでもダメージを稼げていて良かった……アレが無ければドリルライナーを急所に当てても確定で耐えられていただろう。

「……………カハツ、かひゅ……ッ！ 「運が良かった」……の、一言だけでは片付けられ

ませんでしたね……立派な戦略……ですつ……」

急所に当ててしまえば、鋼の要塞であるメタグロスでさえ、外壁を貫通されて内側へとダイレクトに軽減不可ダメージが入ってしまう。

チタニウム合金を遥かに上回る材質によって、積層構造となっている手甲、及び全身防護ですら無力！ 鋼タイプだって内側に大ダメージをぶつけられたら、痛いじゃ済まないのだ。

「打ち落とされたのは、きあいだめを使っていたからなんだ。気合いを溜める事によって急所に当てる確率を上げる技。そして爽羽佳の特性は通常の、するどいめじやない……急所時のダメージ大幅増加のスナイパー」

メタグロスの少女は、生まれてから三戦目のバトルである爽羽佳戦で、ジツクも「彼女は頭が良いから、実践データを反映させて自己能力を覚醒させている」だけでは説明が付かない程に、突然の強さを手にして爽羽佳を押ししていた。

タイプ相性？ それもあるが技の出が実にスムーズでメコン戦、ネリ戦で少なからず感じていた不安感が何も無かった。

初の電磁高速移動も最初こそ、ぎこちなさが残り攻撃を当てられなかったが徐々に、修正していき超短期間で攻撃を掠らせ、飛行タイプと互角な空中戦闘力を魅せつけてくれた。

メタグロスが突如として強くなった理由は———なのだが、今は本人もジックも気がつかない。

「なる……ほど、所有しているアイテムは……ピントレンズ、ですね……」

「そだよっ……きあいだめや私の特性と……相乗効果になるんだってさあ……」

下地が整えられた“運の良さ”

単純にドリルライナーで突撃しただけでは、いくら弱点と言えど呆気なく耐えられて返り討ちにされていた。

極限まで威力を高めるには、急所に当たりやすい技とアイテム、急所に当てればダメージが跳ね上がる特性をシナジーさせるしかなかった。

それでも耐えられたら潔く、貴女の方が強いと賞賛の言葉を掛けるくらいは、ジックや皆と旅してきた爽羽佳にとって難しい事じゃない。

「キミが正式な手持ちじゃないからって、俺は鼻肩してないからな？ どっちも勝たせたかったんだから」

「……………ハイ、ですがわたしの負けと言う結果は変わりません……」

まんたんのくすりは高価、ピーピーエイダーは非売品であるが惜しみなく少女の回復に役立てているジック。

回復アイテムは消費期限が非常に長持ちするので、溜めるだけ溜めておいている。

それでも少女が戦い終わる度に、体力回復系の薬は兎も角として、PP回復系のアイテムを使っていたら予想よりも早く枯渇してしまうかも……ヒメリのみも同様で、大量に所持しているけど有限では無いし。

ネリにお使いとして、木の実夫婦から購入して貰おう。

「でもさっ、得るものはあったでしょ？ 負けは恥じる事じゃない、何かを得られるのが重要なんだ。結果は大事だけどそれ以上に中身の方が重要さ、得るものが無い勝利は空しいものだよ、得るものがある敗北の方が価値はある、学べることがある……俺はそう思ってるよ！」

「……………」

得た物……たくさんある。

磁力を利用したブースター使用による飛行。

段々と攻撃が当てられるようになった。

覚えている技の一覧には表示されていなかったサイコキネシスを、境地に立たされた本能からか覚醒させた。

理由は不明だけど……自信を持って戦う事が出来た事。

「……………その言葉、わたしのメモリに記憶させて頂きます。負けと言う結果に関して、あまり良い気持ちにはなれませんが」

ジト目でいぶかしげな語調だが、一理くらいはあると認めている。

負けはした、それは覆せぬ事実で掌から磁力を暴れさせて、表情変化の代わりに気持ちを表現させているが——次にメコンやネリと戦えば善戦、もしくは勝利できるかも知れない——とすら思えるようになっていた。

「さっ、今日の練習はこれで終わりだ！ おやつじゃないんだけど、お〜いかたくりこ〜！」

「ミノッ！ ミノミノオ〜……………ホッホッホオ〜♪」

歩いているだけで、つらりと汗が流れてくる気温の中で激しいバトルを繰り返し、動き回った身体からはドッと汗が吹き出ている。

冷蔵庫で冷やしていたポロツクケース、ポフィンケースを突起に乗っけながら、器用に跳ねているゴクリンフェイス。

焦がさず零さず、ポフィン作りの達人に短期間だが弟子入りして相当扱かれた、過去の経験値からレベルを高めつつ、滑らかなポフィン製作が出来るようになったジツクだが、最大四人までポフィン作りに参加出来る為、一人だどれだけ頑張ろうと四人で適当に製作したポフィンの方が美味しかったりする……

「ご主人つたら気が利くう〜♪ すっぱいのいったきい〜！」

「マニユハハハ！ ネリちゃん嫌いな食べ物にニヤいけど、冷たいお菓子は見逃せない

ニヤンね！ からしぶは大人の舌触りにやし♪」

「私は……こ、こつてりしたあまいポフィンを買います……一つだけ、一つだけならいいですよね？……／＼／＼」

「ミノホツホオ〜！ ミノミノオ♪」

各自が好む味と形のポフィンを手に取り、ポフィン仲間と試行錯誤の末に生み出された、オリジナルブレンドのレシピ。

チイラやリユガなど、幻とさせ呼ばれている希少種を惜しみなく使った物。

低予算で誰でも手に入れられる、売り物の木の実だけでも「こんなに美味しく作れませう」と、PR出来る完成度を誇る物。

くどいくらいに甘ったるい物、食べた瞬間かえんほうしやする辛い物、ゴンベもビビるすっぱい物……美容と健康を最優先した物まで様々な種類を揃えている。

ちなみに……各ポケモンのせいかくは

メコン↑おっとり

爽羽佳↑ようき

ネリ↑ようき

かたくりこ↑のうてんき

メタグロス↑れいせい

であるが、必ずしも対応する味が一番好きになるわけではない。

例を挙げれば、メコンは渋い味を持つポフィンやポロックが好きなきせいかくと、一般では知られているおっとりだが、どちらかと言えば渋いのは苦手で甘い味が大好きである。

「メタグロス、キミも食べないか?」

「わたしはいりません、摂取する必要がありませんので」

『俺は疲れてないけど、ポロックも頂くぜ!』

あの口でどうやって噛み砕いているのやら、子供だからいっぱい食べるのはお仕事のよな物。

アグアグしてるかたくりこは、食べ過ぎだが……一切手を付けず体育座りしている少女へ、ケースごと持って行くが無愛想な表情で、ひんやりポフィンよりも冷めた発言を投げられてしまった。

「稼働エネルギーは一日三食の食事です。過剰な摂取量となりますので口にはしません……シャワールームを借ります、その後はバルコニーでシミュレートを繰り返します……では」

味や形どうこうではなく、必要が無いから食べないだけ。

少女らしい合理的な理由だけでも……バトルが終わってしまえば協調性に乏しい、口

ボットよりも感情が通らない少女へと戻ってしまふ。

「……わかった、お疲れ様メタグロス」

労いの言葉にも無反応なのは、流石のジツクもおいおいと腕を組んでしまふ。

非共存的とまでは行かないが、コミュニケーションを自ら取ろうとしない。必要のある物だけ、必要なシチュエーションでのみ、最低限を交わす。

ジツクや皆は彼女をもっと知りたいのだけど、その瞳に心は鉄壁ガードされてしまつて、笑顔どころか会話のやり取りを続けるのすら難しい。彼女と出会つてから喜びの感情が浮かんだ時がない。

(まあ……まだ一日足らずだしな、俺の指示を聞いてバトルしてくれただけ上出来、と思うようにするか)

少女が答えを出すまで、一度でいいから喜ばせてみたい——案外、早くその時が来るとは思わなかったが——

(あのお、ジツクさん……あの子のそのつ、スカート……覗いてないですよね／＼)
(ないっ！ アルセウス様に誓つて！ スカートの中身は見えなかったし見てません！)

午後にはミナモデパートへお買い物しに出かけるまで、メタグロスの少女は「つけてない はいいてない」

こうそくいどうで空中を飛び回れば、そりやあ簡単にミニスカートの中身なんて拝めてしまうかもしれない……が、不思議な力が働いて「ツインテールが都合良く局部を隠した」ので、成人向けの描写は回避した。

バトル真つ最中の爽羽佳はそれどころじゃない、ジツクは最新の注意を払っていたが、ツインテガードで事なきを得て（こうそくいどうの指示を下して暫くしてから「やべえ！」と気がついた……）

メコンは はないてない 少女を祿に見れず俯きながら赤くなり、ネリとかたくりこは少女の姿を追う内に「そういえば、はないてなかつた」事を思いだした。

肝心の本人に関しては、そもそも下着の必要性を全く理解していないので、痴女も顔面オニゴリーとなる清々しいまでの風通しの良さである。

Segment・trii——危険な女

ホウエン最大のショッピングモール、ミナモ百貨店。

売り場面積はホウエンで堂々の一位。

専門店が四百以上、年商・売り上げ・総合評価は二位以下に大差を付けて、「おいでよっ！　ホウエンの地！」なる地域の魅力を伝える番組では、確実に紹介される。

タمامシデパートやコガネデパート、トバリデパートとは永遠のライバルで、年々切磋琢磨しながらお互いを発展しあい、時には協力して新商品を生み出しコラボするなど、他地方とも良好な関係を築き上げている。

あえて気になる点を（無理矢理）捧げるならば、あまりにも巨大すぎて初見でなくとも迷子になってしまいやすい点か。

ちよつと覗き見、ウインドウショッピングだけのつもりが、いつの間にか財布の中身がフワンテ状態。

数多の誘惑が待ち構えている悪夢の巨城なのだ……間違っていないのがまた。

それだけ品揃えが凄くて遠方から買い物に訪れるなど、重宝されているつてコトです。

(メタグロスさんのお部屋を彩るインテリアや、生活雑貨は買い揃えてジツクさんが運んでくれました。次はいよいよ……)

少女をメコンに任せて、ジツクは荷物と共に一足先に帰還している。

理由は……男性が何の役にも立たなくなってしまうからだ！ ねっ、分かるでしょ。

Hカップの青いメイドさんの隣では、チマツとした擬音が鳴り、歩行の度にトテトテ足元から効果音が聞こえてきそうな蒼い鋼の少女。

胸の自己主張は生意気すぎるまま、様々な商品や激レアなポケモン故に浴びせられている視線の渦など、全く気にせず何を考えているのかも分からないまま、無言で目的の店を目指す。

本人はやつぱり「必要無い」と短く言い切ったが、女子である以上——男子でもそれは不味いのだが——絶対に必要あると、三人の女子群が説得してくれた。

(あの子メタグロスじゃね？ すっげえ……初めて生で見た！ 可愛い〜！)

(隣の子はジツクん家のメコンちゃんじゃん。てことはジツクの奴がゲットしたのか？)

くう〜羨ましい！ 何処でゲットしたか聞きたいこ〜！)

(ロリ巨乳ハアハア……無表情ハアハア……ツインテハアハア……オレのマダツボミの塔がヘドロウエーブしてしまっツツ!!)

純粹なる羨望の眼差しから、無粋で不埒で淫欲に塗れた眼差しまで。

メコンが守るように立ち位置を変更したり、メタグロスへと質問してくる者が居れば「今日は普通にお買い物しているだけのぞ」と、丁寧に断りしたり芸能人のマネージャー気分である。

そんなメイドさんも、おっぱいに視線が注がれまくりなのだが！

「……………」

メコンの気遣いなど、この子には届いていなかった。

ホウエン最大のデパートには、ホウエン最大の下着売り場だつてあるのですっ！

人間用は当然、人化したポケモン用まで実に五百を超えるラインナップ。

材質からデザインまで多種多様、千差万別、ここ以外の下着売り場は「ミナモに來れない人向け」とさえ言い切ってしまう自信の表れよう。

「ようこそニヤン♪ この下着売り場で働いて十年のベテランになつちやつた、ニヤルマーのセリーヌだニヤン♪ あらあ〜！ メコンちゃあくん、またおっぱい大きくなつたのかニヤン？ この前新しいブルーハワイ色のオーダーメイド品をウチで」（ひゃああんツ!!） 止めてくださいセリーヌさん／／ あっん!! 揉み揉みも止めてくださいんツ……？ ヒヤウ……ツ？）

わざわざ自己紹介ありがとうございます。

ハイウエストのフレアスカートから、スプリング形状の尻尾を出しているコスチューム

ムを纏う、柔軟性あるスレンダーボディに、薄化粧を施した二重まぶたのお姉さんは、【百合が潜む二階】と恐れられ、尊敬される下着売り場の主的な存在である人化ニヤルマー。

入店早々、待ち構えていたかのように神速出現したセリーヌは、自己紹介しながら手と尻尾を巧みに使つて、ギガ爆乳抱き枕ボディのメイドへとお約束のおっぱい測定。

ズツシリ、ドツプリ、男性トレーナーも♂ポケモンも驚づかみしたくなる、しあわせタマゴは此処にあつた！

合法的に（本人は許可してない）下から支え、弾む感触と悶えるメコンの表情、氷菓よりも甘くなりつつある息遣いを楽しみながら、ガムのように纏わり付くバネ尻尾で、胸部を中心に扱き始め——

「：：これ以上は成人向けになりそうだから、これくらいにしておくニヤン♪ このメタグロスちゃんの下着をお求めかしらん？」

「ハーツ、ハーツ……そ、しよ、そうれす……サイズ……測定お願い……しまひゆ……？」
語尾に「？」がくつついちゃう、強制百合百合ワールドは閉会して本題に移る。人目を気にせずヤツてしまう辺り、セリーヌはそういう意味でもベテランなのかも。

（あらまあ！ 小柄な体型なのにお胸だけはドドーンと……ジュルリツ……ロリ巨乳メタグロスちゃんのスリーサイズを測れるなんて、今後二度と無い大チャンスだニヤ……

ニヤ！)

バネ尻尾を激しく伸縮させながら、少女に萌えていた男性よりも鼻息荒く、目をカッと見開いた淫獣その物な瞳となり、いそいそと少女を試着室へと誘導する。

(ハフツ、ハフう……あの子大丈夫でしょうか……セリーヌさんはいい方ですが過剰なまでに胸を……されちゃうので)

下着を買い換える度に、百合ニヤーさんに色々触られてるけど慣れはしない。女性に触られて快感を得てしまうなど……

爽羽佳やネリは可愛がられているが、一切身体には手を出さないので「大きい方が好き」なのかもしれない。何の役にも立たない情報であるが……

(ウヌツ！ ブフッ！ この子ノーブラニヤン!? 私も変な声出ちゃったニヤン!? 変な声と一緒に別の物も出そうになっちゃったニヤあんツ！ ふおほおお……!! イカ腹ロリ巨乳ツインテクールガール萌えニヤあああ！ どんだけ属性詰め込んでるニヤああああ!! 下の方も穿いてないニヤんっ!! それどころかはえてなさそ——フヒユホツw)

(……………まだ終わらないですっ、暇ですっ……………)

デパート内で最も危険な女と、二人っきりの空間でメジャーを巻き巻きされているのに、動じずに欠伸をする少女も凄い。

ガラスの彫刻を思わせる透き通りながらも、触れてみたらツルンツ。ザラ付きが一切存在しない卵肌は重厚なメタグロスのイメージを根底から覆す。

それでいて蔑むような（実際されてるんだけど）無機質に心臓を抉る視線、お前の血も加えてやると訴えるかの如く深紅に燈す瞳。

メカマニアが垂涎する精密機器つぶり、彼女はアンドロイドかサイボーグか、少女からは生き物たる「香り」がしないので、言われてしまえば信じてしまいそうだ。

（しゅ……しゅ……いニヤ、アンダーとトップの差が凄まじい！ ウエストは細いよりも単純にお肉がなさ過ぎるニヤン！ ヒップも外見年齢相当ニヤ、やっぱりバストだけが突出してるニヤツ！ これは理想のロリ巨乳ニヤアア!! ファーフォーwwww）
 カップだけど限りなくGに近いニヤwwwwうはニヤw）

お仕事中心なのに草生える、下着売り場で働きたいと懇願し、十年もの歳月が流れた結晶体がこのメタグロスなのかもしれない。

「メタ子ちゃん、貴女のバストは8……でウエスト5……でヒップが……ニヤンツ！ カカカカップはFだけどキツキツになっちゃうニヤン！ お姉さんと一緒にもう一個大きいサイズの中から選びましょうニヤン！」

「はあ……ハイ」

「メタ子ちゃん可愛いから、全品九割引にしちゃうニヤン！ だからまた来て欲しい

ニヤん！ お姉さんとの約束ニヤあああ！」

「……………」

セリーヌのテンションに付いていけず、無言のまま腕を引つ張られて、ホウエンだけに海の如し広さを誇るGカップゾーンを連れ回されて、無表情のままだが、内側は結構クタクタになってしまった。ある意味バトルよりも疲れた……

メタグロスが選んだ下着とは、果たして――

Segment・tri——ストレージ

下着とセクハラ騒動の翌日。

ログハウスのリビングには、メタグロスの少女とかたくりこが、対面する位置に座っておりかたや無表情、かたやヌポツとしながら、牽制し合うように呼吸回数すら軽減させていた。

メコンはお昼ご飯の材料を買いに出かけ。

ネリは喫茶店のアルバイトへ。

爽羽佳は運び屋の仕事で空を舞っている最中。

午前中のジツクは活動実績を記載したホームページを更新、午後はサファリゾーンで依頼を遂行させる。

募集サイトに登録だけでも、中々お仕事の話は回ってこない。お仕事したければ積極的に呼びかけたり、認知度を上げる為の宣伝や工夫を怠らない、情報発信規模の大きいフリーの仕事人、それがジツク。

将来的なビジョンを明確に描けるまではフリー、彼が本当に「やりたいこと」が見つかった時、一つの物語は終焉を告げて、新しい物語は生誕するのかもしれない。

「……………じつ……………」

「……………ミノツ……………?」

朝バトルが終わり個人的な鍛錬も終了したので、お昼ご飯までやることが無い。

人化したから必ず働かなくてはいけない労働法は無い。本人の意思によりけりだ。

その点を人間は「いいなあ」と思ったり、思わなかったりするのだが。

「……………」

「ノ……………」

だからと言って、ミノムシと黙り大会をしているのは、少女も時間が勿体ないと感じている。

間も無くメコンが帰宅して、昼食を作るだろうが、今回のバトルをベースとした新たな戦況シミュレートでもし直そうか？

(開始……………初手をコマットパンチとして設定……………)

「……………ミノホオオツ♪」

目を瞑る彼女のブレインコンピューター内に、盤上が構築された二秒後、前方数cmの距離からの刺客。

「……………ぺしっ、セクハラです」

「ミノオオオ〜ン！」

おなごの胸の谷間に入ることが好きな、かたくりが種族的素早さを考慮すればありえない速度で、少女のブレザー目掛けて猛進！

鉄壁ガードの少女は、目を瞑ったまま胸を最高に際立たせ、幾千の不合理意見に抗ったまま邪道を往く、お肉が分散されてない乳溜まりに突っ込む間際で、冷静に左手をなぎ払って対応した。

しかもご丁重に手甲まで出現させたので、ペしっ、なんて擬音とは似ても似つかぬ威力だつたりする。

それでも彼は只者では無いので、土を固めて作ったミノで衝撃を最小限に抑えながら、壁とバウンドして元の位置に戻る芸当を魅せた。こんな事が出来るミノムツチは、確実にこの子だけである……

「皆様こんにちは、私はデボンコーポレーションの研究開発部門に勤めております〔レオネ〕です。シルフカンパニー様との共同で取りかかっております、新規プロジェクトのプレリリースにお集まり頂き、誠に光栄に存じます」

各メディアに所属しているプロカメラマンが、撮影器具をひらいしんに吸われた電気技のように、一斉にシャッターを切りマイクを近付けメモを取る。

自然と科学の融合を目指す、カナズミシティはデボンコーポレーション正面玄関口前で生放送。

壮大なプロジェクトメンバーに選抜された、レオネと言う女性は一瞥しただけでも、頭が良さそうな人！……だけど地味で、製品を目立たせることを優先させた控えめな風貌と、暗めな色合いの服装だ。

ブラックメタルフレームで製作された、シャープな形状の眼鏡。あまり笑わない人物なので初見では少し近寄り辛い印象を持ってしまいが、無愛想で人を遠ざける雰囲気は醸し出さないのです、撮影時の対応やアドリブなどの手腕の良さも含めて、プレリリースの総司会役を任せられているのだ。

ワインレッドのタートルネック、丈の長いタイトスカート、ブラウンのカーディガンを羽織り、温暖の地であるハウエンの七月にしては中々に着込んでいるが、風通しが良く蒸れないリネン生地なので快適に動けるのだとか。

黒髪はバレッタで纏められているが、凝ったアレンジなどは無い一つ結びだ。

年齢は二十代後半〜三十代前半か。

「こちらが試作品です。そうです、まだ実用化には遠く正式に完成するまで数年は掛かってしまうでしょう。極々小範囲ですがパソコン通信システムの原理を応用し……」シルフカンパニーとデボンコーポレーション。

世界屈指の開発生産性、どちらかが潰ればポケモン界は衰退間違いないし、有益なアイテムを生み出して『ポケモンと関わる生活』をアシストしてくれる大企業の双壁が技術の粋を結集させた——あくまでも試作品が——

「昔こんな携帯ゲーム機見たことありますねえ……本当に大丈夫なんですか？」

「ご心配はいりません。一億にのぼる実験を繰り返し、私自身やデボンの社員が総出して体感致しましたので、発表に迫り着けました次第であります。じゃあトロメイン？そちらのスイッチの操作をお願いするわね」

全長二メートルほどの物体が二つ、手誘導するレオネの右側には赤、左側には緑色の長方形がカバーが外され出現すれば、懐古な過ぎし日を振り返る者も居れば、旧友と再会し郷愁感で胸が熱くなる者まで反応は様々だが 何処か懐かしい は共通していた。

正方形の上部にはモニターが、下部には十字キーとそれぞれ「A」「B」と描かれた丸形のボタンと、「SELECT」「START」と描かれた小さな円筒状ボタンがそれぞれ備わっている。

プロジェクトの一片、試作品とは一体何なのか？

レオネの解説が終わり、「体感してみたい」と最初に挙手したのは報道レポーターの男性、手持ちポケモンで本来の姿であるクルミル。

炎の様に赤く塗装された長方形に入り込み、草のような緑に塗装された長方形にはま

だ何も無い。

まるで人体切断マジックボックス、失敗なんてあれば信頼を大きく失って男やクルミも、生還する保証が出来ない事態に陥るかもしれない。

以前、ドリームワールドでサードダウン大混乱事件が起こった前例はあるが、世界一の技術力を持つシルフ、世界一の発想力を持つデボン共同製品だ。

怖い物見たさが先行しいつもの癖で考えるより先に挙手してしまったが、愛しのクルミちゃんを抱きしめながら、成功しろ成功しろ、ギユツと一匹と一人は祈り続けている……

「では、作動しますね」

角張りの一切無い曲線と円形のみで、構成された小型軽量のボディは濃いピンクとブルー、ビビッドな色調は「シルフの技術力を世界へ発信させる、とにかく目を引くカラーリングにした」と製作責任者は熱く語っていた。

シルフカンパニーの、最新技術を積み込んだバーチャルポケモン、ポリゴンをアップグレードさせたポリゴン2はレオネの研究補佐兼手持ち。

デボンの社員であるのにシルフで製造されたポケモンを持つ、二つの企業が如何に友好的かを表している。

ポリゴンのままでは実装されず仕舞いだった和やかな笑顔を向けて、水飲み鳥にそつ

くりな嘴でボタンを操作していく、トロメインなるニックネームを与えられたポリゴン
2。

固唾を飲んで見守る……目の離せない歴史的な一ページを刻む瞬間になり得るのか？

男とクルミルを閉じ込めた赤の箱から、レオネとトロメインが同タイミングで「ST
ARRT」ボタンを押し込むと――

「~~~~~おおお、お、ッ!! わつ、私は今っ！クルミルちゃんと物質的には存在
しない、仮想空間にダイビングしておりますウ！ 信じられないと思いますが本当です
！ おういおうい！」

赤と緑箱、二つの画面にはデータ領域のグリッド面がタイルのように広がり、クルミルちゃんと一緒に跳ねては抱きついては、前人未踏の地へ一足早く入り込めてしまった感動を身体全体で表現している。

ポケモンのみならず、人間までパソコン転送システムの仕組みを応用し、肉体と精神をスキャンしデータとして送り込まれるとは……報道機関の者達が画面に向かって手を振ると、クルミルと入り込んだ男もこちら側が見えているようで、モニター越しに握手する仕草をも披露し、男達のエンターテイメント性に何処からか笑い声が零れた。

「まだまだ実用段階ではありません。極僅かでデボンが作り上げた安全路でしか移動も

活動も出来ません。『空間の歪み』を制御しなければ皆様に楽しんで頂く事は出来ません」

緑色の箱から生還した男性とクルミル。

予めデボンの研究員が定め、製作した細くて短い通路内での出来事であったらしい。

そこから先は一步でも踏み入ってしまったえば、空間を制御しきれていないので、裂け目に飲み込まれて命の保証は出来ず、延々と仮想空間を彷徨うハメになっていたかもしれない。

空間の繋がりを操るなど、因果律に抗う行為なのでデボンとシルフが総力を上げて開発・研究をしても簡単ではないのだ。

「あなたとクルミルさんは、先程までこの場所に降りました。この場所であれば自由に行動する事が出来るようになったのです」

自らも起動実験に参加し、危険を承知で調査隊員にもなり試作ルートを設計担当したレオネは、山にも谷にもならなず一定トーンのまま、二つの箱の端子を繋ぐ形で伸びている、銀色のケーブルについて解説する。

トロメインが嘴で指し示したケーブルこそ、レオネが語る安全路。

まだこのケーブル内ではか空間制御は終わっていないが、現在別ルートを開発中で数ヶ月後には、意外な形で皆様の前に登場するかもしれない……

「この先はまだ極秘なので大変申し訳ありませんが、続報をお待ちください。皆様のご期待に添えるであろう長きに渡る発明です、必ず完成させますので暖かく見守ってくださいれば嬉しいです」

レオネとトロメイんが頭を下げれば、通りがかつた野次馬や左右マンションのベランダからも拍手を受けながら、一旦コマージュシャルが挟まれる。

特別な用途とデザインを持ったモンスターボール、子供から大人まで冒険に欠かせないランニングシューズ、コミカルな人形劇風に化石復元のエキスパート達が、蘇った古代ポケモン達と友達になるまでの過程を描いた三十秒ストーリーなど、デボンに関連する物ばかりで構成される気合いの入りっぷり。

「……………」
「……………」

不思議な事に、興味なんて無いはずの空間移動体験の特集を、かたくりこが頭に乗った事にも気がつかず、彼女のみ時間が停止したかのようにピクリツともせず、コマージュシャルが流されるまで見続けてしまっていた。

頭に乗ったかたくりこも、少女へちよつかい掛ける訳でも、この隙に胸に入り込む事もせず、少女と同じ感情を殺された不変な表情となっており、テレビの向こう側すら覗けそうな熟視具合であった。

そういうえば……かたくりこは、シンオウの育て屋老夫婦から譲り受けたタマゴから誕生したミノムツチなのだが――

(パソコンから突然転送されて来たんじやよ、ミノマダムやガーメイルは預かっていなかったんじやが……)

特異な能力を持つ彼もまた、この物語のテーマに深くリンクする存在たるのかもしれない――

「ミツ!? ノホオオ〜ン!!」

「セクハラですつ、二度目ですよ」

……いや、それでもないかも。

Segment・tri——好物

本日も朝にバトル三連戦を終えて、特別やる事が無いメタグロスの少女はミナモ百貨店で購入して貰った、ソーナンス型サンドバッグを相手に持ち得る全ての技をぶつけ、それぞれをメモリ回路に刻む。

「かみなりパンチ……れいとうパンチ……アームハンマー」

十の練習よりも一のバトルの方が得られる物は大きい。

なので非効率に思いながらも時間を無駄にしよう方が非効率だと、徐々に本来のスペックを取り戻しつつあるスパコン並みの頭脳からの演算結果らしい。

「……………つつ」

購入したばかりなのに、既にソーナンスの身体には様々な色が付着しており、形状がやや崩れてきてしまっている。

攻撃力に優れたポケモンの技を立て続けに食らっても、そう簡単に壊れてしまう欠陥耐久性ではない製品なのに……

「ラスターカノン……」

今朝取り戻した——覚醒と表現しよう——ばかりの遠距離攻撃技。

鋼のエネルギーを一点に集中させ、ビーム状となった光で砲撃する、鋼にしては物珍しい遠距離技だ。

「あつッ！」

磁力移動も随分サマになってきたが、自動ミラーコート機能を内蔵させたソーナンスからの反撃を避けきれず横っ腹に直撃。この反撃は空中に逃げようが関係なく発動される。

ダメージ自体は半減なのでほぼ受けていないが、何故だろう……朝の三連戦時はずっと滑らかに、山と谷の段付きが生じずにブースターを発動させていたのに、急に動きに陰が混ざって威力以外の全てが低下している気さえする。

「コメント……パンチッ！」

自身をも放物線を描く彗星に変換させながら、蒼白いオーラを纏ったまま手甲での一撃。

現在彼女が使用できる最強技、底の知れない破壊力をぶつけて反撃能力が発動すれば、それだけ大きいダメージとなって弾かれる……ハズだが

「ハッ……ハッ……ハッ……壊れて、しまったようですね……」

攻撃力が上昇する、オマケとしては強烈にも程がある効力はもう振るえない。ソーナンスが根元からポツキリ折れてしまったのだから。

壊れ際の「シヨオオオナンスウウ……………」な叫びは、悲痛よりも単純に面白可笑しかったが、やはり少女は無言のまま上空へ向かって敬礼しているサンドバッグを見つめている。

「ただいま……………つて、壊しちゃったの!? ええ……………もの凄く頑丈なハズなのに……………」
 「たア、たつ、ぜえ、ただいまですう……………ぜい……………疲れましたあ……………はーあ……………はーあ……………」

「……………すみません、最大出力でなければ意味がないと思つての実行でしたので……………」
 本日は午後のお仕事はお休みらしく、メコンに誘われるがまま近辺を三十分程度ランニングしてきたらしい。

黒をベースに四肢へ黄色のラインが走ったジャージはお揃い。その気は無かったがカップル割引で半額だった。(メコンはとても嬉し恥ずかしがっていた)
 警戒色と呼ばれる組み合わせのカラーだが、特にそのような意図は無い。運動着は二人のイメージと外れるような色彩を、敢えて着てみようと思っただけだ。

まあ、敢えて言うならば「その日カップこそ男女問わず色欲を刺激する危険物」だろう。

歩くだけでもぼるんぼるんなのに、走ればドッスンドッスン!

洒落にならない幸福をもたらす重量感は、お行儀良く左右交互に上下しなるべく人気の薄い場所を走っていたが、どっから嗅ぎつけたのか、すごいつりざおを使った時よりも入れ食い状態で、後半はランニングどころではなかった。

「スポーツはあ……あんまり得意じゃありませんので……いい機会でした……よお……ぜ〜ハ〜ツ……ぜ〜ハ〜ツ……」

バトル時の体力とスポーツ時の体力はベツモノらしい。

やはりHなバストが極端な枷になっているのかもしれない。

ゴーグルを外しておいしいみずを飲むメコンは、新陳代謝が良くなり種族柄諦めは必要だが、気になるお腹周りの脂肪が燃えて、清楚で穢れを浄化させる青と水色のグラデーションロングが、首や額に張り付いてエッチい雰囲気になってるが、メコンはある意味何をしてもエロいので逆に普通である。

「新しいのを買ってきてあげるよ。さらに強度を重視したソーナンスってあったかなあ……ハイ、これはお土産だよ！」

首にタオルを巻いていい汗かいてるジツクは、一時期シンオウの厳しい環境に適合させる事を目標に、三時間ものトレーニングメニューを作り上げていたが、あまりにも長すぎて手持ちと関わる時間も減るしで、現在では無理が無い範囲内だと決めている。

細身のわりに絞られた筋肉が無駄なく身体を構成、抱きついた際にポコポコした腹筋

が当たるのも、メコン含めた女性軍は好きなのだとか。

「これは……なんですか?」

一日の全て、もしくは九割九分九厘を無表情で過ごすメタグロスも、昼食が終了してからぶっ続けでサンドバッグを相手にしていたので、校則確定違反のミニスカートから伸びる太ももから汗が流れていたり、幼い頬肌にも太陽光がキラキラ演出する液体が付着していたり……早い話、汗だく。

「これはチーズドッグだよ、百二十一番道路の近くに小さな専門店が在ってね、チーズワッフルとも呼ばれてるらしいけど……美味しいから食べてみない?」

紙袋には小さなポケモン達がコック服を着用し、お菓子作りのお手伝いをしている微笑ましいプリントが成されており、下部には「デカデカと」テレビで紹介されました」とアピール。

「……いりません、夕食までの適正栄養量は摂取済みですので、必要です」

「そう言うなって、ホラッ、メコンはあんなに美味しそうに食べてるでしょ? キミも一口でいいから食べてみたら? それからいる・いらぬを判断したっていいんじゃない?」

掌サイズの持ちやすく、食べやすい工夫としてワッフルを縦に伸ばした形となっている物体……ジト目状態のメタグロスは、チーズドッグなる軽食を手渡された。

焼きたてだったのだろう、まだ熱さが残っておりメコンがハムハム、モミュモミュ言
いながら頬を膨らませランニング疲れなどつくに忘れ、発行情官を「し・あ・わ・せ・
で・す」とモールス信号の如く光らせて、世界一美味しそうにチーズドッグを頬張るラ
ンターン、十八歳です。

「……………でしたら、一口だけ……………」

メコンは甘い物が大好きなので大げさなりアクションを取っているだけだ。

メタグロスはそう思っていたのだが――

「……………おい、しい……………ですつ……………なぜ、こんなおいしいものがあると教えてくれな
かったのですかっ……………!」

あれだけ「喜んでる姿を見られるのは何時になろうだろう」と、難しく考えていたが
アツサリ、メタグロスはまだ口を付けていないからと、ジックから手渡されたチーズ
ドッグを直ちに受け取り、練習の疲れとは別ベクトルでの身体の昂揚を噛みしめてい
た。

「プロセスチーズの風味を活かすために、生地は甘さ控えめになっているのですねっ、
しっとりしています。がトースターで再加熱すれば、外はカリカリとした食感が、中の
チーズは文字通り蕩けてわたしの舌まで……………巻き込まれ……………ズルツ……………」

「……………あのっ、メタ娘さん?」

「もむっ、もむっ、もみゅっ！ も、もう一個……無いのですか？」

「あっ、あのっ、ないです、すみません」

「……………」

少女の無口で機械的で、胸以外の起伏に乏しいイメージを豹変させてしまう、とんでもない魔力を秘めていた密かな名店。

だがテレビで特集を組まれて一役有名となり昔ながらのファンは残念な気持ちにもなっていた、チーズドッグ専門店。

三本しか無かったので、もう品切れだ。

無表情のまま涎を垂らしている、はしたない少女へ指摘するのも忘れて、無言のまま少女と見つめ合ってしまったているジツク。

なぜ三本しかっ!?

すっごく……訴えてきている、無表情だけどその涎が訴えてきている！

子供におやつをあげる夫婦のような図式から、お金の代わりにチーズドッグを買収しに来た地上げ屋の図式に変化している。

「気に入った？」

「ハイ……とても、とても美味しい……です」

少女が「美味しい」と口にしたのは初めてだ。

メコンが作ってくれた料理すら、稼働と戦闘用エネルギーを維持さえ出来れば、余分な物は必要無いと毎食半分近くは残して、メコンの気持ちなど理解出来ない少女は用事は済んだら何も言わずにリビングから立ち去ってしまった。

美味しいと感じる感性が生まれていなかったのだ。

チーズドッグを口にして「美味しい」感性が生まれるのは、ジツクも少女本人も予想の斜め上だったが……紛れもなく生まれたての少女が成長した証だ。

「……………メコンさん……………申し訳ありませんでした……………」

「いえいえ♪ もっとお互いの事を知っていけば、メタグロスさんの好みも判明していくと思いますので！ 好みを反映させながらバランスの良いお食事を作らせて頂きますよ！」

自分はとんでもなく失礼な事をしてしまっていた。

感性が生まれた今ならば理解が出来る。メコンが毎朝早起きして作ってくれた料理の数々は、決して簡単な内容ではなく「あの子が好きな物は何だろう」と、試行錯誤に加えて予測の連続であった。

メタグロスが好きな物、苦手な物を教えてくれたのならば手っ取り早かったけど、生憎少女は美味しい・不味いなど関係なく、必要な栄養のみ摂取できれば豪華でも粗末でも何だっという判断していたからだ。

感性が生まれていなかったから仕方ない、と、言い切つてしまう事も出来たが、少ないながらもメモリが巻き戻され自分は……

「……一口一口、感謝しながら食べさせて頂きます……これからはエネルギー摂取が目的では無い、純粹なる「食事」として……」

「えへへえ〜！ お食事は食べる側も作る側も楽しいのです、折角食べて頂けるのですから私も、もつと美味しく作れる努力を致しますので！ ここから貴女が好きな物を見つけていけば良いのです♪」

人の気持ちなど知ったことでは無かったが、今回の件で自分がどれだけ気を遣われ、思いやられていたのか伝わつたらしい。

あの料理も、あの料理だって、とても美味しかったハズ。
エネルギー確保以外にだつて大切な事がある。

摂取しなくていい食べ物を口にし、美味しいと感じたその気持ちは、何も無駄にはならないのだ。

「……メモリに刻ませて頂きます、チーズドッグ……こんなにも美味しいだなんて……取り立てて複雑な仕組みでは無いのに……私は感動しているのですね……食べ物には奥深い」

何気ない物から大事な物を教わっていく。

電子記号の集合体であった少女の心は、白から少女独自の色、蒼へと少しずつだが、高密度に着色されていく――

「そろそろ他のトレーナーや野生のポケモンともバトルしてみるか？」

「ハイッ、新しく得られる物がありそうですので。……………ジックさん、お願いがあるのですが、わたしがバトルに勝利したらチーズドッグの購入を許可して頂きたいのですが……………」

すんごい気に入られ、大好物となった製品を包んでいた紙袋には、大まかなアクセスマップが記載されており、その気があれば直ぐにでも迎える位置。

何だっというので理由を付けて、とにかくチーズドッグを食べたくて仕方が無いのだろう、ツインテールを結びリボンが意思を持っているかのように、激しく揺らめいて少女の瞳孔も僅かにだが開いているのを確認した。

交感神経が優位な状態にあるのだろう……チーズドッグを口にするまで、こんな変化ありえなかったのに。

（チーズドッグさんにはお礼を言わないとな、たった一口で数多くの感情が芽生えたんじゃないかな？）

思わず「さん」付けしてしまった、無表情だけど少女は確実に喜んでいるので、バトルに勝てば一本ずつ買ってあげるのは、モチベーションが向上する意味でも良いアイ

ディアかもしれない。

「勝てたらだよ?」

「勝ちます」

「……………今から行く?」

「行きます」

チーズドッグを食べて人格も変わった気さえする……………意気揚々に手甲をぶつけ合っ
て蒼い火花を散らしながら、汗をかいても匂わないし、動き回っても人肌以下の冷たさ
を持つ少女が燃えている。



「サイコキネシス」

「俺のエレキブルがああ?!」

「アームハンマー」

「ああつ! ガマゲロゲちゃんつ!!」

「ラスターカノン」

「ウツツ……………ボアアアアアアツ!!」

片っ端からトレーナーにバトルを申し込んで、片っ端から勝利していき十五連勝中のメタグロス娘。

一直線に吹っ飛ばされたニドキングは戦闘不能、これで十六勝目となりもう止めにしようっ！

「……………（チラッ、チラッ、チラッ）」

「分かった分かった！　ちゃんと十六本チーズドッグ買うから！」

「……………（ドヤッ）」

不幸にも勝負を挑まれた、もしくは挑んできたトレーナーはチーズドッグパワーを原動力とする、少女の撲滅するような戦いぶりには歯が立たなかった。

というよりバトル中も「チーズドッグを頬張る事しか考えていなかった」

勝利する度に無言でツインテールとミニスカートを翻しながら、強請る目線で訴えてくるのでジツクもたじたじである。

「ココア、バナナ、メープル、マロン、お好み焼き……色々なフレーバーがラインナップされているんですね。メープルは明日買って貰うとして、先程と同じプレーンにしましょう」

（もうそこまで決めてんのかよっ！　別にいいけどさ！）

特集記念にミナモ自治体から贈呈された、金ピカのキャップを被った口コンの少年

と共に、店を経営している店主のおっちゃんはいいい人で、可愛いお嬢ちゃんにはサービ
スだと一本追加、合計で十七本ものチーズドッグを作ってくれた。

その時の少女の気持ちなど、ラルトスの力を借りずとも簡単に察させた。

すごく……ニヤニヤしていたと（無表情だけ）

「……そんなに見てもあげませんよ？」

「全部食べていいつてば」

「……………（あちつ、あち、フーフー……あむつ、ほくほくほくつ、はふはふはふつ）」

自分やメコンがどれだけ頑張っても、笑顔になつたり喜ぶ素振りを見せなかつた鋼鉄少女が、いとも簡単に合理性とは無縁のおやつを食べて、瞬く間に疲労を回復させながらさらなる戦意を昂揚させている。

仏頂面で無口なのだけは変わりないけれど、バトルに負けた悔しさとは別の感情を抱いている、この子の新鮮な意思表示。

（そういえば……チーズドッグ効果かもしれないませんが、急に身体が軽くなり敵への攻撃反応も鋭くなっていると分析結果が出ました。わたしが行っていた自己鍛錬と何か異なる点……チーズドッグを食べたら考えましよう、ハムハムハムツ）

欲望丸出であつたが、チーズドッグ獲得の為に負けられない少女は、もの凄く忠実に指示に従っていた。

本人は気がついていないが、それこそ――



「ふむっ……女性はこのような器具を身につけなければならぬ」と

チーズドッグも、メコンの夕食も残さず美味しく平らげたメタグロスは、空き部屋から暫しの自由空間となったマイルームで、購入したばかりのブラジャー着用に着用中。苦戦中。

サイズはセリーヌの測定結果に従い、FカップであるがGカップ用のブラ。

グーを縦に三つほど並べられるくらい大きな乳トラブルを未然に防ぐために、ねっとり測定してくれたので身体にフィットしながらも、苦しくないのが戦闘時の速力が低下するなどの原因にはならない。

日常生活にも支障は無く、身も心も引き締まる……のは気のせいかな。

……この身長でアンダーとトップの差が、二十cm以上あるなどセリーヌでなくとも、鼻血が出そうなくらい至高のロリ巨乳だ。

色は何だつて良かったが、誰かに見せるような代物でもないし、少女にはそういった感性も磨かれていないので、黒を選択した。

百合ーヌさんはセクシー方面で攻めるだの、クーロリなお顔との対比が溜まらないだ

の、ハアハアしながら色々な場所を抑えていた。そのうち犯罪に走る気がする……

フルカップで柄が、少女の服装のいたる所に配置されている。× を思わせる変わった柄であつたが、メタグロス用の下着なので用意されていても変では無い。

シヨーツは何と紐つ、紐！ 紐パンっ！

穿きやすく、脱ぎやすい、極めて合理的で機能性が高いから手に取つた彼女らしい選択だ。

こちらも×を象つた柄だが、間近で見なければ気がつかない程度に薄い。

百合ー又さんは「スケベ下着キターふおおおwwww」と、股間を抑えながら心の中で絶叫していたが少女にそんな目的は一切無い。

「よっ、両サイドを結ばないといけないので、思ったより難しいのですね。バトルと同じです、やってみなければ分かりませんでした……落ちたら落ちたで特に問題はありませんが」

あります、めっちゃや問題です。

少女にはまだ羞恥心が生まれてなく、育つてもいない。

美味しいの感性よりも、そちらの方が大事な気はしてならないが……

殺風景でベッドしか置かれていなかった空き部屋は、インテリア導入によつて摩訶不思議で幾何学、三次元と二次元ネットワークが曖昧になり英数字や、アルファベットが

不規則に並ぶトリックルームを模した壁紙が四方に貼られている。

解読不可能な序列や、オーバードレイ光彩の束が不安定な気持ちを煽るので、人気は低いのだが何故少女がこれをチョイスしたかは謎。

自身が眠っていた電脳層と、なるべく近い物が良かったのか、それとも……

「わたしの部屋……ですか」

ひみつきち用のちいさなつくえ、きれいなイス、てつぺきをイメージした掛け布団。「まあ、わたしが納得の行く強さを手にしたら、不必要になるものですが」

パジャマ売り場のお姉さんから、強引に着せられてメロメロにさせてしまった、大人気のロップイヤー付きパーカー。

設定されているサイズよりも、胸部のみは大サイズが必要となったので大急ぎで修正し少女に、ピッタリのサイズとなっている、ご苦労様だ。

ミミロールでもミミロップでも無い自分が、何故兎耳を付けた寝巻きを……理解出来なかったが拘りは無いので、寝やすければ別にいい。

ボールに収まる気は無く、最初から出て行くつもりなのだからジック達はツールだ。達成水準が満たされるまでは付き合っただけが、来るべき時が訪れるまでだ。

「おやすみ……です」

このログハウスから去ったら……どうするのかは考えていないが別にいい、時間など

無限になるのだから。

(チーズドッグが食べられなくなるのは……惜しいかもしれませんが)

ジック達が謎のメタグロスと巡り会ってから一ヶ月、もう忘れつつあった木の实ジエントルマンからの報酬は温泉街への二泊三日の旅行チケットであった。

メタグロスが苦手とする釜炎の地が、運命の岐路となり少女が——を授けられ、時の流れは移り行けども色あせない、少女の心に——が芽生える事となる。

Segment・tetra——旅路

ジツク達がミナモ民宿跡地の、地下に広がる謎の電脳空間から、メタグロスの少女を
発見し一ヶ月が経過。

帰省やお祭り、虫取りに海水浴、思い出作りのキツカケが目白押しの八月の猛暑に、氷
ポケモンや水ポケモンの一部から弱体化まったなしの悲鳴が聞こえているのだが、レト
口列車の窓際に座って涼風を受けているマニユーラの少女、ネリも例外ではなく、吹き
抜け構造で風通しが良いログハウス内でも、ご当地ゆるキャラみたいに「ぐでくん」な
らぬ「まにゆくん」と、干からびるか溶けかかっているかの二択の姿で、テールへも
たれ掛かっている姿が確認されている。

「ネリちゃんは寒冷地出身ニヤからね……暑さにはあんまり強くニヤいのニヤ……それ
でも温泉は楽しみニヤし……あう……バテバテのグダグダニヤ……」

お仕事中やバトル中、光り物と聞けばやる気を取り戻すが、そうでなければ九月にな
るまでケツキングまでは行かなくても、ナマケ口状態。

自らの力で生成し、殺傷力をぐぐぐんと落とすとした氷のナイフ（つぶての応用）で頬を
セルフペチペチしたり、着衣水泳も快適に行えそうな常時三角形を形作る中心部へ、挟

み込んで十秒足らずで水の分子に分解され、その場凌ぎにしなければならない。というより裂けないのが気になる……

「だくらしないんだからもうっ、これだけ肌色面積多い衣装なのに、暑がつてんだから裸になるしか無いんじゃない？ 家に居る時はメコンが作った氷菓ばかり食べてるのに太らないって、ちよい羨ましいぞ〜！」

フアスナーを胸骨まで下ろし、前開きした胸元へは右羽で、左羽では隣で「ぐでマニユ」と化したギャル友へは、静音性を意識し最小限の動作で大型のうちわ役となり、夏の熱さを和らげている。

「ネリちゃんお胸以外の脂肪は、すぐに溶けちゃうのが自慢にやし……太れるモンなら太ってみたいニヤあ……」

（くあぁ……！ 私 は 絶対 太り たく ない から、毎 日 体 操 を 欠 か し て ない つ つ の に い！
このこのこのっ！）

都合のいい体質を所有しているネリへ、脚を伸ばし爪先で脇腹を擽る爽羽佳の柔軟性はポケモン界のバレリーナだ。得意技を繰り出す際のスピニングにも貢献し、カポエラーよりも回転速度は高いらしい。

ややお行儀が悪い羽娘と、あんあん悶えて「そこは弱いんニヤアア……」と、自分から性……を教えている泥棒娘の前世から続いているであろう、腐れ縁の様なやり取りを

見て水中で暮らすランターン種なのに、陸上げされ一週間放置されたコイキングみたいにならず、発光器官もおっぱいも絶好調にピコピコ、わさわさつ、ひんやりお肌はこの熱帯夜に対する最高のアンチテーゼとなり、抱き枕にすれば朝まで特性“ふみん”のポケモンでだって、ウトウト瞼を落としかねない。

まあ、彼女を抱き枕に出来るのは、ご主人様であるジツクしか居ないのだけど。

愛用のメイド服は、断熱や遮光効果を備えており、クーラーバッグに等しい保冷力で夏も快適なのだとか。

「Zzzz……ミ……ノ……」

つい先程まで、車窓に映し出される風光明媚な大自然に、0.2cmばかりの身体をぴよんぴよこ跳ねさせながら興奮していたのに、温泉に入る前にもう疲れてしまったのか、冷感寝具変わりにメコンの破壊力抜群だから「H」な、お胸の中心部に奉られている。

ある意味コイツは、ジツクよりも羨ましいであろう、クールおっぱい枕を何時でも使用する事が出来てしまえるのだ！子供だから許されているし、本人も♀ポケの胸の谷間が最も居心地が良いらしく、眠りながら鼻ちようちんとフーセンガムを交互に膨らませている、五円玉くらいなら投げられる特技を披露しているのが証拠である。

「……………」

そしてもう一つのクール系おっぱい、この暑さにすら眉毛も睫毛も微動だにさせず、四匹の席とは距離を取った場所で列車旅ならではの、見事なフォトジェニックにも目を向けることも無い。

活動エネルギーを失った戦闘マシーン、ミナモシテイから専用の列車に乗って二時間近く、一言も喋っていないし微かな動きすら見受けられなかった。

「……メタグロス、皆に混ざって会話してもいいんだよ？ この車両には俺達以外乗っていないから、汚したりしなければ——」

「……………特に、話したいことがありませんので」

まったく、ジツクが気を遣っても視線すら合わせないで、最低限の言葉のみで終了させてしまうのは、この子の悪い面だ。

そういう性格なのか、コミュニケーションが苦手なのかは未だにハッキリしないけど、保護されて一ヶ月も過ぎたのだからもう少し共同生活を楽しもうとする意欲が生まれて欲しい物だ。

バトルでは「半分おや」のジツクの指示には、素直に従い野生や他トレーナーには秘められていたポテンシャルの開花に成功させ、負け知らずの無双パターンに入り一騎当千の活躍ぶり。

勝つ度にチーズドッグを買ってあげる約束なので、人情味の感じられないこごえるせ

かいな表情のままだけど、両手で好物を持ち一本目は真ん中から、二本目は片側から……色々試しているのか、パチリス並に愛嬌のある食べ方に思わず小声で「かわいい……」と、手持ちと一緒に話題にしてしまった。

当然彼女は無反応、というより聞こえていなかったのかもしれない、食べる事に夢中で！

民宿跡地の異変調査願いを申請した、木の実ジエントルマンを覚えているだろうか？
彼が報酬として手渡してくれたのは「フエン温泉・二泊三日の旅行券」

これ一枚でトレーナー×一、手持ちポケモン最大六匹まで参加可能、三食＋おやつ付きで宿代もタダ！ さらに宿に備え付けられている自慢の混浴露天風呂に入り放題！

さらにさらに、期間中なら天国か地獄なのか？ 足湯を始め蒸し風呂や砂風呂、放電風呂に霰風呂、毒々風呂に逆鱗風呂など、五百年の歳月を宿しフエンの鼓動を刻む、最凶のツアーにまで参戦許可されている！ 全部無料だああああ！！

前半はともかく、後半は殺す気満々にしか思えず、本当にこの世の裏側まで体感しかねない。

が、概ね好評である。

木の実ジエントルマンは数ヶ月前に、ホエルコやゼニガメ達と温泉巡りをしたばか

り、期限内にまた訪れるのは彼のスケジュールの都合などの関係もあり、報酬として不備はないだろうと譲る形になったのだ。

最近バトル漬け（主にメタグロスが原因）だったので、冷房機器による冷え症状対策やデトックス効果もある、夏温泉で芯までゆっくり癒やされたい……ぬるま湯で。

裸の付き合いと云うわけでは無いが、これを機に彼女達の親睦会にもな……るかと思つてはいたけど、ネリが背中にも氷を突っ込んででもノーリアクションのまま、窓の外へ氷をポイツと投げるメタグロスを見る限り、やはり彼女と仲良しになる目的は容易には達成できないらしい。

美味しいという意味を理解出来るようになったり、バトルに勝てば何処となく高揚しながら次なる相手を求めたり。

何の感情も抱いてなかった初対面と比べて、感性はそこそ育ってきている。

が……まだまだ、足りていない物だつて多いのが現状であると、一歩も二歩も引いており積極的に関わりを持つとうとしていない、離れた場所に座っている姿で一目瞭然。

空気を讀んだり誰かを思いやる心を、養つて貰いたいけど「半分手持ち」が災いして、無理強い出来ない立場である。

例えば手持ちを罵つたり、意味も無くログハウスの私物を破損させる行為があれば別だけど、その様な事は起こっていないので。

賢すぎる頭脳を持つメタグロスの少女は、怒られず追い出されず、最低限の防衛ライオンを把握し超えない範囲ならば、仕方なしに皆へ合わせる事をも覚えた。

席を離れる程度なら五月蠅く言われない……そう思っているのかもしれない。

世界的にも有名な温泉町、湯煙立ち並び郷愁漂う釜炎の地には、信じ難いが伝説のポケモンとして数えられるかこうポケモン、ヒードランの目撃情報が「わりと」あるのだとか……！

「一番新しい情報によると、マグマ温泉に浸かってのんびりしていたらしい……裏口からだけで料金も置いてあったし、凄く親近感湧く伝説だなヒードランで……」

周囲の気温が急激に上昇し、まさか……何名かのトレーナーが露天風呂に入り込んだだけで熱中症となり、辛うじて残った最後の一人も

「女の子の裸見たなー!! 伝説だつて見られたら恥ずかしいんだぞバカー!!」

金は払ってるが理不尽すぎる主張……この間出現したヒードランは男性であったのに……

複数個体居るのは知っていたけど、よりによって巨乳の女の子のアレやコレや、覗いてしまった罪はマグマストームを無抵抗のまま食らうことで償われる。

やはり理不尽だ! ていうか伝説のポケモンが繰り出す専用技なんて、耐えろって方が無理なのだが。

煮えたぎる猛炎の渦に閉じ込められた影響で、ボイラー室が破損してしまい後日、鋼を削り出して作った修理費用百万円を内蔵したケース、そして菓子折を手渡ししながら「また温泉入れてください……」とやたらペコペコする、伝説の後ろ姿にクエスチョンマークが付与されかねない親和性を見せて、また彼らを混乱させてしまったのだが……金と菓子折は何処から手に入れたのか、細やかな疑問も永遠に火口の中。

「伝説のポケモンさんも様々な価値観をお持ちなんですわね……私達が出会ったことのあるギラティナさんとは正反対ですわね……」

自ら存在を徹底的に消去し、たった一つの伝承を除いて痕跡が無かった、はんこつポケモンのギラティナは、反物質を司る神。

事情があり謁見する事態になってしまったが、大昔は相当な暴れ者だったと誰も知らないエピソードを「内緒にするならばよし」と恥ずかしがりながら教えてくれた少……いや、幼女。

パツツンなボディースーツのヒードランといい、あばら骨を模した白銀色の突起物で大事な部分だけ隠したギラティナといい、どうも伝説のポケモンが人化したら青少年へ悪影響だ。

ギラティナに至っては後ろを向けばお尻丸見えです、せめて翼で隠すとかそういう配慮はして頂きたい。

スケベな格好をしなければならぬ我々の概念を超過する独自ルールでもあるのかもしれない。

ギリティナが過去を語っている際に、恐れ多くも手持ちの皆が「過去の行いよりもその格好を恥ずかしがつて」と、心の中は完全一致していたのは言うまでも無い。それで堂々とした佇まいで、神としての威厳だけはやたらあるのだから困る。

やぶれたせかいで、今もジツク達を覗き見……いや、見守ってくれているのかもしれない。

ジツクや手持ちのメンバー達は、依頼でフエンを訪れたことはあるが、忙しかったので温泉には入れず仕舞いで切ない思いをした経験がある。

理論上はそれをとぶを使えば、何時だつて辿り着けるけど列車を使ってこそ旅路、時には風情を感じるために回り道だつて一興だ。

……メタグロスの少女が知ったら、非効率的だと温泉が凍えるくらいの冷淡なまでに、突き放す言動をぶつけてきそうだが。

タタタン、タタタン……銀河鉄道でもしちやいそうな、レトロモダンで何世代も旧型の列車は、途中下車しないフエンタウン行き専用車両。

徐々に速度が落ちていけば、そこは情緒と浴衣と熱気に溢れた温泉町——

Segment・tetra——眺望と躊躇い

「マニユハハハア！ フェン温泉は豊かな大自然の贈り物ニヤ！ 湯に浸かって一秒で夏バテ改善効果が発揮されて、ネリちゃんの心と身体は元気印のスタンプラリーニヤ☆☆☆」

「さつきまで「ぐでマニユ」だったのに、現金なこった……家のお風呂も凄いいけどさあ、天然の露天風呂には叶わないかあく流石に！」

旅館で入館手続きを終え、荷物をブン投げたら備え付けられている源泉掛け流しの露天をゴールに、早脱ぎ選手権するギャルが二匹。

小さなタオルを二枚、腰と胸を覆う形で結んだネリは、貸し切り風呂なのを理由に背泳ぎするフィーバーっぷり。暑すぎて荷物持てないとか、どの口で発していたのか。

実はなみのりを覚えられてしまうマニユーラ種、陸上での速度と殆ど変わらず水上移動も可能だが、威力の方はお察しください。

まだお昼前なのに高台に製作され、フェンの町並みを一望できる湯煙展望台で文字通り、羽を伸ばしてくつろげる爽羽佳は、スタンダードに大判タオルをグルツと一周させている。

美肌効果が増す療養泉として認定された湯の香りで、新陳代謝が高まり不要物質が排除される。第二の心臓と比喻される脚は、重力が邪魔をして血流が上手く心臓まで上がらず、飛翔中も動き回る関係で身体は軽くなっても、脚は武器としても使うので酷使気味、殆ど地上にいる場合と変わらないのだとか。

ポンプアップ効果もあるので血液循環が活発と鳴り、カロリーも消費出来るので温泉はイイコトのバリユーパック。

「ふにゃあぁ……♪ 気持ちいいですよ……♪ 転地効果と言う物ですね、温泉としての環境に恵まれたフエンタウンならではの刺激を、五感に受けて神経中区がリラックス出来るのです……ふにゃ……♪」

天然に配置されてる大岩にもたれるのは、天然の乳塊を岩肌に応じて変形させているメコン。

特大サイズのタオルを借りて、何とか身体を隠す事に成功。爽羽佳と同じで手前に折る巻き方だが、抱きしめられている大岩の方が心配になつてしまふ、おっぱいデストロイヤー。

胸の種族値なんてのがあったら、彼女は伝説をも軽く凌駕している禁止級だろう。今「パキツ……」って何かの破片が碎ける音が聞こえた気がする……

本来は混浴であっても、タオルの使用はNG。

ではなぜ？ 女性しか入浴していないに聞わらず、身体を覆っているのか？

理由は……そういう事です。見えてしまったら描写せざるを得ないので。

「そーいやこの露天風呂、豊胸効果もあるって書いてあつたニヤ。ネリちゃん、これ以上大きくなるの嫌ニヤあ……メコンに全振りしてやるニヤ」

「へーって、わたしやどつちでもいいんだけどさく♪ ゴキュツ！ ゴキュツ！ ぶはああくく！ 湯に浸かって飲むモーモーミルクうまつ！ バリウマツ！ ゴック
ゴック！ ゴクンツ!!」

JKは時に、本当の親父よりもオヤジらしい。

自販機で買ってきたモーモーミルク（コーヒー味）を、木製の器に入れ熱燗の如くグイッ……とな。

温泉卵もあればねえとか、言い始めたから中身は六十歳くらいのおっさんに入れ替わってしまったのかもしれない。

鳥ポケモンなのに卵を食べるのは、共食いなのでは？

あんまりその辺は疑問に思わない方がいいだろう、昨日はチキンディアブ焼きをバックバク食べていたのだから。

「わわっ、私もこれ以上胸が大きくなると困ってしまいます……お手柔らかにしてくださいね温泉さん……／＼／＼」

現在でも十分に困っておりますHカップ。

巨乳の代表格である、ミルタンクよりもホルスタイン、同性すらダメにしてしまう悩殺おっぱいがI、J、K……そんな事になったら服が着られない！ お外を歩けない！

母乳か何かが出ちやいそう！ まだお母さんじゃないのに！

（そそそそそ！ それは私がジツククさんの子を宿して、育てる事が出来る身体になるというみみみ！ 未来凶なのでしょっかっ!? 私はある方のお側でご奉仕できればそれだけで良いのですが、につ、につ、に！ 妊娠……する事になったらそのお……あう……／＼／＼）

勝手にアダルト妄想を膨らませて、勝手に濡れかけている。水タイプだから濡れないのに……

一度妄想が展開されてしまえば、呼びかけたって連れ戻すことは不可能、自然回復を待つしか無いので今回は早めの生還であった。



「……………」

「キミは入らないのかい？ 昼食まで時間あるから入ってくれば？」

「結構です、汗はかいておりませんので、入浴の必要性がありません」

少し離れた場所から女子三名の、明るく華やかな情景が伝わる非日常空間。

混浴だが年頃の男女が全裸で……それはアカンので、♂であるジツクとかたくりこは女子軍に譲り、後ほど使わせて貰う事にした。

かたくりこはまだ寝ている。会席料理が運ばれてきたら自動的に起きるだろう。

メタグロスの少女とは、相変わらずコミュニケーションを図るのが大変である。

会話を続けようとしてくれない、ボールをゆつくり投げても少女はジツクでは受け取れない剛速球で、投げ返してくるので拾いに行けば逃げられる。

チーズドッグが関与したり、バトルとなれば話しは違ってくるが、一言二言で何としても会話をシャットアウトさせる執念すら伝わる、キリキザンよりも鋭くて、ユキノオーが巻き起こすブリザードよりも冷ややかな態度と体温の少女には困った物だ。

少女はポケモン、動き回れば疲れを感じるし全国的に平年よりも暑い、となれば人間と同じように汗は流れるがやはり……汗である「匂い」が漂わない、無臭なのだ。

ジツクには少女の汗が付着した衣服を、くんかくんかする変態趣味は無いけれど、人化しなくたって生き物として当たり前前の要素が跡形もないのだから、万が一他の者に捕

獲されていたら出生の不明さと相まって「バケモノ」扱いされていたかもしれない。

「……………」

謎が多すぎるメタグロスの少女。

ちつとも心を開こうとしてくれないけど、彼女との約束「強くさせる」は守れているつもりだ。

技を当てる事すら出来なかったのに、サイコパワーで相手の動作を何百通りも瞬時に先読みし、正確無比に鉄拳やらビームやらをブツ放す姿は、とても同一ポケモンだとジツクですら思えない。

戦えば戦うだけ経験値が手に入る。

ステータスエツカーに記載されていなかった技も、自己覚醒を繰り返し攻撃・補助・防御、あらゆる状況に対応できるオールマイティに揃え、それでいて器用貧乏にならない全面的にハイスペック。

これでわざマシンが使えたのならば……

数少ない難点である素早さの微妙さだつて、小柄な体躯という点も味方しているのか、一般に出回る能力グラフほど低くないし（むしろ速いが皆の見解）、こうそくいどうをすれば緊急回避に空中戦、何でもゴザレな鋼鉄ガール。

メタグロスの本当の強さ、それは選ばれしトレーナーだけが最上級の悦びと共に堪能できる。

その「選ばれしトレーナー」になってしまったから、その意味を理解出来るようになった。

これだけ圧倒的な戦闘力を誇るポケモンを操れば、まるで世界一強いトレーナーになったかの陶酔感が襲うのだ。

メタグロスほど強烈なスベックを誇るポケモンは、敗北しても全てトレーナーの責任となる。メタグロスだから勝てて当たり前、そんな辛辣な言葉を吐かれる覚悟も必要だ。

「……………」

命令を無視していたのも懐かしい。

疎外感を特に持たず、自分から「ぼっち」になろうとしている様にも捉えられるメタグロス。

メコンの手料理を残さず食べたり、お皿を流し台に運ぶくらいはする様になったけど、爽羽佳やネリがキンセツシテイまで遊びに行こうと誘っても、強くなる事を優先させている少女は「興味ありません」と、一度も同行する事は無かった。

(メコン以外はぎこちないってか、事務的な口調も目立つんだよなあ……かたくりこ

へは知らんけど、俺が一番厳しい眼で見られている様な……早く強くしてとか、コレで強くなるのとか、こわいかおでギラギラされながら訴えられて……あつ）

いくらメタグロスでも、たったの一ヶ月経験値を積んだだけで、一vs二のバトルでも多少傷を負っただけで、勝利してしまえる実力を身につけられるのだろうか？

野生として生きるには充分すぎる、今の少女ならばトレーナーが居なくとも滅多な事じゃ負けは無い……のでは？ 少女は急いでいる？

（あの子は俺の下から逃げる……？ そつ、そういう約束だけ……）

少女は手持ちでは無い。モンスターボールに入らない。

強くなりたいたい願望を叶えるために、協力を申し出たのはジツク側。

満足な強さを得ればと言っていたが、その定義は少女本人にしか分からない。少女が「もういいです」と告げてしまえば、たった今からでも保護をする理由が無くなってしまふ。一緒に暮らす意味も消えてしまふ。

嫌になったら逃げてでも構わない、一ヶ月前の自分のセリフを思い返す。

保護をしたからと言って、強要してボールには押し込まない。トレーナーとなつてからは極力ネゴシエーションして手持ちを増やしてきた。

人型となったポケモンへ捕獲アイテムをぶつける……そういう罪悪感はまだに捨てきれないが、彼は相手の「意思」を尊重するトレーナー。

俺はこう思っている、キミの意見を聞かせて欲しい。

意見が合えば仲間入り、合わなければ無理に追うことはしない。

どうしても仲間になりたいポケモンが居たとしても、相手にその意思が芽生えなければトレーナーとして、本能的に取り出そうとしてしまうボールを投げ捨て、踏み壊してまで、そのポケモンと別れた事もあった。

(俺はメタグロスをどうしたいんだ、目的はほぼ達成されているとしたら、彼女は近い内に何処かへ行ってしまう……イヤだっ！ それは絶対に！)

こんなの初めてだ。

今までも似たようなケースはあった。契約が切れたら「また何処かで会えたらいいね！」って、笑顔で見送るのがジツクであった。

やっぱり手持ちにしてくださいと、考えが変わった子も居て、その時は快くゲットという形で仲間に加えた。

(放っておけないよ……でも意思を縛り付ける様な事は……ああっ！ クソツ！ 俺らしくない……ナヨナヨしてんじやねえよ俺……)

トレーナーとして——自覚は無いが男としても——重大な特異点に到達してしまった、悩める彼の想いなど知らぬ顔、室内温度が五度は下がったかもしれない、熱伝導率が著しく低いため息を吐く少女は、もう基本スタイルとなった体育座り。

（スカートの中が見えそうなんだけど……羞恥心はもう少し育って欲しいなあ……）
膝丈20cmのスクールミニスカート。

バトル中だつて体育座りしてる今だつてそうだけど、パンチラ目前、または確実に見えるであろうポジションでも、何故か下着が見えた事は一度も無い。

サイコパワーでも使用して、上手いことガードしているのだろうか？

温泉の地だけに彼女のハートも、暖めて解すことが出来れば……

（チーズドッグ……食べたい……ですっ……）

……あくまで我が道を貫こうと、ブレインに内蔵されたメモリから、お気に入りのおウルトラチーズ味をリピート。

一口食べればモツツアレラチーズが優しく舌を包み、何処までものびくくる！
ゴムパツチンよりもものびくくる！

クールな顔してチーズ伸ばしの飛距離にチャレンジするわ、全種類のトツピングパウダーを試しちゃうわ、色々な少女を見られるのはチーズドッグ様のお陰である。もうあのお店に脚を向けて寝られないから、ベッドの位置を変更したくらいに……

Segment・tetra——勝負の合図

昼食を食べ終わって一息付いた十四時過ぎ。

低価格で非売品で回復道具と互角の、飛び抜けた効力を持つが「苦すぎて懐き度が下がる」は、オマケと片付けるには見過ごせない強烈な副作用。

基本的にポケモンを苦痛にたらしめ、快感を得ようとする性癖のトレーナーは、政府から問題視され改善、及び再三の注意も聞き入れなければトレーナー権利の剥奪となってしまう、共存法がポケモン人化現象が起こった数年後に、制定されるに至った。

苦い味が好きなポケモンですら、トラウマになってしまう漢方薬。

東方より伝わった医学が受け継がれ、独自に発展させて来た技術を振るうのは、極々一部の政府認定トレーナーや、研究者のみになってしまった……

カンポー職人は元より、肩身が狭く「ポケモン虐待だ」という意見が注がれ、人化が発見されて以降はさらに売り上げが落ち、貴重な弟子も全員足を洗ってしまいハウエンではたった一人の職人となってしまった。

それでも温泉よりも熱い人情を持つ、フエンに住まう人々から「あなたは絶対に必要な方」と勇気づけられ、例え弟子が居なくとも命尽きるまでカンポーと携わり未来に活

かせる様になればいいと、門外不出であった調査・製造・管理法を提供し、その名を後に遺す偉大なる漢方医として、ポケモン界で称えられる事となる。

……そんなカンポー屋さん——外観は町のどの民家よりもこじんまりしている——の近くを「タンポポ茶（タンポポ抜き）」……ようするにポポッコをイメージし、山吹色と若草色のビタミンカラー彩色がなされただけの、タンポポ茶と名付ける必要性が分からないお茶で入らずとも保温効果が高まる身体を冷やしなから、ゆるやかに散策していたジツク達一同は、フエンタウン初のトレーナー戦を申し込まれた。

温泉町だとか、こここのところバトル三昧であったとか、トレーナーにそんなの関係ない。

視線が合ったらバトル、したくなきや足下だけを見る、トレーナースクールの最初の授業で習う基礎の基礎だ。

トレーナーの気配がする……のに、「それ」をせずに歩いていたと言うことは、言葉にせずともジツクや手持ち達は受け入れる準備が整っていたに他ならない。

「俺達はバトル、いつでもOKです」と、雰囲気語る。

じゃあ遠慮無く……!

それが太ましい体格で、額にはこの町で最も繁盛している

温泉宿の柄が入った手ぬぐいを巻き、勝負前動作が土俵入りの四股踏みであった【ズナ

ミコ]

あの手ぬぐいを巻く理由は、番頭の息子であり自分の家でもある大規模な温泉宿の宣伝になるからである。

「お前ジツクって奴だろ？ フェンに来てくれるとは嬉しいぜー！ 噂は聞いていたよ、バトルしてえなつてさあ！ 依頼としてメッセージ送る前で良かったぜ！」

「それはどうも！ 手持ち二匹の交代制でいいでしょうか？」

「いいぜいいぜー！ 煉獄風呂よりも煮え滾らせてくれよなツ!? いけえ！ ぎゅうたー！」

人柄が良くとても友好的に接してくれるズナミヨ。下手に嫌われる行いをすれば、自分ちの評判に影響が出てしまうだけに、礼儀や言葉遣いには細心の注意を払うようにしている。

だがっ、バトルとなれば礼儀も上下関係も話は別つ、己と手持ちの全てをぶつけっ、そして勝つっ！

「てつきりハリテヤマを使うのかと思つたが……いけっ、爽羽佳！ とんぼがえりだ！」
 かつてポケモンリーグで大活躍し、「闘神」の異名を与えられた、あばれうしポケモンケンタロス。

数多くの新規ポケモンやわざが発見された現行では、影が薄まってしまい全盛期ほどの強さは持たないが、各地に熱狂的な信者が根付いており栄光を再び物にしようと、ケ

ンタロスと共に頑張るトレーナーは多い。

ぎゆうた　と言うニツクネームは初期のリーグで、特に活躍したケンタロスのニツクネームと同一。

ズナミヨも歴代リーグを記録した盤面を拝見し、その大人気っぷりに心を打たれたトレーナーなのだろう。

なにせ出場トレーナーの百分が、ケンタロスを使用していたくらいなのだから……

「逃げやがったなアツ！　ンモオー！」

三本の尻尾をムチ代わりに、自らの身体を叩く事で闘争心を震わせているので、ケンタロス種は気性が荒い個体だ。

ぎゆうたの角は平均よりも明らかに太い周囲を持ち、力強く湾曲した形は彼方から垂直落下してきた三日月その物。

些か大きくなりすぎてしまい、突進力は強化されたが軌道修正が難しく、習性としてはマツスグマに近い。

どうやって当てるかがキモなのだが、飛行タイプの爽羽佳は戦術や育て方の関係で相性が悪い。

対空技のストーンエッジや、今となつてはダメージに期待できず奇襲の枠から外れないであろう、かみなりも覚えさせているが、ここは交代で現れたポケモンへ一撃を食ら

わせてから、自分もぎゆうたを交代するべきか……

「いかく持ちじゃ〜ん！ 私も得意じゃないから交代交代！ 出ただけで攻撃下げるとかズルい〜私もほしー！」

慣用句から拝借した技名、とんぼがえり。

命じた瞬間、もの凄いスピードで相手にぶつかり、その身を翻しUターン。相手が銅だろうが岩だろうが、トランポリンで弾かれる感触になるとは興味深い。

ぎゆうたは数あるとくせいの中でも、「場に出ただけで効果がある」強い安定感と戦場影響力をもたらず、いかく。

シンプルが故に強い、シンプルだからこそ強い。

開始直後で有無を言わず、物理型のポケモンに対しての有利回答となるのだから、例え弱点の物理格闘技を食らっても一撃で、ケンタロスが落とされるケースはまず無い。

ポケモンバトルでは、相手の攻撃を一回耐えるか、耐えないかの違いはそのまま勝敗を決する。

まけんき、と言うメタ的なとくせいを持つポケモンも居るが、その点を加味しても味方のサポートにも繋がられる強力さであるのは間違いない。現に爽羽佳は、物理タイプのおかげしか所持していないので、急所に当てなければダメージはこそばゆい物だろう。

……だからこそ、基本ステータスが高火力物理アタッカーなのに、クリアボディで相手からの攻撃低下を無効化してしまうメタグロスは、どれだけ「つえー！」ポケモンか三歳児にだって理解出来てしまう。流石は子供達のヒーローだ。

ケンタロスのシルエットが見えた段階で、交代を決めていたジツクはモンスターボールをキヤッチ、変わりにメタリツクな光沢を意識して製造されたタイマーボールを、前方へ投げる。このスピーディーな洞察力は八年間の賜である。

「マニユハハハッ！ 当たらなければどうと言う事は……ニヤい！」

逃げも隠れも……その言葉はこの子に通用しない。勝つためなら逃げるし隠れるし、虚を突き泣き喚いてでも油断を誘う。

「ほい〜ニヤ」

「あつ！ テメエ!!」

わざわざ角を掴んで、体操競技を意識しながら両脚をモロに広げ側転。

荒れ地フィールドなのに、耕す勢いで突進して来たぎゆうたの、すてみタツクルを余裕綽々に回避。

相手よりも精神的優位に立ち、場の流れを取り戻そうとする煽りも忘れない。

「防御は紙つぺらニヤけど、変わりに素早さと回避性能が高いキャラなのがネリちゃんニヤ。バランスを崩す程じゃあニヤいんニヤ〜……よッ！」

一体誰に向かって呟いたのか、何処へ対してウインクしたのか。

ニューラから進化して、わら半紙からダンボールくらいにはなったかもしれない。

それは兎も角として、短気なぎゆうたは早くもお怒り心頭。

攻撃力は上昇（した気がする）が、肉体ではなく精神に訴えてくる相手とは分が悪いと、判断してズナミヨ側も交代を決意。

「次はコイツだ！ 偶然だがお前のマニニューラとは爪仲間だぜっ！」

交代際に一撃を浴びせてやるっ、瞬間的な加速性能、物体の位置変化量ではジツクメンバーでも、ぶつちぎりなネリは主力技である、つじぎりを繰り返り出した。

……のだが、相手の後続ポケモンはダメージを受けることは無く、ツメをツメで受け止めていた。

「こうして出会ったのも眼で捉えられない、縁と縁が結びついたからだ。俺のツメとお前のツメ、交わったこの日を……」

敏捷な身のこなし、研ぎ立ての鉤爪は鉄板も軽々と引き裂き、自らの全身にも永遠に癒えぬ戦いの記憶を細胞として残す。

「忘れられない様にしてくれっ！ きりさくっ！」

不規則な傷跡は返り血を浴びたかの様に真っ赤、これが永遠の宿敵として義務づけられた、ハブネークの血で上書きされれば歓喜雀躍……ネコイタチポケモンのザングー

ス。

常にふてくされた表情、あまり等身が高くなくポチャ付いたお腹周り、残虐的な性格だが弱い者虐めはしない、本来の姿でも獣人的な容姿でその手の嗜好を持ったトレーナーを胸キュン。

人化現象が起こっても、ザングースを使うトレーナーは本来の姿七・人化三の割合の統計がある。

勿論ザングース本人が望むなら別だが、人化を好まれる方が珍しいポケモンなのだ。

ジツクも人化したザングースを見るのは、ご無沙汰になってしまう。持ち主であるズナミヨと似たり寄ったりの体格は動けるナントカ……

「エスパード、もう一度きりさくだ！」

「ネリもきりさくで応えろ！」

エスパードとニツクネームを授けられた♂のザングース。

無論、ぎゆうたは♂しか存在しないので♂。人化したって♂つたら♂。ツメにはツメ、きりさくにはきりさく。

「どつちのが練度が高いか、明るみになっちまうけどいいのかニヤ？」

「その余裕なセリフ、何発目まで続けられるかなつ？」

今のところ小細工無し、クリーンな技の応酬で賑わう露店の境目や、宿のベランダか

ら観戦しているギャラリー達の声援数も、ネリとエスパードで互角か。

二匹は爪劇俳優だったのか、仕組まれた手順通りに攻撃側と防護側がシャツフルさ
れ、どちらもダメージらしいダメージは無い。

マニユーラとザングースは、耐久力が低いポケモンだが、まさかの持久戦に突入する
のか？

……ここで拮抗が破れる突然の事態がネリを襲った！

「ニヤわツッ?!? なんなんニヤア、くく?!?」

「チャッンス! 十八番のブレイククロウを食らわせてやれえ!」

「ハイよおー!」

爪を交わし互角の戦いを繰り広げていたネリだが、エスパードからまるで後光を連想
させた神秘的な光が放たれた……と、捉えるも別の技を使用した形跡やモーシオンなど
は皆無だった。

「マニヤア、ア、ツ、くく! おおお、親父にも切り裂かれた事ねエのにニヤアア!!

……親どつちもいニヤいけど☆」

暗闇の部屋で突如フラツシユを焚かれましたに等しい、写真写りを誰よりも気に
して絶対に眼は瞑らないネリが、一瞬だけが過剰なまでの閃光で視界を塞がれ反射的
に目を瞑ってしまった。

一秒から二秒の間。上級トレーナーならば手持ちへ次の指示を下すのは難しくない。裂くよりも壊す、命中させた対象の防御力を擦り減らしてしまふ発見当初は、ザングースの準専用技とされていたが……そんな事は無かったので、資料が再発行された筆舌に尽くしがたい。エピソードを持つブレイククロー。

それほど威力がある技ではないが、タイプが一致し攻撃力自慢のザングースが扱えば、軽視できないパンチ力かつ、耐久型のポケモンは食らいたくない防御力低下のデバフがプレッシャーを与える！

受け止めるには女の扱いがなっていない、ゴツゴツメットと同じだけ無視出来ない追加ダメージを背中から受ける。えんとつやまが近い影響もあり一部は舗装されず、二足歩行のポケモンはモロに急峻や乾燥された地形の影響を受ける。

「背中もいてーニャー！……ゲージが一気に赤って感じニャア……！」

パーカーを被り直してビキニも……よし、ズレてない解けてない破けてない。

「まほうのビキニ並の性能を誇るから、そう簡単に壊れちゃ堪らニャーよっ！」

「そんなつもりは全く無いが、俺の爪でも破壊出来んとはどんな材質なんだ……！」

「乙女の秘密ニャー！ 勝てたら教えてやらニャーこともねえニャー！ きりさくうー！」

腰と目線を落とし、攻撃対象との距離を縮める瞬発性は、メタグロスの少女ほどではないが小柄体型に似つかわしくない、Dの巨峰が置いて行かれないか心配になる出力単

位。

獲物を追い詰める場合のみならず、普段は四本脚ので活動するザングース種。

宿敵のハブネークと対面、または怒った時は常時二足歩行となるが、人化しても四つん這いでダッシュする方が彼は慣れているのだろう。

再び爪と爪の連撃、勝ったら直に触らせてやるだの、体力では劣勢でもう一撃浴びたら確定ダウンするのに、デカイ口たたけるネリは何があっても勝つつもりなので、少しでも油断を誘える手段があれば即時実行。

単純馬鹿かと思えば（失敬）その場凌ぎから、緻密な策略まで……何処までが本当の「作戦」であったのかジックでも、逆に彼女の行動に引つ張られてしまう、妖しい感覚に陥ってしまいかねない。

（ひかりのこな持たせておいて良かった〜！ 海外のお客さんからの贈呈品だけどな……持たせた事も忘れてたし……）

ズナミヨの戦略……ではなかったらしいが、口に出していないのでバレてない。

昔は伝説のポケモンの身体や体毛の一部から、摘出されている激レアアイテムとして有名だった、敵の命中率を少し下げる効果を持つ惑乱の光粒。

近年ではケムツソが稀に所持していたり、バトル施設の景品になっていたり、価値は暴落し「なぜケムツソが所持をしているのか？」を論議として、タマムシ学会や各地

の研究機関施設は躍起になって調べるも、未だに謎のまま。

発生確率は低く、作戦に食い込ませるには信頼性に欠けているが、どんなポケモンに持たせても効果があるのでジツクも想定外であった。基本的に相手のポケモンがどんなアイテムを持っているのかは、発動しなければ分からない。戦いの際になんとく察させるケースもあるが、今回は判明した時には遅かった類だ。

(あのザングース、エスパルダは気がついてない！ 今度はネリの番だつて事を)

果たしてこのまま狡猾シーフ娘が、何も仕掛けずに終わるだろうか？

ネリの「したい事」を心で感知し、刻が訪れるまではマトモにやり合うふりをさせる。爪を武器とする者同士の対決で、何処か充実感を得ているエスパルダには悪いけど

……

「むがっ!!? なんだッ!!? グアッ!!? ぶはっ……!!?」

四回目のきりさくを終え、予測よりも若干早くその刻は来たり!

「なええええ! どうしたんだエスパルダア!?!」

再現映像か、今度は逆にエスパルダが神聖な光を放ったネリの姿に眼が眩んでしまい、リターンさせようとした爪の動きを止めてしまった。

その隙を逃すネリではない!

ノーマルに効果抜群な下段回し蹴り、ローキックで足下(ていうか膝)にお見舞いし

てやり、素早さを低下させられてしまったエスパードは、あのチビっ子から突然宿敵に似た波動を感じ取り、直撃を抑えながら毛を逆立たせ憤怒する。

アイツ、腹の底にハブネーク飼ってやがるッ!

「マニユハハハ……気がつかなくても仕方ニヤーよ? ネリちゃんの盗みの腕前は盗賊王よりも華麗に、音も無くパクっちまうからニヤ〜〜!」

まるで自分が最初から所持していたアイテムを魅せ付ける様に、片手でセルフキャッチしながら税に入ったドヤ顔を向けるのだから、勝利への一押しとなる。

あのチビ助……急いで自分の持ち物を確認したエスパードだが……ないっ! な
いっ!

「お前つ、俺のひかりのこなを盗んだのかっ……い、いつの間に……ハッ!」

エスパードがギミックに気がつくと同時に、ズナミヨも警戒心が足りていなかったと心の中で手持ちへ謝る。

マニユーラのとくせいは二つ、プレッシャー、そしてわるいてぐせ、だ。

自分に触れた者から、電光石火の早業でアイテムをかすめ取る。

寧ろ「相手の方が無意識に渡してくれる」表現の方が的を得ているのだとか。

ブレイククローを食らった段階なのか、それとも爪激を交わしていた最中なのか、真相はジツクとネリにしか分からないが、戦況アドバンテージも盗まれてしまった。

長引かせる事を意識し、わざと付き合ってやった爪と爪の攻防もオシマイだ。

「卑怯だぞお前！ その爪で勝負しろよっ！ 蹴り入れてくるんじやねえ！」

「マニユハハハ！ チミが勝手に勘違いしてただけニヤ！ ネリちゃんは最初からマトモに戦ってやるつもりはポケルスに感染する確率も無いニヤ！ 勝ちやいいんニヤ勝ちや！」

注意：主人公側のポケモンです

正々堂々としたバトルを裏切られた……と思っているのは、残念ながらエスパードだけであった。

主人のズナミヨもきりさくの応酬で、身綺麗な雰囲気飲まれそうだったけど、マニユラってポケモンの性質は大体こんな感じである。

「約束をしていた訳じゃないからなっ……！ 悔しいが俺達はしてやられたらしい、相手の体力は残り僅かだから——」

遅いつ、もう遅いつ、攻撃範囲外から逃れられている。

遠距離攻撃を覚えていないエスパードは、れいとうビームの出力を最低まで落とした見返りとして、極めて発動が早く連発も可能となったこなゆき程度の技で、空中に足場を作りながら闊歩するネリを止める術がない。

足場などすぐ溶けてしまいが、溶ける前に渡って作って、ジック達ですらネリの、黒い小娘の姿が目視不可となった瞬間に――

「おりのつづてー！」

「ネリちゃんが盗賊時代に編み出したかった逃走術！ ご主人との修行で上空に逃げている間に力を溜め込む事が出来る様になったんニャー！ もう長引かせる必要は無いニャー！ 釣りはいらニャいから全部持ってけニャアアー!!」

極小範囲のれいとうビームを放つ時は、他の技を使うことは出来ない。

だが力を溜め込む事ならば出来る！

本来こおりのつづては、威力が低い代わりに発動までの準備時間も発動後のラグも無い、隙の少ない攻撃だが、氷のエネルギーを凝縮させて、巨大な剣を生成する事も本人の努力次第で達成可能だ。

それで戦うポケモンも居るが、ネリは身の丈以上もある武器を振り回す趣味は無い、手裏剣を象っているのは本人的に忍者のつもりらしい。

普段は使わない力を込めたこおりのつぶてを放つ前、最後の足場と共に自身も上空から両手と身体を水平に保って落下。

パラシュート無し、紐も無いバンジー、飛行タイプにでもなっちまったのか、降りてこなければ攻撃が出来ないのです、回避の指示をエスパードに与えたズナミヨだが――

「動け……っ！?! こんな使い方――アッ！」

巨大化させる為に凝縮させたのではない。

大量のつぶてを放って、ターゲットの体温を奪う氷獄の檻で捕縛する為だ。

エスパードを中心に円を描き、ダメージは受けていないが温泉町との激しい温度の移り変わりは、真夏から真冬に何の準備もせず突入してしまったに等しく、皮膚が裂かれる痛みすら生じた。

節々が鈍いつ、仮に動けても檻を砕いている時間も無い。

「つじぎりイ！ ver666!」

「くはああ。あ。あ。ツ。ー!!」

ネリにれいとうビームを覚えさせている理由は、攻撃に使用する為では無い。マニューラの特攻力は平均以下なので、弱点を突いても大事にはならない。

盗賊時代に「わざマシンが使えたら、こんな風に逃げられるのに」と、幼い頃から夢描いていたビジョンはトレーナーを得て、叶ったのだ。

もう盗みを働くには使わないので、バトルでの初見殺し要素として活用させて貰っているのだ。そして今回ネリが刻印したつじぎりパターン、666は終末の獣を意味する悪魔のナンバー。

ぼっちゃりお腹にゲマトリアな痣が浮かび上がったのは、身動き取れぬ間に三回食らわせたからである。

ザングースの防御力ではマニユーラの攻撃を三回も耐えることは出来ない……逆転の勝利である。

「……………うん！ ネリちゃんカッコ」

「ぎゆうた！ すてみタツクルだ！」

「ぶボオ！? らっつまにゅっう！」

Segment・tetra——女の武器

極悪非道？ だって悪タイプだもん ネリ

お約束の決め台詞が言い終わるまで、待つてくれるお人好しばかりじゃない！

ネリ最大の欠点は、相手ポケモンを仕留めたら「必ず決め台詞で締めくくろうとする」難癖。

少なくとも五秒間は、完全なる無防備状態。背を向けてしまうオマケ付き。

こればかりはジツクがどれだけ注意しても、トレーニングを重ねても直せないの
で、ネリの個性として受け止めては居るが……

(やだっ、私のダチかつこ悪すぎ……！)

(言わんこつちやねえ！ カッコワルッ！)

(ネッ、ネリさん……)

(……………)

(ミノミノ……ハア)

ボールに入りながら白ける爽羽佳、分かっていたが顔が赤くなるジツク、何度も見た
光景だが眼を点にさせてしまうメコン、無言のままお手上げジェスチャーするメタグロ

ス、極めつけてミノムシにまで呆れられてしまった。

ギャラリー達もお葬式ムードでシーン……タイムマンバトルでは気にする必要は無いが、交代制やチームバトルには不適合過ぎる難癖が原因で吹っ飛ばされ、バクオング並に顎が地に落ちようとしている。

「戻れネリ！ これで一vs一か、いつてこい爽羽佳！」

「マ………マニユーン………ネリちゃんカツコわるい……ニヤ……」

ダンボール装甲をオーバーキルされ、地表に頭が埋まりながらお尻をピクピクさせていた、黒い物体をボールに戻して第一バッターが舞い戻る。

「ぶっちゃけ、こうなるって私も予測してたからさっ！ 繰り出す技はそれしかないよねっ！ とオ！ オウムがえしッ！」

後で脇腹を突いてやらなきや、どうせ死んでも直る見込みの無い、手癖より残念な習性だけど……

「ウモゴッ！」

牛だけに「ウモ」と発してしまうぎゆうたへ、命令も無しにボール内で攻撃準備動作を終えていた爽羽佳は、相手ポケモンが使った技を、そっくりそのままコピーしてしまふ非常に独特で成果を上げるには、タイミングが重要となるオウムがえしで突撃仕返し！

嘴形となった鋭利なつま先は額に命中だ！　とつても痛そう〜！

スピード感も二倍つ、グラフィエンシートも真つ二つになる仇討ちには、ぎゅうたも勢いを中断され真後ろへ倒れ込んでしまった。

「いかくも食らつてないからな！　爽羽佳ここは……で、お願いしていいか？」

「マツ、マジい……？　あんま使いたくないんだけどなあ……ご主人がドーしてもつて言うなら……」

激昂しながら起き上がったぎゅうたは、対空技であるストーンエッジを爽羽佳目掛けて放ちまくる。

飛行や浮遊能力がなければ、思うような速力を得られないなど素早さに影響を及ぼしてしまう荒れ地、並びに起伏や傾斜に囲まれている山岳地帯と、岩技の相性は良い。

障害物の一切配置されていない、平地でもストーンエッジは使うことは出来るが、ターゲットの真下のみしか岩を隆起させられない。

威力自体は申し分なく、岩タイプ以外でも幅広く愛用されている技だが、軌道が単調なので避けられてしまい易い。命中率が低いならぬ、攻撃範囲が狭いのだ。

「右から左から斜めから……！　うつとーしいっ！！」

それは【地形効果】と公式用語が割り当てられている。

例えば砂漠で使用するれいとうビームは、多少なりとも威力は下がってしまう。

炎やマグマでも溶かすことは出来ず、静かに佇んでいるだけでも氷山が積み上がった
しまう冷気を持つ伝説のポケモン、レジアイス並の強力なパワーがあれば話しは別だが
……

逆に極寒の地で放たれるれいとうビームは、その場所に流れ・集まる「気」の影響で、
一回りも二回りもダメージや範囲に充填時間にまで、目に見えない力が影響を及ぼすパ
ワースポットの祝福を受ける。

寒い土地で氷タイプと修行し、長所に磨きを掛けるのか。

暖かい土地で氷タイプの修行をし、伸び悩む欠点を補強し不向きな地形や天候でも、
通常時と同じかそれ以上の威力に仕立てるのか。

炎エネルギーが充満しているえんとつ山を中心に、小さな山々に囲まれた地理を持つ
温泉町は、炎や岩タイプなど親和性のあるポケモンに打って付けの対戦場であると解明
されているのだ。

「避けんなんモー!! 当たれったらッ!」

「当たったら痛いでしょっ! んもくくこっちの番だオリヤー! せえっ!……のオ
!」

生天的な飛行手段があるので、地面がどうなつてようと影響を受けることはないが、
自然の記憶刻まれる岩肌に挟まれているので、横から斜めから……エッジを出現させる

位置が特定出来ない。

見えない力が味方しているのはぎゆうた側、結構な勢いと速度で連射してくるので困った物だ、PP切れを狙うのも手段ではあるが……

「……ほらあ、あなたってじ・つ・は！ この服がどうなってるのか……き、気になってたわよねえ……？」

「んもお………？」

「もつと近づいてもいいよ……？ ファスナーはねえ……ここまで……下ろせちゃったり出来るのお……ああん、フエンあついなあ……脱いじやおうかな……ダメえ、女の子の部分が見えちゃう……」

「んモ……？ ンモツ！ ンモツ！」

何が起こった!? バトル中にオニドリルの少女がストリップショー!?

その気がありそうな言動あれどグイグイ迫られるのは苦手で、ホットジェル付けたご主人の手で羽の付け根を、やらしく……間違えた……やさしくマッサージされると嬌声を上げて恍惚してしまう、見た目JKの天真爛漫娘がフロントホックをジ、ジジジ……眼にラブカスを泳がせながら、鼻息荒くウモーしてるぎゆうたは、薄く脂肪が乗りくの字型になる胸を通り越し、アウルヴァンデイルの居住と見解されし臍部に、全神経を集中させバトルどころではなくなっている。

「コリアアぎゆうたつ！ お前には彼女（ミルタンクちゃん）いるだろおー！」

「もうちよい！ もうちよいでサンクチュアリを拜めるのらあ……？ しんぴのまもりをきりばらいして欲しいのらあ……？ 貧乳も捨てがたいのらあ……？」

ここは桃色湯気温泉？ とても幸せそうな雰囲気にも包まれ、煩惱に酔い痴れる！

「だア、れエ、がア、！ 貧乳だアアン!!? Bはあるんだからねっ！ 貧じゃなくて並なの！ 美なの！ 適なの！」

そりや人化したら殆どがGカップ以上となる、ミルタンクと比べれば大体のポケモンは小さくなってしまいが……

他人に言われるのはピキツとするっ。

異性の性的衝動を刺激させ、高い行動不能に陥れる恐怖の状態異常、メロメロを付与させる技名もそのまま、メロメロ。

私服は実用性を重視しながら、身体のラインが大体露わになるのでメロメロを使わずとも、偶に♂ポケモンが手を緩めることすらあるシャープなボディを持つ爽羽佳。

もう少しで下腹部がつ、はいてなさげ疑惑飛びまどうライダースーツを限界付近まで前開きし……ここからはお預けえ！

一度食らったら最後、バトル終了か交代までメロメロは直らない！ ズナミヨの手持ちはぎゆうたのみ！ 万策尽きた！

「しえいはっ、しえいはっ、しえいはああ！ みだれづきー！ みだれづきいー！」

おっぱい大きい彼女なんてポイント、誰よりも魅力的になつてしまったBカップに蹴り上げられても、全くの無抵抗でラブカス眼もそのまま。

もつとだの、そこイイだの……彼女を殺した犯人を見つけたかの見幕でエツジを撃つていた姿はない……マゾか、ヘンタイか。

ギャラリーの皆様も、写真撮つてSNSにアップするわ、脱いで見せてと煽り始めるわ、メロメロを使ったバトルは何処の世界もこんな感じですよ。どちらもギリギリ犯罪ではありません。

「リフトアップ、リフトアップ、リフトアップ！ トサカ来てんだからねえ！ ドオリルくちばしいいっ！ ニー、レンダアア、ア、ア！」

あまり重くないポケモンに対しての限定技。無抵抗のぎゆうたを連続して上空へ持ち上げる光景は、壁に嵌められコンボをキメられる世紀末な格闘ゲーム。

ぎゆうたは、あいての爽羽佳に メロメロだ！

メロメロで わざが だせなかつた！

右目を隠していた鶏冠が、激おこプリンなエモーションを源に、ヴァサツ！

針山の如く逆立たせながら、地上との距離二百メートル地点でもういいだろう……！

ハメコンボを取り止めれば当然、抗う術の無いぎゆうたは両手足を合わせながら、ベッドへ襲いかかる物理的に困難な体勢で爆落する。

さらにダメージを加速させる為に、身体を左へと捻り高速回転、お得意のドリルくちばしを腹部へたたき込み、鬼気迫るニイレンダア（二連打）

「……………ひん……………にゆうう……………」

メロメロが解けた、即ち戦闘不能。

歯医者さんのドリルで虫歯ならぬ、淫欲を削り取ってトドメは見栄え重視のヤクザ蹴り！

「フツ……………、これぞずつと私のターン……………」

羽の間から手鏡と鳥ポケモン用の小型ブラシを取り出し、乱れた鶏冠を整え終えたら縁の無い荒地地へと降り立った。

実はオウムがえしでの反動を除けばノーダメージ、裏ピースを高々と掲げながらフアスナーを胸元まで引つ張り、勝利者のアピール！

キメ台詞はこういう、完全勝利を確認した状況下で初めて発する物である。聞いているか？ どつかのマニユ娘？

絶大な効果を持つが、本人が意外と初心なので中々使う機会が無かったメロメロ。

「ああ〜んもうっ！ 女の子を辱めたバツ！ ご主人は後で私の全身をしたくなくる！

ポケセンで休んだだけじゃあ、指圧や按摩はされないからねえ！ セルフよりも誰かにやって貰ったほうがずっと気持ちいいし……ね？」

「分かってるって！ 使わないとちよつと厳しいと思つたからさ。責任は取らせて貰うよ、お疲れ様！」

自然な流れで黄色の強いブラウンカラー、レイヤーを施したロングヘアをスツ……と一撫で。

撫でて欲しい訴えなくとも、さり気ない形でご主人は応じ、バトルを終えた自分を労ってくれる。

旅館のマッサージチェアよりも、気持ちよくしてくれる、ジツクの腕に引っ付いてこそぞとばかりに、好意を伝える根っこは臆病なイマドキガール。

（いいなあ爽羽佳さん……私もジツクさんと……ああして……こうして……モゾモゾモゾ……／／／）

（ちよ……だれか……ネリちゃんも褒めて称えるニヤ……し）

夜中にこつそりと、ジツクの布団の中に侵入してしまおうか策謀し、勝手に発熱しているメコンはお情けを、もう誰もが忘れていたマニユ娘はご褒美を要求している。

……ジツクなら纏めて相手にしてくれるハズだ、性的な意味では無く……

「ちよつとおかしな方向に進んだ気はするが……負けたぜっ！ マニユを倒せた時

は「イケるっ！」って思ったんだがなあ〜！ 手持ちの育て方を変えて、俺も知識を深めて周到な作戦を立てられる様にしないとなあ……！ ありがとうジツク！ ポケナビのアドレスを交換してくれないか？ エントリーコールに登録すれば何時でも力を貸してやるよ！」

「こちらこそ… ありがとうございませす！ 凄く楽しいバトルでした！ 最後はちよつとすみませんで感じますが……ええつ、俺のアドレスも登録お願いします！ 是非とも再戦してください！」

視線が合えばライバル同士、バトル終わればズボンで汗拭き、握手交わせば仲間同士。出身地も肩書きも年齢も性別もポケモンバトルには関係ない。

勝敗が全てではない、密度濃い内容であればどちらのトレーナーも手持ちも満足し、誰とも被らない各々の物語に好影響をもたらしてくれる。

「ジツクさん、わたしもバトルしたいのですが」

「おう、次はキミに頑張つて貰おうかな」

たましいが駆け足早いズナミヨへ、手持ち総勢で頭を下げてから手を振つて、再開を約束してから気持ちよく再出発。

ツインテールの少女は、皆の真似をただけで何の感情も秘められていない挨拶であつた。

それよりも勝負願望を満たしたい、ミナモとは異なった環境でバトルをしたい、少女のライフログには過去に戦ったポケモン、トレーナーのデータが自動入力され、膨大な数のメモリに保管されている。

一日最低二十戦。少しでも実戦経験を得たい気持ちは理解してやれるが、単なるノルマになって来ているような……

チーズドッグを食べている時以外は感情を虚無にしている少女は「強くなる」ヘコネクトする行為に拘っている。

（俺達の下から去りたい……から？ 早く強くなって早く出て行きたいから……？）
どうしても頭に浮かんでしまうのだ、朝起きたらメタグロスが消えている望まぬ明日を。

その可能性を排除できない物か……少女には強くなって貰いたいが、出て行って欲しくは無い。

それをしてしまったら、約束を破ってしまうし何よりも、少女の意思を無視し縛り付ける形になってしまふのでは？

……ダメだ、自分一人では解決できそうに無い。この旅行が終わったら、いや、夜にでも皆に相談して意見を伺おう。

直感した、この旅行中に答えを明確にしなければ、すぐにでも少女は泡沫になってし

まいそうで……

Segment・tetra——猛火の兆候

メタグロスの意見を聞き入れて、フエンタウンと百十二番道路でトレーナーとのバトルを五戦行った。

折角、宿泊券を頂いてこの地にお邪魔しているので、それだけでは勿体ない。

皆のリクエスト、ジツクの提案により足湯に浸かる、縁日での射的などもインターバルとして取り入れているのだが、肝心のメタグロス本人は「そんな事している間にも、バトルの一戦でも決行出来るのに」と、あからさまに不満げな雰囲気のままジツクで、ジツクに尋ねる。

「キミの考えは分かるけどさ、皆で行動してるんだから少しは付き合っただけで欲しいな。時代の流れが異なっている町並み、ミナモとは違う活気に包まれたお店とかさ、ぶらり歩きしながら散策も旅行の醍醐味だと思っただけな……」

「……わたしには理解出来ませんが」

わかっちゃいたけど……やはり難しい。

風情を何となくでいいから味わって欲しいと、目論見も含んでいたが戦闘可能なコンディションなのだから、バトル以外は時間の無駄とすら捉えているのかもしれない。

少女にとってプロセスを踏む為の実践が大事なものは重々承知だが、旅行中くらいは控えてミナモには無い歴史に文化、景観を楽しんだり様々な色や効能を持つ温泉でまつた出来ない物かと、批判は覚悟であつたが……

「……もうすぐ十八時か、これからお祭りに行く予定は組んであるけど……メタグロスは？」

初日は夕方から、二日目は朝つばらから二日掛けて行われる、町全体が一致団結して開催する夏祭り。

特にイツシユ地方からは、夏祭り目当てで短期間の滞在希望電話予約がとても多く、宿屋は満席でキャンセル待ちも期待出来ない注目度。

盆踊りに投げ縄に綿菓子、海に向こうの地域にはそういう習慣や文化が無いので、ここぞとばかりに「いろは」を体験しに来てくれるのだ。

ちなみに、宿の人気料理トップ三は「スシ・テンプラ・ソバ」なのだとか。

「遠慮しておきます」

「勿体ねえニヤあ、メタ子。花火したりとか神輿担ぎたいとか、そういうジャパニーズ欲はそそれニヤいのかニヤ？（メタ子が本気出せば一人で担げそうニヤけど！）」

お尻に十字の絆創膏を貼り付けている黒娘は、例の失態を全く恥じず、懲りず、新しいキメ台詞の思慮を巡らせながら、相手の答えは読んでいるが気を遣ってくれた。

「……本日のバトルは終了したと推定、宿に戻っています……」

少女はまだ戦い足りないのだろう。少なくとも残り十五戦は……

メタグロスの少女と二人旅だったなら、何とか捌けた目標だけでも他の手持ち達とも意見を交え、最終的な判断を任せられるのはトレーナー。

多数決とは少し違うけど、少女の主張だけを回収する訳にもいかない。

「……………分かった、参加したくなったら何時でもいいからね？ ゆっくり休んでいて……………」

(ジツクさん…………)

年に一回の催し物よりも、貪欲…………いや、強欲な姿勢で「納得の強さ」を創りあげようとしている少女。

皆で一つの神輿を担ぐよりも、戦って勝つ方が達成感を得られてしまう。それが強さへのプロセスとなるから。

本当は参加して貰いたかったけど、嫌がる少女を無理に連れ回す訳にはいかない。

主人の背中と感受性が不足している蒼い少女の背を、心配そうに見つめているメコンも残念だが…………説得は効果無しだ。

極論とすれば、バトルはミナモに帰ってからも出来る。だがフエンのご当地イベントは今日と明日しか行われない。

そういう事が伝わって欲しかったのだが……



「……………」

少女が帰宿し二十分ばかり経過していた。

もう過去の戦闘分析、内蔵メモリのシミュレートも飽きてしまった。

正確には想定しうるパターンを、全てやり遂げてしまったのでこれ以上は無駄であると判断。

パンチラしたって文句は言えない、悪いのは寧ろ魅せ付ける様な短さの下衣である少女側……にならないのは世の常。

コンパクトな身体を折りたたむ体育座りは、本来の姿の電磁移動姿勢を酷似させる。目のやり場に困ってしまうが、少女はこれが基本スタイルなのだ。

「体力は全回復してます……催し物の終了時間まで大分掛かりますね……それまで暇……それは勿体ないです……となれば……」

宿に戻らないで、最初からこうすれば良かった。

一人で野生ポケモン、別にトレーナーだっていい、バトルしに行けば良い。

ジック達が帰宿するまで待機する必要は無い、実践が最大の学習源、迷い無く決断した少女は間接の動きを感じさせない、見えないピアノ線で操作された人形のように立ち上がった。

（トレーナーから指示を貰わずとも、わたしは戦闘力向上プログラムの最低水準を満たしてます。明白なまでの戦力差でない限り、わたしは負ける事が無いっ……）

それとも、求めているだけの強さには惜しくも届いてないが、この地で彼らの下から去ってしまう選択も取れるのでは？

自分はモンスターボールに納まっていない、逃げる事は何時でも出来る。

元よりツールとして利用させて貰っていたのだから、一先ず纏まった戦闘力が備わった自分なら、残余プロセスは一人でも達成出来る。

（……一つだけ、心残りなのはチーズドッグ……）

唯一少女が無表情であるが、心を弾ませ悦楽の気持ちを生み出した焼き菓子。

あれだつて小麦粉、バター、卵、牛乳を混ぜ合わせチーズを挟んだだけの、つまらない俗物だとブレインコンピュータでは、判定が出ているのに……

（いざ食べてみると……とつても美味しかった……やつてみなければ分からない……？
試して見なければ分からない……？ 仮説による裏付けもない、論理的ではありません

ん、わたしには不要な感性であるハズ……感……性……？）

そんなの　いつ　うまれていた　？

キツカケを与えられなければ、チーズドッグすら不要物と判断し、一生あの美味しさを
知る事は出来なかった。

(……………)

チーズドッグを口にして「美味しい」と感じられる身体を、舌を、自分は持っている
と判明した。

美味しいの定義は未だに謎だが、食べ物など稼働エネルギーの維持が目的で、必要量
以上の摂取はしない、それで良かったのに十本も二十本も、バトルに勝った分だけ買っ
て貰うよう、強く要請していた。

その隣には……バトル中だけでなく、ログハウスでの生活中でも決まってあの男が居
た訳で。

「……………」

無意味、この地で彼らとの関係を絶ち、自分は一人で生きていく。

一時的に思考を切り離し、ポケモンたる本能に従って、戦いの相手を捜し求める少女
は足音も立てず、ジツク一同の宿を抜け殻にしてしまった。



「……………なぜ、どのトレーナーも戦っていないのですか……………そんなに『お祭り』とやらは楽しいのでしょうか、理解不能」

メタグロスの少女は百十二番道路への段差を降りて、北へ進めばほのおのぬけみちへと入り込む地点まで、戦いを求め流離っていたのだが、誰も彼もお祭りに夢中で闘争心を緩和させてしまっている。

フエン全域がお祭り会場となっているが、百十二番道路以降は人気もポケ気も無い。時々草むらが「カサツ」と音を立てるが、戦うに値しない弱小ポケモンだ。

「……………あむ、もくもく、あぐあぐ……………チーズドッグには劣りますが……………悪くない味ですわ……………もぷもぷっ」

仄かに熱を帯びた草むらから、子供のドンメルが飛び出して来たが、戦うつもりは無く相手がメタグロスだとも分からず、幼い故の児戯。

手甲を出現させる事も、歩行速度を変化させる事もせず、会場付近に増設されていた縁日の店主達が「お嬢ちゃん可愛いねえ!」「可愛い子にはタダであげちゃうー!」など、お祭りと温泉町のホットな雰囲気になれず、キンキンに冷え切ったプリティ・ブルーメタリックへと、売り物をバンバカ手渡して少女は両手いっぱい抱えながら吟味中。「アチャモまんじゅう……………カラーヒヨコのように色が様々……………かざんのおきいし……………」

真つ黒なコロッケですが焦げてはない……リユウラセン……ツイスターポテトはスパイスが……うむつ、美味しいとは……なんか悔しいですつ……」

実はお祭りのスケジュールに組み込まれている、バトル大会は「明日」開催される、その代わり本日は一切のバトルイベントは無い。

フエン独自の「お祭りの時くらいは忘れましょう」という伝統的なしきたり。

トレーナーもポケモンも戦うだけが全てじゃない。忙しいアナタも偶にはゆつくりしてきなよ。

プロのバトラーとして収入を得ている者だつて、夕方〜明日の朝まではキツパリ忘れて、手持ちや見ず知らずのトレーナーと一緒に食べて、歌つて、踊る！

「元は取れた、という事にしておきましょう……サクサクサクサク……」

それを知らずお外に出てサーチしても、現れる訳が無かったのだ。

仮に出現しても先程のドンメルとほぼ同等な、自分が経験を得られぬ対戦者。

チーズドッグには負けると、心の中で何度も繰り返しながら咀嚼して行く。

……つぶ、はみゆつ……ちゆば。ちゆぱつ……は……あん、くぶるつ……ちゆぶつ、ソース、零れそうです……じゆずずつ……ぬちゆつ……ぬにゆつ、ぬるつ……ずつ……れろつ……

トロピウススのチョコバナナを、最小限の動作でパクリッ。

上唇で固定しながら舌先でチロリッ、チョコソースが垂れる前に裏側に舌を向けピチャピチャ……官能が膨らむ卑猥な食べ方として捉えられそうだが、モジュール解析を行い効率を重視した結果、この様になっているだけである、だけつたらだけなの！

小柄だが豊満なおっぱいをこの時ばかりは活用し、大量の品を落とさない様子上側からホールドしている。

こんなだらしない脂肪、戦いに影響を及ぼし兼ねないので自分には不必要――

「クイタラン、よこどり！」

「……………」

あまりに油断つ、不覚つ、屋台の品々をレビューする内に警戒心まで薄れていた。レベルの低い野性しか居ないし、トレーナーも見当たらないから諦めていた理由もあるが………**猛省。**

「……………誰ですか、わたしが貰った食品……返してくださいね？」

「げっへっへ……ヤクダねエ！ 特上のメタグロスを見つけたんだぜ？ どっちの意味

でもタダじゃ返さねえよ！」

「……………」

木々や岩場の影から出現したのは、トレーナーと思われる男達が三名、手持ちである最長で二十メートル以上にもなる炎の舌を持ち、トレーナーを模倣し鞭の様にしなせる人化クイタランを始めとした、炎ポケモンが合計四匹。

知性に乏しそうな反社会的な顔つき、出で立ちも粗暴で錆びたチェーンを地面に叩きつけ、自分が強いと周囲に威嚇する迷惑行為を馬鹿の一つ覚えの様に繰り返しながら、汚らしい視線でメタグロスへ睨みを利かせる。

「……丁度良いです、目標の二十戦まで届いておりますので、貴方達にはわたしの糧となつて貰いましょうか……微細にしかありませんが」

「お〜お〜生意気だねえ！ お前ら！ このメタグロスをトラヴィスさんへの貢ぎ物にするぞつ！ こんなクソ田舎にメタグロスが居るなんざア、理由は知らねエがど〜でもいい！ やつちまえ！」

「……………じしん」

レアで強力なポケモン、しかもトレーナーに値する存在が居らず一人歩きしていた。

メタグロスが強くて、炎タイプのポケモンで固めている自分達からすればカモ、カラカラがふといホネ持っていたくらい都合がいい！

よこどりを命令して、少女が食べていた物を根こそぎ奪ったクイタランを先頭に、バオッキー、ダルマツカ、デルビルが続けて炎技を発射——する事は許されずに、手甲をフィールドにぶつけ大地を揺るがす衝撃波によって一掃される。

「弱い……殲滅を続けます」

「……………ウソ、だろ……俺らのポケモンが一撃で四匹も??」

「オイツ！ グロスってそんなに早くなかったハズだろ？ ちっこいのおっぱいデカいし、本当にアイツはメタグロスなんかっ？」

「うるせえな！ 深紅の瞳に蒼の手甲、身体中のバツテン印にこの攻撃力、メタグロス以外に考えられるか！ 数で攻めりゃいいんだよ……相手は一匹だが俺らは何匹も所持してんだぜ？ 先に力尽きるのはメタグロスだあ！ ヒヤハアアッ!!」

低劣で品性を感じない声質だ……そんなのが三人も。

他人数に襲われているが、二匹目のクイタランをかみなりパンチで伏せ、群がるドンメル——先程の子供と比べて格段に目付きが悪い——が、はじけるほのおを撃ってきたが、ひかりのかべで全弾防ぎながらこうそくいどう、密集していたのでじしんをたたき込めば纏めてノックアウト。

多勢に無勢ではない、寧ろ苦勞せずに勝てる確信がある。

「ヤベエな……こうなったら……!」

「む……………」

物量作戦も幕切れが近いと悟ったチンピラは、ボスの元へ直接誘導してしまおうと少女が拾おうとした、定番からフエン祭りでしか食べられない品々を、残りのデルビル三匹に投げ渡す。

「…………誘われていますね…………分かって入り込むのは、いい気分ではありませんが…………アチャモまんじゅう、紫色と橙色が残っておりますので…………奪い返しませう」

この距離ならサイコキネシスは届く、しかしデルビルはあくタイプなので無効化される。

チンピラ共はタイプ相性まで考慮しておらず、残ったのが偶然デルビルだっただけ。彼らにその辺りの戦術を練る即応力は皆無。後手になってからやつと頭が回る。

ほのおのぬけみちへ逃げるデルビル達を追いかけに入った少女。

（あそこは俺らのアジトだ！ お前の苦手な炎ポケモンと仲間達が出迎えてくれるぜえ？ トラヴィスさんも居る事だな！ これでバトルでの負けがチャラになるはず）

食に対する意識が芽生えている少女は、スルーせず全員なぎ倒して奪われた物を残さず取り戻し、早くアチャモまんじゅう食べ比べレビューを完成させたい。

…………なんだかんだ、お祭りで貰った品々は気に入らしたい。

何が待ち構えて様が、今の強さならば負けは無い。



周囲に火山泡が吹き出しているが、床暖房よりちよつと熱い域に収まり危険性は低い。

砂漠に入れない者は手持ちを鍛える意味を持たせながら横断路にしている炎のパワースポットは、えんとつやまが噴火し溶岩が流れた跡、活動が鎮まった事で空洞となった天然トンネルだ。

最近この抜け道周辺に「ならず者」が出現し追い剥ぎの様に、数に物を言わせて襲われる傷害、または窃盗事件が多発している。

彼ら下つ端を力で掌握している大将こそ、フエンジムリーダーの門下生であり、一番弟子で将来性を期待されていたが劣等、挫折、絶望、自己否定。プライドを失った男……
《トラヴィス》

「へー、メタグロスを見つけてアジトに誘い込んで……と。予想を超えた収穫じゃねえか、数ヶ月、相手を選べば数年は金に困らねえかもしれねえなア！ 俺様のポケモンにしてマニアアへ売り払ってやるぜっ！」

下つ端共から連絡を受け取り、かいりきで岩を動かす必要のある通路の最奥部に、都

合良く玉座の形をした岩椅子で脚を組みながら手を叩き大笑いすれば、通路全体に狂声が響き渡り集結していた下つ端共は、ぬけみちの蒸し暑さとは違った彼への恐怖心で冷や汗が止まらない。

「てめえらよオ、俺様の手を汚させるんじゃないぞ？　メタグロスを潰せ、そして捕獲しろっ！」

……目的を見失い自分にも世間にも、怒りを周囲にぶつけて誤魔化している。

モンスタールボールをトスしながら、肩肘を付き王様気分のまま下つ端に命令する。

コータス、ヘルガー、キュウコン、アジト内に集っている者達の手持ちは、少女が戦ったチンピラ共より強力らしい……やはり目付きで悪印象となってしまう損なポケモン達だ。

それが十匹、二十匹、責め苛むバトルロワイヤルの開幕だ……

Segment・tetra——レゾナンス

むしのしらせ、的中して欲しくなかった！

メタグロスの少女が気になって、言い様がない焦燥感に駆られたジツクは、手持ちに謝りながら帰宿した。

体育座りでジツとしていたら、どれだけ安堵出来ていたか、少女の姿は無く、置き手紙などの痕跡も当然残されていない。

逃げられてしまった、バトルが出来なかった不満なのか、最初からこうするつもりだったのか、大急ぎで手持ちを呼んで搜索するに至る。

爽羽佳は上空から、ネリはフエンタウン内を、メコンは百十二番道路付近で目撃情報を集めながら、只管名前がない少女の種族名を叫び返事を祈願するも……

ズナミヨも協力してメタグロスの搜索に出向いてくれた！ 実家が大忙しなのにほっほり投げて……ぎゅうたやエスパード、他の手持ち達も総動員してくれている！

大変ありがたい！

「クソツ……一人にするんじゃないかった……強引にでも一緒に居て貰った方が……それか俺も彼女と一緒に宿へ……ああつ！ クソツ！ とにかく彼女を見つけないと！」

モンスターボールで捕獲していないので、戻す事も出来ない。やはりモンスターボールに収納できない状態はデメリットしか無いのだ。

標識に掛かれた適正速度など無視、ダートじてんしやが悲鳴を上げかねない限界ギリギリの速度で、砂煙を巻き起こしながらサスペンションを軋ませ、気分屋の猫に似ている少女を一意専心に呼びかける。

……返事はない、速度超過のレブに当たっても無視！ 自治体への対応は後でいくらでもする！

旅で培ったテクニック総動員し、プロアスリートが記録したタイムよりも、速い速度でデコボコさんどうを制覇してしまったジツク。

チューニングしたダートじてんしやは、通常よりも少し速度を伸ばせるスペックになっっているが、マージンなど全く考えていない。

泥でペイントが汚れようが、サイドを岩にぶつけフレームにダメージが入ろうが、後で直してやるから！ 今だけは持ちこたえてくれ！

天然バンブで身体が突き上げられても、驚異的なスピードを保ったまま急傾斜からの……ジャンプ！

谷底に落ちたら命の保証は出来ない、プロでも危険視しているデンジャラスラインを通り、かなりの飛距離を無謀に滑空してしまった。

着地フォームなんてどうだっていい、叫びすぎて声が枯れているけど……それでも彼女を呼ぶしかないっ！

「……………ミノツ!? ミノミノオ！」

「どうしたっ、かたくりこー！」

「ミノホツ、ノノノオ〜〜！」

「……………こつちなのか？ お前を信じるぜー！」

「ミイイイイノ……………ツ！ ミノノオオツ！」

リュックサックに収納され、今まで沈黙していたミニمام・ミステリアス。

頭のとっぺんに飛び移り『触覚を向けた方角へ走れ』と、翻訳は不可能だがフィーリングで察つする。

……………？ かたくりこの顔がマジだ。

又ボツとした表情じゃなくコールを受信し、脇目も振らず遭難者を救出しようとしているレスキュー隊員の様に。

超高性能なナビシステムとなった、ジツク一同のマスコットキャラの突発な猛り声に面食らうも、今は彼を信じるしかない。

「洞窟、いや、ほのおのぬけみちかッ！ 屋台のお菓子が落ちている……！ メタグロスが買った物なのかっ、僅かにだけどこの中から攻撃技の力場、あの子の磁力を感じる……行くぞッ！」

「ミノツ！」

一人にしちやつてゴメン、と謝りたい。

怒っていないなくても謝りたい、帰ったらチーズドッグを沢山買ってあげたい。

合理性の塊、冷静沈着、鉄壁ガードでありながら、あまりに脆く非常に不安定なメタグロスの少女。

一人にするのはダメなんだ、感情が目覚めきつてない彼女を支えてあげなければ。責任を持つと受任したのは自分なのに。

頼れる仲間是不動姿勢のまま、ジツクの気持ちにくみ取りながら巨大な岩で塞がれている、通路を指し示す。

しまった、かいききを使うポケモンが……

もう眼と鼻の先、バトルの音が疑念の余地なく 耳に吸い込まれていく。あの子が使ったじしん、サイコキネシス……バッチリ聞こえている。

「……………ミッ！——ノッ！……………オ」

ここまで来て行き止まり、ハンドルを叩くジツクは通常ではあり得ない光景を見てしまい、感謝も労いも動揺も声帯が封じられ、ただ頭上の子人へ幾つもの「？」を浮かべるしか気持ちを表現する事が出来なかった。

「かたくり……………お前……………普通のミノムッチとは違うと思っていたけど……………」
 「ミノツ……………フツ！」

『礼はいい、さっさと入ろう』

身振り素振りは何のヘンテツも無い、多くのポケモンが最初から覚えている基礎技、たいあたり。

大きな岩を押し込む、投げつけて道を切り開くひでんわざ、それがこの場に必須であつたかいりき。

ミノムッチの非力な攻撃力では、自分自身がダメージを受けてしまうハズの巨石に、風穴を開けてあの子への進路を作り上げてしまった。ウインクしながら身体を振るか

たくりこ。

またしても彼に関する謎が謎を呼んでしまったが、今はメタグロスの救出が優先だ！
再びトツプスピードとなったダートじてんしやが、最奥部へと進撃する——



「お〜いおいおいっ！ どーしたんスカあ？ 動きが鈍くなっておりますねえ、メタグ

ロスさんよオ！ クヒヤツ！ ヒヤヒヤヒヤ！」

「……………くっ」

倒しても倒しても倒しても……

「いけっ、マグカルゴ！」

「お前もいけっ！ バクーダア！」

同時に放たれるかえんほうしや。ツインテール後部から蒼い粒子煌めかせ、回避する
為の推力を確保。

甲高くサイレンサーなど施していない、磁力を燃焼させ推進させるジェットエンジンの爆音は、オイルがこびり付き清浄分散作用上手く働かず、失火の前兆音が各所に混ざ
る。

「……ハッ……ッ！」

ワラワラと迫りながら、ほのおのうずで焼き捕獲を目論むランプラー達を一発二発三発つ、こうそくいどうで回避、及び接近し電撃を込めた手甲で打ちのめす。

「おーおー、スゲースゲー！　じゃあ次行こうかあ！　何処まで持つんですかねえ、メタグロスさんよお〜！」

（キリが無い……このままではっ……）

襟を立ててボタンを外し、シャツを外へ出して四つに割れた腹筋を誇示する臍部。

着崩されたコーデイネートは彼が失楽した頭われなのだろうか？

レフェリーなど存在しない、非公認のバトルロワイヤル。

序盤こそ弱点属性など物ともせず、血祭りに上げていたメタグロスであったが、彼女だつて連戦に次ぐ連戦を休み無く強要されてしまえば、徐々に異変が生じてしまう。

（っ！　チィ……！）

炎のエネルギーが漂っているからなのか、ヒートシンク機構が追いつかなくなっている。

精密機器は熱に弱い、肉体ダメージは無くても地形効果による恩恵は敵にあり、自分の内面を蝕んでいく。

「倒れたか、なっさけねえなあ！　ホラッ、次のポケモン出せっ！　もうちよいで仕留め

られるんじゃないか?」

「……トラヴィスさん、これはあまりにもメタグロスが……」

「ハア? 俺様に口答えするのか? てめえのポケモンも瀕死にすつぞ……ああ、!?」

自分のポケモン以外はどうかろうが知った事じゃない。

下つ端達の手持ちなど、バトルロワイヤルを演じる為のコマでしかない。

背中を足蹴されモンスターボールを奪われる。

所有者以外はボールを開閉する事は出来ない……から、刃向かった馬鹿の脳天に投げつけてやった!

(こりゃあ、俺様のポケモンを使う事になつちまうかもなあ。にしてもあのグロス、売り飛ばす前に慰み者にしてやるのもいいかあ……チビの癖に乳だけはデカいのぶら下げてるしよお! ああ、あの澄まし気取ったツラあ、涙でデコレートしてやるよお! クヒヤツ、クヒヤヒヤ!)

ジムリーダーの弟子であった過去は本物、トラヴィスは戦況を見返して「下つ端共は壊滅される」と見切りを付ける。

「……排除っ……!」

バトルロワイヤルはメタグロスの……勝利にはならず、最後に控えているボスキャラである自分のポケモンが、手負いにも容赦せず一撃で葬ってくれる!

「ハア……ハア……ハア……サ、イコキネ、シス……い・ 排除……っ」

特殊攻撃なので火力だけは衰えずとも、素早さはガタ落ちし数の暴力によつて、ある程度炎ダメージは蓄積されている。

やはり下つ端共は全員倒されるだろうが、自分のポケモンさえ倒されなければ良い。

各装甲に炎症を起こしている鋼ポケモンで、自分のポケモンを引つ張り出す事だけは賞賛してやる。

焼き尽くしたらそのまま……抱かせられた劣情を解消させるまで陵辱――

「メタグロス…… じしんだー」

……唯一の退路も塞がれていた後方から、聞き覚えのある声に命じられ、何者だと気を取られている奴らへ全体攻撃！

「……………威力が……上昇して……？」

フロアのみを揺るがす小規模から、抜け道全体へ見境無く衝撃を与えて、主人に釣られて棒立ちしていた炎ポケモン達は、亀裂に飲み込まれて一撃で戦闘不能となる。

じしんどころか、じわれ。

ダントツの物理防御力を誇るコータスですら、たたき割られた地面に突き落とされ一

撃ダウン。

やけど状態になってしまったので、確定で耐えられてしまう、間合いや角度を演算し
l b i tでも急所に当てられる位置へ移動するのも辛苦であったのに……

ダニエルで亀裂を飛び越えて、斜め横向きのままメタグロスの正面へ滑り込む。

ライトブラウンのショートヘア、オレンジ／ホワイトグラデーションのランニング
シューズ、独自チューンを施したダートじてんしゃのハンドルを握る少年、そして頭頂
部には大胆不敵に剛勇な表情のミノムシ。

「かたくりこさん……ジツク……さん……っ」

「まずは謝らせてくれ！ 一人にしてゴメンツ！ 状況は大方把握出来ているよ、一緒
にこいつらを倒そう！ 他の話は終わった後にね！」

戻るつもりは無かった、あれだけ自分勝手な意見を通そうとして、通らなかつたら脱
走、そのまま「半分手持ち」の状況も終わりにしようとした自分なんかを、迎えに……助
けに探していたと言うのか？

ジツクを困らせてしまっている、何時の頃からか理解する様になって来たけど、今回
は手持ちの意見も尊重したいし、自分の主張も叶えてあげたいしで、どちらを選んでも
後悔の残る苦渋の決断。

(……………心が、癒やされていくのは……………回復薬だけの効果では……………ありません……………?)

市販品で最も効能が高ければ、一定ランク以下のトレーナーには販売許可を与えられない、プロ御用達のかいふくのくすり。

体力を完全に回復、状態異常もこの薬の前では一瞬で取り除かれてしまう最強の回復薬を使用され、内側を蝕んでいた火傷も消滅した。

……………でも違う、身体が心地の良い安心感が波紋の様に広がり、浸透し、精神もリラックスしていく。これはかいふくのくすりの効果ではない。

「戦えるか?」

「……………戦えます、殲滅させます」

底冷えするトーンは変わらないが、頷く少女はジツクの手を取り緩やかに握り返してくれた。

先程のじわれ……………にも勝るじしんで、かなりのポケモンを駆除したがチンピラ共の手持ちは何匹か残っている。

そして奥に控えている存在も……………

「ぶああはっはっは!! 何かと思えばガキが一人とザコムツチが一匹かよっ!」

「むしタイプなんざあ、俺達の炎ポケに適うわけねーだろっ！ ミノムシが弱い事くらい誰でも知って……」

「ミノオ?!? ミノミノオオオオツ!!」

あつ、怒った、めっちゃ怒ってる。

初めてキレちまった、全ての属性に変化する標準から広く逸脱している、異例なアビリティでめざめるパワーを「水」にエンチャント。

かたくりこの周囲に、雨色、海色、滝色、どれも炎ポケモンには好ましくない千差万別の青を纏った、直径八十cm程の円球が浮かばせ、群れば強いと勘違いしてるアホウに制裁を!

「うわあ?!? なんだこのミノムツチつえ、え、え、く〜!」

「俺達のポケモンが次々とやられてイクう?!? 怖えよお〜! 助けてー! おまわり

さーんっ!」

警察呼んだらどつち道、助からないのでは。

「ミノホオホツ……ホホホ〜ツウ♪」

めざめるパワー（水）を触覚でドリブルしながら、チンピラ共を千切っては投げて、千

切つてはポイ捨てする、蹂躪の昼行灯。

炎攻撃をぶつけられる前に、めざパ球を投げつけ正面から沈静、熱を奪い取られ燃焼を継続できなくなった炎は消滅するしかない。

『ザコは任せろ、ボスを倒せ！』

こんなに頼りになるミノムツチは、かたくりこだけ！

チンピラ共を仕切っているのは……玉座に見立てた岩で脚を組んでいる金髪の男だ！

「うう……私達の炎が効かない……あのミノムツチは一体……ツ!?」

他の面々よりは邪気を含まない目付きで、乱入して来たかたくりこに勝てないと悟り、HPを残しながらも蹠踉ける身体を抑えて、戦線を離脱したクイタランの少女。

あのメタグロスにも、ミノムツチにも、自分達ポケモンとは違った物を感じる。相手にはいけない……

主人の下へ戻ろうとしたのだが――

「ザ……ザムヤードさ……っ……お許し。ツ。!!……グ、プ……ツ……ッ」

「逃げる、何て誰が命令したのかしら？ なあっさけなあい……！ つかえなあい！
邪魔だから退いて頂戴……なっ！」

不良軍団は頭を討ち取ってしまえば、集団意識は急速に薄まり壊滅するのも早い。

ジツクとメタグロスは、道化の様にへらへら笑っているトラヴィスの元へ走っていた
最中、一匹のクイタランが二人の間に投擲されて来た。

……ダブルバトルでは意図的に、味方が味方へ技を放つのも戦略、一匹では実現が難しい戦法も二匹でなら無限大。思わぬ技やユニークなアイテムが脚光を浴びるかもしれない、柔軟な発想力が勝利へと導くだろう。

だがザムヤードと呼ばれたポケモンは、自軍を有利にするだのクイタランに補助効果を掛けるなど、そういった類いではない。

邪魔だから、見てられないから、捨て石はボスの為なら捨てられる。

鋭い爪で肩から腹部へと斜線、痣の出来たクイタランは気絶しもう一度同じ技……ドラゴンクローで攻撃し吹っ飛ばした。

(不良集団と言えど、仲間のはずじゃ……同士討ちかよっ……)

否、トラヴィスもザムヤードも下っ端共を、最初から取られたチエス駒は盤上から取り除かれるとしか思っていない。

「ガキ……俺様が相手してやるよつ。つーかよお、そのメタグロスよお、テメエのポケモンなのか？あ？」

「……………」

俺のポケモンに決まっているだろつ！

言えないつ、今のメタグロスは「半分手持ち」だから保護者ではるけど、おやとして認識はされていないから。

否定もせず、肯定もせず、答えに窮するかの様に口をセメント詰めするしか。

「あ？ 黙りかよ。それともアレか、逃げられちゃったのか？ クヒヤヒヤヒヤッ！ だつせえなあ！ あーあー、でもメタグロスだもんなあ、激レア高種族値ポケに相應しいトレーナーじゃない、扱うに値する実力では無かつたつてコトだろ？ じゃあ俺様に譲ってくれよ？ 強いトレーナーに従えた方が、ポケモンにとつて幸せだろーが？」

逃げられた、は半分正解かもしれないけど、勝手に話を進め、明らかにジツクを高所から見下ろしている。

どうやらジツクが各地を旅して、政府にも貢献しているトレーナーだと存じてないらしい。

「ヤダねっ！……と言ったら？」

「俺様が情けをくれてやったのに拒むとは馬鹿がつ！ 力尽くだ！ 来いッ、ザムヤード！」

そのニツクネームを名付けられし、かえんポケモンリザードンは全ポケモンの中でもトップクラスの知名度を持つ。

生息情報が無いにかかわらず、イツシユ地方では特に人気があり、ホドモエシテイの跳ね橋を「リザードンブリッジ」と別名される程。

炎タイプながらドラゴンの血統が流れており、聖獣とも悪魔とも伝承で伝わる西洋竜の翼を始め、ヒトカゲ、リザード時の成長期から貫禄ある体型となった。

「はアい？」

愛しのご主人様の下へと、羽を仰がせて舞うザムヤードは、通常のリザードンではない。

オレンジを基調としたボディは、炎に焼き焦がされた跡、炎すら届かぬ深淵なる闇へ堕ちて——

（色違いのリザードン！）

Segment・tetra——邪暎なる火焰

翼も一見すればボロボロに朽ちたバイオレットカラー、翼を広げて羽ばたかせる度に星形の光輪が出現し、極めて希少性の高い《色違い》だと、自身にどれだけの値打ちがあるか自賛する様に魅せる。

「俺様の色違いのリザードン、ザムヤードとタイマン張れ。勝った方がメタグロスの所有者となる、トレーナー同士公平な条件だろ？」

「数の暴力を振るつておいて、今更“公平な条件”と言われてもねえ……メタグロスはアンタに渡さないっ、勝つのは俺達だっ！」

やたら「色違い」を強調しながら、膝に腰を下ろしたザムヤードの身体を、猥り慣れた手つきで捏ねるトラヴィス。

彼女の肉体は理想的な大人の女性。

男の願望を叶えたと言わんばかりに、括れた腰、衣装に横シワを作る大きな胸、細長い脚、ガーターニーソの四点セット。

セクシーダイナマイトに追従するは、太ももを大胆に露出し鼠径部までスリットを入れたチャイナドレス風衣装。

翼が生えている背中もぱっくり開かせ、筋が一直線に走る妖艶な女体は後ろ姿だけでも、大抵の男は興奮してしまうだろう。

「昨日の夜は凄かったよなあザムヤード？ 今夜も『アレ』……していいよな？」

「あんっ……？ ご主人様が仰るのならば……？ 私を意のままに扱ってくださいませ？ メスたる悦びを植え付けてくださいませ？ はー？はー？ つ……？」

彼女は完全に「メス」となって墮とされている。

ファッションとしてではなく、「そういう理由」で首輪と南京錠を付けているのだから。

胸を驚つかまれ様が、ドレス内側に手が入り込もうが、嫌がる素振りはまるで見せず、バトル開始前だと忘れて寝室での光景をそのまま……

「……っ、ガキにはまだ早かったよなあ、わりーわりー！ いけっザムヤード、勝つたら続きをしてやる」

「ハイッ……？ 焼却処分してやりますとも？」

メタグロスの少女は無表情のまま、あの者達の行動も言動の意味も理解できず。

ジツクは「戦う前にそんな事してんじゃねえよ……」と、性模様に惑わされず。

「ご主人様のご褒美……欲しい……?」

「……貴女は強いポケモンよ、それは認めてあげるけどタイプ相性は覆せないわ。炎が鋼に負ける要因は無い、それでも容赦せず焼き倒すつ、覚悟する間も与えない」

発情した声でオスへ媚び、キスのお目溢しもお預けされ、切ない表情で涙ぐんでいた彼女は豹変。

リザードンがヒーローならば、色違いのブラックはダークヒーロー、彼女の装いや服従度合いは悪の女幹部か、対象を完膚なきまでに焼き、焦がし、痛めつけるサデイスティックな女へ、脳を筆頭に身体の神経が全て入れ替わっている。

「一撃くらい耐えろつて、みつともなくお祈りでも捧げろや! それじゃあ行くぜえ、かえんほうしや!」

公平なバトルと言っていた傍から、唐突な先制攻撃。

有利対面であるがジック側が対抗策を持っていても、未然に防ぐ趣旨もあつたのかも
しれない。

「右へこうそくいどう! そのままりザードンの正面に……いやつ、天井に退避だつ!」
仄かに黒く輝いた炎は、色違いの証である。

竜の象徴的な攻撃であるプレス、下つ端共のポケモンと同じ攻撃ながら、格の違う殺傷力はメタグロスが避けた後方の、洞窟岩を炎上させる。

「クヒヤヒヤヒヤ！ PP切れまで持てばいいなあ！ ひのこを連発しろザムヤード！」

「無様に逃げなさい！」

次に繰り出されたのは、炎タイプの初期技だが知つての通り、そのポケモンの特訓内容と努力次第で、見違えるほどの技へ生まれ変わる。

「くっ……………」

五本の指先に灯る火球、手刀を打ち付ければ爆裂弾となり発射される。

追尾機能は備えずとも、五発もの火球を全て避けるか攻撃を当てて相殺するしか……（今はこうそくいどうを指示するしかない……）

磁力反発滑走はフル性能を取り戻したが、メタグロスやザムヤードに接近を許されない。かつて、ネリへと告げた言葉を思い出す。

（避けているだけでは勝てません……いずれPPが底を付いてしまいます……そうなたら……）

こうそくいどうを使えば、敵の攻撃を全て避けられると仮定しても、各種技には使用回数制限がある。

一発の回避で、PPが減る。あちらのポケモンは恐らく大量の炎技を所有している

のだろう。かえんほうしゃ、ひのこ、例えこの二つがPP切れを起こしても他の炎技で撃破してやれば良い事なのだから。

「ちったあ反撃してみろや！ ポケモンに逃げられるお間抜け低級トレーナーさんよお！」

「どうしたの？ そんな事したって時間稼ぎにしかないわよ」

発射から到達までの速度も、今まで相手にした炎タイプと比較にならない。地形効果も加わり、ひのこですら全段命中を許せば、炭化した匂いが抜け道へと充満する。

煽りの才能はジムリーダーよりも上、されどジツクは動じない……が、少女はと言う

と――

（あ……あ……やつ、はっ……はあっ！……怖い……怖いんだ……わたし……はあ、はあ……はあ……！）

頼みの綱のPPが切れたら、鋼タイプの自分はザムヤードの攻撃には耐えることが出来ない。

相手が物理タイプの大技、フレアドライブでも選択してくれたら圧倒的な防御力を誇るメタグロスなので、痛手となるが耐えきれる。

しかし、物理防御力と比べたら良心的な（それでも高レベルだが）値を持つ特殊防御力を狙うのは、メタグロスの攻略法として賢い。

全力を持つてして技を繰り返しても悉く、攻撃が命中していない。

（だから何だつて言うの、かえんほうしゃも、ひのこも、PPが無くなつたところで問題ないのよっ！）

そうなのだ、メタグロスはこうそくいどうが尽きてしまえば、生存の術を失う。

なので尽きるまでは当たらなくてもいい、オイル循環されず起動スイッチも押されていない、機械よりも表情筋を動かさない少女の、取り繕った顔が少しずつ額に汗を浮かばせ、乱れつつある過程を楽しませて貰う事にした。ご主人様以外にはサディステイクな思考となる女だ……

（ハアツ、ハアア……アア！ ハアツ！ ダメですツ……このままでは……）

自ら磁力バランスを崩す、ジツクの呼びかけに何とか反応して、這ったまま火球をやり過ぎす姿を、相手トレーナーとポケモンは「哀れ」「みっともない」など、自尊心を煽りたい放題だ。

命からがらのメタグロスと対照的に、ザムヤードはご主人様に目配りする余裕すらある。もうすぐご褒美が貰えるので、そういう意味なのだろう。

(メタグロス……！ 俺の声が聞こえるか?)

(……っ!? ハイッ、聞こえます!)

ジツクが直接指示を口にしなくなった? 諦めたのだろうか?

にも関わらず、メタグロスは指示を貰わずとも、正確・精妙・精密に技の発生ポイント、通過ポイント、着弾ポイントを測定し、ツインテールから発生する爆音は途切れなく、蒼く華麗に滑空する。その表情から、どういう原理なのか、焦りや不安が消え去っていた……

《念話》

(まさか……いやっ、あいつらは確実に念話してやがるっ! 逃げられたハズじゃないのか? そんな関係で念話が成立する訳ねえ!)

トレーナーとのバトルでは、デボンイヤホンの使用は禁止されている。

相手トレーナーの口の動きを読む、口頭で命令を与えられた直後に、自分はどう動くのか、動けば良いのか、オープンとなるからバトルは白熱する。なるべく作戦を明るみにしないよう、時には自己判断に任せ情報を曇らせるのも、また作戦の一つ。

……唯一の例外として認められているのは、エスパertypeが所持する特殊能力、念話だ。

実質的にイヤホンの上位互換、トレーナーからの指示だけでなく《ポケモンからの言葉もトレーナーへ伝わる》

規制寸前、反則スレスレかも知れないが、固有能力として政府から認定を貰っているし、どちらかが一方的に念話したい”と思っても、決して届く事は無い。

何故なら、互いに「念話したい」と強く念じていなければ、成立しないからだ。

トレーナーとの深い信頼関係を築いていなければ、一方通行にもなり得ない。

(面倒くせえ……… 格下が念話に成功しましたあ？ クヒヤヒヤ………！ ちいとばかり、茶々入れてやりましょうかねえ！)

ザムヤードが攻撃動作以降、狙いは脚を縮ませ今か今かと、こうそくいどうを繰り出さんメタグロス………ではなく——

「その後ろにひのこを投擲してやんなア！」

(なッ、!?)

五発同時に放たず、敢えて一発は指先に留めておいた。

メタグロスが複数匹居るかの如く、残像を揺らめかせた電磁反発ダッシュの速度は、ひのこを超過し回避出来た物の、残りの一発はフェイント気味に数秒の間を開けて投擲

された。

「うアアツ!! あ、あいつらツ! ふぎけつ……!!」

(……………!)

最後の一発はなんと、ジツクの足下へ着弾したのだ。

トラヴィスもトレーナーへダイレクトアタックを、仕掛けるつもりは無い。冒険主義にして蠮螋の斧、勝てる要素が無いのに落ち着いたツラ、生意気にも念話を成立させている名も知らぬガキを、脅かしてやるつもりであった。

自分が攻撃対象になるとは思わず——普通は想定しなくていい——念話を中断させ、右脚を後方へと蹴り飛ばし、背中に嫌な汗を噴き出されながら着弾した場所を確認、ジユウジユウと、鉄板の上で肉汁を滴らせるステーキを想起させる音が、火煙と共に漂っていた……

「オラオラオラアツ! こそこそ命令しなくていいんですかあ!」

「アハハハツ! 必死に逃げちゃってかゝわゝいい♪」

……トレーナーもポケモンも、腕利きであるがマナーは最低。いや、最低になつてしまった。

公式試合だと退場、故意にトレーナーを傷つけてしまえば免許剥奪。

非公認だからと言って、当てるつもりは無いと言って、やって良いこと、悪いことが

ある。

プライドと共にモラルまで失ってしまったらしい……下っ端達ですら、ジックが無事で安堵していたくらいなのだから。

（俺は大丈夫だメタグロス、あの野郎……勝つぞ！俺達の力を合わせて勝たなければいけない「敵」だ！）

（……………ハイッ！勝ちましょう！）

ダートじてんしゃで爆走中も、念話を試してみたがアクセスならず。

土壇場とも呼べる灼熱の闘乱中、初めて念話が成立した！

メタグロスもジックに助けと指示を求めており、今までの対戦したポケモンの威圧感など比では無い、絶望的不利な状況。

自分一人ではどうにも出来ない……相手のリザードンの方が手練れでレベルも上回っている、ワーニング、エマージェンシー、デンジャー……自らで自らの不安を増長させてしまう、不協和音の注射が全神経、全細胞、全臓器に押し込まれ、歯がガチガチと振るえている。

《怖い》という感情も、このバトルで初めて生まれた。

掠っただけでも致命傷となる黒いかえんほうしゃ、連発されている黒いひのこ。

命中は許されない、深紅の瞳は濁る、淀む、負けてしまったらどうなってしまうのだ

ろう……

(……メタグロス！ 俺を信じてくれるか？ キミは一人じゃ無いんだぞっ！ 一緒に俺も戦っているんだぞっ！)

(……ハイ………)

高レベル、色違いのリザードンと対峙してから、怖いという感情で埋め尽くされて、押しつぶされそうだったのに。

念話が成立し、彼の言葉を聞いていれば恐怖も、不安感も、気がつかぬ内に和らいでガチガチだった身体も、フワリ軽やかにステップを刻み、軌道を描く。

原理不明……しかし勇気づけられている。

この現象を裏付ける理屈を検索するのは後回しとする……

こうそくいどうのPPは、残り僅かだが勝利への条件……疑念を持たず自分を彼へと委ねる必要性アリ……彼の言葉を信じる……！

「あま……い………」

「なにッ!?!」

……ジツクに対しひのこを放たれた瞬間、身を挺して庇おうと着弾地点へ標準を変更したが、「大丈夫だ!」という言葉を残し一旦念話を解除させた。

今までの自分だったなら、我が身を盾にしてまで彼を守ろうとしただろうか？

自問自答……恐らく「それはない：理由・HPが減る、勝利に繋がらない非効率行為である」

(わたしは……反射的に……彼を……)

結果的に彼に直撃せず、命令したトレーナーも放ったポケモンも、本気で当てるつもりは無かったと笑っているが……

(……………ッ！)

不安や焦り、恐怖とは別の感情が生まれた事は、少女と心の部屋を共有しているジツクにしか分からない——

PPが切れたのかつ、十字架に貼り付けにされた罪人の様に、地面へ降り立つメタグロスへ、こちらでも最後の一発となる炎のブレスを命ずる！

技は同タイムミングで繰り出されたが、突如、洞窟内だと言うのに雨雲を呼び起こされ、天候が大雨状態となり炎タイプ技の威力は大きく落ちる。

メタグロスがあまごいを使える事も忘れていたが、あまごいを使うメタグロスなど聞いたことも無いので、完璧に予想外だったトラヴィスは余裕の表情を捨てて、玉座から身を乗り出し怒鳴る。

「……へえ、面白い技使うじゃ無い、かえんほうしやが届く前に鎮火させる何てねえ」

トレーナーよりも平静だが、キメてやる確信を持っていたザムヤードからしても、

まさかの天候技には足止めを食らってしまった。

尻尾の炎は長時間、海にでも潜らなければ消える事は無いけれど、お互いに衣服が身体に張り付いて、ロリ巨乳とセクシーダイナマイト、新手のグラビア撮影会に非ず、ポデラインが浮き彫りとなる雨宿り状態になるまで、十秒足らずの勢いで水玉は降り注いでいる。

「ならよオ……！　奪い返しやいいだけだろうがッ！　にほんばれだ！　ザムヤード
！」

（うっ、持ってるのかよ！）

形成は逆転……ならず。

対となる天候技、炎技の威力を二回り近く上昇させながら、水技の威力は半減させるにほんばれ。奇襲も空しく、天候を奪い返されて、本来はエネルギー源を無尽蔵に与えられているので、喜ぶべきだろう草タイプですら、あまりの人工日輪が射す狂熱に、根も葉も枯れて、焼かれてしまう、それだけの日差し。

（肩があつた位置まで飛んで！）

速度は変わらないが、一発で五発分の破壊力まで膨れ上がった業火球が、今まで通り五発、指を斜めへ、横へ、振り落とされれば発射される。

（……………あ……………っ……………い……………い……………！）

防御不可能、命中すれば確実に戦闘不能となる。

望みを次々と絶たれても諦めないっ、心の中で指示を受け取り躲す事は出来たが、洞窟内の酸素が消費され酸欠になりそうだ。

(わたしが……あまごいを……自分でも……知らなかったのに……)

そうか、心にアクセスし気持ちをかち合っているのだから、彼が見つけても不思議じゃない。

あまごい……？ 自分はそのわぎを覚えていない……が、彼を信じて幼い声色で復唱したら、未所持である筈の技が発動出来た。

わぎマシンは使用できないので、元々覚えていた技であるのは明白だが……

「チツ、ひのこもPP切れか！ じゃあコイツを食わせてやるよオ……！ 晴れ天候時のコイツは熱い！……じゃ済まさねエぞオラアアツ！ 一生消える事の無い思い出の焼き鏝だぜえ！」

来るっ、ザムヤードが動きを止めてエネルギーを充填、充炎、薄い黒を纏っていた腕が紫に近い黒に染まる。

ねっぷう。炎のみならず風を起こしたり羽があるポケモンならば、大体覚えてくれるのでダブルバトルでの広範囲攻撃、苦手な相手への役割破壊など、見かける機会は多い。

これだけの技をかけら数個で教えてくれる、おしえオヤジさん達は偉人だ。

「大人しくメタグロスを渡さなかった、自分の愚かさを恨めよなあ！」

「いいポケモンでもトレーナーがダメじゃねえ……イキヨがりなさあい!!」

逃げの指示しか与えていないジツクを、馬鹿だと無能だと侮辱しながら、チャージ完了了。

少しの間は無防備となる、ラッキーチャンスだったのに、何も行動に移らないとは、諦めろと指示を下したのだろうか。

（あのリザードン、どんな攻撃が来ても耐えて反撃のねつぶうで仕留める、何かを隠している余裕の表情……俺らの作戦もこの次が正念場だつ、メタグロス!）

こうそくいどうが使えたとしても、フルチャージ+にほんばれの恩恵を得た深紫に染まる豪熱風は躲せない、耐えられない。

死の一撃がフィールド全域に放たれ、持ち主のトラヴィスですら、玉座の後ろ側へ身を隠す高密度の余波が襲う。

フィールド中心部に居たメタグロスが、五体満足で済む道理など……

「クヒャヒャ……! 手こずらしてくれ……ッ、ッ、くくまつ!! まだHPがゼロになつていないだどツ!!」

オーバーキルの筈だぞつ! なぜ無傷で立っているんだ!

「今のねつぶうを凌いだ事によって、日照りのターンは終了したぞー!」

トラヴィスもザムヤードも狼狽えを見せる、あれだけの威力を備えた一撃が無力化されたら、否が応にも軽いパニック状態に陥ってしまう。

ジツクがメタグロスの心へアクセスして、新しく発掘した技は三つ。

その二つ目がネリも覚えているまもるだ。

ほぼ全ての攻撃を一発のみ、完全に防御する速攻優先度技。

身体を小さく折りたたみ、蒼いツリー形状へとデジタル概念を張り巡らせたフォース
フィールド。

丁度ジツクと少女、二人だけ囲える範囲は通常のみより防御領域が広い。

「よって、わたしも……彼も、火傷一つありません……」

………気に入らない、あのポケモンもガキも。

少し前までクールな表情が崩れかけていたのに、何だア……「次はどうするんですか？」とでも訴えてやがる、睫毛一つも動かしていない顔はよおおお!!

「ザムヤードオ、オ、!! オーバーヒートで始末しろッ！ この空間を火葬場にしてやれッ!!」

面白くねえ面白くねえ！

メタグロスが相手だろうが所詮鋼タイプ、ザムヤードの炎技は直撃すれば確実に倒せる。

のにつ……何度も何度も避けて、躲して、防がれ、まるで俺様が弱いから未だに仕留められてないみてえじゃなえかよお、お、お、ッ!!

掌で蹴らされる感覚、ジムリーダーの一番弟子として、将来を期待されていた実力者たるプライドの残りカスに縋っていたが、粒状に擦られたトラヴィスは激情。

ザムヤードが所有している中で、最強の技でブチ倒してやると決めた。

炎タイプでも最強クラスの技であるのに、発動までのラグが無い超攻撃的な突発性能を持つ。

苦手な水タイプですら致命傷となる凄まじい火力だが、こんな技がノーデメリットという都合のいい話はない。

何発もの攻撃を「前借り」するに等しいので、技を放った直後に炎タイプですら「オーバーヒート」を起こし、身体へと極端な代価が上乘せされるのだ。

宇宙から地球へ戻ってきたばかり、歩行も立位も困難な状態に陥るダルさ。

しかし、これはタイムンバトル。一撃で倒してしまえばデメリットなど……無いッ！

「うああッッ!! あああああああああ!!」

Segment・tetra——【ニツクネーム】

焦熱地獄……紫と黒の入り交じった邪悪なる火柱の中から、鋼が溶けている炭素の匂い、各部パーツが焦げた煙の匂い……

小さな体躯が炎上している、あまりに悲惨な光景。

「っ……ハ、ハあ……こっ、この技を受けて……タダで済むと……おもわ……っ、な……あ……で……」

焼却処分完了。捕獲して売り飛ばすつもりだったがどうだっていい、一生物の焼印を刻んでやらなきや気が済まない。

「クヒヤア、ヒヤツヒヤツヒヤツ!! メスポケの悲鳴は何時間聞いてもコウフンするなあオイッ!」

ハイリスク、ハイリターンな大技を放ち終え、倒れ込み掛けるザムヤードは、HPこそ全開のままだが著しく能力は低下。

無気力症候群なので、サドなセリフを発するだけでも頭が痛い、声帯が塞がれる、翼は硬直したまま暫く飛行は許されない。

ジャツジするまでもなく、勝者は自分……!!

弱点タイプが最強技をマトモに食らったのだ、高鳴っていた悲鳴も聞こえなくなり、
熔解された姿となって——

「——な……ん……でっ……生き残ってんだよオ……わっ……かんねえんだよっ
……!! 鋼如きがオーバーヒート食らって……生きてる理屈がわかんねえんだ
よおおおっ!!」

ザムヤードも同じ心境であつたが、カタカタと膨大なりスクが残る両脚で、二足歩行
するのが精一杯だ。

原型すら保たぬであろう業火から、黒煙散らし飛び出してきたのは、胸元のリボンが
焼け落ちて、髪飾りを失い片側ツインテールとなり、ブレザーの制服やスカートもHP
と同じく、慢心喪失状態のメタグロス。

だがッ、HPはゼロになっていない……ならば!

「戦う事が出来る！ 俺達の反撃だメタグロス！」

「ハイッ！ 展開します！」

耐えないと勝てない、彼を勝たせてあげたい。

彼ならばわたしを勝たせてくれる。

負けたくないっ！

ならば掻け！

抗え！

覆せっ！

「その色違いリザードン、ザムヤードは一撃でギリギリまで削る必要があったんだ、とある技の範囲内にね」

炎が燃ゆるメラメラとした音にかき消されていたが、念話ではしつかりあの子と通じ合っていた。

先程ジツクが大丈夫と言ったように、メタグロスも「大丈夫です」と反射的でも機械的でもない、己を意思を持った言葉で返してくれたから信じていた。

「いわなだれ、展開……わたしと

に仇なす敵を……討てっ！」

いわなだれは、読んで字の如くの攻撃技である。

タイプが一致していなければ軌道は単純で、名称の割に投げ注がれる岩の量は、それほど多くない。

しかし地形効果が発動すれば、鋼／超タイプのメタグロスでもタイプ一致並の量、威力、範囲となる。

洞窟に転がり、フロアを形成する部品を拝借し、被弾すれば一撃必殺であるのに、オーバーヒートの後遺症を引きずったままなので、足取りが重苦しいザムヤードへ集中砲撃。

トラヴィスはメタグロスが戦闘続行するまさかの自体に、元より高圧的で沸点の低い性格であったが、避ける避けると無理な注文を血眼で通そうとしている。

さつさと身体を動かせ！……動かなくさせたのはトラヴィスが、そう命令を下したからであるのに。

メタグロスの手を取ったあの時、渡っていたアイテムはオツカのみ。

下つ端共のポケモンの属性、ほのおのぬけみちをアジトにしている件から推測するに、ボスも炎ポケモンを使ってくるのは間違いない。

「炎タイプの技を半減する効果……しかし、所持していてもオーバーヒート、若しくはほんばれの影響下に置けるねつぷうが直撃すれば、耐えられる確率は25%でした……」

耐えきれぬ保証はなかった、だけど耐えなくてはならなかった。

「オーバーヒート、その言葉を聞いて俺達は賭けた、そして賭けに勝ったー!」

躲し続けてザムヤードの主力技のPP切れを催す。さらなる大技でメタグロスを倒そうとしてくるだろう、中々有利な鋼属性を倒せずにイラだったトラヴィスは、まさに想定内の指示をしてくれた。

ねつぷうは防ぎきれぬ、問題はその後の最強技だった。

「ザムヤードがエネルギーを溜めている時、攻撃しなくて良かったよ。どんな攻撃を食らっても平気ですって表情、所有してるアイテムの正体——」

そこから先は、黒竜の絶叫が遮断した。

「グガ ア ア ア ア、ア、ア、ツ、ツ——」

顔面に命中、翼に命中、尻尾に命中、両脚に命中。

その少女、勇往邁進にして疾風怒濤、銅牆鉄壁なり。

サイコキネシスでは中途半端に、ザムヤードのHPを削ってしまう。彼女の特性、もうかが発動してしまえば、オツカのみを持っていても貫通されてしまうから。

「きあいのタスキ……如何なる攻撃を受けてもHPを 1 で踏み留めるアイテム……」

ねっぷうを放つ前、または放った直後にいかなだれを飛ばしても、タスキを持っていないので必ず 1 で耐えられてしまう。

前者は隙だらけと見せかけて、もうかを発動する機会を狙っていた。

後者であっても結局は、もうかが発動されて反撃の反撃を食らい、メタグロスは倒れていた。

「なので大きなリスクのある技を、引き出せるかが勝利の分かれ目の一つでもありました。もう一度にほんばれなんか使わなくてもいい、それくらい火力とリスクがある……ありがとうございます……オーバーヒートを使ってくれたので、わたし達は勝つことが出来ました……貴女の動きが鈍くなり、攻撃に移る前……頂きます……」

最後に発掘したバレットパンチは、鋼タイプの先制攻撃技。

弾丸の如く勢いでパンチを繰り出せるが、速攻能力を持つ代償として、威力自体はかなり低い。

それでもタイプ一致、攻撃力が突出しているメタグロスが使えばどうなるだろうか？ バレットパンチ一発で、耐久力が低いポケモンはHPの半分を削られ、コメットパンチ↓バレットパンチの流れる様な「コメバレ」による連続鉄拳はあまりにも有名。

“バレットパンチが、メタグロスの地位をさらにのし上げた”

とある書籍に綴られていたが、概ねそうであろう。

バレットパンチを覚えていなければ……覚えてなければ勝てたのに……メタグロスと対戦したトレーナーの大半は、そう祈り、散っていく。

剛強無双の弾丸となりかつ飛ぶ少女は、もう瞳が曇る事も淀む事も無い。

「この技は鋼タイプ、炎である貴女には非適切な技……ですが……」

—— たった 1 しか残らないHPを 0 にするには十分……、適切です——

ズシャツ、ガ！ガ！ガ！ガツ！

「わたしのマスターを！ 侮辱するのは許しませんッ！」

海よりも深く、氷よりも透き通り、ブルーダイヤよりも美麗なる閃光。

その煌めく瞳は果てのない蒼へ変化している、だが熱が入っており機械とは対照的。

純粹なる《怒り》に満ち、理性のフィルターを壊した少女が、生まれて初めて抱いた

怒りの感情を、そのまま蒼き鉄槌に込めた！

「……………わたし達の勝ちですっ……………」

生存者は一名、何を声として外へ出す事も許されず、頬に弾痕を五発ブチかまされたザムヤードは、ダメージ許容量を超え今度こそ殲滅された。

「ザムヤードオツ!! おっ、俺様は負けたのか……………?!!」

刹那の一瞬で五発もの打撃。トドメをさすには過剰なまでの破壊力は、蒼色の余波で地形が抉られてしまう程だった。

半減とは何だったのか、直情的になっていた少女の怒りは少しずつ収まっていき、ジックを侮辱した王様気取りの男へと、卑しめの眼差しを向ける。

「賞金はちゃんと支払ってくださいね」

「……………クソッ、がつあああ!! チクシヨオオオオオオツッ!!!」

星が光ることも無いザムヤードを、モンスターボールへ戻し靴が脱げて振り返りも

せずに、転びそうになりながら出口へ直行していった……財布ごとメタグロスの足下へ投げつけてから。

トラヴィスが、ボスが負けた！

自分らも異常な強さを見せる、たった一匹のミノムシに手持ちを全滅に追いやられて、もうどうしようもない！

「にげろおおお！」

所詮はならず者の集まり。核を失えば信頼や結束など築かれていないのが露呈される。

唯一、邪気の薄かったクイタランだけ取り残されたのは、捨てられてしまったのだろう……この子は保護として救出し、ポケモンセンターへ預かって貰おう。

「……どうぞ、一応言ってみただけなのですが、財布ごと投げ渡してくれるとは。……中身、結構入ってます、戦利品です」

蒼鋼との命の共鳴が終了し、深紅の瞳へと戻った少女は抜け目が無い。

四万と三千二百円、財布を手渡してくれた際に触れた肌は、今までと明らかに異なっており、洞窟の熱気でも装甲が溶けた後遺症でも無い、この子の蒼が流動せし《熱》と、

汗をかいても香らなかった《匂い》がする。

「ありがとう！ 俺を信じてくれて！ あのリザードンとタイマンして勝つ方法、あれしか思いつかなかったんだ」

「……………まったく、乱数頼みの策を立てるマスターです……………75%を引いてしまったら、わたしは負けていたんですよ？」

「そうだね、確実に耐える保証は出来なかった。…………キミも俺を信じてくれたから、共に勝利を掴む事が出来たんだ！ 今もだけど“マスター”って俺を…………俺が悪口言われて怒ってくれたんだよね、キミは…………」

「それは……………こっつ、言葉のあや、でして……………いつ、いえ……………そうではなく……………」

本当の意味で視線が合わさったのは、これが初めてな気がする。

ジツクを侮辱した数々の発言を聞いている内に、無であつた感情の振幅が大きく、不明瞭なまでに傾き生体機能の制御システムに「解除」の号令をかけた。

凄く怖かった、でも大丈夫なんだ。

矛盾しているのに心地が良い、彼と一緒に戦える喜びを知ってしまった。

いや、もっと前からの積み重ねが一気に実を結んだ、と言い換えるべきか。

「メタグロス！ お願いがある！ 俺は……キミを手持ちポケモンにしたい！ 無理に捕獲はしたくなかったけど！ それでもっ！ 俺はキミを捕まえない！ 俺と一緒にこれからも戦って欲しい！ 一緒にいてくれ！」

意思を尊重するポリシーを、かなぐり捨ててまで、本当に欲しい物はどんな手段を使つてでも、手に入れたくなる。既存の価値観を覆すだけの名状出来ぬこの想い、熱を帯びるよう様になった少女の瞳から目が離せないんだ。

メタグロスの少女が、ジツクからの指示を貰いながら戦うのと、自己判断で戦うのでは、決定的に強さが違う。

あの時——爽羽佳を窮地に追いやったのは、独断で動かず命令を聞き入れたから。

あの時——コータスをも一撃で飲み込むじしんを繰り返させたのは、彼の声を感じ指示に従ったから。

身体が軽くなった、パワーが上がった、そうではない。

《マスターを手に入れて実力が出せる》

後ろから命ずるだけがトレーナーじゃない、命令を聞き入れるのが当たり前じゃない。

ポケモンと気持ちを共有して戦うのがトレーナー。

なぜ、メコン達が強いのか、理解が出来た。

彼女達は、こんなに素晴らしいマスターが居るのだから。

「……………了解、です、貴方を……………わたしのマスター……………と、認識……………します……………」

視覚に良く残りながらも、少し幼い声が鼓膜に直接響いてくるのは、サイコパワーとは無関係な少女の声質である。

「くくくっ!! やったッ! ありがとうメタグロス! 手持ちとして改めてよろしく!」

「んっ…………、よろしく、です…………マスター…………」

もう「いつ出て行ってしまうのだろう」とか「明日には居なくなるのかな」など、思わなくなっているんだ、仲間として少女を迎える事が出来たのだから。

喜びを全身で表すジツクは、手甲を取り外した彼女と握手。

…………ジツクの二／三程度の大きさしかない、か細すぎる指、工芸品の様な扱いを求められる掌。

なのにあれだけ強くって、この手で一緒に戦って、これからも戦える。

今までは触つてもギョツとする程の冷たさだったのに、夜明け前の太陽を思い起こされる雪解け、少しだが確実に、人間味を持ったポケモンの手は温かい……

「ねえメタグロス？ キミが仲間になつてくれたらつて、ずっと俺は悩んでいた。そして仲間として迎えられたらこのニックネームを、贈りたいって思っていたんだ」

《ヴィヴィ》

「ヴィヴィ……わたしの……種族名とは違う……ニックネーム……??」

「そうだよ！ キミが覚えていた言葉[Valestein]から振ったんだ！ どうかな？」

少女には新しい意思が芽生え、理由が分からぬまま強さを求める事は、ザムヤードとの戦いの最中に上書き消去した。

自分の為、そしてマスター、ジツクの為に強くなる。身に漂い、纏う気迫が違うつ、少女は意思を掲げながら優しく、だがしっかりと手を握り返す。

「……素敵なニックネームですつ！ わたしはヴィヴィ……！ ヴィヴィですよマスター！」

全てを肯定したら答えが見つかった。

マスターとして認め、プレゼントされたニックネームを何度も呼ばれてたら、初めて顔が綻んでいると自分で気がつくも、取り繕おうとは考えていない。

チーズドッグを食べた時よりも嬉しい。

彼の鼓動が右腕から伝わってくる……その彼よりも自分の方が……

「ヴィヴィの笑顔初めて見たっ！」

「……………笑顔、してない、です……………」

ふとした事がキツカケで、素直になりきれない一面になるのも進歩した証拠だ。

新たな意思と感情が生まれ、喜びと戸惑いが同時に襲う。

鼻先が赤くなっている事を指摘されても、理解したくない。

プイツと視線を逸らしても、右手だけは握ったまま。

人間で言えば左側に配置されている、臓器が苦しさを感じるまで動悸を速めており、脈拍を始め心拍数も上昇、発汗作用まで生じてしまい、彼に知られたくは無い……………のにつ、右手だけは離さない。

「……………あのさヴィヴィ、結構……………エッチな下着なんだね……………」

「……………ハイ？」

「ほらっ、オーバーヒートを受けて服がさ……」

良いムードを根本からグルリツ、百八十度反転させてしまう突拍子も無い一言。

ヴィヴィも着飾らぬままの、素っ頓狂な声が出ってしまった。

ジツクはお腹が見えてしまった時と、同じニュアンスでなるべく直視を避けているのだが……

「……………」

メタグロスの少女、ヴィヴィは全身を見渡してみた。

グラデーションヘアは煤け、白いリボンに紅玉を残して焼け落ち、制服とスカートは至る箇所が焦げて、ガラス細工よりも透けいく素肌が——少なくとも黒いブラジャーが形作る北半球は——剥き出し。ブラチラならぬブラモロ。

「……………ツツ、くくくう、!!」

スカートの右半分は完全に消滅し、紐で結ばれている下着……炎を受けても炭にならず、本来の色を保っているパンツも、チラならぬモロ。

にほくろがあるのも知らなかったから！」

「ただだつ黙ってください！ エッチなのはマスターです！ 不埒です！ 卑猥です！ 猥褻です！ 破廉恥です 変態です！ 下着はこの色とこの種類しか持ってないんですっ！ その記憶消去消去消去滅殺撲滅滅撃滅！！」

マントルまで届く勢いでクレーターとなつていく地面、デイグダ叩きゲームの主役なんてゴメンだ！

どう考えても本気じゃないか……コメットパンチを火事場の馬鹿力で躲すけど、自分のポケモンになつた直後、殺されそうになるだなんて、そんなの想像出来っこない！

ヒートシンク機構は、羞恥心という高熱に排熱が追いついて居らず、首筋や断熱加工の手甲にまで、煙が上がる程のヴァーミリオンカラー。

「コメットパンチ！ コメットパツ………あ、う……」

今までだったら、下着を見られたくらいで声を張り上げる必要性は無かった。

贅肉が極端に薄いのだが、胸から下のラインが常時一定であるイカ腹くエアーズロツク（おへそ）まで片腕で覆いながら、もう一撃……は繰り出されず、傾いた身体は修正が効かずに、ジツクの胸板へトントン……倒れ込む。

「!?!?」
これは違うんですっ!! わたしのマスターの……そうっ！ バイタル測定ですっ

！ 耳や額でこう」

「……………んっ、ポケモンセンターまで行くよ！」

「ひやつ!? ヒヤヒツ!? まっ、まますた……………こんな格好で、で、あ、きゅ、きゅうううう……………キキキ、ががつ……………プシュツ……………」

下着の必要性を、一ヶ月掛けて理解したヴィヴィ。確かに……………とても重要な最後の砦である。

僅かなHPでコメットパンチを（マスターに）連発し、限界だった身体を彼が支えて、リュックの中からある物を取り出し彼女の身体、特に下着が見えない形にラッピング。「れいかいのぬの。強い霊力が込められているけど、呪われたりはしないから安心して」

反物質を司る神のお住まいの一角で、拾った物がこんな状況でこんな使い方をされる事になるとは。ヨノワールもしっぺがえしされた顔になってしまう。

「こんな事せず……………ボールに戻せばいいだけなんじゃないんでしようか……………」

「だってヴィヴィは、まだボールに入れないじゃない」

「……………スミマセン」

それでも電脳空間で救出した時と違い、負ぶるではなく横に抱えて両膝内側に手を入

れる、お姫様抱っこの理由……多分帰還路でも大切な仲間になったヴィヴィの顔を見て
いたい……多分そうだ。

「……………むすっ……………」

会話は疲労感もあり叶わず仕舞いだったけど、暴れたりはずせ大人しく彼の手に運ば
れながら、身を委ねている。ちよっぴり頬を深紅に染めながら。

（スカートみじけええ……なんで女の子は、こんなに短いの穿きたがるんだろっ……見
えたって仕方ないじゃん……）

残りのスカート生地感触が、肘付近に擦れる。

校則違反ならぬ常識違反スカート。

どれだけ動き回っても風が吹こうと攻撃を食らおうと、寸前で秘宝を隠していたの
に、急にお披露目されてジックも内面ではかなり焦ってるし、何度もオトナの下着を着
けたヴィヴィの内側がフラッシュバックしてしまう。

なので言い出しつぺに関わらず、ポケモンセンターまで会話出来なかった。

無言のままメコンやズナミヨ達、捜索隊と再会し事情を説明。事態は収束した。

「……………ミノッ♪」

仲間を助けた、自分がしたのはそれだけだ。

最後尾を普段通りのヌボツと、ゴクリンフェイスでぴよんぴよん砂囊を揺らし、跳ねながら主人の両手を揺り籠としていたツインテールの少女は、今後ヴィヴィと呼ばれる事となり、好奇や驚愕や羞恥の感情が一気に花開き、多感になっていく年頃の少女を追いかける。

「ノホホッ………」

自分がそうである様に、彼女もそうなんだ。

「ミノミノ〜ン！」

彼女を最初に発見したのも、彼女の行き先が分かったのも、こうして同じ主人の手持ちになるのも。

似たもの同士だから、なのかもしれない——

Segment・tetra—ぬくもり

動乱の日であった。

催し物には参加出来なかったけど、それ以上に大事な思い出を心に刻める事が出来た。

「ヴィヴィ以外の子には申し訳ないけどな。明日の夜もお祭りはあるから許して貰ったし、事情も事情だったし……ハア……、俺ん家よりは……いや認めよう！ 俺ん家のお風呂よりずっとすご〜いぞ〜!!」

臓腑に染み渡る〜露天風呂からの壯観なる景色〜隠れ里の秘湯をイメージした〜備え付きの温泉一人……と一匹の♂で占領の図〜!

正確には女性軍が入浴を終えた午後二十三時近く、手桶を浮き輪代わりにプ〜カプカしながら、フォーセンガム膨らませているかたくりこと、写真撮影禁止なので心の中でシャッターしながら、美肌と豊乳（これは男に効果無し）、そして縁結びの効能が染みこんでいく湯に浸かって、やあつとりラックスタイムを確保したジツク。

「混浴に縁結びは分かるけど、普通は家族とか恋人とか、俺みたいに手持ちとか。既に縁

て無力で弱いのだと自己否定、手持ちの声も聞こえなくなり墮天……プライドを失いながら、かつてのプライドに縋る。下っ端共はトラヴィスに憧れていた門下生や、それに可愛がられ鍛え中だった者達。

トラヴィスが勝てないなんておかしい！ 現実を直視できず慕う彼の言いなりになるが、一人が「これって不味いよな？」と思っても歯止めが効かず、トラヴィスには誰も逆らえず、怯えながら収まりが付かない場所まで誤りながら進んでしまっていた。彼らだつて悪人では無いが、フエンの住民達や町その物に迷惑を掛けてしまった事實は覆せない。

フエンのジムリーダーさんには、感謝しますと頭を下げられたが負い目を感じていらしい。自分が解決すべきだったのにと。

後はジムリーダーさんや警察に任せておけばいい……安心して観光——

「失礼します、お邪魔します、ご一緒願います」

?
!
?
?
?

人間一人と、ミノムシ一匹の白煙が彷徨う貸し切り温泉に、挑戦者……もとい、可愛すぎる侵入者が現れた。

「ヴィヴィ!?! あいつ、男が入る時間帯なんだけど……」

「混浴なので問題ありません、その様な張り紙もありませんでした、わたしはマスターのポケモンです、一緒の湯に浸かる事にご不満おありでしょうか?」

マルマインの素早さを凌駕する速度で、男にしか存在しない器官を中心にタオルで隠す。タオルを入れるのはマナー違反だが、そんな事言つてられない。

「イエ、モンダイナイデス……」

「……………裸の付き合ひ、と言う物です。非論理的ですね……」

堂々と闊歩してきたヴィヴィは惜しいことに……いや、女性なので当然タオルで全身を覆っている。

もしも羞恥心が生まれていなければ、タオルで隠そうともしなかった、かもしれない。ジツクのナニを見たつて、ナニも思わなかったに違いない。

ツインテールは特に纏めたりせず、そのまんまな辺りが彼女らしい。これなら万一剥がれても《都合良く隠してくれそう》だ。

「……………」

「……………」

「……………」

「あのつ、なんか喋ってよ……………」

前からも横からも、胸が際立つクリアボディならぬ、いやらしボディ。

タオルを巻いてもトレージャーポイントの様に、丸印の付いた谷間、乳ほくろはこの位置からだと見えてしまっている！

母性の象徴たる輪郭はくつきり浮かび、ツンのめったアンバランスな曲線を描く。

「……………マスタ―……………」

「……………ああ」

自分から？ それともヴィヴィイから？

ぴとっ…………手と手が自然な形で重なっていた。

湯の中からでも分かる、彼女の肌は永遠の思春期だ。

どんな女の子も「ここで時間を凍結させて可愛さ、美しさを維持したい」と思う時期がある。

ヴィヴィイはそんな子だ。子供と大人の狭間に居ながらずっと保ち続けられる、良い意味での未完成品。

……胸だけは大人をも凌駕するGに近いFなのは周知の通りだが。

彼女の声色が少しだけ優しい、鋼が溶けたのではなく、暖かい物が混ざりより硬く、強く、感情を知ったこの子がマスターと認めた男性のみに、垣間させる。

「お礼がまだでした……ありがとうございます、ございます……」

その「ありがとうございます」は、借り物でも真似でもない。

目を見て話してくれる様になった、感謝の気持ちをもそのままに。

「どうやって表現すればいいのか……良く分かりませんでした……簡単で、だけどやっぱり……難しい……です」

念話でアクセスした時と同じかそれ以上に、彼女との距離が近い、物理的に。

離れるどころか近づいてくる、魅力の結晶体にややテンパるジックだが、心の溝が埋まって親交を深める事が出来た。

「あつたかい……ですなマスターは……」

「温泉に……入ってるから血行が……」

「違います、そうじゃないです……」

「ああ……そうだよな、ヴィヴィだって……あつたかいよ……?」

「それはっ……磁力の巡りが……良好になった……からです……っ」

スススス——体育座りしながらの横移動は、磁力反発でも使用したからだろうか。

距離を一気に十メートル近く開かれてしまったけど、今度は後ろを向きながらジツクの肩へと再び接近、背中を預けてきてくれた。

なんだこの……可愛いポケモン！

例えどれだけ離れても声が聞こえる、この空間へ横槍するのはアルセウスであつても許されない。

いつの間にか、かたくりこも消えているし……気を遣ってくれたのだろう。

「マスター、わたしを助けてくれたのは、メタグロスだからですか？ 強い種族だから

……助けたんでイタツッ!？」

「そんなの考えるまでも無く、身体が動いてたよ！ ヴィヴィがどんなポケモンであつても、俺は助けてた！」

「……………そ、ですか……………あ……………んっ、マ、ますた……………あんっ……………」

ちよつとだけ力を入れて、少女の頭に手を添える。

俺が希少さと能力値だけしか興味ないトレーナーに見える？ ヴィヴィつたら酷いな〜！

そうニュアンスを込めたデコピンに近い要領で、ポフツと。

「は……………っ……………ん、ふ……………あ……………あ」

ヴィヴィがどれだけ強くても、一匹では絶対にザムヤードには勝てなかった。

最悪のタイプ相性をはね除けて、自分が勝利出来た理由……………検索、結果……………

(この人が居たから……………この人と一緒に戦ったから……………)

自分は一匹で戦っても強くない。

マスターと一緒に戦ってこそ、真の力を発揮し、秘められし能力を解放出来るんだ。

(原理——不明——理解——不能——でも——)

これから理解出来る様になればいい、そう考えられる様になった、してくれた。

「……………ぺちっ、ちよ……………ちようしに、のらないでくださいっ……………せくはら、ですっ

……………」

「あつ、!? ゴツ! ゴメンねツ!」

ここだけ時間の流れがゆっくりだ、とつても気持ちが良い。

頭に手を乗せてから、疑問を持たずに彼女を撫でてしまっていた。

ネリも、爽羽佳も、メコンも、かたくりこも、スキンシップは嬉しいけど恥ずかしい、

温もりのトレード、分配、確かめ合い。

もう家族同然の付き合いとなる女子三名は、言葉せずとも仕草や雰囲気で察することが出来る。今はしてあげるべき、して欲しいと思っっていると。

「わるぎ、ないのなら……ゆるしてあげます……」

本当の意味で仲間になったばかりのヴィヴィに、断りをスキップして長い間撫でてしまっていた、らしい……？

言い訳にしか聞こえないが、全然気がつかなかった。

自分から女性に触れたり、その手の話題を振るなどは細心の注意を払い、絶対しないジックが無意識にセクハラしてしまった。

(ブクブクブクブク……)

手を払い除けられて、頭と髪を撫でてしまった一蓮の行為を謝罪する。

そうしたら彼女は、折角歩み寄れた関係を拗らせてしまったと、悔む……よりも先に、アツサリ許しを貰えた。

何故だか、のぼせた風な口調であったが……

ジト目で唇まで湯に潜らせ、ふてくされたヴィヴィであるが、重なつたままの手はセクハラ被害の訴えもせず、湯船から出るまではずっとそのままであった。

鋼なんかじゃない、とても柔らかい生まれたてな質感を。

(炎に焼けたのとは似て非なる……マスターの体温、香り、脈動……いっぱい、感じる

……)

情緒も大分、躍動し始めたらしい。

追言されなかつたので、ジツクもそのまま手を繋ぎ、何てことの無い話題から、とりとめの無い会話をし始めた。

もつと彼女と仲良しになりたい、また拒否されたりするかもしれないが、こちらから歩み寄らなければ。

ぎこちなくだが、会話を広げてくれるヴィヴィイから、今までは香らなかつた匂いがする……初摘みミントにも似た、心まで届きクール、それでいてビターチョコレートのように、甘さの隠し味。

ロリ体型だけど巨乳で、機械的だけど直情的にもなり、嬉しいのだけど素直に言葉にしない。

二面性を貫くヴィヴィイの、なつき度が少し上がった。足並み揃えるこれからを予感させて――



「ヴィヴィイさん♪」

「ヴィヴィ〜〜！」

「ヴィヴィちゃん！」

「ミノミノイノ！」

「……………なんですか、寄つてたかつて新人虐めでしょうか？ チーズドッグなら持つてませんよ？」

翌日の十九時。本当の仲間としてジックメンバー入りしたヴィヴィは、羨ましがられる様な、からかわれる様な、そんな声色交じりに祝福として胴上げされた。

五百kgオーバーなメタグロスも、人化した少女ならば攻撃時以外は見た目相応の体重、つまりトンでもなく軽い！ 胸部以外は！

おやを持ったポケモンの証、気になるボールの種類は最も一般的で、汎用性の高いスタンダードなモンスターボールとなった。

と、言うのもジックが

「ねえねえヴィヴィ、キミが入るボールなんだけどさへビーボールとかどうかな？ 登場時に青と灰色の六角形が弾けるんだ！ メタグロスのイメージとぴったりの重厚」

「へビー、とは？ わたしが『重い』から、と、言う意味なのでしょうか？ 女性に対し

てその発言は、マスターと言えども如何なものかと？ 鋼だからヘビーは安直すぎます、却下です」

「……………スミマセン」

二日前のヴィヴィならば、どうでもいいの一言で終わらせていた。

いや、ボールに入ろうとする意思は無かったので、それすらも叶わずじまい、幻の会話となっていただろう。

そういう意味じゃなかったんだけど……謝るジツクを見つめるその深紅は、「冗談です」と目は口ほどに物を言っていた。

本人には絶対言えないが、胸だけはヘビーなのがまた……

(ボールの中に収納されているよりも、外に出ていた方が——なので、どんなボールでも良かったのですけど……)

そして、なんと！

訂正、情緒も感受性にも目覚めた今のヴィヴィならば、そうであるべきか。

「お祭り、ヴィヴィも参加するんだ……！」

「しますよ？ 何か問題でも？」

「問題ないよ！俺も皆も町の人達も嬉しいよ！」

「……………そ、ですか……………」

ぶつきらばうな口調はそのままだけど。

効率主義者が、地元でも何でもない町の、煩いだけの行事に参加する。

これまでの彼女は聞けば、何の意味があるのか理解できず、引つ張られても動こうとしなかったのに。お神輿だって「ポケモン数匹居れば担げるのに、あれだけの人数は非効率的」と言い捨てていたのに……………！

「参加してみれば……………意外と楽しいかもしれないので……………」

「そうだな！浴衣も似合ってるよヴィヴィ」

「……………どうも、です……………」

女性軍は全員、着付け屋さんの老婆に「夏に咲く花柄」の浴衣を借りて、彼女達自身が夜なのに眩しすぎて、グラデシアよりも綺麗に咲き誇るアレンジメントは、会場の男性も女性も見惚れてしまい、神輿が落ちないかが心配になる。

爽羽佳はケイトウ、ネリはハウセンカ、メコンはセンニチコウ。

ヴィヴィは……………“秘めた愛・秘密の恋”を意味するエリンギウム。

本人が選んだ物ではなく、老婆に選んで貰った物だけど、果たしてこれは偶然なのだろうか？

(わっしょい、わっしょい、わっしょい……非論理的な掛け声です、こんな事したって腕力が変化する根拠にはなりません……けどっ)

ちよつと、ホンのちよつとだけ、楽しい……です……

目の前で手持ちや参加者の皆さんと、掛け声を合わせ担ぎ棒を背負う、マスターの背中をジツと見つめながら、ヴィヴィは思う。

相応しい言葉が見当たらないこの……胸が温くなる現象、最も安心して最も困惑する、不可解な気持ち。

それも追々知っていけばいい。

ヴィヴィはそう自分へ言い聞かせながら、今年最後のフェン祭りの参加者として、何故毎年盛り上がるのか、開催されるのか、その理由が理解できた気がしたのだ。

やってみなければ分からない、やってみて初めて分かった。

そして来年も皆で行けたらいいな、とも

Segment・penta——仮想仮面

たった一週間。それがタイムリミット。

自己顕示欲の強すぎる、脳中区まで矢を立て続けに打ち出された振動が、キンキンに五月蠅すぎるオスは、居場所をメスに知らせる為に命ある限り、その身と羽を震わせて泣き続ける。

……は、昆虫のセミの生態。

ポケモンのテツカニンは、他の種族よりも短命ではあるが、一週間一ヶ月でポクリと急死する木の枝にかるうじて残る、枯れ葉の様な一触即発、毎日が危急存亡とまではなっていない。

「予定通りに進めば、スタジオムの完成は一月か………」

トレーナーの腕が試されるリトマス紙、上手に育てられなければ、セミの鳴き声すら埋没させる大音声は、トレーナーをも頭痛に悩ます。

そんなポケモンが残像を散らしながら、動き回るのだからテツカニンを所持するト

「レーナーは、予めご近所さんへ断りを入れておくか、メインストリートや公共施設とは、距離をおいた場所に住む法律が定められている。完全にテツカニンを操るだけの腕があるのなら、話はまた違ってくるのだが……」

「『アレ』の完成も十二月末から一月中旬を、目処にしていたな……スタジアム完成記念として開かれる、ポケモンバトルトーナメント、その第一回大会の優勝賞品になるであらうな……」

テツカニンの鳴き声も沈黙し、明るく輝く楽しい大都会。

ホウエン地方の中心部に位置するキンセツシティも、丑三つ時ともなれば、ぼうおんのポケモンへ放たれたハイパーボイスの如く、無音無人無光。

……やや膨張した表現にしてしまったが、ラスターパージ以上の眩しさが嘘みたい
に、暗晦した蚊帳で包装された大都市。

今夜に限ってはゲームコーナーも、キンセツヒルズも照明が落とされており、街全体が深い眠りの縁に突き落とされた様な静寂。

「直接奪つても良いのだが、『デボン』本社のセキリティは私でも突破は困難だ。失敗する訳にはいかぬ、確実に手に入る一月を待——」

大都市から少し離れた南部、百十番道路には巨大なジオフロントとして開発予定であった、ニューキンセツ。

開発中止となり手つかずとなっていた、跡地を政府が買い取り《ニューキンセツスタジアム》なる、大規模なポケモン競技施設の制作プロジェクトを数年前に始動。

着実に、何の問題も無く完成へと歩を進めている。

なみのりを使わなければ辿り着けなかった、隔離された小島の様な場所だったのに、百十番道路から継ぎ足される形で道を新設し、なみのりを使わずともニューキンセツへ入れる様にもなった。

漆黒の内側から伸びる、キンセツ周辺での唯一の光は複数のサーチライト。

警備用として取り付けられ、スタジアム上空を投射し続ける人工光。

その狭間を「光を避けるゲーム」と馬鹿にしているのか、合気道よりも華麗に捌き、ダンスよりも身軽な動きで避ける人影。

異常発達した四肢は、リングマよりも強靱、この者こそがポケモンとして戦えてしまう……生身とは思えぬボスゴドラ並の鎧を纏っているが、さらに解読不能の古代文字を思わせる、謎の電子記号を内側に走らせ、悪タイプよりも「悪」らしい、奈落からの死神。

あの時ミナモシティの民宿跡地に姿を現した、黒衣の片割れだ……！

鼻に目、耳など顔を構成する上で必要となっているパーツが何も無い。

日本の伝記に語られるもの……妖怪のつぺらぼうな風貌……

ネリだったらこう尋ねるだろう、「そんな服着て暑くないのかニヤ？」

気温など感じないのかもしれない、人間かポケモンかも不明瞭で性別すらも判断不能な、怪談絵巻から飛び出して来たバケモノ。

夏と言ったらお化け……だが、ゴーストポケモンすら身体も声帯も金縛りになってしまうであろう、ホウエンへ不正侵略しに来たクラッカーなどご勘弁だ……いや、この者こそがサイバーウイルス感染源なのかもしれない。

この球体仮面がミナモシティに続いて、キンセツに出現した理由とは——

「動くなッ！ 立ち入り許可を得ていない不審者めっ！ 俺達はホウエン警察本部の者だっ、最新式の赤外線スキャナーに反応があつて駆け付けてみれば、のつぺらぼう！

お前はどんな目的があつてスタジアムの屋根に昇つていやがるっ！ スタジアムを壊すつもりだったのかっ!？」

(……………ほう、これはこれは……………懐かしい顔だな……………老けたな、ハウゼンよ……………)

新規投入されたのはサーチライトよりも高性能、ホウエン警察本部に配属された即ち、政府に認められたエリートの手持ちである、遙か遠くまでその光は届き、迷い人の道しるべとなるデンリユウの尾から発せられた光を浴びせられても、黒衣の者は動きを止めただけで内心は焦りも動揺も生まれない。

部下を二十名程引き連れて、隊長自ら後出動。偉そうに椅子に座つて判子を押すだけの仕事かしたいから、警察の道を選んだのではない。

聞き込みも部下からの報告を待つだけでなく、自分の脚で行うアクティブな四十五歳、平和を乱す者は徹底的に討ち滅ぼす！

『あなたとポケモンの治安を守ります』をスローガンに掲げるのは、ポケモンリーグ・ミドルエイジクラスの優勝者《ハウゼン隊長》

彼は若い頃から警察機関に所属していたのではない。ミドルクラスで優勝し、実力を

買われて政府からスカウトされたのだ。

なので組織からすれば入隊して数年しか経過していない新人。

だが極めて忠実に職務を全うし、どんな事件も諦めず粘り強い捜査で解決に導く忍耐力、凶悪犯も手持ちとのチームワークで捕獲してしまいが場面によつては、単独で突撃し無事に生還を果たす身体能力を兼ね備える警視庁の荒武者。

異例の速さで出世して行く彼へ「遅咲きだがまるで、悪を懲らしめる為に産まれた男」と、部下達は理想の上司であると憧れを抱く。

どくタイプが好きと言う、警察としては意外性のある好みもまた魅力的。最初から警察を目指していた人物ではないので当たり前なのだが……

購入してそれ程年月は経過していないが、草臥れたトレンチコートに中折れ帽、長く伸ばしたもみ上げは顎髭と一体化している。

ボサボサで不潔な無精髭とは混同してはならない、毎日手入れは一時間以上も欠かさない、ダンディズム溢れた容貌に奥様方からも指示は厚い！

「二歩でも動いてみる、俺のクロバット、マジユラムがお前の首に羽を当てているのが分かるだろう？ 二分割してやるつもりは無いが、お前の行動次第で血を流さない約束は出来ん！ お前の目的は身柄を拘束してからその仮面を外し、刑務所で洗いざらいしてやるっ！」

「……………ふつ、ステルス機能を備えていたのだがな、見破れるとはデボンの科学力には脱帽してしまうよ」

観念したかの様に両手を夜空へと伸ばす球体仮面。

デボンが機密事項で開発を進めていた、犯罪を取り締まる為に有意義に役立てて欲しいと、ホウエン警察本部へ提供した最新式のスキャナーは、スタジアムの四方に乱立されている、クレーン内部へ搭載されていた。

数日前、キンセツシティの南部で人影……？ の様な物体が屋根から屋根へと飛び乗ったり、何かに捕まって浮かび上がる光景をスキャナーを持った部下の一人が発見。

アレはどう考えても不審者に違いない！

スタジアム建設に関わっている者だとすれば、あんな格好をする必要性は無い！

憶測も多大に含まれているが、万が一を起こされてしまったら遅い……張り込みを開始した甲斐があったという物だ、再び現れてくれたのだから。

「袋のコラツタ、まな板のコイキング、警察のポケモンであるマジユ達は、容疑者確保の為ならば『多少』、手荒な真似をしても良い許可が特別に下りているのは、ご存じですよね？ はあく、ディンブラが冷めてしまう前にのっぺらぼうさんを、確保出来て良かったですわぁ〜！」

張り詰めた緊張が走る状況であるのに、少々……いやかなりKYとも言えるお嬢様口調。

人化したこうもりポケモン、クロバットのマジユラムはハウゼン隊長の手持ちであり、一人称を「マジユ」と呼ぶ、真紫のゴスロリ衣装で着飾った少女。

ゴルバットから進化を果たし、四枚に増えた音速の翼は、隣を通っても気がつかれないので、隠密行動には打って付け。

内股になりながらスカートを抑える仕草すらロイヤルに、上側二枚の羽をサイレントのまま羽ばたかせ、下側の一枚は球体仮面の首元へ、もう一枚にはティーカップを乗せている。それでいながら、デフォルメされたズバット模様が並ぶ、日傘を抱えているのも淑女の成せる余技なのだろう。

くどくない程度、カールさせた毛先はお約束か。

超高速で飛ぶ事が得意になった代償として、休むのが下手になってしまうクロバットが、制止したままバラに似た高貴な香りと、たつぷり入れたミルクの風味を楽しんでいるのだから、普通のクロバット何かではない。

球体仮面が妙な動きを見せるのなら、つばさでうつ攻撃をする！
真夜中の
ティータイム中でも一切油断はしていない。

トレーナーへのダイレクトアタックは、どんな事情があっても禁止され悪意があるならば、生涯免許を剥奪されてしまうのだが、警察のみ唯一の例外。

先述の通り、マジュラムは『多少ならば』平和を脅かす種になるであろう、このインベーダーの様な生物を傷つけても許されるのだ。

力加減を見誤ってしまい、そのまま犯人を亡き者にする事態など発生すれば、逆におやである警察官とそのポケモンが独房行きになってしまうのだが……特殊な訓練を終えたポケモンでなければ、攻撃許可は与えられないので今のところ、その様な悲しい事件は起きてない。決して命を奪うために攻撃するのではないのだ。

さらに、身動きの取れない球体仮面の背後には、これまたハウゼン隊長の手持ちである、あしながポケモンのアリアドスがクレインからつり下がっている。

暗闇と言う条件も味方しているが、何らかのアイテムの力を借りなければ視認不可能な極細糸で、クモのすを張っており仮に背後へ逃げたとしても、ムシヨ行きの未来は覆せずに、もう逃げられない！

前門の蝙蝠、後門の蜘蛛、気配を感じさせず粘着性と抜群の強度を誇る糸で、不審者確保の準備を終えていたアリアドス、ドルーガーは人化しておらず本来の姿のままである。

人語を発する事は出来なくなってしまうが、コミュニケーションは取れるし本来の姿

の方が、裏工作を行うスピードが早かったのだとか。

論理的な事情であるが、ドルーガーもまた警察のポケモンなので、任務に私情は持ち込まず球体仮面への攻撃も辞さない、不屈き者を絡め取らんとした激甚とした表情を見せている。

凄腕トレーナーの手持ちに挟撃されているが、これだけで包囲戦法は留まらない！

不審者確保が優先なので、相手がポケモンをボールから出していなくとも、大群で制圧する！ 実に効率的な手段も政府から許可されているからだ。

いつの間にか上空へ現れていたのは、部下達の手持ちであるケンホロウ、ココロモリ、フワライドなどのひこうポケモン。

中にはテツカニンの姿もあり、喚く事はせずトレーナーの指示に従って球体仮面の周りを飛び続けている。

クロバットすら超過する速度を持つので、全くその姿は捉えられず完全に、闇夜にすら同化しない「透明」となっているが。

テツカニンを上手に扱えている部下達も、相当な手練れであるとお分かり頂けただろうか？

スタジアム々百十番道路のルートを結ぶ、復路には正面からの攻撃は如何なる物でもはじき返すトリデプス達がバリケードを作る！

これだけ念を押ししても用意周到なハウゼン隊長は、バリヤードも導入し空気を固めて作ったバリアーで、スタジアム外周を完全に覆わしている。

三百六十度に透明な檻とも呼べる強力な壁、上空にはマジユラムとドルーガーを始めとした空戦部隊、デンリュウの探照灯に照らされながら、誤算に備えた防壁……

「身柄を確保しろッ！ 奴はポケモンを繰り出していないが所持しているのは確実だ、ボールを全て取り除き——」

「ポケモンを……？ 繰り出していない……？ ハハッ、ハハハッ……的外れだな隊長」

——私のポケモンは既に出ているのだがな——

これだけの精鋭部隊に囲まれて、孤立無援となった仮面は気が狂ったのか、男の様な低音と女の様な高音が入り交じる、心底気味の悪いエフエクトが掛かった声で笑い出した。

「どうやら……倒れ込む程度の傷を負わせてしまう必要性があるらしい……！」

「ティーカップをソーサーへ置くよりも先に、マジユラムが使い方次第ではテーブルにも、鋭い刃物にも展開出来る翼で——」

「——キヤツ、ああああッ、!?——ヒヤツ……カ……ッ……たいちよ……?」

それは黒。

それは鬼神。

この星へ流れ落ちたもう一匹のインベーダー。

「!? マッ! マジユラムッ! ドルーガーッ!」

空戦部隊……よりも遙かに上、大気圏外からの攻撃……?。

手首に切り傷を入れるつもりであった、クロバットの少女が背後から襲撃され撃沈。

一瞬だけ気後れしてしまったが、お尻からだけでなく口からも糸を吐き出せるドルーガーは、マジユラムを攻撃した対象が居るであろう、星見えず願いを月に託せない常夜のスクリーンへ、ハウゼン隊長からの指示を得ずとも直感と経験を頼りに応戦!

「……………」

額に金色の単眼を刻んだフード、黒衣のローブで全身を覆う非物質ながら、規格外れのオーラ漂わせる存在感。

あの時、球体仮面と行動を共にして、民宿跡地の地下、電脳空間に入り込んでいた者だ……！

Segment・penta——黒ノチカラ

バリヤードの作り出した壁ごと破壊して来た金色単眼は軌道を読むまでもなく、真つ向から白銀色の光を収束したビーム、マジユラムを撃ち落とした時と同様の技をぶつけて、易々とウツボットの消化液ですら溶けるまでに時間をかけさせる丈夫な糸を消滅させ、逆に糸を辿るかの様にドルーガーへ直撃。

(ロザリオにキス……どころか汚し、切断する……おぞましい存在……ですわあ……隊長……申し訳ありません……)

あのビームで四つの羽全てを、丸型に貫通されてしまい飛行も出来なければ戦闘も行えず……一撃で瀕死になってしまふなんて……

油断はしていなかった、だがあの黒衣の仲間と思わしき金色単眼の気配は、皆無であつた。

生き物が必要としている生命エネルギーを闇の中、一滴落ち込んだ墨汁ほどにも感じられなかったから……球体仮面ですら生体内で活動する、何らかの動力源があると察知

出来ていたのにも関わらずだ。

途中で繰り出した素振りも暇も与えてなかったの、最初から球体仮面を守る様に何処かに身を潜ませていたのかもしれない……

視線の矛先が集中するつ、金色単眼は無言のまま旋風の如く速さと、血を啜り生きている殺し屋の様な洗練された捌きで、ホウエン警察本部が誇っているエリート達を、イージーゲームの標的として捉え為す術も無く、瀕死へ追い込んでいる。

撃墜されたドルーガーとマジウムは、空戦部隊のケンホロウ数匹が地表スレスレのタイミングで、本来は犯人の確保に使用する軍用電磁ネット（人間用に出力を調節したエレキネット）を展開し、キャッチする事が出来たので二匹の命に別状は無い……が、戦う事も出来なくなってしまうた。

「これだけのポケモンを……たった一匹で……ツツ!？」

上空に集っていた空戦部隊は、寿命を終えたセミが儂く逝ってしまった様にゆつくりと、一匹残らず墜落。

再び破られてなる物かと決死の力で、壁を練り上げる努力も空しく、何かの武器を一閃しただけで、苦労をあげ笑う様にバリヤードを倒し込む。

トリデプス達がステルスロックを設置、機動力を封ずる為なのだが、白銀色のビームを旋回させながら発射、大量の岩施設を全て破壊し、武器と思わしき物を八の字に振り回しながら突っ込んできた。

(トリデプスの防御力すら貫いたのかっ!? 何という常識外れの攻撃力だっ……! 刃物で切り裂かれた線上の傷……?)

トドメは横一閃、絶対防御壁が真っ二つに両断され息を合わせたかの様に、ドミノ倒れなトリデプス。

部下が所有するデンリユウが、かみなりを奴が反応する前に怒濤の連発!

作戦を速やかに切り替え、他のポケモンの相手をしている隙に、あらん限りの電力を蓄えておいた。

次の電気攻撃の威力を二倍にするじゅうでん。副次効果としてチャージタイムがある攻撃を連発させる事が出来る。

二倍の効力は最初の一撃のみだが、連続発射してしまえばそのまま、相手を倒せることは珍しくない。電気を溜め込む最中は無防備になるので耐久力の高いデンリユウや、ジツクも所有しているランターン辺りでなければ、扱いづらい技ではある。

機転を利かせて全発命中させたデンリユウは、それでも簡単に倒せる相手だとは思わないので、さらに10まんボルトを撃——

「……………ツツ、無傷……………だどっ……………!?!」

馬鹿なっ……………こんな事があっていいのか?!? あのポケモンのタイプははじめんなのかっ!?

ゆらりっ、ガシヤリ、金属が擦り合う音を鳴らしながら浮遊、動いたかと思えば背後
霊……………いやっ! ソイツは既に前へ、懐へ潜っている!

身構える事も許さずに、デンリユウへは縦一閃、額のライトから白いお腹まで、息をするのも忘れてしまう美しさ……………黒々と変色した斬跡を残され戦闘不能……………

何かしたか?

無言に発する金色単眼は、最大火力+タイプ一致の連撃を浴びせられたと言うのに、
防御した動作も見せずローブに電撃の残りカスすらも付いてない……………

逸らしたのではなく根本的に、電気技の効果が無かった……？　ダメだっ！　あまりにも敵の情報が必要すぎる！

「どうした？　つまりかせる小石にもならんぞ？」

100vs1に近い戦場と化した、建設中のニューキンセツスタジアム。

弱い者虐めのようなバトルを嫌うハウゼン隊長は、所属したての時は悪を懲らしめる為だとは言えど、数で押し切ってしまう……彼が嫌う不良と同じ様な作戦には嫌悪感を持つていた。

それでも正義のため、市民を守るため……自分に言い聞かせながら、あらゆる任務を遂行し、犯罪者を引っ捕らえて来た。

……のにつ、たった一匹のポケモンが飛来し、たった一匹で壊滅状態に追いやられてしまうなんて……

「諦めるな！！　俺達が諦めてどうするんだっ!?　まだポケモンは残っているのだろう！　戦えッ！　奴を逃してはならんっ！　俺達の職業はなんだッ！　誰の税金でメシを食えていると思っっているッ!?　戦えッ！　市民の生活を守るのが俺達の役目だろうっ!!　いけっ！　オルフェー！」

「ふ、ふっ……少しはマトモな強さを持つポケモンのご登場か……相手をしてやれ《C》
S《よ》」

圧倒的な戦力差に部下達は愕然、戦意すら夜空へと虚していた……が、憧れの隊長がメガホン要らずの怒号で叱責！

腰に巻かれたホルスターデザインのもの、特注したボールホルダーから「H」のアルファベットが描かれ、イエローの色彩を締めるブラックのボディが高額品である証、プロフェッショナルと認められたトレーナーのみが所有できる、ハイパーボールを取り出して《C》S《と呼ばれた謎のポケモンと、対面させる位置へ投擲する！

「雑念は任務の邪魔だ！ 手段を選ばなくてもいい！ 奴らをぶっ倒す事が最優先だ！

『多少』ならばスタジアムを破損させても構わん！ 全ての責任は俺が取るツ!!」

「ハッ！ 了解でありますっ！」

ハウゼン隊長と最も付き合いの長い、シャドーポケモン。

毒の沼地の様な色度の短パンとスウェット、レギンスは影から生成したと噂されるつや消しブラック。

美青年ではなく美少年、生クリームを立たせた様な突起の後ろ髪は、触っても全然痛くないが無断で触れるのは厳禁、何故なら呪いを掛けられてしまうから……ゴーストタイプだけに、恐ろしい性質を持つ人化ゲンガーのオルフェ。

軍人を思わせる畏まり過ぎた口跡は、警察に身を置いた際に映ってしまったらしい。腹に手をつつ込み、取り出した黒く染まる影球を《C・S》へ投げつける！ ゲンガーのメインウエポンであるシャドーボールだ！

「……………」

光を封じる黒衣から、磨かれた鏡よりも光沢感のある白銀のビームが放たれる！

光と闇の象徴、混沌を操る力でも持っているのか……いや、違うっ！

（強力な鋼エネルギーを感じる！ ラスターカノンか！）

オルフェと《C・S》が互いの技を激突させ、相殺し、また激突……を繰り返している内に、ハウゼン隊長は《C・S》から得られた情報を頭の中で整理させる。

電気タイプの技が効かない……？

恐らく鋼タイプが複合……？

接近戦も遠距離戦も、途方無いくらいに強い……

何らかの武器を所持しているが形状不明……

電気が通じず鋼の技を使える……ドリユウズか？ あの傷跡は爪状では無かったの

だが……

「ゲンガーは特殊攻撃力の高さだけが、取り柄じゃ無いのは知っているだろう！ 豊富な補助技こそ神髄だ！」

——相手を惑わせ、毒をくらわせる……まさに変幻自在、妖しの技よ！——

同じ毒使いとして研磨し合った忍びの者……彼の口癖だ。

強さだけではない奥深さ、ダメージを負わずに弱らせ、時間を稼ぎ、自滅へ誘う、トリッキーな戦法は何でもゴザレ。

『ねむれ、ねむれ！』で、あります！

隊長の指示へ敬礼で返すのも癖になってしまったオルフェは、体内時計強制的に催眠誘導し、不眠症患者をも瞼を重くし意識が揺らいでいく、療法としても扱われる状態異常の代名詞、さいみんじゅつを試みた。

ゲンガーの素早さで先手を取って眠らせる。

この単純極まりない戦法が強いなの……命中してしまえば覚醒までの間に、みがわりを張るなりシャドボ連発でダウンさせるなり。

公式大会では「眠らせていいのは一匹まで」のレギュレーションを制定させなければ、あまりに一方的な試合となってしまふ……

オルフェが暗示を掛けようとしている。『悪人』へは、そんな配慮など必要無い！

目尻の角度が柔らかく、シヨタツ気のある大きな目をさらに「カツ！」と開かせ、殺意に満ちた血みどろの瞳は、さいみんじゅつを使う時のみ、本来の姿以上に非情無情な色を得る。

「……………」

効いた……ッ！

タイムンバトルでキマれば勝ち確と、恐怖されるが効果領域が狭いので、急いで離れてしまえば躲す事は出来る。

だが練度の高いポケモンが使えば、発動までに特殊な動作やチャージタイムはせず、ただ相手を見て「眠れ！」と命じるだけでいい。

効果領域の狭さがある程度補う事に成功した、オルフェのさいみんじゅつで数々のバトルに勝利してきた。

ジムリーダーや四天王クラスのトップトレーナーをも、関心させてしまう珠玉ゲンガーは、補えても成功率は「70%」の凶悪技を見事に命中させてくれた。ここ一番に当ててしまう運の強さも彼の才能なのかもしれない。

「奴はまだ眠っただけだッ！ 状態異常を重複させるんだッ！」

糸の切れた凧の様に力無く、スタジアム入り口前へと自由落下した金色単眼。

眠り込んだポケモンは、何時起きるかは術を掛けられた者の意思に左右される。

エリート部隊を一瞬で夜空へ捧げ、葬った戦闘力のポケモンだ、覚醒も非常に早いだろう……

何時起きてもいいように保険として、考えるよりも先にあやしいひかりを指示する。

身体に染みこんだ戦法なので、極めて短いスパンでハウゼン隊長は命じられるし、オルフェも応える事が出来る。

（次に奴が起きた時は刑務所だっ！ オルフェ最強の攻撃で眠ったまま相手を倒す！ 万が一耐えられても二重掛けした状態異常が、奴の動きを鈍らせてくれる！）

そう、あやしいひかりは「あくまでも」保険。

オルフェの持っているアイテムは、好きなタイミングに一度だけゴースト技の威力を、増強させるゴーストジュエル。

ゴースト技の効力が薄い鋼相手だって、致命傷となる一撃を叩き込める！
眠ったまま、即ち無抵抗。

急所に当てるのは実に簡単だ……！」

彼のゲンガーは力押しから、搦め手までバランス良く駆使しており、どちらかに偏ることが無い。理想的なゲンガーであるのかもしれない。

「オルフェー！ シャドーボー……！」

「……老眼になったなハウゼン……《C. S》よ、本当の精神操作術を見せてやれ」

！？

さいみんじゆつは命中したんじやなかったのかッ!?

上半身……と思われる部位のみを、垂直に起き上がらせた《C. S》はフードの額を照度ゼロの漆黑に変異。

「………了解………で………あります………」

「なッ!? どうしたんだオルフェー！ 勝手にボールへ戻るんじゃない！ 部下を蹴散らした不審なポケモンを前にして、なぜそんな事をするんだ。ッ!!?」

ジュエルを砕き、影を増幅させた巨大な玉は、倒された部下の無念を受け継いだかの如く、一般サイズの民家一つを完全に覆い隠す。

横たわっている黒フードにおもいつつきり！ 直撃してやれっ！

……たぐり寄せたと思っていた、勝利へと導かれる光明。

それが自分のポケモンに裏切られるなんて、四十五年の過去を大急ぎで巻き戻しても、初めての体験であった。

「訳が分からん………分からんが………！ 俺はまだ負けていないぞッ！ 何としてでもお前を確保しハウエンの平和を守ってみせる！ がんばれ！ センチネル！」

ジュエルシヤドボは不発。

理由を告げる事もなく、ハイパーボールへ戻ってしまったオルフェに問いかけても返事はしない……

何かの技を使われた？ あの単眼が変色しただけにしか見えなかったが、オルフェへの内面に影響する類いなのか？

現象は謎だが、考えて解決させるのは後でいい。

これが最後の砦、頼みの綱、もう一つのハイパーボールをホルスターから素早く取り

出す挙動は、西部劇のガンマンだ。

「それが最後の手持ちか？」

人間の少女と同じくらいの身長であった、オルフェと比べその身長……いや、全長差は六倍以上！

現在発見されているポケモンの中でも、屈指の巨体を支える尾は地面へと埋め込む杭の様で、進化により肥大化した顎、イカツ過ぎる形相も相まって、見下された時の威圧感には種族値には表記しきれない。

少々動揺してしまっただが持ち直し、好んでいる毒ポケモンの弱点を補強するために、育て上げた……てつへびポケモンのハガネール。

『鋼タイプ、と言えど？』

メタグロス！……と、二分割して声援を誇らしく集めるのはハガネール！

種族名に“鋼”を含んでいる明快さ、地中深くで鍛えられたダイヤモンドにも劣らぬ硬さは、インファイトにフレアドライブを食らっても平気で耐えてしまう、喫驚な物理防御性能は突破に相当な苦勞を要する。

ここまでブチ抜けた防御力とは引き換えに、イワーク時代にウリだった素早さが絶望

的に低下してしまう。

鋼の浮沈艦だ……その場から動かなくとも九、二メートルもの全長を活かし、尾を振るうだけでも飛行ポケモンが慌てふためく、リーチがあるので遅さはいくらでも補える。

このハガネール、センチネルも人化はしていない。

人型となれば僅かにだが、機動性を上昇させる事は出来るが、ハウゼン隊長は特性に頼らない「プレッシャー」を所有する本来の姿の方が、任務遂行に有利だとの魂胆である。この外観からのアイアンテール、頑強なボディがジワジワと迫る威圧感、地球の中心部まで到達する咆哮。

これは勝てない……センチネルがハイパーボールから出現しただけで、ハウゼン隊長を振り返りにする気であった泥棒は、ブルってしまい手持ちを出す事も諦める、そんなケースは何件もあった。

黒衣の二人組がビビる期待などしていないが、集めた情報から抽出したのは《C. S》は鋼タイプである可能性が高く、何らかの手段を用いて滑空出来る事。

「うちおとせッ！」

ポケモンが所持しているアイテムは、基本的に発動するまでは正体が判明しないので、戦いの最中や相手の編成を見て予測を立てる。

しかし、センチネルに持たせているアイテムは、登場すれば一発でバテてしまう、じめん技を無効化させるふうせん。

よく彼の尾の周りを視認すれば、数cmばかり浮かび上がっていたではないか！

こんなデカくて重い身体を、フワンテと同等サイズのふうせん一つだけで、地表から引き離してしまうって……大勢の科学者が原理を解明しているが、決定的な証拠は未だに謎のまま。

超へビーのハガネールは、ボールからの着地の際にそのまま地形を破壊しかねない、衝撃が走るので少しでも市民の安眠を考慮し、そして弱点となる地面技を回避させる為、二つの意味を持たせている。

時計の針と同じ速度で回転していた、胴体からせり上がる突起をミサイルの様に発射！

狙いは勿論、体勢を整えられてしまった金色単眼フード！

奴は再び上空へ飛ばうとしているっ、うちおとすが命中すれば交代しない限り、飛行・浮遊状態を強制的に失って、地面技が命中する様になる！

鋼タイプならばじしんが効果抜群のハズ！

スタジアムはこのくらいじゃ微動だにしないけど、市民の皆さんの安眠妨害となつてしまふ……奴を倒したら謝罪に向かおう！

これで《C・S》なるポケモンはズタボロ、鋼のミサイルをPPが尽きるまで発射しまくりに、奴へ届く――

――事はなかつた。

「オ……………オルフェ……………お前……………なっ……………」

ハガネールの物理防御力は、メタグロスをも凌いでいる。

あまりの硬さに攻撃側が先に根を上げてしまふ……のだが、特殊防御力は……レーダーチャートに記せば、防御がヒウンシティの高層ビル最上階、特殊防御はそのビルの三々四階。

要するに落差が激しすぎるのだ……物理技なら弱点を突かれても顎で笑えるが、特殊だとちよつと強めの技を使われたらアツサリ、ダイヤモンドの強度は砕け散る。

一芸特化のポケモンは、相性が悪い性質のポケモンと当たってしまったら、交代するか負け覚悟で留まるか。

ミサイルごと飲み込んでいき、胴体へめり込ませた“ソレ”は、格闘タイプでは数少ない特殊技、きあいだま。

闘気をエネルギーに変換、ド派手なモーションで全身全霊の砲撃。

闘気を集めるあまり、命中精度を考えられなくなってしまうので、さいみんじゅつと同じく肝心な時に、外れてしまい敗北してしまう事もしばしば……

それでも重宝されているのは、相性補完のし易さが理由となる。メジャータイプへの、弱点を突くためのサブウェポンとして有用、例を挙げるならば——

「お前……！ 何をしたのか分かっていいのかッ！ 仲間のポケモンなんだぞっ！ 俺達が戦うのはあの二人だッ！ 俺達が全滅する事態になれば厄災の種を……！！ 何故だアア、アア、アア、アアッ、くくくくッ！！」

「対象……沈黙……であります……」

——どく、ゴーストのゲンガーが、はがねタイプへの対抗策として、とか……

ふうせんも割られてしまい、特殊防御の薄さを突かれたセンチネルは、地殻をも揺る

がす野太い鳴き声を上げる事もせず、後方へ倒れ込んでしまった。

強烈な爆発音、部下やハウゼン隊長自身も巻き込まれてしまい、バランスを崩して尚も、黒衣の二人組へと憤怒の視線を生み出せるのは立派だが……

センチネルの特性は、HPが満タンの時に一撃で倒されるダメージを受けても、必ず1だけ残して持ち堪えるがんじょう。

つまり、ふうせんときあいタスキ、二つのアイテムを同時に持っている状態であった。

オルフェのきあいだが急所に直撃しても、1だけはHPを残しているが……戦闘続行かどうかなど、地面へ沈み込みピクリともしない、センチネルを見れば不可能だと歯茎から血を流しながら判断を下す他ない。

「……………任務は失敗になつてしまったなハウゼン隊長。私達は逃走させて貰うが最後に、《C.S》が降り立った理由を教えてやろう。……………単純だ、技の効果が切れたから一度降りた、それだけだ……………」

でんじふゆう……………！

重力に抗する力として、電磁相互作用を利用した変化技だ。

一定時間、使用したポケモンは浮揚し地上に影響する、あらゆる技を受け付けなくなる。

じめん弱点のポケモンに覚えさせ、じめんわざその物を機転とした能力上昇技で全抜き、空振りさせて戦いの流れを逆転、そして最も有益な効力となるのが後天的な飛行手段を授かる事。

やはり金色単眼は、地面を苦手とする鋼ポケモンなのだろう。

(こうそくいどうと遜色ないスピードで、自由自在に滑空していた……だどッ……!!?)
でんじふゆうには速度を上昇させる効果など無い！ どんな育て方をしているんだッ、クソオオオ！ のっぺらぼうめえ、え、え、え、ツ、ツ、ツ、!!)

さいみんじゅつが効いたと勘違いしてしまった。

相手からすれば、でんじふゆうの継続時間が消えたから、もう一度使用する為に地上へ脚を付けた……それだけだったんだ。

そして、味方殺しとなり、敵の逃走へ加担してしまった主犯格のゲンガー、オルフェが奇行に走ったタネ明かし。

命令を無視してボールへ戻り、ハウゼン隊長が開閉スイッチを押してないのに再度出現。

うちおとすに集中していたセンチネルの急所を、きあいだまで貫き、役目は終えたとばかりにオルフェエまで倒れ込んだ。

洗脳されていた……！

金色単眼の忠実な僕となり、感情が伴わず結果報告のみ行う言動、善し悪しも関係なく『あのハガネールを倒せ』の、命令のみを聞き入れるプログラムに支配されたロボット。

金色に光っていた目はあのフードに刻んだ模様と同じじゃないか……

さいみんじゆつに掛けられたのは、こちら側だった様だ……

「追え、え、え、ッ!! ポケモンがやられても身体は動くだろうッ!? 俺達が身体を鍛えている理由を思い出してみろッ! ポケモンが使えなくなっても悪を懲らしめる為だろうがああッ!! 追うんだ追うんだ追うんだあ!! 諦めるなあああああッ!! 地の果て! 海の果て! 空の果てへ逃げられても……追わなきゃならないんだよ、オ、オ、オ、ッ、ッ!!」

怨嗟の雄叫びを未完成の、ニューキンセツスタジアム上空へ轟かせても、球体仮面は金色単眼に掴まりながら高度を上昇させていくだけで、税に浸るのでなければ不愉快な電子声で笑う事もせず。

『夜想曲としては、まずまずだ』

とだけ呟かれ、奈落からのインベーター、自我を持ったコンピューターウイルスである、黒衣の二人組はフェードアウトしてしまった……………



炎昼盛夏！ 本当の夏の思い出を探しに行こう！

飲食店にも『冷やしタマザラシ始めました』と店内に導入したり、氷タイプは給料1.5倍にアツプするなど、酷暑だからこそ需要が急速に高まり、少なくとも夏の間は仕事に全く困らず引つ張りだこ。

中には『面接後にふしぎなアメを差し上げます』と言う、リッチなお店がここぞとばかりに氷ポケモンを動員しようとしたり……………やり方が姑息なので、政府から警鐘を鳴ら

されるのもお約束。

臉を伏せれば、あいろいろのたまな波打ち際。

うきわボーイに、うきわガール、子供達がサンダルで踏み込んだ砂浜はミクロ単位のほしのかげらの様で。

砂浜から海まで何歩で辿り着けるのだろうか、磯波から現れた野生のキャモメやペリツパーが、家族連れの荷物を持ち運んでくれている。

見返りなど求めていない、こうすれば家族揃って手を繋げられるかな……そう思ったから少しだけ手伝った、それだけだ。

人とポケモン、そして自然が行き交う港、カイナシティ………の、南109番道路。

！
この海の家でしか販売されていない、スペシャルなサイコソーダは人気だいはくはつ

『よつといで〜！』と汗を拭いながら、サイコソーダの空き瓶を振ってアピールするのは、海をの看板娘の幼女。

サイコソーダ目当てではなく、この幼女目当てなお客も同じくらい多かったですりする……

「おきやくさんいっぱい！ わたしのおうちですずんでいってね〜！ サイコソーダおいしいよー！」

大人も茹だるクソ暑い八月、もう一つの太陽として降臨なされたスク水お団子幼女は、肩紐が少しだけズレており、チヨコレート色のロリボディに流し込まれたホワイトチヨコ色が、フェチズムを刺激するなど知る由も無い。

お嬢ちゃんを見ていたら、僕の切っ先シテイからサイコソーダ出ちやうよお……など、邪濁りな想いを抱く野郎共へ分け隔て無く、手を握ってご案内するのだからもうっ………！！

夏は海、海と言えば水着！ 水着！ 水着！ そしておっぱいであるっ！！

「女性陣が着替えている間に、何とか人数分のサイコソーダゲットだぜっ！ しかし15分は経過してるんだけどなあ……そんなに掛かるって更衣室でナニしているんだろ、女の子って……」

予想ですが、メコンがギャル二人からおっぱい揉み揉みされたり、腕を挟んで上下に

動かされたり、胸ポチ守護のニプレスをペリペリ剥がされたり……全部おっぱいが原因なのでしょう。

ヘアワックスでセットせず、ナチュラルなメンズシヨートにした海用のヘアスタイル。

俺に付いて来いの昔気質のオラオラ系ではなく、女性と歩を合わせる気配りを持ち主張の強弱も配慮しながらも、女性に流されるまま使われる男性ではない。

男前の顔に相応しい、シンオウで重点的に鍛えた腹筋と腕周りの筋肉は、膨張こそ控えめだが無駄なく成長し詰められ、おっぱいが大きく身長も高いメコンを、延々とお姫様抱っこするにも苦勞なし。

厚く、逞しく、引き締まった胸板に頬を埋められながら、手持ちにハグをおねだりされちやうのも、気の利いたセリフの一つ二つを掛けてあげるから、ジツクの好感度はぐぐぐんと高まる仕組みだ。要するに、好かれるだけの行いを彼はしているのである。

この日の為に女性軍とは日をズラして、膝上のサーフパンツを新しく購入した！
普段着がカーキ色のジーンズなので、ミリタリーチックな柄がいいとミナモデパートで探し回り、選り回って数時間……

戦闘機の洋上塗装、海上自衛隊の迷彩服に近い、ピクセルカモ。

ライトブルー、ホワイト、デーパーブルーの色合いは開放的で、ミリタリーならではの

の何処か重たい雰囲気は無く、着ているだけで気持ち明るくなっていく。

アクセサリー類は特に身につけていないが、同年代の少年よりも絞られているそのボディが何よりも、女性の眼を惹く装飾品に……は、少々キザな表現だろうか？

メタグロスの少女、ヴィヴィが正式に手持ちとなったので、改めて親交を深めようとキャンセル待ちだった、カイナホテルの予約に成功したので、手持ち総員で海水浴へ！

この間温泉に行ったばかりだけど、まあいいじゃない！ ミナモの波打ち際よりもずっと広い場所で、本当の“夏”をエンジョイしようぜっ！

………！！

“あの子”が呼んでいる！ 着替え終わったららしいぞ！

さあ！ 声の主は……だくれだ？

《ネリ(D)と遊ぶ》 ↑

《爽羽佳(B)と遊ぶ》 ↑

《メコン(H)と遊ぶ》 ↑

《ヴィヴィ(F)が気になる……》 ↑

《かたくりこは何してんだろ……?》 ↑

Segment・penta——ネリルートの場合...

「……………ネリ、お前何してるの？ コンタクトレンズは付けてないだろ？」

ジツクを呼んでいたのは、快活活発狡猾、賑やか担当のマニユーラであった！

「マニユハハハッ！ お宝の匂いがするんニヤ！ ハートのウロコだったらご主人にあげるんニヤけど、しんじゆとかおおきなしんじゆは、ネリちゃんのコレクションに加えちゃうのニヤ！」

砂に埋もれた宝物を探し求めている、水着姿のネリ。

海だろうが金目や光物の匂いがすれば、関係なく勘を頼りにジグザグ、マツスグ、邪魔にならない程度進路変更しながら、爪先で穴を掘りまくって端から見れば潮干狩り。「見〜つけたニヤッ！ ベにタマ、あおタマ、みどりタマ……これは別にいらニヤーからあげるニヤ、しめつたいわにさらさらいわ……これもオマケで掘っただけニヤからホイツ。大本命のきんのだまニヤ〜！ しんじゆは3個も手に入ったニヤ！ ブロムヘキシもあつたニヤけど、何処から流れ着いたんニヤね」

まるで燃えるゴミと燃えないゴミを、分別しているみたいだ……ネリにとつて燃えないゴミ（光っていないの）を処分するのは彼であり、特にブロムヘキシンは売れば5000円近くにはなる。

……砂浜に埋まっていたので、盗んでいる訳じゃ無いけど良心が呵責する。

かと言つて埋め直すのは、それこそ砂浜にゴミを捨てている様で……

「しようがない、これは貰つておくがネリもその辺にしようぜ？」

きちようなホネまで手渡されてしまった。この短時間で発掘しすぎだろう……宝探しゲームとかそういう催し物の跡なんじゃないのか？

「そうニヤね！　ここでシカトする空気読めないネリちゃんじゃないニヤ！………とここでご主人く！　サマーバージョンのネリちゃんを見て、何か感想とか褒めて称えるとかは無いのかニヤ？」

しんじゆに付着した砂を落とすついでに、お得意のジャグリングしながら夜目が利く、？の形となつている瞳を上向きにし、女の子らしい期待を含んだ言葉で問う。

ブラックのショートヘアと、ピンクを混ぜた赤いメッシュのサイドテールは、見慣れている髪型だけど、ホワイトをメインとしポケットのラインがグレーの、ラッシュユパーカーは女性軍でミナモデパートへお買い物の際に、購入した新製品だ。

トップスのビキニと、ボトムス……と呼んでイイのかすら疑問となる、マイクロミニ

シヨートパンツと、黒いV字型がエグ過ぎるインナーシヨーツの組み合わせ。

「普段とあんま変わってなくね？」

「まにゆ〜ん！ もつと良く見て欲しいニヤご主人っ！ インナーだけでもホラッ！
ビヨ〜ンと伸びる素材になってるニヤ！ 触って確かめるニヤしいい！ プンプ
ンッ！」

シヨーツのサイド部を斜め上へ引つ張り、耐久性と伸縮性能を実演。

前も後ろも食い込みまくっているのだろう…：慌ててジックは止めさせたが、ネリは
マニユマニユ笑っているだけで、ご主人とあざと可愛い黒娘に釣られて寄ってきた、水
着の野郎共の反応に満足気。

ネリを恥ずかしがらせるのは、フラツシュを使わないでイワヤマトンネルを突破する
くらい、難しいのかも知れない。仲間になつてから一度も彼女が恥ずかしがっている姿
を見たことが無い。

ビキニとシヨープンには、黒い爪痕を刻まれたデザインが走り、攻撃的で攻め込んだ
印象を与える。どちらもVインナーを目立たせるためのピンク色がベース。

右の太ももには氷の結晶を模した、タトゥーを貼り簡単に取り外せるヘソピアスに
は、自分の魅力をよく存じており、磨きを掛けるアイテムチョイスをしたネリへ、素直
に「エッチだ…：」と思わざるを得ない。

「マニユハアア……♪ 浜辺の視線を独り占めニヤ♪ でもご主人からの視線が一番嬉しくなつちまうニヤ♪ もっと見たつて料金取らニヤあから安心するニヤ!」

耳の後ろと腰に手を当て、セクシーポーズ! 舌ペロの付録もあるよ!

体脂肪率が低すぎて、あばら骨が浮き出ているのに胸の体脂肪率だけは、平均を超えているからぷりゅん♪

その日の食事すら命がけだった、盗賊時代を持つ反動からなのか。現在の手持ちの中では、一番の大食いだと言うのに脂肪は全部胸がヘイトを集めていると言う……

ただ細すぎて人によっては、少し不安になってしまふ印象を抱くかもしれない。

「ネイルも夏仕様ニヤ! 今日だけは絶対バトルしたくね〜ニヤ!」

元盗賊なのに、目立つことが大好きでナルシストのネリは、全体の色彩配分を考えたコーデイネットにしているが、ネイルだけは調和も整合性も無視して、とにかくビビツドなトーンで着色、及びデコレーションしている。黄色、水色、ピンク、視界に染みこんでいく強烈な彩度での花柄。

親指だけがスイカになっており、ネイリストのお姉さんは根気強く塗ってくれたのだろう、お疲れ様である。

「そのネイルが壊れたりしない様に遊ぼうな! 気をつけるよ!」

「ぬふふ♪ ご主人はネリちゃんにメロメロニヤ〜ね♪ まあビーチバレ〜程度ニヤ

ら、壊れないと思うけどニヤ、高い金支払ったから簡単に剥がれたら起訴してやるニヤ！
んニヤ、ネリちゃんはアレで遊びたいニヤ！」

褒めながら撫でてくれたので、ネリの目的として設定した項目が、一つレ点を付けられご満悦。

折りたたんで殺傷力ゼロの、バトルホリデーモードの爪で前腕を引っ張りながら、ドジョツチを象った外観を持つ、小型のモーターボートへ向かい歩き出す。

「ウェイクボードって奴か！ やってみたかったんだ〜！ ネリも初めてだろ？」

「ニヤニヤニヤ！ ネリちゃんは似たような事を昔にした事あるのニヤ！ 盗賊時代の逃走法としてだけどニヤ！」

ロープを持った人間をボートで引っ張り、ボートから発生する引き波を利用して様々なトリックを楽しむ、マリンスポーツである。

なぜ、ドジョツチを模した外観なのか？

それは人間を引っ張っているから、あまり速度を出せないから、ゆったり泳ぐポケモンとしてドジョツチが選ばれたからである。

専用コースが作られているジェットスキーでは、限界までチューンが施されたサメハ

ダー型のマシンを貸して貰えるぞ！ 免許は必須だが。

ボードの代わりにこの海の近くに住んでいるらしい、完全にボランティアとして活動している、マンタインさんの背中に乗る。

ウエイクボード初心者でも、安全な範囲内でマンタインさんがジャンプやトリックを繰り返してくれるので、誰でも気分は上級者♪ 大変評判がいいのでマンタインの人気もブレイクしているが、彼らは名前を売るために手を貸しているのでは無い、純粋に人間と人間の下で暮らすポケモンが大好きだからである！

「足場が不安定ニャけど、あんま力を入れない方が立ちやすいニャ。視線はボードより前を意識して、背中は猫背のまま……そうニャ！ 腕は縮めたらダメニャンよ？ 腰の付け根に持つてくニャ」

「そつ、そつ、無意識に脚に力が入ってた。こうかなつ！ う、おい！ 出来た！ 今のスラロームだよなつ！」

「マニユハハハツ！ ご主人は運動神経いいからニャ！ マンタインの手助けもあつてもう素人卒業しちまったかニャ！」

つま先とカカトへ体重を掛ければ、ボードであるマンタインが進行方向をコントロール。姿勢と重心のバランスを可能な限りアシストするから、乗っている者は身体の力を抜

けばいい。

やり始めて15分と経たずに、中級者くらいにはなった気さえするジツクは、インストラクター代わりになったネリからのご教授で、波の間を左右へとフォーム崩さずスラローム。

波に逆らうのではなく、波を吸収する！ 水面が透けて見えるマリンプルーは空の色をも反射して、地平線の向こう側へと続く世界遺産として登録された『一般開放されている秘境』

海岸を歩くだけで心が穏やかになる、最も海が広い地方であるハウエンの中でも、格別に美しいのだとか。

「ピョイ〜ン！ ニョリ〜ン！ チョイ〜ン！ ステイルフィツシユ！ ブラインド360！ バットウイング〜♪」

変な叫び声……ボードを回転させたりボードを掴みながらジャンプしたり、複雑と思われるトリックをマンタインさんのアシスト無しで、キメまくつちやうネリは階段の手すりを、スケボーでスライドさせるのも似合いそうだ。

で、トリックの度に悪タイプだからなのか、D（ダーク）カップが忙しく揺れるのも案の定……である。

「あつヤベツッブ ボ バ ブ ツ ベベベツ!!」

「あくらニヤ! ネリちゃん可愛いからって見惚れるから転ぶんニヤ!」

まあその通りだったので、何も反論出来ぬ……

ボートを減速させマンタインさんに助けられながら、かつこ悪い姿を晒したけど笑いすぎなネリへ、少し頭をペシペシすれば愛嬌を振りまきながら、タトウの張られた太ももへ彼の手を誘導し――

「おっぱいだけに偏りすぎニヤ、こっちも見ること均等が取れるニヤし……!」

彼女にはバレバレであった、と言うよりも乳揺れを誘発させるトリックをわざとしていたと……

今日のネリには一本取れる気がしない。

ジツクの反応でニヤニヤしたり、満足したいからウエイクボードを選んだに違いない

……!

(マニユハハ……次はバナナボートでも選ばうかニヤ？ おっぱい押しついたり、脚でお腹ロックしたりでご主人を夢中にさせちゃうのニヤ！ 男の子だからどんな反応しても許してやるニヤ！ 海水浴中に好感度をブツちさせるんニヤ！)

ネリの物はネリの物、ジツクの物もネリの物、つまりジツクはネリの物（マニユラニズム）

他の3匹——かたくりこは♂なので除外——も、あの手この手で攻めまくるだろうから、最初選ばれたアドバンテージを活かして、他の3匹に眼が行かないまで骨抜きにしない！

何処まで本気で、何処まで愉快犯なのか、サマーネイルの施された爪に引つ張られながら、黒娘とのマリンスポーツを再開するのであった。

Segment・penta——爽羽佳ルートの場合…

「ねえねえねえご主人〜！ 私の水着どおどおどお!?」

呼んでくれていたのは、B（バード）カップである爽羽佳だった！

ジックが感想を脳内原稿用紙に書くよりも遥かに早く、この時ばかりは飛ぶよりも砂浜を走る速度のが上回っている爽羽佳が、胸元へ飛び込んで来たのでキャッチ！

天真爛漫イケイケ翼翔ガールの水着は、情熱的な行動力のレッドと、お洒落心を引き立てコントラストになるブラックで縁取りした、ハイネックとボックスシヨーツのセパレート。

武器でもあるモデル脚の維持や基礎代謝を高めるボディメイクに余念がない17歳、フィットネスクラブに通う健康体のJKな出で立ちかつ！

（ビキニも良かったんだけどさ、ズレるの怖くて……アハハッ……！）

期待に沿えなかったらどうしようかと、予め言い訳を述べてしまう彼女は、ようきな性格だけど手持ちで一番おくびょうな女の子。

どんな水着でもジツクは落胆せずに、爽羽佳の欲しがっている言葉を伝えてくれる。ドツキドキの心と一緒に、抱きしめる羽も身体も不規則リズムで振動させている。

オニドリルの外見的特徴である、真つ赤なトサカで右目を覆い隠していたメカクレも、海空の開放感を連想させる様に思い切り後ろへ持つていった、片側オールバック。

別に眼に傷跡があるとか、義眼を埋め込んでいる訳じゃ無いので、晒すことに抵抗はないが髪型を変更するのは久しぶりなので、直接右目を彼と合わせるのは結構ハズい
……

嘴を模したヘアピンで止めて、輪っかの中心に星の装飾を施した、ウエストネックレスで注目して欲しい部位を主張している。

160cmと、丁度ジツクが抱きしめ易い身長の爽羽佳は、チラツ……上目遣いとなつてすぐに下を向いてまた上を……繰り返す。

表情こそ軽くしているが、バク付く心臓は誤魔化せない。そんな不安でいっぱいになつている彼女の背を、ポンポン撫でて頬に手を乗せてやる。

「お前の両目が見れただけで、海に来た甲斐があつたかな！ 何時もの右目隠しもイケてるけど、髪型変えたら大分印象変わるよ、もっと眼を合わせたくなっちゃう……」

「フ、イ、イ、イ、ツ、くく!? ……ファイ、い、い、い……! ふひえへへっ……! やったあ! やった! わ、私もこれだけで海に来て良かったって……」

「……………その変な笑い方でマイナス30点だな」

「ち、よ、オ、!? しやーなしだもん! 驚いた後に喜ぶと誰でもこーいう笑い声になるもん! いい雰囲気台無しじゃん! もくくツッ!」

「冗談だ、似合うよ爽羽佳」

まだ水着のお披露目しただけなのに、夕焼けの海辺で告白した様にクライマックスな勢い。

野郎友達だけで寂しく遊びに来た少年達から、リア充氏ねだの、イチャ付きは人気無イトコでやれだの、脳天に死線がブツ刺さるけどナンパはされない辺り、爽羽佳はジツク物であると思われると認識されているらしい。ポケットに手を入れ泣きながら去って行く姿……キミ達

にも良いことあるさ!

「……………♪ ねっ、ねっ! パラセーリングつてのやりに行こーよ! パラシユートの柄がすつごいらしくてさあ〜! ハッ、ハッ! ハート型とかあるによ!」

囁んでる囁んでる!

アプローチする事数あれど、結局二歩三步前で尻込みしちやうて、最後まで到達しきれない奥手な女の子。

意識すればする程、トサカが元のモヒカンっぽく戻ろうとしてしまう、ヘアピンに逆らうて前のめりになっているのが証拠だ。

“ハート模様のパラシユートが選ばれば、好きな人との距離がグツと詰まるよ!”

女子が好きそうな噂だ。好きな人と二人きりで乗れている時点で、かなり心を許されているのだが……

(ハート選ばれろハート選ばれろハート選ばれろ! ブツブツブツブツ……)

こんな理由で瞳をハート模様にする子、見たことないッ!

爽羽佳の気迫に脅された係員は、このダイヤ模様のパラシユートを華麗にスルーさせ、まるで最初から口裏合わせしていた様に、お目当てのハートを滑り込ませてくれたので、後でこっそりお礼に行かなければ……!

「ん、ギャウ、ああ、あああ、くくくッ、!!!
怖い怖い怖い怖いッ!!」

「何でだよ!! お前飛行タイプだろっ!!」

「自分で飛ぶのはこゝわゝくゝなゝいゝけゝどゝ
飛んでる物に乗るのは怖いっていまわゝかゝつゝたゝのゝおゝおゝおゝ!!」

ホウエンの自然が作り出した、最高傑作の美しい海!

パラシュートに身体を固定させ、上空から海を見下ろせる空中散歩! それがパラセーリング!

………爽羽佳は空飛ぶ乗り物に弱いのかもしれない?

飛行機に乗った時はボールの中だったので分からなかった。

腕を組みながら「ご主人が怖がつて私に寄りかかつて来ても許したげるよ〜!」とか、ハートから力を与えられ強気になってたドリルっ娘は何処へやら。

ジックはぜくんぜん怖がってません。怖がる速度でも高さでもない。

「やめろ苦しいっ！俺まで怖くなって来る！」

「酷い!? 私をこつから海へダイブさせる気だあく!! ニュ オア ノ オ
 オ~~~~!!? 曲がっちゃやー! やー!!」

*17歳の女子が出していい声ではありません。

実はもう慣れて来たのだが、終了時間までずっと怖いフリをしちやえ……優しい悪魔がそう教えてくれた。

他のメンツが大きいので、平面な訳じゃないけどネタにされやすいBカップ。

迫力だけは今ひとつかもしれないが、だから何だと影絵として切り取られても、女の子であると確信出来るシュツとした脚、肥えてないので良い意味で食用には向かないだろう腰回りの無駄の無さ。

モンの凄い贅沢を言えば、ネリは胸を除いた各部位のお肉が少なく、抱きしめた時に少し痛かったりする。

細いだけど女の子らしく盛られ、羽毛で包まれた感触は上質だ！

「あ〜ん！ こ〜わ〜い〜！ もっと抱き寄せてくれないとお〜ち〜る〜♪」

「声全然ちげえからっ!? ハイハイッ！ これでいーですかねー？」

「そーそー！ 今の私はキャタピーにも負ける弱い女の子だからさあ、しっかりと抱きしめて離さないで欲しいなあ……」

彼女の演技はとっくに見破られているけど、ずるずる引き剥がす包容力ゼロの男でないのはご存じの通り。

ベルトで固定されてるから落ちる訳ないけど……脚まで絡ませて来たのはやり過ぎであるが、肩をスリスリしてくる彼女を抱きしめ返してあげる。

なお、運転手のおじちゃん（彼女居ない歴39年）は、歯ぎしりしながら視界が謎の雨で曇っていたけど、自分が受け持ったお仕事を最後までするスタッフの鑑である。ていうか、泣くぐらいならこの仕事を辞めた方がいいのでは……

Segment・penta——メコンルートの場合...

130番水道に極、極、極々稀に出現するまぼろしじま。

島自体が蜃気楼と同じ概念を持つ、ソーナノの秘境……らしい。

新たな幻島二つは109番水道に在り！ トレーナー、いや……男たる本能に従ってジツクは上陸を試みた！

「……………ふにゃあ♪ 海面を漂うメノクラゲさんの真似……ですね♪」

その幻島には所有者が、創造主が居たらしい。

先程ジツクを呼んでいたのは『エツチだからHカップ』ともつぱらその手の業界で話題にされている、清楚系巨乳メイドのメコンであった！

ヴィヴィと言うロリ体型にデカ乳、相反する属性を融合させた強力な伏兵が仲間になったのでメコンはそろそろ、巨乳ではなく爆乳にランクアップした異名へ変更しなけ

ればならなくなった。

(二人きり……これってデ、デートになるのでしょうか!!? 皆さんも海水浴に来ておりますが、今はジツクさん以外誰も居ませんし……図々しいでしょうか……／＼)

大きいお山が二つ、まったりぷかぷかか。

エラ呼吸ならぬ乳呼吸、最も付き合いの長い仲間で「お母さん」とか「嫁」とか冗談交じりに色々な人から言われちゃうモンだから、官能的な妄想に浸ってしまいお風呂の時間が長引いちやう……清楚と言う属性も通じなくなつて来ているロケツトおっぱいメイド。

「うっ、うっ……あんまり肌を見られない水着ですみません……」

種族柄の、ぷんによりしたお腹周りは、なるべくなら同性にも見られたくない物だ。

彼女は非常に気にしており、ゴーグル越しから瞳をウルウルさせながら、エクササイズをしたつて効果は殆ど無かった。

メコンが気にしすぎているだけで、実態はランタン種としては「普通」

背が高い点も支援して、ぽつちやりでは断じてない!……けど、1ミクロンでも、1ミリミクロンでも、細く魅せたいと思うのは女の子なので、理解してあげましょう。

自信無いからと体型をカバーする為に、レモンイエローの大判パレオをやや高め之位置……おへそが隠れる辺りで巻く。

しかし脚にはコンプレックスが無いので、せめて少しは露出したいと膝上からのスリットが入り、尾の邪魔をさせず彼女の大人っぽく穏やかな印象が映える。

布面積が広いホルターネックタイプのビキニを選択。下着と同じでヒカップが収まるビキニなど無いに等しく、皆より一足先にオーダーしておいたので柄などは拘らず、彼女のイメーヅカラーであるマリンブルー。

パレオの黄とビキニの青、一心同体である色彩は喧嘩せずに、髪やゴーグルの色と合わせラムネの様に喉越し爽やかな夏色。

谷間もなるべく隠せるデザインとなっているが……露出度は低い（エロくないとは言っていない）である。

逆にびっちり、ピチピチなので今にも横乳がつ、前乳が、ああ上乳も！ 零れそうぞうぞう零れない！

海の香りがする青髪ロングもハーフアップにアレンジ。右の手首には青をベースに黄色のストラップを刻んだシユシユ、お手軽アクセサリのワンポイント♪

清楚系でお上品な王道のヘアスタイルは、お祝い事にお呼ばれの際も、華やか好印象。「ジツクさん♪ あのっ……後で一緒にパ……パフェ……食べませんか……／＼／」

「い、ッ、!!? いいよいいよ！ 食べよう！ トロピカルトロピウストロピカーナパフェだっけ？ 名称長過ぎだよなあ〜ハハハ！」

仰向けになっていれば『バチユルの無人島生活』なんて、企画を立案出来そうなハイパーバストは、上下左右どこかへ倒れ込む……

そう思っていた時期が、ジツクにもありました。

(二度見どころか六度見しちゃうよ……すげっ……)

彼女のおっぱいは兵器である。

インポツシブル……『ありえない』

海上へ建造されたミサイル発射基地じゃないかっ!?

トクサネ宇宙センターの皆様もビツクリビンビンッ、男達の夢とロマンを乗せて、海空へと打ち上げられるのだから、隕石が落ちて来てもホウエンは無傷だろう。

メコンは長所が多すぎる、隣に居て最も安心する手持ちであり、最も異性として意識してしまふ……それは言い切ってしまう。

「……ジツクさん？ どうしましたか？」

「んっ……、ねえメコン？ ダイビング使つて貰つていいか？ メコンとならずつと水中に潜れるし……海面だけじゃ海を堪能しきれないなあ、てさー!」

「……………えへへっ……………では私の手を握つてくださいね……………ぎゅう……………」

あつ、もつと力を入れて欲し……んっ……♡ 静かな光差し込む瑠璃色の世界へ……貴方と一緒に………」

貴方に眠る気持ちは、何色ですか？

男らしく表面の硬い手を握って、照れながら呪文を詠唱する風に「ダイビング」と呟けば、二人の身体は直径二メートル程の気泡に包まれ、ゆっくりと壮大な『もう一つのホウエン』へ潜水。

三つ編みに結ったチョウチンライトを、点火させずとも透き通って覗けた海中は明るい。

手を離さなければ泡が分離する事はない、逆に離せば分離後すぐにダイビングの効力が無くなり、浮かび上がってしまうので指まで深く絡ませた、恋人繋ぎするくらいじゃなければ………」

大チャンスなので両手で掴んじゃう！

ジツクが一層低い声で唸ったけれど、偶々に積極的におっぱいごとガンガン迫ってく

るメコンだ、今がその時なのだろう。

宝箱は転がってないけど、海底はその景色こそがおとぎ話に出てくる、マーメイド達の楽園。

美しい珊瑚礁で囲まれた道をお散歩♪　　こればかりは他の手持ちには真似できない、まさに水を得た魚。

珊瑚礁の中には時々サニーゴも混ざっており、笑顔でジャンプしながら二人のデートを応援してくれている。

(いいカップルだなあ……………てそんな／＼　いい夫婦っ!?　いえあのつ、私達はまだ結婚して／＼　じゃあ将来的にするのかって……………あの、そのう……………／＼)

(サニーゴ達とどんな会話してるのこの子……………)

メコンはポケモンなので、ヒューヒュー冷やかされているのに対して、律儀に返答しているけどジツクには彼女がまん丸ライトまで、赤染めしてる理由がイマイチ把握出来ない。

……………嘘、サニーゴ達はマツギヨとそっくりな顔芸してるから、言葉は伝わらずとも推知出来ないほど鈍い男じゃない。

恥ずかしかっているが、とても嬉しそうなので、このままにしておこう。

「シンコンリヨコウか？」

「そつ、！ しょ、!? しようれすね♡ 新婚リヨコーはホーエンの海底イツシユーが

いいれふねえ♡♡」

人化しているラブカスの少年まで悪乗りし、嘸み嘸みで対応するメコン。

カップルがラブカスと出会えば、永遠の愛が約束されているという（凶鑑参照）

正式カップルではないので、叶うかどうかは本人達次第であるが、はんなりおめめを渦潮させながら、泡の中だつつのに溺れかけているメコンを正気に戻すのでジツクは忙しい。水タイプなのによく溺れる子だ……

「ヨメをヤシナウのはタイヘンなんだな」

（キミ、ちよつとうるさいぞ……）

二人は気に入られたのか、海底デート中ずっと後ろからラブカスは付いて来ていた。しようきに もどった メコンも、二つの意味で胸を弾ませながら両手で握り続けている、ひんやりクールジェル枕の様な冷感お手々を、決して緩めたりはしなかった。

Segment・penta——ヴィヴィとさまーば
けーしよん！

人とポケモンの波でごった返す、中央地点から外れたビーチの端。

そこにはダマスカス鋼よりも強固で、カーボンナノチューブより軽い、最新テクノロ
ジーでも解析不能なオーパーツ。

未知の生成機構を持ち、純度の高い手甲を武器とする、ロジカルシンキングガール、
ヴィヴィが黙々淡々と砂の美術品をアトリエと化したビーチに、ディスプレイしてい
た。

「サントアンヌ号……………シーギャロツプ号……………カクタス号……………これはリブラ
号……………むっ、何かご用でしょうかマスター？」

「用って、ヴィヴィが俺を呼んだ気がするんだけど……………ヴィヴィにこういう特技が
あったんだッ!? もの凄いハイレベルなジオラマだねっ！ 現物を小さくしてそのま
ま持つてきたみたいだ！」

まるでモノクロ印刷、ダウンロードした画像写真を手甲外したら本当に小さな両手から、膨らんでくる様にして生み出されていく、サンドアートの数々。

デジタル過ぎて躍動感があり無いけど、こうして「何かを作ろう」と思うのも初めてなので、芸術に纏わる創造性はこれから磨かれていくだろう。

「ハードマウンテン……です。触ってもいいですが崩さないでくださいね?」

野生のイシズマイが近寄って来たら、無視する事も追い払う事もせずに、入り口を作って仮住まいさせている。

正式な手持ちとなる前の彼女は、絶対に砂の芸術品を量産する事はしなかった。その前に海へ連れてくる事が難易度の高い技であった。

「砂は短い間で崩れちゃうかもしれないけど、砂の模型を作ってるヴィヴィの姿を、俺はずっと崩さず覚えておくよ、活き活きしてるもん!」

「……………セツ、セクハラ……………ですつ……………! やはりマスターはエッチですね……………」

「なんでよつ?! 褒めたつもりよ俺ツ?! 少しヴィヴィの姿を見ただけでエッチは無いんじゃない?」

「過去のメモリをロールバック……………:マスターはフェンの温泉宿で許可無くわたしの頭に触れ、色違いのリザードンとのバトル終了後には、わたしの……………わたしのしたぎ

……全部見られてしまってます……これをエッチと言わずなんと表せば良いのでしょうか……？」

受け取れなかった言葉のデッドボールも、変化が見受けられ鋼なのに毒をペットボトル一本分くらいは含ませた物言いだけでも、視線を合わせながら確実にキャッチ出来る速度でボールを投げてくれる様になった！

「あれは事故じゃん!? 見たくて見たんじゃ」

「……………マスターはわたしを女性として、惹きつけられる要素が何も無いと……………そう言いたいのでしょうか？ デリカシーに欠けた発言です、撤回及び訂正を要求します」

（惹きつけられないって、とんでもないよ……………惹きつけられればなしだよ……………ヴィヴィは全部……………可愛いよ……………）

無表情で熱の通わないロボットから、機械っぽい言動もあるけど触れば暖かい女の子ヘワーブ進化。

例えば彼が何もしてなくても、アレやコレや突っ掛かってくるヴィヴィは、自分なりにコミュニケーションを取ろうとしているのだろう。

流石ロリ巨乳という邪道属性を開拓していくFrontierの“F”であり、Fr

edomに行動し発言する『F』の持ち主だ。

ジト眼になりながら彼に謝罪させてしまったが、ヴィヴィとしては彼に構って貰えるのは悪くない。

下着の件は状況が状況だったので首の皮一枚で許してあげるし、頭に手を乗せた件は

……………

「……………貴方をマスターとして認識しましたが、マスターだからとエッチな眼で水着を、ペロベルトが舌で舐め回してくる様に注視して良いとは言ってません」

「ヴィヴィが俺をイジメル……………見ないとコメント出来ないのに……………うう……………」
 エッチエッチ言われすぎて、膝折れるジツク。その後ろでちよっぴり唇を緩めて微笑するヴィヴィの水着は、生まれて初めて『美的感性』でチョイスしてみた物。

ちなみに下着ではなく水着なので、期待に応えられず済まないがセリーヌさんの百合尻尾には掛かっていない。

あの一戦以降の彼女は、思春期に到達した子共の様に成長著しい。

トップスはラッフルフリルのビキニ！

この夏注目のアイテムとされ、赤字覚悟の値段で特化セールされていた品だ。

ちゃんとフリル形状が X になっているのは、メタグロス用の物を探したからだろう。

言うまでも無く本来なら大人用を……

カラーは彼女のイメージとは外れ、一見すればミスマッチに思えるペパーミントグリーン。フリルにはホワイトを差し色にしたラインが入り、立体感(胸的な意味でも)が出ておっぱいの影が強調される！

中心部にレースの刺繍で出来た、ホワイトリボンを蝶結びすれば、フェミニンな印象をこのパーツだけで醸し出せる素体の良さ。

さらにリボンにはダミーだろうが、パステルブルーの鉱石が埋め込まれており、光量が変わればセルリアンブルーへと異なった色へ遷移する。

まるで “これから” の彼女の心その物……………

水着に合わせてツインテールを結うリボンも、ライトグリーンとホワイトのグラデー

シヨンカラーに。

ボトムスもフリル付き！ 三段のヒラヒラミニスカートでも、甘くなりすぎないクルなテイスト。

何時もどくり、体育座りしながらまた砂を固め始めたから、三段スカートが捲れ上がってパンチラ……水着だから問題ないけど、絶対見えなかった秘密の花園があの一件以降、ちよくちよく覗ける様になってしまった気——

「……………胸、見過ぎです……………まさかつ、わたしにこれ以上の育乳を期待しているので
 しょうか!? これよりも大きくを望んでいる……………と……………検索しましたよ、マスターの様
 な人を『おっぱい星人』と呼ばれている事を……………エツ！ エツチです！ ドスケベで
 すっ……………！」

この短時間で何度「エツチ」と言われたか、ジツクは考えるのを放棄した。

「こんな駄肉っ、チーズドッグだったらすぐにでも食べてしまうのにつ……………ジュ
 ルツ」

「分かった分かった！ ミナモに帰ったら奢ってあげるからさっ！ 色々許して、色々
 ！」

おっぱいは、年頃の男なら誰でも好きなので許してやってほしい。ジツクは大きいの

も小さいのも、どっちも愛せる。

「いいですよ……許します……ラズベリーフレークなる新フレーバーが食べたい……です……—」

相変わらずチーズドッグへの、並々ならぬ情熱は海へ来ても平常運転だ！

「……………マスターも一緒に来てくださいね？」

「ん？ いいけど」

お小遣いを渡せば、自分の好きな時に買いに行けるし迷うほど複雑な道のりじゃないけど、そうご所望するのならば。

《一人にしない》と謝って、約束した訳だし……ヴィヴィと新作を食べに行くと名目でお出かけ——

(それってさ、デートになるんじゃないかね……??)

「ふふん……！ 私は別に怒ってない……ですつ、水着ですし、海ですし……少しくらいなら致し方なし……です」

大急ぎで水着に付着した砂を落としたり、ズレが無いか手探りする彼女は、彼氏との初デートで可愛いんだけど、ちよつと大胆にビキニを選んでドツキドキが止まらない

……クールなあの子が、谷間まで熱く弾ませ——

「……………ほくろ、見ましたね？ エッチです……………まったく、エッチなマスターを持ってしまいましたね……………」

「気にしないって言ったのヴィヴィでしょ!？」

乳房が膨らみ始め、急上昇していくお山が下り始め隣乳と合流する地点に、とてつもない色気を漂わす黒点。低身長イカ腹であるのに、未だに謎の多い彼女は胸を除いたつて大人顔負けの、魅惑のエッセンスが欲張って瓶詰めされている。

指二本で隠しながら、またジト眼に戻ってしまうヴィヴィ。気難しい子だけど扱い方が分かって来たし、言葉でやり取りするだけでも、今までしたかっただけに楽しくて——

「俺も一緒に砂で何かを作っていいかな？ やった事ないから教えて欲しいな？」

「……………いいですよ、いつ、一緒……………に……………作るのですたら……………」

彼女はスコップ要らずに作っているが、そうはいかないジツクの為に初心者向けと思われる道具を揃えて来てくれた!

ご指導ご鞭撻を、マスターが頭を下げた姿に気をよくした？ それとも頼られたのが嬉しかった？

やんわりとだが自然体の笑顔を見せるヴィヴィは、温泉町で様々な感情が生まれ以降は鉄仮面が消えるシーンも、それなりに見受けられる様になっている！

どれだけ下手に出ようが、機械的な流れ作業で手を動かし、テキストを棒読みしたかの心が宿らない冷めすぎた声で、相手のペースや技量など考慮せずさっさと終わらせたのが、以前のヴィヴィ。

わざわざ道具を揃えて一つの作品を、一緒に作ろうとするなんて……わたしだけで作った方が早いです、そんな無神経なセリフも一切出てこない。

まだ足りてない部分や、目覚めきつてない部分もあるけれど、戦闘力と結びつけられた様に「心」も成長している。

「そうだった！ ちょっとだけ待ってて！」

教えてと言ったのはそちらなのに……海の家へダッシュしたジックへと、頬をおっぱいの様に膨らませるのは無意識の内だ。

(早くマスターとバトルタワー……作りたいのにつ……)

表には絶対出せない、秘密のコトバ。

ツインテールを肩に掛けながら、下準備を終わらせていくヴィヴィは凄く頭が良いけど、凄くぶきつちよである。

3分も経過してないのに退屈になった、何パターンもの苦情セリフ集を構築させ、帰ってきた彼へ不機嫌な表情で——

「ハイッ、ヴィヴィは帽子も似合うね!」

「つえ?!? え、えう?!?」

彼が購入してきたのは、ツバの広い麦わら帽子だった。

熱に弱いヴィヴィへのプレゼント。熱中症になってしまったら楽しむどころではない。

通気性も良好な素材なので、蒸れの心配も要らず一巻きされたりボンが、青い物を選んできてくれたらしい。

「……………ありがとう……………ごきげいまま……………す……………」

ツバを伸ばして思い切り目元を隠しても、うら若き蒼が紅くなる。

見返りを求めていない彼からのプレゼント。

例え「そういう意味」を含まないにしろ、今のヴィヴィなら勘違いを許される。

恥じらいの仕草など捨てていたのに、彼に名付けられたニックネームを呼ばれる度、算出不可で文章としても表し様の無い、モモン桃色ピンク色の境地に運び込まれる。

(大事にしましょう……)

(ヴィヴィの声……耳元でボソボソ呟かれたら甘くて耳が酔いそうだ……ち、近い……)
さり気ない風を装って、ポジションを右隣にキープしたり「マスターのレベルに合いません」とかそれっぽい理由を思いつけば、手を上から握って砂を削り取ったり。

(………キョロキョロ、……なら誰も居ません、見てません………)

彼女は閃いた、合理的な案に見せかけて、もつと人気の無い場所へ移動する方法を。

「………ここなら波に飲まれる事はありませんので、改めて砂を踏み固めましょう。ここに埋まっている砂こそ、初心者向けであると成分分析結果が出ましたので。異論はさせません、マスターの為を思つての事ですつ、ありがたく受け入れてわたしと一緒」に砂のバトルタワーを作るのですつ、難易度は初歩の初歩ですのでわたしと一緒ならば、一時間で完成しますつ……」

「ふーん！　じゃあさっきのは上級者向けの砂だったんだ？　ヴィヴィが教えてくれるなら立派なのが作れそうだよ！　完成したら写真撮ろうね！」

「……………盗撮は、ダメ、ですよ……………？」

スススススツ……………専属講師として、そう自分に言い聞かせながら再び身体を急接近させる。

ついつい、余計な一言が最後に飛び出てしまう。盗撮なんてする失礼な男性ではないと知っているのに…………

（やっぱりマスターの手……………あつたかい……………ですつ……………）

少しでも密着したくなる意味も、手の甲へそつと掌を重ねたがる理由も、答え合わせには時間が掛かりそう。

他の誰かが居たら、こんなに距離を縮めるなんてしないのだけれど、暫くは二人きりのハズだから……………

（おっぱいが肘に当たってるんだよおおヴィヴィくくくツッ！！　でも指摘したらセクハラだのエツチだの罵られるし逆に機嫌損ねちゃいそうだから言い出せないいい

……………)

左手を彼女に掴み取られ「もつと力を入れて土を」とアドバイスしながら右胸も、力を入れてぐによんつ、ぐにゆりつ、ぐにやつりんこ☆

不幸（幸運？）中の幸い、ヴィヴィは口調こそ音声ガイダンスの様に業務的ながら、熱心に身体を触れ合わせアシストしているので気がついてない。

バレたらコメットパンチの刑……ここは知らんぷりでやり過ぎそう！ 本当は良くないのだけど「事故」なので仕方ない。

（マスターの皮膚が赤くなっています……熱中症なのでしょう？ 人に渡す前に自分の帽子を買うべきでしたね……まったくもう……）

—— わたしは彼に触れていたいのかな？ ——

（……………何か喋ってください……………わたしまで黙ってしまいます……………）

ぶにゅ、ぎゅ、ぎゅ、ぎゅ〜む♪

斜め後ろからくっつき過ぎて、谷間へ二の腕が挟まれているくっつきっ！
 彼が黙りこくった原因が発覚し、二の腕の熱が胸元から通じる……全然、気がつか
 なかった。

突き放す事も出来た、コメントパンチで埋葬する事も出来た、けど……

「……………」
 「……………」

ポケモンの鳴き声も、人間の音声も、この入り江の様な場所なら、殆ど聞こえてこ
 い。そんなところで二人きり……狙ってやったけど、意識してしまつたら……

お互いに無言のままになつたけど、見事な砂のバトルタワーは完成。

記念撮影の為にピースサインするヴィヴィは、節々の動きがぎこちなくて、表情筋も
 強ばつて眉は小刻みに上下していたけど、最後までジツクと時間を共有できて、心の中
 からは綻びを向けていた。

ヴィヴィのなつきどが、すこしあがつた！

Segment・penta——かたくりこなさまーば
けーしよん？

そのポケモンはサングラスを装着し、ビーチサイドチェアで寝転ぶ。

波の歌声と人獣の混ざる、オフビートな曲調をラジオ代わりに、独特な土壌から厳選されたサイユウシテイから、今朝取り寄せたばかりの熱帯果物の盛り合わせ。

サイドテーブルでオーダーした本人よりも存在感があり、果長も彼を追い越してしまっているフルーツは、ブーケを模しており浜辺に実り咲いた虹色の花♪

「ミノッツ！」

マイクロピキニ姿で働く、海辺のウエイトレスさんがフルーツをグラスに差し込んだスムージを運んで来てくれたので、過激な水着や破裂しそうな双丘に色目を靡かせる事もせず、クールに一言感謝を告げる。

「この果物の花とスムージーは、かたくりこが注文したの？ どうやってしたし……てか、あんな水着で働くのっていくら海でも、アウトだろっアウト……」

「ミツノツ……?」

でも政府には許可されちゃっているんですよ……ポケセンのコスチュームと
言い、上官の趣味は我々と大差無い、人間だもの。

実は女の子達も声を掛けられたいから、辱めの様な格好で夏の思い出と彼氏をゲット
しようと、奮起しているらしいのだが。

「なあ、かたくりこ?」

「ムシャミノ、ムシャミノツ……ミノツ?」

3↑ こんな口の中に、吸い込まれていく見栄えとポリウムがたつぶり華やかな
ブーケ。

触覚を使ってジツクへフルーツを渡しながら、右側面から削ぎ落とし次は左側面……
頂点の果物が倒れない遊びもしている? 海だけに棒倒しを意識してるのかもしれない。

「フエンでの事、力を貸してくれてありがとうな! お前が居なかったらヴィヴィを助
けられなかった……」

「ミノオ! ミノミ☆ノ☆」

『そりゃ助けるさ、仲間だからな!』

……多分、そう言ってくれている気がした。

率直にズバリ言ってしまうえば、ミノムッチは貧弱なポケモンだ。

自力で習得出来る技は片手で足りる、おしえわざで補強したって「誰を倒せるの？」なまでに能力値も悲惨。

進化前ポケモン全種類の中でも、下から数えた方が早く、そもそもが戦闘用のポケモンではない。進化後に期待を抱く通過点。

例えめざめるパワーのタイプが水であっても、キュウコンやコータスなどの炎ポケモンには太刀打ち出来ないのが現状。技の威力を低減させることも叶わず、めざパごとミノムッチは炎に飲まれて戦闘不能だ。

それが普通……であるのに、常軌を逸した奇妙奇天烈な強さを持っているのがかたくりこ。

めざめるパワーは、そのポケモンが生まれ持つて身につけた潜在能力に応じてタイプ

を変化させる技であり、途中からタイプを変更させるのは絶対に出来ない芸当だ。

彼は現在判明している17種類のタイプ、全てを自由自在にエンチャントし相手の弱点を、確実に突けてしまう。

これだけでも十分常識外れの蓑虫だけど、そんな固有能力？……が備わっても、ミノムッチの特殊攻撃力は先述した通りだ。勝っているポケモンを探す方が難しい。

（あの威力……特攻に優れたヘルガーやバクーダのかえんほうしゃを、真つ向から打ち消し貫通させていた……強いのは分かってたけどあれ程とはっ……）

実力的にはそう褒めるところは無かったチンピラ達だったが、群れを成していた炎ポケモンにミノムッチが対抗出来る術は無い。普通であれば……

寧ろ軽々と蹂躪していた、地表をスケートで滑る様な速度で翻弄し、一発のめざパ球でダウンさせていく姿、ヴィヴィと一緒に走っていたからあまり見られなかったけど、自分の手持ちと何ら劣らぬ戦闘力を久しぶりに披露させていた。

積極的に戦いたがらない理由も、少しは分かった気がする。彼は自制しているのだろう、この力を使うのは仲間がピンチに陥った時限定にすると。

最終進化形態ですら一方的に倒しかねない、謎のボールに包まれた能力を持つかたくりこ。

ジツクメンバー唯一の♂は、こう見ていると通常のミノムッチより、トボけた顔して

グラスを舐めている赤ん坊なのに。

「かたくりこ……お前つてシンオウの育て屋さんから貰ったタマゴから孵化したんだけど、その時はミノムツチのタマゴが出来る環境じゃなかったんだってさ。………前触れ無くタマゴが転送されて来たらしいけど、それは

——」

「あー！ かたくりこ発見したニヤ〜！ ホイツ、サブニヤ〜！」

「かたくりこつてえ〜！ ビーチボールにピッタリのサイズじゃん？ はいっ、ヴィヴィちゃんにト〜ス〜！」

「……………ではメコンさんに……………」

「けぷっ……………ミノツ、!? ミノ〜オオンツ！ ミ〜イ、ノホホオオオ、〜ンッ!!」

フルーツを食べ終わり、ゲップしながら腹を膨らませていたかたくりこ。食欲もミノムツチとしては高レベルだ。

サンダルで未開の砂に足跡付けながら、手持ちの女の子四匹が集まってきて、かたくりこをボールに見立て、ビーチバレーを開始させている！

今回も彼の謎は解けず仕舞い、あのタイミングでネリ達が現れたのも腑に落ちない

が、まあ、いつか。

掛け離れた能力を持っていたって、かたくりこがジツクの手持ちであり、仲間である
 事実是不変なのだから。

「え、っ?!? え、っ~~~~!! キヤツ、キヤツチですう~~~~!」

バレエでキヤツチは反則行為です。

だがスポーツに詳しくないメコンは、そこんトコ分かんない!

運動神経もニブチンなので、キヤツチ——とか言いながら繰り返し出したのはアンダーハ
 ンドパスの姿勢——もうめちやくちや、しかも腕にボールは掠りもしなかった!

仮にボールを腕に当てていても、そのまま顔面にブチ込んだ自爆の可能性は高かった
 であろう。

「あっ……………♡」

「……………ミノオ……………」

パスは不発に、キャッチも出来ず仕舞いだったが、それはメコンが海に来た時点で約束されていたシナリオ。

ヒュルルルッ………砂に埋まって次はスイカ割りの的にでもなってしまうのか……(〽)顔になりながら、玩具となり辱めを受けている蓑傘を、脱ぎ捨てる勢いで着弾——

——したのは、メコンのエッチな縦長おっぱいが産出した谷間であった。やっぱりね☆

バレーは手でキャッチするのが反則なのであり「おっぱいでキャッチしたらダメ」と言うルールは定められていないので、自らの武器を活かした戦術の一つとして成り立つ。

勿論、こうなったのは偶然の産物。

パイキャッチした張本人は、ここからどうすれば……ゴールの上からでも潤付きが分かる瞳で、ジックへSOS。

人化しない利点の一つ、0.2cmばかりの身体で良かったら、おっぱいに挟まれ埋もれる事が好きなかたくりこは、ハプニングをサプライズに、ボール代わりにされた事は

水に流してやると、ネリ達へ感謝している始末。

「……………えつ、えつと！ そのまま前方へ打ち出してメコン！」

「ハッ！ ハイイツ！ そお〜〜れえ〜〜！」

どんな指示出しだよつて、自分でも突っ込みせざるを得ない。

気の抜ける威勢と共に、おっぱいカタパルトから射出された蓑虫の次なる標的……………いや、座標は

「みイ、の、おおお、お、おほつ！ ほオおお、おお〜〜♪」

何て速度だつ、身体が燃えちまいそうだつ……………！

燃え尽きてもパイ包みされるのであれば本望……………エロなのか、純粋な想いなのか、段々怪しくなつていく彼の包まれ願望。

お母さんのお腹の中と、おっぱいの感触と暖かさが似ているからお気に入り？ その辺りは未解決で終わりそうな疑問だけど、青いおっぱいから蒼いおっぱいへ、跳躍するミノムツチはキスする様に唇の 3 を伸ばし——

「ぶ、あ、ツミ、ツ、!!? ノ、ツ、！ オ、オオオオ……………カクツ……………」

「させませんよ？ わたしを見つけてくださった件は、感謝してますがセクハラして良い理由にはなりません……………」

ヴィヴィの コメットパンチ！

こうかは ばつぐんじゃないけど ばつぐんだ！ かたくりこはぜつめいした！

唇に彗星鉄拳をのめり込まされ、Fantasticで、Fancyがぎゅうぎゅう詰めになったFカップへの到達は許されず……………かたくりこのしょうがいはここでしゅうりょう してしまった（生後0〜1歳）

バカンスだけでなく何かとバトルに繋がりやすい109ばんすいどう。

カインシテイのポケセンまで、歩いて15分くらいだが利用者の手間を省くために、出張サービスとしてほぼ毎日小規模スペースながら本店と同一な医療機器を備え付ける、ナース帽を被ったタブンネ印のテントへ連れて行く。

パン屑を落とすグレーテルならぬ、道筋を鼻血で印すかたくりこ。

ぼつくり逝かれてしまったが、回復装置に収まれば1分足らずで元通りになってしま

う。

この世で最も有り難い施設は、この世で最も恐ろしい技術で成立している……全ての原理はトツプシークレットだ！

Segment・penta——焼くのは食材だけじゃない

「ミノツ……ガツ、ガツ、ムシャ！ アグアグアグツ……！」

腐って潰れたマトマのみ、顔面ジャイアントホールしてたのに、おでこに絆創膏貼つてるミノムシは既に本調子。

「ちよっ！ 肉だけ食べるニヤよかたくりこっく！ 掴み所がニヤさすぎる奴ニヤあ」
後遺症も無く綺麗さっぱり、ゴクリンと見分けの付かないノツペリ顔で柔らかかブロック牛肉の串焼きにガツ付いてる、かたくりこ。

右爪にはとうもろこしを、左爪にはパプリカや玉葱も加わり色彩豊かとなった串焼きに、マスタードソースを塗るネリ。

“よく食べるし、嫌いな物は無い”はハツタリではない。

明日は食べられないかもしれないから、食べられる時に食べておく……その日暮らしだった盗賊時代からの教訓だ。どうせ太らないし。

「アンタも結構行儀悪いぞ〜！ あんむっ！ むむっ〜……い！ スパイシータンドリーチキンうまああ……い！ 丸鶏ローストチキンもねえ！ 漫画肉っぽいよねえハグツ！ ハフハフツう〜！ エクサ美味いよお……」

（鳥が鶏肉食ってるニヤ……その食い方も上品じゃ〜ニヤいけど、バーベキューは豪快に食らった方が絶対にイイからニヤ♪）

大型ステンレスグリの炭を、調節しながらアルミホイルを持ち手に巻いて、前日から調味料を漬け込んでいた鶏肉はバリパリッ皮、ムネはジューシー中はふつくら！ 肉汁が垂れようがワイルドに真横からガブリッ！

度々描出されるが、爽羽佳は鶏肉料理が大好物。

それでいいのか……？ ツツコまれるけども『別にオニドリル食べてる訳じゃないんだから、いーのいーのっ！』と、実にべらんめえな答えが帰って来る。両親が知ったら失神するだろう。

「お肉も野菜もシーフードもお！ いっぱいありますからねえ〜♪」

ゴーグル着用なので眼に煙が入らない。料理でのヘマは決してやらかさないメコン

は、皆の受け皿にお好みの食材をトングで乗せながら、グリル上での見栄えすら拘った配置を見せる。

それぞれの素材によって置き場所を変えたり、写真映えする様に盛り付けたりと、焼き手を全て引き受けながら控えめな仕草で、海鮮串焼きをクルツと回転させながら、反対側まで形を崩さずもう一本。

ちなみにクーラーボックス2つ分の食材は、ジックと共に下ごしらえを行った物だ。彼と一緒に串に食材を刺していくのさえ、身体が燻製焼きになっていく……♡

皆は早起きの為に寝てしまっていたので、策略を張り巡らせた訳じゃないけど身も心も捧げると誓った、ご主人様と二人になれるのは短い時間でも、前哨戦としては濃密過ぎた！

「……………ほくれニヤ、ご主人〜！ イカ焼きもうみやくから食べるニヤ！ あ〜ん！」
「[[:?]]」

次はどれを食べようかなあ、迷い箸ならぬ迷い視線。どれも食べ頃で美味しそう……

手を伸ばそうとしたジツクの肩をツンツン、バターの香りが縁日を連想させ、齒ごたえあるイカの串焼きを口元へ持ってこられた。

「んっ……んっ、ア〜ン！……そういやイカポケモンで……俺らが旅した地方じゃ見かけないんだよな……モグモグッ……美味いつ！」

「マニユハハツ♪ メコンが作って焼いたから美味しいのは当たり前ニヤけど！」

串焼き相手にかみくだく使ってる、かたくりこは除外——そもオスだし——するとして、一步抜け出した視線をチラツ、残りの三匹に送る目付きは悪タイプのそれだ。

（マニユハハツ、面白くしてやるニヤア〜！）

ダークカップのダチに煽られる様に、次はバードカップのJKが彼へアタックする番だ。串焼きの奪い合いも無い穏やかなバーベキューを、激しい闘争心が Grill よりも高温に燃え上がらせる！

「ねえねえねえご主人っ!? 手羽先に火が通つたらしいから食べよハイッ！ 私も〃一緒〃の奴食べちゃおう♪ ご主人も下準備手伝ったんだよね！ なら美味しくてトーゼンだよねえウエヒヒッ！」

同じ品だつつののに、食べさせ合いっこしちゃってます。間接キスです、ありがとうごじます。

もう一瓶開けちやうか〜！

サイコソーダ勧める姿は、酔いの回った中年上司にしか思えないが……次はメコンだよとこつそり呟いてバトンタッチ！

単純に面白がつて女の戦いを勃発させたネリだが、爽羽佳は「ご主人は皆の物」意識があるので回し飲み（表現の問題）を推薦している。

「ふええつ〜!? あつ、ああ……あ〜ん！ ですつ／＼／

——空気が、変わった……？——

こんな状況下でも肉、肉、肉にせず、野菜をお箸で搦んで手皿を作りながら、栄養バランスを考えてしまう。

本妻とからかわれているだけあり、彼女が「あーん」するだけでメコンには適わない、メコンならしゃーないと黒娘と鳥娘は何処か、納得してしまう貫禄は洗練されている！

「……………！ マスター、ハイ、アーン、ですつ……………」

メコンが下味漬けてくれたから
ジツクさんも手伝ってくれたので

セリフだけでも甘ったるい、肉が甘くなる!

角砂糖をドバドバ投入した二人だけのセカイを、バキ壊したのは食べ終わった銀串をストローみたいに片手でグニャ曲がらせる、蒼いツインテールの少女であった。

「わたしの串焼きが食べれないと……?」

「怖いってえ!? 逆手で持つ物じゃないよアガーツ!!? ウ、ボゴモガツ!!?」

「ふんっ……女の子並べてハーレム気取りですか? 良いご身分ですねマスターは……」

フランクフルトを食べながら、ネリ・爽羽佳・メコンの「あくん」を自分でも瞳孔を拡大させていると認識しながらも、非イ効率で仲の良い男女ならではの行為を眺めていたが、あまりにもジツクが三匹にたぶらかされていたので、眼に余ると乱暴に肉骸を噛み砕き出陣。

参入が最も遅れた自分。もしや以前から同じ事をしでかしていたのだろうか?

「わたしのマスターになったからには、人前で不埒な行いは禁止です。わたしのマス

ターとして相応しい立ち振る舞いをお願いします……グイグイツ」

「ヴィヴィちゃん、ヴィヴィちゃん、それ以上押し込んだらご主人死ぬって……」

棒読みのまま何本の串焼きが人間の口に入るのか……マスター使って実験。

意図的にハイライトを消した瞳のまま、あの頃よりもずっと無表情なヴィヴィは、魂が飛び出そうなくらい凄惨で、一睨みであらゆるポケモンを怯ませるダイケンキをも土下座させる。

危うくお昼時の海辺で、殺人事件が起きるところであつた。

（遅れた分だけ……マスターはわたしに構うべきですつ……手持ちになつたのですから不公平です……ぷんっ……カプツ、ガリツ、ガリイ、バグツ……！）

ヴィヴィがフランクフルトを再び、食べ始めたがそこまで歯をいきり立たせ、肉をすり潰すさなくつても……

フランクフルトが真つ二つに折られ、砕き、噛まれ、削られる度に、どんな原理かジツクは《下半身が痛くなった》

胸が裁縫針でチクチク刺されて、針山になってしまふ。自分だけでなく皆を相手する

のは、おやなのだから当たり前……だけど面白くないっ。

「ミノフツフツ〜♪」

どうすれば彼に構って貰えるか、不器用なヴィヴィは肉に八つ当たりしながらハイスベックブレインに、思索チャートグラフを幾重も作り始める。

彼女らのやり取りを見るのは、ホント楽しい。

目覚め、抱く事となった感情の伝え方がへたつぴなヴィヴィの後ろ姿を、絶品ラム肉頬張りながら笑うミノムシも、おやであるジツクの事が大好きだ。

Segment・penta——∞

大盛況するカイナの砂浜から、一旦離れて四時前になるまではカイナ市場や海の科学館を、遊び巡る事となった。

カイナグループ・ロイヤルスイートホテルへ戻つて、各自の衣装へ着替えてから、憂鬱や陰気なムードは今も昔もありませぬ！

「いらつしやいっ！ いらつしやいっ！」

素材も投網したばかりの新鮮なら、従業員も活き活き！

年配の方がやや多めだが、笑顔の数だけ若返りの福来たる。

ホウエンの台所を支えている皆さんは、まっことお誘い上手。裏表無く見てけや、買つてけや、楽しめや。

お魚をさばく無料サービスや試食コーナーもあるので、市場食堂が満席でもお腹いっぱいになってしまふ！ かもつ！

「この壺には何が入ってるのですか？」

「手エ突つ込んで確かめてもいいぜ！ 蒼いお嬢ちゃん！」

好奇心が訴えるままに、信楽焼の陶器の中へと手を差し込めば、新しい感慨が生まれ

る。

「……………ヌルツとします……海藻のアルギン酸ですねっ……」

「その中に『とあるアイテム』が入ってるんだ！ 見つけられたら良いことあるかもよ
っ？」

（……………どっつ、こっつ、ちがうっ……よっ、よっ……）

行列の待ち時間に、子供達が遊べるちよつとしたゲームの様な暇つぶし。

試食として頂いたお刺身を咀嚼しながら、ブラウスを肩まで巻くつて壺底を探索……
少し前のヴィヴィイならば絶対に取りえなかつた光景が『ありえる』様になった。

感情の起伏が無い から 小波小山を曝け出すくらいには成長している。

抑制機能を取り除かれ、行列でも無ければ商品獲得が狙いでも無い「良いことがある」
と店主が勝手に考えた信憑性が無く、取れなくても不都合の無い運試し。

彼女は運に左右される要素を嫌っていた、絶対・確実と断言出来ぬ現象など合理的選
択ではないからだ。

「……………取れました……………！ エスパージュエル……ですね」

「おめでとーだぜお嬢ちゃん！ 良い日になるつて俺が保証するぜ！ もう午後になつ
てるつて？ ワッハッハッハッ！まだ」午後なんだぜ！ 一日はこれからだつ！」

どんな理屈があり保証できるのか、今までの彼女なら問い詰めるか、最初から興味を

惹かれずスルーしていたか。

意味の無い一分間から、楽しかった一分間と思える事が出来る様になった。

例え見つけられなくても、もう一回チャレンジしたいとか、何とかして見つけたかったなあとか、感情を揺るがしたに違いないのだ。

(……………チラツ、チラリツ…………)

ヌメってるので水流で洗い流す必要はあるけど……………主力技の威力を高められる桃色の宝玉、バトルでの活躍は大いに期待できる。

「……………んっ？ 凄いでヴィヴィー！」

「……………！」

ジュエルゲットよりも、その一言の方が遥かに嬉しくて。

無変の表情だけど、ヌメヌメジュエルをジツクへ手渡しながら、ずつくと上目で見つめている。

何か言う事あるんじゃない？

そう訴えているのは明白だったので、とりあえずお褒めの言葉を掛ける。

(……………確かに良い日になってますね…………)

右腕が海藻まみれになった見返りは、十分にあった。

他の子達が居るから、リアクションは極端に薄くする様に急いでリミッターを掛けたけど、すっかりメモリに保存したので後で何回も聞き直そう、そうしようっ…

「オイオイオイッ?! このねーちゃんスゲエぞっ!」

「あんな細い身体の何処にどうやってラーメン9杯も入ってんだよっ?! そう言ってる間に10杯目に手エ付けてるしっ!!」

気分を高揚させ、先頭を歩いてきたヴィヴィが、掘っ立て小屋の様な外觀ながら創業50年近く、地元民から長らく愛されているラーメン屋の賑わいに耳を引っ張られる。

決して広い店内ではないのに、野次馬達も入り込んで熱気に包まれる月一のイベント、早食い大会が行われているらしい。

ヴィヴィは除く事になってしまうが、ジツクメンバー一行はこのラーメン屋で食事したことがある。

メニューは一種類しか無いけど、値段のわりにはインパクト抜群な麺量と、丼に咲い

た花卉の様にレイアウトされたチャールシュー、背脂でコツテリと思えば案外あっさりめのスープ、カイナ市場で仕入れた煮干しの風味が好評でラーメン好きなら、毎日コレでもいいかなってくらい美味であつた……

「この香りっ……バーベキューしたばつかなのに腹が空いてくるな……」

「同感ニヤ〜ね!」店のオヤジはネリちゃん達の事覚えてるかニヤ? 野次馬がてら挨拶してくるニヤ〜!」

食べないのにお店に入るのは、いけないんだけど……

それでも店内の様子が少し気になる、細くて女性……しかも人化したポケモンとな? タマムシ食堂の大食い選手権で優勝した実績を持つ《最後の手持ち》を思い浮かべながら、暖簾と人だかりを避け――

「はあ……フー、フー……はつ、ズズズツ、チュルツ、チュルルツ、むぐむぐつ……フツーフツ……ズルツ! チュツ! ングツ、ゴクツ……! 食べ終わった、スープも底まで飲み干したぞ店主殿!」

「はいっ！　そこまでえ〜！　まさかデブ野郎共に囲まれた華奢なねーちゃんが一位になるとはなあ！　飯代はタダだ！　そんなもってコレが賞金だ！　あんがとよお！」
 「ありがとうございます、これだけ食べても飽きが来ませんっ、この味に辿り着くまでは艱難辛苦の連続だった事でしよう。このラーメンを食べる事が出来て私は幸せです、折角ですのもう一杯注文してよろしいでしょうか？」

「え、えッ！?!　まだ食うのかいねーちゃん!!　超大盛り10杯ってじんじょーじやないんだぜっ?!　追加する奴あ初めてだぜ！」

「この日の為にお腹を空かせて来ましたので！」

なんか凄い人（ポケモンだけど）が居る……巨漢の男共との差を二杯分引き離し、優勝賞金を袖の中へ納めながらも、胃袋と舌が満足してないらしく超大盛りの追加オーダー？

骨細だが弱々しく、頼りなさげな佇まいを感じさせない、薄く化粧を施した凜としている表情は、大人の余裕が窺える。

「はふっ♪　はっ……ちゆるるるっ……」

跳ねる汗すら艶やかに、長く伸びている横髪を耳元へ乗っけながら、早食い時がアギルダーなら現在はヤドランの素早さで、最後の一杯をご賞味。

他の席でぐでり込んでいるピッツア達は、マジかよっ……腹の中ブラックホール……芸能デビューのお声掛けから逃げてきた様な、女性が憧れる女性、神の寵愛を受けたナイスプロポーションの女性へ、興奮と賛美を送りながら息の根を止めていく。

「……………しっ！ しっよ~~~~!!」

並外れた美貌を持つそのポケモン、種族名は……ぶじゅつポケモンのコジヨンド。

銀が混ざった白髪を後ろでシニヨン風にまとめ上げ、山吹色のグラデーションを肘近くまで伸ばした横髪の毛先に施している。

シニヨン部にも紫陽花色のグラデーションがあり、衣装の大半も白＋紫陽花の色調で組み合わせしており、さらっとしながら落ち着きのある印象で彼女の性格を体現させている。

本来の姿の耳を思わせる、癖つ毛と短眉が“ししよ”であると決定づける！

文字通りの死闘相手、ヴィヴィが自我を得たキツカケにもなった黒いリザードン、ザムヤードもチャイナ風ドレスであったが、こちらは腰までスリットを刻みながらカン

フーパントスを穿いている。

その理由接近戦が主体になる格闘タイプなので、必然的に丈長を選ぶ必要があるからだ。わざと下着を見せる趣味も彼女は持ち得てない。

……手甲を使用した打撃が得意なのに、鬼短いミニスカを穿いた蒼い子が隣に居るが……それぞれの好みもあるので、『これが絶対!』のファッションは無い。メコンや爽羽佳だつて改造しまくつてるし。

しかも! 菱形に抜き取られた胸元にはメッシュ加工が成されF i g h t e rでF a s c i n a t eなFカップが屹立しているではないかツ!?

ただ肌色を増やせばイイってモンじゃない、大人の色気に拍車を掛ける“魅せ”を把握している。

萌え袖どころか、ぶかぶかの袖余り、お箸を持つ時はちゃんと指を出すがそれ以外の場面で、彼女の手を袖奥から露出させる事が出来れば大した物だ。

袖口には8を横に並べた ∞ の記号を一定間隔で刻んでいる。誇り在るニツク

ネーム《インフィス》の由来となった『インフィニティス（無限）』の強さと可能性を求め、旅を続ける彼女は……………

「ネリッ！ 主もっ！ 皆久しぶりだなっ、ホウエンに帰ってきたから数日後には、主の家を訪れるつもりだったんだ！ カイナシテイで会遇出来るとはなっ、海水浴に来ていたのか？」

とつちめた過去のある、冬でもビキニ姿のマニユーラ——あの頃はニユーラ——
——に背後から声を掛けられたら、超加速でラーメンを食べ終えたらしく、お手拭きで口元を拭ってから店主へと一礼。

最後の一杯分のみの代金を支払ってから、仲間達との思いがけぬ再会を喜びながら抱きついてきたネリを、袖越しにポンポン撫でる動作一つ取っても、独特な色気が醸し出ている。

年長としての魅力だろうか？ と言ってもジツクメンバーで唯一の成人済みだけど、22歳なので年の差はそれほど無いのだが。

「早食い姉ちゃんってワードだけで、ししよくな気がしたんニヤけど、本当にししよくだとは思わなかったニヤ〜！ 相変わらずエッチい食べ方ニヤし♪ 参加者の集中力を削いでいたニヤ！」

「私はそんなつもり無いのだが………スूपが髪で汚れてしまうだろう」

髪がスूपで汚れる ではなく スूपが髪で なのがインフィス。

新陳代謝や基礎代謝が優れており、摂取カロリーが膨大でもすぐに消費されるので、お腹周りが気になるメコンや、体操サボると養鶏になる爽羽佳からは特に羨ましがられている。

彼女として恵まれた体質任せにするのではなく、鍛錬を怠らないのでメリハリの利いた、体型が崩れないのである。

生きる事は修行その物である、修行と苦行を勘違いしてはならない、命絶えるまで修行は続く。

歩み始めたら止まってもいいが、逆走はするな。止まるのは自らの道筋を確認する時のみ。

弱い自分を打ち砕きながら、信念を磨き鍛え、武器は己の肉体のみとする武人。

身体を触ることが出来れば、女性にしては筋肉質である腕や腹筋を持つっていると判明するだろう。勿論、気軽に触って良いのは仲間の女性陣と、新しい主として認めたくただけだ。

Segment・penta——リビジョン

——これはインフィスが19歳、ネリが12歳、初対面の回想——

こおり きらめく ふゆのまち

万年雪が降り積もり、吹雪や雹が行く手を阻むので来訪客すら珍しいキツサキシ
テイ。

………の、西側には「叡智湖」と書いてエイチこ、伝説のポケモンが潜り棲まうと
されている畔があるのだが……

「ニユラハハハッ！ あの町の連中はボンクラばかりニヤ〜ね！ 遠路遙々した甲斐
があつたニヤあ、雪市とかネリちゃんからすれば獲物の巣窟！ ひかりのいしまでパク
れるとは、ネリちゃんの特性はきょううんだつたのかニヤ？………ニヤ〜んで！
ニユラハハハハッ！」

天候の影響があり昼夜問わず、キツサキ周辺は薄暗いのも好都合！

まだマニユーラに進化しておらず、身長もお胸もワンサイズ小さかった頃のネリ。

物心が付くよりも先に、両親も友達も居ない事に気がついてしまった、名前の無かったニューラ。

その日を生きる為に必死な黒い少女は、窃盗、スリ、万引き、密売……罪悪感など湧かない、生きる為に何でもやった。

何時しか生きる為のついでに、ゲーム感覚をプラスさせ「今日は〇〇円稼ぐ」とか「今日は〇〇個盗もう」など、一般常識など知ったことじゃない顔のネリは目標を定めて遊び始めた。

「メタルパウダー、すすすすこやし……このバッグはショボイ物しか無いニヤあ……おっ♪ こっちはしんかいのキバにエレキブースターに……結構高値で売れる進化アイテムが入ってるニヤ〜ね♪ するどいツメがあれば、ネリちゃんは進化出来るのにニヤあ」

こおりのつぶてのバリエーションの一つ、短剣を象らせ盗み回ったバッグやリュックを引き裂いて、中身だけを頂戴していく。

きんのためが2個、おだんごしんじゅが1個、怪しい用途に使われそうな道具も住処に保存させ、食料が尽きたらトバリシテイにでも売っ払いに行けば、また一ヶ月分の食料はゲット出来る。

「勿論、トバリまでの船には密航ニヤ〜！ こっから一帯のニューラ達はネリちゃんの子

分にニヤったから、見張り役にも困らニヤいし！ 機嫌取りの意味も込めて、アイツらにカボチャスूपでも作ってやろうかニヤ？ あゝ、カボチャの代わりにカチャのみを使おうかニヤゝ！ 一昨日パクったリユックにホズとかギネマとか、シンオウでは珍しい―――」

「失礼するぞ、コラコラツ、その派手な格好のニユーラ？ 未会計の品を沢山持つているじゃないか？」

「うゝあゝ ニュウゝうゝうゝうゝ??！」

「そこに落ちている手提げ袋には、盗難届が出されている。黒いポケモンに財布や持ち物を奪われたと、キツサキシティは騒ぎになっているが……貴女の仕業らしいな？」
(子分達がこの洞窟までの道を塞いでるハズニヤ!!? 全員ぶつ飛ばされたって事なのかニヤツ!!?)

ネリとインフィスの初顔合わせは、最悪のシチュエーションだった。

盗みを働いている事がバレた！

集団で襲いかかりレベル的には、一枚上手のポケモンすらボコれるニユーラ達を一匹

残らず瀕死にさせ、親玉である自分の住処へズケズケと土足で入り込んできた人化……種族は分らないけど♀ポケ。

「私の名はインフィスだ。キツサキ市場から貴女が逃げていくのを見かけたのでな、追ってみたらこういう事だったか。……盗みが良くないのは一般常識だろう？ 私と一緒に謝りに行こう、許して貰えるように私からも」

「(ネリちゃんのを捉える奴が居たニヤなんて……追われてるのにも気づかんかったニヤ……) ……ねーちゃんニヤあ？ 事情も知らニヤいのに正義面せんで欲しいニヤあ？ 特性がせいぎのこころつてギャグは必要ねーニヤ。……ねーちゃんはポリ公の回し者かニヤ？ それとも何もしくたつて安全に日々を過ごせる、トレーナーの手持ちかニヤ？」

「違うぞ、おやである主を失い武者修行を続けている、渡り者……とでも言おう。ああ、妻折傘と道中合羽に爪楊枝は啜えてないぞ」

「……………へー、野生の癖に名前があると思っちゃったニヤ。ネリちゃんは自分で名付けたけどニヤ」

最初から頼れる者が居ない自分、この中華民族チックな衣装を着たポケモンは、
“トレーナーの手持ち。”

どちらが悲惨なのかはどうでもいい、大切な存在を失った事の無い……いや、持てな

かったネリは誰かの手持ちになる、選択肢はずっと昔に抛棄してしまった。

盗むこと自体に罪悪感はない。だが、トレーナーのポケモンになれば遅かれ早かれ、過去が洩れ出し捨てられる……また野生に逆戻りとなってしまうに違いはないっ。

「ケツ……！ 今日がずつと続くと思ってるねーちゃんに、ネリちゃんの気持ちがかつて堪るかニャ!! バレちまつたらねーちゃんの身包み剥いで——」

「口数が多いぞ?」

「——!?!? ニュラッ?! ラッ ニュア! ちよっ……ねーちゃんやめっ……ニユウ!」

何時動いた!?

機動力に重点を置いたニューラ種は、一撃が致命傷となるので基本的に相手の攻撃を受ける前に倒すか、躲し続けなければ簡単に下克上されてしまう。

攻めよりも避けるに全身全霊を注ぐ、これは勝てないと思つた相手は自慢の素早さで振り切つてしまえば、収穫は無くても命だけは守ることが出来る。

「ならば更生するか? もう盗むのは止めると言えば——」

「ぜっくくたいイヤニャ! んべっくくニャブツ!? ニヤンツ!? ニユベベえくく」

く!!

「じゃあ止めぬ、真面目に働けばいいだろう?」

「へっ! こつちのが簡単に大金が手に入るんニヤ! 汗水垂らすのはどつちも変わりニヤいんニヤ! バツカらしい労働なんざできニヤ、ヴア、!? ニヤベ、ヴイ、ア、くくツ、!!」

まず洞窟から突き落として……ネリが頭と脚と爪を同時に働かせる前に、白と紫のポケモンは壁に向かって一人キヤツチボールの練習を始めた。そのボールはネリだけど!

「もう降参するか?」

「いやニヤハアアア………きぼつ、きもち、わ、る、く………にや、つて………ツ………いでえにや………いわが………あたまにさ、さつ………」

物理的な意味でお手玉され続け、次の手を用意する事も出来ない。

睥睨しようとしたって、目玉がバツテン印か渦巻き模様の二択しか表示出来ない!

岩壁に頭も身体も叩きつけられ、一回ぶつかる毎にHPが1減るスリッパ拷問。

「に、やんつ………にや、つ………ニユ………に、つ………」

洞窟内では軽く地震が起こっている、それでも降参しないのでインフィスも結構疲れて来たのだが……

コジヨンドが格闘タイプだと知らずに、喧嘩を買ってしまったネリは、彼女が偶然にもキツサキシテイに滞在して、偶然窃盗現場を目撃された時点で、負けは確定していたのだ。

「……………まだかつ？ 我慢強さが無いと、泥棒は務まらないと聞いたが」

「どろ ぼ う じやニヤ、 いん、 にやくとう、 ぞく ニヤアア、 く
……………」



「結局、二時間も粘られてしまつてな。ネリが「もう盗みません」と泣きながら謝つたから止めたんだ。それからはネリの監視役としてシンオウ各所を旅しながら、短期契約の仕事経験を積ませたり、曲芸を披露しながら収入を得ていたんだ。ネリは特技を活かして故障したドアを開けたり修理もしていたな……………そして2年前に主と出会つてゲットされた……………」

「ししよ〜！ ハズいニヤあ……………歴史の闇に葬りたいニヤしいい……………ネリちゃんも未熟だったニヤあ……………ししよ〜との戦力差を見切れニヤくて……………」

インフェイスとネリを先頭に、ゆつたりした歩でつい数時間前の出来事のように、一言一

句、心の声までリヴァイヴアル……

優位なポジジョンに立ち続け、崩れても逃走する事の出来たネリが、どっちも成し遂げられず、人型から球体の身体になって死ぬかもとすら思わせられた格闘ポケは、普段は非常に穏和で前マスターが亡くなってから、踊り子として活動していた時期やそのまゝ、流離いのフードファイターでもあつた多芸かつ聡明な女性。

「ミノノノオ〜ンツ！ ノホオオ……♪」

「おうツッ!? なんだ？ 私の胸が気に入ったのか？ 私ので良ければ枕や布団代わりにしてもいい、存分に使つて構わんぞ」

なんて羨ましい……なんて寛容なお心……

初対面の挨拶時にも、鼻ちようちん膨らませ寝てたかたくりが『隙だらけだぜっ!』と、示唆するかの勢いでメコンのHから、インフィス姉さんのFへ惑星跳躍。

木星から天王星、と例えればあまりにスケールダウンしているが、木星がデカすぎるだけで天王星も太陽系惑星で、3番目の大きさを誇っている。

授乳クツションな柔らかさと寄せ乳せずとも、衣装上からIやYの領域を作り出し、ポケモン一匹侵入してもへこたれない。

触れれば溶ける鋼とは対照的な、柔らかさを誇るヴィヴィはい、他の追撃を許さない圧倒的ロケット、むっちりもっちりなメコンはい。

∞ぱいはまるでおっぱい自体が意思を持っているのか、優しく触れればむにゆり掌は乳沼へ沈んでいき、力を入れて触れる即ち、非紳士な圧を注げば強ばっていく！

ハリやら弾力やらに五月蠅い、巨乳ソムリエの談義へとフレキシブルにお応えする、千変万化おっぱいと名付けよう！

そりゃあ、こんなFカップを携えた素敵なお姉さんが、目の前を華麗に舞っていたら手と口と下半身を伸ばしたくなくても仕方ない。彼女は自分の魅力を完璧に把握しており、素材の風味を活かした味付けを行っているのだ。

「ニヨホ、ミニヨオオツ……………♡」

歩行の揺れが丁度良いのか、初対面のミノムシが谷間に潜って来ても泰然自若の姿勢を崩さない。

インフィースも自分が不在中の際に、新しく仲間となった彼が子共と聞き伺ったので、

多少無礼でも気を許し胸を預けている（意味違）

袖越しに触覚を摩れば、ゴクリン顔のまま頬擦りどころかミノごと回転させやがったのに「甘え上手だな!」と、パイ圧を強めてくれる彼女の母性は天王星ではなくマザー・アースだ。

「主も私の胸に興味あるのか? 男だものな」

「いやいやつ! 俺はそういうコオッヅ?!?~~~~つ~~~~え~~~~げつ~~~~
くえ!!」

謝礼を求めるように、二の腕で押し上げたデルタゾーンを真横から近づかせ、年上お姉さん特有の茶目っ気がジツクに炸裂。

場を不快にさせない程度にかき回せば、他の三匹も胸を強調させながら対抗する。

困ったような、でも男の子だから嬉しそうな……そんなジツクの反応と皆の反応が微笑ましくて……

今回もそうなると思っていたが、無言のままジツクの脚へ全体重を乗つけて踏みつけたヴィヴィが、彼の言葉を中断。

渾身のジャンプ力を見せるバネブーよりも高らかに、夏天の雲綿に人型模様を刻印する。

ちなみにヴィヴィの体重は、おっぱい以外は信じられないくらい軽量級のメタグロス

……であるが、物理攻撃の際は本来の体重へ戻る（550kg）ので、ジツクでなければ五本指が細切れになっていただろう……ヒエ

（悪いことをしてしまったな……メコン達が張り合うよりも遥かに早い反応速度だ。彼女……ヴィヴィも主を……そうなのだろうなあ……！　色男だな主よ、好かれるだけの男であるのは私が保証するが）

「……………プイツ……………」

長い袖で口元を隠し、少しだけ笑うもけんけん歩きのジツクへ「すまない」と謝罪する。

強くなる事……とチーズドッグ……以外に関心を示さなかった鉄の少女が、多感な時期を迎えてから何かとジツクは被害を被る。

気分は思春期となった娘を持つお父さんだ、照れながらも自分の気持ちを表現出来るメコンや、竹を垂直に割った性格のインフィスとも違う、甘え下手でカオスアトラクター、手探りで闇彷徨っているヴィヴィ。

機械だの戦闘マシンだの、そんなイメージはもう消えている。実はこの中で一番《人

間に近いポケモン》は彼女かも——

Segment・penta——秀麗鬪舞

「なああつ！　世の中上手く行かねえからオモシレーんだよなあ小僧つ！　オジサン
まあゝゝたフラれちやつてよお！……………ああアあー！！　オモシロクねエナ
アアツ！！」

「あつ、ハイツ……………そうですね……………すみません僕未成年なのでお酒は……………」

「俺のかなかしみをく共感してくださいよお??……………飲めツ飲めツ、オジサンが全
部奢つてやらあ！　キンセツの스로で五万買つて来たんだゾー！　俺は大金持ちだ！
ヴァアヴァアヴァア！！」

数十メートル先から聴こえる、人を不快にさせる酔声と、肩に手を回されながら一升
瓶を口に付けさせる寸前の少年。

「ですから僕はお酒が飲めない年齢なんですよお……………それと貴方とは知り合いでも何で
もありません……………離してくださいよお……………」

「じゃあこーしよつ！　今からアンタとオジサンはトモダチ！　トモダチの頼みは聞いて
くださいよお??」

至近距離でドスを利かせた声を出しても、全く聞き入れてくれない中年親父に困り果

てている店主から話を伺うに……

食事処の店外席に座っていた少年が、110番道路方面から既に千鳥足だった場末感がプンプンする、ビール腹タンクトップ親父に絡まれてしまい、ポケモンバトルで倒すか警察に通報するかで店主は迷っていたらしい。

少年はポケモンセンターに手持ちを預けている最中の、お昼ご飯として店を利用してあるのでバトルが出来ない。

そうでなくとも価値観が古い、ウザ親父に何の因果か捕まっているのか……気弱な性格ながらそろそろ顔を殴り兼ねない、右手を丸め震えさせている少年は一触即発。

ここで少年が殴ってしまえば、逆に少年が警察のお世話になってしまう加害者だ。

「殿方よ、少年は昼食を食べている最中だぞ？ この店にも迷惑が掛かっている、飲酒なら自宅でするといい、博打で稼いだのなら酒風呂なんて試し」

「ああ？俺がトモダチをなんで離す必要があんだ？ おっぱいデカイコジヨンドのねーちゃんや？」

「友達なら尚更だ。気乗りしてないのに無理矢理付き合わそうとす」

「あぁー！！ オジサンを苛めるようとしてるんだー！ そーゆー奴は社会の厳しさ教えてやんよオ……くっ、ヒッ！ いけえフローゼルウツ！」

これはダメだ、会話だけで退場願おうとしたがやっぱりこうなった。

激昂した枯れ声だけど、狂酔しているからニヤ付き顔のまま、少年の首に腕を回し引きずりながら店外へ。

するとポケットからモンスターボールを取り出し、フラ付いた動作で前方へ落とし込むと、うみイタチポケモン、フローゼルが飛び出てきた。

漁師町では人化、本来の姿問わずに良く見かけるポケモンで、発達した浮き袋をポート変わりにした人命・ポケ命救助や、獲物を捕る手助けをしてくれたりと、人間とは広範な交友ネットワークを築き上げている。

トレーナーが酔っ払いなら、ポケモンも酔っ払い。アルコールは摂取してないはずだが……影響を受けているのか、パッチールを思わせる不規則な足取りで眼も瞑ってしまっている。

「アクアジェットオ！」

……が、指示を聞いた瞬間、ピントを合わせた本来の目付きを取り戻し、そこに海や川があるかのモーシヨンのまま水流の如く勢いで、無構えなインフィスへ突っ込む！

リアル不意打ち、からの先制攻撃の二重奏。アクアジェットは発動までの準備が要らず、すぐに攻撃へと移れるフローゼルの代名詞。

フローゼルはかなりの敏捷さを持つ、一見すれば優先度の高い先制攻撃技とはアンチシナジーだが、『相手が先制技を使っても、その技より先に発動出来る』

先制技を同時に使ったら、素の素早さが適用されるので元から素早いフローゼルは、先制合戦に強い！　そうでなくともダメ押しにもなるので使う機会は多く、標準装備と言っても過言ではない。

酔っ払い親父も本当は酔っていないかった？　ボールから現れた絶妙なタイミングで、指示を下していた。

「不意打ちにしては遅緩だな」

ご機嫌な気持ちを取り戻していたのにつ、その生意気なデカ乳にお仕置きだっ！

酔いどれ親父とフローゼルの思惑は、たった一撃で阻止された。

出合い頭の一発……が、得意なのはインフィスもだ。

政府が公認した専門用語《優先度》

通常よりも＋１がアクアジェットだとすれば、インフィスが繰り出した先制技は＋２とでも表せよう。

先制技が重なれば、より優先度の高い技へと低い側が、潜在意識的に順番を譲渡してしまう。

なのでこの場合は、フローゼル側が生まれ持つての素早さで勝利していても『ハイ、どうぞ』と無意識の内に、インフィスへ『おさきにどうぞ』なレディーファーストしてくれた状態になる。

種族が持ち得る素早さを凌ぎ、片手を真つ直ぐフローゼルへ向けながら、もう片腕を腹に当て音の塊を発射する感覚で目元を遮らせる、ねこだまし。

この技最大の特徴は確定で相手を怯ませる効果に尽きる！

フィールドに出た瞬間、対戦ゲームで表せば１ターン目のみしか使用出来ない条件付きだが、その怯ませ効果は特に複数戦では任意のポケモンを封じられるので、ある意味では最重要な技とすら評価されている。

ダメージもごま塩程度、誰も倒せないが優位性を握る事が出来なかつたフローゼルは、無理に閉じさせられた瞳を開け次の命令を――

「おう、ふくピンター！」

頬に左右から四連撃、身体が倒れ込む威力つ……

「おう、ふくピンター！」

軸足で支え直す必要は無い、後方へ移動完了していたゴジヨンドが、僧帽筋へ五回、袖越しから平手を食らわせ逆方向へと押し——

「はっけい！」

最後まで傾けないメトロノーム。

再び後ろから前へ、身体の内側へ気をたたき込む掌底、はっけいでの強打。

「……………へっ？ ハツ……………？ フローゼ——」

運動神経が末梢へ伝わらないっ、伝達を鈍らせる麻痺作用がフローゼルの脊椎経路を減少させ、セールスポイントの素早さはカビゴンよりも鈍重に——

「鍼灸でなくてすまん、外治法だ、きっけい！」

連続攻撃を始めると、誰も止められない（ポケモン図鑑説明から引用）

鋭くも流麗な武術は、一つ一つが美しきで構成された演舞。

メの一発は手も脚も使わず、胴着帯の様な形状の尻尾でくるんつと、回転間に浮き袋へクリーンヒット。

気功術を付与させ、相手の麻痺状態を完治させてしまうが、代金代わり(?)に威力を倍化させるきつけ。

折角の状態異常を治癒させるので、使い勝手は良くないがセルフで麻痺にさせる技を所持するインフィスは、器用巧みに使いこなしている。

「これにて閉幕、対戦ありがとうございました」

「??……………? えっ? 何もしてないんだけど……………? 何が……………起こった……………??」

アクアジェット、かゝらゝのく……………敗北!?

先制攻撃したと思ったら、自分のポケモンが倒れていた。そう説明するしかない。

「酔いは醒めたか? 武力行使になってしまつて申し訳ない」

「あつ、え……………こつちこそ……………スンマセン……………」

俺は本当に酔つてしまつていたのかもしれない……………旋風に過ぎ去つた野良バトル、キウウコンにつままれていた感覚は拭えなかつたけど、残業帰りの社員の様な体勢で、のびてたフローゼルをボールに戻し終えたら「負け」の現実を、受け取れる事が出来

た。

少年や店主、その他の客人に拍手と御礼を述べられるも、インフィスは手を振りながら会釈しその場を去る。

「あの者は酒に酔つてない、酔つたフリをしてドン底気分を発散させたのかもしれないな。理由は分からないが恐らく、職場で嫌な事があつたのかもしれない。ちなみにあの一升瓶の中身はサイコソーダだ」

チラツと店内に視線を送れば、嘘酔い親父が店内の一人一人に深々と頭を下げている。

彼の言動や行動はわざとらしすぎた、悲しみを誰かに共感して欲しかったのは本当だろうか……アルコール臭がしないのに酔っている訳が無い。

（流石ししよ……略して“さすししよ”……ネリちゃんも進化したり技を覚えたり、別人てくらい強くなったんニヤけど、ししよには素早さ以外で勝てる気しないのニヤ……）

彼女の恐ろしさと卓越した戦闘力を、その身で味わい鼻先で見っていたネリは、氷タイプなのに寒気が走つた……

相性も最悪の格闘タイプ、練習試合では全敗、避けて躲すのに精魂込めなければ、試合開始の合図と共に自分は瀕死！

つまり「攻撃」のカードを最初に引けないどころか、山札が全部「回避」のカードだけで編成を余儀なくされてしまう。

(ねこだましからの攻撃は、最初から最後まで全部一つの線で繋がっているとしか思えないのよねえ……武術套路ってヤツ?)

数十秒に渡って次々とスタイリッシュな拳舞をお見舞いされ、完走。端的に表せば相手は死ぬ。

見物人は胸がスツとするだろうが、対戦する側は堪ったモンじゃない!

飛行タイプだから有利とか、ポケモン界の法則をまかり通せない熟練の女武闘家。

爽羽佳は勝ち星を持っている……一つだけだけど! 爽羽佳が弱いんじゃない、インフィスが一人当千なだけだ。

(私達は昔よりも実力を付けております。インフィスさんが「昔と同じであれば」勝てるかもしれませんが、懈怠していかなかったと先程の戦闘で報じて下さいました……組んで戦えば非常に心強いのですが、相手取るとなれば……)

彼女や恋人と茶化されるだけ、長い間ジックの手持ちとして活躍しているメコンも、状態異常技と豊富な耐久力が上手くハマって、やっと五分になれる。

とにかく単純な戦闘力ではジックメンバーで最強、ネリの師匠だけあって『マトモ』に戦おうとしては勝ち目無し!

「口論では埒が明かない、勝ち目がないと直感すればバトルになるのは自然な流れ、俺はインフィスに《いつもの》としか指示を出してないよ」

元おやが、たつじんの異名を持つ老トレーナーの手持ちだったインフィスは、ジツクが出会った段階でも相当な高レベルで武者修行の名目で、各地方を一人旅していたので必然的にトレーナーの指示を仰がずに、自己判断のみで戦う局面に慣れている。

一人で暮らす期間の長かったネリもだが、状況によつてはポケモンの自己判断に任せってしまった方が、相手の作戦を狂わせる事も出来るし、指示よりも早く身体が動くので咄嗟の攻撃も、躲し易くなつたり少なからず光る点はある。

それでもポケモンと言う不思議な生き物は、おやの下で生活し戦った方が強くなれる、身近な例がヴィヴィだ。

（インフィスはそれに当て嵌まらない、トレーナーが指示をしなくてもむちゃくちゃ強い……だから俺が彼女に命ずる事は一言、二言くらいだからな）

《いつもの》は戦闘パターンの一つ。主にタイマンバトル用。

ねこだまし↓おうふくビンタ&はつけい↓きつけ。耐久力の高くない敵はコジョンド種の優れた攻撃から繰り出される、天衣無縫な乱舞に反撃する事も出来ずバトルの幕

は閉じられる。

「だが、主から指示を貰わなければ危ない場面は何回もあつたからな。やはりポケモンはおやとなる存在の側に居てこそ本当の強さを手にできる……私はそう思っているぞ？」

主を思わなかつた日は無いからな……「今同じ空を見ているのか？」などと、似合わない哀愁な気持ちになつたりした物だ！」

屈託のない笑顔、この一年で主たるジツクはさらに男前になつていた。

自分が修行をサボっていないのと同じ、彼も肉体トレーニングを毎日欠かしていないのは、こうやって手持ちのシルエツトが刻まれたVネックの上を撫で、安定した体幹を作るシツクスパックスの感触が頑強になると、腹直筋が教えてくれた。

女性は男性の筋肉に逞しさを感じる生き物。メコン達がそうであるなら、インフィスだつて体温を感じながら身体を密着——

「……………インフィスさん、貴女の戦い方は敬服に値します……柔と軟を織り込んだニホン舞踊、魅入つてしまいバトルだと言うのを、フローゼルが倒れてから思い出せました……凄く格好良くて美しく……わたしの電子頭脳回路はインフィスさんへの興味が大きなウエイトを占めています……お手合わせ、願えませんか……？」

伝統芸能など興味が無かった子なのに、舞を連想するとはフェンでの一件後に勉強したのかも知れない。

相手を立てながら敬意を払い、丁寧に頭を下げお願いするヴィヴィ。形だけだった一昔前とは違う、自分より強いポケモンへ稽古を付けて貰いたいと、胸を借りる事を切望する《心》ある少女になったのだ……！

「良いぞ！ 私からヴィヴィへ申し出するつもりだったからな！ 強くなりたいと願うのはポケモンの本能、されど自らの意思で私との決闘を望んだのだろう、ヴィヴィは？」
「ハイッ、よろしくお願いします……！」

バトル関連（とチーズドッグ）しかやる気の中だったヴィヴィが、他の四匹と同じく「今日くらいはお休みしよう……」と戦闘プログラムを閉じていたのに、結局始動させる事になってしまった。

フローゼルと酔っ払いを止めるよりも前、ラーメンを色香な表情で召し上がっていた時から、半端ではない闘気を感じてジックの手持ちでなくとも、バトルを申し込んでいた。

メコン達も興味ないと言えば嘘になる……レベルでは劣っているが多種多様な技を内蔵する高種族値のメタグロス、生まれながら素質があるこの子ならば健闘は間違いなし、レベル差を覆すだけのプロバニリティーを秘めている。

(……………全力で指示してくださいね……………?)

(おおっ！ インフィスに勝つつもりで一緒に戦おう！)

(……………んっ、……………♪)

インフィスはトレーナーの指示が無くても、存分に戦ってしまう風変わりなポケモンだが、ヴィヴィはトレーナーの指示が無ければ、最高のポテンシャルを十分に発揮できない、トレーナーが傍に居て力を添えられてこそそのポケモン。

相手が古株で自分が新参者だからと、わざと勝たせるような演技や相手の面子を保てる為に、自分の意を無視された指示を下されるのもゴメンだ。

……………彼はそんなセコい男でないのは分かっているけど、楽しげに過去話する二人についていけず、少々不機嫌な気持ちをジト目で表現したのだが……………

上っ面は牢固として不変だが、心の中でコミュニケーションを取れる念話が接続中だと忘れ、ついスズノネの様な穢れの無い声色で同調し、忽ち上機嫌になっていると知ってしまえるので、ジツクの方が視線を合わせ辛くなってしまう……………喜怒哀楽が生まれ
た彼女にドギマギしてしまう。

Segment・penta——無名無形

バトルフィールドは夕焼けの浜辺。

人数は減っているが利用者の迷惑にならないよう、隔絶されたかの端部まで移動した。

海面に夕日が反射して、とても眩しい！ 戦う地形はとても重要だ、何てことの無いバトルだって景色が良ければ心に残るし、地形を活かした戦法もとれる。

海に沈む夕日……碧すらオレンジに溶け込む幻想的な黄昏のパノラマ……メコンは主人の手持ちとなったキツカケを思い出してしまう……

「でてきて、インフィス！」

夕日に向かって走るように投擲つ、そのボールはライムグリーンを基調とし、4つの赤模様と中心の黄色い円、解放後にもライムグリーンの光に包まれる。

空中前転しながら現れたインフィス。彼女が本来収納されるボールはフレンドボール。

彼女の好感度が高いのはこのボールのお陰……いやいや、そんな単純な効果などで計れない関係でないし、彼女も「デザインが気に入った」以上の趣旨は含んでおらず。

「いっておいで、ヴィヴィー！」

赤い羽衣の様な夕焼け雲へ吠えろっ！

癖の無い蒼いエフェクトを裂け、広がるツインテールの毛先からスラスタアの原理で、姿勢制御と着地までの微調整。

やや前重心で脇を締めて構えるヴィヴィーは念話を使わなくなっただって表沙汰になっただけ。まっついている。

「……………♪」

「いっておいで」の言葉が、嬉しかったんだろうなあ……と。

本人は逆光でシルエットとなり、表情が隠されていると思ひ込んでしまっているが。

シルエット、と言えば、ジツクのVネックにはメタグロスのシルエットが追加されたと、報告しておこう。

ヴィヴィが仲間となり、フエン旅行から帰ってきて早々にデザインやレイアウト設計し、なるべく早くお願いしますと頼み込めば、24時間以内に制作完了し配達されるオーダーメイド衣装専門店には、お抱えと呼べるレベルで互いに恩を受け、利益を得ている。

その後ろ側、七分丈のシャツを着れば隠れてしまうのだが、これはインフィスの意見によってわざと隠されていたのである。

コジョンドのシルエツトは旧デザインにも刻まれていたので、出来上がったばかりの新デザインではフルメンバー！ タイプや長所もバラけていて良い感じだ！

「水着に着替えたのか、私も所持していれば着替えたのだがな……」

「……………海ですの……」

蒼い手甲は無論そのままだが、ブレザー制服もスクールスカートもホテル内で主の帰還を静かに待つ。

ラツフルビキニで戦いたがる！ 初めて「感性」で選んだ品なので、愛着が湧き出たのだろうか！

ヴィヴィは大丈夫と恐れ気なく言うが、ギャラリー側からすれば（特に指示側としてもジツクが）制服よりもおっぱいが強調され固定が緩いので、ポロリを超越しトップレスにならないかでハラハラ物だ……

(インフィスさんは構えないのですか……?)

(ああ、彼女には一部を除いて構えが存在しない、前のトレーナーさんと培った《無名無形》から相手や状況に合わせて、技を運んでいくんだ)

フエンでの一件から念話でのアクセスも、アイコンタクトがあれば簡単に行える様になった!

……タイミングによつては「セクハラです」とシャットダウンされる事もあるけど
……

ぶかぶかの袖を真下へ垂らし、直立したまま動きを見せない。

正しい姿勢見本として体育の教科書に載っている写真、妥当な表現がそれだろう。

「ネリちゃんが合図するニヤ〜! ホイツ、3〜2〜1〜」

この人と戦ったらどうなるのだろうか?

何時ぞや皆とバトルした時と同じ、普通に考えたらタイプ相性で有利なのは自分。

——しかも今回のバトルは相手側にトレーナーが不在で、自分には信頼……消去……ト、トレーナーが指示をくれるので、有利なのは自分で無ければおかし——

が、バージョンアップされたスーパーコンピューターが、戦力を数値で表し算出した結果が「15%」

それが自分の勝率つ、プラス条件がすぎ込まれているのに、15%の確立でしか自分は勝利出来ない。

（マスターを信じて……やるだけやってみますっ！ わたしの力がどこまで通じるのかっ！ 簡単過ぎるバトルなど求めてないんですッ……！）

戦いが始まる前から、こんな考えではいけないのだけど……

例え負けてしまったとしても、これだけの強者と手合わせが出来て、マスターと「一緒」に全力全開でぶつかれたのだから、感無量になるだろう……間違いない……

「〇ニャー！」

夕空へ氷の手裏剣が放たれ——FとFのシルエットはその一步の踏み込みだけで、対戦者との距離を大幅に縮めていた。

地面からの反発力が弱まる砂地、地を蹴るよりも滑空する様に脚を上げる、細かな筋肉を使うのでアスファルトで強いから、砂地でも強い理由にはならない。フィールドごとに走法も変化させなければ。

機動力が弱体化するので——関係ない、速攻優先度のねこだまして、出鼻を挫かせれば相手は確実に怯む。

お互いはお互いの技を教えられていない、だがヴィヴィは先程数個だがインフィスの技を拝見しており、初手はねこだましであると確信……と言うより、初手でなければ使えない技なので……防止策はちゃんと作ってきた。

「——ねこだましを上回る速度を生み出したのかつ、見事！ 逆手に取られたな」
「……………ッ！」

砂浜から5、6 cmばかり身体を浮遊させ、地形を無視できるネリ命名のツイインテプースター。からの、バレットパンチの合わせ技。

磁性粒子を蒼色へ噴出させ、加速度を全身に受けつつ猛スピードで目標へ到達。

サンダースやプテラ、もしかしたらテツカニンですら振り切れてしまえた爆発的な速度を殺さず、発砲されたAP弾も自分自身だ。

特例が無ければ、何かの技を使っている最中に、別の技を使う事は出来ない。

こうそくいどうをキャンセルし、次のバレットパンチを繰り出すまでにはどうしても、眼で捉えられないコンマな領域だとしても「ラグ」が生じる。

そのラグを限りなく薄く、小さく、インフィスですら「新発見された技か？」と頭よりも先に、瞬間、行動で結果を表していた。

「バトルは仕切り直しだな、短時間で対策を用意しているとは期待に違わぬ子だな」

「……………期待、してくれていたんですか？」

惜しいっ、ジツクや皆は弾丸鉄拳が命中したと思っていたが、上体を落とし込んだ姿勢でシュツ……………つま先だけで手甲に覆われた手首付近へ舞い降りた。

「ああ、ヴィヴィは生まれてから日が浅いと伺ったが、過去に戦ったどんなメタグロスよりも強い！ 私も22歳の若輩だが場数は豊富なんもりだ。規模の違う新世代の闘魂を感じたぞ」

乗り上がったっても体重を感じさせないインフィス。

彼女が後転し飛び退いても、眼を瞑ってしまえばまだ乗っているのか、退いたのか

……万有引力に逆らうような判断不明となる身軽さ。

そんな力学に反するような身体である筈はない、重力制御システムなど装備されていないのだから、彼女独自の秘密がある……

マスターであるジックから聞いてしまえば、簡単に正体は分かるけどそれではダメ、戦いの最中で正解を掘り起こさなければ！

（危険なのは承知してますが、接近してみます。ヒントになる物を探りたいのです……）
（分かった、近接は彼女の方が上手だ、深追いはしないでね）

（了解、ですつ……）

バトルでは口頭からの指示ではなく、心と心を繋ぎ響き合わせ会話が出来ると、他の皆はエスパークタイプが付加されていないつ、念話が行えるのは自分だけつ。

それが嬉しくつて………する必要の無い場合でも、つつい自分は指示を仰いだり、選択肢を用意して彼に選んで貰ったりしてしまう。

「……ツ！ コメット、パンチツ！」

来たアッ！ 海原をも震わせる彗星の一撃ツ！

ネリと爽羽佳がはしゃぐ、ヴィヴィの主力にして最強の破壊力を誇る技は、発動前の予備動作から攻撃速度までリファインされ、割って攻撃を当ててしまえばキャンセル出来た実績はあるも、今のコメットパンチにはソレが無いっ！

蒼き彗星エネルギーを手甲へ集めるのが、妨害出来ぬまで快速になっているんだ。

トレーナーを得て、指示を聞き、一緒に戦うポケモンの強さ、これならししょくこと、インフィスだつて大ダメージ、若しくは一撃で——

「うゝ!?ツゝ……………」

「脳に効いただろう? ダメージは悲しいが、内側への血液循環が一瞬途切れた……ヴィヴィの場合は磁力だったか、そんな感じになったか?」

——倒れたのはヴィヴィであった。

彗星となりインフィスへ突つ込む少女、肉眼で捉えるのは困難であったスピード、なのに直撃寸前で手甲の側面に掌を触れさせ、軸である腰を中心円転、もう片方の腕が

ヴィヴィの背面に回り張り手を一発。

言葉通りHPは減っていないも同然、しかし棒で脊髄を思い切り強打されたに等しき衝撃が、磁力を遮断させ表層筋と深層筋がバラけてしまった。

(大丈夫ヴィヴィ!?)

(……………ハイッ、あ…………ち、からが、下半身を支える力が維持できなくなってしまう………)

顔から倒れ込んだヴィヴィへ、インフィスは追撃をしなかった。

悔っているのではない、仲間として迎えたヴィヴィへ彼女なりの戦闘個別指導。

『私の謎を解いてくれ』

…………身構えず袖で両手を隠したまま、サイコパワーを使い人間であれば違和感のある、起き上がりを見せた蒼い少女へ、それを願っている様に奨励する。

本当のバトルはインフィスの“要”を発掘完了してからか……

(…………歩法でしたね…………円よりも凶形を描くような関節を内転、外転…………後頭部からの衝撃は内面へ多く皮膚へは僅か、力は殆ど入れてません…………体内で生成した

《気》を発して伝えられた……その様な分析結果があります)

一発攻撃を受けただけで、ジツクが言葉に困ってしまう。クレーム必死の欠陥コンピューターから、対象の精神や肉体情報を電子に変換し、物の数秒で演算処理を終えてしまう超並列ハイパフォーマンス・クアッドブレイン。

いくらメタグロス種の頭が良くても、通常個体はこんな性能を発揮できない。ヴィヴィイというハードウェアに、ジツクというソフトウェアをインストールし、始めて可能になる芸当なのだ！

もうジツクが一緒ならば、何だつて成し遂げられる気がしてしまう……！
戦況は有利では無いが、楽しんでしまえるだけのバトルに対する慣れや、判断力が地力に伴うようにもなっている！

「サイコキネシス……！」

格闘タイプである彼女へは、正面からの殴り合いではメタグロスとて劣勢か。

ならば遠隔攻撃だ、先程のコメントパンチも躲されてしまったが悪手ではなかった。

推測で憶測……確定にするか否かは、この一撃の結果で判定を下せる！

深紅の瞳を点滅させ、強力な念動派を攻撃対象へトランスミット。

使用者にしかそのエフェクトは視えない、非物質の壁や波が迫る。

物理の法則に反された「透明の何か」を離れた位置から一方的に浴びせられ、パワー自慢たるかくとうの長所が全く機能しない、大の苦手技。

強引に耐えきってキツくい反撃、近年の攻略法としては不可能ではないが、コジョンド種は防御・特防に優れた種族とは言えず、何の因果かマニョーラ種とほぼ同等。

等倍なら耐える、が、効果抜群を食らえば一撃でダウン。彼女も一撃が命取りとなる速攻型の能力値である。

「エスパーのみならず、全ての技には効果の及ぶ領域がある。ヴィヴィ、貴女のサイコキネシスはかなりの広範囲を持っている、超能力とて範囲外ならば無力……」

か・な・り・の・広・範・圍・を・持・っ・て・い・る……？

視覚化されてないリーチを持つ超技へ対し、そんな感想を述べられるなど彼女がサイコキネシスを視てる以外の何物でも無い！

これで確定したッ！ 力を入れずに脳天を揺るがされたり、あれだけの勢いの彗星拳を簡単に翻された理由——

「今の私は領域からは逃れられぬ……ならば……っ！」

そんな気はしたんだ、サイコキネシス一発で簡単に倒される相手ではない。

全力疾走しても、過去に戦ってきたエスパークタイプより念動波の攻撃範囲内、到達速度、軌道が良質。

物理に特化させている訳ではないらしい、特殊攻撃も十分に得意なオールラウンダー、元来の素早さは微妙な値でも、人化すれば珍しく小柄な体型となった利点なのか、機動力にも難は無い。

———まだ、まだだつ、最も恐ろしく、最も“死ぬ”と第六感が覚悟した瞬間に、一步を踏み出す……………———

「逃れられぬなら……………壊すしかあるまい？」

「……………！」

「私にサイコキネシスは利かないぞ」

力を求めず、ただただ試す場を欲する、父でもある元主からの教え。

安穏な表情だが、しなやかな肉体からは威容、衣服を着用したエネルギーが充溢している。

あくが複合したブルズキンでもなければ、超技を無効化するかくとうタイプは存在しない。

インフィスは無効化したのではなく、サイコネシスその物を壊した。

「そそそ、そんな事が出来るのかニヤ〜〜!?」

「……………てっ！ うおいつ！ 出来るからノーダメだったんでしょ！ 何で一番近くに居たネリが驚いてるんじゃない！」

シリアスモードになりそうだったので、こちらも壊しておく。

ジツクの手持ちになるまでは、インフィスと旅をしていたネリ。

エスパークタイプとバトルする機会は何度もあった、超霊狩りを得意とする自分が負傷で戦線離脱を余儀なくされた時……

いくらししょくが強くて、絶望的に相性の悪いエスパークタイプが二匹も相手では……

腕力を一切用いず、科学では解明出来ない超常現象を自由に扱えるポケモン達は、伝説として語り継がれる存在にも付属している事が多いので、何かと特別扱いされがちだ。

そんな超能力の干渉を受けず、ズタズタに引き裂ける先天的な属性を持ったのは誇らしげにもなる。

自分が戦えれば、エスパー二匹などボロクソにしてやるのにつ……ししよくが負けた姿など見たく……

「終わったぞー！」

「マ、ニャア、アア、ツ!? サイキネを弾いて壊して勝ちましたニャ、!?」

袖から出した草団子片手に、天敵……のハズなエスパーをあつさり撃退。

表面ではなく内側にほっこり、程よく甘い小豆が入っているらしい……一本貫いながら超常現象よりも、オカルトな現象の正体を教えて貰った。

「ギリギリまで引きつけて、それこそ『あつ、私死んだ』ってくらいまで……そのスリルも戦いに身を置いている実感として味わっているらしいのニャ。負けを恐れていたならアレは出来ないって、前のトレーナーから習ったらしいんニャ（ちよつとマゾっぽい考えニャね……!）」

他ポケモンの力を借りず、自らインフィスと手合わせしていた……それが元おやでありたつじんの肩書きを持つ、武術を極めし「閻魔」にして「豪鬼」

「だけどその人はししよくに『武術は極める物じゃない』と教わったらしいのニヤ」
今この瞬間の闘争に《楽しい》感情を覚え、《楽しい》を身体を借りて衝突させる。

超能力は避けられない、視点を変えれば不可能が可能になる。

「サイコキネシスは破壊、及び無力化される確立は100%……次なる技を繰り出しますっ！」

超技の使用は控え、別の遠距離攻撃。

サイコキネシスは通じない、もしかしてラスターカノンも同じ手段で打ち消してくるのか？

ジツクへ確認しながら両手を一つに、銀色の結晶を束ね砲撃する！

効かない可能性は十分に考えられる。そうであれば不利は承知で接近戦に持ち込むしか――

Segment・penta——力戦奮闘

「飛び道具はそこまで得意ではないが……っ！ はどうだんっ！」

片足を大きく踏み出しても、砂に埋もれず、砂が裂ける様に足場を作り出す。

身体の奥底から練り上げた気功を、大型の円球として打ち出すきあいだまと並ぶ、格闘タイプではレアな遠距離技。

同じはどうだんでも、扱うポケモンの種族や練度にとって、形状や色彩が異なる。それは使用者の映し鏡となるからだ。

（相殺されるっ！ 遠距離にも対抗可能……ですかっ……）

得意では無い、だが弱いとは言っていない。

白の球弾が薄紫色の輪を纏いながら、白銀の光線とぶつかり、周囲90メートルは竜巻が横断したかの砂煙に覆われる。

はどうだんは必中技、相殺しかやり過ぎす方法は無かった。あの技は遠距離だからなのか、両手を腰まで引き上下に開いた手を前方へ打ち出す動作があったので、彼女とし

でもあまり使いたくない技なのだろう。

威力はヴィヴィのラスターカノンと、完全に互角だった、何度も連発されたら堪らないが、彼女は地底火山噴火の様に立ち上る砂煙をはね除け、接近してくるに違——

「速いっ!?!」

「踏み出しが一步だけ遅かったな!」

周囲に光が無くとも磁力を媒体に、ナイトビジョンモードへチェンジ。

高画質イメージを作り出し、鮮明造形に生命エネルギーを感じ、ゴーゴーゴーグールの変わりにもなるファインダーは、砂塵の舞う現状でも有効となるが……

「ツ、はああああ、——……グッ、!?! えほっ、くう、けほっ……!」

海水の味が微かに染みこむ砂を舐めてしまった。

波打ち際に流れ着いた、水着のロリ巨乳美少女、女の子と仲良くなるゲームか童話であれば、キスして眼を覚ましていた、何ともそそられる一枚絵。

砂煙に塗れた衣装を叩き、とびげりでヴィヴィを吹っ飛ばしたインフィスは、再び距離を取って起き上がるのを待つ。この一撃でダウンする程柔らかい子でないのは、際だった防御のメタグロス種……という理由よりも、短いやり取りで識別出来ている。

「……………い、すてみ、インフィスさんのとくせい……反動を受ける技の威力を上昇……んっ、ケホッ……痛かった、ですよっ……!」

波に脚跡を浸からせ、僅かに蹠跟けながら姿勢を正す。

蹴りを受けた手甲への損傷は無いが、セリフが途切れ途切れである事から、HP的に軽くない一撃だと観賞人は心情推し量る。

「ほお！　そこまで分かっってしまうのか！　すてみの適応技は少ないがとびげりの様に、タイプが一致する技の突発力が上がるのならば、通常なら倒せぬポケモンも倒すことが出来る。仮に私がさいせいりよくなれば、ヴィヴィは今程痛くは無かつたかもしれないな」

「……………」

彼女の口元隠しからの流し目コンボは、同性も惚れ込んでしまいそうな、奥ゆかしい演出だ。

HPは削れたけど大丈夫、低耐久ならギブアップな威力でも、マスターとリンクしたヴィヴィなら詰め将棋の様な、戦況にも臆さずに立て直した深紅の瞳は燃えている、鋼なのに！

(……………やってみます！)

自分一人では思いついても、失敗していただろうな……そう思ってしまうだけ、ジツク存在は「居ないと困る」

勝てるとか、負けるとか、そういうレベルで無いのは、体面する武に生きる者には感づかれているのだが……

「ラスターカノンだっ！」

（同じ技だが主の命だ、隠された意図があるのは明白、はどうだんを使うのは危険かもしれないな）

発動までに隙を作ってしまった、無名無形を崩してしまふ遠距離専用技、はどうだん。覚えていて助かる場面は何度もあったけど、自分が好んで使いたい技ではない。先程は「ラスターカノンは相殺させるしかない」と、心理戦として自ら持ちかけたブラフ。

サイコキネシスだけでなく、ラスターカノンだつて躲し・壊す事は出来る。

命中を許せばHPはレッドゾーン、等倍技でもこれだけのダメージを貰ってしまう、コジヨンド種の泣き所な低耐久。

インフィスは余裕でサイコキネシスを破壊したのではない、どんな攻撃も本気で立ち向かわなければ〃狙えない〃

弱点技を一撃浴びればオシマイ、避けたら次の攻撃をまた避けられる……

彼女以外には気が触れていると思えない、無謀な強行策を引き起こす生き様は、披荊斬棘たり。

精神強念（サイコキネシス）に続き加農光炮（ラスターカノン）も折らせて――

「……………おお……………ッ！」

「命中……………ですつ、衣装に擦めただけ、ですが」

滑るようなパッシングスルー……………を失敗させた！

これは回避するしかないつ、彼女の判断力が無ければ胸元にビームが激中し、今度は彼女が波打ち際まで転がされていただろう。

「ねんりき……………か、途中で線が細くなったのは出力を絞ったからか、二つ目の技へ繋ぎ易くするために」

「……………正解です、ラスターカノンの出力を最小まで弄り発射、したと同時に、最も効力の弱いエスパーの初期技、ねんりきを発動させました……………」

何かの技を使っている最中に、別の技を使う事は出来ない。

だが放った後ならば、その法則から外れるので組み合わせや消費エネルギーを考えれば、連射に近い形にも出来たり一つの技で捕縛し、二つ目の技を確実に当てる、なんて芸当も可能。

エスパー永遠の主力技、サイコキネシスは範囲と破壊力は申し分ない。

抵抗や予備動作は存在しないのだが、念じてから発動までにそれこそ、1秒あるか無いか、効力の発揮するまでラグがある。

そのラグすら皆無であるのが、ヴィヴィが説明した初期技、他のエスパ―技を覚えたら用済みとして忘れさせてしまうねんりき。

無事にジツクの手持ちになったヴィヴィは、わざマシンの使用、ハートのウロコの使用を許可される。モンスターボールに収納される事でアンロックが解除される仕組みになっていているらしい……

「ハートのウロコ……使って貰いました……威力は悲しい限りですが、燃費が良く、初期技ならではの利用方法がある……そうですよね？」

振り向いたのはジツク……ではなく、自分が生まれて始めてバトルしたポケモンであり、弱い技の賢い使い方を教わった青いメイドさんだった。

(リスペクト、と言う物でしょうか……♪)

(……………！)

ヴィヴィの視線の意図を汲み取り、緊張した眼差しからすぐに微笑んでくれるメコ

ン。

ちよつと感動だ、ねんりきを思い出させる為に、ウロコ使用のオーダーしたのはヴィヴィである。一つでいいから威力よりも、即時発動効果を持つ技があれば、何かと応用出来るかもしれないと、今までのバトルメモリを見返している内に、ヴィヴィなりのコンボを新しく生み出したのだ。

「そうか、私の無名無形、攻撃破壊の手法がもう解かれてしまったのか……！ 予想よりも5手早い、頭が良すぎて理解が早すぎるなヴィヴィは」

素晴らし過ぎるプロポーションは、チャイナドレスの上からでもハッキリ浮かんでいたが……ビリリッ

眷属として引き連れたねんりきで、軌道修正したラスターカノンの先端が、惜しくも擦っただけに留まった胸元。

……しかし、なんと、やっぱり、期待通り、片側のFおっぱいが！ 菱形を半分
に切り落とした形となり！ 偽りの無い天然の肌色乳がポロリッ——

しない

「点の位置をズラされたかつ、服が破けてしまったが戦いに支障は無い、ついでに言っておくが私はふんどしではないぞ?」

(そこまでは聞いてないのですが……マスター? インフィスさんの胸元……見えますね? 不埒ですつ……このバトルが終わったら通報、ですねつ……)

服の胸元が破け飛んでも、ブラジャーの代わりに綿布をきつく巻き巻き!

潰されてもあんな立派なおっぱいであった……和武人系のインフィスは、下着も古き良き和装ブラと呼ばれるさらし。

これまたフェチズム心を刺激させられ、離れたところからバトルを観戦している名も無き少年達には、目の毒である!

FのおっぱいとFのおっぱいが、真の姿を夕日へ献げる! あの夕焼けもおっぱいに吸い込まれたがっている! 俺が落ちるのは水平線じゃねえ! 剛軟おっぱいとトロふわミルクブツセおっぱいの断裂間だ!! (て、言ってる気がした)

……………閑話休題

「全ての物質は『線』と『点』と『面』で構成され、立体になります。インフィスさんは非物質であるサイコキネシスも視えて、破壊出来ますが……潮流に抗わずに、当たってしまう……そう思った瞬間にだけ『視える』のでしよう……点を突けばどんな攻撃だって回避、または破壊は可能です……つばめがえしでも……彼女ならば無傷でやり過ごしてしまう……そうですよ？ ネリさん……？」

必中技のつばめがえしでも、躲してしま……？

本当であるならば理論上、死線に踏み込み点をドツかれたら、あらゆる攻撃をノーダメージにする事が出来てしまえる。

「ん、ニヤツ!? そ、そーいう事になっちゃうニヤあ……ネリちゃんも最初に聞いたときは『んなバグみたいな事できっこねーニヤ』」

って信じてなかったんニヤけど……マニユハハツ……この眼で見ちまったからニヤあ……ストライクのつばめがえしを避けたニヤ……」

（えっ……マジバナ？ そんな凄いな……一本取れただけ上出来じゃん、私……？）

誰にだって負けてやるつもりはない、例え負けたとしたって執念深いネリは、必ずリベンジを成し遂げる。

(最後に笑うのはネリちゃんニヤし！)

……………そのネリが唯一負けっぱで、勝てなくたってしゃーないと白旗振ってるのがししょーだ。

お手玉の原理もネリの身体(面)を構成し、最も面を重ねている点を、寸分の狂い無くジャストミートさせ続けていたからだ。

筋肉に頼らず、養われた平衡感覚の脚腰メインに、最小限の入力でホイツ、セイツ、ハイツ……………流石に二時間は疲れたが、攻撃の高さⅡ力の強さでは無い、少なくともインフィスはそういうポケモンだ。

「お見事っ！ ギリギリまで引きつけてこそ、一番脆い点を見つけ、叩ける。第六感も働かせてこそ成せる流派だ。……………私の元主から教わり私が唯一の伝承者になってしまっただ……………な」

元主の顔が浮かんだからなのか、少しだけ追想した表情となったがすぐに、カラツと、揚げられた天ぶらがの様に洒脱の衣で包み覆う。

袖の中から拍手、やられるまでに絡繰りを暴かれたのは初めてだ。

ジックへとドヤった顔を送らせ、念話で褒めて貰ったヴィヴィは上機嫌。場の流れは少しだけヴィヴィに傾き始めたか？

「そうだな、胸を晒したのだっ、この際だから私が持っているアイテムも晒し出そう！」
「……………えっ？」

「警戒はしないでいいぞ、隠す必要性が無いと言うだけだ……ホラッ、これが私の持っているアイテムだ」

動揺を誘うつもりも、余裕をかますつもりもなく、彼女の持ち物は最初からバトル時には、何の効力も発揮されない品である。

これは何かの罠？

賢いヴィヴィは、インフィスの言葉に惑わされず反射的に、砂地を蹴って後方へと距離を開けた……のだが、長袖の内側から滑り落としたアイテムは——

(あまい……………ミツ……………？ 野生のポケモンを誘うアイテム……………ですが戦闘中は……………)

(そうッ！ 何の意味も無い!! 俺の推測だけど……多分当たっているけど……イン
フィスって食べるの好きじゃない? 非常食なんだと思うよ………食料がもうアレ
しか残ってないとか、そんなだろうね………)

あまいミツを所持しながら戦う……トレーナーが間違えて持たせた準備ミスとしか
思えないが、ジツクの推測は大当たりで、彼女が旅の途中で購入した携帯食!

カロリーが低く塗り薬としても使え、スプーン一杯で健康促進効果も得られてしまう
黄金の栄養糧。

「金銭も底を尽いてしまっていてな……早食いで資金を貰い腹も膨れるし一石二鳥だっ
たんだ!」

予めお腹を空かせて来たのではなく、偶然立ち寄った町で偶然早食い大会が開かれて
いたので、優勝しか頭に無かつたらしい……

(………マスターのポケモンだけあって、個性的なお方なんですな………)
(………ヴィヴィも数えられてるぞ………)

観戦している三匹はズッコける、何となく想像していたネリが一番リアクションデ
カかった。

実質的に彼女はアイテムなし、その情報を与えられ儲け物だが「馬鹿にされている」と、理性が薄くなり彼女へと掴みかかる勢いで、砂浜をダッシュ……他のポケモンであればそう解釈していたかもしれない。

「……………んっ」

直情的にならず、ヴィヴィは平静を保つ。精神面の裏張りはジツクが行う！

あれは本当に煽動させているつもりはないと「まさか……」と余計な思索を巡らせ様としていたヴィヴィの緊張を解す。

マスターの有り難みを感じる、気を取り直して手甲を構え直したヴィヴィへ――

「ならばッ、本気を出させて貰うぞ……いぎッ、推して参る！」

彼女が纏う闘気が変わった……！

技の点を的確に射貫く、そのギミックが解明されてしまった以上、本気でヴィヴィを倒しにいかねば負けるのは自分だ。

「ツッ!! てっぺき! あッ! う、くっッ……! ウッ! 攻撃……できな」

途方も無いセンス、可能性に満ち溢れ、恵まれた地力を最大限に発揮させてくれるト

レーナーのバックアップ。

強烈なエネルギーの発信源、それがヴィヴィ。

メタグロス種とは数回バトルした過去を持つが、彼女は自分と同じ《精強無比など通過点》という持論・信念を掲げているのだと、心証した。それは無意識なのかもしれないが……

「くー、ア、あう！ や……この……で……は……ッ！」

身体の表面を堅固な城壁に、付け入る隙の無い万全の備えとなり、物理防御力をぐんとアップさせる、てっぺき。

飛行機が激突したって傷を負わない装甲を持つメタグロス。

攻撃の後を追う種族値は防御。ただでさえブ厚い彼女がさらに防御力を高める必要があるのだろうか？

（ダメージは大幅に抑えられます……けど反撃出来ません……！ てっぺきを使わなければ取り返しの付かないダメージになっていました……）

ある、それが正に今、蹴りに、長い袖を利用した鞭のような手刀に、掌底……

リーチを視覚化するのならば、彼女が繰り出す薄紫色の扇形ゾーン内へは、何処へ逃げてでも乱舞がたたき込まれてしまう。

広いつ、飛び道具を使わずにサワムラーの様に腕や脚が伸びている訳じゃないに関わ

らず、近接格闘術のカテゴリを軽々横断され「射程距離∞」に置き換えられてしまっているのか!?

闘気が増し、柔らかい顔色が「真の強敵」にしか見せぬ意気軒昂な表情へ変化したインフィスは、3つ、4つの攻撃を1つに纏め上げた、眼にもとまらぬ職人芸の疾業。

(ヤベーニヤ! あの時連続攻撃に捕まったら誰も逃げられねーニヤ! PP切れを狙うのは得策とは言えニヤいし、ゴーストポケにでも交換しなきゃ無効化は出来ないかニヤ……)

攻め手を緩めぬ猛連撃。てつべきが間に合わなければ、こうかは いまひとつでもガリガリ削られていた。

ダメージ自体はかすり傷にもなっていない、問題なのは縄で括り付けられ緊縛されてしまったように、ヴィヴィが攻撃する権利を得られない事だ。

所持技で最も弱いのが、発動ラグもクールタイムも皆無なんなりきでさえ繰り出せない。

インフィス側の攻撃が止まない、攻撃に必要なとなるコストゲージが減っていないか瞬時に溜まってしまいか、ゲームに置き換えればそんな感じだ。

どれだけインフィスの攻撃を軽減させたとしても、1、1、1………涓涓塞がざれば終に江河となる。

手甲に擦れ火花散る、その舞踏は行雲流水なり。

美麗さを求めずとも美麗になってしまふ、無理に技を繋ぎ合わせるのではなく、自然の理に任せどの技と、どの技をジョイントさせているのかも本人以外には見当も付かない。

(ヴィヴィにはこの苦境から抜け出す術……あるけど……今使うわけには……)

ヴィヴィもソレは心得ている。

まもる を使つてしまえば、インフィスの疾風の技は中断され自分は体勢を整えることは出来る。二度目の仕切り直しへ持ち込める……のだが、安易にまもるを使えない理由がある。

インフィス最大、最強の技に備えて温存する必要があるからだ。

しかし……それにしても……やはりっ

(おっぱい相撲……！ あの服の下の動きはこうなっていたのか……！ くっ、視たら(視姦)ダメなのに視てしまう……！ これはセクハラじゃない、見えちゃったんだから仕方ない！ 攻めのFと守りのF……甲乙付け難し！)

何だかここ最近、ヴィヴィと仲良しになつてから、彼女に関する事柄では自分からセクハラ（と思われてしまう行為）してしまつている……

至近距離で攻撃し続けるインフィスの F が、衝撃を受け流そうと自ら死線へと潜り込み、最小限に抑えているヴィヴィの F へお乗りになつとるがなッ!?

さらしおっぱいと、水着おっぱい、和菓子と洋菓子、生ものだから早めに召し上がりたいトコだが、それをやつちやくゝめのまえが まつくらになる。

激闘の最中なので、おっぱいがおしくら饅頭してようが二匹は気にも留めないが、二匹のマスターとして、男としては勝手にロックオンされちゃうもの。

（いやいやっ！ これでヴィヴィが負けたら洒落にならないって！ 『おっぱいに気を取られて指示を忘れた』とか、チーズドッグ999個買つても許して貰えないって！）
他の三匹もおっぱいがどうかより、インフィスがこのまま決めてしまうのか、ヴィヴィは打開できるのか、当たり前だがソチラの方面へ全神経を集中させている。

かたくりこは分からないけど……

∞っぽいとヴィヴィっぽい、愛欲を助長する格好となった二匹への、煩惱根源を打ち払い恢復……ヴィヴィを勝たせてあげたい！ 勝たせてあげるのが自分の役割だ！

「——っ、麻……痺が……は、っ、けい、の、効、果……が！」

頭に張り手を食らった時と同じだ、気押し込まれるので外装へは乏しくても、内へは確実に注力されていた。

危惧していたが……解決方法をジックもヴィヴィも思いつかず、攻撃を止められず防戦一方、追加効果の麻痺が発症してしまった。

インフィスにしか捉える事の出来ない、ヴィヴィの点を狙われた。

接触面から内部組織を操作、一時的な拘縮へと導かれるその点を突けば、必ず麻痺にさせる事が出来るらしい。

つまり、今まで麻痺になってしまふ点を隠し、遮り、防ぎ込んでいたヴィヴィの行動予測能力と、防衛力も尋常ならざる所業。……これもジックが居なければ行えない、一匹で戦っていたらインフィスが本気になる事も叶わなかったのだから。

(だが逆にチャンスでもあるぞヴィヴィ！)

(あ……ハ、っ……イ……逆転……の、可……能、性……は……あ、ま……す……っ！)

バトル終了まで神経障害は完治しない。

素早さも激減したので、防御も回避も困難、反回神経にも異常を来たし、喘鳴や緊張が融合した、身体の芯まで飛び込む静かに澄み切つてずっと聞いていたい幼声も、バトル終了まではお預けだ。

ヴィヴィがまもるを覚えている件を、インフィスは知らない！

最大の危機こそ最大の好転！ 狙っていた麻痺が付与したので、ヴィヴィを解放……にしては掌底で打ち上げるように、手荒くド突いて技が実行出来るだけの距離を十分に取った。

ヒュツ……ヒュツ……

重力を感じさせないつま先立ちから一変。ズシツ……！ズシツ……！
ゆっくりと、腰下へ気を纏わせながら砂を苛烈に踏みしめ、小さな流砂穴を開かせる。脚を付ける度に、プレス機のような重厚な音が響く。

とどめの いちげきは ゆっくり ちからを ためて はなつ

力の凝縮で全身が振るえ、奮い立たせながら助走――

「ヴィヴィー！ まもるだつ！」

このタイミング！ 麻痺してしまったがタフなヴィヴィーを打ち破るには、やはりその技でキメに入ったか！

相手の着地の瞬間を狙い助走、凝縮した力を膝のみに集中させた弩強無双な“とびひざげり”

（――して来なかった!? うわ！ あああッ、くっつ!! ごめんヴィヴィー！ 俺の読みミスだッやっちゃった……………!!）

……の弱点は、ハイリスクハイリターン過ぎる事。

攻撃が外れてしまえば、とびひざげりを繰り出した本人の最大HPが半分も減ってしまふ、敗北直行なりリスクを背負っている。

交代戦であればタイミング良く、ゴーストポケモンへ交代や、ジツクが指示した攻撃を一度だけ無効化するまもるが、対策として非常に有効だ。

とびひざげりを繰り出してしまえば、技を使っている本人でも止まる事は出来ない。

半減でも強引に一撃必殺出来るだけの怪物級威力、しかしやり過ぎしてしまえば自爆してくれる諸刃の剣。

あの時発掘した技が、そのままインフィス対策となりヴィヴィ専用演出である、抽象的なデジタルツリーを巡らせた蒼いシールドで……………!?

読まれた読んでいた

とびひざげりは不発、インフィスがジャンプ——直前で取り止めたのだ。

貯めに貯めた気は散乱したが、すり替える様に行われた、つるぎのまい。

自らの力を誇示し相手を威嚇させる用途としても使われるが、戦闘意欲を活性化させるセルフ激励、物理攻撃力をぐくんと上げるのが本来の使い方。

(踊り子ニヤからねししよは……)

ビキニへ蓑虫が潜り込んでも気がつかない、二匹の戦闘を黙って見守るネリの推測は当たりだ。

インフィスの覚えている技は全て把握しているも、つるぎのまいを新しく覚えているとは……最高のタイミングをズラされ、暫くまもるは使えない。

元おやに覚えさせて貰ったつるぎのまい。

一度忘れたが踊り子として働く内に思い出した。

おやの影響化にあるポケモンは、わざマシンを使わずとも、このような現象が稀に起こる。『取り戻したい』本人の意識と、相応しいであろうその技の記憶が呼び戻せる環境が必要となるが。

一人旅をしたって何時でも呼び出せる、彼女はジツクの手持ち。

知らぬ間につるぎのまいを蘇らせていた……!

「……これで心置きなく、とびひざげりが使えるようになったな」

(自分のポケモンに戦略を読まれるとはくく!! トレーナーが居なくても強い子だけどツ…… ツ!)

Segment・penta——捲土重来

(マッ……スター……！ 大……丈……夫で、す……！ ま……だ、負、け、て、し、まっ……訳で、あり……ま、せ、ん、か……ら……っ……！ 耐、て、み、せ……すの……で……！)

ジツクよりもインフィスの読み、戦いにおける「勘」が上回っていた。

予めつるぎのまいを取り戻していたと発覚していれば、ジツクも戦略を改めていただけど「互いの技は教えない」平等ルールを、逆利用された。

完全に……！ 俺のミスッ！

念話で心からお詫びをする、だがヴィヴィは怒る事も呆れる事もせず、彼をフオーローする様な声かけで気丈させてくれた！

麻痺する声帯で苦しいのに……鼻先がツンとして、前頭前野が働きかける。ソレを、寸での崖つぶちで引つ込ませた。

こんな状況なのに嬉しすぎて……理性を貫通して何年かぶりにキテしまいそうに

なつたじゃないか……ヴィヴィのおやになれて、本当に良かった。

当初の手順としては、まもるでとびぎげりを無効化、膝折り自爆ダメージを負い身動きの鈍くなったインフィスヘサイコキネシス！

この手順で進められることが出来ていれば、間違いなく勝てた。

たつた一手で、あまりに大きく戦略を崩されてしまった！　これがポケモンバトル

！

てつべきで二段階上昇した防御、つるぎのまいで二段階上昇した攻撃。

打ち消された、上昇分がコレでチャラ、素のままの威力をそのまま、蒼鋼少女へ凝縮したあらん限りのパワー！　ブレーキをぶつ壊した新幹線の速度でぶつ込ます！

「つ……！　とび……！　ひぎッげりー！」

「んんうう、ツ、ツツ!!　………つ、あ　ああッ、!!」

手甲を交差させ、辛うじて防御態勢を取ることが出来た。

膝が命中しワンテンポ遅れてから、浜辺一帯を吹き飛ばす破滅的な衝撃が巻き起こる。

とびぎげりは発動までの準備動作が長い、外れてしまえば使用者が大ダメージ。

その見返りがこの威力……！ どれだけデメリットを備えていようが、相手を一撃で倒す圧倒的な破壊力の前では！ 問題にならないのだ！

病み付きになって指示をしまっ！ とびひざげりで締めくくる作戦しか考えられなくなってしまう！

高純度かつ高密度になる気を、一点に集中させられた蒼い手甲は——

——ピシッ ——ピシッ ——ピシッ

「ヒビがつ……!?!」

メタグロス専用装備品にして、現代の科学力では量産不可能な、多次元からの物質ともされている蒼い手甲。

その物の戦闘力や意思に応じて、さらなる硬度を得る……が、ザムヤードとの戦いで全身火あぶりにされても、二つの手甲だけは溶けず、壊れず、一度たりとも傷を負わなかった手甲に亀裂を入れられた！

インフィスのチャージ時間も、ジックが知るとびひざげりよりも長かった。

恐らく、今まで耐えられていたポケモンですら、倒せてしまうだけの気を集結させていたのだ……すてみの特性も上乘せされ、通常のコジョンドとは比較にならない、鋼で

も半減できぬ大爆発級のダメージをヴィヴィは食らわされた。

「……………！ この技を食らってまだ瀕死にならないとは……………」

(損、傷、率……………89%……………危、険……………すつ……………つ……………！)

耐えたッ!?

当事者のヴィヴィでさえ「ああ、負けた」と半分諦めていた。

彼を勇気づけたけど、残りHPでとびひざげりを耐えきるのは……………無理だと、麻痺をしても演算処理は精妙、迅速、こちらこそ申し訳ないが、100%の確立でダウンする……………

良い意味のタイピングエラー、エラーで良かった……………!

ヴィヴィだつて処理ミスをする？ それとも……………?

これも彼と一緒に戦っているから……………そう思い込むようにしたっ!

「凄いな……………っ！ 主のポケモンになって良かったな……………ヴィヴィよー」

過去のメタグロス破って来たすてみ十とびひざげり。

衝撃波が海へ渡り、モーゼの如く真つ二つにしただけの最大技、インフィスとしても初めて耐えられてしまい少なからず焦燥が走ったが、持ち直し改めてヴィヴィを褒め称えた。

筋線錐が破裂しそう……………本当は瀕死になっているけど、根性で立ち尽くしているだけなのかもしれない……………

ミミズ腫れの様な亀裂の生じた手甲の影響で、ヴィヴィはクリアボディであるが攻撃力の低下を確認。

さらに防御はした物の、強制的に後退され半身が砂に沈んでしまった……………！

サイコキネシスは使えるけど、体力が殆ど削られていないインフィスは、余裕で弾き壊してくれるだろう！

（もう一度まもるを使うかつ!? あまりにもハイリスクだが、それくらいしないと彼女には勝てない！ それとも……………ヴィヴィー！ やれそうかつ!?）

防衛エネルギーが拒否反応を起こし、連続使用は大幅に成功率が下がってしまうまもる。

インフィスは再びゆっくりと……………その一步一步が敗北までのカウントを削り、歩いて

いるだけなのに練り上げた気に触れば、戦意を失うかバタバタと気絶するか、避け様のないリーチの中心部で埋もれた少女目掛けて――

「次こそ決めるっ！ とび……ひざげりッッ。!!」

(……や、り、ま、す、ッ、！)

ネリが思わず「まもるを使うニヤ！」と、片側だけが有利になる助言を、リーチに飛び込んでしまう勢いで走り、居ても立ってもいられず、声にしてしまった。

爽羽佳とメコンも、技を出すとすればまもる以外に考えられず、どちらも仲間なのにヴィヴィに負けて欲しくないと、この瞬間だけはヴィヴィだけを鼻肩してしまっていた。

「受け止めたッ……のかっ！」

「欠損した手甲へサイコキネシスを使った！ 攻撃の為じゃないがインフィス、膝を捕まれたから逃げられないぞ！」

「な、ア、!!」

相手に放つのでは無く、自分の両腕並びに駆動系へサイコパワーを流し込み、纏わせ、

防御術として活用。

一点へ 超気 を集中させる手段は、インフィスの対策として彼女が手持ちから離れている時に、考えついた物。

“もしエスパータイプの子が仲間になったら、この方法が使えるかもしれない”

当時は「機会があつたらイイなあ」程度だったが、鋼だけでなく超も複合したメタグロス、ヴィヴィが仲間となつてくれたから実現！

軌道を逸らす事はほぼ不可能、じゃあぶつかつた事を前提として彼女が 気 を一点へ集中させたり、たった一つ効果的な点を突く攻撃が得意なら、猿真似かもしれないけど実践に移す価値はありそうだと。

全神経が注がれた膝、これこそ彼女が言う 点 だろう。

一番力が入っているが、一番脆くなっている秘孔。弱点を晒すので確かに諸刃の剣！
「逃、が……し、ま、せ、……！ ガツ リ、ツ、！」

着眼点は良かったが、とびひざげりの威力をゼロにするのは……出来なかった。

補強されたアクチエーターがあれば許容量を超え、内側へとダメージが眼に見えぬ波形となり、倒れ込むまで5秒と持たな——

「し、ね、ん！ の！ ず……っ、きい、ッ！」

5秒在れば十分……！

近未来的イメージかつ、人智を超えたエスパーとしては、あまりにもプリミティブで無骨な攻撃方法、頭突き。

スタイリッシュなエスパー達は、卑俗的な不良を思わせるこの技を嫌う。

物理方面に優れたエスパー（チャーレムやエルレイドなど）でも、可能な限りサイコカッターを使用させて欲しいと、エスパーとしての本能でトレーナーへ訴える場面は珍しくない。

ヴィヴィは最初からこの技を覚えていたのだが、鉄拳やビームがメイン武器なのでわざわざ頭突きをする必要が無い。

隠し持っていた訳じゃないが、今まで披露していなかったもので皆はビックリ！

本当の意味での肉弾戦、初期よりもずっと脳筋、思念の力と共にこを、おでこへ直撃させた！ ゴツツンコッ！

「づ　　!?　　ッ　　ッ　　ー!?」

ひび割れて攻撃が低下した分を、昼間に貰ったヌメヌメ……じゃなくて、エスパー ジュエルを噛み砕く事で得た上昇値が、本来の性能を取り戻させる。

「ここでっ！ ジュエルを使うか!？」

歯で砕くなんて無茶苦茶な、HPが先になくなったのはヴィヴィであるが、打撃を伴う間違ったエスパーの使い方による、予想外の頭突きによつて……

「———や、あ……ン　　ッ……」

両者 // 同時にダウン //

「やりま……した……ア……」

「なん……と……引き分けに……持ち込む……とは……っ！」

ヴィヴィがインフィスの身体を引き寄せた瞬間《まさかキスでもするのか》そつち方

面で眼を瞑ってしまったメコンは、共倒れた二匹へ駆け寄り安否を確かめる。

「私はえつと、ほ、他の皆さんは……？」

「これは……引き分けっしょ……？ 私の意見は……？」

「ネリちゃんもドロローでいいと思う……ニヤ」

「……………ZZZZ」

ビキニの中でDを枕にして横になろうとしている、かたくりこは兎も角として、マスタ―であるジツクもヴィヴィが「みちづれ」を使ったとしか思えない、同時戦闘不能。

これは政府公認のバトルでは無いが、先に瀕死になっても完全に倒れ込んで、戦闘意欲が消滅したと確認されなければ瀕死扱いにならない。

この場合、先にHPがゼロになったのはヴィヴィ、しかし、倒れ間際のジュエルずつきでインフィスのHPを奪い去り、フィールドである砂浜へうつ伏せになったタイミングは、恐らく誰の視点からでも二匹同時であった。

インフィスだけを倒すのは無理だ、でも相打ちにする方法……

本当は勝たせてあげたかった。

レベルと場数経験の差もあったけど、15%と彼を信じてヴィヴィは立ち向かって

行つたから。

読みミスによつて、勝利と言う文字が消えた……でも敗北はさせたくない!

彼が批難覚悟で提案したのがドロ、麻痺になつて手甲にヒビが入つた現状では、そうさせるので精一杯であると。

(ヴィヴィ……ごめんね! 負けもしないけど勝つたとも言えない結果で……! 俺のせいだ!)

(……わたし、は……勝率15%の熟練武闘家相手に……ドロになつただけ、凄くと思つてます……まもるを誤爆させてしまつて、勝率は0まで下がりました……が、負けはしませんでしたよ……? 0を覆せたんです……あまり悲観しないで……わたし頑張り……無駄になります……)

麻痺が治つたのは、戦闘不能になつた証でもある……

またヴィヴィに励まされてしまった。

残された札で最善手を考えたが、結局ドロは黒星も白星も付けられない。無星だ。

タラレバは何個もある、あそこであすりや良かったなあ……バトルだけでなく、人生全てに置き換えられるが。

……彼女はミスを咎めず許してくれた、ミスったのならそこから取り戻そうと、ヴィヴィが知る中で初めて落ち込みそうになっていた、彼を『そんなマスター見たくない』と、頬を紅くさせながらフォローしていた。

それは念話をしている、分からない程度の紅さであったが……夕日が邪魔をしてくれた。

「……………！ 頑張ってくれてありがとうヴィヴィ！」

「……………ふっ……………♪ マスターでも……………落ち込むですねっ……………」

非売品である、ゴールドカラーの小屋型十二面体、げんきのかたまりを二匹へ使用。枯渴した活力が忽然と復活……………！

手を使わず脚腰だけで起き上がるインフィス、衣装には大分砂が付着したが、胸部と額を除いて損傷はない。

「んっ……………よいしょっ……………」

微弱にサイコパワーを使ったのか、うつ伏せ体勢のまま数cm浮かび上がったヴィヴィは、ちよつと怖いけど夏の日差しでふんわり焼き上がった、ミルクブツセは水着に収まったままで、良かった良かった。

「ありがとう……………ヴィヴィ。私は戦う事が純粹に好きだ、勝ち負けよりも相手の信念に応え、自らの力を試す……………それに拘っていたのだがな……………引き分けに持ち込まれて本能

なのか……『次は勝ちたい』と五月蠅く吠えているよ、もう一人の私が！　ククツ……！」

長袖から手首までを出し、手ぬぐいで一拭きした後には、握手を求めて胸前へ右手を差し出す。

血肉の細部まで仕上がっているも、成長の余地はいくらだつてある。

もういい、と思つてしまえばそこで終了、己を研磨する理由は、勝利の美酒で酔うに非ず。

一瞬を共有する「友」との立ち会いを望み、心行くまで愉しむ、武術道を突き進めし躰が疼き啼く、曙光を彷彿とさせる視線が闘争を望めば、幸福に包まれながら友の壁となる。

極めるよりも、終わらない旅がしたい。

「(こ)ち(ら)ん(こ)そ……ありがとう(ご)ざ(い)ました……！　大きくて広い壁……です……簡単に乗り越えられません……でしたが、全力を出して何の心配も要らない相手……ポケモンの本能ではありません、マスターを得て……芽生えたわたしの意思です！　貴女と出逢えたから……わたしはもっと強くなる事が出来るんです……」

ヒビ割れた手甲だけは、ポケモンセンターのお世話にならなければ。ヒビを入れたインフィスも凄いいけど、一瞬で復元させるポケセンは……何も言うまい。

バトルが終われば握手、それはトレーナーもポケモンも変わりない。

ヴィヴィの頭がどれだけ良くても、予想外の連発、だから楽しいんだ、バトルも、余生を算出不可能な命ある期間も。

勝つ事だけしか考えていなかったヴィヴィが、結果に至るまでの内容を大事にする様になれた！

もし負けてしまっても、そこに至る道筋に胸に響いたり印象に残る出来事があれば、メモリに保存し何度も見返すだろう！………少しは悔しがると思うけど。

沈み行く夕焼けをバックに握手……スポ根！ 青春！ 漢らしい！

影絵になっても胸部曲線だけで、漢じゃないって一目瞭然だけど！

……さて、戦いは終わった、鬪争の残り香も無し。

「……皆で遊びませんか？ 夜まで少々お時間ありますので……」

ヴィヴィがこの様な提案をしてくるとはっ！

水着だから勿体ない、そう思っただけでそつぽ向く。

断じて念話をアクセスしつぱなしで

——引き分けたので、チーズドッグは半分でいいです……捨てるなど愚かな真似は致しません、マスターが貰ってください……——

つて、はんぶんこ☆ する様に上手いこと誘導出来たから、ちよつと高揚しちゃつて
いる訳ではありません。

「やりましようやりましよう〜！」

メコンと爽羽佳はなんと！ 衣服を脱ぎ捨て水着となった！

最初からこうなると予測していたのか？ おっぱいは多ければ多いほど素敵な海

華となる！

ネリは「小学生の水泳かニヤ？」と、吹き出しながら普段着のまま（水着とあんま変わりないけど）、何時までも寝こけてるかたくりこをおっぱいから取り出し、ボール代わりにポーンッ！ 夕焼け空に黒点が一つ〜！

「ミノア！ ハアア〜ン！」

♂のミノムツチが喘いでも、ぜんっ、ぜん需要はナシ。

ジツク、ヴィヴィ、メコンとインフィス、ネリ、爽羽佳でチームを組んで夜になるまでビーチバレーは止まらない！

かたくりこの、誰得艶声が左右を往復、何故メコンどころかジツクも違和感を抱いてないのか、月は人を狂わせてしまうが、日没寸前の海辺の太陽にも同じ効果があるのかもしれない……限定的過ぎる。

「あんっ……………また……………」

「ミノオオ……………ツ♪」

知ってた、約束されたHカップ。

ネリが（絶対わざと）メコンのホルターネックへとシューツ！

すっぽり、ズツポリ、沈没してしまったかたくりこは、どうやっても取り出せなかったので、しくしく顔のメコンがバブルこうせんを集束させ、泡のビーチボールを作り再開！

そして、健全すぎるマスター・ジツク。

——嗚呼、ビーチボールが2、4、6、8、10……そんなつ、トスなんて、とんでもない——

美少女ポケモン五匹——しかも三匹は水着——に囲まれていたら、去勢でもされてない限り、コレが当たり前の反応なのである。

最後にもう一度言っておこうか

夏、たとえば、おっぱいである……！



嘘つきました、まだ続きます。

ホテルにチェックイン、皆でバイキングをいただきますし、備え付けなのに大浴場かっつてくらい広々しい、浴槽で汗と砂と潮の香りを流せば、お疲れの皆は22時には消灯、就眠………

ホテルの四階「442」がジツクとかたくりこ、メンズの部屋。同じく四階の「443」がレディース四匹の部屋。

壁越しに耳を凝らしても、枕を投げる音も乳を揉みしだく効果音も聞こえない、本当に寝入っているのだろう、今日だけで三日分の運動量となった気がするし。

インフィスはカイナで寝泊まりする予定は無かったが、折角ジツクや皆と再会出来たので、明日の朝までカイナホテルで過ごすことになった。

急な予約だったので、一階の「118」号室になってしまったが。

積もる話はあるど皆も自分も、体力は限界だ。

もう少しホウエン地方の名物料理……じゃなくて、ツワモノとの戦いの場を探し、流離いの旅に出かけるのだとか。

「あ、主……眠いだろうに呼び出してすまない……按摩を……お願いしたいのだが……」（分かってたよ、インフィスと再会した時点でこうなるの……でもさあ）

さらしほどくのつてアリ？

バイキングの時、皆がデザートを取りに行っている間に、インフィスは密かに耳打ちをジツクへしていた。他の皆は余り見れないレアな彼女……羞恥を前面に押し、凜々し

い短眉を8時20分にし、癖のある横ハネを下落させながら。

「さらしがあると邪魔になるだろう……」

「……………前は解かなかった気がするんだけど……………」

「……………前は前、今は今だ……………主から按摩を施されなければ、旅立てん……………主(の技術)をこの背に刻んで欲しい……………思い出をもう一つ……………たのむっ……………」

ぶかぶか袖の内側で、肩をちよいちよい叩いたり、二の腕を引つ張りながら頼み込んでくるのは……………ズルい！

大人の女性は「男が断れないやり方」を良くご存じで。

ベッドにうつ伏せとなった彼女は、膨らみを抑えて、主に中心の突起物を隠す白布を解いており、早い話上半身裸、トップレス。

背を向けているので幸い、大事な部分は見えてないが……………あまりにもエッチすぎるでしょう？

ていうか、寝そべって潰れたFの実がこつからでも！ムニユぱいは完全に圧迫されているのではなく、ある程度シートに反発しまるでおっぱいが、シートとの隙間を形成している様である！
胸筋を鍛えているので、横へハミ出るのも最小限に留まってい

る……か。

「ヒヤんツ!? あああ……この感覚、最初だけはどうにも慣れんな……ア、ツ！ アア……♪ 段々……気持ち良く……んっ！ んっ……う……んっ……♪」

香り立つアロマオイルを、メコン達よりも筋肉質、だが硬さは男性よりも控えめで、女性特有のフェルトの様な肌触りで、みずみずしさはメコン達にも負けていない背中へ、たっくぷり馴染ませる。

掌で温めたが、人の肌へ渡ればビクリツと背筋を硬直させる冷たさ、この瞬間だけではどうも彼女は苦手らしい。気持ちは分かる。

ここからは見えないが——腹筋も女生としては割れている方だが、ガチムチマッスルに6つも8つも、腹直筋の段差が激しくは無い。

ジツクよりさらに効率的に身体を絞り上げ、必要とされる分量のみ各部位へ振り分けている。彼女の武術は力に頼らずなので……

「んっ、う……は、あ、ア……ろ、老廃物が……っ、取り除かれていく……静脈されて……がア……ひやつ、ふっ、くっ……くう……イ、きもち、イイ……ぞ……主……」

声が、抑えられんんっ！ はっ、はあ……はあああ……っ♪」

掌に軽く圧を掛け、皮膚へ滑らせる。

左右の手を順番にひねって、肩をしつかり掴んで揉みほぐす、今度は指先で強めの圧を背筋を傷つけない様注意しながら、背中のツボを刺激……

女性が好むアロママッサージと古典的な按摩、組み合わせたのがジツク流の療法。

ちゃんと政府認定の国家資格を取得しているので、その気さえあればマッサージ指圧師として、お店に就職も出来る。

「はアアん……んやゝ！ ああつ、くつ、う……♪」

「わざとやってない？ ねえ……？」

「なあ、なにが……だッ、くくんッ！ ふーふー……しよ、そこっ！ い、い……っくく♪」

……なんか『後ろからエッチな事してる様にしか見えない』

予め申し上げておきますが、彼が資格を取って手持ちにマツサージする理由は、ポケセンでも癒やせない心的な疲れを癒やしたり、コミュニケーションのキツカケとしたり、マスターであるには当然だと、劳いや思いやりの率直かつ清しい心を持つからだ。

断じて『エッチな声聞きたい』とか『身体を触れるから』とか、猥り不純物思考は持ち合わせていない！ いないったらいないのっ!!



翌朝、インフィスが旅立つよりも、ジツクが起床するよりも前に、インターホンを連打された。

流石のジツクも寝起きと言う事もあり、不機嫌な表情でチェーンロックを外したら――

「インフィスさんのお部屋から、妖し気な声が聞こえて来たのですが……マスター？ インフィスさんと二人きりで、ナニかヤッていた……のでしょうか？」

何故!? 寝ていたハズのヴィヴィが四階と一階、一番右端と一番左端、真逆に位置している部屋の状況を知っている!?

「……………ふんっ、やはりマスターはエッチですね……………わたしには関係のない話ですけどっ、ふんっ!」

荒ぶるツインテール、ドアに鉄拳を繰り出され閉じられた衝撃で、ジツクは部屋の壁まで吹っ飛んだ……………マジコワイ……………

ヴィヴィの機嫌を取るために、今日の海水浴では昨日よりも多めに、ヴィヴィと遊ぶ事になった。

プリンフェイスはずっと変わらなかつたけど、彼から贈られた帽子で口元まで隠しながら、深紅の瞳を欣喜させていたのはちゃんと……………見られていた。

ヴィヴィと海にも夕日にも沈まない、楽しい夏の思い出を作った! なつき度が上がった!

Segment・hexa——再戦

まだまだ夏は終わらない！

冷却効果を目的としたグッズの稼働時間は、ピーク時と同一である九月の一日。酷暑であった八月よりかは、多少緩和されているけど使わずにはいられない。

トレーナー諸君は自身の体調管理は勿論の事、手持ち一匹一匹に対して最適な生活環境を整え、提案し、気を遣うのが おや としての責任意識。

正式に免許を受理され政府の、管理データベースに登録されたトレーナーの下には、告知無しの抜き打ち監査が不定期に実施されている。

その辺を歩いていたらおっさんが、実は統括政府機関に属する者だった！

その辺を飛んでいたペラップが、実は政府が所有している手持ちであった！

トレーナーとして、手持ちに対する配慮が不足しているなど、能力に疑問を持たれてしまった者へは警告文として改善を要求する電子メールが送られてしまう。

まあ、トレーナーとして普通に暮らし、普通に接していれば抜き打ち監査され様と、恐れる必要性は無いのであるが……恐れている者は即ち、自分でも問題点があると意識し

ているからだろう。

(……………マスター、次の指示をお願いします……………)

(ジツクさん、どうぞご指示を！)

ラムネ色の空が広がる14時過ぎ、このログハウスに住まうポケモン達のおやは、監査員も敬服に値し『キミの様なトレーナーばかりだとしたら、ポケモンを道具扱いする者や密売する者など生まれないのに』と、優れたトレーナーの在るべき姿として、政府のホームページに名あり＋写真付きで記載された経験を持つジツク。

競技トラックを模した裏庭、スクエア型で縦&横50メートルのスペースの中心地点で、顔を向き合わせているのは青と蒼。

(メコンは……………ヴィヴィ、キミは……………)

優良トレーナーの手持ちになれた彼女達二匹、ランターンのメコンとメタグロスのヴィヴィは、とつても幸せなポケモンだ。

メコンの場合は命の恩人でもあるジツクへと、年頃の少女らしい照れと恥じらいを忘れず、発光器官をぼわぼわ点火させながら身を振らせ、慕う気持ちを心の底から嘘偽り

無く、言葉でも身体でも伝える事が出来る。

………変な意味合いは含まれず、マスターと手持ちのスキンシップ、抱きしめたり手を握ったりとか、その範囲内に収められる行動なので、R18な成人向け表記はされません。その様な描写も彼らはしておりません、本当です。

ヴィヴィの場合は民宿跡地の地下、謎の電脳空間の揺り籠で眠り続けていたけど、この世界に生まれたばかりで『レベル1』のメタグロスだった。

彼に救出され、心も表情も感情も知らずニツクネームも無かった彼女は、フエンタウソンの一件から心を、表情を、感情を、《自己を確立した個体：ヴィヴィ》として呼称、トレーナーと共に生きることが自分の意思で決めたのだ。

非常に気難しい猫、論理で全てを片付けようとしていたけれど、ヴィヴィの名を授かった今は他メンバー達との交流を深めたり、一見すれば意味の無い非論理的な行為だとしても、様々な物事に触れてみようかなと言う、感受性……他者を受け入れ興味を示す気持ちだが、もの凄く不器用ながらも少しずつ磨かれてきているのだ。

「了解ですつ……」

だからジツクが事あるごとに——殆どヴィヴィの言いがかりだったり誤解——で

「エッチです」だの「その技を指示するのは胸を揺らす目的でしょうか？」だの「またわたしの下着を……」だの、ジックがロズレイドの毒棘鞭で毎晩身体をビシバシされるのが好きな、マゾマスターであるならばご褒美な台詞集とジト目集。

私のマスターとして相応しい振る舞いを……ジエツト推進能力のキーになったところ、ひどい後、パンチラされてしまったヴィヴィは苦言を吐くも、彼だけに責任がある状況でも無かった。

見られたくないのなら、もつと長いスカートを穿くなり、ジーンズに変更するなり別案はいくらだってある。

それをしないと覚悟があるとして解釈されてしまう物、バトル後にじり寄って「見えないところに移動するべき、やはりマスターはエッチ」と、連続攻撃でジックのHPを削られるのはテンプレとなったやり取り。

ちなみに……SMPプレイは合意なら監査外となる……

それは理知的で鋭い頭脳を持つけど、不器用なヴィヴィ流の触れ合いチャンスであった。

こうすればもつと彼と会話できる、大きくても小さくてもいいから彼の情報を得られ

る。

そこからまた話題が広がって……大好物でお店側に枕を向けられない、チーズドッグが意思疎通を伝達されるアイテムになっている。

そう、ヴィヴィは決して一人ではチーズドッグを購入しようとしなない。

マスターであるジックが“一緒にいなければ”違和感のある味になってしまうとは本人談。

どういった理屈か、解析は後回しにしてさつきとジックを引つ張りながら、もう一個ずつ買って貰い、舌で堪能したソレは何時も以上の美味であった。

「マスターは……チーズドッグに味を与えている精霊なのですか？」

「ふっーの人間だよッ!」

表情筋の可動域は最小限にも、冗談が発せる様になったヴィヴィ。ユーモアな一面も生まれてジックは嬉しい、ヴィヴィも彼と長く話せる機会が設けられる。

……チーズドッグ大明神様が、二人の結びつきを強めてくれている。

ジック側からしてもピスタチオチョコとフルーツカスタード、どっちを選ぶかで20分間、悩み続ける彼女の珍しい表情を見れたのは収穫だ。

独断では遂に決められず、マスターに選択権を任せたヴィヴィ。すると彼は予め決めていたのでスマートに両方のフレーバーを購入し、すっかり常連として覚えられた店主

さんには半分にかットして貰った。

気になる味を半分ずつ、気になる彼が手渡ししてくれて、もつと早く助言してくれて良かったのに……照れ隠しの為に問いをした。

「無駄な時間にならないよ、悩むヴィヴィとか焼かれていくチーズドッグを見てたり、他の人のに移りしてたり、色々なヴィヴィを短時間で知れたからね！」

「……………わたしが悩んでいる姿を見て、マスターは精神高揚していたと……………なんてサデイスティックな嗜好を……………エッチですね……………」

まあ、こうなってしまうのは読めていた……………彼女との意思疎通を試みて諦めず、距離を縮めたい男の奮闘記。

ツインテールをカーブさせ口元を隠しながらも、異なるフレーバーが同時に食べられた嬉しさからなのか、彼と二人きりの時間を過ごす計画が成功し愉快なのか、首まで眼の輝きと同じ深紅になっていた。

「じ——」

「とびはねるだメコン！」

彼女たちの日常と語る内に、少々脱線気味となったがメコンとヴィヴィはバトル中。

メコンの右耳には、手持ちとの練習バトルを円滑にするアイテム、充電が切れても「光」に関連するポケモンの技に反応し、エネルギーチャージさせ再稼働する構造の、デ

ボンイヤホンが装着されているが、ヴィヴィは何も補助アイテムは付けていない。

ジツクがポケナビを拡張させ、音の壁を超える速度で指示を伝達可能となる、小型のキーボードをブラインドタッチ。

同時にエスパーだけの固有能力《念話》で、心をアクセスさせているヴィヴィへも指示。

二か月前と同じポケモン同士が、二か月後となった今、再び相見える！

「そおお、れえー！ー！」

ヒビが入っても砕かれはしない、蒼き鉄鋼で完全なる平地となって走りやすく、障害物も皆無な裏庭フィールドに激しく突き当てる。

極々僅かな表層プレートを内振動、意図的に歪ませることで活動させるじしんは、裏庭全域が攻撃範囲だ。

数少ない弱点が地面技のメコン、ヴィヴィの攻撃力で放たれば並大抵の地面弱点ポケモンは、ワンターンキル。

相手が地面技を所持しているならば、確実にメコンに対して撃ってくる。

対策としてジツクが提案し、彼女との修行で会得した技が、とびはねる。

覚えさせただけじゃ使いこなせない、技を繰り出される前に先読みして、指示を与えなければ上空へ逃げられず地表に吸い込まれる。

特に滞空時間を1秒でも延長させる修行は本当に……大変だった……おっぱいが弾みまくる的な意味で。

鉄鋼が地面とキスする数秒間の隙間、天の川ロングスカートの内側で膝を屈伸、ダンクシュートも余裕な跳躍力は、運動音痴だけどポケモンバトルでは遺憾なく発揮される。

ポケモンとしての本能が彼女にエネルギーを与え、戦うメイドさんと化したメコンは、じしんが意味を成さない上空へと逃げ——

「じゅうりよく……!」

「ふええッ?! ……ひゃああくあうッ! キャンッ! あっ、っ……新し
い……技、覚えさせて貰ったんですね……!」

感情が生まれた今、二ヶ月前を思い起こせば恥ずかしい……真に黒歴史だけど、あんな自分が居たから、こうして《ヴィヴィ》という独立個体になった訳で。優先的に思い出したくない場面だが、風化はさせずに心の美術館にでも飾って置こう。

強豪と名高いメタグロスでも、生まれたばかりなのでレベルが1。

ブレインコンピュータは演算処理ミス、能力が高くては活かす術を知らず、勝てる為の成分や成り立ちも持ちえなかったヴィヴィは、愚劣な結果と成形を晒してしまったけど……

（今ならっ……ビッグマウスとは言わせません、高種族故の自意識過剰でもありません、わたしはメコンさんに勝てる……！）

リベンジマッチ！

生まれたばかりだったヴィヴィが、著しい成長を成し遂げているのは存じた通り。

「わたしはマスターのポケモンとなりました……とびはねる対策の為、だけではありませんが……そうです、ねんりき以外にもいくつか新しい技……覚えました」

メコンだつてボツボツとしていただけじゃない、インフィスの次にレベルが高い最古参は、足りないものが多すぎたメタグロスの少女とのリベンジマッチを予測し、ご主人様と内緒の特訓（意味深ではない）を熱願し、本日が決戦日なのだ。

じしん回避の為のとびはねる、苦手な地面技を繰り出すポケモン対策として、他トレーナーが所持するランターンも近頃はジツクを真似て、とびはねるを覚えさせた報告

が多く、ホームページ上のメッセーボックスに送られていた。

覚えさせたからと確実に無効化できる訳ではないし、反応速度と相手の技が終了するまで空中で留まらなければならないので、効果時間が早く終了してしまえば、結果的に技撃ち損となってしまう。本来は使い勝手悪く、ランターンには適していない技な事実を念頭に入れておきながら、何年か修行を重ねないとメコンの様にはなれない。

だが、リスペクト元のメコンが、とびはねるを失敗……いや、強制キャンセルされてしまい、間延びした悲鳴の様な色っぽい声色のまま落下。

ヴィヴィが新規習得したじゅうりよく。

対価との交換で役立つ技をあっという間に教えてくれる、わざおしえナイスガイ達は、今日も（特にバトルジャンキーな方々）からお世話になっている。素朴な民家の玄関口から並ぶトレーナーの列は、まるでライモンシティの遊園地。

明朝から並び始め（注：アトラクションでも店でもなく普通の民家です）整理券を貰い、ピーク時は五時間もの大混雑の行列となってしまう、見かねた警察が出勤しハウエンテレビまで騒ぎを嗅ぎつけて来たから、もう大変！

報道されたら余計に人気になってしまいう訳で……重ねて言いますがバトル山の頂上

でもなければ、ポケモンリーグ決勝戦でもない普通の民家の周りです。

暫くの間、敵も味方も巻き込んで、多大な影響力となるフィールド操作技、じゅうりよく。

ヴィヴィに下した命令は『メコンの“アレ”を防いでみて』

具体的な詳細は伏せて、与えられた2〜3秒の狭間で答えを探し出して貰う。

並列頭脳はエラーしなければミスもしない、2から3秒で十分、じしんを放つが出力と効果範囲を限界まで削ぎ落とす代わりに、次の攻撃へと移るタイムラグを低減させた。

1000なら1000のパワーをぶつける戦い方しか知らなかった二ヶ月前、1000の内50や25など、状況に応じフレキシブルに調節出来る様になったヴィヴィは、直ぐさま地面へ打ち付けていた拳を、右手から左手へチェンジ。

ヴィヴィが操れる領域内の重力を強めれば、パワーウエイトを手首に巻かれたかの如く、へばり付く様な感覚を強いられたメコンは、効果が終了するまでとびはねるをさえなくなってしまうた。

チーム戦では……例えば爽羽佳の飛行能力まで抑圧し、低命中の技が命中しやすくなる領域になるので、ネリご自慢の回避性能をガタ落ちさせてしまったりと、運用が難しく軸にする為には、専用パーティの構築が推薦されている技。

「これでノーガードですよ……」

「良い技を教わったんですね……!」

「お陰様で……四時間も並んだ甲斐がありました……」

彼女の場合、幻のチーズドッグや伝説のチーズドッグを食べられるなら、一週間でも一ヶ月でも並んでそうだけど……ジツクと一緒に……

宙に浮いていられなくなるので、効果の無いポケモンにもじしんを命中させる事が出来るし、じゅうりよくとセットで新規修得した——も、通常時なら利用価値が悪い
 “ロマン技”だけど、セットで使う物だと割り切れば…………!」

「行きますっ……いわなだれ!」

メコンだけでなく、ヴィヴィも素の移動速度は重力場に立ち入っている影響で、低下している。

類を見ない小柄なメタグロス、殆どの能力値が高水準だが、素早さのみは平均を下回る、それが政府認定の『ポケモン解析新書』に掲載されているメタグロスのデータ。専門用語で《種族値》

大きいのはおっぱいとツインテールのみ、ブレザー制服がデフォで私立学校に入学したての風貌、なのに胸部は成人式を終えている食い違い変容……!

「わっ! インフィスさんよろしく、避けられないならば破壊”ですっ! みずでつぽ

う！」

まだ勝負は序盤、お互いにダメージは一割ほどしか削られていなかったけど、初手でメコンはアクアリングを使って来た。

水ポケモンは清らかな水に浸かれれば癒やされる。

純度の高い水の二重輪で身体を纏い、一定時間ごとに体力が少しずつ回復する持久戦向きの技だ。

決め手に欠けるもそのHカップが示唆している様に、耐久向けの技を多く取得し、非常に高いHPが物理防御力、特殊防御力を底上げする。

さらに追記すればランターンの弱点は、じめんとくさ、のみ。

地面技で弱点を突くのは正攻法、だが地面タイプからすれば水が弱点になるポケモンが大半なので、反撃が怖い。

タイプの関係で草タイプに対しては、攻めも守りも特に苦手だが、ランターンはれいとうビームを覚えるので、トレーナー戦だと相手が勝手に警戒してくれる、メコンはれいとうビームを覚えていなくても……対人相手だからこそ「あいつは持っているだろ」と、思い込ませるのも読み合い、駆け引きとなる。

強化された引力と遠心力、重力に抗いとびはねる中だったメコンは、目的地へ移動する呪文を天井が塞がっているダンジョンで使用して、頭をぶつけてしまった勇者な気持

ちをちよっぴり抱きながら、スカートだけは捲れない様に落下……優先順位がおかしいけど、彼女達はポケモン、上空20メートル地点から落下したくらいじゃ死なない。

重力に比例するので、落下の衝撃はそれなりに……ならなかった！ フツカフカのおっぱいが、衝撃を吸収するクツションになったからだ！

胸を銃弾で撃たれたけど、形見のペンダントが命を守ってくれた……

いや、そんなカッコイイシーンじゃないけど、おっぱい大きくて良かったと実感している、数少ない利点。

ちなみに一番は『ジツクが喜んでくれるから』 ナニがとか聞いちやダメ。

うつ伏せから素早く姿勢を立ち直させれば、ゴークル越しの瞳はキリツ、陸上でも水中でもバランスーとなる尾が重たい……強重力場でのバトルを想定した修行は経験済みだが、ヴィヴィが発動させているじゆうりよくは「第二重力」と形容したくなる、見えざる手で頭ごなしに押しつぶされている、そんな体感したことのない環境だ。

素早さ低下、並びに技の命中率上昇。

元々が避けて躲してのポケモンじゃないけど、二ヶ月前は例えジツクが一切指示を出さず、メコンが独断で戦つてもオーダーも負わずにヴィヴィには勝てた……失礼なが

ら。それも慎重にではなく無難に、適当に。

「……え〜いつ！ そちらの岩もツ、えいッ！ 全て！ 撃ち壊しますよツ、ハイッ！ やッ！」

今の彼女は無難に、適当に、そんな心理で挑める相手ではない。勿論マスターの存在は不可欠。

タイプが一致しないいわなだれは、複数の岩石を大雑把な範囲内へ投与する技であるが、強い重力が関与して地形効果いらず（じゅうりよく自体が自発的に発動出来る地形効果の様な物）で、追尾性能が付加されているので全ての岩石は自動的に、メコンへと思意を持つかの様に襲う！

使用者がスパコンCPUのヴィヴィなので、一つ一つの岩石をサイコパワーで操作しているとも、捉える事の出来る構図だ。

超大技のりゅうせいぐんと比べれば、規模はこじんまりだけど、着弾地点が寸分違わず「自分」となっているから、襲われる側の精神負荷は過大だ。怯んでしまう効果も納得の威圧感。

されどメコンは八年間もジツクの手持ちとして、列挙し切れない程のバトルを繰り返してきたメイドさん。

消費効率よりも破壊力を重視、水の弓矢へと化けたのは、生まれた時からずっと覚え

たままのみずでつぼうを、胸の前に掲げた両掌から射出。

好戦的な野生ポケモンが出現しても、両親が守ってくれるので手持ちになるまでは、真つ直ぐに飛ばすことすらも難しかった。

それから無窮とも表せるだけ、この技を使って来たから通常では考えられない程に、威力が高まった“みずでつぼう”へと独自に発展させ、指定箇所「メコン」となっている天降石へ、水の弓矢を浴び貫かせて沈黙、撃破スコアが次々と増える。

「いわなだれのクールタイム……完了、本命です……！」

（予想よりも早いですっ!? とびはねるが封印されているので避けられませんっ……！）

全ての技には、次に使用出来るまでの《待ち時間》が設けられている。

強力な技であるほど、再使用までには時間が掛かってしまうので、技の仕組みを完全に把握しているトレーナーは、蔑ろにされがちな初期技や使い道に乏しそうな技にも目を向け、採用するケースが多々ある。

メコンのみずでつぼうが尤もたる例。威力は褒められないがペナルティが皆無で、鍛えれば連射も可能。

近接系統の技はこの限りではないが、自身に負担が掛かるのでおいそれと大技は連発出来ないのは、こちらも変わらない。

勿論、特定の条件が揃えばあらゆる条件を無視できるし、修行の内容、本人の努力次第でクールタイムを短縮させる事も出来る——書籍に掲載されるポケモンの強さ情報など、おおまかな一般論が記入されているに過ぎない。可能性はいくらだって創造出来る。

「ごっせんー」

先のじしんに全ての力を込めていれば、まだ再使用には至らなかつた。

経験値を重ねて一つ一つの技の力加減を調節可能となつたヴィヴィ、ここまで上達しているなんて……メコンは驚くが防ぐ手段も無ければ回避する手段も無い！

最後の天降石を破壊しようとした瞬間に発動、いかなだれは全弾撃ち落としに成功したけど、咄嗟にヴィヴィへ攻撃し技をキャンセルさせ……間に合わない！

「キャアアアアア！アアンツ……はあ、あつ、あやしいひかりツ……！」
「……………くっ！」

偉大なる大地、母なる大地の力を借り敵味方問わず、使用者以外を地震に巻き込む、物理主体ポケの永遠の定番技。

Hカップまでシェイクしてるとか、そんな描写すら申し訳なくなる、バトルムード全

開な二人。

かなりダメージを食らうけど、じしん一発、弱点を突かれたから落ちてしまうメコンではない！ 大きいおっぱいと耐久力は比例する！

「……………ニヤ？ 何でネリちゃんを見るのかニヤ？」

……………反比例する事例もある。

ヴィヴィもじしんだけで倒せるとは思っていないが、厳しい重力檻の中で揺れる地面、体勢を崩され為す術無く転がされてしまうのに、被害は承知の上でダツシユ！

マトモな歩行すら困難であるのに、距離を詰めて来たのだから恐れ入る！ 流星はジツクと付き合いが最も長いお方だと！

（辛い状況で良くやってくれたメコン！ ヴィヴィ、キミは混乱したけど……………）

蒼へ反撃する青。

あまり遠距離からでは、あやしいひかりが対象に命中しないので、それなりに接近する必要がある。あつた。

先天的能力に与えられた種族値、彼女が好むバトルスタイルを弁えて、ダメージを稼

ぐ技以外にも、状態異常や特殊効果を持つ技を豊富に所有するメコン相手に、持久戦に持ち込まれるのは不味い。

じしんを放ち終わらない最中、三つ編みを結う役割を持った結った二つのライトから、不整軌道を交差させる虹色光彩を浴びせられ、認知神経回路が不協和する。

混乱状態になったので、一時的に念話は途絶えた。

「……………？、ㄥㄥΦΦ……………ㄥ……………」

しかし、二ヶ月前にあやしいひかりを食らった時もだったが、コンピューターがウイルス感染したかの様な反応は、メタグロスだからだろうか？

その言動はスツと冷涼の介入したロリボイスのまま、石碑に刻まれている古代文字を読み上げている考古学者か。

状態異常回復のきのみという名の、ウイルス対策ソフトは持たせていないので、彼女の活力、精神力、そして早く効果が切れる様にと運に任せるしかない……大損害となる前に解けて欲しいが——

「ハイドロポンプ！ 最大火力をぶつけてやれっ！」

ヴィヴィだけを鼻負しないっ 『どちらも勝たせる』約束の下で、二人のおやとして指示を与えているのだから。

もたもたしていたら、彼女が纏う清浄なる円環が、少しずつ負傷した身体を治癒させてしまう。

わけもわからず　じぶんをこうげきした！

マイナス症状が付加されてからの一発目は自傷……この間にもアクアリングの永続効果で、メコンの傷は浄化されている。

この状態を繰り返せば相手の狙い通り、ターンを稼がれ持久戦となれば回復技の無いヴィヴィは、メコンを倒しきれず圧倒的に不利。先に力尽きるのはヴィヴィとなってしまう。

「手加減は致しません！　ごめんなさいねヴィヴィさん！」

あの時と同じセリフ、強い仲間意識と絆が芽生える様になった少女へ、主人の命令に従って情けも妥協も無い技！　受けてみよう！

『マスター？　どんな事があっても本気でお願いしますね？』

大切な子だから手を抜いてしまえば、身体よりも彼女の自尊心を傷つける。

彼女が志願した全力に、全力で敬意を払うため、持ち込んでいたみずのジュエルを砕き、昇華させたハイドロポンプに耐えられるのか？　ヴィヴィ本人からしても『自分を越える』意味がある。

ランターンの火力、解析新書に記載された政府認定評価では“D”判定であり警戒の必要性は薄い。

だからこそ意表が突けるし、不意のダメージジレースで有利を取られた相手は、あやしいひかりを使われなくても挙動不審に陥る。

ランターンの火力なら、あと一発は耐える……どうせ大したことない……を、悉く反逆してきた宝石はメコンが最も使い慣れたアイテム。彼女の為にジックは各地の洞窟に籠もり、ドリユウズやモグリユを相手にしながら水！　だと思つたら氷のジュエルだったなど……苦労話には事欠かないけど、モザイクアートが作れるくらいには集めてしまった！

一度限りの必殺！　超圧縮されたのは人間もポケモンも、生活する上では欠かせない生命の象徴である水……の束が、何百本も集う清冽なる水柱となり、対象へ瀑撃させる

!

メコンの技で唯一隙の多い技も、ヴィヴィが自傷したままま無防備なので難点を、余裕でクリアしヴィヴィへと、吸い込まれる形に直撃した。

じゅうりよくの影響を受けているので、命中率に少し問題のあるハイドロポンプも、確実に命中する。やはりどんな技も一長一短、利用出来るのは繰り出した本人だけではない——

「……………ううぐ……………っ——っ!! 今ので混乱……………解けましたよ……………」

彼女は違うんだ、二ヶ月前とは。

何の為に強くありたいのか、目的も無く一意専心してしまっていたけど——

「……………えっ?! 防御は出来なかったのに耐えら——」

水爆流に押し出されたまま戦闘不能になっていた彼女は、ジュエル＋ハイドロポンプ、メコン最大の火力を急所に当てられながらも、戦意を失うことは無く背中をぶつけた柵を後ろ蹴し、それを起爆剤としてこうそくいどう! 次なる急接近者はヴィヴィとなつた!

重力場からは解放されず、素の速度は低下しているが技を使えばその限りでは無い。

正常時に繰り出した効果と同じ、素早さがぐーんと上がる。こうそくいどうは、回避手段の要にもなり、一撃の重みを強化する補助推進装置にもなる。

磁力反発移動を完全に物にしたヴィヴィ、己が繰り出した重力すら反作用噴流で突っ切らせ、ハイドロポンプ終了後、次なる技を使わせる前にキメる……！

「ばくくくれく……」

「でんじ——」

混乱状態であつたヴィヴィは、腐食物に犯される事の無い手甲での防御行動が実行できず、脇も喉も急所をガラ空きにさせていた。

……ジュエルハイボンが急所に入る、ジツクは万が一を考えて『ジュエルハイボンが耐えられてしまった時の、次の手』をイヤホン越しからメコンに伝えていたが、彼の見立てではそのまま戦闘不能、耐えられても前は水流、後ろははかいこうせんでも突き崩せない丈夫な柵、二つの衝突で脳震盪を引き起こし立ち上がるまでの間に、追撃のハイドロポンプを撃つ事が出来た。

（裏切ってくれた……覆してくれた！ 足取りもままならないんじゃない！ 耐えながら反撃に転じてくれたっ！）

確かにヴィヴィは大ダメージを受けた、が、HPゲージを寸でのところで黄色に保ち、二つの衝撃を逆に利用し混乱解除、場数では上のメコンでも対応にラグを生じさせた速

度からの——

「パ〜ンチッ！」

左腕をグルグルグルツ、エレキッドの腕を振り回す事でエネルギーを充填させる原理と同じだが、やけに間延びしたセリフを全て言い終わってしまっただけ、長い長い攻撃起動スイッチになる儀式——効果を鉄拳に付与させるまでの時間——を必要とする、ばくれつパンチ。

じゆうりよく状態専用として、新しく身に付けた戦技だ。

ありつたけのフルパワー、格闘界の霸王の力を入魂した拳で殴ると、確実に相手を混乱させながら大ダメージ！

前述した通り、常識では考えられない程の隙のデカさが欠点で、マトモに繰り出そうとしてもまず妨害される。それも半分くらい技名を叫んだ後でも余裕で。

腕をグルグルさせるのに集中するから、その場から一步も動けなくなってしまうのだ！ 近接技なのにあんまりにも致命的、予め距離を縮めておいても簡単に逃げられるわ『逆に殴ってください』に等しい、絶好のチャンスを与えるわ……

強力な技だけハイリスク・ローリターン、策も無しに繰り出すのは無謀とされ、必ず何らかの支援技とセットに覚えさせる。

引き続いている重力場の中でなら、目標と定めた相手へと自動的に、吸い込まれる様な

歪曲軌道を描けるので、劣悪な使い勝手がかなりカバーされる事となる。

簡単明瞭に説明すれば、定めた相手がS極で自分がN極、じりよくと同じ極性を持ち互いに吸引力が働く。自分だけでなく相手の命中率も上がるのはこういう仕組みなので、やはり自分だけが有利になる変化技ではないのだ。

腕を振り回す都合上、防衛も回避も制限されてしまうのだが、メコンが次の手を繰り出す前に懐に潜れた——もう間に合わない！

重力状態でなければ、こうそくいどうをキャンセルした瞬間に直立してしまい、腕をグルグル……が、オート移動に任せながらグルグル出来るので、命中率が向上する仕組みなのである。

「ひゃ、キャー！ ハあ、あ、んー……う……う……う……う？」

やられたら倍返し、目には目を、混乱には混乱を！

「？はわ……はれッ……ほへえ……??」

そして急所には急所、それでも耐えきるタフなランタンだけど、頭上にはつづらな瞳のヒヨコちゃんが、餌の代わりに“おっぱいを強請っているのか”ピヨピヨ回転しながら興奮。

「ゴ―グル内側のおめめも、うずしおを型取りしたかの様な、今時の漫画ではそうそう見られないであろう @ 記号に差し替えられている。」

「っ！」

メコンは こんらんしている！

「はっ……はっ……ラにゃ!? プツ!? くだあ……………」

わけもわからず じぶんをこうげきした！

次の指示を何時でも遂行出来る臨戦態勢で、身構えていたヴィヴィは相棒と表せる、手甲を蒼い光で包み仕舞い込む。

混乱による自傷、三つ編みがおでこをスパ―ーンツ！

突っ込みハリセンよりも爽快な破裂音で、自分の髪に鞭打たれたメコンは倒れる仕草も女の子らしく。

両肘を胸内側で45°、手をグーにしたまんまゆつくりとスカートが地に着いていった。

Segment・hexa——もうひとつの戦乱

「わたしの勝ち……！　ですっ！　部屋に盛り塩を配置しましたからね、メコンさんに勝てるおまじない……！」

青に勝利した蒼は闘気を緩ませ、ペタンとその場に座り込んでしまったが、自分としても上出来な戦内容。

何よりメコンに全力で挑み勝利の栄冠を手に来た！

密かに成し遂げたかった……彼女達三匹へのリベンジ！　全員分達成だ！

「んーニヤー！　戦い方も知らなかった貧弱ビッグマウスビッグおっぱい娘が、短期間で師匠を乗り越えて感動ニヤア……！」

「アンタは何時ヴィヴィちゃんの師匠になったのよ……うアー！　あん時も私は相性の関係で際どかったけど、もうそれだけじゃないんだよね！　ヴィヴィちゃんの強さは……！」

それぞれ鉤爪と脚嘴に、絆創膏を貼り付けているネリと爽羽佳。本人は無意識かもしれないが両手で蒼天を抱きしめる様にバンザイ、からのジャンプ。

着地してからも可愛らしく、小さな物だがガッツポガッツポ！　その瞬間のみ微かに

唇を解き素白の歯を見せ破顔した少女に釣られて笑いかける。

「今までのトレーナー戦では見せなかった、勝利ポーズを披露したヴィヴィを」本当に別人になった」と、裏庭に備え付けられた天然樹のベンチに座りながら、戦いっぷりを観戦し終わり心の中で同じ感想を述べる。

ネリのスピードには流石についていけなかったけど、隙の無い技の組み立てでネリも回避のみに専念しなければならず、鋼技のPP切れを狙うもバレットパンチで撃沈。

ヴィヴィの攻撃範囲外から少しずつ削る策しかない爽羽佳は、最悪な相性なのに根性見せてくれたけど、トラブルレスの演算処理で動きを先読みされかみなりパンチ。

（じゅうりよく、私との戦いでは使わなかったのは、メコンとのバトルまで隠しておきたかったんだね。使えばもつと楽に私は倒せたのに、使わずに倒されちゃったのはクヤシーけど……私も嬉しいもん！ ヴィヴィちゃんがここまで成長して……強さだけじゃない、感情を持った女の子に……）

メコンに勝てるように盛り塩……二ヶ月前の彼女がそんな「おまじない」なんか、取りかかっていただろうか？ 絶対に……それはないっ！

絵空事に縋るなど非論理、実行する必要性が感じられない、戦闘への集中力をスポイ

ルさせる要因になりかねない、削除……………

……………おまじないは、誰に聞いた訳でも言われた訳でも無い。

「無意味な行為かもしれない、だけどやってみようかな？」と直感し、感性のアンテナに共鳴したのだろう。

おまじないから加護を得たのか、得てないのか、重要なのはそこじゃない。

理路整然じゃなくていい、〴〵やってみようかなと思えた事”　こそ、芽生えた感情を裏付けするエンブレム。

（ふうう……………疲れ……………ました……………わたしは、達成感を抱いている……………のですね……………自己陶醉？　分かりません……………ですがとつても、良い気持ち……………ですつ……………）

髪飾りのスリットから、バトル中高密度にコレクトしていたエネルギーを排熱。

磁力ブースター起動時に煌めき灯す、燃焼粒子とは異なつた蒼煙がツインテールから上騰させる。

何処か、お風呂から上がったばかりで熱に浮かされている様な、色つばい表情となつているヴィヴィへと、マスターとなつた男、ジックが奮励し戦い抜いた彼女へ、二ヶ月前と同じタオルを右手に持ち、称揚の言葉を贈りながら隣合う。

「ヴィヴィ！　おめでどう……………！　俺はヴィヴィにもメコンにも最良の指示を与えたと思つてる、全力で二人を勝たせたかったから。……………メコンが負けちゃうとはなア〜

「うー！ 凄いな……ヴィヴィ、二ヶ月で本当に強くなったね！ 今のヴィヴィは——こうそくいどう使って無くても——煌めいてるよ！」

エルフーンの気持ちになれる『もふもふ☆コットンタオル』を、何故だか視線を下へ逸らしながら手渡ししてくれた。

さっきのポーズも可愛かったし……

それだけは本人に聞こえない様に、1 km先の音も聞き漏らさない聴力のピクシーですら、聞き取れたか怪しい、彼らしくもないミュートボイス。

彼がトレーナーとなつて八年間、最初のポケモンとして出逢つたメコンは卵から孵化したのではないけど、泣いて笑つて楽しんで、強く硬い絆を育んだ一蓮托生の女の子。

客観的に判断し、ヴィヴィは二ヶ月間で怖いくらいにレベルが上がっているけど、メコンと戦えば勝つのは難しい。

親として二匹の実力を分析し、最良の指示を与えた結果、ヴィヴィが勝利した。

ジュエルハイポンを急所に当てたのに、本心を打ち明けるとメコンが負けたのはもの凄くショックだ。

八年間も手持ちとして経験を重ねたランターンを、二ヶ月の手持ち——実質的には一ヶ月——経験しか無いメタグロスに倒される。

自分のポケモン同士、だけどジュエルハイポンを決めた時は勝利を確信した……のに耐えきられてしまい、極力平静を見繕ったが内心は「マジかよっ……!?」と、信じられなかった。

それはレベルが上回っている慢心や、一度勝利した結果を持つが故の油断ではない。言葉通り手加減はせず挑ませて貰った。

運の要素が微妙にヴィヴィへ傾いていたのかもしれない、だが、負けてしまった。メコンもちよつと、本当にちよつとだけ……

“悔しい” 感情がご無沙汰した。

(空間を直進するだけでは勝てません、ですが今のヴィヴィさんは素人ではない、曲がって加速して減速して……力を使いこなせる様になったのです……!)

ベストを尽くして負けた悔いの無いバトル、素直に現実を認めヴィヴィの勝利を称えられない、こじんまりした器の持ち主じゃない、胸的な意味でも。

「……………褒めるのでしたら、相手の顔を見るべき……だと思えますが? あ、

あと……無許可で頭を撫でるのは、セクハラ……ですよっ……」

またやってしまった、断りを入れずに蒼い繊維を細かく、何重もの層へ織り込んだ手触りの髪に触れてしまった……!

フエンでの一件から、ジツクは度々了承を得ずにヴィヴィにセクハラしてしまっている。

他の子には変わらず、自分からエツちな目的で近寄ったりしないのに、ヴィヴィだけは考えるより先に手を出して、ジト目となった彼女に指摘されてから気がつく……

体育座りがデフォなヴィヴィを、何気なく見たらパンチラしてたり、歩行すれば揺れるFカップに釘付けとなったり……

「……………? はっ……………ツ、!? まっ、まさかそ、そういう意図があったから……………、ハイドロポンプをメコンさんに撃たせたのですかっ……………!」

着け慣れてしまった X パターンの刺繍がメタグロス種を対象にしているのだと、黙して語る黒のブラジャー。

水を吸い込んで重くなったブレザーベストを脱げば、黒いブラウスの下から別の「黒」がレリーフの様に区別され、もっと描出すればブラウスもロリボディにぴったり型取りし、アンバランスおっぱいは、詰め物なんじゃないかってくらい強調されている!

偽乳じゃないのは無論、言葉は途絶えず伝えられたけど、制服が灼き焦げて初めて下着を見てしまった、あの時の映像がフラッシュバックする。

上が判明すれば下も……ほっそい紐でサイドを結んだエッチい下着に違いないと、脳内は悶々埋め尽くされていく！

「違うよッ!?」メコン最大の火力技だから撃って貰ったの! 悪意も下心もないってばッ!!」

「……………じつじつ……………チーズドッグ、お願いしますよ? わたしと一緒に買いに行くのです……………マスターに拒否権はありませんっ……………」

弱みを握られたかの様に、ヴィヴィの言いなりになるしかないジツク。どっちがマスターなのか……………チーズドッグをまたカツアゲされてしまうけど、彼女の好物ランキング永久主位のチーズドッグ「様」をお望みであるならば、何本でも買ってあげたくなる。

(俺は……………もつとヴィヴィを知りたい、仲良くなりたいから、一緒に行動出来る時間にもなるしね。他の皆と一緒にじゃない、二人の……………デ、デート……………になっちゃうのかなあ、第三者視点では。またセクハラだって言われそうだから黙るけど……………)

ふくれっ面になりながら、エルフーンタオルで身体の前面を隠した後に「マスターはエッチです」と、あっかんべー。

軽い怒りの感情を伴わせた、イマドキ中々見かけない子供っぽい仕草をしながら、磁

力移動で横スクロール。

……無変、つまらなそうな表情しか見せなかった少女が、チーズドッグ様や他の手持ちである仲間、そしておやとして認めたジックから影響を受け——

(……………は、っ、!?! わっ、わたし……………なっ、な……………今なにをしたのっ……………??)

——
たから、時折プログラムに無い情動に任せたパフォーマンスをする様になつたのか？

ヴィヴィがハードウェアに置き換えるならば、無限にインストールされるソフトウェアは——

チーズドッグが食べたい……………欲望だとか

皆で洋服を買いに行つて着せ替えされまくる……………戸惑いだとか

あの子が勝つたならば自分も……………競争心だとか

透けブラに気がついた……………恥ずかしさだとか

ジツクに『ヴィヴィ』と呼ばれた……嬉しさだとか

入力されたプログラムなど、とうに上書きされている。もう無口で無感情で意味もなく強さを求めていた彼女という、認識は捨て去るべきだ。

「しようがないマスターですね、良いですよ……許します、エツチなのは承知しますの
で……」

（その間違った認識……もう改訂されないかも……うう……）

orzするジツク、得意気に腕組みしてドヤ顔、ドヤ乳してるヴィヴィ。

すつごい、仲良しになってる……！

女子三匹とミノムシ一匹は、あの応酬を眺めているだけでほっこりしてしまう。

ヴィヴィなりの言葉のコミュニケーションは、特性がぶきようなポケモンよりもぶきつちよ。

メタグロス種だから扱いが難しいのではない、ヴィヴィだからちよつと……れいせいな性格なのに照れ屋さんなんだ。人間に換算すれば13〜14歳くらいで反抗期に突入した女の子。

理不尽な言いばかりだとしても、炎十ドラゴンの攻撃範囲並の広い心で受け止めてあげましょう！

「どうぞ〜！ バトルの後にはトレーナーもポケモンも、体力と精神を使うのでお腹が空いちやいますよねえ〜！」

げんきのかげら、まんたんのくすりで処置して貰ったメコンは、発光器官にバンソーコー一枚貼り付けてるけどすっかり外側は完全復帰。残すは内面側。

「ケーキスタンドツ!! 出てくるの久しぶり〜♪」

メイドとして生きると志した者の嗜み、三時のおやつは何時でも用意出来る特技を会得している。

一番食べたがっていたのは、制作者で立案者な自分自身だけど……

裏庭とログハウスを反復、この時ばかりは運動神経が低いとか素早さ種族値が低いなどガン無視され、紅茶もケーキも溢さず崩れず、驚異のバランス感覚を保ちながら、奥歯のスイッチを噛んだに等しき高速移動でジツクらの前に、テーブルを置き全ての準備が整うまで40秒である！

「おいといれす……美味しいですよ……頑張った甲斐がありましたっ！ モキユ、モ

キユ、むきゅんっ！」

夕食まで間はあるし、疲れた時の糖分摂取は人の身体を得た本能が訴えるのか？

いや、少なくとも鼻の頭にクリームが付いているのに気がついてない、はしたないお姿を指摘され後日恥じりまくるメコンは、単純に好物だから何時でもウエルカム！

（谷間にもクリーム落つことしてるニヤ、食べたい時に食べたい物を食べたいだけ食べる、それってば理屈抜きで幸せだと思うんニヤ）

白餡を練り込んだバナラクリームケーキを、恍惚な顔つきで頬袋させながら、各人に好む紅茶を入れる器用なメコンは、腰回りぷにぷにコンプレックスをドわすれしているから沢山食べても太らないネリは直接突っ込みは入れず、旬であるリングとブドウが角切りされたタルトを頬張る。

読めない様で空気読みまくる、ここで邪魔をしたら泣きべそかかれ楽しいおやつ時ではなくなってしまうから。風呂上がりくらいで漸く気がつくだろう！

「……………ストレートティー、初チャレンジしましたが結構……………わたしに合っているかもです。理由はなくミルクを入れてましたが、渋くない苦くない、条件を揃えたストレートはマイルドで……………茶葉由来の香りが身体中に満遍なく……………チューー、ンクッ……………」

感嘆する、ダージリンをジト目のままだけど、ちやつかりジツクの隣席をキープし全

身から蒼い粒子を込み上がらせているヴィヴィへと——

(私も)主人ほどじゃないけど、ヴィヴィちゃんがどう想っているのかは結構見分けられる様になった気がするよ。初対面では印象あんま良くなかったハズなのになあ……！ 可愛いなあヴィヴィちゃん)

誰かが傷つく配慮も気遣いも知らぬ、理論に基づいた行動しか取らなかつたヴィヴィは、糖分摂取が必要になつてもこうして一つのテーブルを、皆で囲うのをヨシとしただろうか？

それはないであろう、部屋に戻つて食べるとか、協調性が欠落していた彼女は一人で食べようとする理由は、ポンポン浮かび上がっていただろう。

ほろ苦さとエレガントな香りの、モカカツプケーキを両手持ちし、肩幅が狭くてジツクの懐に潜りやすそうなヴィヴィを横目に、自身も同一品をパク付きながらこの二ヶ月で行つたイベントを振り返っている。

“あゝん” の食べさせ合いを、非効率で不純であるとジツクへ食つて掛かつていたけれども……………？

(今の私には、ヴィヴィちゃんがご主人に『あゝん』したい、そう思えてならないんだ

けどなあ……!」

そうだとしても、皆の前では決してやろうとしないのだけど。

「ミノガッツ! アッグアッグ、ミノツ、カプカプツ………ミノノーソツ♪」

かたくりこの、本日の生活スケジュールは朝ご飯↓寝る↓昼ご飯↓寝る。

今し方開眼したばかり、なのにプチケーキタワーの真上から齧り付こうとしたから、ジツクが踏みとどまらせ皿上でモグ付させる。

彼も彼でヴィヴィの変化と成長を感じ取り、胸に入り込もうとすればコメツトパンチされるけど、頭の上に乗っかるくらいは許可なしでも許される様になった。言語違いだからコミュニケーション出来ないは甘えだ。



「号外♪ ホウエン統括政府からの号外だよお♪」

おやつタイムを楽しんでいた裏庭、日差しを遮る影は天候が落ち込んだのではなく、

大きく翼を広げている物体が出現したからだ！

(フライゴンだつ！ あの腕章……政府のポケモンか……)

砂漠の精霊（蜻蛉とも）たる異名を持つ、せいいいポケモンフライゴン。

野生での目撃例は少なく、ホウエン地方であるならば広大な砂漠地帯、111番道路で “主” として他のポケモンを守っている別格な強さのフライゴンと出逢った事はあるが、フツーに市街地を飛び回る個体など出逢えば仰天する。ドラゴンだけあつて進化までの過程が険しいのだ。

(綺麗な歌声の様な羽ばたきです♪)

ゴーグル仲間としてビビツ………人化フライゴンと人化ランターンは、恋愛とは別ベクトルの運命的な巡り合わせを感じたらしく、握手しながらプチケーキをお土産として贈っている！

「ありがとーございますう♪ メコンさんとゴーグルについて語り合いたいのが本音ですが、お仕事なので僕はこれにて失敬♪」

ゴーグルについて語る……？ こればかりはジツクやネリ達も彼女らの世界に入り込めないかもしれない。花粉症にならないとか、そんな安っぽい話題にはならなそう

だし……マニアな枠だ。

(政府の手持ちポケモンと、そう簡単に遊べたりする物なのでしょうか……?)

プチケーキを食べながら別れを惜しむフライゴン、ハンカチでゴーグルの上から涙を拭こうとしているメコン。全然意味の無い行為だが、ゴーグラではアレが礼儀なのか
もしれない……………

「ぐしゅつ……………えつと、号外の内容を確認しますう……………はえつ……………新しいカテゴ
リーのコンテストが開催される……………らしいで！ 部門は……………《萌え》……………?」

ミナモシティにはハウエンで唯一にして、あらゆるジャンルとランク別に会場が枝分
かれしている、出鱈目な大きさのドームが街の南東にそびえ立つ。

新規で制作中の、ニューキンセツスタジアムは、これよりも多機能で最新鋭の科学技
術を詰め込みまくった、夢の総合バトルエンターテイメント施設になるとの事。

お察しの通り、コンテスト会場の設計担当したのもデボンコーポレーションである！

「萌えジャンル……………? また思い切ったというか、政府関連のお偉いさんが見たいだけ
なんじゃって……………」

少し頭をかきながら、メコンが手渡してくれた号外をテーブルに広げる。

政府からの要請を受け持った過去があり、社会貢献の実績をそれなりに築いてきた彼も、ポケセンの看護師さんがあんな格好（ミニスカニーソとか丈短ワンピース）で働かせてる件や、どう考えても健全な教育に悪影響となる格好でのバイトを許可（カイナビーチのマイクロビキニやスリングショーツ）してる件には、個人の欲望を権力を盾に振りかざしていると思えない事例が多々ある……

まあ、言ってしまうえば政府だつて人間、男の人達なので全てが理解出来ない訳でもない。強制しなくとも着たがる子は多い事実が、政府への疑問を薄めてしまっているのがまた……

「突発コンテストお、なあにコレツ！ たった今考えましたあくみたいなの！ オジサン達のスケベ本性丸出しじゃん!? なんて誰も企画書の再提出を求めないのよっ！ やっぱり政府つてヘンタ」

「言うな、爽羽佳……休業日なのにコンテスト会場の出入りがやけに激しかったのは、そういう事だったのな。へえ、リボン持っていなかったり、出場経験が無くても参加可能なのか。商品は………おおッ、額が一桁多いんだッ、美術館に絵画として飾られる……ほほお〜！ マスターランク高得点優勝と同じだ！」

キモッ、号外に掲載されてある代表者の顔写真を、脚指でくり抜いて白け顔になる爽

羽佳は参戦経験こそ無いが、ジツクの為にお金を稼いであげたい気持ちと、もしも優勝したら似顔絵どころじゃない、全身までプロの手腕で描き込まれた芸術品……女の子が惹かれるには充分な根拠に、心を動かされている。

「あつ、ネリちゃんは出場しないニヤよ？ 他のポケモンが可愛そうだからニヤ」

絶対に自分が出れば優勝するって張りまくる自信は、どつから生まれるのだろうか……彼女も出場経験はないってか、価値観が一般女性とは少し異なるので興味が無いのかもしれない。

絵画を制作して貰うよりも、大きい鏡のが彼女は嬉しいのだ！

世界一可愛い絵画、ホラッ、そこにあるじゃないって、毎日自室でやっています（超ナルシスト）

「私はあ……ヴィヴィさんを推薦したいなあ……って、思ったりしちゃってます♪ どうですか、ヴィヴィさん？」

メコンはログハウスが出来る前の話だが、今回の様にゲリラ的に開催された『青いポケモン限定コンテスト』に出演し、栄冠に輝いた証明としてアクアマリン色の記念リボンを、自室に飾っていたりする。

青いポケモンだけ、どんな審査するかなど公開されない抽象的すぎるコンテストだったが、可愛さと美しきジャンルの延長線だったので、その二つのジャンルに出場した事もあるメコンは、何とか対応出来たのだ。決して審査員をおっばいで惑わして、評価を狂わせたのではない、容姿に性格にコンディションにトータルした実力です！

「……………ハイ？ わたしは知つての通り、コンテストに出場した経験がありません。話を聞く限りメコンさんが最も適任だと思いますが？」

「——！ 優勝したらチーズドッグいっぱい買えそうなんだけど……」

「やりましょう、マスターの指示を受けわたし、ヴィヴィが見事任務を遂行させてみせます……………！」

即堕ち2コマ！

チーズドッグが絡んだ瞬間に深紅の瞳には、サイコキネシスを発動している時よりも高彩度な点滅を繰り返し、ケーキスタンドならぬ、チーズドッグスタンドにどつきり飾られたヴィジョンを、4つものスーパーブレイン全てに描かせている！

人差し指で自分を指し「わたし、わたしが出ます！」と、テーブルに下から持ち上げ

るには丁度良いであろう、Fカップを乗つけて擦らせながらズイズイズイ……

これがコンテストだったならば、会場がエキサイトして高得点だったに違いない！
などと、おバカな考えをする暇も無く、ここまで簡単に食いつかれるとはジックも想定外。

チーズドッグ大明神をチラ付かせたけど、物で釣るなど不埒でトレーナーの立場を利用した下劣な物言いは、政府の者達と変わりないなあって、反省よりも速くヴィヴィは出場する気満々となり、むしろ出場許可を下さなければジックが怒られる立場に逆転していた。

「じゃあヴィヴィ！ 参加するからには一緒に優勝目指そうぜ！ 優勝したらチーズドッグいっぱい贈呈させて貰うって約束する！ もう店主さんとロコン君に、俺達の顔は完全に覚えられてるし、大体の購入時間も把握されてんだよなあ……」

「……………んっ、一緒に……優勝、チーズドッグ食べ放題！ 目標として決めました！
チーズドッグに溺れたい……ですっ……ジュルツ、ズズッ」

札幌の風呂ならぬ、チーズドッグの風呂って何だそりや。この様にユーモアスキルも気がつかぬ内に生まれている。

(この中ではヴィヴィの言う通り、経験のあるメコンのが適任なのかもしれない。けど、

初開催で未知のジャンルだから、他の子に任せてもそう差は出ない気がするんだ。それに……一番は——」

もつと色々なヴィヴィを見たい、利己的な考えは政府のお偉いさんと変わりなくなっちゃうけど……可愛いヴィヴィをもつと見たかったんだ

——絶対優勝同盟を結んだジック&ヴィヴィ。

手甲を外せば儂く壊れてしまいそうな手を握れば、鋼鉄少女から伝わる野心、チーズドッグを活力に変換させた彼女の気迫は、プラスチックバーンよりも熱いぜ！

(……………手、握って……………しまっ……………!! あっ、思いがけない場面です……………)

「ちよ、オ、ツ?! 熱い熱い熱いあああ?!? 溶けちゃう焼けちゃうツ! 誰かもらひび特性俺にく、れ、エ、ーあああ!!」

バトル終了後、排熱が完了するまではヴィヴィの身体に触れない方が良い。ポケモンなら兎も角として、耐熱素材のグローブでも装着していなければ、溶着されてしまうか

らだ！

その時と同じ熱量を直触りし、右手だけ異様に腫れ上がってしまったけど、命に別状は無かったのでひんやりボディのメコンが、手を重ねて熱を取り除いてくれる筈、明日の朝には治っているだろう！

「ひー……ひー……開催日まで準備する事沢山あるなあ……でも具体的な審査内容が書かれてないのは相変わらずだな。ちよつと困るな、ポケナビとかホームページで推測される情報を交換したり、本戦を想定したりハーサルでも——」

「——マスター、その必要はありません……開催日は『明日』らしいので……」

「……えつ、あつ！ ホントだ明日かよおおツ！！ こんな時間に配られたら練習も何も無いじゃないか！！ 衝動的過ぎるだろうっ！！」

政府が調べ上げ、任命したトレーナーのみを対象とし、号外とは別の出場チケットが挟まれている。ジック達は出場を認められたと言う事らしい……光栄であるが……

先程のフライゴンさんがホウエン各地に配っている号外を拝見し、ジックと同じ意見のトレーナーは十割十分十厘だ。

プレゼンは準備が八割とされるが、コンテストも事前準備——コンディションを磨い

たりバトル用とは別の技を覚えさせたりなど——は超重要。

バトルで負け無しだろうが、コンテストは “強さ以外を競う場所” なので、あっさり一次審査で落つことされる。

この事前準備させないは、政府の思想が「未開の地に準備無しで入り込み、どれだけ素早く対応し、勝ち上がれるのか」を図るためである。

目を付けたトレーナーは、何かしら政府が優れていると認めたトレーナー達。

良く見ればレギュレーション欄に、デボンイヤホンは○と印されている。ただし念話には×

流石に念話は阿吽の呼吸でシンクロ出来てしまうので、出場ポケモンが全てエスパーでない限りはどんなコンテストでも禁止すべきだと思うが、一方通行でポケモン側の想いと審査に求められている要素を的確に捉え、予測しなければ、結果など出せないのは通常のコンテストでも実証されている。

メコンが出場した際は、当然ジツクがイヤホン越しに指示を与えたから優勝できたのであり……プログラムが判明すれば行けそうな気がする！

何かを達成——その何かはまだ言えない——する場合にとるべき方法はただひとつ、一歩ずつ着実に歩む事なのである。その過程をすつ飛ばすなど出来ないのだ。

Segment・hexa——音ゲーケツキング

明朝からフエンで見物した花火大会よりも、気合いの入った四尺玉発射に伴う爆音が、ミナモ一帯に響き起床させられるトレーナー諸君。

どう考えても頭のおかしい号砲は、突発の「萌え」コンテスト開催日だとお知らせする合図。

安眠妨害だろつつつ!!!

……と、クレームの電話をする者は、誰も居なかつたりする。理由はテンションがピンピンにアップするからだそう。

マスターランクと突発開催コンテストは、毎回この目覚まし花火がぶつ放される。

萌え、とは「何かが可愛い」と想う感情や「心がキュンとする」愛着心を概念に差し替え、もはや一般化した言葉。

結局のところ、具体的なプログラムは直前まで配られないので、過去の突発コンテス

トを参考に、目星を付けて演技するしかない。

爽羽佳とネリが考えうるシチュを網羅した台本を作ってくれたらしく、ヴィヴィはこの通りに振る舞いアピールすればいい……審査員の求めている物と一致していればの話だが。

かなりのギャンプル、だが他の参加者も似たような作戦を持ち込むだろう、必要なのは想定外の事態にも冷静対処するアドリブ力か？

ヴィヴィにアドリブを求めるのは、難しいけど……本人は優勝しか目指していないし、自分も『一緒に優勝しよう』と交わした握手を、ウソにしてはならない。ヴィヴィを勝たせてあげたい！

二匹が徹夜で作ってくれた台本、朝食を食べる直前に完成し、ドレスアップ完了したヴィヴィと一緒に控え室で、確認してはいるけど……

(いいのかなあコレ……？ 怒られるの俺な気がするんだけど……)

だがヴィヴィならば、一般に知られる「萌え」たる属性を何種類も完備しているし、第一関門になるであろう、コンディション並びにビジュアル審査は『朝食をチーズドックにしたり』メコンがお手入れしてくれたので、瞬間的な起爆剤にはなっているだろう！



「次は俺と回そうぜ〜！」

「私も混ざる〜！ いいよねオニドリルのお姉ちゃん？」

「オツケオツケ〜♪ まあ〜とめて相手したげるよお！ 手加減は出来ないけどねえ

！」

未だに、しつこいくらい、くどいまでに、ラフレシアの花弁を模した花火や、モンスタール型に広がっていく花火を打ち出し続ける、とても重労働なスタツフとブーバーンそしてシャランダラさん達は、コンテストが終わったら別の意味での打ち上げだ♪

しかし、コンテストドーム会場内は、打ち出される爆音など皆の耳へ届かない。

ぼうおん効果と同一な仕切り壁で遮断しているのではなく、入場料を支払ったトレーナー、及び手持ちポケモンの肉声が超過密だからである！

「ドーム内は大変混雑しております！ おさないで、かけないで、はしらないで！」

「Dブロックに応援を寄越してくれ〜！ 今の人員じゃお客さんを捌けないんだよ〜！」

！」

「うオオオツ！ 人とポケモンの大津波だあ！ これはルギアかカイオーガのお力なの

かッ?! コンテスト警備員歴12年の意地見せてやらアッ! 手伝つてくれナゲキー
!」

うわア!? なんかすごいことに なっっちゃってるぞっ!

一年ごとに規模が巨大になっていくコンテストドーム。そもそもシダケタウン、ハジツゲタウン、カイナシテイ、そしてミナモシテイ、四つの街の施設をミナモだけに集結させたのが政府の読みミスである。

ドームの上空を巡回しているのは、最北の地からご苦労なシンオウ地方の、コトブキテレビのレポーターがトライポフォビアを発症しかねない、推定人数4〜5万人とすぐには頭の中でどれぐらい凄いか想像出来ない行列は、ドーム周辺を三週してしまっている! まるで一つの巣に集まるミツハニーの様だー!

ちなみに、人化現象が起こってから初めて開催されたコンテストは《カントー・ジョウト・シンオウ・イツシュの機動隊に協力を要請した》ギネス物の大事件であった……その内ミナモの面積の半分くらいは、ドームが浸蝕しかねないのでは?

人は多いが息苦しくないミナモシテイは、南西部が特に一変してコンテストオタクから、暇人までホウエンに住む者達が集いし万魔堂。

「シェイシェイシェエ！ フフフフンツ、ハハハハハツくくアツ!! ホアホアホアホアホアアアくく！」

………阿鼻叫喚と化したコンテストドーム内で繰り広げられている前哨戦、休憩スペースのさらに右側に進路を取れば……キンセツシティのゲーセンにワープしてしまった？

電子音が反響し、極彩色のネオンが設定パターンに基づき点滅。このゲームスペースのみネオン以外の照明は落とされているので、プレイヤーの動きに反応して筐体に仕込まれたブラックライトが気分を盛り上げ、スクリーンには最もスコアの高いプレイヤーが映し出される。

目立ちたい者には堪らない、とてもドーム内の一角とは思えないもう一つのステージ！

「お姉ちゃんスゴくく！ 手の動きが見えなくい！」

これで七連勝中！ まだ年端も行かない人化したポケモンの少年少女が相手でも、獅子は兎を捕らえるにも全力を尽くす！

徹夜明けのくまは、お化粧で隠蔽したがドームまでの道のりは、貧血を起こしそうでフラツフラだった爽羽佳。

「えっへっへえい！ まずは見える範囲内のボタンだけ追った方がいいかもねー。力

を込めるんじゃないなくてスッー……て、気になつてる女の子の肌を触る感じで優しく、ねっ！ おーう、キミは大分リズム感を作れて来たじゃん？ スコア更新した記念にそろいろポロツクを贈呈しよー！」

音ゲープレイしたらご覧の通り、外部の脳である指先の動きがいい刺激となり、快調な音ゲー療法である。

「いいなあ、私もほしー!!」

「大丈夫、私の分をあげちゃうよ〜！ 付き合つてくれてありがとうね！」

音感に命を架して、レーンから流れてくるマーカーを撃ち抜いていたが、ゲームが終わればアドバイスは忘れずに、戦利品の高レベルポロツクと一緒に遊んでくれた子達へ、平等に配る。

年下が混ざる様になつてから、最初の内は接待していた物の一人プレイではなく複数プレイなので、誰かしらが最下位となり「LOSE」と画面に表示されてしまう訳で。負けるのイヤだから、大人げない17歳JKかもしれないけど、全力で戦った方が逆に子供達は喜んでくれたので、もう接待プレイはしなくなった。

最近の子共の中には高難度譜面も簡単にいなし、腕がカイリキーよりも多い六本になつているんじゃないかってくらい、人間（ポケモン）止めてる一行年齢の子が乱入してくるので、舐めプだと足下すくわれる……

音ゲー、もとい、ポロックを作るきのみブレンダーゲームに年齢は比例しないのだ！ さつきバトったノコツチの姉妹も結構なもの、その前にバトったアメタマの兄妹なんて自称「天才プレイヤー」なんかじゃ太刀打ち出来ない音ゲーマーだったのだから！ クレジット代わりに木の実を投入、シューティング要素とリズムゲーを融合させ、独自の発展をアツデートで遂げ続けるきのみブレンダー。

提案元はキンセツシティの役員の、何気ない要望。

『ゲームセンターでは若者を中心にリズムゲームがとても流行っている。きのみブレンダーもタイミング良くボタンを押すゲームの様な物、掛け合わせたらヒットするのではないか？』

なるほど、面白い試みであるとゲーム会社とデボン社がコラボし、生み出されたのが先程ノコツチの姉妹と爽羽佳が、三面六臂な活躍をしていた筐体だ。

「誰か〜！ 私に挑んでくる者はいないのかあー？（一度は言ってみたかったんだよねえー！ くう〜！）」

繁華街を中心に活動するシティガール（生まれは田舎だけど）としては必須科目の特

技らしい……

おこづかい代わりに、ジツクが育てた木の実やネリがバイトの老夫婦から報酬代わりに受け取った木の実詰め合わせなどをバッグに入れ、使い切るまで電子盤上で両手を狂ったように乱舞。

木の実の品質だけでなくスコアや順位によって、出来上がるポロツクのレベルやなめらかさは激変するので、ジャンジャカレア級ポロツクを量産させる爽羽佳の腕前は『逆に引かれるくらい上手い』

上半身しか動かしてない筈だけど、バトルでは下半身ばつか使うので、偏らせずバランスよく絞らせ鍛えられるとジツクに診断して貰ってからは、より一層打ち込んで現在の音ゲー廃人へ至る。

ライダースーツの前開きを少し下ろして、自前の羽で連戦に次ぐ連戦を苦ともしなかつた身体へと、やっと冷風を送る事ができる。

ノープラと思われる球体が二分割され、もしこの姿のまま音ゲーしたら確実にズレて……あはあくくん♪

彼女が目当てでキンセツやコンテストドームへと、ひとつ走りのひとつ飛びするファン（ストーリーカーとも言う）が存在するくらいなのだ！ これには本人も悪い気はしな

「——では、ワシが挑ませて貰おうかのお？ オニドリルのお嬢ちゃんや」

「にゅアッ!? あなたはブレンド名人!? ここで会ったが三ヶ月ぶりイ! 今の私ならあなたにだって勝てそーだよっ! ふふへへえ……………」

数秒間、ゲーセンの一角と化したブレンドスペースが静まりかえった……

ジッパーを早くも持ち上げて臨戦態勢、ヴィブラスラップな時代劇音を咲かせ、堂々たる出で立ちの老男性はブレンドめいじんと称えられ、ポロツク作りの神様としてテレビで『ポロツクめいじんの一日』特集なる物が放送された巨匠。

「……………ヤ(戦) ろうか……………」

「……………ヤ(戦) りますよ……………」

このやり取りだけだと、金品を代価にJKへ猥褻な行為を働こうとするおっさんにか見えないが……………爽羽佳も分かってやってるから、ギャラリーは熱烈たる賑わいを再開させる!

ポロツク作りの神様と、七連勝中のニューエイジガール! コンテスト前の前哨戦で火花散らしまくりだ!

*音ゲーケッキングとか言っではいけません。

爽羽佳は過去に何度か名人とバトったけど、全て敗北させられている。そう簡単に勝てないから名人の異名を持つ訳で……

(今日は勝てる！ 終わったらぶつ倒れてもいいくらいコンセートレート集中させる！
じしんかじょうにアドレナリンVジエネレートオオオ!! ああしやああツツ!!)

カイス、シーヤ、ベリブ。

かなり貴重な木の実を羽ぶりよくサイドテーブルに置けば、名人もミクル、イバン、ジャポを同じタイミングでテーブルにセット。

「うわあ……非売品の木の実をあんなに……」

バトルでも高い効果を持つ木の実を、百円コインの様に取り出した名人にザワめき、ドン引くギャラリー達。

名人も爽羽佳を認めているが故の最強セレクト。

どんなポロツクが出来上がってしまうのだろうか、期待と興奮のあまり鼻血を流す者まで！

「きのみくくブレンドくく開始——」

「キシシシ！　ちよくと待っていてくれよオ、あても遊ばせて貰っていいかな？」

Segment・hexa— [i k i e]

全ての木の実をシューターに投入、ブレンドバトルのカウントが5、4……のタイミングで乱入者現るッ!?

「……………ふへっ……………? い、いーけど……………? いいですよねえ名人……………」
 「うっ……………うむっ、ワシも構わぬが……………」

空気読め、よりも この二人の世界に入り込もうとするのか

きのみブレンダーは最大で、四人までアクセスが可能である。

当然、爽羽佳と名人が接続中でも二つの席は余っている。

『挑戦者が現れた!』のデカデカしたテロップが、画面を埋め尽くし自動的にカウントはストップされた。

「盛り上がってるトコ悪いナ! アンタらと一緒ならスゲエポップク作れると思ってナ! 邪魔しねえ様に遊ばせて貰うヨ。ああ、もう邪魔しちやってるかア? キシシッ

！ まっ、よろしくナア！」

乱入が許可されたので、対面していた爽羽佳から見て右、名人から見て左の席にピョンと、アホ毛を傾けながらジャンプ座りしたのは独特な笑い声、セリフの一部をカタカナ表記した様な発語――

(…… “あて” って、 ジョウト地方の一人称だっけ……?)

――自らを「あて」と呼ぶプラズマポケモンのロトムだった。

電化製品に入り込みイタズラを行うのが好きなポケモン。もりのようかんでは幽霊の作業、ポルターガイストとしてハクタイジムリーダーですら、バトルをして交友を深めたジツクに解決を丸投げしてしまう震え上がりっぷりであった。

原因が判明したら何てことはない、テレビから出られなくなつてロトム自身も助けて欲しかったらしい。

「キシシ、ブレンド開始イ！」

尖った頭頂部は人化している身長――ヴィヴィとそう変わりなく146cmほど――の、実に1/3を占めるであろう巨大なアホ毛となっており、流動体となっている茜色

のオーラを取り憑かせている。

シヨートヘアは柑橘類を彷彿とさせるオレンジ、横髪が地に着くほどの長さで色彩が茜色なのは、電子レンジを取り込んだヒートロトムの際に変化する、ミトン状となっている。

タンタンツ、指の腹でタツピングするのもミトンで、人型の両手はオーバーサイズで膝下近くまでを隠している、薄生地のスカジヤンのポケットに突っ込んだまま。

「キシキシシシ！」

(はっ——)

(なんっ………と——)

ヘリウムガスを吸い込んだ様な、高周波数の笑い声はプレイを乱す為の策ではない。ロトムの地声である。

ミトンの色彩とは少し色味の異なった、赤系統のキャスケットを被らせるも、アホ毛が大きすぎて貫通してしまっている。

周りの物は「そういう思いきりもアリだ」と、風変わりなファッションで全身をコーデした、ヒートロトムのブレンドスキルにも沸き立っている。

特徴的すぎて人混みに紛れてもアホ毛のデカさと、耳鳴りしかねないキンキンボイスは迷子とは無縁なのだろう。

両脚をプラプラさせながらも、変わらず横髪から伸び行くミトンでの軽やかなパフォーマンス。超高難度な譜面は脳と身体の反応が追いつかないのに、過度な負担を避けながら織りなしているのは、四倍速の *gioco so* ——

「キシキシ！ あての勝ちイ〜〜！ 空気読めなくてワリーなア、じつちゃんと目隠れの姉ちゃん！」

「……………」

「……………ガクツ」

まずヒートロトムである、彼女がシューターに投入した木の実からして別格であったのだ。

何が起るか分からないズアのみ、全ての生き物の力を宿したヤタピのみ、世界の果てに捨てられた幻のスターのみ、夜空に浮かぶ星々の力を持つナゾのみ——

爽羽佳と名人が投入した木の実も、入手は難しく枯れさせず栽培し収穫するのは、壮絶な努力が必要となる品々ばかりだ。

——のに、それを上回る激レアな木の実を大量に持っていた。

どうやって入手し、どうやって育て上げたのか、ジツクも報酬として頂いたサンのみは増やすことに成功してはいるが……

「おオ!? すっげすっげエ! 柘榴色に翡翠色に石英色! あても知らねエポロツクがいつぱいじゃねエかよオ! イレギュラー変化しちまったかア? どオくんな味がすんだろなあ? キシシシ、やっぱアンタらと遊んで良かったぜ!」

彼女のスコアは1000。俗に言うフルコン。

爽羽佳は997、名人は991……どちらもポケモンと人間を卒業してしまった無我の極地レベルなのに、彼女は木の実だけでなくブレンドスキルも一枚上手であった……

バケモノ×2を打ち負かしたバケモノ、サスペンダーと雷と炎のパターンが刻まれたニーソックスをそれぞれ、向かって右側のみ採用しているヒートロトムの全身が映画館にも劣らぬスクリーンへと投影中。

薄生地のスカジャンは右側のみズリ落ちており、インナーであるオフシヨルダーも、右肩のみ露出しているとはアシンメトリーな拘りでもあるのかもしれない?

「……………まあ、まけたあ……………自分でもあり得ないスコア出ちゃったのに……むうう……………んっ! スコアは過去最高だけど惨敗だなあ! オメデトー! その、貴女

の名前は……？ 私は爽羽佳だよ！」

戦利品の宝石ポロックを指の間に挟み、ポケットへ仕舞い込んだヒートロトムへとめつつつつつ！ ちゃ！ 悔しいけど、素直に敗北の味を飲み込んで勝者へと握手を求めぬ。

負けたときこそ相手を褒める。特別能力に優れないオニドリルなので、ジツクの手持ちになっても最初は負けてばかりで、彼を散々罵って「私を扱えてないだけ！」と、責任の全てを押しつけてしまった事もあった……彼からの教育。

「んア？ あての名前、ニツクネームかア？ キシキシ………ニツクネームなア、ニツクネームは大事、だよなア………？」

拍手しながらスクリーンまで飛行、アシンメトリーなロトム嬢は注目を注がれるのは、満更でもないらしい。

てつきり『はいてない』のではと、疑惑が音速となつてゲーセン内へ拡散妄想していた男子へと、スカジャンを捲つてボーイッシュなデニムキュロットパンツを魅せれば、本人はイタズラ好きな本質を思い出させるような「ザマーミロ」顔で、サンクチュアリ

の色は不確実なままであった。

「キシシシ！　その簡単に下着見せる趣味はねーよオ！　男は単純だな！　コレエ、そわそわにやるよオ！　遊び終わったからおやびんの元へ帰らねーとナ、じゃ、また会えたらイイなア！」

「えちよつ……、な、名前おせーつて……へイ、ツ!?　あの子が作ったポロツク……??
これつて手品？　手品……あ」

ホツカイ口な暖かさ、ミトンを握々しながら名前を伺ったのだがスルーされてしま
う。

常に口角をせり上げ、ニカツと歯並びの良さを自慢している様なスマイルの彼女が、郷愁を振り返った遠く、遠くを見つめているような視線をもう片方のミトンで隠しながら、背を向けて出入り口まで進んだら初めてポケットから出した指を「カキンツ！」と叩き、火花と電流が微量に散る。

肩と手首を繋ぐ肘に値する部分は無く、分離している。電化製品と融合すればゴーストタイプから、取り込んだ製品を模した物へとするが、その名残なのだろう。

——もうニカツとフェイスに戻っていた。

(トリックか……宝石ポロックいくつか貰っちゃったよ……！　ふうん……あの子とバトルする事になったら嫌だなあ、相性最悪だし！　そうでなくともあの子——」

———— めちゃくちゃ強いよ…… ————

「……………決めた、旅に出よ……………」

ロトムだけに、心霊現象がゲーセン区間を引っかけ回した様な数分だった。

爽羽佳が戦利品として回収した、真つ黒焦げなカスポロックは存在自体が未確認であろう、サイコロ状の宝石菓子とトレードされていた。

自分と相手の道具を一瞬で取り替える技、トリックだ。あんな失敗作じゃレートが釣り合っていないけど、彼女は情けを掛けた訳ではなさそうだった。

(名前分らないから『あてちゃん』として覚えておこーっと！)

そろそろコンテストの始まる時間帯、指定席へ低空飛行体制で向かう爽羽佳。

二人の少女にコテンパンにされてブレンド人生を白紙に、壮士凌雲の天へ舞い戻る事を誓う名人、79歳からのリスタートである！



「キシシシ、偶には人だかりの中で遊んだっていいよナア？ おやびんには許可貰ってるしよオ！」

駅の構える121番道路方面へと向かう近道、路地裏に入った少女はスカジャンのポケットに手をつ突っ込んだまま、髪と一体化しているミトンはクルツクルと、上下へ仰がせたり何度も回転させたりと、忙しなく心中は興奮している。

「まあ、イカサマしてただけどナ。あての髪が筐体に触れた瞬間にハッキングじゃねエケド、電化製品の範疇だからナ！ キシシシ、あての意思と接合させて貰ってたんだヨ」

少女がボタンを押せば必ず “excellent!”

電気を触媒にしている機械ならば、どんな物でも似たようなイカサマを実現出来てしまふ。

係員もプレイヤーも、誰もイカサマに気がつかなかったので、バレなければ “イカサ

ました。事實は残らないのだ。

「さて、この真つ黒ポロツクはどんな味するのかナ？ キシキシ、カスポロツクつて食った事な——

ぶゲホッ!? けはッ! ン、もげエ、エ、くく?!!!

マッ! クツソマ、ツズう、う!! ペっペー!……ッ、ゲホッゲホッ
 ……水う……自販機ねーのかよオ!? ウがつ、むグッ……ハアッ、喉の奥イガイ
 ガすンぜ……帰ろ帰ろ……この味はねーヨオ……食わなきや良かったぜ……ハア
 ハア……」

高周波数ボイスのまま、カサ付いた暗黒物質を恐れなく咀嚼——の前に、ポロリと欠片が一足早く舌に落ちただけで、腐った根っこが口内に寄生する様な、味覚でも生理的に極めて厭わしい感覚で犯され、激しくムセ込んでペッペ!

どんな相手にも何を考えているのか読ませない、ニヤニヤした顔を路地裏だからって涙目になりながら、ミネラルウォーターの自販機を探し歩く謎のロトム。アホ毛も萎びてしまうクソマズポロツクは即座にポイ捨て。

イカサマした報いである……

Segment・hexa——ヤベー奴と可憐毒

爽羽佳がスライディングすれば、嘴を模したつま先から「チチチツ……」とフリクシヨーンが響いてしまった。

「ギリタイムオーバーニヤ〜ね、爽羽佳。音ゲに夢中になりすぎニヤあ〜！」

「やつ、時間は計算してただけど最後にね……あてちゃんの事を考えてたら遅れた！」
客席天井部のシーリングライトと、客席の両側壁面に設備されたフロントサイドライトを、タゲを向けられた大型モンスターを葬るかの如し、レーザー射出されているのはホウエンコンテストの統括委員代表！ とっても偉い人である！

「すみません、ライトを少し減らして……あつ、丁度良いです……お集まりの皆様、突発的なコンテストにも関わらず、ホウエン地方に留まらずカントーやジョウトからお越し頂いた方もいらつしやるとの事で、ポケモンコンテストを管理し、愛する者の一人として大変嬉しく思います……今回のジャンルは『萌え』……です。我々の友達であり仲間でありライバルでもある、ポケモンに人化現象が発見されてから早20年、人化ならではの流儀や主義趣向などの表現方法があります、今回のコンテストを通じて『萌え』

の新しい可能性を見つけ、広める場として活用して頂けたらと存じます、私からは以上です……」

会場内が大量の風船に次々と、針を刺し割っていったかの様な歓声が統括代表へ吸い込まれていく！

動員数だけの力押しではない、心から代表の開催理念と「萌え」への情熱、そして思い立ったが即断・即決・即実行させる彼は人化ポケモンを69匹も「嫁」として可愛がり『人化したポケモンのコンテストも開催させよう』と、率先提案した萌え（変態とも言う）パイオニアのお言葉へは、ぼうおんゴニョニョも、目を見開いてしまう音圧となる。

………これからもつと凄い瀑音波となるのだが！

（ヴィヴィのエントリーナンバーは50、一番最後だニヤ）

不規則な生活に慣れてるネリは、徹夜したのにクマの一つも出来ていない。身体も語調も身内が出場するから氷タイプだけど体温は高め。

そのトレーナーの実力・評判・政府への貢献・可愛い♀ポケは所持しているか等々、調

査員の主観や独断も盛大に加担されているが……機密で行われた調査から選び出された50名のトレーナーと、出場ポケモン。

「ポケモン達の入場ですツツ！」

スタツカートを協調させながら、黄金色の髪を逆立てた実況者が《既に萌えているツツ》

参加申込書を係員に提示、控え室内でやつと配られたプログラムに記載されている第一科目は……コンデイション&外見の華やかさ。

ファクションショーを彷彿とさせるUの字型のステージを往復。

本来の姿から折り返し地点で、人化するパフォーマンスは代表がプロデュースし自らの嫁ポケに実演テストさせて見たところ、大ウケしたので近年の全てのコンテストには間違いなく採用されている。

(よしっ！ 第一審査は完璧に予想通りだ！ 過去の傾向を見てもこれは外し shouldn't be) けど)

ポケナビにデバイスされた小型キーで、入場待機列の最後尾へ並んでいるヴィヴィへ、安心させる一言を送る。

(コクンツ………)

こちらのの眼を見て頷いてくれたけど、ヴィヴィはコンテスト初出場かつアピールなん

て一度もした事が無い！

ので、突貫工事な練習はしてきたけど非常に旗色悪い事実は認めざるを得ない。外見のクオリティはどのポケモンにも負けてない（ジツク・心の中での第三者評価）けど『演技して』は、様々な感性が生まれてきたけど足りない物も多い、ヴィヴィが最も難しい分野だと思っっているのだ。

（ムウマージ、サーナイト、ドレディア、具体性を欠いた「萌え」ってジャンルだけど、それっぽいポケモン揃いだ。でも優勝候補なのは……………）

「ゼツケンニー番のシャクナゲ選手ですツツ！」

かわいさ、かしこさ、うつくしき、三部門のマスターランクを制覇したそのポケモン、夥しい数のスポットライトに竜巻の様な大喝采、その全てが自分に向けられる実感に恍惚を覚え、虹色に煌めく鱗を逃げも隠しもせず、蛟にも似た体形から――

『オオオオオツアアアアアアアツツー！！』

『シャクナゲ様美しいイイー……………！！』

ピンク色の光に包まれ、人化を完了させた少女、いつくしみポケモンのミロカロス。

みすぼらしく、汚らしい、研究者からも対象外と貶されていた過去を持つ進化前のヒンバスから驚異の変貌。

ミロカロスⅡ世界一美しいは全世界共通の形容詞。あまりにも美しい為オコリザルですら怒りを忘れてしまうなど、荒み穢れた心を一瞬にして浄化する力を備えている。

(ウフフ、萌えなるジャンルは初開催の初出場ですが、私に掛かれば何てことはありません。軽くエントリーポケモンを見回しましたけど、私に適う者は居ませんわね。四連覇は楽に達成したも同然、私の存在に畏怖し、腰を砕き、盛大に嬌声を戦慄かせてくださいな……ウフフフツ……)

扇状に展開した尻尾でも観客であり、見覚えのありすぎるファン達へアピール。

多くの芸術家にインスピレーションを与え、モデル経験や賞状を授与された回数など数えていたら日が暮れてしまう。

シヤクナゲというニツクネームを付けられた彼女は、コンテスト専門に育てられ超過保護な環境で生活している影響なのか、美しい容姿の子にありがちなのか、八方美人で毒がある本性を隠し持っているらしい……

長い睫毛と長いヒレをかきあげる仕草、虹色に煌めく模様の入ったスカートからは、

交差させている脚が良く見える。

腰とお尻を持ち上げ、軽く揺らす洗練なウォーキング。彼女の特性はメロメロボディだが、まだ技や特性を使ったアピールタイムではない、美しい者は普通に歩くだけでも♂も♀も見境無く、血液の循環を早めさせてしまうのだっ！

ドレスアップアイテムは、キラキラパウダー、きれいなしずく、美しさコンテストを制覇した証のティアラ。

まるで色違いと見紛う光彩を放ちながら、完成されたビジュアルをさらに、特級階級へと昇華させる成りは美術館に展示されている大理石像。彼女の素体美と衣装美を活かした必勝装備である。

第一審査で50匹中、5匹まで大幅に次ステージへの枠数は絞られる。

彼女にとって第一審査など、己を称えさせるセレモニーに過ぎない、一位通過などエスパークタイプでなくても分かりきった未来予測。

最後の審査のみ、手渡されたパンフレットでも伏せられていたのが気にはなるけど、数多のコンテストに出場したノウハウがある自分ならば、全ての審査で一位通過は揺るがない。コンディションだって3つのパラメーターはMAXなのだから――

「それでは最後のポケモン、ゼツケン50番のヴィヴィ選手ですツツ!!」

暗幕から姿を現した蒼鉄の重戦車。

メカメカしく頑強な容姿は、一般的な見解ではうつくしきよりも、かつこよさやたくましさに比率がある。

ましてや現在進行中のジャンルは「萌え」

メカ萌えな方々も少なくはないけど、他の面子が華やか過ぎてメタグロスとはミスマッチ感が——

「……………ニヤー」

——あるとされ、審査員含めた会場は人化して模範意識を覆せるのか？ それともトレーナーが参加させるポケモンをミスしたのか？

ステージ中央に四本脚をガジャンツ、ガジャン、ガシイインツ… 軽やかな足取りであつた前49匹とは対照的な、敵意を秘めているかの様な低音地ならし。

レアなポケモンだけど、希少さだけで優勝をもち取れるイベントではない。

ましてやバトルでの強さなど、何ら影響審査に影響を及ぼさないコンテスト。

優勝候補のシャクナゲは、三部門制覇し他地方でも名の売れている申し子だが、バト

ルした事は一度も無いのだから！ 覚えている技も全部コンテスト用である！

「ニャー、ヴィヴィだ、ニャー」

.....

「.....」

『.....』

(.....)

《.....》

蒼白い光りに包まれ、ゴツツイポケモンが人化を果たせば、トレーナーへ根付いている外観印象を、やぶれたせかいに引きずり込まれたかの如く反転。

あまりに華奢で、男女ともにいくら歳を取っても憧れの消えない瀟洒なブレザー制服を着こなし、二つの脚がグラデーションカラーに彩られたツインテールへ変わり身し、仕上げと言わんばかりに萌えのプリミションカラーに彩られたツインテールへ変わり身し、るロリ体型なおっぱいだけは育成完了済みな、多岐に渡るギャップにのたうち回る

「ほ、ほオオ……いいですねえ、ギャップ萌えというヤツですねえ！　ロリ巨乳のメタグロスとは！　ふうむ、容姿は文句なしですが、コンディションが物足りません……惜しいですが五点」

ここで審査員の皆様を紹介しましょう。

まずは統括委員の代表さん。この様に熱気に左右されることはない、観察眼で少女の細部まで一瞬で判定を下す紳士的な変態集団のドン。

「メタグロス自体が簡単に見かけられるポケモンではない！　けどっ！　僕が知っている標準常識圏内では人化しても大柄で威圧的な姿であるのに！　♀っただけでも歴史的遺産級っつ！　あれだけの鉱石なのにコンテンツ未経験だとオツ!!」

クチバシテイのポケモンだいきくらブから、特別ゲストとして招かれたピカチュウが好きだからハンドルネームも「ピカスキー」の横にふくよかな男性。

「ああ〜、私も学生時代あれくらい可愛かったらモテたんだろうなあ〜！　凄く強いポケモンなのに守ってあげたくなくなっちゃう！　私の心の庇護欲がそそれちゃうッ……嗚呼！　ダメえ！　心の中のコモルーがテクノバスターしちゃう→う←!!」

同じくだいすきクラブの会員、パウワウが好きだから「パウスキー」さん。手直しすれば美形なのだが、ポケモンを優先させすぎて自分はボロボロと残念な女性。

「キエ、アア、アア、アツ、!! ヴィヴィちゃんフオオオオwww こっち見てニヤー！ 下着売り場でお姉さんは何時でもウエルカムしてるニヤー！ フウほほほおwww ロリ巨乳萌え萌えキュ〜ンwww 私が好きだからつて猫化しちやつたんニヤwww どぞくどぞし仲良くイチヤペロしようニヤアアツwww」

ミナモシテイを代表……いやホウエン地方を代表するヤベー奴。

開幕からこのバカアホなテンションの高さ、猫ポケだからネリと似たような語尾、スレンダーな身体付きにミナモデパートの制服……仕事は抜け出してきた。

バネ尻尾をシコシコさせながら、真下まで移動してスカートの中を捉えようとし、係員に押さえつけられているのが、お察しの通り……皆大好きな人化ニヤルマーのセリ〜又。

……他の三名はともかく、何故コイツが審査員に選ばれたのか、スターミーの分類よりもずっと謎だ……

Segment・hexa——何も考えず済む方法

(私とは僅差?!? そ、そういう手段もあつたのですね……トップ通過しましたけど、面白くありませんわ……)

「ニャー(棒) ニャー(棒)」

腰回りに装着したけど、端から見ればミニスカートから生えている様にしか見えな
い、猫尻尾もサイコパワーでフリフリさせながら、台本を読み上げるジツクの指示を受
け取って、ニャーニャーとリピート機能を作動させているヴィヴィ。

尻尾の先にはメコンが急遽手作りしてくれた蒼いバンダナを巻いて貰ったけど、コン
ディションが良く見られる効果は残念ながらない。

コンテストの専門家として、タマゴから厳選され、けづやと滑らかさの関係を綿密に
計算した手作りポロツクを、長い時間を掛けて与えられてきたシャクナゲが審査された
後だ、付け焼き刃な手入れとチーズドッグでは、コンディション不足と判定されたつて
グワウの音も出ない。

バトルと全然違う育成方法が必須なのに……今までそんな事してないんだから!

が……………

『FOOOO〜!! ヴィヴィちゃんカワイー!! アイラビュー!!』

『ゴツイポケが登場って、どないねん思ったケド……やるやん! シヤクナゲちゃんのファンやけど、トキめいてしもたやん!』

『ロリ巨乳なんて邪道、そう思っつい時期が俺にもありました……! 今後はロリ巨乳に乗り換えるぞー! ウエエエエイ! ヴィヴィちゃん!!』

受けている、観客層の殆どにヴィヴィのコスプ……じゃなくて、ドレスアップを含めたビジュアル面は大ウケしているぞツ!

ポケモンだけに評価は最高で六段階。

コンテスト常連のシヤクナゲは、萌えなるジャンルでも生まれながらにプロフェツシヨナルを命じられ、箱入り娘教育の実力を振る舞いトップ通過。これは観客も審査員も半ば見えていたが……

(台本の最初のページ、テーマは“ギャップ”! 本来の姿がイカツイ系だからな、俺もだけど人化するとチマっこい少女である、表と裏の違いみたいなミスマッチな“ズレ”が生み出す、振れ幅の広さに愛おしさを感じる……ッ!)

「わーい、高評価、だ、ニャー（棒）」

猫耳バンド、猫尻尾、猫グローブ、蒼いバンドナでドレスアップを果たしたヴィヴィは、なんとコンデイションが最も劣っているのに二番手通過してしまった。

ブラウスやベストを、ちよつとだけ大きいサイズに変更、生地之余りをブラ下に差し込んで……

なんという ことでしょう！

ロリポデイス大人おっぱい、お洋服が張り付いて乳袋が作られてしまっているではありませんかッ!?

（ヴィ、ヴィヴィさん凄い……エツチ、な気がしますう……／／／）

「……………ガツZZZZ……ミツ、ノツ……グアツ……ZZZ」

胸元の白いリボンだって、パンパンに敷き詰められた乳袋にジャンプアップされている。145cmの低身長と並外れたおっぱい、これもギャップ萌えの領域であり、アンチシナジーをまかり通してしまったヴィヴィは極めてスケベなパーツで構成されているのだと、お部屋でお喋りしたキャミソール姿を思い出しながら、赤面するメコン。

そのHさんのおっぱいキャニオンに潜り込んで、コンテストなんて興味ないと爆音の中心部なのに爆睡しているのがかたくりこ。

(メタグロスって時点で眼中にありませんでしたが……この中で最も警戒が必要なポケモンですわねっ！ フツ、フンツ、二番手ならくれてやりますともっ！ 全ての審査で一位をもぎ取り総合優勝するのも私、シャクナゲなのですからーっ！ バトル専門家がコンテスト専門家に勝てるとてもーっ!?)

思わぬ伏兵に動揺したが、内面で収まっているのでセーフ。

——生意気だ生意気だっ、その乳と同じくらいに生意気だ！ 成人済みの私と同じくらい大きいなんて。パットを重ねた偽乳に違いない！ 不正だ不正だっ！——

「……………ニヤー？」

さつきから言葉を覚えたばかりのベイビーポケモンの如く、ニヤーしか言っていない。ヴィヴィはシャクナゲからの『地獄見せてやんよ』的な、中指を心の中でおっ立てている視線で射されているが、全くの無反応。

それもその筈、今のヴィヴィは——

『次は第二審査です！ 各選手は四回まで技によるアピールを行ってください！』

バトルでは役に立ちそうもない技だつて、コンテストが舞台であれば効果的と見なされ、能力やレベルが低いポケモンにも思う存分活躍の機会が与えられる、それがポケモンコンテスト！

ヴィヴィはバトル向けの技ばかり覚えているので、コンテストでは恵まれた地力によるアドバンテージも獲得出来ないなので、眼に見える形で不利……………

……………でもなかった。台本には——と記入されているのだから！

「アクアテールです♪」

本心を悟られぬ様に、わざとらしく扇で口元を隠してから、一番手として放つ技は「バトル視点では」ミロカロスに適さない物理水技。

尾で素早く、三日月状の軌道を描けば、制止した尾から間を置いて水滴がしたたり落ちる。

じて漏れ出す。

「おおつ、やってくれるポケモンが居ましたねえ〜！　今回それはアリですからねえ〜〜！」

「そうなんですよね！　一に萌え、二に萌え、三に萌え！　その心があればどんな技を使ってもイイのです！　実行出来るかは別の問題ですけど！」

「あんな猫ちゃん私も拾いたいっ！　飼いたい！　寧ろヴィヴィ選手を私に譲って頂けませんか!?　トレーナーさんっ!?!」

「ニヤハアアア〜ン？　ヴィヴィちゃん萌え萌えラブリ〜ル？　お姉さんとイイコトしようニヤアハア〜ン??」

ピロンピロンピロンツ！

各審査員四名が持ち寄ったポイントは6点、最大評価を得れば24点となる。

ステージ横に配置されている長方形パネルは“23”まで到達している。

初参戦であるのに、シヤクナゲに勝るとも劣らないアピール！　棒読み過ぎるので本当は20点なのだが、レギュレーションを解読した加算点として3点、合計で23という結果だ！

(……………キツ、キイイイイ〜!! どっ、どっ? どっ! わた、私と同じ点数ですつてエ!? ダツ……………ダメよシャクナゲ、落ち着いて……………水タイプは落ち着いて清らかな生き物なの……………そして私は世界一美しいポケモン、ミロカロスなのよ……………スー、ハー、これはマスターの責任でもありませんね……………事故の様な物ですわ……………)

デボンイヤホンから、シャクナゲのマスターが謝罪する。

どうやらジツクメンバーを除いた出場者の全員が『覚え無い技を使って良い』ルールに気がつかなかったらしい。普通はどうせいつも通りだろうと、素通しさせてしまう欄なので、ネリが目ざといだけなのかもしれない。

(張り合うつもりですかっ、ならば妨害して差し上げましょう!)

二手目に繰り出した技こそ、本当の妨害目的として覚えた技、あられ。

水タイプの大半がれいとうビームを覚える様に、付随する様にして何故だかあられを覚える。

ミロカロスに氷タイプは複合されておらず、かと言ってシャクナゲはふぶきを覚えてる訳でもない。

『シャクナゲさんがあの技を使うとはッ?!』

これもコンテストならではの用途、アピールとしては控えめな威力になるが、他のポケモンをびつくりさせてしまい集中力を削ぐ効果がある！

(ウフフツ……私にあられを使わせるとは褒めましょう……一年か二年ぶりに使わせて頂きましたわ。あのメタグロスもその他大勢と一緒に――)

ステージ内に留まる小さな雪雲を生成、氷の粒を降らせるシャクナゲの姿……彼女が本気で「敵」と認定した相手が出場していなければ、隠し持ったままで終わる妨害技。

軽く片脚を持ち上げながら、滑り止め加工されたブーツで降り立った天狼星へ舞う姫君。

体幹にも優れている彼女は、他のポケモンがスツ転んでもワイヤーアクションの如く、笑顔をキープしたまま滑り抜く。

20点、妨害メインの技でこれだけの点数を稼げるのは、彼女くらいの物である。(ヴィヴィ、もう一回なきぐえー！)

「……………ニヤ、ニヤ〜ア？」

(！ハツ……フフツ……！ 鉄仮面は剥がれておりませんが、内面はガタガタになったようですね！)

大体同じセリフがシャクナゲにも当て嵌まらなくもないのだが……

評価が高いからと、コンテストは同じ技を連続して繰り出したら逆に、審査員や観客は興ざめしてしまってマイナスポイントを与えられるのだ。

初手と同じなきごえを二手目でも、技を使えるだけ他のポケモンよかマシだが、大方焦りから指示をミスってしまったか、指示を待てずに驚いた拍子に繰り出してしまったのか。

しかし、一見すれば初歩的なミスに捉えられるこの流れ、まさか台本通りの作戦だとはシャクナゲや、観衆は思わなかっただろう。

「……………ニヤー、間違えちゃった、ニヤー」

「……………ハッ、ハオオオオウウツ!? ドジっ娘ヴィヴィちゃん萌えええッ!!」

(なっア!?! なんですってー!?!)

そんな解釈のさせ方があったのかっ!

しいい!! マアーニヤツニヤツ!!)

あのシーンを手がけたのは、やっぱりネリだった。観客席で爪だけでなく脚裏まで叩いて合わせて、普段は絶対しない蒼鋼少女の下手つぴな棒読み演技に大爆笑!

(徹夜テンションで色々書いちゃったけど……ヴィヴィちゃんゴメン! それくらいしないと優勝は狙えないと思ったんだ! 出場ノウハウが無いのなら媚び媚びの、あざと萌えで強行突破しかないって!)

観戦してるコツチまで恥ずかしい……ヴィヴィは優勝を目指すと(ていうかチーズドッグの為に)奮起していた物の、強豪が揃うであろうコンテストだ。マトモにやり合わず審査員や観客の視線と心と色欲を、かつさらう方法が……アレだ!

同性の爽羽佳が鑑定しても、ヴィヴィは素晴らしいロリ巨乳美少女でビジュアルだけならば、猫耳アクセがなくても100点出せる。

が、不安の種は『演技』

(ヴィヴィはそんなのした事ないからなつ! 一応練習したんだけど棒読みで、表情の硬さ種族値130のままだったからな……台本見て俺も指示するべきか悩んだけど……くあああ! 後で絶対怒られるくくけど……)

「ニャー、ヴィヴィは、分からない、ニャー（棒）」

——ああいうヴィヴィも……可愛いよ……ヴィヴィでコンテストに出て良かった——



（……………マスター、爽羽佳さん、ネリさん……後で覚えておいてくださいね……こんな辱めを大観衆の最前線で……っ）

沸き立ってくれるのは、大いに結構だが優勝しなければ割に合わない！

鋼の彫刻の二つ名を与えても違和感の無いヴィヴィ、現在は本当に彫刻と化している。

表情・感情・理性・口調。この4つへ強力なレブリミッターである南京錠と鎖で雁字搦め、出逢った当初よりもずっと人間的な要素に乏しく、機械的な少女として、オートクルーズ機能のまま活動しているだけだ。

（……………非イ科学的です、非イ論理的です、抑制しなければとても実行出来ません

……つ、
恥ずかしい……この感情すら今は内面を彷徨うのみ……です……)

Segment・hexa——コンテスト決着！

新手の公開羞恥プレイの様な——マスターだけならともかく——4万だか5万だかの観客が缶詰された観客席に囲まれて、猫科とは何ら縁の無いメタグロスがニャーニャー……尻尾を振りながらネコグロップで、グルーミングする仕草を魅せる……上半身も下半身も、立ち上がってしまふ男女が増える増えるわ。

これが出逢った当初のヴィヴィであるならば、羞恥心を抱くことは絶対に無かった。なんせ下着を「はいてない」のに、ミニスカートを翻しながら戦っていたのが証拠として残っているのだから！

以前は理解できなかった、人間やポケモンではなく、一つの生命体としての「心」あらゆる情動と感情をパスロックしたのに、100%にならず99%。

表には出さないだけでヴィヴィは羞恥心を完全には、押し殺せないまでに道徳や、豊かな感受性を築き成長している。

喜怒哀楽を得たのに、自分からリミッターを掛けるだなんて、スパイスに飛んだ皮肉

である。

『三度目のアピールタイムです！ 実質的にシャクナゲ選手とヴィヴィ選手の一騎打ちと化しております！』

(そんな馬鹿な……：あられを解禁したのに……)

本日限りの限定属性：ドジっ娘——という事にしておく——を炸裂させ、またしても23点を獲得したヴィヴィ。

第二アピールでシャクナゲを上回ってしまった！

これにはシャクナゲもショックを受ける！

今までコンテストに出ていないなど嘘、そうまくし立てたいくらいに、憎らしいほどのエレガントでキュートな少女！

(ヴィヴィ、あくび！)

またしても、本来メタグロスが覚え無い技を指示させるジツク！ もう『彼が見たいだけ』としか思えなくなってくる、清々しい表情だ。

やはりヴィヴィ相手だと、セクハラブレーキが効かなくなってしまう事がある……：気がついてはいるけど、それ以上に見たい！ 利己的だと自分で軽蔑しながらも……：止めら

れない!

「フ……………ニャアアア……………ヴィヴィ、眠たくなった、ニャー(棒)」

一瞬だけ、観客席のネリ&爽羽佳へ無表情のまま視線を送り——チーズドッグ食べ放題が待っていると、心の中で百回ほど大好物の名を連打させながら……

「ク、ニャアアツ……………フニャアア(棒)」

ヴィヴィの アピールは きにいられた!

「まるで気まぐれな猫ですな……………! メタグロスを忘れてしまう程に、チヨロネコやニャースの声を真似ておりますなあ!」

「くうううう……! あざといっ!! 萌え死ぬう! 気乗りしなさそうな表情と、感情のこもらない声色、こなゆきを振りまく様な氷よりも氷らしい目付き……………!」

「あつ、あつ……………! その視線堪りません!! 実は私マゾっ気あるんです! 年下の口リ巨乳猫に眼で殺されちゃううう!? ああん、ダイヤモンドラブリイ……!」

「ブイツヒツwwww ヒュヒュニャアwwww 生粋のネコつて、そつちの意味じゃないニャンwwww 私からすればちよつくと、猫演技に甘い点があるニャンwwww だから今すぐ私の胸に飛び込むニャ、ヴィヴィにゃんwwww お姉さんがベッドの上で手取

り足取り個人指導してあげるニヤ。ん。ん。ん。つwwwwww」
真顔で変態弁する代表。

この中ではマトモな部類に入るピカスキー。

突然、コンテストとは関係の無いカミングアウトしたパウスキー。

誰かコイツ追い出せよと、誰も言わないのが恐ろしくなるセリヌ。

『あ~~~~、心がニヤンニヤンするんじや~~~~!』

万単位の観客の皆様もノリノリである。

もう、シャクナゲの事なんて頭から消え去っているくらいには

(さ。せ。ませ。んわ。ア。ア。ア。)

プライドになんて縋ってられない、最高の美しさを持つ自分でも、手に負えない強敵が現れた決断の刻。

最強のアピール技を使わせて貰う! 生きている間で、ここまで追い詰められるとは

……!!

『あゝとツ!? シャクナゲ選手がヴィヴィにやん……じゃなくて、ヴィヴィ選手をくすぐっております!! そんな技を覚えていただなんてー!!?』

オオオオオツ!!? 百合百合イイ???

超展開、戦闘民族な容姿の司会者が、歓喜の声を高らかに上げれば観客も手舞足踏。暗黒太極拳を踊り出す物も現れる始末。

相手の防御と攻撃を下げる技、くすぐる。

ヒンバス時代の卵から、遺伝させてまで、ミロカロスに使わせたい効能ではないが……

——ホラア……貴女のおっぱいも防御力が低下して、カスタードケーキになってるわよお? 防げるのにしないってどういう意味かしら? 特性はノーガードじゃないでしょう? コシヨコシヨコシヨ……——

——あんッッ!!? やあ、止めてくださいニャァンンッ! にやはんつ、ニャハアァ……なんだか下の方から、ボディパーズしちやいそうな気分になってきた

……ニヤンッ!? ——

「っ!? つ!? ツ? ツ? ツ? ツ? あっ、あんのミロカロス!! ヴィヴィにやんに愛撫しやがってニヤン!! そこを退いて私と場所替えるニヤ! そんな気持ちよさは偽りニヤあ! 眼を覚ましてニヤ! ヴィヴィにやんくん!!」

*セリーヌだけにはそう見えております

阿鼻叫喚遊戯、コンテストに参加し優勝の方程式を覆されてなる物かと、シャクナゲはプライドをハサミギリロチンして、ヴィヴィヘダイレクト妨害!

「ニヤ、ニヤ、驚いちゃった、ニヤ（棒）」

………実際のヴィヴィは、擦ったくもなければ、感じる事も無いのだが。
クリアボディだし……リミッター掛けているしで。

満点を阻止され得点は逆転、乳練り合いを創り上げたシャクナゲが22、ヴィヴィは20、僅差ながら第三アピールタイムはシャクナゲの勝利である。

（ハアハア………コンテストつて………ここまで疲れる………イベント………でしたっけ………ハハハ………ア）

回想しても殆どがぶつちぎりで優勝してきた彼女は、感じた事のない疲労感に戸惑いながらも、何故だか腹黒な顔ですら恵比寿になりつつあった。

『最終アピールです！ 悔いの無い様にどうぞッ！』

もう他の参加ポケモンですら、シャクナゲとヴィヴィのタイマンバトルと認めてしまっており、棄権して両者の演技を心待ちにしていた。

（最後っ！ どうするか……………！ ヴィヴィ、ゆうわくだー！）

「……………ニヤー、ここが気になるのかニヤン？」

出ました、ヴィヴィ最大の武器かもしれないFカップおっぱいを二の腕でギュツ。

左右から圧を入力され、乳袋がポップアップ。さながら飛び出す絵本ならぬ『飛び出すおっぱい』

「改めて全身見ますとももの凄く短いスカートですねえ!? ロリ巨乳の持ち味を最後の最後で強調…………いけません、厳正な審査をしなければならないのに、ヴィヴィ選手へ考え無しに6点入れようとしてました」

「わー、嬉しい、ニヤー（棒）」

全ての感情を押し殺したヴィヴィは、事務的過ぎる口調のままとりあえず、喜んでおく。

ニヤーニヤー鳴いとけばいいだけなのだから、楽であると思回路を頑張つて切り替えたらしい。

（私を忘れんなですわア。ア。ア。ツ！　メロメロ+メロメロボデイ強制発動〜〜！）

ブラウスのボタンが、辛うじて寸止めされているミツチミチFカップ、あのアピールを上回るアピール……同じく！　おつきい　おつぱいを、強調させるしかあるまい！

ヒンバス時代は貧相だったお胸、マスターから直包みされ、パン生地のような質感を持つおつぱいへ育て上げられた。

ヴィヴィが触ったら崩れるプリンなら、シャクナゲは伸び縮み自由なアハ体験のターゲット！

全てがヴィヴィの虜と言っても良い観客の注目を奪い返す。

貴族服を緩めて、がつつり“荘厳なる夜明け”をアピール。

内心嬉しくて仕方が無い、もう認める、作業の様にこなしても勝つてしまう世界一美しい自分は、互角に張り合えるだけの相手を求めていたのだとー！

「むんっー」

「……ニヤン?」

前回に引き続いて、今回もFにFがデッドロックされている!

まるでFとFが引き寄せられている!?

視聴者へ向かって「どっちのFが好き?」と訴えているく〜!?

顔とか腕とか……色々挟まれたい欲求を解放したい素人おっばいと、プロのおっばい!

これぞ驚異(胸囲)の代行者!

あまりのエキサイトっぷりに、一部機材が破損し緊急修理を施すスタッフも、本当はFとFの「おっばい席取りゲーム」を見たくって溜まらないのにつ!

『はーいっ! そこまでー! 両選手とも胸を退けて距離を取ってくださいー!』

こんな事言われる参加者は、後にも先にもこの二匹だけであろう。

相変わらず感情リミッターが働いているので、棒読み無表情マシンのヴィヴィと、まだ最後の審査があるのに満足げに長く伸ばした、赤いヒレ髪を耳に引っかけるシャクナゲは汗だく。

彼女の得点も28点であった。持ち点はリードしているが微々たる物で、最終審査で逆転される可能性もあるだろう。

(させませんっ！ 優勝するのは私ですっ！)

(……………ニヤァ、ニヤァ……………)

緩め込んだ衣服を着付け、左右からのプレスを取り止める。

短時間でライバル心が芽生え、蹴落とすよりも純粹にコンテスト技術を競い合いたい

！
そう思ってくれている彼女には、非常に申し訳の無い最終審査となる——

『では、この瓦を何枚割れるか！ ブレイクブロックですッ！』

「……………ちよっ!? ポケスロンじゃないのですよっ！ 何故腕力が物を言いそうな種目設定なのですかっ!?」

ワンリキー君が重たそうな顔をして、運んで来てくれたのは厚さ20cmの瓦が20枚
！

自分はバトル経験の無いレベルーなのにつ、突然ビジュアルやバトル以外の要素が重要なコンテストで、簡単操作のミニゲームみたいな真似をしなければならないのか！

これには流石のシャクナゲも、平静を保っていられず抗議しだす。まあ、当然の反応であろう。

「静粛に静粛に……シャクナゲさん、これは『萌え』コンテストです、私達がトチ狂ってこの会場をポケスロンで埋め尽くそうなどは考えておりません。……別に全てを割らなければ得点が入らない訳ではありませんよ?」

キリツ、変態集団の長は、ブーイングする腹黒ポケモンの本性がバレているとか、デリカシーの無い発言をせずに、さりげの無いアドバイス。

(………フフツ、そういう事ですか、私は今日だけで何回取り乱してしまっているのでしょうか……つくづく、今回のコンテストは頭が可笑しくなるくらい私を熱くさせてくれますね……)

そう、コンテストである本質は何ら変わっていないのだ。

この種目だけ隠していたのも、土壇場からの順応性、今までの審査で掴めた洞察力、皆が求めている『萌え』への要望にお応えする決断と判断力。

締めくくりにはもってこい、レベル1の物理型ミロカロスですら、勝ち目は……ある

!

「アクア〜テールうゝ!? イッ!?! だ、あゝ、あゝ、あゝ……ダメっ、瓦さん達が可愛そうなのっ! シャクナゲ割ることが出来なあくゝ!」

そのまんまの意味で、一枚も割ることが適わなかったただけなのだが……

キアラ崩壊は覚悟の上で、水流の勢いで叩きつけた尾。

めつちや痛い……尻尾の中段がジンジンする……

はじき返されて反動ダメージ、瓦なんかに負けるミロカロス、されどレベル1の箱入り娘なので仕方ない。その前に瓦がブ厚すぎる。

尻尾を抱いて座り込みたいけどアピールアピール! あざとく舌ペロさせながら逆手ピース!

幼い頃の自分だったピンバス種すら倒せるか怪しいか弱い女の子を演出!

(うっ、ウケてる……これが「萌え」……)

なんか、新しい扉を開いてしまった気がする。切羽詰まった状態になったのもこれが初めて。

挫折を味わったことのないシャクナゲは、極めてソレに近い物を第二審査中に味わい、マスター共々『コンテストの楽しさ』たる原点を思い出せたのだ。

(さっ、メタグ……ヴィヴィさんの番です)

あれだけハンカチ引き千切る勢いでグヌヌしていたのに、アイコンタクトを交わし

ヴィヴィの演技を見守る事に専念する。

もう「勝つても負けてもいいや」とすら思っている。こんな気持ちになったのは初めて……絶対に一位獲得を命じられ、有言実行してきたのに「負けてもいい」とは――

(台本にない種目だけど迷うことはない! ヴィヴィ、9割の力でコメットパンチだ!)

そりゃ、予想出来る方がおかしい。

歌唱力だとか料理だったら敗北確定だったかもしれないが、あまりにもヴィヴィに適合した最後の種目!

全開だと機材を越えて、ステージをぶっ壊しそうなので……ちよつとだけ抑えて……

「ニャー、こめつと☆ぱくんち、だ、ニャー(棒)」

ファンシーで柔らかかそうなネーミングに変更したって、彼女の主力技かつ、集いし帚星が蒼穹となる必殺の一撃であるのには変わらない。

ぶつ切りセリフのまま、9割の力で瓦20層へ――

「……………全部割れた、ニャー、ヴィヴィ、頑張った、ニャー?」

『なっ?!』 なんと言う事でしょう! 例えグラードン級の伝説のポケモンがじしんを使ったと想定しても、破壊されない衝撃吸収素材で作り上げたステージが……真つ二つになつてしまったアア!!?』

小柄華艶な容姿であるのに、ネコグロブから何時もの蒼い手甲へ交換。

実に易々と地表まで突き破つてしまった根底には、ネリそわジツクへの処刑予告でもある。

(ひいえ……)

会場内で大地震が起こり、反動でスポンサー看板の一つがシャクナゲと、ヴィヴィ目掛けて落下したのだが――

「……………ニヤー」

棒立ちのまま片手キヤツチ。

靴がバランスー代わりになっているので、震源地でも彼女のボディは微動だにしない。

――だが、そのおっぱいは激しく揺れ動いていた――



『それでは！ 結果発表です！』

ちよつとしたハプニングはあつたけど、控えていたコンテスト統括委員に所属する黒服サングラス達が、既に半分近く修復しちやつてるので気にしなくてもいいでしょう。

激闘を繰り広げた二匹以外は同率3位、途中で引つ込んだから順位も何もあつたものではないが、限られた枠に残つた実績は誇つて良いだろう。

会場の照明は落とされ、ただ二つのライトがシャクナゲとヴィヴィを映し出す。

(……………)

(……………)

少なくともシャクナゲは、やりきつた顔を見せているので、どんな結果が出ても受け入れられるだろう。

……もう名誉だとかプロ意識だとか、彼女はそれだけで生きる存在ではなくなつてい

『……………優勝は！ シャクナゲ選手ですツツ!! おめでとうございますッ
!』

一度だつてしたことの無い、両手を合わせて祈る様な仕草を作り上げていた女性のライトだけが残つた。

観客の誰もが「やっぱり」だとか「当然」と思っていない。

本場にどちらが優勝するのか分からない、圧倒的な差を作り上げて結果など見えていた今までのコンテスト、切磋琢磨できる「ライバル」が彼女のコンテスト感を変異させてくれたのだ――

「ありがとうございます！ 私、負けたっていいやって、プロ失格な想いでこの場に立つておりました。ですけどつ、優勝……出来たらやはり……嬉しい物なのですっ!」

インタビューなど上つ面だけ、世界一美しい私が出場したのだから当たり前でしょう？

心の中では対戦相手を見下し、自身を昇華させる踏み台としか思わなかったのに――

「……………この子、ヴィヴィさんが居てくれたから……私は優勝出来たのです。ええ、価値観を色々と、良い意味で変えてくださいました! 萌えなるジャンルは初開催です

が、今後は定期的に行われるのだと思います！ 他のコンテストもですが、四連覇をしたプロとしてではなく、一匹の挑戦者として参加させて貰います！」

ヴィヴィが居たから優勝出来た

矛盾な響きだが、何となく皆には真意が理解できた。

優勝カップやリボンなど下に置き、健闘を称えながら握手を求めている。

……シャクナゲのこんな姿、見たことが無い！ 表彰式で絡むのはコンテスト関係者か、カメラマンなどの報道関連者くらいだったのに！

「ヴィヴィさん！ ありがとうございます！」

「（こちらこそ……どうも、です……）」

気持ちのリミッターを解き、何故こんなに感謝されているのか、ヴィヴィはイマイチ理解しきれていないけど、不快ではないし観客や審査員も感動してるし……

空気を読まずスタスタ帰ってしまうヴィヴィは死んだ。

「カメラが来ましたよ！ ピースですよヴィヴィさん！」

「んっ……………」

完全に把握や理解しきれなくても、場の雰囲気や彼女の想いを察して、応じる事が出

来る様になってるヴィヴィイが生まれていた。

「……………ヴィヴィイ選手、全ての演技で熱が入っていないのが致命的でしたね。メリハリを付けるべきでした」

一回、二回なら「そういう演技」として評価されていたが、最初から最後までずっと同じ口調、表情で突っ走ってしまったのが優勝を逃した理由だ。

(……………リミッターを、取り付けてしまったばかりに……………っ……………ですが、リミッターが無ければ第一審査で落とされて……………ああ、チーズドッグ……………食べ放題……………ビツフェ……………)

ジツクからは『この演技は表情を』だとか『緩急を』だとか、指示はされていたけど、おっぱいを強調させるよりもヴィヴィイにとっては難しい事だったらしく、実行すれば下手なのが明るみになってしまうと警戒した結果が…

にやんにやんパワーで騙らかせた……………と思いきや、審査員の判定眼は曇り無い。そうでなければ変態集団の首領は務まらない。

(ヴィヴィイちゃん、残念そうだニャー……………今優しい言葉を掛けたらコロツと落ちてくれ

ないかニヤー……? ギユフツWWWWWW

バネ尻尾をシコシコ、ペロペロさせながら、ヴィヴィにやんに萌えていたコイツも、何だかんだ審査員としての役割を果たしていたらしい。

Segment・hexa——お怒りフォームの内側

「ごめんニヤさいイイ〜!!」

「ごめんねヴィヴィちゃんツ!!」

「ごめんよヴィヴィ〜!!」

「……………」

控え室に戻って早々、黒猫娘と羽娘とのおやが、ジャンピング土下座。

無言の長さが怒りを主張、ドカンツ……椅子に八つ当たりする勢いで脚を組んで座り込む。

そんな姿勢だと黒い紐パンが……などと、期待していい雰囲気じゃない!

「……………」わたしはオモチャじゃないんですよ……………」

ああ、腕まで組んだらおっぱいが乗っかって……だから、そういう事を考えている場合では無い。

「本当にごめん! 台本考えたのはこの二匹だけど、確認したのに止めなかった俺が悪

いんだッ！ 俺にはどんな死刑執行でもしていいからさ、この二匹だけは許してあげて
〜〜！」

またリミッターを掛けたのか、小さな少女がレジガス並の巨体に見えるプレッ
シャーを放ちながら、無慈悲無愛嬌でもキュートになつちやうお顔でも、いかりのボル
テージが六段階まで上昇している！

ブロック崩しの破壊力で、ようやっとビビり始めたネリと、優勝すればチャラになる
かもと淡い想いもコナゴナとなり、次は自分が蒸し鶏の香味だれにでもされると、前髪
全部下ろしたいくらい泣きべそつてる爽羽佳。

仲の良い二人は抱き合つてガクブルしており、守る様にしてジツクがヴィヴィへと何
度も何度も、どっちがトレーナーなのか不明瞭になるくらいに頭を下げる。

「優勝は逃したかも知れないけどさ、ヴィヴィは……慣れないのに一生懸命頑張つてく
れたよ……」

「……………えっ……………？」

「俺は感情が伴つてないとは思つてない、俺は抑揚の差違を感じ取れたよ？ リミッ
ター付けてたけど俺には分かった！ 恥ずかしい想いさせちゃってゴメンね……」

——ヴィヴィの色々な姿、見られて良かったなつて想つた——

「……………っ!!? チ、チーズドッグ77本で……許してあげますっ……………」
アクセスしてしまった、彼しか入り込めない心の部屋への侵入を許可させて。

念話なので他の皆には分からなかったけど、自分も彼と念話したいと想っていたから、相互アクセスが可能になっていた。

彼の本心が伝わってきたら、リミッターが勝手に解かれてしまって、サイコパワーで椅子を急いで半回転。

これで綻んでしまった表情、見られずに済んだはず……

「分かった! 77本買わせて頂きます! 本当にごめんなさい!」

「マニユハハハア! やつりイ〜! コメパン食らわずに済んだニヤシ♪ ご主人つたら太っ腹ニヤ〜ね!」

「お前はもつと反省しろよオオツ!!」

欺くことが大好きなネリ、全く懺悔しないのが彼女らしいっちゃらしい。
ネリを片腕でブンブン振り回しながら、誠意を持って謝罪するジツク。

(……………そこまで言われたら、許してあげなければ虐めてるみたいになってしまうし……狭量だと思われたくないので……)

「赦免です、今回だけですよ……全く、しょうが無いマスターです……………」

ヴィヴィの なつきどが さがった……

……と、おもいきや？

(ちよつとだけ……心理回路を損傷していたのですが……修復してくれましたので……)

ジツクに はげまされ ヴィヴィの なつきどは ぐーんと あがつていた!

審査員の適切なコメントと判定に、少なからずショックを抱えていたヴィヴィ。

あんな一言で落ち込みそうになった、二ヶ月前の彼女ならば絶対に、何の反応も示さなかつたのに……これも成長している証であると、困惑しながら受け止められたのも、マスターである彼に励まされたからだ。

追言すれば『狭量だと思われたくない』も、二ヶ月前の彼女なら……であるが、様々な触れ合いと経験で情緒を育んだ現在のヴィヴィであるならば……で、ある!

▼▼▼▼▼

「もしもし? 貴女はヴィヴィさんですよね?」

もう間も無く15時だし、疲労が蓄積し糖分を欲しているしで、常連となったチーズドッグ屋さんへ進路を取っていたヴィヴィ達。

裏口から出たのだが、そこには一匹のポケモンが待ち構えていた。

「ワタシ、ミナモ美術館の館長の手持ちポケモンです。ニックネームは《パリエ》と申します」

ポケモン界の画伯、手持ちであるのに館長が「先生」と呼称している美術感性に富んだ、えかきポケモンドーブル。

ほぼ全ての技を視た瞬間に「スケッチ」すれば、その技を覚えてしまえる固有能力は、描いた物を一生忘れずに、記憶力に移し替えてしまうのだとか。

何をしてくるのか冗談抜きで読めない、ステータスはかなり低いけど、相手にしたくないポケモンの筆頭である。

「細やかな物ですが……こちらをどうぞ」

「!? チーズドッグのつぶつぶバナナ味ッ!……と、名刺」

対戦では使用者皆無と言って良いほど、使い道を見いだすには上級トレーナーですら一年間悩み続ける、ギフトパス。

焼きたてのチーズドッグが、独りでに自分の手に収まっていた。ついでにパリエ氏の名刺も……

人化している彼女は、筆尻尾から分泌する魔法の絵の具で取り出した白紙のカード6枚へと、命を吹き込んでいく――

「ヴィヴィさん、貴女の絵画を描かせて頂きたいのです。あつ、これは皆さんへの名刺となります、連絡先へは何時でもどうぞ」

「おおぅッ!? カードに文字があ! 絵があ! リアルタイムで名刺作ってるよこの子〜! スゲー!」

「簡易な物ですみません。手掛けさせて頂く作品は、時間と労力を惜しみませんので」
(この名刺の自画像も、もの凄く上手いのに簡易なのか……………)

美術館に飾られるのは、シャクナゲの絵画であるけど、館長と共にコンテストを観戦していた彼女は、培った造形技術を二匹の為に使いたいままでの感銘を与えられた。

あまりにも惜しい、ヴィヴィの絵画を手掛けられないのは。

なのでお仕事としてじゃなく、個人の趣味であり直感したインスピレーションをどうしても形にしたいと、ヴィヴィへ逆依頼する。完成した絵は寄贈する形となる。

「ふむふつ、ではお願いします……モフッ、モフウ……あったかいうちが……一番、です……」

それはパリエの情熱に対してなのか、チーズドッグに対してなのか……

ここまで頼まれているし、チーズドッグを貰って食べたしで、断る人非人な少女じゃない(ポケモンです)

……ふと気がついた。チーズドッグが好きだと、パリーエは何故知っているのだろうか？

……そこら辺はシカトしておこう。劇薬が混入されている訳でも無いし、パリーエからはアーティストスピリッツが、可視化されオーラになっているしで。

「やりました！ 許可を下さり感謝です！ 完成の際は自宅へお届けさせて頂きます！
では暫しお待ちを〜！」

許可を与えられ、一気に声色が弾んだ。

彼女の両腕が翡翠色をした、鳥獣―ハルピュイアを彷彿とさせる翼に変化したっ!?

……あれは、どんな技でも覚えてしまう彼女流のそらをとぶ、翼の形状がピジョットと同じなので、ピジョットのそらをとぶ姿を視た―描いた―のだろう。

美術館横のアトリエへと、尻尾でバイバイしながら飛んで行った。

「凄いいじゃないかヴィヴィ〜！ 簡易でもメチャクチャ上手いのに、手間暇掛けて描かれた世界で一枚だけのイラストだよ！ すっごい楽しみだなー！」

「……………そ、ですね……………作品が贈られてきたらレビューさせて頂きますよー……………」

あんまり乗り気では無い？

違う——

(……………マスターに、あげよう……………そつちの方が絵画も喜ぶ……………そんな気がしました……………)

自分で自分の絵を見たって、ナルシストみたいだし。

そういう訳しながら、ふつふつと頬が紅潮してるのも、焼きたてチーズドッグを食べているから……………って、こじつけておこう……………



ありそうで無かった、今後は一つのジャンルとしてブラッシュアップされ、本格採用となるであろう「萌え」コンテストの翌日、ミナモ自治体が所有しているバトル可能区域、正式認定に基づいて設計されたフィールド内へと立ち入った。

ジックは事の経緯を浮かべながら、依頼人となった少女トレーナーを見つけて、まずは「メッセージ並びに、バトルのご依頼ありがとうございます」と挨拶——

ヴィヴィがコンテストに出場し二位を獲得した、簡略詳細と速報だけがホームページを更新したネリ以外の子は就床している、昨晩の23時を回想する。

手持ちのマイルームは吹き抜け構造の二階に建築され、ジックも同一の設計となったマイルームが一番西側にあるのだが、それとは別の——フリーランスの彼が作業を

する仕事場でもある——北歐テイストを注入しながらも、必要な物をすぐに取り出せるレイアウトに拘った書斎。

二階がリラックス、一階がワーカー。

広くはないけれどデスクを中央、側面や背面には書籍や道具に囲まれている。

アームレストと背もたれが装着されたワークチェアを少し動かせば、色分けされた仕切り板が、迷うことなくファイリングされた資料まで導いてくれる利便性は、多様なレイアウトを試した末の完成形だ。

「コンテストの途中でメッセージ送られたのかっ、早くないか？」

新着メールの投稿時間は、ヴィヴィが瓦と会場の一部を星砕きしてからすぐだ。

つまり、送信者はあの場に居て、あの場からジツクのホームページを通してメッセージボックスへ投稿したらしい。

ベランダの手すりですぐで休んでいたホーホー三兄妹。

ホームページ更新後、檜香の丸太のユニットバスに浸かりながら、猫耳や猫尻尾を付けて、確かに棒読みで無表情のままだったけど、普段通りの生活では考えられない格好・セリフのヴィヴィを思い出して、予定時間を20分もオーバー。

のぼせた頭を冷やすために、ベランダへ向かったらホーホー達はビクツ!!

勝手に止まってごめんなさいと、一定リズムで傾げる首を下にし続け謝る。

「荒らしたりしななければ、休んでいいよ！俺こそ寝てたのに邪魔しちゃったかな？」
激昂する理由、一家の主人は何一つ無い。夜間帯に活性化するホーホー達は、ミナモ
周辺に生息しているのだろう。

新規散策コースをナイトフライトしていたら、丁度良さそうな手すりがあったので
……

安堵してくれたのか、今度は規則正しく頭を傾げたり、回転させお言葉に甘える事
にしたらしい。

人語ではないけど、異種族と交流しているトレーナーなら理解できる。

「依頼人の子は、対戦フィールドを指定してきた。草原か……どの子で迎え撃とうか
……形式はダブルバトル——まだタッグを組ませた事はないけど、ここは——
」

難しい顔はしない、スターウオッチングしながらの熟考。大まかな戦法を何個か練り
上げておく。

北の夜空にはキリンリキ座、南にはテツポウオ座、西はハブネーク座、東は……ここ
からじやあまり見えないのだがモココ座があるだろう。

キンセツやミナモの都会でも、気が遠くなる程離れた天然プラネタリウムは遮らず、
天文学と占星術の研究者がゴチルゼルを連れて訪れる、ホウエン地方。

最も幻想的なのは120番道路、こだいづかの近くからのパノラマだけど、ここからでも十分頭上の満天の星々を堪能出来る……！

ホーホーさん達も、彼の真似をして見慣れているハズ———だけど何一つ同じではない———星巡りの自然優美には、首を傾げるのも忘れてしまっていた。

んで、依頼人というのが———

Segment・hexa——カードだったらTAG TEAM

「初めましてっ！ ジッ、ジックギンツ！ 出身はジョウトのヨシノシティでゆえす！
パン屋の娘やってます《シエルン》ドウすっ！ ハーハーハー……ごご、ごめんなさい、ネットでバトル依頼したのって初めてで……ジックさんのページはかなりの頻度で閲覧させて貰ってます！ こんな田舎者の依頼を引き受けてくださり感謝、感謝ですっ！」

「……随分と緊張してますね……俺の事は請負人と思わずに、もつと友達と接するくらいに力抜いた口調で大丈夫ですよ。俺もそうさせて貰えたら幸いです！ トレーナーが強ばっていたら、ポケモン達にも伝わっちゃいますし」

温泉町でバトルした少年、ズナミヨは実家が経営する旅館を宣伝する為に手ぬぐいを頭に巻いていたが、こちらの垢抜けきれてない少女はチエック柄の三角巾を頭に付けている。

大きめのポケットを3つあしらった、カフェエプロンと装飾自体は洒落ているのだが……素体がどうも化粧っ気がなさ過ぎて———というよりまだ興味を惹かれないの

か——寝巻きはイモジャージで、純朴な印象を抱かせる子が依頼主である！

「そう……ですか？……？　では……じゃなくて、じゃあジツクさん……！　都会っばい感じで接してみます！」

産まれがド田舎……は言い過ぎだが、数々の有名トレーナーの出身地である　はじまりを上げる　かぜがふくま　ワカバタウンも、かなりスローライフを満喫しかねない、のどかな土地であるが前述した有名トレーナーや、ポケモン研究所が観光名物となっているのに対し、ヨシノシテイは特に……無理して捧げるのならば、自腹で新人トレーナーへランニングシューズやマップカードをプレゼントしちゃう、案内じいさんくらいだろうか？

——彼の情景描写を語ると、子共に恵まれなかったので、それっぽい年齢のトレーナーには優しくしたくなるのだとか——

人口も規模もワカバと同じくらい、お隣の町だつてのに影が薄すぎる、ジョウト地方を紹介する特番でもヨシノだけ忘れ去られており、住民が一丸となって怒りのクレームを出した笑えないエピソードがある。

シエルンは田舎育ちである事を気にし、憧れの都会に移住し両親がパン屋を開業して数年……

実家でお手伝いしつつ、トレーナー業も中堅くらいにはなれた……気がしている。

「私の家で焼いたパンですっ！ どうぞっ、皆さんの分もありますので……焼きたてじゃなくてごめんなさいですっ……」

どっから、どうやって取り出したのか、振るえる両手で渡してくれた紙袋には、タイプごとの代表ポケモンをイメージした自家製パンが17個も！

腰が低すぎて、自信がイマイチ持ちきれない彼女だけど、パン作りの腕前は後ろ向きに非ず！

着飾れずナチュラルで穢れ無き色の素肌のまま、生地作りに励む様子を覗いた年配の客は《おじちゃんの色々なところも、こねて回されたい》とスケベな感情を持たれている件も、田舎娘は知り得ない。

バーベキューした時もそうだったけど、美味しそうな香りが鼻孔に入っただけで、昼飯を食べたばかりなのにお腹の虫は眼を覚ます……そしてもう砕けた口調が畏まった口調へ戻っていた。

「コンビニエーション……じゃなくて！ コンビネーションの練習がしたいのです！ 戦略考えて来ました、少しくらいは抗わせてくださいいっくす！」

「だからダブルバトルなんだね。そんな、歳は二歳しか違わないんだからいいって、頭そんなに下げないで……」

見ず知らずの人に騙されないだろうか、両親が倒れたと嘘の電話をされたら簡単に信

じてしまいそう……そして怪しい廃工場なんかに関連されて——彼女の立ち振る舞いを見るだけで心配になる。

そんな俗妄想は取り消して、互いに指定線に立ち使用するボールを2つ……腰から両手に移し替えた。

「私が勝てましたら、ヴィヴィちゃんを抱きしめさせてください！　握手させてください！　昨日のコンテストでメロメロにされちゃいました！」

猫耳は別料金なんですか？

そんなのだけは詳しくあったりする、骨抜きにされた会場内でジツクのホームページへメッセージを送っていたらしい。

（考えるよりも先にやつちやつたけど、コンピネーションの練習したいのも嘘じゃないし……勝てるかなあ、勝つてみたいなあ……思いつきりやつてみよう！）

第一バッターはシエルンとなったが、起床してからホームページを確認してみると、50件以上も似たようなメッセージが送られており、モーニングコールしてくれたメロンと一緒に変な声を出してしまっただ……ッ！

一部『ヴィヴィにゃんヴィヴィにゃん!!　スースーハーハーフーフーフーくんかくんかお

パンツ何色何カツプう………?』などと、冗談か本気か判別できないのはゴミ箱に捨てさせて貰ったが……

「いけつ、メコンとヴィヴィ!」

フィールドへの投擲タイミングは同じだが、より洗練されたフォームだったジツク側のボールが、先に割れてスカートを抑えながら青いメイドさんと、抑えずとも捲れない重力に逆らう蒼いスクールガールが、それぞれダイブボールとモンスターボールから飛び出す!

「出ておいで、スペランザとグリーンシャ〜!」

最短カットするようなフォームではない、真下から上空への魅せる為の投法。

繰り返す——リピートの名称が示す通り、黄色の矢印が円を描きながらオレンジの光と一緒に弾けるエフェクト……既に捕獲した経験を持つポケモンが、捕まえやすくなるリピートボールから、出現したのは——

「少しは強くなったって、自覚湧いたから依頼したんでしよう? 胸を借りる気持ちで

ぶつかりましょう、深呼吸して動悸を収めなさいな、シエルン」

とにかく走るのが大好き、瞬間速度が240km/hまで到達、速い物体を見かけたら競争したくて溜まらなくなる。

本来の姿は正に一角獣、灼熱の鬣はクリムゾンレッドに盛る……のだが、彼女は緩めにウエーブしているだけの黒髪であつた……？

ヴィンテージ感のあるマウジージーンズは、くるぶしで折り込み黒レザーのショートブーツで足下を締める。

キヤメル色のベルトで手首をスタイリツシユに演出、長袖だがシースルー加工が成されているブラウスは、まだ夏の残暑がある気温であると実感させてくれる。

シエルンの手持ちで一番レベルが高く、エース的存在、ひのうまポケモンギャロップ。両親の友達から交換で頂いたポケモンであり、生まれと育ちは大都会コガネシティなので、ヤボつたい主人よりも流行を捉えたファッションが光る。

(黒髪のギャロップとは珍しいですね)

炎タイプを失つた、それとも別のポケモンと勘違いしてしまいそう。

染めているのか？ ギャロップにとって炎の鬣は命と同じくらい大切な物なのだが…… 一見すればキツ、とした表情の話しかけづらい子、だが打ち解けるのは簡単でまだ頼りないシエルンを支えるお姉ちゃんに近い存在でもある。

「やりましたねーシエルンちゃん！ メコンさんならお相手できますよ♪ 他の手持ちさんが出て来たらとつても不利なので、読んでいたんですか？」

もう一匹のポケモンは、掌を返したかの様変わり。

ボールも薄緑色の煙が焚くネストボール、間延びした口調も、バタフライスリーブのワンピースは、南国調の色彩で上がバナナやレモン、下がライムやキウイカラーのグラデーション！

暖かな日差しに誘われて踊り出す、それは太陽へ感謝をしている儀式とも呼ばれている。

爽羽佳とほぼ同等なスレンダーボディだが背の高いスペランザと比べて、ヴィヴィより身長はある物の胸は惨敗してるロリ体型。それが あたりまえ なのです

ついでにトレーナーも、慎ましいジヨウトの感性で下着も色気とは程遠いとだけお伝えしよう。

ホウエンで集めた花で作られた冠は、彼女が踊り動けば心地よく、例えば踊りを見ていなくともバトル三昧で疲弊した心身はリラックス……

歌ではなく踊りでメロディアスな表現をする、フラワーポケモンキレイハナ。

グリーシャはシエルンが捕まえ、育てたポケモンである。採用理由は『ビジュアル！』
「……………もちろんっ！ ジックさんがメコンちゃんとヴィヴィにや……………ちゃんを出す

のは読んでいたんだから！ 貴女でメコンちゃん、スペランザでヴィヴィちゃんを相手にするの！ 有利対面だよつ、チャンス！ チャンスッ！」

（絶対嘘ね……ダブルだから簡単に縛りは逆転されるのに。キツカケはあの子、メタグロスのヴィヴィさんに萌えたからだけど、自発的に「ダブルバトルしたい」って踏み出せたのは偉いわ）

ポケモンと人生を、生活を歩む者。価値観など人それぞれ。

勝利至上主義のガチ勢ではなく、スペランザのマスター・シエルンはエンジヨイ派。

強いからそのポケモンを育てるのでは無く、可愛いから、綺麗だから、実に16歳の女の子らしい理由で捕まえて、ついでに戦わせていた。

そんなシエルンもバトル経験を重ねて、勝利に対して少しばかり貪欲な姿勢になって来た。

やるからには勝ちたい、それが格上の相手だろうが……トレーナーとしての本能が訴え、考えるより先にメッセージを送信していた。

『ダブルバトルをした事は殆どありませんが、ご教授お願いします！ もしも私が勝利する様な事が起こりましたら、ヴィヴィちゃんを愛でさせてください！ コンテストでファンになりました！』

送信後、帰り道で「どーしよーどーしよー！ アワワワワ……………」と、手持ちの皆に慌て泣きしながら相談するのも彼女らしい……

（でもでもお、嗜み始めたばかりだけど練習はしてるんだもん！ 全身全霊で指示して、頑張ってみなさいってスペランザにも言われたし！ んっ……………）

公認レフェリーがバトル開始、五秒前のカウントをして漸く……………気持ちが悪く落ちてきてきた。

負けてもいいやー、アハハーで過ごして来たけど、偶には勝ちに拘ってもいいんじゃないか。手甲を構えているツインテメタリックガールを抱擁できる、素敵な商品もあることだし。

「バトルスタートツ!!」

さあ、ここからどうする！ ジック側は予め伝えた通り、先手を譲ってくれたので蒼と青は定位置から動いていない。

ジックだってわざと負けるつもりはない、二匹のポケモンを同時に操るこのルールでの、戦闘指南を優先させながら最後には勝たせて頂く、シエルンには申し訳ないが……！

（だからって油断して、舐めたプレイングはしない。俺を選んでくれたあの子にも、あの

子の為に戦う二匹にも、俺の手持ちにも申し訳が立たなくなるからな)

実力が拮抗していなければ、バトル依頼を蹴る男じゃない。

キツカケはヴィヴィに深い萌えを感じたからであるが、自分の腕と実績を認められてご教授願いますと、頭を下げられたのだから真摯な心で取り組ませて頂く……!

「スペランザ、とびはねる!」

ランターンとはシングルでも戦った事は無い、レアポケモンのメタグロスなど生で見るのすら昨日が初めてだ。

(アレをするのねっ、いい顔に戻ったじゃないシエルン! 不安は自信で打ち克つ物なのよっ! 貴女を信じて無茶ぶりされても従ったげる!)

交換した当初は、トレーナーのレベルが共わず命令を無視されてばかりだった。

シエルンの手持ちでは頭一つ抜けたレベルなので、どうしたってスペランザ頼りになつてしまう場面は多い。

悪いことではないが、他の子達もバトルしたがっているのだと、少しずつ経験を重ねて言葉にせざとも理解できる様になった。

トレーナーの肩書きを持つ者として欠かせない、手持ちの習性・状態・生態を把握、管理する観察眼と——

(能力値の高いヴィヴィちゃんから狙おう!)

特別な家計でもない、センスに優れた訳でも無い。

こんな田舎トレーナーでも愛情と、根気強く歩んでいく忍耐力、そして手持ちと触れ合い信頼を築き上げる事！

言う事を聞いてくれない、その理由はトレーナーとして未熟だから、じゃあ何処が未熟なんだろう、どうすればスペランザと仲良しになれるだろうか……

ジツク&ヴィヴィと似た関係、家族や他の手持ち達が居てくれたから、諦めず彼女に認められるトレーナーへ。

ひとまずは精神的にもレベルアップ出来た、出来たじゃないっ……！

「頭上からっ……」

メコンも覚えている、あまり使い勝手の宜しくない技を起動スイッチに——
「そこでえ、ほのおのうずー！」

進化前のポニータは、たった一回のジャンプで300メートル以上のタワーを、楽々飛び越えてしまうトンデモ脚力を具有する。

進化後のギャロップは跳躍力だけでなく、瞬発性も発達したったの10歩で、最高時速に到達する……

空気を蹴りを空をも駆ける……まるで見えない階段を登る様にキックを繰り返せば、300メートルどころか成層圏をも突破しかねない。

そうやって跳躍距離を競い合う競技も、ギャロップを持つトレーナーからは望まれているのだとか。

とびはねるを解除、落下する彼女の脚先には炎で生成した、サッカーボールサイズの火球が顕れる！

「おおッ、彼女の髪がッ！」

そう、ギャロップ種にしては色違いよりも貴重かもしれない、命でもある炎の鬣は黒染めしていたのではなかった！

「——らああああ——」

スペランザが炎技を行使する時のみ、肩までのウェーブヘアは腰付近まで伸び、炎タイルとしてこれ以上ない程に揺らめく「炎髪」に変化するのだ！

まるで主人公の様な体質！ 発火したウェーブヘアと共に回転を軸に加えて、ボールを蹴り込む威力を高める。

その軌道は螺旋状、繰り出された位置から初手は動かない約束であった、ヴィヴィとメコンの周囲をグルグル巻けば、草本で生い茂る大地と空中を結び書く。

あのボールの正体は、スペランザ流ほのおのうず。

同じ技でも——例えばまもる、ヴィヴィとネリだと全く違う色合い——演出には個性

が溢れている。

威力の低さが浮き彫りとなるが、広範囲を覆える拘束技なので応用のし甲斐がある。
(とびはねる十ほのおのうずは、いっぱい練習したんだもーん！)

自分達なりの鍛錬の成果が実り、ジック側のポケモンが視認不可となる。

初手が理想通りに運べそうなのを見て、動悸や脈の乱れが緩和して来たシエルンは、自分なりに描いた戦闘ビジョンをありのまま、実現させてみよう、させる事が出来るのではと、プラス思考のまま突っ走る。

単純と言ってしまうえばそうだが、新人く中堅トレーナーは勢いが重要だ！

経験や知識では適わないかもしれない、だが勢いならば、時として熟練者をも戸惑わせ、予想もしない奇策を——やぶれかぶれとも言う——使われてしまい、流れを強引に握られそのまま勢いに任せた格上殺し(ジャイアントキリング)となる下克上など、今日もこの世界の何処かで起こっている。

「ヴィヴィはサイコキネシス、メコンはみずでつぼうを一点集中させて」

牧場とも言い換える事が出来そうな、人工的な草地。

政府の所有物で公認のフィールドなので、手入れなどは毎日専門員が行っており、草に脚が絡んでしまう……なんて戦況に影響を及ぼしかねない事態にはなりえない。

ミナモシティには他にも、公認されているフィールドは何個かある。その中でシエル

ンが草原を選んだ理由……ちゃんとあったのだ!

スペランザは炎タイプだから、あのサッカーボールを蹴るところか、そこに居るだけでフィールドを焼け野原にしてしまうのではと、交換当初は当然の疑問を持っていたが。

「ツ——あ……いや、やら……れ、し……た……!」

自分のおやを含めて燃やす対象、燃やさない対象を決める事が出来る、性質を生まれながらに持っているらしい。

スペランザが現在「燃やす」と定めたのはヴィヴィ&メコンのタッグのみ。

ほのおのうずで普通に地表を巻き込んでいたが、本人に「燃やさない」意思があるので決してフィールドが火の海になる事は無い。

ていうか焼け野原と化する戦法は、ポケモンリーグなどの公式大会設備で披露されるバトルでもなければ、禁止されているからだ。コスト的な意味もあって……壊す事を許可されているフィールドや、非公認のバトルでの奪い合いなども在ると言えば在る。

認められていないトレーナーが、ギャロップに触ると熱い!

……認められたトレーナーは、ギャロップに触っても熱くない。

少なくとも二年前までのシエルンは前者であった。

「しびれごなっ！——！！」 頭上にも別の「ごな」を振らされているぞっ！ 逃げ切るかメコン！」

螺旋に閉じ込められたジツクの手持ちは、それぞれの技で内側から消火。

………したと同時に、ヴィヴィの眼前には機能や感覚の一部へ過剰な障害を引き起こさせる、草タイプの得意技、しびれごなが『ほのおをうずとすり替わるように漂っていた』

これは避けられない、念話を使い渦内部からの状況も殆ど把握出来ていたジツクでも、しびれごなを発見から、こうそくいどうを使わせるまでの間に命中してしまっていたのだから。

それにしてもヴィヴィは、よく麻痺にさせられる子である……強いポケモンと世界で認識されているから、弱体化させておきたいのだろう。

「ふにや、ああ………ZZZZ……あいしゅくりーむ……しらたま、ぜんざい………くにや………」

もの凄い速さで爆睡、もの凄い速さで甘味を食べる夢を見ている……

「やったッ!? やったやった! 成功成功っ! 私達の戦術綺麗に嵌まったよ〜スペランザあ〜グリーシャあ〜……!」

そういえばメコンは寝付くまでのタイムは1.71秒である。ベッドを借りて彼女の過去を伺った初日で判明した特技(体質?)

だからさいみんじゅつや、今食らったばかりのねむりごなの、効能が回るのも早いし通常のランターンよりも、ぐつすり寝入ってしまったりするのだろうか?

身体は鈍っても頭脳は鈍らず、先手を譲ったとは言えシエルンの術中に落ちてしまいい、ジツク側の戦力は1ターン目にして大幅な衰勢を――

「――シヤクシヤク……ふえ?」

――したハズだった。

「……………アレ? も、もう目を覚ましちゃったの……っ!? 自分の尾を抱き枕にしちやうくらいフニヤ顔になってたのに〜? ねむりごなは確実に命中してたよね??ど、どーして、なんで??」

スペランザがほのおのうずで動きを制限、渦を消されてしまうのは承知の上、想定

範囲内。

シエルのんの真の狙いは、グリーンシャが備えている状態異常粉の避場を絶つ事であった。

「草原フィールドは草タイプを強化させる地形効果が在る。各種草技の発生速度や範囲も上昇する、ちよつと焦りそうになったよ……渦が消える瞬間を狙った時間差ねむりごな！ いい発想だよ！ メコン、いやしのすず！」

田舎であるヨシノシティも、草原に近いバトル環境であつたのも理由だけど、ジツクの推測は的中した。

「はわわあゝ……ヴィヴィさんの麻痺も回復しちゃいましたあ……振り出しに戻る、ですつ……」

グリーンシャがまず、しびれごなを炎の渦へ向かつて放つた。そこからさらにもう一種類の粉を……

ヴィヴィ達に壊された“後出し”でねむりごなを真上に打ち出す。最悪でもヴィヴィかメコンか、どつちかでもいいから状態異常に引つかかつて欲しい……

見事と自分らに賞賛したくなつたまでに、作戦は大成功、ヴィヴィは麻痺でメコンは眠りで、アドバンテージは3歩も4歩もリード出来た！……

「ラムうううう持つてたのおおお……！ 全然想定してなかつたよお、しかもいやしの

すずつて、ランターンでそんな技覚えられたんだあ……あわわわわわ………次の手
次の手……おも、思い出せない……」

「落ち着きなさいつて!! 貴女が混乱状態になつてどうするのつ! グリーシャも私も
自己判断はしないつ、シエルの指示を最後まで実行するつて決めているの! 貴女が
取り乱してしまえば私らは何も出来なくなるのよ?」

急転直下、流れを掴んだのも空想のままに終わった。

もしも失敗した時の策も考えてきたけれど、トレーナー業が軌道に乗り始めたばかり
のシエルンは予想外の事態が起きれば、バトル中だとも忘れ殻に閉じこもろうと自分だ
け尻尾を巻いてしまう。

「これは戦闘指南だから、ジツクさん達は動かないで居てくれるけど、本当のバトル
だったら負けているのよつ! 戦っているのはシエルンだけじゃない、私もグリーシャ
も一緒だつて思い出しなさい!」

トレーナーはポケモンへ不安を与えさせない。

心構えはそうであれ、実戦で、例えば急所に当てられたりだとか、交代を読まれて効
果的な技を当てられたりだとか……

たつた一手で戦況は激変、トレーナーは直ぐさま打開策を案出しなければならぬ。

レベル差があつても、適当な指示をしていたら下克上されてしまう、実際に技を繰り

出すのはポケモンだが、勝利も敗北もトレーナー次第。

「スペランザ……………グリーシヤ……………」

ポケモンの身体に良い成分を、じっくり蓄えるので育てるのに時間の掛かるラムのみ。

全ての状態異常を完治させる、極めて汎用性の高いアイテムで「とりあえず困ったら」ラム！

火傷や毒の場合は普通に、口に入れてしまえば良いのだが眠り状態の場合『夢遊病の如く本人の自覚無しで身体が動いて木の実を摂取』する為、客観視点でなくとも怪奇現象と立ち会っているみたいで少し怖い……

一瞬で横たわって、無制限に甘くて冷たいお菓子を食べられる夢を見ていたメコン。

ラムの『香り』を本能がキャッチ、メンソール系の刺激で頭がシャキッ！ 明晰に意識を取り戻した！

睡魔を撃退したメコンは、ジツクの指示を即座に反映させ、今度は仲間の行動機能を撃退させる！

リーン、ゴーン、リーン……………ゴーン……………

白きチャペルの鐘を鳴らせば、味方全ての状態異常を回復させてしまう、いやしのすず。

不利な戦況を一気に逆転、勝利をもたらす天使の讃歌。

(この技を使う度に……頭に浮かばせてしまいますう………／＼／＼)

やはりと言っているのか、ご期待通り結婚式をどうしたって連想させる音色なので、ウエディングドレスを着た新婦と、タキシードを着た新郎のイメージ図が構築されてしまふ。

誰が新郎新婦なのか、わざわざ表記するまでもないので略！

「どうも、です………」

鐘が揺れば、お胸も揺れる、そのバスト、推定95オーバー。

予測演算処理と、ジツクの見通した順序でバトルが進むのならば、麻痺か眠りになってもメコンが治してくれるので、避けられなくとも大丈夫であると仲間と戦える心強さを実感していた。

神経障害を走らせていた背筋を、ピンツと伸ばせば胸が一往復バウンドする。

ジツクも正確なサイズは把握してない（出来る訳無い）けど、推定は80の後半か。

正面と頭上の二重構造、ヴィヴィは読めていたけどメコンがラムを所持していたので、こちらでも心配はいらなかった。

（練習を積んだとシエルンさんは仰っていましたが、本当みたいです。手は止まっていまいりましたが無駄な動きが無く、粉を撒くタイミングも絶妙でした）

いやしのすず、ラムのみ、どちらかが欠けていたら心に迷いが生じながらも、攻め込んでいたかも知れない。

二つの狙いをどつちもスカされたから、スペランザに叱咤されてしまった。

失敗した時の作戦も用意していたのに、慌てすぎて頭の中が真っ白になっていたのだろう。

「……………っ！ グリーシャ、ターゲット変更！ マジカルリーフをメコンちゃんにー！」
そうだ、初手が上手く決まらなかっただけで、落ち込んでたらどんな勝負にも勝てやしない！

ポケモン達は諦めてないのに、真っ先にトレーナーが抛棄してしまうなど、大変失礼で『貴女の指示通りに動く』と決意してくれた、姉分でもあるスペランザの想いを裏切る事となる。

何度失敗しても彼女がフォローしてくれたり、次は頑張りましょうと信頼を失墜させず、新しい「おや」として認められ信頼は少しずつ、築き上げて来ている。

「葉っぱさん葉っぱさん、お願いしま〜すー!」

それは自分で捕まえたグリーシャだつて同じ。

のんびり屋さんだけど、彼女だつて一度も弱音を吐いたことはない。HPがゼロになるまで立ち上がりうとしてくれていた、他でも無いシエルの為に……

「っ、あう、はっ……!」これは回避のしようがありませんね……っ!」

ダブルに手を出したばかりだから、負けたつていいは甘えにも限度がある。

勝つてみたいなあ、次は勝ちたいなあ、そう思える様になつたのも成長した証。

手持ちだけじゃない、キツカケは『ヴィヴィちゃんをギユツギユツしたい!』だけど、同時に胸を借りたい依頼を受け持つてくれた、ジツク達もわざわざ時間を割いてくれているのだと、深く息を吸い込んで脳に酸素が回つた落ち着いた思考を取り戻し、一礼してから命ずる。

メコンは回避よりも耐えて反撃するスタイル。

だが不思議な力で自動追尾する、マジカルリーフは絶対必中。

威力自体は大した事ないけれど、相手との距離や着弾位置を計算しなくて済むので、初心者にはありがた〜い技。

(ターゲットは私に向けられました……)

マジカルリーフだけじゃ倒れない、弱点が少なく体力だけ他の能力値とは別格、非常

に突破しにくいポケモンのランターン。

シエルンはなるべく削っておこうとしているのか、ゴリ押し目的なのか、集中的にメコンを攻撃させているけど——

「——ヒヤツン、!?」

「相手は二匹です、攻撃だけに意識を回していたら急襲されてしまいますよ……」

防御に徹していたメコンは、反撃こそしない物のさり気なく、スペランザを相手取っているヴィヴィの近くへと立ち位置を移動させていた。

グリーシャは「何だか違和感ありますねえ……」と、薄々察知していたのだが……
「後方からヴィヴィちゃんがあ!? グ、グリーシャまもるう!」

マスターは全然気がついていなかった……どうやら何かに集中していると、別の何か
が疎かになってしまいうらしい、ダブル初心者あるある。

（考える事がシングルの二倍だよ……！ 覚えさせといて助かったけど、暫く使えなくなつちやつた……）

ねこだましと並び、ダブル最重要の技がまもる。

サポート色が濃いポケモンは、守るよりも動く方がアドバンテージを得やすいので、必ずしも採用が勝利に繋がる事は無いが、スペランザやヴィヴィの様な攻撃主体のポケモンであるならば、特別な理由がない限り覚えている前提で戦うのは至極当然。

常に「何処で相手はまもるのだろうか」を選択肢に入れて、まもるで一回攻撃を無効化したかの有無だけで、圧倒的有利状況がちやぶ台返し。

まもるを読み、掻い潜り、封じる、それがダブル勝利の条件と言ってもいい!

背面からグリーンシャの弱点、れいとうパンチを振るつたヴィヴィ。

まもるは速攻性能を持つ技なので、多少指示が遅れてもある種の“時間干渉”に近く、数秒の前借りが瞬時にシールドを発生させるギミックになっているのだとか。

反射的に身を屈めたグリーンシャは、彼女専用演出であるまもる——熱帯雨林を彷彿とさせるモスグリーン色——を発動。

「……………」

れいとうパンチは絶対効かないから、身を屈める必要も無いのだけど、苦手な冷気を纏わせ殺傷力に優れすぎた550kg分の重量を加算させたパンチ。

どう考えても彼女の反応は正常である。

「(マジカルリーフで少し削れているし、二匹で集中攻撃だ!)グリーンシャはまもるが続いてる間に私の近くへ、スペランザはメコンちゃんへワールドボルト!」

……………?

Segment・hexa——スーパーメコンメコンタイム

「……………シエルン？ もう一度指示をお願いっ、私の聞き間違いかしら…………？」

当初の標的は総合能力が非常に高いヴィヴィから、動きを止めてスペランザお得意の炎技でドカンツと先に倒してしまおう予定であつたが、用意周到な事にいやしのすずを覚えさせている様なランターン、残しておいたら不味い気がするメコンへと標的を変更。すぐに倒すことは出来ないが、ダメージを蓄積させたい。

効果の薄い炎技は使えないけど、水タイプへの最大打点となるワイルドボルトなら、それなりにダメージを稼げるのでは無いか？

「へえ？ メコンちゃんは水と電気タイプだから、等倍になっちゃうけど他の技を使うよりかは、効果的なはずだよー？ ワイルドボルトは??」

主に本来の姿で四足歩行となるポケモンが、かみなりパンチなどの代わりに覚えられ
るサブウェポン。それが電撃を纏って突進するワイルドボルトだ。

「……………本当に、ワイルドボルトしてもいいのね？ メコンさんに…………？」

「なあに言ってるのよスペランザあゝ！ タイプ相性くらいは頭に入ってるもん、等倍

等倍♪」

「……………分かったわ、やればいいのでしようっ……………」

二回も聞き直したけど、マスターであるシエルンは妥当の判断であると、信じて止まない様だ。

何時もだったらもう一度、黒髪へ退色させても技を使用した面影として、毛先のみフアイアカラーとなったウエーブヘアをバラ付かせる速度で振り向き、彼女へ直接口頭で教えていた。ちよつと待ちなさいと。

でも今回はどんな指示にも従って戦うと決めている…………それが間違えであつても！

「瞬きせずに見届けなさいッ、これが貴女の選択肢よッ!! ああああああああああ!」
 ジーンズ越しからワンストローク、太もも同士を素早く擦って、一瞬だけでも静電気を発生させれば全身は帯電する。

炎技じゃないから髪色は変化しない、ヤケクソ気味のかけ声にもシエルンは違和感を抱かず、スペランザが対象として定めたメコンへと突き当たり——

「——はれっ…………? スペランザが反動ダメージ受けてない? それどころかメコンちゃん…………自分から当たりに行つた…………?」

グリーシャはアタフタしながらも、手甲を振り回し迫ってくるヴィヴィを引きつけて

くれている。

……中でもグリーシヤは「あっ……」と、もの凄くシエルンに何かを伝えたような表情をしていたが、これも当のおやは見逃してしまっていた……

「ごめんなさいね、シエルンさん。私の特性は“ちくでん”なんです……♪」

「!!? うへエエ〜! そお、そおだったあああああ〜〜!!」

(ああ馬鹿、気がつくの遅すぎ………恥ずかしい………私が二度も確認したんだから変だと思いなさいよ………あの子ったら………)

続々と増え始めている観客も、トホホな顔で生暖かい視線を主にスペランザへと送らせていた。

炎技を使つてないのに髪が発火するのは、彼女が羞恥心を憶えた時だ……

全くもって、頭が鈍く疑うことを知らないマスターを持つてしまった………それが長所でもあるのだが。

ダメージを刻んでくれたグリーシヤの苦労は水の泡、真つ先にアイコンタクトで謝罪した。

解説すら必要なさそうだが念の為………

ランターン種には3つの特性が発見されているのだが、最メジャーであり粘り強さに拍車を掛けているのが「ちくでん」

本来のタイプ上では確かに、水&電気のランターンへワイルドボルトは等倍で通つてくれる。

「電気技を受けたら回復するのです♪ この特性のお陰でお相手できる幅が広がっているのですよ♪」

活動エネルギーを外部からインジエクシヨンされ、HPが完全回復した影響で上機嫌となっているメイドさんが、発光器官を備える三つ編みを速い周期で往復運動。

三つ編み振り子以外にも、尾をパタパタさせたり天の川スカートも風景がより高画質になっている。

(特性を忘れてしまうミスは、初心者にはありがち。ドガースに地面技使ったりとかね……苦手タイプへの有効打点を確保しているまでは良かったけど、スペランザの言動やグリーシヤの表情を、もつと観察するべきだったね)

おっぱいに電気を溜め込んだこの気持ちっ、むじんはつでんしよに住所を構える電気ポケモンと一緒にだろう！

気のせいで無ければミチツ………乳袋が一回り膨らんでいるのだからツ!?

今のメコンはHカップではない、愛と電気がいっぱい詰まった『Iカップ』へバスト

アップを果たしている〜！

「相手の特性を考えて指示を出しなさいって言ったでしょーツツ!!」

「ヒイエえええ!? ごめんねスペランザーグリーンシャー! 振り出しどころかジツクさんを有利にさせちやつたよお……………」

イケると思わせてくれたら…………コレだ。

躊躇しなくいいと、無警戒は雲泥の差…………仮に一对一のバトルだと仮定しよう。

ヴィヴィが場に居ます、後続にメコンが居るのは判明してます、それでもシエルンは炎技で特攻させていただろう。

交代を警戒しおにびを撃つだの、メコンへのチェンジを読みこちらもグリーンシャへチェンジするなど、基礎が書かれた教科書からは抜け出せていないのだ。

ましてやダブルとなれば、考える事が単純計算で倍。

(ううう…………ランターンがちくでんなのは憶えていたはずなのに…………忘れちゃつたよお…………シクシク…………)

普段ならスペランザの方が賢いので「相手はちくでんよ」と、ホームページから閲覧できる過去のバトル記録に「ちくでんが發揮され〜」の、文章は一緒に見たと直球で答えを教えてくれた。

譲りに譲つてヒントは与えたのに、何も感じ取つていなかったシエルの責任だ。

「グリーンシャだって貴女にヒントを与えていたの、相手だけじゃなく自分のポケモンをよく見なさいっ……状況は刻一刻と変化しているのよ」

たった今来たばかりの観客の中には「知ってるなら教えてあげればいいのに」だとか「勉強不足だ」とか、野次を飛ばしてくる者も居る。一理も二理もあるのは承知しているが……

ポケモンがトレーナーを助ける行為は、必要不可欠だけど、何でもかんでも助けてあげていたら、シエルンは育たない。

グリーンシャともう一度アイコンタクトを交わし、趣旨は不動のままでもいいと改めて決定付ける。彼女の力で『私達を勝たせて欲しい』のだ……！

「御礼代わりです♪ すう——ううくく……ふうふううう——つつ♪ ふふふふうふう——♪」

ガチバトルだったら『お前はもう、死んでいる』

シエルン達のやり取りが一段落した瞬間を見計らい、ヴィヴィはジツクの元へ待機させたまま、メコンへは二匹同時攻撃の指示を下した。

大量の虹色の泡を発射する、バブルこうせん。

威力は不足しているが、広範囲に泡が広がるので逃げ道を塞ぐ、なあって応用も利かせられる。

水ポケモン全般は肺活量が強い！

両手を合わせ「輪」を作り、口元へ構える。

シャボン玉のリングを想像して頂けたら、わかりやすいであろう。両手には水溶液で薄幕を張っているのです、吹き付けければシャボン玉と同じ原理で球が出来上がる。

「メコン、それくらいにして」

エネルギーを充填され、まだまだ酸素は無くならないけど、これは戦闘指南。

広範囲攻撃をシエルンはどうやって回避、またはやり過ぎしてくるのか？ ジックは鑑定する必要があるのです、バブルこうせんは中断して貰った。

おお……………！！

男女問わず、ギャラリー達は意識を失いかねない、驚嘆と感嘆の声でももの凄く良い——オーシャンアロマやジェラートの香り——の漂う、泡光線の発生源であるメイドさんを、愛で追い続けてしまう。

この戦いのみ、HからIへ増量したミサイルおっぱいは、セルフこのゆびとまれ状態！

動いたら即ポロしそう、胸をギリギリで隠し込んでいるメイド服は、横へ伸びきっているのでシワが集中し、胸へどれだけ布地が奪われているのか一目瞭然！ スカートの丈が数cm短くなっているのも胸が持ち上げているからだ！

メコンの衣装は『ウエストに合わせたサイズ』でオーダーしているので、ある程度ぱつぱつぱつんなのは恥ずかしいと思いつつも、本人的にはお腹を隠したい欲求の方が強いので、不本意ながらIの字谷間はザツクリ晒されている訳である。

「キャン！ あうツ、水技なのに痛いですう〜！ あたあ、額へゴツツンコします〜！」

「シエルンンツツ!! 私は どう す り や い い の お お ツ!!」

「ハイイツ?! グリーシャはごめんだけどそのままっー! スペランザはまもるーっー！」

逃げるだけの時間は無いと即断した。

大変申し訳ないが、グリーンシャへは耐えて貰う事に。

花を生長させる栄養素を作り出す水、肥料の一つとなり光合成を行う為にも重要な成分。

それが痛い！ 気持ちのエネルギーが過剰気味のメコンは、技の威力が上昇している。

HPが削られても笑顔のままでもいられる水技なのに、今のグリーンシャは泡群を避けられない、当たれば痛い。

(……ッ、やり過ぎさせたけど、まもるを使ってしまった……)

こつちの方が深刻、炎タイプかつ耐久値を素早さと攻撃に回しているスペランザは、等倍でも結構危なげなのに弱点などマトモに受けてしまえば……

——実は彼女の瞬発力を発揮させれば、全ての泡を振り切れていた。

そうしたいのは山々、しかしシエルンの指示へは不服を持ちながらも異論しないと決めているので……

スペランザ専用演出の、唐紅色の防御シールドで無効化は成功。シエルンは安堵しているのだが……

（あの子はまもるに頼りすぎね、この一手だけなら問題はないけど……）

“まもるを一度使えば、集中消費させた防衛エネルギーがリバイブするまで、成功率は著しく低下する”

まもるやみきりの技性質なのだが、そこントコ彼女は見越して指示を与えただろうか？

………ないつ、半分パニックだったので、まもるを指示出来ただけヨシ、そう思い込もう……スペランザは心の中で「50点」と赤ペンで採点した。

「わたしを忘れてませんか？ アームハンマー」

「んにやつ、ハツ、ああうう!?! ツ、ツ、ツ！」

言わんこつちやない、スペランザに意識を向かわせすぎて、グリーシャの背後にヴィイが現れていた事を見過ごしていた！

勿論、グリーシャ本人は水とは似て非なる、汗が背中へ「ゾワリッ」と吹き出たので、やろうと思えばガードする事は出来たのだが……

「グリーシャあ!?! ごめんっ！」

「……………だ、だいじよぶ、ですくく！ ホラツ、シエルンちゃん、今ですよ」

メコンの胸と同じく、一回り巨大化させた右手甲を宙返りさせながら、力任せに振り落とす。

つむじにブチ当たった、首がバネみたいに跳ねそうなくらいの衝撃。

前へと倒れたけれど、すぐに持ち直し受け身も取っていた、何よりもアームハンマーの急所に耐えるとは。

「地面タイプのしぜんのめぐみー!」

「!?!」

シエルン想いの彼女は、本当なら倒れ込んだまま動けないダメージを負ったけれど、精神力を繋ぎ止めたまま所持していたアイテム、シユカのみをヴィヴィの懐へ投げ込んだ。

使い勝手は宜しくないが、奇襲性能は全ての技でも上位ランク、それがしぜんのめぐみ。

木の実の力を攻撃へと解放し、木の実の種類で威力やタイプまで変動する面白い技だ。

「ん……ッ……これはわたしも想定外の範囲外、ですっ……」

木の実を持っていなければ使えないので、基本的に一戦で一度のみ限定。

外しても木の実は失ってしまうので、確実に相手へ命中させるのは――

「いい切り返しだよシエルン、今の即応力は非常に目を見張る物があった！ ヴィヴィ
だつて防御が間に合わなかったもん」

「……………鋼に効果的な地面……………なるほど、メモリに刻ませて頂きます……………」

(……………の割には、あんまり痛くなさそうだけど……………ヴィヴィちゃんは防御力高いし、
グリーシャも弱点付けたのはいいけど、攻撃よりも特殊のが得意だしで、一発で倒せる
強さはないんだよね……………)

硬くて香ばしい風味が微かに感じられる、ローストした狐色の光球を腹部で受けてし
まったヴィヴィ。

その技、その木の実をキレイハナが……………思いがけぬ一撃で、地面へツインテールを
引つ張られそうになったけど、衝撃はすぐに収まった。

あくまでも奇襲、詰めの一手、しぜんのめぐみを当てれば倒せる状況下であれば、と
ても有効だった。

ノーダメのヴィヴィヘクリーンヒットさせても、そりやあいちげき ひっさつ なん
てレベル1と100くらいの差が無ければ実現出来ない。

(倒せなかったけど、ヴィヴィちゃんはアームハンマーの副作用で素早さが落ちてるよ
ね？ チャンス！ 此処でしよう！)

「……………」

ジツクが命を出したアームハンマーは、火力と発生速度こそタイプ一致並に優れているが、速度低下のデメリットが纏わり付く。

シエルンは気がついてくれた、ジツクが意図的に付け入れる隙を与えてくれたのを。

「フレアドライブだよっ！ アレも使っちゃってー！」

助け入ろうとしたメコンは、グリーンシャがマジカルリーフを連発させ何とか抑え込む。

何度も標的が変更されているが、教科書通りに行く方が珍しい対人戦。柔軟なプラン変更は勝利に欠かせない。

「つ…………しやッ！ やったるわよ！」

難攻不落な物理防御力のメタグロスでも、大打撃を与える方法、あるっ！

火矢が駆け抜け疾風大地は灼熱に染まる。その瞬発性能はたった数歩でトップス

ピードへ到達する。

炎の鎧を纏わせるので、ダメージを受けても仰け反らない抗体が付随され、氷付けに

なつても溶かすことの出来る大技、フレアドライブ。

取るに足らないレベルの相手なら、高速で周囲を走り抜くだけでも、灼熱の余波でなぎ払われる威力。

「さらにッ！……コレを——らアッ！」

「角で宝石を砕いた！」

使い捨てだがメインウエポンの突発性強化から、サブの威力不足の解消と、実に利便性のある各種ジュエル。

渡されていたほのおのジュエルを、自らの額に生える一角で串刺せば、炎のウエーブヘアが力の奔流に耐え難き、燃焼により疑似太陽に近い存在と化す。

「燃えろおッ！ いい女あああああ！」

「ふう、ん、グッ、ツ、ツ、ツ——ハ、アア——ッ」

ジュエルドライブでの突撃形態時、咄嗟に口走るセリフはコガネシティで何年か前に流行った、主題歌のキャッチコピー。

一撃で倒せはしないだろう、自分も反動ダメージは軽視仕切れない物となるが、戦況は有利に——

「ヴィヴィの脚は遅くなってる。けど、技への反応速度や発生速度までは鈍くなってないよ」

——ならなかった。

「フツ……フツ……う、熱かったです……っ……耐えました、反撃を行います……」
てっぺき……ッ！

フレアドライブを躲す事の出来ないヴィヴィには、ジュエルを砕いた動作を捉えてから、てっぺきの指示を入れた。

低下したのは移動速度だけ、他は頭の回転だつて鈍くはなつてない。瞬時に実行させれば間に合うので、命令通りにヴィヴィは身体の表面を硬化させ、猛進する太陽を受けきる構えを取っていた。

（半分しかHPが減っていないッ、上昇分がキャラになつたどころか、一段階相手の防御力が上がってしまったっ！）

服は焦げるも手甲には傷も、焼け跡も付かず、受け止められた肩を軽く押されただけ

で、スペランザは身体の安定を失いそうになった。

反動ダメージの影響で、少しばかり疲労が脚腰にきたのだろう。転倒する程では無かったが――

「……………くさむすび」

「な、ッ!？」

激レアポケモン、メタグロスであるヴィヴィの戦闘力を生拝見し、大半のギャラリーは「フレアドライブでも平気なのか!」や「いや、てつぺきのタイミングが絶妙だった」など、ジツクやヴィヴィを評価する声が広がってからまた、ギャラリーが「えええっ!？」と湧き立つ。

「ヴィヴィちゃんてそんな技覚えられたの!!？」

「俺も忘れそうだったんだけどね、このバトルの前に覚えさせてきたんだ」

地形を活用出来るのはシエルンだけじゃない。

有効利用したいとメタグロスが覚える技一覧を、もう一度調べ直し……閃いた。

「技マシンは使い捨てじゃなくなつたから、気軽に技を入れ替える事が出来る様になつた。このバトルが終わったら、忘れて貰うかもだけど」

「……………(そこまで考えちゃうんだあ……凄い、なあ……)」

シルフやデボンの科学技術力が発展し、一回分しか記憶されなかつたわざマシンを大

幅改良。

対応コードを入力すれば、何回でも呼び起こせるハイテクノロジーの粋を結集させたのが、現在出回っているニュータイプのわざマシンだ。

誰に使おうか迷わなくて済むようになった、手軽にカスタマイズ出来るようになった、エリア毎にわざチェンジが出来るようになった。

全世界でマイナス評価が一つも付かないのだから、駆け出しから飯にありつけるかを左右させるプロにまで、絶大な支持を得て“使い捨て”の概念は過去となった。

「かつ、躲せないっ！ ひゃうっ！ あ……っ！」

威力などが知れている、高速で動けるポケモンを拘束させるのが狙った用途。

じしんと似ているモーシヨン、掌を草地へと翳せば範囲内の対象へ、成長促進させた一対の長い草で足下を結び、転倒させるくさむすび。

体重が重いほど——人化している少女達にはあまり使いたくない表現だが——威力が上がる。

残念ながら（失礼ながら）ギャロップは重くない、さらに草を半減させる炎タイプだ。

他の地形であれば絡ませることも適わず、意味の無い一手でしかなかった、他の地形であれば。

「このバトル専用……になるかもしれない技です、さあ、メコンさんどうぞ……！」
「追撃がつ!!」

草原フィールドの影響をモロに受け、軽いスペランザでも転ばせるだけの威力となつたくさむすび。

このフィールド専用技を覚えさせて来るだなんて、まあ………たく予想してなかったシエルンは感心と放心を繰り返すばかり。準備段階で大事なのはコンテストも、バトルも一緒だ!

「行きますよ〜! メコンビー………じゃなかったですう! チャ、チャージ
ビーム!」

ヴィヴィから離れようとしたスペランザを確保、しびれごなを振りまこうとするグリーシヤにも、その攻撃を二連発!

説明しよう! 美少女はビームが出せるのである! 原理は知らないぞ!

天のお声が響いた気がする……その言葉が響いている瞬間のみ、時間の流れがゆつく

りに……なっていた気もする。

おでこの前でピースサイン、人差し指と中指の間から、命中しても全然痛く無さそう——サイズは針金にも等しい——如何にも最下級魔法な電流をビビツ、ビビビ——

「……痛くないですつ、けどお……はわわあ……！」

「ヤバツ、逃げないとなのに解けない！ シェルン！ ボツとしてないで！ 次が本命なのよっ！」

チャージビームの威力は、主力として運ぶには心許ない。が………

そのプライスは追加効果にアリ！

「む、ふ、むふつ、むふふ、むふうふう！ 来ちゃいましたよお、今の私は………スー

パーメコンですつ………！」

説明しよう！ 美少女の第二形態……変身は欠かせない要素である！

天穹へ雷鳴轟かせ、耐水性だけでなく帯電性にも優れた素材のメイド服全体へも、滾らせ周囲へ渦巻かせた稲妻は、そのまま敵の攻撃を無力化させる結果にもなっ

う、確変状態のメコンが出来上がった！

高電圧でハイテンションなメイドさんは、語調と表情、立ちポーズまでも納得な強キヤラ臭！

ドヤ顔ならぬ『ドヤ乳』

おっぱいを二の腕で挟みながら、交差させる無自覚ドスケベなポージングを維持し、重力無視してせり上がる発光器官が眩いばかりの、青く色づいた拡散雷撃を放つ！

「Ladungssto!!」

「Protect……っ！」

「ひよえええつっつっ！ グリーシャ、スペランザまもるうう！」

スペランザは まもるを つかった！

グリーシャは まもるを つかった！

しかし どちらも しっぱい してしまった………

Segment・hexa——心のルービックキューブ

「らめっ……らめへええええ!!」

内部で復元されつつあった、防衛エネルギーが拒否反応。パリンツと、ガラスの破片が飛び散るグラツシユ音でシエルンは、まもるの性質を思い出せた。

結果論であるが“二連”まもるを成功させなければ、ランクアップした特攻を武器に逸る胸の内と、胸の弾みを抑え切れないメコンの技を、凌ぐ術は無かった。

なので、彼女が反射的に与えた指示は、間違っている訳ではない、のだが……………一定のスパンを挟まなければ、再使用の成功率が大幅に低下してしまう。

色違いを手にできた豪運の持ち主であろうが“二連”を、戦略として成り立たせるのは、危険要素が多分に含まれるので限りなく不可能だ。

英名を言葉にするヴィヴィイも、実はノリノリである。

救いの手を差し伸べるかの如く、交差していた腕をいっぱいに広げれば、敵味方問わず無差別に青い稲妻を放出。それはシエルンにとっては救いなどではなかった!

ほうでん。この技はフィールド全域を対象とするワイドリーチながら、発生速度も簡捷なので取り囲まれた緊急時などには、防壁代わりに発動させた事は何回もあった。

(信じてたぞヴィヴィ！)

(……………タ、タイミングを見計えるのでしたら、これくらい……………つ)

味方も巻き込んでしまうので、地面タイプや他の蓄電特性のポケモンと組み合わせなければ、まもるを使いスルーさせる！

ダブルならではのコンビネーションを、シエルンに学んで貫う趣旨もある。

「……………は、ああ……………うつ、あ……………まもる、に、頼りすぎ……………よつ……………」

教科書通りに進めば出来る子なんだけど。

スペランザは天運に任せ再発動させてみたが、失敗。

地を這う青い荊姫は、スペランザに被弾しても止まらずに、半減に抑えられるグリーンシャハも大ダメージ。

フレアドライブの反動分もあり、耐久値が低めのスペランザでは、拡散される青の稲光には耐えきれない……………一足先に片膝からダウンした。

「い……………ぜー、ぜー……………シエ、ル……………ち、や、ん……………し、じ、お……………く……………」

ほうでんが静まり、フィールドから一時退避——柵を越えない限りはあらゆる攻撃を遮断・吸収するパネルが設置されているが——してしまいう程、メコンのスペシャルな一

撃。

(耐えているっ、凄いなあのキレイハナ)

メコンへはほうでんの指示を下したが、ヴィヴィへはまもるの指示を与えていない。

自己判断に任せ、タッグパートナーとのシンクロ率を確かめて貰いたかった。

阿吽の息！ それはメコンがほうでんを放つよりも素早い判断！

間に合わないと思っただぜ！

ギャラリー達が二匹のコンビネーションへ、拍手を贈らせたが、まだバトルは終了していない……！

「麻痺しちゃった……うあああ……ううう……！ お願いグリーンシャ、リーフストームで頑張っつて！」

麻痺が入っても、倒れるだけのダメージを受けても、HPは1だけ残る、リアルタスキ状態。

彼女達だって戦況を覆せないのは、理解出来ているけど、最後の抵抗くらいしなきゃジックに——おやであるシエルンへも——面目が立たない！

「メコンー！」

「はい~~~~~!.....発動準備、完了ですっ!」

グリーシャが覚えたばかり、使用後は疲れてしまうデメリットをも帳消しとなる、破壊力が魅力のリーフストーム。

せめてメコンだけは倒せるかな、倒したい……!

痺れて動けなくても、ジック側は待っていてくれている。

それは舐めているのではなく、もう一つ「教えた物」があるからだ、彼らの想いが込められた一撃となる。

「お願い……し、ま、すう、う、う……!」

「Hydro、pump !!」

「……………あまごいつ!」

(えへええツ!? そのコンボはあああ~~~~っ~~~~っ!!?)

あの邪眸なる火焰との戦い以降、覚えているが中々使う機会に恵まれなかつたあまごいを、ハイドロポンプが撃ち出される瞬間に起動。

これは自己判断ではなく、ジックが念話で促した策である。

突如呼び寄せられた雨雲によって、フィールド内限定だが天候は大雨と化す。

ヴィヴィのブレザーも、メコンのメイド服も、身体にピツチリ纏わり付いて、おっぱい以外は振れ幅に乏しいアンバランスボディと、残面積1cmが成人と全年齢の境界を分

かつであろう、HからIに——愛情も——どたぶんっ♪

アトランティスボダイの持ち主は、水の大技を放つ！

愛称理論、杓子定規に基づけば、リーフストームがバイドロポンプを上回り、使用者のメコンにも大ダメージを与えられていた。

「……………きゅっ、ううううう……………も、ダメですう……………ぱにゅっ……………」

雨十とくこうアツプ。

二段階もブーストが掛かったハイドロポンプは、草の嵐をあつさり打ち崩して、グリーシャへ貫通。

麻痺をしても技の威力は弱くならないが、相性で有利ならば技を打ち消せるとは限らない。

爆乳……………じゃなく、我浄海覇な爆流魔砲の余波で、流るるプールとなった水面にプカリッ。

浮かび上がったグリーシャは、メコンがお姫様抱っこする事により救出されたが、デカすぎるおっぱいに口元が覆われ、溺れるよりもずっと窒息の危険を感じたという。

「グリーシャあ、スペランザあ……………ああくん、負けましたああ……………ありがとうございませう……………」

「……………そ、お疲れ様シエルン！ グリーシャで鋼タイプに削りを入れる発想力は、秀

逸な点だと感心したよ！ フレアドライブで倒せる範囲を広げられるし、予想もしない一撃だから思考力の動揺を誘える。俺もシエルの戦術を参考にさせて貰いたいよ」

苦勞したと言え、嘘になってしまいうけど、実技研修として基礎から応用まで、くどくない程度。パッケージング出来た。

トホホ、駆けよってげんきのかけらを使用する少女は、自分のポケモン達を負けさせてしまった自責と、やはり負けるのが悔しくなっているなあと、再検証し陰を残さない笑顔で講師となったジツクと握手を交わす。

男前の彼と握手したって、何ら異性と意識した感情を抱けないのは、もう五年は恋愛よりもパン作りとポケモンに夢中だろうと、黒髪に戻っているスペランザは「この子が異性に興味を持つのは何時になるか？」を、姉視点から危惧している。

「ジツクさん、メコンさん、ヴィヴィさん、ありがとうございました。頼りないマスターですけど、私はこの子と一緒に戦って行きます。勝ちたいって欲が出て来たんだものね？ 今度はシエルンが誰かにコーチするってくらい、意気込みで帰ったら勉強し直しね！」

「はあーい！ 勉強は苦手だけどやりたいなあつて、意欲が凄く湧いてるもん！ 一人前になるのは長〜い時間掛かるかもだけど……まだまだ頼っちゃうね、スペランザ！」

「私だけじゃないでしょ、グリーシャや他の皆にも頼りなさい。勿論、自分で考えるところ

ろは頑張るのよ！　ふう、一人にしたら危なっかしいマスターを持つと大変よねえ、グリーシヤ？」

「えへへへ、私もシエルンちゃんにずうくと、付いていきます！　私も草タイプさんに戦い方をお教え出来るくらいには……………」

トレーナーとして足りない物はいくつ、彼女達なりに信頼関係を築けている。

すぐテンパってしまい、柔軟性に難のあるシエルンだけど、ダブルに手を染めたばかりに関わらず心の中でジツクを——一部のギャラリー達も——唸らせたのは、手持ちと波長が合っているからだろう。

負けて悔しい、だけど値段では表せぬ意義のある一戦であった！　間違いなく彼女は成長へのプロセスを踏んだのだ。

ジツクだって旅を始めて暫くは、全然勝てない日々が続いてバトル自体が嫌いになっ
てしまいそうだったけど、支えてくれる子達が傍に居てくれたから立派なトレーナーと
して、自己を確立できたのだから……………誰だって最初はそんな感じ！

「スペランザ！　グリーシヤ！　ありがとありがと〜！」

（私のが年上なんだけど……………この子つたらもう……………！）

「やったあ〜！　シエルンちゃんに撫で撫でされるの大好きです〜！」

「……………（モグツ、モムツ、カリツ）」

戦い終われば腹の虫が鳴りそうなくらい、お腹が空いていたので貰った手作りパンにモフ付いていた、メコンとヴィヴィ。

今回のバトルでは珍しく、ヴィヴィがサポート役に回った。

メタグロスとランターンの並びを見れば、誰だって前者が完全攻撃役、後者が補助メインで活動すると推測する。

概念から解き放たれる、時にはそんな戦術も統制された連携が結べるのであれば可能だ。

(あのお……私にも後ほど……／＼)

(分かった、お疲れ様メコン、ゆっくり休んでね、夜に行くからー)

地面タイプをチョコクリームで表現？

ヌオーをイメージしたデニツシユを、愉悦の表情でサクついていたメコンが、永遠のご主人様の耳元でお情け——撫でられたいと——のおねだり。

戦い終わり溜め込んだエネルギーも発散したので、退乳してもHな側面が彼の脇腹に接触する。

「……………ガリツ、イ……………」

鋼の光沢をカラメルで再現？

ギアルをイメージしたクイニーアマンを、手甲を外せば容易に傷ついてしまいそう
な、小さな両手で持ちながらカリつく。

八年間もの付き合いを持つ二人のやり取りを、二ヶ月の付き合いしかない自分は見
逃さない。

多段的に所思が連なっていたけれど………同時に、瞳孔を拡大させながらヴィヴィ
は閃いたのだ。

『これは使える』と



髪をドライヤーで乾かし、寝巻き代わりのロップイヤーパーカー姿で、もうくつろぎ
心地に慣れてしまった、てっぺきを模しながら——チルタリスの綿毛に包まれた様な快
眠へ誘ってくれる——布団の上。

「……………できた、オレンジ色で揃えました」

ナニをしているかと言えば、チーズドッグ77個は辱めを与えてくれた謝意として、
当然の買い物なのでご褒美の内には数えられない（ヴィヴィ談）

ミナモデパートで購入させた、12×12構造のルービックキューブを、間も無く日

付を跨いでしまう23時48分……

「二時間もこのパズルを……………」

新商品の宣伝として、コマージュナルで目撃してから無感情であったのも懐かしい、深紅とは非なる「光」が灯つた瞳に映り込んでから、興味関心を刺激されたアイテム。

最も難易度の高いキューブなのだが、全ての面で異なる色を揃えるのに二分足らず。

世界の書物が集まる図書館たる4つの脳。

膨大なデータから解析するアルゴリズムだけに囚われず、人間に近い直感的な動きで脳を動かせる様になってから、彼女のアプリケーションは他の素子とは独立し情報量が、記述しきれないまでに増量していると確認した。

組み上がってオシマイ、これが感情に目覚める前のヴィヴィ。

「最後は……………蒼色で揃えてみましょう……………」

様々な色で揃えてみたり、何かの柄を表現させてみたり。

無駄な行為と思わず、考えるより先にキューブを回転させていた自分が居る。

……………体育座りなので、もしもミニスカートであるならば、黒の紐パンは隠しようの無いまでに面積を占領していた。

キューブを触り、この部屋に居ると落ち着く。

トリックルームを模した摩訶不思議な壁紙は、心理的不安感と未知の恐怖感を覚えさ

せてしまい、快眠どころではないので極々一部のポケモン以外には、不評である。

（なのに——なんで——繭の中の気分——このメカニズムは解析——不能——）

自分が救出された、謎の電脳空間。

この世の次元軸とは隔離されているようで、とても近しい次元の様で。

そこかしこに蒼いキューブが浮遊していた、あの粒子が充満した空間と似たシンパシーを覚えるから……？

「……………チーズドッグも押収しましたし、キューブも買って貰いましたし……………
 な、あ、撫でて……………貰えました……………し……………コンテストの件は許してあげましよう……………」

あの時の耳打ちは、全神経を集中させていたし、読唇法のように口の動きだけでメロンが何をお願いしたのか、実に簡単に解析は完了した。

（……………メコンさんにだけ不公平ですつ、初めて捕まえたポケモンであるのは重々承知しておりますが、一匹だけ最良するのはネリさんや爽羽佳さん、かたくりこさん達に

も失礼かとおつ。わたしにも同じ行為をしてくださいつ、拒否権はありませんつ……)
(……………えつ、でもつ、ヴィヴィはそういうの嫌なんじゃ——)

(許可しましょう、夜になったらわたしの部屋に来てくださいつ、わたしは最後に構わないので平等なコミュニケーションをお願いします……分かりましたか?)

本当は全然嫌じゃない。

“負けたけど一回だけ!”

バトルしている時よりも、ずっと強そうな表情で頼み込まれてしまい、ヴィヴィは言葉通り一回だけ撫でられ、一回だけ抱きしめる事をシエルンへと承諾した。

シエルンにされても、私とは違う女性の感触だーと……相手は喜んでくれているから、まあいいでしょうと、コンテストを思い返せる棒読み、無表情で対応していたのだが——

——彼は違う、コンテストやバトルを頑張ってくれた、色々なヴィヴィが見れたよと、褒められて嬉しい。

彼を目と、耳と、肌で感じる。

あつたかい手で髪を撫でられ——ジックは嫌がられた経験があるしどんな心境の變化が訪れたのだろうと、ガラス細工を持ち運びする時よりずっと、慎重な力で対応させて貰った——リミッターを作動させたから、無表情のまま「これからは毎回お願いします」と、勢いで承諾させる事も出来た……………!

「子共扱いは……嫌なのに……やって欲しいって……理由、解析、不能……」
 パーリエからのメッセージによれば、ヴィヴィの全身構図を油彩画で作成させて貰っているのだから。

要望はせず全てパーリエに任せてしまったが、絵になる美少女がマジモンの「絵」となるので、プレゼントのプレゼントをされるジックは、手を取り合って喜んでくれた——すぐにセクハラだと手を払ってしまった——けど……

許可もなく女の子の身体に触れてしまうなんて……

近頃の彼はずっとそうだ、他の皆は例え不意打ちで触られても、ビックリこそすれど嫌がることはしない。もう家族の様な距離で何年も暮らしているのだから。

「……………」
 不公平、他意は無い、新規参入の自分に、マスターはもつと構うべき、他意は無い。

「……………」

それでもバトルに勝てば、撫でて貰えると脳内グラフィックに描いたら

なんでこんなに……浮き足立つ様な気持ちに……——

誰にも内緒で、不器用な綻びが造られてしまうのだ。

ヴィヴィとの距離が縮まり、少し仲良くなった！

ヴィヴィの なつきどが あがった！

Segment・hepta——白銀のきざはし

むしとりしようねんも、今日くらいは虫取りをお休みするけど、こんちゆうマニアは虫取りを止めない日曜日の正午（おひる）前。

ミナモシテイの南東には浜辺の周囲を巡る、サイクリング、ジョギング・ウォーキング、それぞれ3つの周回コースとして分割設計されている。

マツハやダートじでんしやに搭乗するアスリートの過酷なサイクリングコースでは、アツプダウンが激しく急コーナーも多用されており、夜間に疾走すれば気分は山岳の走り屋。

ジョギングコースは打って変わって、段差を感じさせないアスファルトで覆われるフラット路面。百メートル毎にポールが建てられているので、短距離走の練習として利用するアスリートの姿も。基本は運動不足解消の日課としてや、精密な身体作りメニューの一つとして使用されている。

ウォーキングコースは年配の方や子供の姿が最も多い。手持ちと談笑しながらご飯が炊けるまでの暇つぶしであったり、夜には引き籠もりやコミュ障改善のために生息しているポケモンに会話の相手になって貰ったり、筋肉痛など非干渉なまったりムード。

コンテストドームを皮切りにした対岸のビル群や船乗り場から別地方へと出向する客船、変わりゆく飛行機雲が遮断されずに楽しめるロケーションとしても活用されているので、ミナモ観光を終えたトレーナーが最後に立ち寄り写真撮影をするのは、コース上の吊り橋から俯瞰できる人とポケモンが団欒している情景なのだとか。

「——ハッ、ハッ……ハッ……ア、あつ、ヤスヒロさんこんにちはあく……ハッ、ハッ……もうちよつと、もうちよつと頑張れ私……イサオさんもおくんにちはあく……ハッ、ハッ……」

ポケモントレーナーにとっては、土日だから休日になる定義も理由もないのだけれど、この時間帯だけ——特に男性——ランナー人口が1.5倍になっているのは不純な動機があるからだ。

自分で自分を応援して、完走意欲を燃やしているのは結婚したばかりの奥さん、34歳。共に汗を流しているのは、人化していない♂のグランブル。

当時独り身であった奥さんは番犬扱いとして育てたのだが、筋骨隆々で力こそ我が大義と信じて止まなそうな強面であるのに、実はもの凄く抗争嫌いな性格で必死になって手と脚と牙を振るい、無邪気に引っ付いてくるヒマナツツにすらビビりながら追い払お

うとするのが精一杯……番犬としてはあまり役に立っていない。

短い脚をびったんびったん、妖精がステップを踏んでいる音色を出しながら、我が主をチラ見する。

このグランプルは実に羨ましい役柄を手に入れた物だ。挨拶されているサングラスを掛けたアスリートや、ジャージのおじいちゃんは『おいグランプルそこ変われ!』と、初めてこのポケモンに転生したいとか中身を入れ替わりたいと、毎日すれ違う度に思うのだ。

「はーっ、はーっ……あと……ごひやく……メートル……はあ、んっ……はーっ……」

エロいのだ、とてつもなく……!

結婚してオトナな事を久しぶりに体感しちゃったボディは、運動着として購入したタンクトップとショーツパンツ、首に巻いたタオルで構成されている。

妻となったオンナにしか醸し出せない、芳香な色気を振りまく隣人氣質、ユニランでも内側に仕込んでいるのかつてくらしいの巨乳!!

まだ独り身であった感覚から抜け出せていない面もあり——それがサポーターもインナーも身に付けてないノーブラ——で、すべからくホールドが薄いので、ぶつるん

ぶつるんに暴れ回っており、下半身もパツパツで下着のラインがヤドンでも分かるくらいに明確な食い込みを魅せる。

ていうか、至近距離だと色までクツキリと……今日はオレンジ色らしい……グランプルは人語を発せ無いけど男の子。

手持ち特権ありがとう、強面よりもウザさ満点のニタリ笑いで地表と上空から挟まれて、常にバウンスするおっぱいを見られるから彼も、ジョギングコースを走りきれる――

「ヒャあああんツ!? そ、空から銀色の光があ……………??」

何処からか発生した光の球が吸い込まれて行き、今度は上空から振り落ちて来たのが白銀色のレーザー。

ミナモシテイのお昼を知らせる合図、な訳が無く、前を向いていた奥さんは驚いてしまつて尻餅を付く。

グランプルはおっぱいに視線が集中していたので、主が倒れ込んだのは疲労から? そんな事を思うよりも先に、熟れまくったプリップリなお尻がのしかかる!

ちよつと重い……だがチャ〜ンス!

一切の抵抗をせず牙を突き立てたら大惨事なので、大口開けて巨尻を飲み込んでいく。

主人のお尻を支えてあげているだけ、やましい気持ちは無い！

トンでもねえ羨ましいポケモンが、トンでもねえ事してる。

奥さん以外は白銀線など知った事では無い、グランブルを引つpegがそうと一致団結して四の地固めを繰り出す！ 格闘タイプの技はこうか ぼつぐん！

(新しい……わざ？ なのかしらあ？)

マイペースに穴ほこ開いた積雲を見つめながら、旦那が帰って来たら尋ねて見ようと決めた奥さん。ここでやっとグランブルの口を椅子代わりにしてしまった事に気がつく。

シヨートパンツが唾液塗れでテカテカ……お腹の虫が鳴ればカビゴンだって本気出す12:00——

Segment・hepta——蒼き鉄槌

白銀線の落下地点、やはりミナモ北西が発生地点でもあった。

「ハア……ハア……出力を絞ったタイプ……派手なエフエクトでしたが、見た目ほどの威力はありません……スピード重視、それでもエネルギー充填から発動まで……時間が掛かります……ダブルでなければ実戦投入は厳しいかも……しれません」

バトル練習スペースでもある裏庭、そこで行われていたのがヴィヴィ着想の昇華技。

何個かのパターンが在るらしいのだが、とりあえず威力×速度○に調整した——
は一発で成功。

「何本も光の柱が降り注ぐとか、そういうのも出来そーなの？」

「何本もは……難しいかもですが、一本の太線ならば……恐らくは」

本日のシフトは休み、サッカーボールを空中リフティングしながら両手を肩幅サイズに開き銀色の光を集めているヴィヴィを眺めていた爽羽佳。

先程の奥さんと同じで上空発射からの再び落下——座標は2メートル前方へズラした——光線には「出力を絞った」言葉が、疑わしくなる高火力には羽が硬直し前方へ倒れそうになった。

髪と顔は女の全財産、瀬戸際の三点着地ポーズで事なきを得る反射神経も、ジックとの旅を始めて最初の頃は……顔に傷が付けばその都度彼に責任転嫁してしまった。

少なくとも通常使用の*****よりは地面への焦げ跡が目立つ。

簡単に壊れたり汚れたりしない、コンテスト会場と同等の堅牢性を備える最高級な材質を使用しているのに、ヴィヴィはやたらクレーターを作ったり、蒼い閃光が空気を突き破れば波紋として設定した、座標を焦がしてしまっている。

物理攻撃がバカ高いグラップラーでありながら、長距離攻撃にも対応どころかそれ一本でも全然強い特殊攻撃力で、物理を封じられた展開となっても活路は絶えぬシューターでもある。

「お疲れ様ヴィヴィー！ ああ、庭材の事なら気にしないで。このログハウス作ってくれた大工さん達に頼めばすぐ直るから」

フリーだけどホームページは毎日更新し、お仕事も積極的に受け持っているのです。お金の件は心配入らず。18歳だけどマイホームを建てているのは、この世界では特に珍しくは無い。一日ごとに修復だと、流石に貯金を持たないかもしれないが……

「……………んっ、申し訳ありません……最大出力であったなら、被害は庭一面まで広がっていたかもしれないです……」

「大丈夫だって、気にしない！ その練習の時は政府認定の訓練場でやればいいんだか

ら。あそこならきあいパンチも、ハードプラントも、とっておきも撃ち放題だしさ」
ホウエン地方で一番近未来な設計となっている、ミナモ以上の大都会キンセツシティには現在建築中の、ニューキンセツスタジアムに先駆け半年前にシミュレーター施設がオープン。

プロジェクターに投影された、VRスクリーン内ではどんな技も撃ち放題！

ターゲッター——ポケモンを意識したシルエットでbooster——は一切手を出してこない、サンドバグ設定にする事も出来るし猛攻撃モードに設定すればありえない反応速度で躲して防御して、一瞬の隙を付いて仕留めてくるAIになるので、プロトレーナーも通っている本格派、データも提供しているからハイレベルな情報処理を行えているらしい。

まだトレーナー免許を持ってない子共でも、この施設では憧れの強豪、そう、ジムリーダーや四天王のレンタルデータも登録されているから、なりきれる”

……あくまでも雰囲気だけなのだが、教育の一環として授業に取り入れたいと学校から要望が殺到している。

極限までリアルを迫及したハイエンドシミュレーター、世界広しと言えど試験導入されているのはキンセツだけ！

これもスタジアムと同じく、デボンとシルフが労力と苦難を長い間共有した技術の結

晶。この二社の抜きん出た開発・研究・組織力は——ドリームワールドで一度大事件を起こしてしまっただけ——もし、悪人が居るとすれば目を付けるに違いないだろう。

(それは……わたしとマスター……二人でお出かけする……そういう意味なのでしょうか……?)

ありそうで実現出来ずだった、最高峰シミュレーター施設。噂は聞いているけど中々興味はある。

その施設でならヴィヴィが全力で技を繰り出したって、VRなのだから被害に見舞われない。

あの技のパターンを試すのならば、この庭を壊さずにすむから活用は論理的。

……今すぐにでもキンセツへ行きたい、その想いの根底は気兼ねなくぶつ放したいから、だけじゃない。

“マスターと一緒に出かけ”

男性と女性がアトラクションや食事を楽しみ親交を深める行為……チーズドッグを購入するのだって、食事のカテゴリーに入る、ハズ。

「ピザッ!?」

「ピザピザピザッ!」

「ミノミノミノッ!」

「よっしや〜! 皆食べに行こう〜!」

ハウススキーパーであり和洋折衷、どんなジャンルの食事も美味しく作れるメイドさんの呼び声。

虫食い布団で寝ていたかたくりこも、お宝コレクションを磨きながら時折、ブラックにピンクの縁取りが入ったスタンドミラーへ映る自分を「可愛さ个体値3ーニヤあ♪」など、己の容姿に陶醉中のナルシスト娘だつて、全員集合のオーダーには逆らえない。

火力が強く短時間でパリッと焼ける薪釜は、湿度や天候、薪の種類や量によつても味が変わるので培つてきたファイリングも、窯焼きでは美味しいピザを焼く重要な条件となる。

キッチンと庭、二つと最も隣接した位置に設備された煙突から立ち登るスモークに、ご近所の皆さんも拘りの味わいを持つ香りに空腹度はマツハ。

「ししよ〜が居たらもう三枚は必要だつたニヤ〜ね♪」

「ヘイツ、取り替えつこプリ〜ズ♪ 厚切りチキンごつつう〜まあ!」

手を洗いいりビングテーブルに集う6匹と1人。

赤一色では氣質が強すぎてしまうので、ルツコラをトツピングする事でバランスをコントロール。視覚も味覚も大満足なマリアーナをカットして爽羽佳の口へあくん。

同じく車輪型ピザカタターで六等分にした、マヨネーズ抜きの照り焼きチキンをネリへあくん♪

この二匹は外出先でも、よく食べさせ合いつこ（色々な味を食べれるから）している。少々マナー違反かもしれないけど、後輩系でありながらイニシアチブを握られっぱなしのマニユーラと、同級生系でギャルエッセンスてんこ盛りでありながら、その手の話題になると見栄を張ったり急いで話題を転換させようとするオニドリルだ。

友達……だつて分かつているのに『もの凄く百合百合しい』のだと、SNSに映えそうな自撮りしている二匹のカップリングに興奮してしまう。

「ミガミガミガツ、ガンプツ、んもグツ、ミノぐつ♪」

無理して咀嚼バリエーションを作ってるかたくりこ。半熟卵を加えたマルゲリータのチーズが伸びまくって、顔面を覆ってしまうが気にしない！ そんな事よりピザだ！「ハフツ！ お気に召して下さりあむう！ 嬉しいですよおふもつ！ おイひイ……！」

もむんむもんっ！」

ガス釜を使用しないから、生地裏に編み目が残らず焦げ後は耳だけ。

ポテトときのこのグラタン風ピザ、2カットを両手持ちしてるメコンには『いっぱい

食べるキミが好き』と謳い文句を授与したくなる。野菜はハジツゲ産だ♪

「俺はこのディアボラが一番好きかなあ〜♪ 名称がカツコイイし!」

チキンとサラミをメインに唐辛子を加えて、スパイシーな悪魔風を手取るジツク。

口内がれんごくされる辛さではないので、水を飲みながら絶妙な刺激に魅力を感じてしまう。彼は辛い物も甘い物も……ていうかメコンの料理なので全部好きだし!

「……………むしやりっ——」

チーズドッグ本当に一日で77本食べちゃった系ガール、ヴィヴィ。

腹ぺこ大食い属性ではない、だがチーズドッグならば話は別。

なんと! マイルームにはデパートで買って貰ったメニユースタンドを設置させ、新商品が発表される毎にチラシを更新させ、毎日「明日はどれを食べようか……」ルービツクキューブを弄りながら、むふむふするのが日課になってしまった!

店主さんだつて「もうお嬢ちゃんの仕草や瞳を見ただけで、どの種類が欲しいか分かる様になった」と想われてしまっているのだから! ヴィヴィ本人には内緒にしてるけど。

もしかしてチーズを使った食べ物と相性がいいのかもしれない、どのピザも美味しいけど最もお口が満足したのは5種類のチーズピザ。

無表情のままチーズを伸ばす飛距離に挑戦……その『無表情』もあの頃とは全然違う、

深紅の瞳には精気が宿り声にも情感が溢れているから、初対面の子共が見たって「メタグロスのおねえちゃんうれしそー！」なる、感想を持つてくれるだろう！

(メコンさんのお料理……とつても美味しい……皆も幸せな表情になつてます……マスターも……)

彼女は学び認識を改訂した、料理は栄養を確保する為だけの物では無いと。

メコンが食べた事の無い料理を作る度に、新作フレイバーのチーズドッグを手に入れる度に、栄養学よりも敏感となつた味覚が喜悅する。

途中でテーブルを離れるなんて出来っこない、これこそが生きる為に本当に必要な感情……

一人で食べるよりも誰かと食べた方が——食材や成分が変化している訳がないのに——美味しく感じられる。チーズドッグだつて一人で食べても感動的な美味しさは得られなかつた。

(……わたしも、マスターに何か……料理……作れば——)

——喜んでくれるかなあ……？——

ジツクと一緒に買いに行つて、帰宅路を歩きながら食べたたり、近場のベンチに座つて食べたたり、お土産として買つてくれた物を彼の部屋で食べたたり。

同じ製品でも味が全然違う。一口一口メモリに刻んでしまふくらい激変している。

自分が「誰かのために料理を作りたい」なんて気持ちになるとは……限界まで伸ばされたチーズを口元へ戻しつつ、隣の席で手持ちとの団欒を楽しみむ彼をチラ見。

（わたしの料理でも……これくらい喜んで貰えるかな？　メコンさんに教わつて……やつてみたい……かもしれない……）

何故彼に喜んで貰いたいのか？

もつとバトルをさせて貰えるから、たくさんチーズドッグを買つて貰いたいから……？

価値観と基本概念を変更させるパツチでも当てられてしまったかの如く、芽生えた想いの正体が不明瞭なので困惑する。理由があるはずなのにその「理由が」どうしても分からない……

数日前に贈られて来た、パリーエ作《紅色の瞳を持つ蒼の鉄槌》

バトル中のヴィヴィをイメージしたらしい油彩画。

手甲を構えた躍動感溢れる構図、命名に従い手甲と瞳には重厚な表現が成されているが、身体や表情は優しい光の質感に満ちヴィヴィの本質を捉えたパリーエ渾身、門外不出の造形術で創出された息遣いさえ聴こえるスペシャルアートだ！

その素晴らしい芸術品をマイルーム……ではなく、ジツクへ預かって貰うの名目でプレゼントした。

「……………これを見ながら変な事、しないでくださいよ……………」

「しないってのっ!? 何処に飾ろうかなあゝベッドの正面に位置する……………この辺りにしようかな!」

確かに絵画から飛び出してきそうなタッチ。

同じ物は自分でも二度は制作出来ない、パリーエにそこまで言わせてしまった歴史的文化遺産になるかもしれない、至大至高の作品を部屋に飾ったジツクは上機嫌。

絵画に向かって話しかける、妖しい趣味はないけれど……………カッコよくて、頭が良くて、キユートで、クールで、ぶきつちよで……………見識を広げ成長していくを題材にした作品もつと欲しくなってしまう。

じゃあ他でも無い自分が、彼の為に何かを作つて贈つたのならば……………

(もつと喜ぶ、かも、ですっ!)

Segment・hepta——葵の歌姫

太陽沈んで、お月様昇って、また太陽と代わりばんこした月曜日。

——今回はネリのバイト先の1カットを、ご紹介致しましょう、爽羽佳は次の機会に

「いらつしやいニヤせえ〜！ チミもイベントに参加するんニヤーね！ こちらへどうぞニヤあ！」

ミナモシテイの中心地点から少し東方面、トレーナーファンクラブに隣接して建てられた、開放的でありながら200人規模のお客をお通し可能。

静かな森の中の様な非日常的空間、ミナモ巡りに疲れて一休みから、時間を忘れて執筆作業したくなるシナリオライターまで、ジグソーパズルのピースを模したハイセンスなドアを潜れば、退店するまで心の——忙しい、騒がしい、疲れるなどの世界を一時的に切り離して——寛裕が生まれる。

お出迎えしてくれるのが、落ち着きとは無縁のネりなのだから爽羽佳も「働くトコ間

違つてない?」と、思つたりした物だ。

木の実老夫婦の元でのバイトでは、忙しく動き回っているから喫茶店くらいは真逆のスタイルでやってみたいのかもしれない。

……フリルでたつぷり彩られた三角ビキニと、強烈なミニ丈過ぎて黒いパンツ——
—魅せパンだけど——が「チラ」なんてレベルじゃなく「モロ」

さらには自身の爪痕で引き裂かれた様なデザインで発注した、ダメージニーソックスを着用。これ、制服なんです!

「みんな集まつてるニャー! んじゃ、楽しんでくるニャー!」

コスプレした女の子とエッチなお遊びをするお店ではありません!

一番高いメニューのオーダーを取りまくれたので、瞳がおまもりこぼんになつてるネリが、女の子の視線に敏感になつてきた思春期真っ只中の少年トレーナーの手を握つて、真の目的地たる専用ライブステージへと誘導してくれる。この間にもう一つ追加オーダーを頼む様に催すのが、店側からすれば『手練手管なガチ有能スタッフ』

当然ながら少年はエツロいメイド風衣装のマニユ子にドッキドキ……だが、これからもおおくとドッキドキになつちゃうのだ!

接客のコツは利き手の角度を、45度に保つ事なのだとか。働き始め当初は手首が腱鞘炎になりそうだったが、お金の為なら痛みがなんだつ! スマイルで無理矢理カモフ

ラージユト

「みいんなくっ♪ 今日も私のライブに集まってくれてあつりがとうねー♪ 葵（あお）の唄を……とどけーるよー♪」

最後の参加者である少年から、チケットを拝借したネリが二階のスタッフルームからサイリウム、デザインタオル、双眼鏡、高性能一眼レフなどを準備して、ひしめき合っている顧客と仄暗く設定された店内最端のアイドルステージに立ち、ネオンの間接照明を背に受けながら、衣装の一つであるヘッドマイクを左耳に装着した女性を見下ろす。

ネリが知っている範囲では歴代最高の満員満杯！

彼女のライブチケットは例え、9999枚発券しても3分34秒でSold out

……

大手事務所に所属せず——スカウトはパッチールの模様の数ほどされたと浮標されるが本気にしてしまうだけの——魅力を持った地下アイドル、それが歌って踊って可愛くておっぱいが大きい、ハミングポケモンのチルタリス、活動ネームは《みゆる♪》

出身地は……天空龍が降り立つとされる祭壇を頂に、天をも貫かん高さの遺跡塔。

それだけにレベルは高いのだが、攻撃系の技を一切覚えていない。

幼い頃から襲われたら争うのではなく、柔らかに透き通った甘美なまでのソプラノボイスで夢見心地を味わえる《葵い唄（あおいうた）》を届ける。

それによつて闘争心を鎮めたり、眠らせたり……直接的なダメージを負わせる事なく難を逃れてきた。

ちなみに現住所は不明である。ストーリーカー被害に遭わない様に、定期的に住処を変更しているのだとか。彼女くらい熱心なファンが多いとこれくらいの対策は必須なのかもしれない。

地下アイドルなのだが人気がありすぎて、プロのアイドルや人化ポケモンユニットを総舐めする勢いでファンは上騰、いつその事プロデビューしろと本当のプロ勢は慄然しているらしい……

「皆の喜びと笑顔がー♪ 私の力になるのー♪ もおつと頑張れるんだよ♪」

ささくれた感情を癒やし、退屈させない喜・楽の表情しか彼女のファン達は見たことが無いし、彼女自身も過去に悲しんで怒った記憶が全く無い。

先天的で本能的なまでに『誰かを笑顔にするのが自分の役目』だと思っているから、無

尽蔵なまでにハッピーオーラを照輝せる！

『葵の歌姫』の二つ名を呼称される美しい旋律は勿論、彼女——みゆるる♪の♪
はあくセントかつ自分を表す記号なので、発声の際は付けても付けなくてもOK——
——が人気である要因は容姿にもアリ！

端的に言えばエツツツ！ 常時瞳には♪マークの意匠がされている！

綿雲のモコモフファーが付いたノースリーブは、彼女のイメージである淡いスカイブルー。髪色も同じで小顔が目立ち360度回転させたってモテ度抜群菱形シルエツトシヨート。

肉感たっぷりムツムチボディはなんとっ！

某青いメイドさんと同じ《Hカップ》

この時点でもうタマラン、ほろびのうたを聴かなくても昇天しちやいそう……しかもインナーを着けてない、即ちノーブラッ！！

有り難い事に綿雲はドチャシコボディの邪魔にならない配置なので、チルタリスに似

つかわしくない重量感溢れるAPHV弾を首の皮一枚でラッピング、その盛り上がりで生地がおっぱい方向へ偏ってしまいノーブラであると確信させる横乳棒アイドルとしても、主位の人気を保っている！

輪郭を繋げる脇魅せとのコラボで、貧乳萌えだった者のハートすらHを着弾させてしまおうのだ！

タンやトウガードにも綿雲を散りばめているから、もし蹴られても全然威力の無い厚底スニーカー……から視線を上昇させたボトムスが紺色スパッツであり、自身のプログで〃とある事実〃公言してから肉欲はさらに加速した！

『Q: みゆるる♪さんは何時もスパッツ穿いてますよね！ 下着の線が浮かんでない様に見えるんですけどこれって……』

『A: そうだよ♪ 下着穿いてない直だよぉ♪』

……質問者はスルーされるだろうから、躊躇無くセクハラメツセージを（匿名だし）質問箱に投稿しただけなのだが、躊躇無くナチュラルなのか無教養なのか、逆に質問者がセクハラされた感覚に陥る返答にファン達は総立ちした。ソッチの意味でも。

本人的には下着の線が浮かぶのが嫌で、混じりつけの無い自分を見て欲しいという、

ニューアンスを帯びさせているのだが……伸縮性に富んだ素材でも彼女のクソエロボデイとぴっちりフィットした立体感が、下着よりも恥ずかしい物が浮かぶ危険性がべらぼうに高いと理解しているのだろうか……？

まさか『パンツじゃないから恥ずかしくないorパンツが浮かび上がらないから恥ずかしくない』という思考なのだろうか……？

彼女のライブが開かれれば、さいはてのことだろうがチケット枚数分だけのファンが泳ぎ集まってくれる人気でも、決してプロではないからテレビなどで報道はされない。

ありえない事だが彼女がプロに所属するアイドルになつてしまえば、衣装変更がまず最初に行われてしまうだろう。これも地下アイドルの利点である。

Segment・hepta——蒼冥茫のクラドニー

「今回のライブはねえ〜♪ 特別にい〜……………メコンちゃんがゲスト参戦するんだ
よお〜♪ 葵と青のデュエット♪ た〜のしんでねえ〜♪」

なぜあなたがそこにいる

おっぱいとおっぱい、HとHは惹かれ合うのか。

その演出はSSR確定、虹色のライト左右から順番に〜一斉に光って最終的に青一色
に収束され、みゆるるの隣にスモークが交差して焚かれる。

「みゆるるさあん……………この衣装はちよつと……………／／／」

ランターン違いではありません、この物語の主人公の一人であるジツク少年の手持ち
であるメコン本人が、スモークの次はファン達からのなびらのまい……………よりも大量の
紙吹雪がヒラそよぐステージに現れていた！

おっぱいがおっぱいを呼んだー!

葵と青のTAG TEAMだあー!

メガトンフレンズおっぱいにキングザブーンしたいお……………

ファン達の熱いエールが贈られ——サプライズ登場に驚くよりもおっぱいと衣装に視線は吸い込まれていた——当のメコンは、涙目ながらもみゆくと同じポーズを取ってデュエット前の写真撮影に応じてあげている。

みゆくる&メコン、彼女らは青繋がりのお友達。

ホウエンだけに留まらず、イツシユやカントー地方にまで活動範囲を広げ地下ライブを行って、ファンと笑顔を増やして収入を得ているみゆくるは、メコンと連絡先を交換済みなので、今回もゲストとして呼ばれられたのだ。

過去にも数回、しかも開催日に連絡が来るので突発コンテンツを考案する政府とやっている事は変わらない、ネリのバイト先であるこの喫茶店で、誘われるがままに歌を唄った事があるメコン。

プロでもないし歌系統の技は覚えてないけどおっとりな雰囲気と、寛容力の源であるおっぱいと、圧倒的ヒーリング効果を持つボイスを見逃す訳がなかった。

茶色い歓声が連鎖爆発するステージ中心部で「カラオケだと思つて♪」な無茶振り

されても、順応しようと気持ちを入れ替えて水を司る精霊の様な瑞々しい唇で、上品にアマビールに響かせればワンダフルな歌唱力とおっぱいに、みゆるるファン＝メコンファンとなつてしまった。

ちなみに今朝行われたメールでのやり取りがこちら←

『オツハヨ〜♪ 今日ライブなんだけどさあ〜♪ メコンちゃんも時間大丈夫なら一緒にデュエットしてほっしいなあ〜♪ チラチラチラ』

『えっと、あのっ、お買い物があるので一曲だけでしたら……』

『マジカー♪ あつりがと〜♪ メコンちゃん用にライブ衣装作ったからお楽しみにねえ〜♪』

『え、ッ、!? 衣装つてちよつ、みゆるるさあん〜!』

ダメな事はしつかりと「ダメ」とお断り出来るメコンは、みゆるる相手だと押し負けてしまいがち。攻撃技覚えてないくせに。

ハウスキーパーたるメコンは、ヴィヴィが住む前は家事をこなしている最中の大体は、その場で思いついた歌詞を口ずさんでいた。

……ヴィヴィが居るといふのに、以前と同じノリで歌ってしまっていたら物陰から、蒼いツインテールがジト眼となつて観察していたので、ワナワナ振るえるくらい気恥ずかしさを感じてしまった事もある……

この様に無意識の内かもしれないが、唄うのは好き——しかも友達同士でのデュエット——なので、全力拒否する事案ではないのだ。

(メコンちゃんHカップだし♪ 私もHになつたし♪ これくらいかなあ〜つて、ファイリングでサイズとか寸法とかは決めたんだ♪ バッチシつて感じ？ イエイイエイ♪)

(はううう………// // 胸え……ぎゆうぎゆう詰めですよう………)

重箱の隅をほじくる言い方をすれば『メコンはIに近いH、みゆるるはGに近いH』自身のブログで「Hカップになつちやつた♪」記事を、なんと手ブラ撮りまで付随させて投稿すればアクセス数は過去最大に。

躁の気質が高すぎて頭の中が少し鳥籠つてるかもしれない彼女は、質問箱に「Hの何cmなんですかつ!?」とセクメ(セクハラメッセージ)が来たら、明確な数字は敢えてボカし……

「93〜96のどれかだよー♪ ライブに来てイメージしてみつてね〜♪ おっぱい大

きくなれば夢も広がるね♪」

こうやって もう にげられない！ させてしまう招致の手口が上手だったら。

お金が入らないとライブが開けない、ライブが開けないとファンの皆が悲しむ、自分もハッピーになれない『みゆる理論』に基づいた行動の一環として、ちよつとエツちな自撮りも積極的にアツプロードしているのだ♪

んで、そんなエロ尽くめの歌姫が手作りした衣装に着替えて来たメコン。

みゆるの出生地である天空の遺跡塔からの風景をイメージ、ハウエンを囲む澄み渡った青空に、モコモコの綿雲がプカプカと海遊している彩色は、空の欠片を拾ったかのようなようだ。

そこまではいいのだが、デザインが基本ロングスカート……でありながら、フロント部がカットイングされてしまっており、セットで着替えた清楚の代名詞である白色の、ニーソックスを露骨に曝け出さなくてはならない前開き！ ふわつと広がらずてろーんと下ろされているので、パンチラの心配は無いのだがニーソメコンは滅多に見れない流出画！

もつと恥ずかしいのがトップス！

ネオンの光を受けてテカテカと、艶やかな光沢がミラーショットする、ブルーエナメ

ル生地のカミソールは補強がなされて、みゆるる曰く「絶対に落ちない・零れない・壊れない♪」

だが、ぎつちんぎつちん具合がエロティックさを演じると、分かっているの設計なのだろうか？

恐らくアンダーの予測をミスっているのだろう、それとも意図的なサイズミスか……

みゆるるもサイズこそ僅かに異なれど、ランチャーにセットされた宝珠たるロケット型なので、合計4本のおっぱ、いや、ロケットがミナモシテイから撃ち出されてしまうのだー！ 今日だけはトクサネよりもロケットで有名な街になるんだぜっ！

完全に独立したシースルーのパフスリーブ、貝殻プレスレット程度じゃ、この羞恥心を誤魔化せないけど一度受け持った事であるし、みゆるるや皆も楽しみに自分の歌を待ってくれているしで……

「あつ♪ メコンちゃんのパートには青線引いといたよ♪」

歌詞カード渡されたって練習無しの本番！ しかも新曲!? 普通に考えれば無理難題だがっ……

「それでは♪ 初お披露目の新曲いつきまあ〜す♪ 『蒼冥茫のクラドニー』」

♪深く、濃い、光子の海淵

触れ合う事無く 砂時計 零れく 長く、儂く、芽吹くパンスペルミア♪

美しいの、無色、掛け替えの無いくカルネアデス♪

大海の一滴も 涙の一部 欠けた物を見つけていく クロソイドの航海♪

呼吸、繋がる、誕辰の匣♪

もう一つの海、潜り、今を悦ぶコペルニクス、美しいの……生命……♪

浮上し……彩与え……晴れる……鳴動……映す……アストロラーベの……水面鏡♪

みゆるる発案の元『彼女にチャージビームを放つてスーパースタイルに変化させてから歌いきった』事もあるけど、何度か参戦して要領は心得ているし、歌い出せば落ち着いてくるのだと過去ライブを回想すれば……ユウキリンリン、ショシカンテツ！

あとおお、しかし一つも被らない青と葵のハーモニー。

ねじ込みたいHの持ち主達が、生きている歌を熱唱……からのダブルピース！

メコンは三本指でマイク持ちながら額近くでのボーシング、みゆるるはマイクを『おっぱいに挟み込んでいるから落とさない』フリースタイル！

みゆるるに誘われるままに、両脚を絡めさせたりHとHを足し算したり、テンショ

ン上がってるメイドさんはドラゴンダイブの構えに入りながら、激写しまくりサイリウムを素振りさせているファン達へ、過激なツーショットを提供していると気がついてない。お買物中にねつぼうそうしてしまおうと、ネリは既に予測済みである。

サービスピ精神旺盛な姿勢が、ファンの心と股間をがつつりキャッチ。

この後みゆるるはファン達との交流（意味深）企画として、ピンでの撮影会に握手とサイン会をも控えさせている。

セクハラもバッチコイな、寛容……それともハッピーになつてくれるなら、どんな事にも応えてしまうのか……最高潮の喫茶店ライブが終わっても、ファンとの距離を——物理的にも——接近させ沸き立たせる彼女は歌が上手いとかおっぱいが大きいとか、そんな簡潔な理由で切つてしまえるエピソードで構成されていないのだ。

ブログ更新は毎日して、肉感たっぷりボディを崩さない自己管理、オフ日は歌と踊りの練習、絶大な人気という自覚を持ちながらお立ち台の上で図に乗らない！

みゆるるを「正式なプロじゃない癖に！」「おっぱいデカいからって調子に乗っている！」と、アンチっていた貧乳コンプレックス系人化ポケモンアイドルグループも、ブログで公開された『みゆるるの一ヶ月すけじゆるる』に「一匹残らず嫉妬心を駆逐され、彼女を素直に認め『越えたいライバル』の階級へ至ったのだ！

「(い)ら(い)らあ〜♪ タッチは禁止だよ〜♪ 握手会まで我慢我慢♪」

身を乗り出してスパッツと肌の、境界線に触れようとした男はルール違反!

しかあし、瞳の ♪ 波紋を淀ませず彼女は「めっ♪」とジエスチャーするだけで許してしまおう。

ファンがそうしなくなってしまう気持ちを理解できているので、他のファン達がふくらだきしようとしても制止させて、一人ずつ太もも揉み揉みさせてしまうサービスは、地下アイドルの中でも彼女くらいしか出来ぬ芸当。求められる水準が高すぎてパクれない!

……間違つてもメコンにも同じ事をしよう! なんて思わない方がいい……

彼女の——特におっぱいに——触れようとしたファンは《何処からともなく現れたジツクに路地裏へと連れて行かれてしまう》からだ……

「みゆくるちやあくくん Wメコンちやあくくん Wブルビュツ W W ダブルブルー おっぱいニヤアアアンツ? あのと H と H に尻尾を挟み撃ちされたいニヤアアンツ? でもでも、私にはヴィヴィちゃんという意中のおっぱいが……… グルヌフツ W W W W W F のままで十分だけど私がダイレクトに育成させちゃえばいいんだニヤン W W W トリプルブルー H W W W オフオオオー W W W」

………ハウエンで一番ヤベー奴も、ライブに参加しているらしい。

尻尾でタオルをくるくる回しているから、ではなく『もつと別の様々な意味合いを総合させて男女問わず誰も近寄ろうとしない』から、ヤベー奴のテーブルだけはポツチ席となっている……ちなみに下着売り場のお仕事は抜け出した。

こんなでもぞんざいに扱わず、尻尾でパイタツチされても「握手するのはおっぱいじゃなくて手だよー♪」で流してしまうから、ヤベー奴は「私に気があるニャンwww」と勘違いしてしまうのだ。

他のファン達は誰も視線を合わせないくらいにドン引きしていた。

Segment・hepta——歓談なる老練は帰還した

今回受け持った依頼は二つ。

一つ目が『ポケモンを たいせつに！』を合い言葉にしているトクサネシティでのダブルバトル！

宇宙に一番近い場所、宇宙センターを結ぶエントランスゲート前には白い岩が奉られており、これは幻のポケモンが眠る繭！ 願いを星空へ解き放てば目覚めるだろう

！

……そんなデマが流れ————神秘性があり地球外な形状だったので信憑性が濃かったのも、デマを流した犯人の思惑————遠方から急激に観光客が訪れて、気に入ったからそのまま定住したグローバルに文化を活性化させ始めた南国島。

地味で小規模ながらゲームセンターも経営され、昔よりも町並みは都会チックとなつてきている。将来的にはキンセツ、ミナモに次ぐ発展が見込まれている。

一線を退いたかつての手練れがポケモンと共に泣き・笑い・苦勞を乗り越える可能性の塊である少年少女達への、育成指南を新たな生き甲斐として定めた者達が席を並べる

様に定住すれば、後を追うかの如くまだ現役として若者達には負けない！ と、意欲を燃え上がらせるシルバートレーナー。

引退したけど住民達を遠望している内に「残り少ない命の再起動」だと、再びトレーナーの世界に復帰する出戻りトレーナーまで……

高齢者に優しく住みやすいバリアフリー化は、ハウエンで最も意欲的に行われている。元より平坦な地形が多い島だったが、宇宙センターへ到達する階段は全てエスカレーターに改良され、車椅子や杖などの補助具が必要となるお年寄りの方でも、毎日の様に今か今かと大気圏外への航行を待つ、ロケットの整備や設計を觀賞しに行けるのだ！

……そんな宇宙センターの北西には、この島で最もセレブリーな館で一人——
——と手持ちのポケモン達——暮らしている主こそ、今回の依頼人にしてバトルのお相手だ！

「初めましてジツクさん。お忙しい中私とのバトルを受け持って下さり、心から感謝しております。この日が楽しみでねえ……ふふっ、何時もより一時間早く起きてしまったわ！ 75歳になっても全然変わらないのよね、初めての大会の日からずっとこうなのよっ、おほほっ！」

「マスター……どうかあまり無茶をなさらぬよう……内面のバイタリテイは変わらずとも、お身体は若い頃のままでありませんぞ……」

「それは百も承知よクライド、貴方だって心配性なのは依然として変わらないわよね」

依頼人の貴婦人が所有する館、敷地内の東側には洋風庭園、本人曰く散歩コースと西側には、ジツクのログハウスの裏庭と似てフラットかつ、障害物やギミックなどが配置されていないスクウェア型のフィールドへと直接招かれた。

広い……外観はほぼ同一ながら面積は四方に100か、120メートルくらいはありそうだ。大型のポケモンや手持ち6匹をフル活動させても、あらゆる戦闘訓練に支障が無いであろう安全性を確保されている。

招き入れてくれたのは貴婦人の手持ちであり、幼い頃から執事として仕えて来た、こおろぎポケモンコロトツク。

ニツクネームは《クライド》このネームは前のマスター、貴婦人のマザーから贈られたらしい。

赤系統の燕尾服にカイゼル髭を口元に蓄えて、非常に紳士で落ち着いた雰囲気を持つ……のだが、心配性なのだろうと貴婦人とのやり取りで察せられる。

昔はバトルも嗜んでいたらしいのだが、今ではトレーナー養成学校で模擬演習するの
が精一杯。なんと彼のお歳は今年で百歳！

ポケモンは人間と違い、必ずしも外見と実年齢が一致しないケースがある。

クライドは70歳までは人間と同じ様に老けていたが、以降の老化は非常に緩やかで
百歳と知られると驚かれる。

成長の流れも人間とは別、急速に老いる事もあれば——

「バトルを前にしたオーヴェルに言っても無駄ですよクライド？ 私はそれに付き合っ
てもう65年……貴方は75年、矯正なんてできっこありません。何時までも変わりな
く過ごして嬉しいじゃありませんか……」

脚腰が衰えてしまい、車椅子生活を余儀なくされたマスター。

高齢でもトレーナー業に勤しんでいる者達へは、折りたたみ式のボールホルダーを内
蔵した特注品の車椅子が提供されている。

サイズやカラーなども細かく発注でき、老後もポケモンと関われる安心感を……これ
もデボンが生活支援アイテムとして生み出した物だ。

貴婦人のパートナーポケモンであり、雪国を模した柄を刻んだ白い着物に、赤色の帯
をアクセント。

ガラスビーズにも見える氷の塊をアクセサリ代わりに、寒色系が融合した白銅色の口

ングヘアのサイドに一つずつ付けた、20代前半の窈窕なる女性。

ゆきぐにポケモンユキメノコ、ニックネームは《こてまり》

20代前半なのは外観だけで、実年齢はマスターと変わらないらしい……!?

ユキワラシから進化し、今の外見となつてからどれだけ年月を重ねても、外見だけは老化しない。ゴーストタイプなのも関係しているのだろうか……?

ジックよりも少しお姉さん、インフィスと同じ年齢と言つてしまえば揃いも揃つて信じてしまう……彼女もバトルは引退している。

「私は一度引退した身、ですがまだまだ、寧ろこれから……クライドとこてまりは、バトルに出す訳にはいきませんが、新しく育てた子達で挑ませて頂きますね」

貴族階級のロイヤリティ、数年のブランクを経て復帰した理由は実に単純。

臨時講師を務めている養成学校で、生徒達がポケモンと勝利を喜んだり、負けて悔しがつていたり、時には喧嘩してしまうけど、すぐに仲直りして……

「引退なんて出来つこないですね！ ふふふつ、貴方とはお手合わせしたかったのよ？」

この前のコンテスト、あのドームに私達も居たんですよ、ヴィヴィさんの演技を拝見させて頂いてました、とっても素敵なポケモンですね」

歳をいい訳にするのは止めた、自分は何としたい事がいっぱいある。

『好きなポケモンで頑張りたい』のモットーを再び掲げ『ポケモンが助けてくれるから私達は暮らしていける』が口癖になってしまった

《マダム・オーヴェル》

「ありがとうございます！ 俺もオーヴェルさんの事は存じておりました、リーグ記録を回覧すると必ずと言って良いほど、貴女の名が記載されておりまして『俺も何時かお手合わせしたい』と、思っておりますが……！ 貴女からご指名くださり誠に光栄です！」

元々ジツクはそれなりに有名なトレーナーであるが、ヴィヴィが萌えコンテスト準備の実績を獲得し、それが全国ネットで生中継されていたのだから——例えヴィヴィと戯れる事が目的であっても——バトルとは別の依頼も含めてメッセージは毎日ドツカンドツカン届く。

自分も皆も疲れすぎない範囲で受け持っているけど、かつては仁者無敵とさえ謳われ、館には一戦一戦忘れられない思い出が詰まるトロフィーが、政府への貢献を称えられた表彰状が、数え切れない程ディスプレイされている憧れのトップトレーナーが相手

だ。

されど相手を立てながら謙虚な姿勢を忘れずに……困難や逆境に何度も直面し自らの生き方を反省、失敗の連続から礼儀が生み出され独善と偏執は破棄させる。

——ちなみに稼いだ賞金のかなりの範囲は、教え子達が通っている学校へ寄付している——

Segment・hepta——白執事と巫

(マスターも一時間早く……メコンさんのモーニングコールよりも早く起床し、バトルに備えて頭の中を一旦リセットさせていました。この貴婦人と何も変わらないですね……同類、ですっ……)

こてまりが引退しているので、全盛期並の強さを振るえないかもしれないが、オーヴェルが『新しく育てたポケモン』と車椅子のホルダーからボールを二つ取り出せば、ボールの中からでも強豪にして精鋭のオーラを感じ取れてしまう。

バトルが上手いトレーナーはそれだけ育てるのが上手い……!

シワや弛み、ほうれい線からは逃れられず加齢の進んだ不鮮明になりつつある表情でも、トレーナーとして胸の内は全盛期よりも知識を——講師は生徒からも教わる事がたくさんある——得て、あの時をも凌駕している実力を出せそうな自信……湧いてくるっ。

笑顔だけは年老いても絶やささない、平和は笑顔から生まれる物。

馴染んだ感触のボールからも孫達と同じ様に大切にしている、手持ちがコンツと揺れてオーヴェルの膝掛け……のさらに上に座っている小型のポケモンが、火花散らせなが

ら開戦を待ちわびている両者へと、ぺちぺち短い手を叩きながらぴよんつ、とその場で跳ねる。

跳ねただけでそよ風に捕らわれそうになって、クライドが慌ただしく助けてくれるがお約束の流れ。

オーヴェルの手持ちで唯一人化を果たしていない、生まれたばかりの癒やし梓マスコツト。

それがわたくさポケモンハネツコ、ニツクネームは《おプチ》

「ミノツ！」

はねるしか覚えておらず、善悪の区別どころか強風に煽られてしまっても、無邪気な顔で頭の葉を回転させぶらり旅をエンジョイしようとしてしまう。

仲間意識を持ったのか、ジツクの手持ちで唯一人化を果たしていないミノムシが、ジャンプし彼の目線に合わせながらとりあえず挨拶するも、おプチはかたくりこジャンピングが面白ろ可笑しいのか、ぴよんぴよこ真似するばかり。

言葉は通じ合えない……でもコミユニケーションは出来た、のか？

「あらおプチ、かたくりこさんとお友達になれたのかしら？ もう少し二匹のほのぼの

交流を眺めていたのだけど………さあジツクさん！ 始めましょう！ ルールはお伝えした通りです、使用ポケモン二匹までのダブルバトル……レフェリーさんも準備はOKですね、改めまして、よろしくお願いします」

「よろしくお願いします！ 俺の二匹は………！ この子達ですツ！ いけつ ヴィヴィと爽羽佳ッ！」

オーヴェルと同じ養成学校で働き、政府認定のジャッジ資格を所有しているレフェリーが、バトルスタートのコール！

（やはりヴィヴィさんを選抜して来ましたね、トクサネはエスパークタイプに有利な龍脈が溜まる土地、理気が最も働いているのが島の北東……そう、私の館だけでなくジムが建てられている方角でもありますね）

トクサネのジムリーダーは、エスパークタイプのプロフェッショナル。

その様な風水があると最初に見抜いた者が、初代ジムリーダーの座を政府から請け負った。

モンスターボールから姿を現した、思春期真つ只中のメタグロス、トクサネでもゲンセンへ足繁く通つてそうなオニドリル。

「私とヴィヴィちゃんが実戦で組むのって初じゃない〜！ いてこましたろ〜ねえ！」
「いてこ………ええ、宜しくお願いします！ 勝ちましょう！」

マスターの為にも……それは口にせずとも、爽羽佳には伝わっていたらしくニヤ付きを堪えるのに必死だ！

「頼みますよ、ネレグ！ バーベツト！」

一つは上空三メートル、もう一つはフィールド中心地点へ投げたジツクと比べ、筋力の衰えをヒシリと痛感する。

投げるのではなく転がされ、先に開いたのは放物線状に金箔が巨大化した様な、キラキラ流るる演出が何ともゴージャス！

明るさばかりを強調させない、黒いボディの中心部に適度な金色のライン、収めたポケモンが懐きやすくなるゴージャスボールの単価はかなり高い！

「P i a c e r e、我がマスター・オーヴェルの名を汚させぬ有りふれたバトルはしないと約束しましょう。マスター・ジツクと二人の S i g n o r i n a」

クライドと同じデザインの燕尾服だが、こちらはホワイトを基調に胸ポケットのカラーはセルリアンブルー。

後ろ髪を襟首でターンさせ『湖のおデット』なる異名を持つ白鳥の翼を意識したヘアスタイル。やや奇抜だがベースが線の細い美男子なので、少しの時間で違和感が消えて

しまう。

左眼にはモノクルを装備し、コサージュ代わりなのか、きれいなハネを左肩へ付けている、しらとりポケモンスワンナ。

ニツクネームは《ネレグ》

(ぴあちー……??　しのりーな……??　ヴィヴィちゃん、あのキザ男の言ってる言葉って何処の国??)

(あれはイタリアという国で使われている言語ですよ)

そしてもう一つのボール、日没と闇夜を彷彿とさせるダブルカラーに、頂点のクレセントムーンがシンボル。

開閉後はクレセントが拡がり、爆発した派手なエフェクトで彩られたムーンボールからは——

「……………がんばる……………」

スワンナの青年、ネレグよりも30cmは低いであろう身長。

キャラメルブラウンのポンチョで、前面の膝下までを隠しているので、下衣は40デニールくらいと思われるタイトの姿しか判明出来ず。

鹿耳型にへたれを見せる癖っ毛がキュート、髪色はポンチョよりも明度が薄いブラウン。

アメジストの様な、大粒ブドウの様な球状が根元に埋められた二本角は、空気の流れを微妙に変えて見つけた者を不思議な感覚に陥らせてしまう。

エスパークタイプではないが、限りなくソレに近い感覚干渉能力や空間操作能力、幻覚であるのに実体化、エスパーのお株を奪うのは大変な尽力であるのだが……

(どっちもエスパークタイプじゃないのか……！ オーヴェルさんはトクサネではエスパークポケモンを使う事が多いと、戦歴を調べたけど『新しく育てた』って言っていたからなあ……それがこの二匹ってことか！)

地の利を活かさない？ もしくはそれに乗った相手への対抗策をスタンバイしているのか……

おおツノポケモンのオドシシ。

ローテンション系少女のニックネームは《バーベツト》

ダブルバトル開始！

……スワンナとオドシシは特殊攻撃or物理攻撃値、並んで素早さがやや高めのポケ

モン。

リーダーチャートグラフで当てはめると、その他の能力値との揺れ幅は中庸。

メタグロスの様に「殆どの能力が高水準」な訳でも、ネリの様に「素早さと攻撃に極振りしている」のではないポケモンは、トレーナーの手腕が特に浮き彫りとなるので、無策で使えば器用貧乏となりがちだ。

「爽羽佳は空中でネレグを、ヴィヴィは直進してバーベットの相手を頼むー!」

18歳のジックよりも人生でも、トレーナー業でも、豊富な経験と優れた勘を培っている老練家、オーヴェルが適当にあの二匹を投入するだろうか？

「空は空のスペシャリストに任せましょう」

エスパーが有利となる地形効果は、この館でも働いていると本人が申し立てた。

に関わらず、自分はエスパータイプのポケモンを使わないとは決闘相手を援助しているだけになってしまう。それはベテランが故の遊び心か、情けか、義を重んじているのか……？

そんな事は無いっ、絶対に……何かあるハズだ!

「珍しい武器のオニドリルだな」

「でしょでしょ？　世界中見渡したって多分私だけだよ、脚を嘴扱いにさせてんのっ！」

生まれ持つての飛行能力を持った二匹が、地面を振り切るかの速度で高度を上昇させる。＼レフェリーの視界に収まる＼が高度規制なので、調子に乗って飛翔し続けていたレギュレーション違反になっておマヌケな敗北を喫してしまう事も……………

飛行タイプ専用のバトルフィールドでなら、大気圏外へ突破されても追尾し燃え尽きることの無い、カメラ機材とアンテナを展開させるので思う存分、制空権争いが許される。言うまでも無くそれは、この館専用フィールドでは行えないので、抑えるべき場所は抑えなくては…

片羽を横薙ぎに払い、空をも切り裂く刃を生成させ目隠れ少女へと放つ。

事も無げに身体を「く」の字に逸らして、エアスラッシュを回避した爽羽佳。

縦薙ぎよりも威力は劣るが、攻撃範囲を広く取った刃でも開幕早々から、ブチ当たってしまいう弱いポケモンじゃない。

「ああ、タイプの都合も合って飛行タイプとはよくバトルをするが、お前の様に嘴を使うオニドリルは見たこともない。オンリーワンで奴だな」

挨拶時はラテン系の言葉を織り交ぜて、献上の態度であった白服の青年は、鳥類である爽羽佳に仲間意識を覚えたからなのか、大分砕けた口調となっている。

「閉鎖的でほのぼのし過ぎてる田舎出身だから、目立ってみたい願望があったんですぅ〜！ ニックネームもわざわざ漢字表記にして貰ってるーのオッ！」

遠距離系統の技を覚えていないが、一撃離脱戦法が得意な爽羽佳は必ず目標対象へ接近しなければならぬ。

単純な力押しでは——ちよつと早いくらいしか取り柄が無い地味なポケモンと定着してしまい脚光を浴びることが少ない——オニドリルなので、タイプ相性がある利でも無い限り無理算段。

田舎から連れ出してくれたマスター、ジツクの指示でお返ししてやったのは……

「……ふッ！ オウムがえしか、オニドリルはエアスラを覚えたか否か、頭で考えていたら足首くらいは裂かれていたかもな」

（そー簡単に当たってくれないよねえ……ターゲッティングもバレてくら）

羽を仕舞い込んで自由落下、両脚に重りが装備された様にも見える光景だが、左足を横へ払って飛ばした『エセエアスラ』が後方で消滅したと確認すれば、逆上がりの要領で再び浮上し爽羽佳と顔を合わせた。

「頭使ってるな、特別能力値に優れないのは俺も同じ、どう補い、何を武器として勝る相手へ立ち向かうのか。……これも縁なのかも知れないな」

「あく恋とかじゃないんだけど、貴方と初めて視線合わせた時さあ、10まんボルトに撃

たれた様な衝撃走ったよ。酷似感あるねえ！ お兄さんの嘴は何処にあるのかなあ？

「引つ張り出して見ろ、それが拜める時は天王山になるかもしれないがな」

「いゝゝえ！ 出すまでに倒してやりますともおゝ！」

《風を味方に付けた方が勝つ》

とある飛行タイプのジムリーダーが、育成や戦術、想いの丈を小説論として電子書籍化し出版したタイトルだ。

旋回上昇する二匹もそのタイトルが頭を過ったかもしれない。

爽羽佳もネレグも、良きライバルを手にしたのかもしれない！

飛行vs飛行は「どっちが上を取れるか？」の制空の奪い合いだ。

他のタイプなら一方的に上が取れるので気にしなくてもいいが、相手も飛行能力持ただとそうはいかない。

ましてネレグはキザな青年だけど、バトルでも「おさきにどうぞ」なレディファーストで勝ち星を譲渡するナヨ男なんかじゃない。

（ヴィヴィ、バレットパンチで距離を詰めながら攻撃だー！）

（了解ですッ！）

念話で伝わる言葉にも、気持ちに乗る様になった。

今は1vs1の状況が2組作られた、見栄えになっているが雰囲気には流されず守り通さずとも良い。

とは言え……二匹の鳥ポケモンの高度へ到達するには、ヴィヴィでも不可能なので今は任せるしかないのだが。

「っ……今、やって、ネレグ……」

——あのオドシシ、バーベットの特性は『いかく』ではなかった——

Segment・hepta——召喚

場に登場すればそれだけで、相手二匹の攻撃力を下げる強力な特性。発動させただけでオドシシは物理へはそこそこ硬くなる。

（おみとおしか、そうしよくか……ダブルバトルでなくとも汎用性が高いかくを捨てている、やっぱりオーヴェルさんは何か企んでいる！）

ヴィヴィはクリアボディなので、いかくの効果は無効になるが爽羽佳へは確実に攻撃力一段階ダウンのマイナス効果を付与できていた。

ルール上交代出来ないの、いかくを発動させればそれだけで有利となるのに……だ。

弾丸の速度となつて先制攻撃！

駆ける蒼鋼は速攻能力を持つバレットパンチで、オドシシの少女を五連打！ リヨナの意味はなくポケモンなので、人間だったら内臓が飛び出してゐる威力でも平気です。

「!? アイテムが……！」

しかしオーヴェルは絶妙なタイミング、ヴィヴィが初手でバレットパンを繰り出すと完全

に読めていたのか、ジツクの指示よりも早くリフレクターの使用を命じていた。

ポンチヨの内側を殴られたけど、自分の技は発動させたので「そのくらい通してやる」と、複雑な形状の角を回転させつつも最小の動作で、元居た地点へと戻ったバーベツト。ハニカム、もしくは何かの甲羅に近い形状のバリアが、暫くの間味方への物理攻撃を半減させるリフレクター。

どのバトル形式でも有用な効力を持ち、ダブルでは自分だけで無く“味方二匹”が対象となるので、生存率が跳ね上がる強力かつ無駄とならないサポート技。

ヴィヴィは特殊攻撃も扱えるので幾分かマシだけど、爽羽佳は物理技しか覚えてないので致命的な一手を刺されてしまった！

それだけではない、ヴィヴィとジツクから敵対心を受け持たされるのもバーベツトの役割の一つに過ぎなかった。

僅かな時間だけでいい、その隙間、爽羽佳と空中戦を繰り返していたネレグがリフレクター発動と共に急降下。

「あッ!?! ヴィヴィちゃん狙われるよご主人っく〜!」

「もう遅いさ! オボンのみ、奪ってやったぜ……!」

(回復手段が消滅させられた……ッ!)

……見事な盤上の運びと流れ。

一瞬だけでもネレグへの警戒心を緩める事が真の目的。

ネレグがヴィヴィイに突撃してくると念話で知らせたのだが、防衛手段が無かったのでもうにも出来なかった。

「ヴィヴィイさんが『何らかのきのみ』を持っているだろうと、私の『勘』が教えてくれました。安心しましたわ」

対戦前夜にジツクは悩んでいた、ヴィヴィイに持たせるアイテムをラムにするか、オボンにするかで。

……悩んでいた苦労も時間も、あの一発で灰燼となってしまった……！ メタグロスは回復系統の技が使えないので、一息付けるオボンのみは疑似的な耐久水増し手段として重宝していたのに。

「ついでに、俺もメタグロスの Signorina がきのみを持っているかどうかなど、判別は出来なかったがマスターの『勘』を信じただけさシャリ、シャク……シャクツ」
まだ疲れてないしHPも減ってはいないけど、甘酸っぱく整ったシトラスの味が口

いっぱい広がって、戦意高揚しながらもリラックス。

相反する気持ちで再び空へ舞わん！

「ネレグがついばむを命中させる為の、誘導でもありました」

（地上へ到達する距離や速度も計算していたのか？……すげえや……）

ピンポイント気味の技だが、所持している木の実をかつさらい無駄に消費させる事の出来る、妨害兼攻撃技のついばむ。

オーヴェルの術中にハマッてしまったが、彼女はリアルサイキッカーではないので『ヴィヴィがきのみを所持している』と、確実な保証は約束できなかった。

——過去にバトルしたメタグロスや、公式から非公式も含めて自分が知っている限りの、メタグロスのデータを検索し弾き出した確立が『持っている可能性が高い』というだけ——

ネレグもオーヴェルの“勘”を信じ、ついばんだ結果が……アレだ。

彼は何も迷い無くもう一匹の仲間が、ヴィヴィを引きつけ上空からの警戒心が薄くなった瞬間を狙い、まるで獲物を捕食するカワセミの様に翼を折りたたみ、頭に重心を集中させた急降下、そして急上昇で反撃の隙を与えさせなかった……！

オーヴェルを心から信頼していなければ、あんなに素早く鋼鉄ボディへ飛び込めな

い。

「もしもヴィヴィが他のアイテムを持っていたら」など、彼は考えてなかった。オーヴェルがそう決断したなら間違いないと、戦場を預かる手持ちとして遅疑逡巡せずに遂行しただけなのだ。

「次の攻撃へ移ります、バーベツト、メガホーンですよ！」

貴重な回復手段を失ってしまった。

硬くて冷たくて、でも心は暖かく、硬度や低温脆性、腐食耐性はレベルと絆が深まるほどに増すブルーメタリックでコーティングされているので、そんじよそこの攻撃は軽減させるヴィヴィであるが……

「……印、『角』……召喚……」

ポンチョから左手を露わにしたバーベツトが、紫紺に発光する人差し指を筆になぞらえ前方へ、幻妖な手つきで『角』と描けば――

（あれがメガホーン!? 召喚型の武具かッ!）

自分の頭部に生えているツノと、同じ音叉形状ながら全長1.5メートル程の『角』を武器として取り出したのだ！

人化したポケモンの武具は、二種類に分けられている。

一つはヴィヴィや爽羽佳に見られる、自身の身体に装着させる『武装型』

これを装着させなければ戦闘力は大幅に低下するので、なければ困る武器。

己の力たる概念が武装として形作つたので、戦闘開始前には既に装着済みしておく、全力で戦うための触媒である。

二つ目が『召喚型』で、たつた今バーベットがやって見せた方法だ。

こちらはなくとも戦える武器、他に戦う術を持っているので戦闘前に準備しなくても良い。

言い換えれば戦闘途中で、仕舞い込んでいた武器を取り出したというだけ。必要ない相手には、仕舞ったまま戦い終えてしまう事も出来る。

「……………」

ヴィヴィは召喚型のポケモンとバトルするのは初めてだ。

！
少なからず驚いてしまっている間にも、バーベツトは二又の鉋をヴィヴィへ投擲する
彼女は直接手に持たず、右手を素早く対象へ向かって指で刺す形に突き出せば、その
意思に応え発進。

（伸びるメガホーンッ!? 物理攻撃なのに飛び道具みたいじゃないか……!!）

今から避けるのは難しい、やむを得ず腕を交差させる防御行動をヴィヴィへ与え、彼女は一本目のメガホーンはやり過ぎせた。

（あ、っんッ！ 大丈夫です！ タイプ一致ではないので見た目の迫力程威力はありませんが……が、厄介な技です……10メートル級の距離でもすぐに到達しましたっ、レンジも広いです……）

一本目のメガホーンが防がれ、ここでバーベツトは左手を斜めへ出し、眼前に映るヴィヴィを掌で叩く勢いで横払いさせた——でも、召喚された角は二本。

同じ正面ルートで迫っていたが、二本目は微妙にルートをズラしヴィヴィの肩へ命中した。

「この二本の角……私の意思通りに動くよ……武器扱いだから……他の技と同時に使用

も……出来る……」

「本来であれば『何らかの技を使用している時に別の技を使う事は出来ない』のですが、一部の例外があります。それが……召喚型の武器を持つポケモンです」

ヴィヴィが召喚タイプと初戦闘であると、あの僅かなやり取りで見抜いてしまったオーヴェルは、ポンチョ娘と一緒に親切な教示をしてくれた。

養成学校で生徒達へバトルのお手本や、トレーナー知識を学んで貰っている時と同じ様に、ヴィヴィを一人の生徒と思いつつながら。

シユルルルツ、バーベットの両手を小指く人差し指の順に、手前へと曲げたら見えないうストリングで結ばれているのか、パペットマスターな手捌きに刃向かわずリターン。

(あのバトルスタイル……ヨーヨーのツーハンドプレイみたいですね……それでいて巫術や呪術師の様な一面も併せ持っています……)

円盤玩具だって身体にぶつかれば痛い。

そしてバーベットの召喚した多角形は、玩具なんかではない。

彼女の両サイドで浮遊したまま、停滞する角のオブジェは力尽きるまで消滅する事は無い。メガホーンに限って発動までの充填時間や、攻撃終了後に発生するクールタイムもスキップされる、それが召喚型の最大の特徴である！

(練度や育て方が秀でてる証拠か……素のエスパードだったなら抜群で通っちゃって、メ

ガホーンだけで吹き飛ばされてたな……)

接近して勢いよく角で突き刺すのがメガホーンなのに、その場から一切動かず攻防に活用でき順行・逆行思いのまま。伸びるわ曲がるわ戻るわ……

ノーマルポケモン数あれど、オドシシは他のポケモンの影に隠れがちで、俗に言う『マインナー』

どんなポケモンだって使い手次第で化ける。

懐から取り出した煎餅をポリポリ食べているバーベットと、肖像画として残したいくらいの笑顔をジツクへも伝染させながら、教授する職務に就いている者として明快に説明してくれるオーヴェル。

つくづく鋼複合の有り難みを感じる。巧みに、ダイナミックに「意思を持ったヨーヨー」をトリツクさせてくるので、ヴィヴィでも分岐予測が難しい。

先程の攻撃も、自分がエスパー単であつたら……

(……て、マスターあのお煎餅っ！)

Segment・hepta——エスパーと酷似する『ノーマル』

断つておくと、オーヴェルに時間を稼ぐ意図は無かった。

「パリンツ………ん、もぐつ、ポリンツ………おいしつ………」

ジョウト地方から取り寄せた、オドシシの影絵が刻印された、まあるい形に焼かれた携帯食。

バーベットにとっては、オヤツになると同時に……バトル中もHPを少しずつ回復させる『たべのこし』へも変貌するっ！

「(壁も貼られてるし長期戦は分が悪い!) 爽羽佳、バーベットを持ち上げ……」

「ネレグ! 地上は任せたままでいいです、爽羽佳さんへエアスラッシュユ!」

飛行タイプの爽羽佳になら、メガホーンの威力は半減するのでノーガードでもある程度は耐えられる。

100kgに満たぬ、オドシシの体重ならリフトアップが可能だ!

空中の階段を登らせ、無防備状態のまま連続攻撃を叩き込んで一気にHPを減らしてしまおうとしたけど、ジックが指示し終わるよりも早く貴婦人の生氣並々溢れる発声

が、抜かりの無い措置を下す。

「うア!? にゃくろおお! 邪魔すんなつくくく! ヴィヴィちゃんごめん!」

「あの Signorina の元へ向かおうとすれば、羽の付け根がくり抜かれるぜ」

真空の刃をその場で——高度100メートル地点だが——倒立前転し躲す事が出来たけど、背を向けてしまったので危なかった……間一髪。

悔しいが瞬発降下速度は、ネレグの方が上らしい。振り切ろうとしたけど攻撃有効範囲内まで侵入され、ジツクの指示があったからこそ背面ストリップせず済んだんだ。

オウムがえしは相手の技を、そっくり真似るけどエアスラとエアスラ、残念ながら特殊攻撃では勝てないので相殺どころか、エセエアスラごと真つ二つされる!

……障害物はないけれど、トクサネにはエスパータイプに恩恵に預かれる風土。

物理技の通りが格段に悪くなったので、サイコネシスの出番だろう!

射程範囲も拡大しているので、上手く行けばネレグをも巻き込んだ二体同時攻撃も実現できるかもしれない……!

「今だつ! ヴィヴィ、サイコネシス!」

交代制ではないので無効化は、まもるを使われない限りされないはず。

手の動きをそのまま代行させる、幻覚の一種であるが顕現させ肉体的苦痛は脳へとシグナルを送る、バーベツト専用のメガホーンを念話でジツクと意思結合を果たしたこう

そくいどうで回避しつつ、相手二匹を射程距離内へ捉えたスポットへ両脚を落とし、深紅の瞳を強く眩か——

「さあ来ましたよバーベツト、貴女の真の力……生まれ授かりし特色を余すこと無く発揮させてくださいな！」

「コクツッ！ 印、『封』！」

上空のネレグも防御態勢を作ろうとすらしてなかった。

間に合わなかったのではない、サイコキネシスが「不発に終わる」と知っていたから、爽羽佳との罫迫り合いに集中させて貰っていただけだ。

「……やッ……!? ……お腹にまとわりつくこの……!?」

空間を湾曲しニューロンネットワーク軸索を、電気信号ごと停止させ兼ねない破壊力となるであろう。

半減ですら強引に「分からせる」サイコキネシスが炸裂！

……発動直前でブレインコンピューターが、コンパイルエラー。

ピー、ピー、ピー……無慈悲なる長音の発生源は、ゆったりした衣装を纏いメランコリックな表情をややドヤらせ、トラップに嵌まったヴィヴィイが硬直から復帰するのを待つてあげる優しさはないので、不可視のマリオネットで繋がったオブジェを——左手は外回りさせ、右手は膝まで落とした後に左肘とクロス——撃ち出して脇腹に一撃、髪飾りへ一撃の合計 2 h i t !

(ウ、あ、けふ、う……！ “メガホーン”のコンセプトを……完全に逸脱させてます……！ サイコキネシスだけじゃありませんっ、まもるも封印されてしまいましたっ！)

なんて曲者！ ネレグと交戦中の爽羽佳も技を封印され……たけど、彼女は元々まもるを覚えていないので実質的な被害はない。

エスパーに恩恵がある地形でも、エスパータイプを使ってこない理由。されどサイコキネシスを覚えさせているのは——

「———そうですよ、ジツクさんにヴィヴィイさん。有利地形に便乗しようとするだけでなく、そこから『如何に技を使わせないか』を考えるのも重要な焦点となります」

バーベツトが指先で描いた漢字は『封』

謎解きは簡単だったが、解いた後ではもう遅かった……自分が覚えている技の全てを、相手に使用禁止のマイナス症状を付加させるふういん！

白く縁取りされた紫紺色の“封”の字は、時々生きているかの様に形が崩れ呪詛として絡む鎖。

バーベツトを倒さない限り、まもるとサイコキネシスは不発に終わってしまう……
 バーベツトも同じ技を覚えていると、手の内を晒しているが不利なのはどちらか、言うまでも無い！

客観的視点でバトルを凝望するオーヴェルは、サイコキネシスの発動タイミングやメガホーンの命中地点さえ理想通りにバトルを運んでいるけれど、決して勝ち誇って得意気に自慢する事はしない。

彼女は再びポケモンと戦う者として、この世界へ舞い戻ったが力を付け直しているのは、最強の称号を獲得する為に非ず。

心は若返るかもしれないが身体は老いる、自分よりもずっと未来がある新人や若手の育成に力を注ぎたいから、恥ずかしくない実力や戦術を構築させ参考にして欲しいと、願っているからだ。

古参だからと「強さ」を独占してはならない、巨大な樹木だからと苗木の成長分を横取りする理由にならない。それが彼女の提唱。

(エスパーの地の利を借用せず、エスパー技を封印するつ、まんまと乗せられてしまったエスパー使いは戦術を大きく制限されてしまうんだっ……！ 礼賛するしか無いですよオーヴェルさん……！)

ヴィヴィがもしも、エスパー単タイプだったら殆ど「詰み」だったかもしれない。

ダブルバトルでの戦況を左右するまもる、エスパー永遠の主力サイコネシス……：そして物理エスパー技のしねんのずつきまで封じられたと、呪気漂う『封』の鎖に侵攻されたと念話で交信してきたヴィヴィ。

移動などに支障は無いが、これで地形効果を活かすことは出来なくなってしまった！

これはジツクの勘であるが、恐らくバーベツトは彼女が覚えられるだけ、エスパー技を覚えさせられている——そして自分では全く使わない——のではないか？

「……………行つて……………」

ふういんだけじゃない、エスパーを倒す手段もやはり用意されていた！

くいっ、中指と薬指を手前に倒し込んでメガホーンを引き戻しながら、二本角の根元に埋め込まれた球状から、エスパーの大半が苦手とする影球を左右から一発ずつ！

威力を分散させる代わりに、命中精度に比重を置いたシャドーボール。その為ダブル

バトルでは『二匹同時攻撃にもなる』

今回のシャドボは分散させたが、ルートはヴィヴィのみ絞る。爽羽佳にノーマルタイプが複合されているので、上空へ放つても効果は無いからだ。

Segment・hepta——『角』『封』『守』『縛』

「んっ…とア、ふっ……これくらいっ！」

命中してもタイプが一致してないし、ヴィヴィにはゴーストが等倍なので痛手になる事はない。

しかし回復手段を失ってしまったので、蓄積されてしまえば取り返しの付かない事態となってしまう。

……あまり温存はしない方がいい、こうそくいどうの指示を与えている間にもバレットはパキリンツ、ポリンツ、煎餅同士が擦れ合うリズム音を口元から演奏する度に少しずつHPを回復させられてしまっているのだから！

リフレクターも厄介だ、ラスターカノンを発射する手段も取れるのだが、出来る事ならばバレットへ一気に大ダメージを与えてしまいたい。このバトルのキーパーソンとなっているのは彼女なのだから！

「(ここは用意周到のオーヴェルさんを信じ……)ヴィヴィ、ひかりのかべだっ！」
(覚えていましたか、ならば……)

透明なガラス板に近い質感の壁を前方に展開したヴィヴィは、メガホーンと共に襲い

かかるシャドーボール——4つもの長距離攻撃——から逃れる事に成功した。

ひかりのかべを貼ればヴィヴィに命中しても、ダメージを与えられず消滅する。

なのでメガホーンを躲す事に専念すればいい。今回は際どかったが一撃目を軽いジャンプで、二撃目はラグが発生しないねんりきをジャンプ中に使用し、磁気で浮かぶ見えないディスプレイスタンドを蹴ることで、ノーダメージにやり過ごす！

ひかりのかべは味方の場に効果がある技だ。

バーベツトだけでなくネレグが所持する特殊技をも半減させてしまうので、オーヴェル側にとっては好ましくない。

上空60メートル地点で交戦している、ネレグの表情がやや曇った。

得意技のエアスラを爽羽佳に当てたところでダメージには期待が出来なくなった。それを分かかっていて爽羽佳はドリルくちばしで猛撃！

最低でも半減はされるから一撃離脱よりも押せ押せ、イケイケな姿勢で突き蹴りを入れてくる。

攻撃は取り止めて回避動作に専念、それでも右翼に一発命中させた！

リフレクターが貼つてあるので仰け反ったりはしないが爽羽佳は「どっちの場にも壁があるんだから、イーブンでしょ！」と言いたげな、避けや防御へ回していたパラメーターを全て攻撃に注ぐ強気な責め立て。

一撃命中だけで済ませたネレグへアイコンタクトで『ありがとう』と贈る貴婦人は、手持ちへの感謝を常に忘れていない。

指示をするのは自分だが、戦って傷つくのは彼らだからだ！

「俺が何をするか——」

「私が何をするか——」

マスターが宙を駆ける自分らに『止まって』とハンドジェスチャー。従ってネレグと爽羽佳は対面しながらも、空中で静止する。

……次にお互いが繰り出す技は同じ、この硬直して隙だらけでありながら邪魔されない状況を作りたいが為に、ジツクはひかりのかべを発動させたのだから！

——きりばらい ツ！——

効果発揮までに5、6秒と結構な時間が要求されてしまいながら、シングルでは使用どころが非常に限定されてしまう、きりばらい。

視界を狭める迷雾や時間帯や季節によって発生する朝靄や霞を除去する効力がある。場のポケモンのコンビネーションによつては、時間や季節に左右されず“もや”を作り出す事も可能であるが、その為だけに覚えさせるのはちよつと……なのが正直な感想

だ。

ダブルバトルでは使い道が増える、相手の場に展開された——フィールド設置技——がどれだけ貼られても一手で取り除けるからだ。

ダブルは壁張り系の技が強い。オマケと言っては可愛そうだけど……回避率を少しダウンさせる効力も備えているので、編成や相手によつては面倒な技に変貌する。

同時に巻き起こつた突風、これで互いの場に展開されていた壁は消滅した！

「攻撃対象変更！ 爽羽佳はドリルライナー！ ヴィヴィはかみなりパンチ！」

「おつまかせえー！」

「了解ですっ！」

バーベツトがリフレクターを使つて来た段階で本当はきりばらいを命じたかったのだが、宙（そら）のフィールドには相手の白執事が割つて入つて来る。

同じ隙が作られる技を誘発させる必要があつた。

ネレグがきりばらいを覚えている。彼の戦闘履歴など知らないから保証は無かつたけど『オーヴェルなら用意させている』と交戦の最中に直感し、彼女の高等戦術から分析したジツクは読みに勝てた！

「……足つ……つ!?!」

「あんま攻撃出来なかつたけどツ、さああッ！ ここで晴らしておつくべき

だアアツー！ そおいそおいっ！ すおらあああ！」
「あ、ん！ んやあ、っ！ い、んツ……！」

足下から抉る様なスライディング、十八番のリフトアップが決まり右、左、右、左！
よんかいあつた、ごかいあつた、にかいあつた！

メガホーンヨーヨーは切っ先を阻むように交差させるも虫属性の召喚武器なので飛行タイプの爽羽佳とは相性が悪く、一突き一突きは薄っぺらくても腹部へ集中狙いされたら「雨垂れ石を穿つ」

「バーベツト！ あのオニドリルか——」

「……かみなりツ——！」

「チツ、門前払いだ！」

きりばらいを狼煙に、ジツクチームへ流れは揺らぎ始めたか。

チクリチクリと空中での連続回し突きを受け続ける相方を救出する指示を出されたネレグは、ツインテブースターを使用し後方から——宇宙センターで打ち上げられるロケットに匹敵する引力脱出速度で——鋼鉄ガールの襲撃！

しかも四倍弱点の鉄拳、リフレクターがあれば耐えていたが壁を構成していた物質が

館外へと散乱した今は、絶対に当たってはならない！

「わぶッ!? ンきやう! むう、惜しかったです……っ」

激しく吹き荒れる風の渦を『自分が戦っているフィールドのみ作り上げる』おいかけ。

持続時間は長くないが味方全員の素早さが二倍となる！ 有利な風向きとなったオーヴェル側は自軍にバフを掛けつつ爽羽佳の一度ハマったら抜け出すのが難しい『ずっと私のターン』のルートを、ズラされた事によって攻撃は打ち止めとなった。

「ほおう!? 分かつては居ましたがハラハラしてしまいますなあ!」

ネレグにはまもるを覚えさせてないので、かみなりパンチが命中すれば羽の一枚も残すこと無く白から真つ黒焦げになっていた。

執事仲間であるクライドは、観戦しているギャラリー……と言っても身内だけ……では最もリアクションが多い。

ヴィヴィの初手バレパンをバーベットが受けた時も、爽羽佳の連続突き蹴りを食らい続けている時も、何らかのリアクションを……心配性とは言えちよつと大げさなのでは？

これもオーヴェル側の緻密な戦術の一つなのかと勘ぐってしまうトレーナーもいるが、そんなしみつたれた事をしてくる方ではない。

バトルが終わったらローテンション鹿娘に『クライド……うるさかった……』とズバ

リ言われてしまうのはテンプレである。偶にバトル中でも言われる……

「あら、組み体操みたいですね」

トルネードに追い払われたヴィヴィと、HPの半分を削ることが出来たが中断されたこのルートでは上昇が難しいと判断した爽羽佳は同時に地上へと降り立つ。

その時の姿勢がヴィヴィは右手を、爽羽佳は左手を前にした三点着地だったので、こまりの視点からだど「扇」に見えたのであった！ 狙ってないけど仲良しなんだと裏付けるタイミングで、おやの膝元でぴよんぴよこ跳ねるおプチと一緒に拍手をしてしまおう！

「そこからいけつ、ヴィヴィ！ コメットパンチッ！」

対象変更しオーヴェルが指示を与える隙を見て、炸裂させた連続攻撃で爽羽佳がHPを削ってくれた！

あのHPなら確定で倒せる！ 向かい風となっているがヴィヴィの素早さが減少している訳では無いので、こうそくいどうで突っ切って貫い落下の衝撃で内股になりながら頭を眩ませているバーベットへ……キメる！

「幕下げですっ……ッ！」

「……………ポリンッ……………」

腹ペこキャラには夢のアイテム、それこそ『ずっと戦闘が続いて欲しい』と思っ

まう人智を超えた永久機関たべのこし。

目をしばしばさせながらも鹿煎餅は口に含む。だが回復量は1/16なので倒しきれぬ。

自らを蒼に煌めく核とし、昼空へ尾をたなびかせる帚星鉄拳が――

「ヴィヴィさんの最強の技、その攻撃は貰うわけにはいきませんっ」

ジツクは――念話を通じて完全にシンクロしているヴィヴィも――少しばかり勝負を急いでした。

推進剤である蒼い粒子が二筋空を裂きながら殴りつける！………が、振りかぶった瞬間に二人は思い出したのだ、ヴィヴィを縛る鎖の出所を――

「守……から、印、『縛』」

（あッ……マスターすみませっ……！）

彼女が気がつくべきだった『あのオドシシはまもるを覚えている、ここで使われる可

能性がある』と

指で描いたり準備動作も必要としない即時発動。

彩色は白と黒、彗星拳を振りかざされた前方へ『守』の漢字一文字がドーム状に広がって器に水滴を落とされた様な波紋が、『守』の字を揺らめかせるも破壊することは出来ない！

バーベツトさえ倒せば二対一に持ち込める。往年のトレーナーを相手に良い流れを掴めたので、攻めの姿勢を保ち過ぎてしまった！

岩や山の様に動じない平静さ、戦いにくいオーヴェル相手に手堅くなんて通じないからと。

気がついた時にはもう、遅い——

「や……………!!? ン！ あ、新たな呪詛ですっ！」

完全防御とのコンボ発動、バーベツトが『縛』と印を切れば紫紺の呪札が出現し掌をヴィヴィへ打ち付ける形に伸ばす。

「……………その札、貼られてる間は……………さっきの技使えない……………」

「……………っ、う……………」

幻覚を操り実体化させる彼女はエスパーやゴーストタイプではないが、極めて酷似し

ている演出だ。宛ら靈的素質を秘めて精靈との契約を結ぶ幼き巫（かんなぎ）

Segment・hepta——飛翔したポテンシャル

心霊現象としてメジャーな仏教用語と同一の技名称を与えられた。『かなしぼり』

直前に使った技を封じ込まれてしまう呪札を貼られたヴィヴィは、暫くの間コメットパンチが使用不可能。これでマイナス症状を二つも付与されてしまった！

まもるとの相性は抜群、苦手な技を使われても必ず無効化出来るのでノーダメージにやり過ごせ確定で封ずる事が出来るからだ。

(ツ！ 迂闊だった……まもるをバーベットが覚えているのは晒されていたのにつ……！ ゴメンねヴィヴィあまりにも単調すぎたつ、ここでダウンさせないとって焦ってたのかも……………！)

確かにジツクにしては警戒心が薄い一手であったと言わざるを得なかった。

コメットパンチが通ればバーベットを倒せる、かつてない強敵が相手なのだからリスクを承知で『ここだつ！』と思つたら針穴へ一発で糸を通そうとする勇氣は必要だ。

ヴィヴィは、心の何処かでは『まもるを使われた場合の立ち回り』を問おうとするつもりであった。

それこそいつも通りの声色とジト目で『あのオドシシは自分に強力な技……オドシシ

視点で最も喰らいたくない技を自分に誘発させようとしているのでは？ 猜疑心が足りてませんかよ？』と言い放つてしまえば良かった……

ポケモンを支えるのがトレーナー。

そしてトレーナーを支えるのがポケモンでもある。

(……………！ 周波数をシンクロさせすぎて……気がついていたのに……わたしは……………)

彼と上から下まで心も身体も硬く結びついている感覚に嬉しくなつて、疑念を浮かばせながらも——感情論とは少し異なる——かつ飛ばしてしまった。

高すぎるシンクロ率も問題が発生する……？ 95、もしくは96にセーブした方が戦闘に支障が出なかつたのでは……？

理知的で論理的な彼女はジツクのせいではなく警戒を催す発言をしなかつた自分に責任があると、上空からターゲットイングされている事にも気がつかないまま両膝を地に落としてしま——

「落ち込んでる暇ないよっ！ 今はバトルの真つ最中！ ヴィヴィちゃんの気持ちは理解出来るけどさっ、だからって動き止めたら本当に勝てなくなるよっ！ そっちのがご主人悲しむんじゃないかなあ……？」

ヴィヴィはとても強いけど強靱な外部装甲と反比例する様に、内部装甲には突然亀裂が走る事もある……合理性の塊でありながら誰よりも感情優先させてしまう姿を皆知っている。

同調率が高ければ高い程、受け持った指示をノータイムラグで繰り出すことの出来る念話だつてマスターが憤慨したり動揺すればシンクロしているポケモンへも伝わり、ウイルス感染の様に納得が行かなくとも自然に行動、気持ちへ移し込まれてしまう。

反則ストレスと評される念話だつてちゃんとデメリットがあるのだ。この辺りは念話は勞せず行える様になった二人だけど、洗練度で言えば課題は何個もあるので時間を掛け研磨する他ない……

「爽羽佳さん……っ」

主人が失敗したら——仲間が落ち込みそうになつてゐるなら——
「もう一匹の仲間である私が励ましてあげればイインダヨー♪」

ジツクの手持ちとなつて暫くはあまり打ち解ける間柄ではなかった。

彼女からすれば田舎から脱出出来るのなら、トレーナーなど誰でも良かったし方法など何でも良かった。

両親からの「バトル禁止」の約束をあつさり破つて、彼女なりに経験を積んでいたつもりだったが、本格的バトルに対してはそんな真似事は意味を成さなかった。

自分が原因であると理解していても扱い方が悪いだの弱い人の手持ちになつて不幸だの……暴言のダークストーム、今の爽羽佳が聞いたら昔の「爽羽佳」をドリルくちばしで抉り倒してやりたくなる。

年頃の男女なのだが、旅の途中で何度も意識したり謝罪をしたいと想う事はあつたけど、素直になりきれない鳥ガールは中々言い出せず仕舞いであつた。

「なあに？ 私を逃がしたくなつたワケえ？」

「違うよ！ キミのバトルスタイルについて相談と提案があるんだ。聞いてくれるかな？」

「……………眠いから、さっさと話して……………」

その日を境にして彼女は《嘴を脚に装着するユニークなオニドリル》として、既存の「オニドリル」から脱却しジツクの元で《自分だけの大空》へと飛翔、本当の意味で巣立つ事に成功した。

目立ちたいから脚を武器にしている、それは半分本当だ。

彼女は通常のオニズズメ種より嘴の力が弱かったのだが両脚の力は、ワカシャモ並のパワーとスピードを兼ね備えた潜在能力を眠らせているのだとおやになってトレナーメモへ手持ちデータを記入する際に隅々まで対象を調べるので、爽羽佳本人が全く気がついて無かったがジツクはその様に分析し予測する事が出来た。

通常の戦い方では彼女の能力を活かせない、風変わりかもしれないが進化すればそこそバシヤーモに匹敵する脚力……脚に武器を装備させる提案を示した。

「っ！ ヴィヴィちゃん危ないっ！ だだアッ、!?」

彼女が急速にバトルで勝てるようになった在りし日を振り返っている間にも敵は攻め込んでくる。

狙いは激励されて低下しつつあった敵対心を再び構える事に成功した鋼鉄娘だ！

「……………庇った……………っ、命中したからいい……………けど……………追撃よろしく……………」

ホーンオブジェを華麗にトリックさせるバーベット。指先の腕の動作と連動させ不可視のストリングスと結ばれたホーンが新たななるプレイを魅せる。

敵対心を感じすれば自動で攻撃、指の動きが追いつかないほどの速度は先制攻撃の名に相応しい、ふいうち。

彼女は本来のニューアンスとは異なるが、ふいうちを組み合わせたふいうちから開始される一連のトリックを『フリースタイル』と命名している。

グツグツと熱膨張を起こしている「やかん」を、両羽から振り落とす。

このやかん（ねつとう）は使用者のイメージを顕現化させているので、使い手によって形状や色彩などに個性が生まれている。

……英国風執事の身なりである彼が、お笑いの小道具の様なデザイン……？

電気ケトルではダメだったのか？ やかんである必要性……どんな思い入れが込められているかは不明であるが、威力や効力はどんなスタイルでも変化はないので火傷にならなかつた爽羽佳は運がいい。

もしも……火傷になっていたら物理攻撃しか覚えていない——爽羽佳に限らず物理型ポケモン全般は——機能停止、だっ！

「あーもオ！ 背中から入ったからスーツン中も熱湯でぐしよぐしよ……！ アイツ、絶対に許さー……ん私がたおーす！」

Segment・hepta——完璧な戦術

(あのオニドリル……ふいうちの対象……強引に変更したっ……私のふいうちよりも……早かった……凄い……かもっ……)

ストリングスを巻き取るようにメガホーンをキャッチしたバーベットは、認識させた対象へ正確無比に命中させて来たふいうちを初めて——本人的には失敗——させた爽羽佳へ眠気に苛まれてそうな表情こそ変化させないが、心拍幅は規則化された間隔を僅かに変調させていた。

「ありがとう爽羽佳！ かみなりパンチだヴィヴィ！」

「マスター、爽羽佳さん！ ハイッ！」

落ち込んでいられないっ！

本当に落ち込んでいいのはバトルに負けた時だけだ。そして壁というのは乗り越えられるからやってくる。オーヴェルという壁が現れたのは寧ろ……チャンスなのだっ！

「……ハアア！」

「軌道が——」

「単調すぎつ、つて言いたかった？ さっきのオ……報復うああ！ ドリルくちばしいい！ アウトレイジーン！」

ダブルdeこうそくいどうっ

オーヴェルの命令よりもバーベットのメガホンよりも早く、前方から蒼き飛行機雲、雷エネルギーを込める鉄拳を振り上げたヴィヴィと象牙色の飛行機雲、コンマー秒のフレーム単位遅れて左後方から滝登りならぬ“空登り”な勢いで回転しながら急上昇してきた爽羽佳。

「ぐオああ……！ おおっ！ グがッ！——ッ！ M i d i s p i a c e……マスター……」

「やつりい！ 早くも我がトサカの仇を討ち取ったりい………嘘うそ、こんなで倒れる程弱くないって分かるからスワンナのおにーさんや？」

防御対応が間に合わず側頭部を削り取らん音が鳴り響いたと思えば、重力に抗える飛行タイプであるのに揚力を一時的に失い地表とのハグを許してしまった。

「ネレグッ………んっ………でも………大丈夫………か………てい、やつ………」

こめかみ付近から白煙を上げている仲間の元へ向かおうとしたが、ヴィヴィが立ちはだかる！

心拍数がまた不規則な変調を見せたが、直ぐにマスターである貴婦人の顔を見て落ち

着かせる事に成功……

まだ『縛』が解けない、それでバーベツトへ回復が追いつかないダメージを与える技……

「アームハンマーは範囲や発生速度こそ優れておりますが、着弾位置が読まれやすい欠点がありますよ」

（これが本命のつもりだったのにッ！ 悉く戦術を防いでくる！）

味方一匹が重傷を負ったからと、もう一匹から目を離すヌルイトレーナーではない。

まだネレグは戦闘不能ではない、彼には戦闘意欲が残っている、ならば感情を一定に保ち不利な環境と流れを切り離してしまうのが自分の——マスターとしての——役割なのだ。

身体ごと巨大化した拳を、力任せに振り下ろすアームハンマーは格闘タイプの子。

これを命中させる訳にはいかない。バーベツトの心情にブレが生じたままであれば、二本の角の中心へ拳が命中し裂ける様な痛みと共に彼女はひんしになっていた。

「そんな……外してしまいました……！」

「……………一本だけ、メガホーン……………！」

停滞する角型の武具をフィールドに叩きつけ、反動で軽い身体を真横へ跳ね上げた。前方にしなければ容易に躲しきれぬ、アームハンマーの欠点を的確に突かれてしまっ

た回避動作。

素早さの低下したヴィヴィイへと左手を払えば一本の角だけが襲いかかり、もう一本の角は地面に差し込ませ落下速度を抑えている……何処まで応用が利いてしまう武装なのだろうかっ！

「くんッ！」

「ここしかない」と思ったのにつ！

素早さの低下は交代しなければ解除されない！

アームハンマーを繰り出すからには、相応の見返りが必要であるからダブルバトルで指示をする時は細心の注意を払っていた。

あのタイミングは『ジックにとつては』完璧でも、全体を通じて最善手を見計らえる『オーヴェルにとつては』惜しかった……

バーベツトへ与えられたダメージ量はせいぜいフィールドの欠片が飛び散ったくらいで、そんな物たべのこし一回でチャラとなる。

(機動力……低下……最もHPが減っているのは、あのスワンナですが……)

現在の状況と今後の展開を演算処理、動作周波数を高めているので髪先を纏めている

クリアカラーのリングの発熱が多くなり、飛行機の衝突防止灯を思わせる点火パターンを得ている。

エラーリカバリ機能——ジックが心の中で、爽羽佳が心の外から声を掛けてくれているから——冷静に冷静に……これまで得た情報から推定し算出したオーヴェルの育成方法。

「鳥が地に脚を付けているのは、悪いことばかりでは無いのです」

（やはりっ！ マスター、爽羽佳さんへ と伝えてくださいっ！）

尖った能力値が無い能力値グラフが綺麗な六角形を描いているポケモンは、専門的な能力値のポケモンよりもトレーナーの戦術やテイストによって振幅が大きくどんな『顔』を持っているかは編成を見なければ、または戦闘中でなければ判断が困難で事前情報を仕入れていなければ気がついた時には後の祭りと言う「初見殺し」の役割を担わせる事が出来る。

「はねやすめ！」

ネレグが大ダメージを受けた最悪の状況下でもオーヴェルは回復手段を彼に覚えさせていたから、バーベットが彼の下へ駆け寄ろうとしても『彼を信じてください』と見

捨てず、騒ぎ立てず、我が子を安堵させる様な「雰囲気」を作り上げていたのだ。

「また同じタイミングで、同じ技かつ……………」

「やゝゝホンツと、お兄さんとは人差し指と人差し指に、あかいいとでも結ばれたのになゝつてくらい運命感じちゃうわあゝゝ！」

でも髪にやかん落としたのは、ゆるるさ、ン、ツ!!」

飛び急ぐこと無く、身を起こしたネレグはそのまま小休憩。

角オブジェを警備システムの様に取り囲ませ、彼を守る様にガイナ立ちするバーベツト。

(相方への指示も同じ……………かつ……………)

相手が攻撃してこないと読んで爽羽佳へ命じたのは羽を持つポケモンならば、大体が修得できる回復技のはねやすめ。

丸一日休憩無しで大空を飛び続けられるオニドリル。

それは『体力が全開の時』だけだ。傷を負っては飛翔力の根源たるスタミナが本来の機能を果たせられない。どんなポケモンにも似たような事が言えるのだが……………

HPや防御力などは優れないが、隙を見計らってもしくは降り立つと見せかけての

フェイントとして途中でキャンセルさせる事もある。傷を癒やせるのでオニスズメ時代から覚えさせている。

念の為、庇う様なポジションへヴィヴィを配置。結果的にその必要は無かったが爽羽佳の回復が優先目的で在ったし攻撃しようにも、バーベツトはふいうちの構えを何時だつて取れるので敵対心を収めて動かさないと適切な選択であった。

「いやはや……分かつていてもヒヤヒヤしてしまいますなあ……」

「その言葉とリアクションは、本日二度目ですよクライド？」

お歳がお歳なので忘れっぽくなってしまっている老執事。

彼も若い頃はネレグやバーベツトにも負けず劣らずの激しいバトルを毎日繰り返していた物だ。ちよつと懐古な気持ちになりながら明日を担う若者達へ声援を送る、この歳になつてもバトルを見ると興奮してしまうつ、血圧を穏やかにする内服薬は欠かせなくなつてしまった！

……外見は若々しいままだが身体機能は加齢が進んで全盛期の戦いはもう出来なくなつてしまった雪国美人も、かつてオーヴェルと共に戦い——

その中でも特に強いトレーナーだった

——を思い出しながら、シワを隠せず車椅子生活になってしまったがポケモンへの愛情と情熱は膨らみ続けているマスターへ『この人と一緒に歳を重ねることが出来て良かった』と、突然ウルツとする事が近頃は多くなってしまうた。

はねやすめは特殊な性質があり使い終わって約10秒程度の間は、飛行タイプが消える”

弱点がガラリと変化するのでエモンガに地面タイプ技を打ち込んだり、マンタインがワイルドポルトに耐え切れたり、普通だったらありえない現象を引き起こせるので体力が僅かだからと無警戒で使わせれば変化後の耐性に有効な技を読み撃たれて昇天したりする。

まあ、今回は飛行タイプが消えたらからとヴィヴィにじしんを使わせる訳にもいかないのだけど。味方にまで命中させてしまうので。

(爽羽佳とネレグの体力は全開近くまで回復した……でも不利なのは俺達の方かつ、バーベツも少しずつ回復しちゃうし……)

(一撃で倒す様な威力はありませんが防御か特殊防御か、薄い能力値を狙えるように技を揃えているんですね……)

新・オーヴェルチームは持久戦を前提とした育成が成されている。

火力方面よりも守備のパラメーターを重点的に鍛えて相手の有効打は封じ、縛り、

じつくりと確実に「早くこのバトルを終わらせなくてはっ！」と緊張や焦りを手持ちへ
伝えない。

「完璧な戦術などありません。ミスを犯しても覆すチャンスは何処かにありますが技の
選択、攻撃と防御のタイミング、それら一手一手の蓄積が溜まり続ける“器”から溢れ
る様になってしまったトレーナーを敗北へ導いてしまうのです」

……ジツク達からすれば何手もの先を読んでおり仮に失敗しても、その処置法までも
用意している恐ろしく完璧な戦略家としか思えないのだが『完璧な戦略は無い』と彼女
はジツクにも——自分自身へも——おごりの無い笑みで言った

Segment・hepta——起死回生の一撃は

「直撃させるっ！　ねっとう！」

（スワンナが来た！　こうそくい——）

滑走路を助走する白い攻撃機。

羽ばたきの瞬間は翼の先が地表を叩き火花が僅かに散ったら高速上昇の速度到達サイン。

「逃がさないよ……………」

ネレグは両手に水エネルギーを溜め込み、彼の体温を分け与えるかの様に熱を加えていく。

すると球体がやかんをイメージした形状へ変化するっ……………！

真上から脳天目掛けて投げつけてくるのだとヴィヴィには視えていたし、ジツクもこうそくいどうで三時の方向へと回避動作を伝えた……………のだが……………

「しまあ……………っ！　あぶツ、あ、あ、あッ！！」

「ヴィヴィちゃん！！」

ツインテブースターを起動、跳躍するヴィヴィの右足首へ過ったソレ。

バランスを崩されたヴィヴィはそのまま前方へ倒れ込んでしまい、起き上がるよりも先に頭から熱湯を被ってしまった……！

(……………！ ヒートシンク機構が、っ……追いつかなくな……っ……身体中の磁力がっ……！ 外側へ飛び出ようとしているみたいに熱い……)

爽羽佳がネレグを相手取ろうとしても、おいかぜは続いているので速度差がより顕著となっていたから妨害できなかった。

妨害されたのはヴィヴィ側。敵対心を潜ませられなかった相手には神出鬼没な召喚角が猛威を振るう！

足首へ撃ち据えたふいうちはねっとうが破裂する前には、消えて持ち主の手元へと引き戻されていた。

(申し訳ありませんマスター……火傷状態に……)

(ヴィヴィは悪くない！ アレは避けられないよっ！ また物理技の通りが極端に悪くなったから特殊で……………)

このバトル中に彼女は何度も謝罪してきている。

ヴィヴィに似合わないその言葉をもう口にさせたくはないっ……

小さな子共が両親と腕相撲している、念話で更新中の二人は寸分違わず勝てそうで勝てない、プラン通りに進めたと思えば後一步で地に付かせられない感覚に陥りそうで

あつたが、爽羽佳に励まされた先刻を思い出して劣勢をはね除けようと手甲をぶつけて活を入れる！

………が彼らと裏腹にオーヴェルは優勢と言う名のおいかぜが切れる前に、二の矢にして三の矢とアドバンテージ獲得の為……勝負へ出たッ！

「バーベットの特性が『いかくではない』……開戦直後にそう思い察したかもしれませぬ『オーヴェルは特性を行使する何らかの戦術を企んでいる』……と」

「っ!! 仰る通り! ですっ……!」

限りなく確定に近い判断材料がある。

『ヴィヴィさんが何らかの木の実を持っているだろうと、私の勘が教えてくれた』

バーベットの特性が「おみとおし」ならば勘に頼る必要性は皆無。ヴィヴィはオボンを持っているの見透かされているのだから。

……だとすれば、残った特性は一つしかない。

「……印、『交』!」

止めるっ、いやっ、間に合わないっ!………からっ……

左人差し指で印を描くのは四度目、そしてこれが最後。

(……………んっ……………)

ポンチヨの上から掌を胸へ触れさせぬぷりっ……………と体内へ沈み込ませ取り出せたのは蛍光グリーンのケーブル。

角を敵へ仕向けるのと同じ身振りで接続されたのはネレグの胸。

(ん……………っ！ あ、はんっ……………まだ……………この技の感触……………慣れない……………)

接続端子となった互いの胸を往復した、ブラックライトに酷似する発光を示す物体こそ彼女らの可視化された「特性」

「スキルスワップ！」

「正解ですよマスター・ジック。俺の特性はそうしよくに、交換してくれたアイツの特性はするどいめとなりました」

……………？

お辞儀をしながら答酬してくれた、ネレグのモノクルが消えているっ……………？

と思えば、何故だかバーベツトが——少しの間眼鏡属性が追加？——モノクルを左眼に装着していた？！

ただのお洒落アイテムでも視力矯正が目的の器具でもなかった！ あのモノクルこ

それが「するどいめ」であったのだ!

「さらにつ——バーベツト『味方へ』エナジーボールを撃つて下さい!」

「な、ッ!!? そつ、そういう事かッ、!!」

感服したつ、角オブジエから大自然の力を凝縮した緑球を発射するバーベツトへ、攻撃を受け緑色のオーラを取り巻かせるネレグへ、予想を裏切り続ける戦術を思いついてしまうオーヴェルへ。

「assalto……stille!」

こんな手段を使って攻撃力をアツプさせてくるなんて!

特性に感化されて本人もヘルシーなメニューを好む草食系女子な雰囲気宿っている鹿娘。スワツプケーブル接続時に胸から抜け出す感覚に未だ慣れていないので眉を落とし込んだ彼女はそこはかと無く、艶がある条件を満たした強者へのご褒美になっている。

草タイプの攻撃を無効化し攻撃力へと変換、疑似的に抵抗タイプを一つ増やすそうしよく。

バーベツトへ「偶然」草タイプの技を打ち込み、そうしよくであると発覚したケースは以前にある。

……だからと言って何が狙いなのか? オーヴェルの対戦相手は謎が解けぬ仕舞い

でまさか特性を交換し味方の攻撃力を上げる為だとは思ひもしないのだ。

さらにつ、後ろ髪の一房を握り——本来の姿である嘴と同じ黄色の色彩——を前髪へと戻し込めば……！

「……ブレイブバード、……持ち物は『ひここのジュエル』だから……もう一段階攻撃力……上がるよ……」

オーヴェルがこの奇策を繰り返すことは稀である。

物理攻撃が薄ければ素のブレイブバードか、そうでなくともジュエルを使用すれば相手のHPの大半は消滅する。

この奇策により攻撃力を二段階上昇させるのは、極めて物理防御力に優れているポケモン相手だ。

持久戦とは正反対に獣性剥き出し、力と力を重ね合わせた攻め立てすら行えてしまえる！ それだけのスワンナへ育てられるのは恐らくオーヴェルだけであろう……！

「……………」

おいかがが切れてしまう直前の低空フライト。

戦闘機の機首を思わせるまでに硬化された前髪を軸に、リリースされたダーツの如く

空気を蹴散らしボード代わりの目標物！ ヴィヴィへ突っ込む！

ブレイブバード自体は飛行タイプ、鋼には半減されてしまいが攻撃力は二段階上昇済みなので相性法則は覆される。

さらに言えばオーヴェルは『火傷のダメージ込みでヴィヴィを倒す』算段である。耐えられてしまっても攻撃力を大幅に落とされているので、火傷のダメージが回るのを待てばいい。

ヴィヴィを倒し終えたら一旦はねやすめを使い盤石の布陣を作り上げてから、かなしばりで技を縛ってから爽羽佳を倒す……！

(やだっ………マスターを勝たせたいっ………)

大ダメージは免れないっ、あのスピードではこうそくいどうを發動させても振り切れない、躲しきれない。

かと言って迎撃姿勢を作れば——やはりバーベットのふいうちの準備をしていた——体勢を崩されてしまう。

大人しく防御するしかないっ……パルス波が乱れているヴィヴィは念話も切断させてしまっており、4つのブレインコンピューターをフル活動させるまでもなく残された選択肢はそれしかないのだと——

「悪いけどさー！ ツー！ 風を味方に付けられなくともオー！ 今アンタより上を飛んでいるのは私やアアアツらアアアシュツ!!」

—!?—

ホウエンに流れ落ちた一筋の流れ星！

鳥だ！

飛行機じゃなくて鳥だ！

やつぱ……鳥だああッ!!

「ツツー!!」

「ヌヌ……!! アああああ!! うぐえー!」

急速落下のライダーキック（ドリくち）を急所に当てて打ち勝つ事こそ叶わずだったが、ヴィヴィへ到達するまでに相殺。ネレグと爽羽佳が反動ダメージを負うも瀕死にはならず。

「……あの時、爽羽佳さんへは『きあいだめ』のサインを送っていたのですね。パーベツトが警戒させる相手を誤ってしまいました……ごめんなさいね」

「……………マスター……………」

スキルスワップ後、突撃体勢へ以降するネレグと今か今かとヴィヴィの胴体へ角を投げ込もうと待機中のバーベツトを尻目に、一瞬だけ爽羽佳の方へ視線を移しガツポーズの様な腹に何かを溜め込むポーズをジックはしたのだが、オーヴェルの洞察力を持つても動揺してその様なポーズを反射的に取ってしまったのかと非常に判断が下し難かった。

「私の特性はスナイパー！ 持つてるのはピントレンズー！ きあいだめと組み合わせで急所率激アゲなんですー！ 運ゲーって言われたらそれまでだけど昔っから強い人は言ってるっしょ？」

『バトルには運も重要！ 運も実力！』

「俺の最高打点と相打ちになるとはっ……！ だが逆転ムードとはなり得ないメタグロスの Signorina は火傷、何も手は出さずとも体力は削られる」

かなり屈辱的！ 反動ダメージ何かよりも内側に電撃を流されたに近しい衝撃に、走り回られてしまった。

前髪に一房だけ黄色を混じらせる様になったネレグは、おいかが消滅したと同時に後退する。

風を味方に付けたのは自分であったが向かい風だろうが関係なく——リアル道連れも覚悟の上で——何が何でもブレバを無力化させてやる、そんな気迫が今なをフィールドに残り続けベージュとアイボリーの双羽が頬を切りつけた。

「ありがとうございます、爽羽佳さん……！」

「お礼はいいって！ それよりもご主人、ヴィヴィちゃんはもう少しで火傷ダメージが……！ 私一匹になったら流石に無理だよっ！ その間に勝つ方法、何か考えてっ！」

ビックリな一撃で敵サイドの最強打点をやり過ぎす事に成功はしたが、ネレグの言葉通りヤバイのはジツクサイドだ。

ヴィヴィは脱落寸前のHPしか残されておらず、爽羽佳ははねやすめを使えるけどヴィヴィが倒されてしまえば、どうあっても隙を補いきれず集中攻撃で倒れる。

ライフラインとなっているのはヴィヴィ、もう一回行動すれば内側燃焼に耐えきれずバトルへ注がれたエネルギーの全てはシャットダウンされる……

（一撃で相手二匹を倒せるっても……いわなだれの威力は下がってるし……サイコキネシスは封印されているし……そうだッ！ もうそれしかないねッ！ ヴィヴィ！）

不気味に蠢いている『封』の字は勿論だが胸元に貼られている『縛』の札はまだ外れない。レベルが高いから持続時間も相応になっている。

(精神力を多量に使いますが生命活動維持に支障はありません……後が無いんです、やってみますっ！)

(頼むっ……！ それとさっ、ありがとね『俺を勝たせたい』って……すごい……伝わってきた……でも俺だけの為じゃない、爽羽佳やヴィヴィ自身の為にも添付してっ！
オーヴェルさんは強敵だけど勝って笑顔になるヴィヴィ……素敵で何度だっって見たくなっっちゃうからさっ……！)

——……っ!?

絶対成功させろと脅す訳でも、もし失敗したら……とプレッシャーを押しつける訳でも無かった。彼のポカポカとつま先から髪先まで神経が通っていないハズの部位すら暖かくなる声色は。

確かにヴィヴィ最後の攻撃が失敗、もしくはどちらも倒せない状況となれば爽羽佳だけであのオドシシとスワンナは倒すことが出来ないだろう。二匹でもやっとなら相手取れるだけの強さと戦略でこちら側を確実に追い詰めているのだから。

「爽羽佳！ ヴィヴィのサポートをお願い！」

「お任せあれ——！ 私の……主人ッ！ アンタ達イ——！ ぜえええつつたいッ！

こっから先には行かせないイイ!!」
広範囲、かつ二匹同時攻撃。

出力を最低まで抑えたバージンは成功させているが。

「エネルギーチャージ、開始っ……………」

窮地に陥った自分の起死回生となり得る、試す価値は実戦であるからこそだ。

失敗してしまつたら爽羽佳にも黒星を付けてしまふ、ジツクの敗北回数を増やしてしまふ、自分が原因となつて。

「……………充填完了時間……………残り19秒……………18……………」

バトル中戦闘不能ではないのに自ら手甲を外す。ヴィヴィが戦闘力をフルに発揮させるのは絶対に必要な武装であるのに初めての事態。

Segment・hepta——サテライトラスタと
20年前の…

両腕からスライドする様にパージ、前方へ決死の覚悟で両腕を差し出せば二つの手甲が一つに融合。

「……………あれっ、マズイ予感する……………ふいうち……………」

動力コアが発熱を引き起こしているのは『火傷ダメージを受けているから』……………で一括処理できない。

自分の為、仲間の為、そしてマスターの為に『勝ちたい』気持ち満ちる……………この気持ちの基盤たる現象の理解と解析……………するのが怖い、戸惑いながらも現在の距離感を維持したい想いもあって確信が持てないから——素直に認めたくないだけ？——解析をホウキしている。

髪飾りにも変化が生じ——彼女曰く『砲撃特化モードチェンジ』

大氣中に浮遊している磁性を取り込む為のギミック、結い目を支点にハッチが開き彼女の身体を血液代わりに巡っている蒼き動力流体エナジーへ変換し蓄積していく。

「……………作動しないっ、敵対心を感じ……………ないのっ……………」

充填時間の完了は23秒後、チャージに集中している間は無防備となる。

タイムマンならヴィヴィが頑強な装甲を持つていても、23秒もの間相手側は好き放題に攻撃出来てしまえるので決して成功することは出来ない。

ダブルでなら……頼れる仲間が支えてくれる対戦形式ならば——

「させないっ！ エセブレバあッ！」

ギユイイイイッ、オオオオオオ……

ヒユイイイイ……キイイインツ……

メタグロスが必要としている稼働エネルギーを五匹分、十匹分にまで匹敵する粒子を乾いた音と共に溜め込んでいく。

「ッ、ネレグお願い……！」

手甲を融合させ砲撃システムへと力が滾りヴィヴィのスカートを、ツインテールを、蒼いラインが発行しチャージ音が段々と航空騒音機に近い爆弾が落とされた様な音調へ遷移する。

最後に繰り出されたネレグの攻撃をパクって、オニスズメ時代の夢であったブレイブバードを……今ではドリルにプライドと誇りを一任させているので夢でも憧れてもないが……ヴィヴィへ向かおうとしていたメガホーンを吹っ飛ばしシャドボ連激はその身で受け止める！ ノーマルが付属しているので地面だけじゃなくゴースト技読みで

交代は手慣れた物だ。

同じ要領でダブル・トリプルの複数戦では『自分から攻撃を受け庇っていく』

「ええいやあああつ！」

「ツ、ぐ！ ブレイブバードもどき」で俺の片翼に擦り入れるとはなッ！」

「コツちもねつとうだあ！ そおいつ！ ヴィヴィちゃんのご主人に任せられたんだ！

役目は絶対に果たすんだからっ！」

バーベットの攻撃をやり過ぎし終わったら、上空からの強襲を企んでいたネレグヘアウトサイドループ。

エアロバティックス……曲技飛行を模範し危機回避や姿勢制御からの立て直しを行いつつ、瞬時に反撃態勢に移れる練習はいっぱい重ねて来たジックと一緒に……

避けられないっ、威力よりもスピードを優先させた「エセブレイブバード」は翼を折りたたみ低空飛行する飛行最強技であるが、鏡の世界へ入り込んだかの様に高度飛行だつてやろうとすれば出来る。

地表につま先を擦らせ羽と火花を散らしながらアップパー曲線で嘴を仕向ける。

結果は片翼の一部を散らしただけ、だがそれでいい彼を撃墜するのが目的じゃないからだ。

「危ねっ!? 勢いは殺せたからギリちよんで回避を——」

「……………ふいうちっ！ 今っ！」

タイプが一致して特殊攻撃力が自分より優れている物が生成し、両羽でやかんを掴ま
 んでから投擲する！ パチンコの仕組みと同じ牽引力で加速させたねっとう相手に
 エセねっとう”では相殺は叶わない。

しかしっ速度自体をある程度落とせるので全力で回避運動すればこうげきは はず
 れた！ となる。

「ヤっバっ！ あであゝ！ ぶあぢやっ!? ぢやぢやぢやアゝゝ!! やっ、あぢい
 ……！ 焼き鳥ったあ…………！」

「爽羽佳ッ！」

…… オーヴェルにもヴィヴィが何をするつもりなのか分からない。あんな攻撃準
 備動作は75年の人生でも初見だからだ。

でも発動させてはならない、中断させなければ戦況を逆転されると直感しネレグと
 バーベツトに指示を下した。

(チャージ完了まで爽羽佳さんがアシストするのですねっ、際どいかもかもしれませんが爽
 羽佳さんから狙わせて頂きましょう)

やかん型水球を躲した直後、敵対心を感じた二つの角が斜め上左右から交差し飛行
 バランスを崩される。

好機逃さないチームプレー、髪が蒸発しそうな温度のやかんが破裂すれば垂直に落下……を、U字を描き防ぎきる!

(もう、ダメだあ………なあんちやつてええく! 勝った! 行つたれえ! ヴィヴィーちゃーんっ!!)

「出力104%……… 対ショック態勢完了2………1………発射!」

間に合った、後、自分がする事は

「……………上に……………」

「俺達が照準ではないのか?………」

背中を見せたつていいからつ、場外ストレスレまで全速前進なこうそくいどうつ!

ヴィヴィが着想したプログラムを上回るオーバーテクノロジー、ラスターカノン。

命に別状は無いがセーフティロックを解除するので、エネルギーの全てを消耗したヴィヴィは暫く行動不能となつてしまう。火傷状態なので即ち戦闘不能は免れない。

「違います……アレはっ! ネレグ! バーベツト! 逃げてくださ——」

誤差の修正はまだ行えない、指定した座標全てを覆う広域射撃。

上空へ撃ちだしたエネルギー波が人工衛星となり再射出される『サテライトモード』

集約された圧倒的な蒼の粒子。残念ながらキャンセルが間に合わずチャージ完了を

許してしまったヴィヴィのラスターカノンは、前方へ掃射……オーヴェルは速度と範囲

を想定し回避よりも防御の姿勢を二匹に指示入れたのだが砲塔は雲を真つ二つに裂きながら上空へ、大気圏外へと消えていった。

オーヴェルも手持ち達も、物の一瞬ヴィヴィが何をしたかったのか理解が追いつかずとも防御を解く事はしなかった。

二対一の形式に変更してまで溜めに溜めたエネルギーを宇宙へ放り捨てた。表現としてそう置き換えるしか……………

「!!ッ、ツ————あ、あ、あああああ、ツ、————ッ、ツ、!!?? キ、ヤ、ん……………ああ、あ……………そつ……………んなつ……………あ……………」

実はハツタリ? 負け確定だから散り際だけはハイカラに演出を?

そんな訳無いとだろうと怪しむが、ラスターカノンが実質的に不発となり動悸の乱れを覚えながらも、たべのこしである鹿煎餅をポンチョ内側から取り出そうとしたら極太のレーザーに身を焼かれた。

半分以上残っていたHPを一気に削られた彼女は視た、射出の際に『瞳の色が蒼に染まるヴィヴィ』を。

天気予報は晴れで降水確率は0%の晴天を質量断層をブチ貫かせ蒼天へ……………そうつ、ヴィヴィの瞳と同じ色へ上塗りさせた。

トクサネ住民は「あの時の様な異常気象が起こった!？」と自宅やポケセンへ駆け込ん

だが一瞬で平和な晴天へ戻ったので、野生のエスパーポケモンに幻覚スクリーンを悪戯に引き起こされたのだと無理矢理納得し平常な生活を取り戻していく……………

「……………がっ……………あ、お……………ッ……………なんだ……………今の……………俺達が知らないラスター……………カノン……………ッ、う、マスター……………まだ俺は——」

「残……………戦闘エネルギー……………0%……………プログラム……………エン……………ド……………」

大量破壊兵器級威力の衛生軌道上からのビームであつたが、鋼タイプなので水複合タイプのネレグはHP 1 で耐えきつていた。

角オブジェはガランツと地面に落ちたグラスの様に先端から落下して砕け散る。

召喚者であるバーベツトが瀕死になつたので、連動して力を与えていたオブジェもライオンが切れたのだ。

衛生砲を打ち終えたヴィヴィはバーベツトが力尽きるまでは両腕を真上に掲げて硬直していたが、完全に角が消滅したのを確認したら——気力で倒れるのを遅らせていた——彼女もシステムメッセージを遺して仰向けで倒れ込んだ。

バーベツトが瀕死になつたので纏わり付いたまま切除できなかつた呪詛の鎖『封』と呪札『縛』も紫色の煙となつて消滅した。

「ネレグ！ はねやすめです！」

手持ちが一匹戦闘不能となり残りのポケモンが窮地に陥つても二の句が継げない貴

婦人ではない。

いや、彼女ですら大分困惑気味となつて血圧が上昇していると自分で察しさせていた。

白執事服が炭色に変色させてでも主人の為に起き上がったネレグの姿を見て平静を取り戻し、回復技を命じたのだが――

「言つたよね? 『お兄さんは私が倒す』つてさ! つつく!」

充分な加速も回転も必要としない。ぶつちやけただのつま先蹴り。

後頭部へチョココンツ、1だけ残つたHPを綺麗に削り取つて仁王立ちをキメる!

……ヴィヴィも火傷で倒れたので『何だか爽羽佳が三匹全員瀕死にさせた絵面』になつてしまつたけど勝敗は決する。ジックチームの勝ちだとレフェリーが判定を下した!

「……………参りました、ジックさん! 爽羽佳さん! そしてヴィヴィさん! 楽しかつたです……………まるであの頃に戻つたみたいでした……………」

ムーンボールとゴージャスボールへ骨身を削る思いで戦つてくれた二匹を労いながら戻す。

自分が最も輝いていた当時、素晴らしいライバルとポケモンに囲まれながら声援を受けていた全盛期。

「もう私は時代の先端ではありません。ジツクさんの様な若くポケモンに優しく、確かな親交を築き上げているトレーナーが居てくれるのでしたら未来も安泰ですね……！」
悔しいつ、丹精込めて育て上げた手持ちが後一步で敗れてしまった。

退避の命をもうコンマ早くしていたら……広範囲のサテライト攻撃ですらギリギリで躲せていたかもしれない。

彼女だって人間、完璧な作戦など立てられないからタラレバはあるが……

「新種の技ではない独自発展させたラスターカーノンのバリエーションの一つだったのですね。ふふつ、実にイノベーションでスケールが大きかったですね、そうやって既成観念をどんどん壊してくださいな！ あの一撃もチャレンジ、初めて使用したのでしょうか？ いいですね……一見すれば出たとこ勝負で無鉄砲にも受け取れてしまう挑戦心こそ、ポケモンバトルには必要なのですよ」

常に後身とその世界に理解を示し懐深くいなければならない。

悔しがるのは館の中に入ってからでいい、それ以上に自分の知らない戦術やヴィヴィが昇華させた彼女だけのラスターカーノンを拝見できた、そちらの喜びの方がダンゼン強い！

「ほっほう！ お見事でございますな！ ジック殿、差し支えなければバトルビデオとして教材に使用させて頂いてもよろしいですか？」

「お疲れ様でしたジックさん、手持ちの皆さん。クスクスッ、オーヴェルったら今晚寝付けないわね、バトルビデオを繰り返し鑑賞しながら反省会を開くのよね？ クスクスッ！」

どれだけピンチに陥っても最後の最後にはオーヴェルが勝つ。再びポケモントレナーとして舞い戻ったオーヴェルはバトルビデオ映える内容ばかりなので教材として提供だけに留まらず、全国のレンタルビデオショップで内容は一切無編集のままライオンナップさレどのシリーズも高い人気を誇る。

「こちらこそありがとうございました！ もうつ、すつごく強くて……強すぎですオーヴェルさん……もちろん！ いいよね爽羽佳、ヴィヴィ？」

今のバトルこそどんなシリーズよりも『映えるし見て貰いたい』映像。

自分は負けてしまったけれど関係ない、勝った試合しか提供及び賃貸しない恣意的思考など持ち合わせていない。あるがままの真実としてオーヴェルだって負ける。

クライドはオーヴェル側だけでなくジック側へもげんきのかけらを手渡し、続けてこてまりが彼女の力で生成した氷塊の入ったジンジャーエールを配っていく。

「……signora、有言実行されてしまったか。悪かったな自慢の髪に熱湯掛けて」

「い〜ええ！ バトルなんでお互い様だよー！ やっぱ飛行タイプとの対決が一番燃えるねえ！……………ところでさ、何でやかんなの？」

お嬢ちゃんから、レディにランクアップ。

体力の半分だけ回復、全てが全て完全復活していないのでコサージユや羽の一部が復元しきっていないけど、会話のやり取りなら問題なく行える。

マイナーな鳥ポケモン同士、シンパシーが芽生え戦いの最中でも翼と翼で語り合った。

関心を引かれるようなパラメーターを所有していない自分らを、ここまで強くしてくれたマスターとご主人へと深謝の念を抱きながら羽を仕舞い込んでライバルとの健闘を称え合う。

「……………ねっ、おっ、お願い……………あるのっ……………友達……………になって欲しい……………」

「……………わたしからも、お願いします……………」

「……………んっ、友達……………ヴィヴィちゃん……………やった……………」

こつちもこつちで、ライバルとは別の関係を築き上げていた！

「フツ、人見知りするバーベツトが自分から友達を作ろうとするなんてな」

「……………ネレグ、黙って……………うるさい、呼吸しないで、息を吐かないで、CO・の無駄遣い……………」

ノンアルコール飲料なのに印を結んで召喚した角の一つで横顔を隠し、もう一つの角でからかつて来た白執事を強打——サツと簡単に避けられたけど——

ポンチヨは概ね復元しているが、メガホーンの一部が破損していたりタイツには腕力で強引に不規則に切りやぶかれた様な破け跡。

ポケモンセンターへ預ければ彼女達が纏う衣装や武具は極微細単位まで元通りとなるが、そこはかたなく『襲われていやらしい事をされた事後』な雰囲気がある……

ちなみに健全な者の反応は『ダメーjayイツってファッションもあるのか』である。お年頃の生徒達は見ることが叶わずさぞや残念だ。

ポンチヨ内側から少し汗ばみ振るえている生の手を、目はクルマユに口はソーナンス型にモジュールしたのか『断られたらどうしよう……』の不安をなるとたけ隠したレア顔となりながら、熾烈に競い合った鋼鉄少女に握手を求めていた。

空気を読んだだけじゃない快く本音のままに行為を受け取りヴィヴィは仲間とは別、生まれて初めての『友達』を作ることが出来た！

小柄な二匹だが身長はバーベットのの方が数cmだけ高い。が胸は広辞苑とライトノベルくらいの厚み差がある。

(……………瞳、蒼から深紅に……………戻ってる……………)

セカイイチよりも赤々とした、高揚に浮ついた表情のまま握手をしながらヴィヴィの

瞳を覗いたバーベツト。

見間違いでは無かった、確かにヴィヴィの瞳はラスターカノン発射時に海よりも深く、氷よりも透き通り、ブルーダイヤよりも美麗なる光彩に煌めいていたんだ。

念話でのアクセスを許可されていたジツクも気がついていた。ザムヤードにバレツトパンチを五連射で叩き込んだあの刻と……同じ彼女の瞳。

メタグロスにそんな体質は無かったはず、変色する条件があるのだろうか？

「ジツクさん、貴方達とバトルした数十分は私の75年の人生の中でも僅かな時間でありましたが、決して忘れることも廃れることもない一戦です」

膝上でかたくりこの真似をしてぼんぼん跳ねるおプチを撫でながら「トレーナーバトルで勝利したのだから」と賞金を手渡すオーヴェル。

「……………ちよつと表記するのを躊躇ってしまう金額であった。ジツクは一度断るも『受け取らない方が失礼ですよ』とヴィヴィから念話で伝わって来たので謹んでサイフの中に収納させて頂いた。」

自力での立ち上がりすら困難となってしまうただ記憶力だけは萎えず衰えず、目を瞑れば18年前の4月6日、34年前の9月28日、それがどんなバトルどんな内容どんな対戦相手だったかも鮮明に想い浮かべられてしまう。

あれは20年前、オーヴェルの中でも特にインパクトの強い一戦、ポケモンに人化現象が発見される数ヶ月前の事だ。

あの頃のオーヴェルは「敗北」という言葉とは本当に縁が無く、大変お恥ずかしい限りだが「もう誰にも負けないのでは」と思い上がっていた時期があった。

「その鼻っ柱をへし折ってくれた子が居ました。《性別不明のポケモンが好きな子》でしたね……………」

現役絶好調、無敵を誇っていたオーヴェル&こてまりはそのトレーナーが操る氷ポケモンに無敵記録を阻まれた。

氷タイプをも凍結させる『摂氏-273度を下回る冷徹なる絶氷』

「……………最も人化しているでしょうからオスカメス、どちらかの性別となっていてしょう。あの女の子は13歳だったかしら、今頃何処で何をしているのでしょうか……………もう一度会いたいわ……………」

(全盛期のオーヴェルさんを倒すつてどれだけ強かったんだらうそのトレーナーとポケ

モン……………その敗北が今のオーヴェルさんを形作っているのか)

オーヴェルを真つ向から打ちのめす強さであるのに、そのトレーナーはパツタリと足音が途絶えている。

最強のトレーナーを目指す為に何処かの地方で旅を続けているのだろうか。

それともトレーナー業を辞めてしまったのだろうか。

出身地は『ホウエンではない』と自己紹介の際に、本人が話してくれていたのだが。

「ご主人……！ 頑張ったんだから撫でてー、褒めてー！」

衆目に晒される中でまあ大胆な！

上空から両手を広げてフリーフォールしてきた羽つ子JKを抱き留めてご希望通りに、トサカをややズラす様な動きで額を撫でる。

「きゃ♪ んふっ、ふう……♪ いっやあく身体はシンドいままだけどやり切った感。パナいってえ。ヴィヴィちゃんとも上手い事力を合わせられたと思う！ ねえくくえ？ 撫で褒めるだけじゃあお勘定できないなあ、帰ったら全身マッサージ……お願いね？ ね？」

(分かつてるさ！ ちょっと爽羽佳、皆が居るから……それ以上は……)

(ええくく！ 見せつけちゃおうよ♪ てかさー 皆が居なければ 〃もつと色々して

もいってコトなのかなあ？ ふへひひつ……)

彼が反撃出来ないからって、ここぞとばかりにグイグイ押しまくってくる。

ライダースーツ越しでもエナメル触感より、むにゆるつ……とBが前腕を撥ね除け軋むくず餅加減。ポリリウムは(他の子がデカい的な意味もあり)不足気味かもしれないが、胸と胸をコツンされる体勢を取られてしまえばそれなりに大きく変化する視覚のマジック。

(……………ギ、ギギツ……!!)

(あつー、そろそろ止めトコ。背中に目はないけどヴィヴィちゃんにすんげー睨まれてるって分かるし……………)

血で血を洗いそうなピジョンブラッド。それが焼き餅ヴィヴィの瞳。

異変を感じ取ったミノムシは砂を汗代わりにジャバジャバ溢しながら震えているが、やっぱりおプチは嫉妬心を——本人は至って平静を装っているつもり——隠しきれないヴィヴィを見てもやんややんや！ 頭の葉を回転させながら意味も分からず喜ぶ。

(……………なぜっ、わたしにはしてくれないのですかっ?? アンフェアですっ、わたしだって頑張ったのですから均等につ……お願いしますよ? マスター??)

……………怖いっ、調子に乗りすぎた爽羽佳は後ろを見ないようにジックからソソソ

ソツ、水平移動でジェラシーの眼差しから逃げ出した。

ご褒美として甘えていた爽羽佳に悪い事をしてしまった自覚はある。別に不平等ではない、手持ちを労う為には彼は応じただけ……

(早くわたしも撫でるのですっ、爽羽佳さんにした事をわたしにもすればいいのですっ) 分かっている、分かっているのだけだ。

「……………んっ、ヴィヴィもお疲れ様！ えつと、ヴィヴィにもマッサージ、しよつか？ 良かったらでいいんだけど？」

ジツクが反射的に彼女を撫でたら確実に「ぺしっ」と可愛らしく手を弾かれてしまっていた。

シエルンとのダブルバトル以降はどんな心境の変化なのか？ 彼女の方から同じ事をしないのは鼻根である、自分も皆と同じ事をされる権利がある、なのでしなければ許しませんと強要される様に訴えてくる。

「ん……………あ、っ、あ……………ひゃうっ……………！ もっ、もういいですっ……………マツ、マッサージ……………そんなエツチに、わたしの身体を合法的に触れるだろうと……………その様な考えで提案しているのですねっ、セクハラ、ですっ……………！」

「なんでこうなっちゃうんだよオオ~~~~!!」

撫でろと訴えられれば髪を一往復しただけでもういい、バトルを振り返りながらメン

タル面も含めアイテム回復だけでは取り除けない疲労を癒やす手技療法を口にすればセクハラ。

ジツクも少し納得が行かないけどヴィヴィには気まぐれな猫の様な一面があるので、おやとしてはワイドガードしなくては。

(……は、ア……もうッ、マスタ―は悪い……けど悪くない……ですっ……けどッ、ああ、理論的な説明が出来ませんっ……)

突然こわいかおする友達にバーベツトは声を掛ける。発声練習要らずにアニメ声優役を射止められるロリボイスも、かなり背伸びをしている様な声質となり「ダイジヨウブ、デス」と予備電源のみで稼働するロボットな反応には、全然大丈夫ではいと思わざるを得ない。

彼に撫でられた場所を抑えながら、もう片手では友達に手を振りながらオーヴェルの館を後にする。

複雑な胸中のまま、第二の依頼を実行する為向かうは——

Segment・hepta——メイドの海底実家

本日の第一依頼は終了したの第二依頼の完遂を目指してトクサネシティの南方に広がる海域、127番水道〜128番水道の中程と思われる地点でメコンにダイビングをして貰った。

泡状の薄膜でお手々繋いだ彼と自分、二人分を包み込んで深い海の底へ：ラピスラズリと形容したい荘厳なもう一つのハウエンへ導いていく。

カイナ浜辺で海中デートした際と同じ手順であるが、今回は泡を作り出すのに数分単位の時間を掛けて範囲を周囲二メートルの余白が製出するまでに拡大し、第二依頼である『かけら探し』を効率的に行う為の準備をする。

酸素補強用のマスクとしてハウエンでは「十全十美」の称号を授与され、世界有数の科学力・技術力・経済力を維持し続けポケモンと人間の進歩に貢献している『デボンコーポレーション』が『ダイビング用ポケモンを持たなくても深海へ潜れる様になりたい』要望を叶えたのが……デボンボンベ。

（あの子も海底でアイテムを探しているのかな？）

特別製の酸素システムから吸気を受ければ子共も大人も水圧に耐えうる身体を手に入

できてしまえる最先端テクノロジーは、構造からポンベの製造過程までを公式ホームページ内で動画として公開しデボンラボラトリーの『ポンベ開発班』自ら実体験をレポートしコチラも公開中。

前評判では「途中で一大事になったら……」と不安視する声はあったが、安心と安全な道具だと実証明され発売当日はたった数時間で各地から品切れ報告が続出。

ポンベの内容積を増加させ、今までは使い捨てだった酸素の詰め替えサービスも開始させたのがアップロードした『verduo』

ハンテールのポンベカバーとサクラビスのポンベカラー（性能に差はない）がラインナップされ、一応のターゲット層は前者が男性後者が女性への訴求だけど好みで選んだって構わない。何だったらデボンにオリジナルのカバーをオーダーメイドしたって構わない！

ラインナップには含まれていない、マリルをシンボルに添えたポンベを携え潜っている少女と鉢合わせした。

陸に想いを馳せたいまでに太陽光が届かぬ水底別離で、海草を左右へ押し広げながら懐中電灯：．これもデボンが販売している海底用のアイテムでポンベとセット——頼りにお宝を発掘しようとする躍起になっているのだから遅しい………低温でもポンベがある限り地上と変わらない体温を保有・供給される驚異のテクノロジーだけど、水着に

着替えなくてはならないのがダイビングとは異なる点だ。

少女のビキニの後ろ紐が解けそうだったので、メコンがジェスチャーで伝えれば勇ましかった表情を陰らせポロリしそうなバストを抑えながら浮上していった……

海底を住居とする野生ポケモンの一部は『余計な事しやがって!』と思っていたとか何とか。水ポケモンはこういったハプニングと遭遇しやすい為なのか、他のタイプよりもエツチなポケモンが多いのかもしれない。

(よしっ! かけら集め終わった! メコンと一緒にだから早いよ〜)

幼少期チョンチー時代からメコンは海の底に散らばる欠片探しは得意分野。

ランターンとなった18歳の只今では万能メイドなので寧ろ『苦手な事って何だろう?』は、スポーツくらいしか思い浮かばない。

(3つ横へ並んでいる岩石の後ろに落ちておりますよ〜! そちらの岩石から30度の方角にあります、海草の影にも2つ落ちてますねえ!)

フェンの一件ではかたくりこにナビゲートして貰ったが、海底ではメコンが三つ編みライトをソナー代わりにジックを誘導してくれるので依頼分の欠片を集めは1時間と少しで完了した!

ダイビングを使うポケモンがメコンでなければ5時間以上は掛かっていた。

身体の疲労も殆ど負わず、フィールドワークにしては物足りないと思いを抱いた程に

楽勝である！

「メコンのお陰だよありがとう！」

「な、慣れていただけ……ですよお／＼　貴方にお力添え出来て嬉しいですつ！　えへへっ……／＼／」

口紅を塗らずともレッドバージョンに彩られる、ふにや顔を両手で覆う姿勢を作れば肘でおっぱいが挟まれるっ！

ジツクも腕を組まれたり少し彼女が接近してきただけで『その気がなくとも肘でHカップの先端部分をツンツンしてしまう事故』が多発する。危険なおっぱいには深海に生息する野生ポケモンさん達だって顎と鼻の下を伸ばしてしまう。

(う、オツ!?)

ガタガタガタガタガタツ

腰に取り付けているボール、鋼鉄ツインテガールの物が激しく震動する。

左右ではなく上下に跳ねてくるので虚を突かれたジツクは腹パンな衝撃に、下腹部から腰回りが痺れて来る。

多分間違いない……『後で自分にも構ってください！』を言葉ではなく、身体を使って訴えているのだろう。

オーヴェルとのバトル後は爽羽佳に、現在はメコンに構い過ぎている、鼻屑するな自

分にもコミュニケーションを取れ、手持ち歴は短いけど色眼鏡しないで……と。

(うう……バトル終わった時に褒めたりな、撫でたり……した筈なんだけどなあ……『もういい』って嫌がられたけど……)

モンスターボールに収納されていて外部での会話は筒抜けだ。一時間弱もメコンとお話していたのが彼女にとっては不公平だと受け取れてしまったのかも。

『今はゴメンだけど、帰宅したら!』

……と、メコンには聞こえない様に小声で謝るがヴィヴィはツーンとした表情でそっぽ向きながら、ロリ巨乳を寄せて上げての腕組み無自覚エッチに体育座りして、つて外側からでも伝わってくる嫉妬のオーラが滲み出ている……!

依頼を127番水道く128番水道の海底で遂行させた理由は、トクサネから直ぐにアクセス出来るからが一つ。

もう一つは『メコンの実家が近所にある』ので予め連絡を入れたご両親さん達へと、久しぶりにご挨拶をしたかったからだ!

ヴィヴィがこんな感じなので余計に煽る様な形になってしまう……けど決めていた事なので中止には出来ないっ……!



メコンの両親が住まうのは水深7000メートル層に沈む巨岩をくり抜き改築して

ダイビング効果のある泡でコーティング。

煎じ詰めれば、“デカイ酸素ボンベの中”

小さい家ではあるけど家族3人が距離近で過ごせ触れ合う時間が多くなる。

お父さんに陸地のお話をして貰いながらお母さんが作る料理の香りが広がってくる……メコンが大好きだった幼少時代の一コマだ。

「お父さん！ お母さん！ ただいまですう……！」

泡フィルターで閉じ込められているから、水でないポケモンや人間には“エラ”を後天的に取得した物と同等な状況で酸素を取り入れたり、高い水圧の環境に押し潰されないう身体強化の魔法が一時的に何重にも施されるのである。

「娘よ……！ 一年ぶりだね……！ お父さんは何時だってお前の事を思っているぞ……！」

「おかえりなさい、最愛の娘メコン！ ジックさん達もお元気な様で！ また男前になりましたねえ、貴女のご主人様！」

状態異常：ダイビングを維持したままジックは手持ち全員をボールから出現させる。約1名は初対面なものもあるが挨拶も握手も——少し前の熱意や関心が欠如した無表情ロボットに逆進——ギクシヤクしており歩行すら右脚と右手を同時に前にするなど、えつちら、おつちら、ガシヤンガツチャン。

(あ~~~~~……………)

特性はするどいめ!……ではないが、ファッション誌には恋愛や『少しエッチな特集』は付き物。

ギャル友であるネリと一緒にその手の話題には敏感でJKとしての「勘」が、ヴィヴィのクアッドブレインよりも遥かにブラック産業化する爽羽佳は居心地悪そうな不器用っ娘を落ち着かせたい気持ちになっているが、言葉では無理だとも直感している。妻子の幸福は優先度+5としている妻子が幸福なら自分も幸福である。

その優しさは娘であるメコンへも受け継がれた、ランターンのお父さんは発光器官を一昔前のメコンと同じアホ毛としたランターン種の外観特徴としてはオーソドックスなスタイル。

娘が野生のポケモンに襲われたのならライトの光で眼を眩ませたり、でんじはで麻痺らせ戸惑わせている隙に撤退する。

争いを嫌う彼らしい戦法、メコンの状態異常や補助技ありきのテクニクも父親を意識したのは間違いないだろう。

正反対に……発光器官で1つ結びにした髪を肩前に流しているお母さんは娘が野生に襲われたのならば……

スパーク(拳)

スパーク（蹴）

スパーク（間接）

……超肉体派のランターン！ 単純な戦闘力ならば旦那よりも強いけど二匹とも特性がちくでんなので娘が生まれる前に喧嘩をしても、直ぐにお互い降参し深海よりも深い「夜の営み」が愛情を促進させた。

ずっと一緒に夫婦である以上何処かしらで意見が合わず衝突する事だつてある。そして夫婦である以上必ず乗り越えられ仲直りができる。

その賜物がメコンなのであるつ！ 当たり前だが本人には内緒！

「新しい給仕服のスカートが天の川になつてるのよねえ！ 海から顔を出して星々を眺めていた幼少期から、貴女は地上への憧れがあつたのよね」

ランターン種は平均以上の胸部サイズとなる。

人化した彼女らの基本生態や性質を纏めた新書にそう綴られていた。HPに優れた種族であると胸の発育が宜しいらしいが、ホエルオーでも小さい子が居たりツボツボでも爆乳であったり、数は少ないけど個人差や成長スピードの違いは人間と同じ様にある。

（親子揃つてでつけーニヤあ！ あの巨パイで旦那を誘惑して結婚したに違いニヤいニヤあ〜〜？）

人妻（ポケ妻）としての貫禄なのか、未成年の少女達である手持ちには物理的に所持が出来ない名状し難いお色気フェロモンがムンムン！

戦術が父親譲りならおっぱい——娘には追い越されたが『Hに近いG』——と鷹揚な性格は母親譲り！

まだ10歳であつたジツクは乳横にシワを作りボタンが吹っ飛ぶのか吹っ飛ばないのか、ミツチミチの乳袋と自然に創設された前方の乳ホールには背筋に鉄拳スパーク喰らつた衝撃を受けて、目線を逸らす努力をしていたくらいだ。

おっぱいの成長が止まっても我が子に栄養を与え育ててきたGカップは1つ結びが挟まつてしまつている！

驚異（胸囲）のランタン親子を見比べ、初対面だとか人妻とか関係なくおっぱいへ I Can Flyするつもりのみノムシを、鉤爪に引っかけ制止させながらネリも『あの親がありこの娘あり』と、既に母親越えしてるメコンの将来的なおっぱいが心配になつてくる。

「立派なランタンに育ててくださりジツクさんにはとても感謝しております！ 娘は地上での暮らしに憧れを持っておりました、良いトレーナーに捕まえて貰えるのなら……私達も慎重にトレーナーを定めるつもりでした」

メコンのお父さんは（おっぱいな意味ではなく）成長した娘が帰省する度に、涙もろ

くなってしまう。

海底だけの暮らしで生涯を終えたくない、色々な景色を見ていきたい、戦闘だって両親に助けられなくても勝てる様になりたい。

10歳ロリだったチヨンチーは伝説のポケモンが影響していると観測された、巨大な渦潮に攫われてしまいミナモの砂浜に打ち上げれた。

同じ年齢だった少年、ジツクは偶々家族旅行に来ていて偶々最初に発見した。

彼本人も「身体を治してくれたのは両親だし、ボートを出してくれたのも俺じゃない」と彼女へ思い留まる説得はしたけど、意志は鋼タイプよりも頑強で『ジツクさんのポケモンになりたいです!』と抱きついて離れようとしなかった。

そこまでお願いされてしまつては……ジツクも間もなくトレーナーとして認めて貰い、正式にポケモンを捕まえる許可が下りる時期。

夕焼けの浜辺で再会した両親も『ああ、この人なら大丈夫なんだな……』

親元から娘が離れてしまうのは寂しくない訳が無い。

娘が決意し合意の関係であつても時代錯誤の頑固じい宜しく「娘は簡単にやらんつ!」とでも相手に強く当たつてしまひそうで……父親も不安に想つていたが、ジツクと手を繋いでいる娘を一目見た瞬間に脱力した。

娘の一人立ち独居をすんなりと認められるだけの思考パターンに切り替わっている。

寧ろジツクという少年に任せられなければ誰に任せられるのだろうと、妻も同じ気持ちであったのだ。

「……娘から近況メッセージが送られて来る時もあります。もう嬉しそうに『ジツクさん』と『ジツクさん』が『ジツクさんが』な幸せいっぱいの内容なんですよ〜！」

「胸だつて私より大きくなつて。それだけ大きければ子育てにも困らないわよね？
ちよつと早い話題かしら？」

「もッ?! お父さんもお母さんも〜／／／ 結構困っていますのに……この大き
さあ……／／／」

父親には側面から、母親には正面から親子のロケットHとGが正面衝突したが低反発なので乳圧を吸収しノーダメ。ギョツとされメールの内容を暴露されてしまい怒っているけどちつとも迫力がない！ とびはねるして岩天井に頭ぶつけたつて瞳がハートマーク保ったままなんだものっ！

父親には両手を持たれ、母親にはその上から手を重ねられ、ニックネームを与えてくれたジツクへは感謝してもしきれない！

ドラマチックな出逢いから始まって、手持ちになると他の岐路を絶ちジツクへ続く幹を選んだメコンは命の光が尽きてしまう刻が来ても彼を慕い、メイドさんの志を折つて曲げたりはしない。心に決めたたった一人のご主人様なのだから。

「……………フツ、フツ！　ふううツ……………　ううううう……………ツ……………ギギギ、イイイツ！」

……妻に「これくらいにしておきましょう」と、おっぱいが腕に当たる距離で耳打ちされた父ランターンは少々雰囲気を読まなかったと反省した。

ネリや爽羽佳は『やっぱ本妻にやー勝てないかあ！』だの『ラブラブカップル、略して“ラブプル”を見せてくれないじゃねーニャあ！』とひゅくひゅく冷やかしてるけど、ツインテールをヒュドラを憑依させたかの如く9つに分離増殖ゾワゾワさせ、歯ぎしりのあまり口内から鮮血の代わりに蒼白いプラズマをポツリ落としながらシルフスコープ無しの“ゆうれい”よりもずっとホラーで、命どころか世界滅亡の危機感さえ覚える形相となっているヴィヴィ。

父親としては『娘の将来はジックが居れば何も心配要らない、全てを任せられる』趣旨であったが……彼はメコンだけの男ではない。

(……私達が彼とメコンの関係や絆をもてはやし過ぎてヴィヴィさんに不愉快な想いをさせてしまったかな……)

そりゃあ大好きな一人娘だから久しぶりに帰ってくれば親馬鹿な対応をしてしまう。

ネリそわは慣れているけど、新規参入のミノムシとメタリックガール——前者はもう寝てるけど——への気配りに不足していた。

グヌヌヌ、拳を握りしめて蒼い粒子を発火させているヴィヴィは何でそんなにイラ立っているのか、自分でも理解不能の海を漂ってソリューションが見つけれない。

デレデレ（してる様に見える）ジックへ対してなのか、種族平均を超えた海鳴りの様に噴出した胸で、彼を惹きつけてしまっているメコンと母親に対してなのか、ラップルな雰囲気を助長させているネリそわへなのか………自分自身へなのか。

Segment・hepta—recovery

メコンの実家からログハウスへ帰還中も、夕食を食べている時も、リビングですれ違つても、ヴィヴィは表情も変えず声も発さず『立ち入り禁止』とプリントアウトした様なデジタル筆跡でも、女の子らしい柔らかい筆跡でもなく入ったら殺す意味を込めて書いたのだと容易く判明できる彼女らしくない非理性的で蛮行で崩れた筆跡の張り紙を、ドアに叩きつける様にバンツ！ と貼り付けた音に手持ち全員とジツクは肩を竦ませてマジでビビる……

けど、おやとしてヴィヴィをこのまま放置する訳にはいかない！

理由は大方理解している、約束もしていたし入ったらコメットパンチされるかもしれないけど、おやとしての責任と彼女が欲しているであろう心境に物理的アクセスを果たすために道具一式揃えたら張り紙を無視してドアを三回ノック——



「……………張り紙、読めないんですか？……？」

失禁してもいい年齢であるなら失禁してしまいたかった。それくらい今のヴィヴィは恐ろしい……

旅で強いポケモンと遭遇したり過酷なフィールドに弱音を吐きそうになったり、手持ちメンバーと一緒に立ち直ってきたけれどあの時のジックが現在のヴィヴィを見たら、それだけでトレーナーを引退していたかもしれない。

舌打ちしながら睨まれる、血みどろの濁った赤い瞳は魂を引っこ抜かれそうで精神的外傷を植え付けてくる。

死よりも恐ろしい現実とはこれを表すのだろうか……

「えつとですぬ……………」

あんな張り紙があっても何故だか鍵は開いていた。

アニメ風口りに程よく冷たい音響が融合したのがヴィヴィのボイス。

家主として所有しているスペアキー——なるべく使いたくはないが——をシリンドラーに刺す展開になるかと事態を予測していたが、低いケモノの様な唸り声で心の部屋に直接伝達させられた。

『命知らずですぬ、入りたければ入っていいですよ、マスターが無事で部屋から出れる保証はしません』

あんな人肉頬張つてそんな低い声も出せるんだ……想いながらも《念話》を成立させてくれて、少しだけだが気分は安堵した。

鍵が開いてる件といい、念話成立といい、彼女だつて実は……………

「……………ご用があるならさっさとお願いします。わたしは忙しいんですっ」

超難関の12×12構造キューブを秒速で揃え、組み替え、『マ、ス、タ、ー、の、バ、カ』と即席サインボード扱いにしてしま、人間や早解きロボにだって到達出来ない処理能力をこんな形にだって応用してしまう。

体育座りしてるからちよつと目線を動かせばパンツが……など期待も注意もしていない雰囲気ではない。大層お怒りで攻撃力は六段階上昇している。言葉に気をつけなければ何時コメットパンチで人生の幕を閉じるか分かった物では無い……！

「約束、ヴィヴィにも平等なコミュニケーションを図る……そうだったでしょ？ だからお邪魔させて貰ったよ！」

「……………うにゆふえ……………？」

あんだだけツインテールをヒュドラにしていたのに、その発言を聞けばヴィヴィらしくもない状況把握の整理整頓がつかない。怒りの感情何処行つた？ な口り声に戻ってしまう。

時間が解決してくれる問題じゃない一刻も早く……少々強引だとしてもヴィヴィの心を修復しなければならない。

そして修復する役割を受け持っているのは、おやである自分なのだ！

「バトルを頑張ってくれたヴィヴィにマツサージがしたいんだ？　してもいいかな……？」

大小のタオル、ケアローション、天然樹のツボ押し棒など道具一式を収納したボックスを抱えながら、キューブを落とすお目々パチクリさせているヴィヴィへ頭を下げるのは懇請と自らの非を……彼女の言うとおりにコミュニケーション頻度の足り無さを認め謝罪のベクトルも含んでいる。

「しょ、しょうがないマスター……ですねっ、そんなにお問い合わせで断ってしまったらわたしは虐めているみたいになってしまうので……少しだけ、ならば……ど、何処からするつもりなのですかっ胸とか……触ったら朝日を拝めないと想って下さいねっ……！」

心と心で繋がっていた不可視のケーブルは、切断されてしまったけどキューブを拾うことも忘れて瞳を直視してくれる様になった……！

女の子は繊細に扱いたいけど、場合によっては男らしくグイグイ大胆に意見を通す事だっ必要なのケースバイケース。

ジックが政府認定の資格を有しているのは存じているが、自分が施される時が来るなんて。

「なあ、なんですかその瓶に入った液体は……」

「ハンドクリームの代わりになるローションだけど?」

「ロ、ッ!? エエエエエエエエエ、エツチエツチですつ! 卑猥です! そんなモノをわたしに塗りたくるつもりなんですかッ!?」

テーブルで対面となったジツクは承認してくれたヴィヴィに御礼の言葉を述べながら、いくつかの道具を置き並べていく。

小型タオルを丸めて台座代わりに、中型はテーブルを汚さないシート代わりに。

呆気なく崩落したプンプンフェイスを少し取り戻した不機嫌顔のまま説明通りに台座に手を置けば、オリーブオイルや水飴な質感の水溶液が内蔵されたピンを見るや否や、差し出していない左手では額を蜂の巣にする勢いで突つつこうとしてくる。

「エツチじゃないって! 摩擦を軽減させて痛まない様に潤滑性のある製品を使って肌への刺激を少なくするの!」

「ローション」の言葉と瓶に激憤を演じる事を忘れてしまい、かと言って冷静に質問をする訳でも無くテーブルをひっくり返し兼ねないお笑い芸人も見習った方が良いリアクションで後退ろうとするも、ジツクに右手を握られてしまつてそれすら出来ずに終わったヴィヴィ。

(はきゅー! ンツつ……! わたしの掌と重なつて……わたしよりずっと硬くて……)

おつきい……あつたかい……マスターの……手……はうう、わわああ……)

意外や意外にも、寝巻きがミミロップだからなのか脱兎の如く速度で逃げだそうとしたヴィヴィを、グツと両手で掴んで離してくれない。

「いつ、ヤあ……ですつ……！ 離してくださいっ……！」

「それこそ『イヤ』だよつ、逃げないでヴィヴィ！ 話したいこともあるのっ！」

(きゆう……ふっ……!?)

嫌がれば——フリだけど——見逃してくれる。他人が「嫌だ」と言葉や態度に表せば深追いせず諦めてくれるのが彼のポリシー。

そうやってポケモンをゲットしてきたけど、ヴィヴィだけは特例で『どんな手段を使っても手持ちにしたい』とあの時、フエンで直接伝えた「自分らしくない自分」

「ヴィヴィの武器は手甲、それを付けているのは両手だからポケモンセンサーで回復するのは違ったハンドマッサーなんかどうだろうって。……先に言うけどセクハラじゃないからね？ 例えヴィヴィがそう思ったとしても今日の俺は止めないし引かないよ。」

「……………ツ！ ひやくンツ!? ヌツ……………メヌメ……………え……………この感触……………エツチ……………ですつ……………くにやつ、ふうツ!!」

触りたくて、でも恥ずかしくて言い出せなくて。

何か合法的に触れる手段が無いか模索し、計画通りに触れる機会を作れてもたったの3秒かそこらで「もういいです」だの「セクハラです」だの、手甲出現させて払いのけてしまっていたジツクの手。

肌は荒れなどは見られない。女性の自分とは違ってしなやかさよりも骨張った職人を思わせる筋肉感があり、爪垢や汚れはなく誰からも清潔な印象を持たれるだろう左手からは、早鐘を打つ生命の脈動が聴こえてくる……

ヴィヴィは人間ではないけど、彼と同じでドクツドクツ、ドクツドクツ

巨乳に詰まった色香は穢れ知らずな幼き魅力を引き立ててしまうパラドックス。

平常時は一定リズムを刻んでいる左胸のメトロノームは内燃機関が異常に発熱し、メトロノームを木っ端微塵にするフォルテツモ。

(ヴィヴィも緊張してるっ！でも今回は絶対に止めない！)

『一緒に居る』

フエンでの一件、彼女が正式の手持ちとなつてマスターとして認められた瞬間そう誓った。

彼女が本気で嫌がつているのではないと分かつてはいたが折れてしまっていた。

でもそれじゃあヴィヴィは納得が行かない。チーズドッグを言えば許してくれる問題ではなくなっている。嫌と言われてコミュニケーションを止めて、その積み重ねが

ヴィヴィをこうしてしまったのだとジックにだつて反省点がある。

「はみゆ、ふう……………くちゆくちゆ……………エツちな音お……………にあ、くぬつ……………にやにや、はああ……………」

ヴィヴィの手は飴細工よりも精巧で肌は彼女の動力源である蒼い磁力すら透けてしまふ程、極小サイズのクリスタルが集ったイミテーションで。

メコンでも爽羽佳でもネリでもない、最も付き合いが浅いけど『最も深めたい』と思っている女の子の手を握つて、やや自分の手は……………実はヴィヴィの手も……………汗ばんでしまったけどローションを追加して決して賞味期限の切れない生モノ肌を傷つけない様に、甲と甲を合わせて潤滑油を引き延ばす。

「んやつ……………ふにやつ……………はああ……………うう……………ます……………ますたあ……………」

(可愛い……………！ めちやくちや可愛いツ!! 落ち着け俺……………目的を見失うな俺……………フツ——うう、スー——はああ……………よっし！)

初めてされるハンドマッサージ。恐らく自分でも弄つた事はないのだろうこれが同性であれば何てことはない、どの程度のレベルなのか世に知られるマッサージの施術内容や効果を速やかに脳内検索し、デスソースな判定を下していただろう。

が……………

(いっばいいい……………マスターの手が、指が……………わたしの手と絡まって……………あつ、あんつ

……酸素が入ってくちゆくちゆつてえ……弾ける水音があ……くにゆんっ!? はふあ、ああ……! エツチです……! エツチですエツチですエツチですエツんッ!?

「ふん! ああひやきい、ふアア〜!!」
 スーパーコンピューターの並列CPUですら、タスク管理が行えずトラブルシューティングも実行されない。

——にゆるつ、くつ、ぬちゆるつ、にちやりつ、ぬぐちゆつ、ぺたつ、ぺちよりつ、ちゆくちゆくつ——

「あふつう!?! ああああッ?! いヒヤひんツ?! くひやふうう〜!?! んニヤくああんツ〜!?!」

親指と人差し指の骨が交差した部分、合谷と言うツボを刺激すれば首から上……特に肩こりに対する効果がある。

別に『おっぱい大きいから肩凝つてそう』ないやらし思考はない!

「ふニヤくうううツ!!? ますたあ! そこダメひやツ!! んくきやあああッ?! きもひいん……はんグっ?! ふキユツ、はっ……はううう……」

ゆつくりと五秒間隔を目安に掌を揉みほぐしながら根元に向かわせ、するうくと押し

戻す。

唇を噛んで喘ぎ……いや、フエン以来の一点一画も揺るがない『手から手へのぬくもり』……ずっとコレをされたかった、したかった。

「ヴィヴィ……………」

「ふああ……なア、なんでしゅ?! ひゅんツ?! かあんんうう?!」

じしんで大地の裂け目に突き落とし、コメットパンチでお星様にし、サイコキネシスで遠距離広範囲を散らす。

心を持たぬものなの、キラーマシンだの、そんな渾名をこの少女に付けられるだろうか？

痛気持ちいの良い初めての感覚と再来した『ぬくもり』の感覚に悶えヨガって、口では何と言いつても身体は……ナントヤラ。

(きつ……………もち……………いい……………のっ……………ますたあ……………ても……………まつさーじ……………もいっばいさわって……………さわること……………できてるのっ……………)

今の彼女は弱すぎるメタグロスだ。

人間の少年に反射区を押されただけで身体を捻らせ、振り、ヌルヌルでくすぐったくて塗りこまれたローションが「ニチュニチュ」音を陳じらせるから、耳から内部へ「ニチュニチュ」が潜り込んで……ぼわぼわした表情は計算尽くとは無縁などとも小さい女

の子。

本当に嫌なら鉄槌を振るってしまえばいい、それくらいの力は残っている。

……けどしない、何と口走ろうと嫌じゃないからしない。

「ゴメンね『一緒に居る』って約束したのに。チーズドッグを買いに行く以外でもお出かけとか、こうやってマツサージとかさ、もつと色々ヴィヴィと関わるイベントを増やすべきだったと反省してるよ」

“マスターや皆は全然悪くない”

ジツクと距離が近すぎて八年間も隣に居たメコンに嫉妬していただけ。

ヴィヴィは彼女が羨ましかつたのだ。甘えたければ素直に伝える事が出来て彼とたっぷりコミュニケーションを図れる彼女を、自分には無い物を沢山持つている彼女を。

「に、やつ、ううう！ もつ、もつ、う……手はい、ですつ……！ ハア、ハア、ハア……ハア……や、やるのでした……らっ……」

マツサージがこんなにも気持ちいい……身体に不具合が？ セキリテイとして蒼い城壁を心に張り巡らせたって今のジツクには何の効果も無い。

「……そうだね、衝撃を支えている脚もマツサージしないとだねっ！ ヴィヴィは『てつあしポケモン』だし！」

見せたくは無い、強いポケモンと世界各国で『Sランク』評価を与えられているメタグロスたる自分の鋼が人肌を感じ、体温を受け取り、ヌメる液体を混ぜ合わせた手技で表情特性がじゆうなんに変異してしまっている自分なんかを。

このままではマズイ気がする……メルトしていく意識の最中でヴィヴィは「手は十分、次は脚をやつて」……と言葉にはしたつもりだけど、正直息も絶え絶えな快樂だったからしつかり伝えられた自信が無い。

目尻も眉も8時20分に落とされてしまう、ならば顔だけは見せない体勢にしてしまえばいい。

……自分がどんな衣服を着用しているのか、そんな簡単な事にまで思考が回っていない。

「ハッ、ハア、ハアア………ど、どうぞっ……ハアアハア……」

枕を抱きかかえながらタオルの敷かれたベッド上でうつ伏せとなる。

(そういえばヴィヴィの脚……触るの初めてだよなっ……)

手は何度か握ったりしているけど膝上ニーソかショートソックスかの対立は古来からの伝統であるが、ヴィヴィは後者のスクール制服を優等生ルックに魅せるショートソックスを愛用している。

それすら脱いでくれた生脚……!!

攻撃時は550kgとなる重量を毎度受け止めていながら、むくみや黒ずみなどは皆無である。

高純度の美しさと可愛さをそのままドライフラワーの様に氷に閉じ込めて、永遠に維持出来るヴィヴィは『脳トレしたら18歳だったけどお身体の年齢は（胸を除く）13〜14歳』

お化粧もした事の無いすつぴん、ボディケアも必要としない。あまりにも女子が「ズルい！」と羨ましがる要素がつき込まれたパーツの一部を完全にジツクへ預けてくれているっ！

「ひッ!?」　ンッ……やっぱりその……液体はエッチですっ……いー」

肉質はあまり無く健康的とも色つぽいと本能に激震するタイプでも無い、ヴィヴィの生脚はどんな肩書きを与えれば良いのだろうか？

……手もそうだけど彼女は胸だけが抜きん出て発達していたり普段が感情の起伏が少ないクールガールなので、どうしても大人つぽい印象を持ってしまおうけど——

「ふひやああああああ!!　ああああー!!　くにううう〜!!」

この距離で直に足裏をくくに刺激させて貰っているクリアランス、観察すればあまりにも……世界で一番柔らかな鉱石。

鋼タイプだから全身が硬い、そんな道理は人化している彼女には適用されない。

「にゅあああああんっ！ ハッー、ハッー……あうっ……うああうう！
はあああ、あああ……」

ローションの香りとは違う、ペパーミントに似ていながら練乳の様な中毒性のある甘い香りの発生源がヴィヴィ。

こちらも手と同じで第二の心臓とされる足裏をマッサージをされた事が無いので、非常に感受性が豊かになっているのかもしれない。

枕に顔を埋めて少しでも声を抑えようとしながら、土踏まずの上に位置する湧泉に圧を掛けたら反り返る。

この刺激に慣れてきた……ヴィヴィがへたり込んだ次の瞬間に、甲状線を押されて両脚をバタつかせてしまう。

リミッターも作動できず反応が良すぎるヴィヴィはまるで気がついてないが、両脚が広がっているので『パンツ見えまくり』

少女が着用するにはアダルトな色艶でフリフリのヨーロッパアンレースには X の装飾が規則正しく配置されて、側面はほっそい紐と紐だけでデルタを形成している危ない橋。

「フッ………フツ、ウ……くウン！ フー……！ うううッ！ あああうッ
！ フウウウー！ うあああ……あああ……！」

とうとう枕に埋めるだけではカバーしきれないと悟り、生地を噛む事で刺激に耐えて音量も低下させようと試みるヴィヴィ。

胸以外はロリ体型なのに、大人の下着が簡単に回覧出来てしまえるポジション。見た気持ち在必死で抑えながらマッサージを続けるジックも頬を慣熟させ気になっている女の子のエツチな声に、あやしいパッチを当てられたみたいにくラックラだ！



「ハー………ハッ、あつ………♪ つあ、あう………♪ ハッ、ハ………ましゅ………たあ………ああ………あ………♪」

*枕が汗と唾液でびっしょりだったり、身体全体をピクピク痙攣させてたり、身悶えを繰り返した衝撃でスカートが捲れ上がってますが、事後ではありません。

同居するのは達成感と少々の罪悪感、念話を使わずにヴィヴィとここまで長く至近距離で意思疎通をしたのは初めてだ。

「はふつ、あああ………はうう………♪ ハッ、ハッ、マス、ター………ハッ、フー、フー………」

『褒めて欲しかったんです……』

パンツが丸見えだとは知らずどんな表情になっているのか想像もしたくない、顔を枕に突っ伏しながら念話で半分息切れが整いつつある口からもう半分。

「ヴィヴィ……………」

張り切つて戦うのは強ポケ特有のプライドを守る為だけではない。

ジツクを負けさせるのが嫌だから他の手持ちよりずっと頑張つて戦つていたつもりだ。

「勝つたら……マスターは褒めてくれます……でもつ、わたしはセクハラだとか、もういいとかつ……うれし……かつたのに、理由を付けてすぐ拒んだり……ごめんなさい……マスター……」

メコンや皆がされているから自分にも実施するのは当然である。

……違う、フエン温泉で——無自覚から入つたけど——頭を撫でられたら抱いていた不安が、渦巻いていた迷いが、全身から抜け落ちてしまったあの感覚をもう一度……何度でも——

他の子達みたいに素直に感情を伝えられない、ぶきようなポケモンよりも不器用だから突っぱねて逆に気を惹こうとしていたんだ。

「わたしはマスターのポケモンです……た、偶に……いえつ、……こつ、交流……相互の理解と心理的な絆……を深め合う……の、だいじ……おも……ます……うあ、あう……」

無気力でもなければ無感情でも無い。自己完結させるメタグロスはニツクネームを授かつた瞬間にヴィヴィと言うオリジナルの存在として自我に芽生えた。

「わたしは怒ってないですからっ……………マスターは……………わたしとお話したくって……………危険を承知で入って来たんですよねっ……………?」

「……………そうっ、だよっ! ヴィ、ヴィヴィともっと仲良くなりたいてっ! いっ、いっばい思ってたの! どうすればいいのかなあつて考へてる内に、ヴィヴィに不満を溜めさせちやつて俺こそ謝らせてよ……………もつとヴィヴィを良く見るべきだったつて!」

「そんっ……………な事ない……………ですっ! マスターはわたしをいっばい……………氣遣つてくれます……………嬉しかった……………のですが余計な一言でマスターの努力を白紙にしてしまつていた……………わたしが悪いんです……………子共みたい……………んっ、ありがとう……………ございます……………マスター……………!」

「どうやったらこの子の笑顔が見れる様になるんだろう?」

ニックネームを授けられる以前はハサミギロチン八回連続で当てる事を要求されるかの、難行苦行な弩級難易度のクエストだったけど今は……………結構簡単に……………なつてしまつた……………のではないか?

チーズドッグを買つてあげれば喜んでくれたけど、それは「笑顔」とは少し違う。

ジツクが明確な形で「笑顔」を初めて見れたのは《ヴィヴィ》の名を授け与えたあの瞬間だ。

そしてその「笑顔」をいつの間にか自分には眼前に収める機会が増えている。

「……………マスター……………明日も……………お願いして……………いい、ですかぁ……………？」

今ならちよつとだけ素直に気持ちを伝えられる気がしたから。

自分だけ彼と接するチャンスが少ないのでは？　自分は優先順位を最も低く定められているのでは？

……………そんな事は無かったけど理由を色々と考えて彼を疑ってしまった。

疑いは『その人を知りたい』裏返し。

ヴィヴィもジツクともつと、もつと仲良しになりたかった。その一言を表現するのに回りくどい策略を駆使したのにそれすらも恥ずかしくなつて……………

どうやってこの気持ちを表現すればいい、苛立っていたのは自分自身、簡単な筈、なのにとつても難しいその一言を彼に告げるのが。

「……………あつ、分かった！　明日もマツサージさせて貰うよ！　お話しながら……………ね。ヴィヴィの事……………もつと詳しくなりたいから……………チーズドック以外の好きな食べ物とか、生活用品で欲しい物とか、戦つてみたいポケモンとか、何だつていい……………ヴィヴィと……………お話出来るんなら俺は……………いっぱいしたい……………」

おやとしての努めを果たす理性が一人の男性としての本能に負けた。

後半は己の願望を只管に言葉にしているだけだった。おやだからと建前にしてしまってもいい、ヴィヴィととにかくお話ししたい一緒に居たいのだと。

「……………うん、わたしも……………マスターと『一緒に』……………二人だけで過ごす時間と空間を……………大事にしたい……………ですつ……………ふしゅつ、うううううう……………」

顔を見られていないから？

あるがまま自分の意見を伝えられた……………

ツインテブースターが誤作動を起こしそうなくらい体内の熱エネルギーがタキオンの速度でエコーし、蒼いグラデーションは瞳と同じ深紅の釉薬を塗布されてしまう。

マッサージは終わった自分は、怒りを鎮めて最強の鋼ポケモンなんかじゃない、1匹の少女に成り果ててしまっている……………

「ヴィヴィ……………？」

「は……………い……………なんですかあ……………♪」

自分だけの名前を呼ばれる、他でもない彼が授けてくれた名前。

それだけで鋼タイプの自分はトロトロになって『自分らしくない』と思うが、彼とお話出来るならそれでもいいやって彼を求めてしまっている。

幸い粘液だらけの枕に顔を突っ伏しているから表情はバレていない。

まるで気になっている彼の部屋に遊びに行けたとか、予定が一致してお出かけの誘いが成功したとか……

一昔前のヴィヴィなら「非現実的な迷夢に等しき自己中心的な空想ビジョン」だと蔑んでいた——恋愛小説のワンシーン——

「したぎ……そろそろ隠してください」

……鎮まった荒神が『やっぱ気が変わったわ』とツインテールを9つに分離させゼンリヨクのコメットパンチ!!!

ミナモ美術館の外壁までホームランされアトリエで暮らすパーリエに救出されたジツクは、この世の裏側に潜む反骨神の姿が久しぶりに見えてしまったらしい

Segment・hepta—Resonance

「……………ッ!? このつ……動力コアが発光している……………この感じはッ

!」

ヴィヴィとジツクの距離がフィジカルでもメンタルでもぐぐぐんと縮まって、なつき度もぐーんと上がった夜から数日が経過した。

深夜の午前二時、丑三つ時に原理や理屈など一切が不明であるが、強制的に目覚めさせられた……………? としか言い様のないチャネリングを果たしてしまった?

「マスター! 夜遅くに申し訳ありません……………起きて欲しいですつ……………」

「……………Zzzz……………がつ、んつ? どしたのヴィヴィ……………」

ホームページ更新と依頼の契約が成立し、バトルでヴィヴィと一緒に戦ったジツクは暴睡していてメコンが耳元で呟いたって簡単には起きなさそうであるのに、ヴィヴィが小声でドアを開けた位置からでも要件を口にしただけでキツカリ上体を起こしてしまっていた。

まだ頭の中は覚醒しきつてない、衣替えの目安である10月が出番を待ち遠しく思っているので薄生地寝巻きもバトンタッチの時期だ。

「……………わたしの心のテリトリーと干渉するエナジー反応をキャッチしました。何か
が響き合っている……不穏な影が迫っている……確証はありませんけど行かなければ
……………ならないんです……………」

「それは……………もしかして『アイツ』だったりするのかなっ!？」

「分かりません……………お願いしますマスター! わたしを、連れて行ってください……………位
置が特定……………出来ます……………急げば間に合うんです!」

常人の感性と乖離してしまっている言動。夜中に起こされて大々的なイベントが
告知されている訳でも、流れ星が大量に観測できる期間でもない。

ヴィヴィの受信した電波な妄想寝ぼけたヴィヴィが夢で起きた出来事を並べている
だけ。

そうやって切り捨ててしまい、布団の中に戻るのには実に簡単……………だけど——

「分かった! 行こう! 手持ちの皆も悪いけど起こす! もしも『アイツ』が出現した
気配を感じ取れたなら正攻法とか言ってられないし!」

ジツクはヴィヴィを信じる!

信憑性が無く破綻した申し出。如何にヴィヴィが誠意を持って頭を下げても普通で
あれば「さっさと寝なさい」と……………

彼は言わない! 例え何も無くても『ヴィヴィと夜のお散歩出来るなら』とすら、都

合良く変換してしまえそうで！

もしもの中はして欲しくないけど——的中してしまったなら仲間が多ければ多いだ
けいい——

……数日前にハウエン警察本部から極秘かつ緊急の発令でジツクは任命され、受任し
たのだ。

『ハウエン地方いやつ、ポケモン界に計り知れない破壊と破滅を降り注ぐであろう異世
界からの『侵略者』の討伐、及び確保に協力して欲しい』

特例中の特例、何とジツクも尊敬している中年のマイスターにして数年前まで公式戦
での優勝経験が無かった無冠の帝王。

ハウゼン隊長から！ 直々に連絡を貰ってしまったのだっ！

警察でも無い訓練も受けてない一般トレーナーへ助けを求めている。

……政府機関の権限から強要しているのではないが、それだけ警察サイドも『自分達
だけでは……』と判断したのだろう。

ジツク以外にも今のところ数名承認してくれた一般トレーナーが居るらしい。

数え切れないハウエンに住まうトレーナーの中から、ジツクは過去の功績や手持ちと
の生活環境や育成レベルなどを調査——突発コンテストの影響もありされ選ばれた一
人になった訳である！

真に光栄、なのだが詳細を伺うに1vs100の状況であるに関わらず警察のエリート部隊を振り返り討ちにする恐るべき強さを秘めた謎のポケモンを従えているらしい………

(そんなポケモン相手に俺が……勝てるのか……?)

100匹の精鋭ポケモンを赤子の手を捻る様に振り返り討ちにするポケモンだ。

相手がフルメンバーの6匹ならまだ分かる、だがたったの1匹でしかも無傷で“全滅”の十字架を背負わせた存在。

着替え終わったジツクは皆をボールに戻しヴィヴィが強烈なエナジー反応を感知した。

『ミナモ民宿跡地』へと呂色の景色など眼中に無く、ヴィヴィを信じてVネットのシルエットは空虚へか、それとも一縷の光すら差し込まぬ奈落か。

手探りしていた将来の方向性、行動原理。

『自分は今後どうしたい』の断片を一つ——ヴィヴィと一緒に手に入れる夜は深更する。



「何処に消えた[Valestein]よ……」

漆黒の帳が下りしミナモシテイ南西。

港湾の所在を示し船との接触や暗礁への乗り上げを避ける目印の灯台。

……あの刻、七月と同じ場所に、同じ二人組！

Segment・hepta——【C】S】

「ステルス機能を発動させても住民が眠る深夜帯でもなければ迂闊に搜索も出来ぬ。三ヶ月近くも見つからぬとは何処の馬の骨かは知らぬがトレーナーか、若しくはポケモンセンターに保護されているのは確然であろう……」

「……………」

灯台から地面に降り立った。マンションの10階よりも高いがつま先から着水時に弾ける電子エフェクトを励起させその場でジャンプしただけと言い張れる、華麗な着地。

サイバネティックな紋様と16進コードを乱立させコートの内側と比較し、外側は人間として「あつてしかるべき」な鼻や口、目などの感覚器官を全て除外した『のつぺらぼう』が再び！

全身の筋肉が異常に発達、隆起しているバケモノに対して二回りは小さいと明言せざるを得ない右隣には奴の手持ち……？ であろうか？

無言のまま100人抜きを制した外界からの使者。

闇のロープで全身を覆い妖しく光る金色単眼を刻印している謎のポケモンは、有機生

命体から生じるエビデンスを軒並み推知出来ない。

彼らなのか、彼女らなのか、それとも性別なる概念が存在しないのか……二人組は休み無く跳躍を繰り返す目的地である廃墟に辿り着く。

ゴーストポケモンの住処であったが奇妙な事に残留物の散乱などは確認できた物の、外観も内装も錆びや劣化は見られない。

崩壊仕掛かっているのなら取り壊してしまえばいい、では何らかの理由で今なお放置されている？

もう誰も利用者など居ないのに……住民達は『ミナモ七不思議』の一つとして数えている。

「【Valestein】がどんなポケモンであるか、手がかりが一切無い。見つけ出すのは至難であるが……最悪、私達が【Valestein】の安否を確認出来ればそれで良いのだが」

音声加工機器を口元に仕込んでいるのか仮面の発声は聴く者を不愉快に、行き場の無い怒りを抱かせ振り向いても誰も居らず——だがずっと笑われている——負の感情をありがた迷惑に譲渡される。

「……………」

仮面が民宿の扉へ両手を突き出せば、スルリ……忍び込めぬ領域へ、肘までを扉と同

じ物質に適合させたかの如く滑り込ませ——

「……………」

「……………つ、ほう、ステルス機能を見破られるのは二回目だよ。デボンが開発したスキャナーと同一の性能、若しくはそれ以上の性能か……………フツ、偶然この場所へハイドロポンプを着弾させた訳ではあるまいよな少年？」

暗闇の中射撃された水爆流は惜しくも金色単眼に回避されたつ！

ナイトビジョンモードにチェンジさせれば赤外線検出すら反射する武装も透過し、みやぶるよりも明瞭な視界を作り上げたヴィヴィが位置を特定、指示に従えば確実に命中する……

であったのに、相手の攻撃感知速度は普通では無い！

奇襲に不意打ち数で押し切るなどのトレーナー道徳に反する行為なのは承知の上！

「エナジーの発生源です！ あの方達が……………」

「ツッ！ 黒衣の仮面と金色の……………単眼ローブ!!」

美学や善良たる規則などこの者達と会遇を果たせば無意味っ！

「私達の姿を捉えるとは賛辞の言葉を贈ってやろう。こちらからの提案だがお前達が動かず技を放たずであるなら、これでも忙しい身なので……………見逃してやるぞ？」

「……………」

警察からは『どの様な手段をも許可する』と本来ならばポケモン法に触れる外道な所業すら、あの黒衣の二人組に対しては躊躇無く実行せよと電話越しから重苦しい言葉で授かった。

……ハウゼン隊長も本当ならこんな手段を最も嫌うトレーナー。

しかしっ！ 惨状を報告され緊急会議を開いた上層部が決断を下したのだ。

仮面と単眼、生命の危機に陥れさえしなければ、バトルのルールは全て無視しろっ！
とにかく確保が最優先であるっ

(っ)……………うゝ!?! 睨まれてる訳でもないのに身体が動かなくなりそうだっ！ この威圧感を味わえば確かに……………！ ルールは守ってられないなっ！)

家を出る前の短い間で皆と『自分達が成すべき事』を要約した。

100匹ものポケモンを血祭りにしたポケモンが相手だ。

それをたつたの5匹でどうやって勝てば良いのか？

さらに追言すればあの仮面の所持ポケモンが金色単眼だけとは限らないのだ！

……もしも、アレと同等の戦闘力を備えた控えが5匹も残っているのだとすれば……
一体誰がヤツに勝てる？ ジックでも「物量作戦」しか思いつかない気が病みそうな

惨憺たる可能性。

諦めたくは無い、勝利出来るのなら抗ってやりたいのだが……………

「メタグロスにランターン、そしてトレーナーの目付き、勝てぬと分かっているのに死地に赴いたのか。……………穏便な解決が出来ると思ってくれるな？」

ヴィヴィの言っていた発信源がこの二人組だと確信出来る要素は何一つ無かったの
で、警察や協力要請を受任した他トレーナーへ連絡するのは迷惑かもしれないが、ジツ
クはヴィヴィを信じて皆で意見を纏める前に予め「奴を見つけた！」と一報しておいた。
警察が各トレーナーや部隊に拡散してくれたのでミナモ民宿跡地に集まってくれる
筈だ！

少しばかり時間が掛かる、だから自分達は援軍の到着まで時間を稼ぐ！ バトル中に
少しでもいいから漆黒のボールに隠された敵の詳細を明るみにする事！

「軽く屠ってやれ、《C・S》よっ！」

「ゴメンツ！ だけどっ……………！ いけっ！ ヴィヴィとメコン！ 俺達の役目を遂行さ
せるんだっ！」

「ハイッ！ あの方達を止めましょう！」

「警戒レベル最大っ、了解ですマスター！」

勝ち目の無いバトル……………いやっ、処刑なのに『絶対に勝ってやる！』と自らとマスター
の勇気を奮い立たす蒼と青の少女達。

奇しくもハウゼン隊長と同じ動勢となつてしまったジツク。

パソコンから他の手持ちやインフィスを引き出し、呼び出し、仲間達に協力願いをし
たかつたけどその時間も無い！

パソコン管理システムを作動させ転送システムから送られてくるまでに、若干のタイ
ムラグがある。

仮にジツクが仲間にした全てのポケモンを転送したとしてもヴィヴィのエナジー反
応は消えていただろう、足跡一つ残さずミナモから消え失せていたのだから！

「メコン、ほうでんっ！」

しかしネリは闇夜のレーンへ既に潜ませている。

モラルやルールを破つてでも奴を倒す——不可能であつても——か奴の足止めをす
ると皆で決めたのだ！

まだネリを繰り出している事を仮面とフードには気がつかれていない筈。

相手のタイプは鋼タイプ……確証は無いが、そうである可能性が高いとハウゼン隊長
から伺っているのです、有効打点がほぼ無い爽羽佳は隙を見つけて繰り出すつもりだ。

「殷雷の荊よっ！ てやあああっ！」

準備動作を必要としない利点がある物の、敵味方問わずに巻き込んでしまうコストが
あるほうでん。

まもると組み合わせたり交代で電気技が無効となるポケモンを繰り出す……被害を抑える方法は幾つかあるが――

「戻れヴィヴィ！」

正式なバトルであるなら『ジツクは反則負け』

ヴィヴィをモンスターボールへ戻す事で、まもるを使わせずほうでの射程圏内から逃がしたのだから。

「〃したたか〃な真似をするな少年よ」

何度も心の中で『手段は選んでられない』と復唱する！

現状では正攻法で馬鹿正直に挑んでも容易く返り討ちに合う、時間稼ぎすらままならない。

寧ろ決めてやったんだ、この一戦だけは自分が嫌う卑怯な戦法をありつたけ使い回してやると！

「もう一度いけつ、ヴィヴィ！」

この一戦だけは許してください……全知全能の創造神：アルセウスに懺悔しながらヴィヴィをリリース。

両腕を交差させ振り下げたメイドさんから、華奢ながら地表も空中も夜を上書きする大電流が青く迸る。

「確実に先手は貰ったのでダメージは入る、そして高い確率で麻痺を付与させる効果にも期待が——」

「ジツクさん！ お相手のポケモンは無傷ですッ！」

「あれだけの本数の電荊に覆われたのにつ！ そんな馬鹿なツ!!？」

麻痺……どころかノーダメージ！

「……………」

「防御の構えを取った素振りも無い、金色単眼はほうでんの中心地点に立ち尽くしてただけ。」

「警察に所属するデンリユウがかみなりを連発させても静電気すらロープに付着させる事も叶わなかった。」

「(ハウゼンさんは『もしかしたら電気を無効するタイプか特性を奴は所有している』って言うってたけど……………)」

「本当に『地面だけ』なのだろうか。」

「私のポケモンは頑丈でね……《C. S》ラスターカノン」

「反撃、ロープの内側から虚脱と絶望を与える白銀の閃光砲を2WAYに射出。」

「ヴィヴィはこうそくいどうで緊急回避、メコンには命中したが半減されるので一撃では倒れない。」

（だけど凄い威力だ！ 場の2匹が鋼タイプ半減で良かった……等倍なら一気に持って行かれるッ！）

（軽減しましたが過去に受けてきたどんなラスターカノンよりも発射速度や精度、純粋な破壊力までも凌駕していました！）

あの技だけで警察のポケモンの半数は駆逐されてしまった。

改めて思うのだ、2V S1かつ半減される技をやり過ごせただけ、なのに『お前は勝てない』と過程をすつ飛ばし結論だけを無理強いさせ従う様に押しつけてくる相手……むちゃくちゃだ！

「あの金色の瞳が光ったらマインドコントロールされる！ なるべく後方や側面から攻めるんだ！」

注意点など指折り挙げてられないが、ハウゼン隊長のポケモンすら傀儡にした精神操作術は残された味方やトレーナーにまで精神的苦痛を与える最悪の技。

繰り出されるまでに多少間があるかもしれない……妖しい動作を先読み指示して自由意志を縛り付ける術を、上手く回避させるしかない！

「精神操作はその2匹、メタグロスとランターンには効かないのだが……」

………？

仮面が浮ついたハイトーンから突拍子なく地表を擦るひねくれた音程に切り替わる、鳥肌が立ちそうなくらい不愉快なボイスで何かを呟いた？

瞳を見るな、我ながら理不尽な命令を出してしまっただけと任せて下さいとヴィヴィ、貴方に従いますとメコン。

ナノでもピコでもいいから仮面との交戦時間を可能な限り引き延ばす本質にブレは無し！

「ヴィヴィ！ アームハンマー！」

「……………!!」

安易に弱点……と思われるじしんは撃てない。初戦で警察が検出した数少ない情報ででんじふゆうを使用出来ると聞いたからだ。

心苦しいけどもう放つ際にはメコンをゲットバックし対象認識させないとして……じゆうりよくを発動させればでんじふゆうも使えなくなるが、ヴィヴィの小柄から生み出される機動力を損なわせたり爽羽佳の飛行性能を埋没させたりとリスクが高いので、こちら迂闊に使わせる事は出来ないのだ。

（手応えが……全くありませんでしたマスター!?!）

（なんでッ、鋼タイプなのにアームハンマーが効かないのかッ!?!）

後頭部のジェットを全開で拭かし万有引力の次元軸すら超過する加速度を全身に受けたヴィヴィがその一槌の元に粉碎する、巨人の片手を振り捌く！

……………ダメージは……入っていない！

どういう事だ……いよいよもってジツクは困惑しそうだ、電気技に引き続いて格闘技も無力化されてしまったのだから。

「きゃんッ！」

「くぐうー！ ああッー！」

2秒3秒の思考時間にも、相手は2匹を捻り倒そうと攻めも守りも緩めてくれない！
何かの武器を前方のヴィヴィへ一閃、ダメージを与えた衝撃で飛び移る様にメコンの側面へ侵入し十字型に武器を描かせる。

かなりのダメージを負った、その黒く輝き遺る斬跡は敵ながら靈妙な哭り静け夜の海を光らせる月光の様な美しさ……

鋼タイプ……ではないのか？

強敵だからこそ色々試し勝ち筋を探る、だが金色単眼は『バケモノ』

色々試すのは逆に敗北を早める近道となってしまうかもしれないが『相手は鋼ではない』の前提で立ち回ってみようと、ジツクは念話でヴィヴィへ伝えた。

ヴィヴィがサイコネシスをぶつけても、メコンがみずでつぼうを確実に命中させても、奴は1の被害も受けてない。

まるで常時『まもる』を使われているみたいだ……

自分が知らない新種のポケモン？ 特性？ アイテム？

「お留守の刻か——追撃せよ《C. S》！」

原理は不明だが2匹の技が効かないのなら、奴に通じる技を片っ端から試してタイプだけでも特定しなければ！

メコンを交代させようとダイブボールを掲げリリース……………の瞬間を狙って《C. S》と呼ばれるポケモンがワープした！

「きやう!? アアアアツツ！ だい、じょうぶですジツクさん……………！ しかしHPが大幅に……………」

交代間際の無防備となるモーメント、自己防衛も行えない刹那に滑り込んで大ダメージを与えてくるなんて……………！

ジツクがボールを取り出してから指示を下すまでの僅かな間での判断力、それを実行させ成功させてしまう敏腕な処理能力。

トレーナーとポケモン、どちらも桁外れな強さ！

「めのまえが まっくら になりそう……………だけど、まだ全滅してない！ やるつきやないのだ！」

Segment・hepta——蒼と冥

「何なの……あのポケモン……ありやヤバいって出会った中でも最強じゃん！ 私がボールから完全に出てくる前にでんじふゆう……指示するとか頭イッてるよあのトレーナーも………」

爽羽佳が出現と同時にドリルライナーを、ヴィヴィはじしんを！

これが鋼タイプならば効果は抜群となり希望が持てるダメージになるかもしれない。《C・S》を鋼と仮解釈しての最後の立ち回りは、成果を出すまでもなく空振りに終わる。

（読まれていた、わたしと爽羽佳さんの並びでじしんを使うと察して……）

（勘が冴え過ぎちやつてリアルエスパーパーなんじゃない、あのトレーナー……）

どちらも隙を最小限に留めながらラスターカノンを四方へ散乱し、躲したけどトレーナーとしてポケモンとして、力量差を直接見せ示されたただけだ。

ジツクは一つの仮説を立てた。

『ラスターカノンを連発させているのは自身のタイプを鋼と思わせる手段なのでは？ 本当の弱点から遠ざける誤認識法なのかもしれない』

(だけどあの威力……タイプ一致しているとしか考えられない……どっちだ、タイプすら不明の相手とあの子達はやり合っているんだぞっ!)

迷っている時間はないっ、その仮説を信じてくれたヴィヴィヘラスターカノンを指示する!

毒を持つて毒を制す、そんな諺に因るのなら、相手は鋼が逆に苦手”かもしれない。

判断材料があまりに少ないのでどうしても当て推量に任せてしまう!

「ラスターカノンッ!」

「《C・S》にその技を撃つとは面白い、同じ技でねじ伏せてやれ!」

仮面の裏側で笑っている、白銀と白銀のビームが激突するが集中させ注げられたエネルギー量は明らかに《C・S》が上回っているからだ。

「うゝあ、ああ! くうゝぐゝッ!!」

「……………」

押し負けるっ! 宿す質量はこれ以上増やせないのにつ!

同じ技なのだからベースとなる威力も同じ。

なのに一方的にエネルギー波が飲まれているのは相手の方が格段とレベルが高く、純然たる戦闘力差を再び魅せられてしまっている。

耐える事は出来るかもしれない、けど、体勢を立て直すまで棒立ちしてくれる優しい

相手じゃない！ このビームが切れ飛んだ瞬間に急接近され再起不能にさせられる！

「ヴィヴィー——！」

「ふんっ、愚かだな……！」

仮面達も長々と遊んでやる義理はないので、高装甲の少女を葬ったら残りのオニドリルと——こちらの隙を伺っている屋根の裏に隠れたマニユーラ——も見逃さず倒して逃走するつもりだ。

「ヴィヴィちゃんっ！」

叫んでも祈っても現状は変えられない。

微細量でもいいから敵の詳細を得る目的すら果たせられなかつたら……

タイプは不明のまま逃走を許してしまつたら“やられ損”

ヴィヴィは気概してこの一戦の基盤を揺るがさず、自分が金色単眼を引きつけている間に爽羽佳に攻撃させて欲しいと、アクセス中の彼の心境が伝わる中で——

「……色がっ!?! ラスターカノンの色が変化し——!?!」

「……………!?!」

衝突していた白銀と白銀が

「蒼色のラスターカノンに！」

「黒っ……………いや！ 冥色のラスターだどっ!?!」

ヴィヴィとジツク、仮面と金色単眼は、何が起こったのか理解が出来なかった。頭が理解を拒む内容であったからだ。

技の色彩や形状は使い手によって様々な種類を得るとは判明されているが——
 (途中で変わるなんて聞いたこと無いッ！ 強いラスターカノン同士だから？ 爆発するっ、ヴィヴィ!!?)

(むっ……………!!)

押し切られる直前での色彩変異。

白銀から蒼に、白銀から冥に。

時が止まったかに思えた数秒間、急所への命中を覚悟していたヴィヴィはダメージを受けてないどころかラスター同士が拮抗を起こす。

ッ……………ッ——

蒼と冥が照射した光束が民宿近辺を焦土させ兼ねないまでの爆発。重なり合った衝撃波で上空の爽羽佳も、屋根の裏側に潜んでいたネリも、身を投げ出されて地面に落下するが——

「……………仮面がっ……………!」

(ヴィヴィの瞳が……………蒼色になってる……………??)

当事者のトレーナー2人とラスターカノンを放ち終わった2匹は無傷で膠着——無傷でないのは1人だけであつた!

「反作用か? ……それとも共鳴か? ……! そうかつ、そうリプレイスするのならば? ……!」

のつぺらぼうだつた仮面は蒼と冥の煙が収まれば左側面のみ、口元を晒す全体の1/4が砕けており辛うじて声帯変更機器の効力は失っていないが、先程よりも機械的な精神を逆なでる異界な音調は途切れつつあつた……………

「お前、メタグロス……………お前は「Valestein」なのか……………?」

欠けた仮面を掌で覆いながらも片腕で爆発を引き起こし仮面——あらゆる攻撃をシャットダウンさせ人間もポケモンも触れる事すら許されない、異空間の技術を解析し設計——を半壊させたメタグロスを指刺す。

数的不利だろうが余裕の態度を動かさなかつた仮面が、変声機を使用してもハッキリ分かる……………

変わらず仮面は抑えたままだが、指先から振るえており相当な驚倒で何歩か無自覚のまま後ずさりしてしまつている。

別の人格と入れ替わつてしまつたのか、あれだけの余裕を途端に失つてしまつた理由

は仮面が砕けただけではない。

（待てっ、なんであの仮面ヴィヴィが唯一覚えていた[Valestein]を知っているんだッ!）

分らない事だらけだが深紅から蒼の瞳に変化しているヴィヴィを見るのは、あの刻——ザムヤードとトラヴィスへ明確な「怒り」の感情をぶつけた——以来で初めてではない。

あの刻は「蒼いシルエットが彼女の表情に重なったから」と、視覚の錯覚に近いと自己完結させてしまったが今回は違うッ!

「……………[Valestein]……………その名称をわたしは知っています。何故貴女達がご存じなのか、気になりますますが今のわたしはメタグロスでもなければ[Valestein]でもありませんっ、マスターが付けてくださった《ヴィヴィ》というニックネームがありますっ……………!」

アルカイックな古代文明の遺物の様で、無限の動力機関となり得る肅然と、されど命を与えられた彼女は——海の中で息をする。

コーンフラワーよりもずっと美しい、密度の濃く凝縮された「蒼」はジックも驚く程の光彩を放ち、星屑一つ無かつた夜空から流れ落ちた蒼き恒星にはまたしても目を奪い離さない。

「ヴィヴィ……………！」

(……………ボーツとしニヤはいでっ……………動きがとまっひや、今の内にしじをくらニヤはイ……………まふひやー)

信じられない程の輝きを持つ蒼い瞳で黒衣の二人組を射竦める様になっているヴィヴィが、念話で囁みまくりながら『今がチャンス』と瞳に気を取られているのを良い事に、頬を少し早めの紅葉狩りの告知と主張させんばかりに昂揚させている。

ジツクにだけはバレバレなだけど……………自分が与えた『ニツクネーム』を心から大事にしているヴィヴィのセリフに彼は交戦中だと言うのに感動していた！

「……………！」

「そうかつ、お前が【V a l e s t e i n】なのかつ……………！ その少年を“おや”としてIDも登録しているのかつ……………！」

情緒が不安定になったのか、またしても突然ケタケタ笑い出し爆発に巻き込まれてもノーダメージだった金色単眼へ視線を送る。

すると……………

「戦う理由が無くなった、お前達は見逃してやろう……………いいマスターを持ったのだな——」

「はっ……………!?!」

「……………ッ！ 待ちなさッ——！」

事態が急展開過ぎてヴィヴィもジツクもついて行けてない。

圧倒的な力を見せて不利な戦況をも簡単に払い倒していた金色単眼は、ラスターカノンを激突させてからヴィヴィへ攻撃を仕掛けなくなった。

爆発が止むまでの間でも、あの戦闘力を考えたならそのまま突っ込んでヴィヴィを倒してしまう事は出来た筈。

「けむりだまかッ！ げほえほッ！ くうアア！ 目が霞む！ 爽羽佳、きりばらいを頼むゴホッ！」

「ッ……………！ 逃走を……………許してしまいましたっ……………！ もう半径1km圏内にあの2人組は存在しません、信号が消滅しました……………！」

如何なる状況下でもクリアな視界を確保するヴィヴィが、けむりだまを発動させた仮面達へ蒼いラスターカノンを発射するも、少しばかり隙を作れる手段があれば相手はそれで良かった。

きりばらいは終了したが煙を散らす事が手品成立の条件だったとでも、奴らは遠くでせせら笑っているかもしれない。

全滅はしなかったけど警察や協力者達が集うまで、ジツク達は奴らを食い止める事は出来なかった！

結局金色単眼のタイプも、他に所有している技も、何も分からないまま取り逃した

………
「……………」

ジツクや爽羽佳よりも悔しがっているのはヴィヴィだった。

装備した手甲で無言のまま地面を殴りつける！ 地面があのだと言ひ張つてしまいたいくらいにもう一発地砕きを起こす！

（フツーー！ ううううツくくく！……………凶悪なポケモンとトレーナーを……くう！ フツ、うううう……………マスターを勝たせてあげる……………出来なかった……………！
そつ、そつちの方が……………わたしにとつては……………）

ヴィヴィがどれだけ無感情で強さを得る事とチーズドッグの事だけを考えて稼働していたのか、爽羽佳は近くで見えてきたから語れるだけの思い出が在る。

少女ではなく「只のロボット」だった彼女が、マスターの役に立てなかつたから悔しがっている。

出会つた当初から何事にも動じないクールな子……………かと思えば、バトルで負けたら——クールな姿こそ偽りなのかと疑う——感情を露わにする事もあつたが、それは『強さへのプロセスを構築できず目標達成指標が満たせない』のだと筋の通つた解釈出来たが今は絶対に違う……………

「ヴィヴィ、その瞳……………あつ、アレ……………？ 深紅に戻ってる……………？？」

「……………んっ、わたしにも分かりましたよマスター、瞳が蒼く染まっていたと」

ジツクが駆け寄ってきて両肩を持ちながら大丈夫だったと瞳を覗きながら言っているが……………距離が近すぎてヴィヴィは、自分が開けてしまった穴ボコに顔を向けてしまう。

マツサージで心の距離は確実に縮まったけど、多分爽羽佳が居たから『ひじょく々に残念そうな想いになりながら』の決断だったのかもしれない！

「瞳の色が変わる現象……………調べてみるか……………条件があるのかな……………？ んっ……………そうだつ、ヴィヴィも爽羽佳も聞こえたかもしれないけど……………」

「あつ！ あのローブの奴の事だよ！ 意外だったよ……………てか、アイツ喋れたんだね……………」

「ハイッ、確かに聞こえましたね、仮面が割れる直前……………結構可愛らしい声質でした。あのローブのポケモンは『性別が♀』なのかもしれません……………」

ツ……………ツ……………

何かを叫ぼうとした、呼吸をしているのかも不明瞭なローブのポケモノ。

あの状況から推測するに主人である仮面が爆発に巻き込まれてしまった不測の事態に、取り繕うことを忘れて『仮面の名』を叫ぼうとしてしまった……のかもしれない。

何も得られる物が無かった、いや、あれこそ“かなり有益な示唆”なのでは!?

(主人なのか、単なる目的の為に手を組んだ仲間なのか、それは不明だけどあの金色単眼にも“心”があつたんだ)

発語しようとしただけじゃない主人か——それか仲間——へヴィヴィに背を向けるなど知った事かと、猛烈な速度で仮面の隣まで向かつていた。

仮面は碎けるわ、危うく名を発する瞬間だったわで、戦闘とは別の面でピンチになっていたのかもしれない。

(取り逃してしまいました………あの方達とはまた対峙する……わたしの中の何かがそう告げるのです………っ)

光を遮る暗幕の現し世、あの二人組は姿を溶け込ませてしまったけど再び相見える。

蒼色となったラストアカノンを新しい武器としたヴィヴィは、握る拳を緩めながら変色に至ったルーツを検索し始めた。

(………あー、そろそろネリちゃん出て来てもいいのかニヤ? 空気読んで出てきて

ニヤいけど、今回全然活躍してニヤ〜ね……………次回こそネリちゃんの主役に返り咲いてやるニヤ！ マニコハハハツ……………)

シリアスなムードだからその場に居るだけでコミカルコメディを作り上げてしまう黒猫娘は、結び目が解けても『何故か落ちないビキニ』のズレを直しながらジツクらの元へ戻るタイミングを狙っている。

一応突っ込んでおくとなりは主役ではない。しかし盗賊らしく出番も盗んでやろうと積載量よりも少しオーバーな“たわわ”を腕に載っけながら、次のバトルは絶対出陣&先発予約のツバを付ける為にご主人を誘惑してやろうと悪知恵を發揮させている！

あのロープが鋼タイプでも自分が出れば倒せたのに……………相変わらず身体はチビでも口先はおっぱいよりもデカイネリの、無駄に強靱な自信は時として見習うべき物だったりする。

Segment・hepta——氣持ちは伝わる確實

に

黒衣の二人組との交戦から一夜明けた昼食の時間。

ジツクハウスのキッチンでは2時間も前から新たな試みが行われており、まだ本人は納得していないけど……時間なのでテーブルに置いてみるしかない。

「マスター………こ、これっ、わたしが作ってみました………チャールハン？　だと想います………食べてみてください………」

語尾に自分から？　を付けたり、自分で作ったのに地球外の食事を取り寄せたかの誇りや自尊心の見られないヴィヴィの発言要因は『メコンに教わりながら初めての料理を作ってみた』

溝の様な線が迷路のを描き丁度ヴィヴィの心臓——動力コア——に位置する部分がゴールとなり、蒼いグリッドが点滅するエフェクトを刺繍したエプロンはミナモデパート開店と共にダッシュで購入して来たらしい。

Fカップなので『バインツ！』と自信無いのに胸を突起させてしまうから、到達すべきゴール地点は直ぐにロックオンされる事となる。

「見た目はそのつ……………メコンさんには遠く及びません……………不格好です、美しくもないです……………でっ、でもっ！ あじ、味は……………！ なんとか……………食べれる……………様にかんば……………つもり……………す……………」

卵をメインとした食材入れて、ご飯を入れて、炒めるだけ！

誰でも手軽に作れて美味しい中華料理のチャーハン。

それでも初めてフライパンを握ったので握力調節を——恐らく気合いが入りすぎて——ミスリ持ち手を折ってしまったり、卵を割るのも初めてだらけで殻を入れてしまったり、2時間で何度失敗してしまっただ事か。

卵、青葱、豚肉、極力素材を減らし初心者用のレシピでもヴィヴィは大苦戦。メコンが傍でアシストしようとするも『自分の力だけでやってみたいです！』と、瞳の深紅が頬に少しだけ落とし込まれたのかIHヒーターよりも加熱させながらカチャカチャ、お玉を教わった通りに動かしていた。

（私は口頭でお伝えして1回だけお手本を作っただけです。食材を切ったのもヴィヴィさんが全て行いました。大丈夫です、貴女の真心はジツクさんに伝わっておりますよ！ だって——）

盛り付けだけは寸法を計算しピンセットまで使って一粒一粒積み上げた。

それでも食材の大きさがバラバラであったり、豚肉の一部を焦がしてしまったり、精

密に積み上げようがあまり食欲を誘われる外形ではない。

「……………」

（あ……………『マズイ』って言われちゃうのかなつ……………メコンさんの方がずっと美味しいですもんね……………同じ食材と作り方なのに……………引き立て役にもわたしはなれませんでした……………ツ）

ジツクの料理だけはヴィヴィが作ると予め伝えておいた。

レンゲを掴む前に言おうとした事、あつたけど口にしてから言うって変更した。

（やだなあ……………マスターに嫌われたら……………メコンさんのお料理食べられると思っていたらわたしのお料理出て来たんですもん……………マスターの楽しみを1つ減らしてしまった……………承知の上でしたがお料理……………難しくって……………何で出来ないんだろう……………）

平静を装えない、右を向いたり下を向いたり、挙動不審にジツクの隣に座っているヴィヴィは酷く不安な気持ちで感想を心待ちにしている———けど聴きたくないとも思っている。

クアッドブレインが正常に機能しない、もし不味いと言われて怒られたら……………何でこんな仕事を奪う様な振る舞いをしてしまった。喧嘩はしてないけどメコンには謝った、次はメコンには『仕事を奪った！』と嫌われてしまうかもしれない。

笑顔で手料理を教えていたのだから嫌われる訳が無いのに、ネガティブな思想ばかり

生み出されていく。

(マスターにもメコンさんにも嫌われたくない、嫌だ嫌だ嫌だ嫌われるのヤダヤダヤダヤダ——)

強くなる、それだけが行動理論だった少女。

他人にどんな想いを抱かれても、感受するに値する出来事ではないと我を崩さなかつた少女が他人に嫌われる事を酷く恐れている。

「……………ヴィヴィー！　美味しいよつ！　濃い味付け俺は好き！　箸が、いやレンゲが進んじやうからさあ、一皿だけじゃ足りないや！　おかわり欲しいな、作ってくれろ？」

「~~~~~!! (ああ……………やったあ……………!) えうツ!!? えうゝ あゝ ああツ……………しよしよしよ、しようがないマスターですなつ、プシユツ、シユシユツ……………つつつ、次も味の保証はしませんので、目覚めたら病院のベッドでもわたしはしえき、責任取らなひエン！」

焦げが混ざっているので彩りは……ヴィヴィーの予想を裏切り、ジツクには『黒が入っているから引き締まって見える』と願ってもない嬉しい感想を頂いてしまつて、皿ごと口に付けて食べるちよつとお行儀の悪い彼へ。

また不要な毒言葉を付け足してしまふけどツインテールから煙が上がっているわ、隠

すのも忘れてすつつつごく口輪筋をピクらせているので喜んでるヴィヴィをちゃんと知って貰えている！

(見栄えはまあ、あんまり褒められニヤいけど味の方は結構なモンニヤあ！ 女よりも男が好きそうな味〜♪)

「初めてでこんなに出て来たのは凄いやヴィヴィちゃん！ 見た目で落ち込んでそうだけど、いっぱい作れば自然と覚えてくれるつ〜！ ヴィヴィちゃんは納得してないかもだけどご主人は嬉しそうだよお〜？」

「ミノホツ、ミノツホー！ ミノミノツ♪」

同じ食材、同じ手順でおかわりの作成。

やっぱり要素要素で失敗はあったけど、ネリが（心の中だけで）命名した『ごり押しライス』は焦がし醤油風味になっているからヴィヴィは味と見た目の追求だけで気がつかなかった様だが、鉄鍋に垂らされた『じゅっ〜』と鼻を塞いでも食欲を旺盛にさせてくる『音』 蒸発と同時にリビングへ伝搬する香り、そして黄金2、焦げ1の比率が見ようによっては『暗闇を割って出てくる光』っぽくて、厨二心を撥られる！……………と、悪タイプの彼女は心の中で料理漫画のやたらリアクションが大きい審査員並のコメントを残していた。

ドジっ娘属性はコンテスト限定だったから、砂糖と塩を間違えたり最後の最後で

ひっくり返すヴィヴィではない。

(マスターの好む味付け……………メコンさんからリサーチしておいて良かったあ……………！)

実は花嫁修業の一環として『薬膳料理を作れたりする』爽羽佳。

ヴィヴィがどれだけ頭が良くても、完璧を求めたつて初めてなのだから失敗は恥ずかしい事ではない。ご主人はちゃんと食べてくれたから大成功と、後ろからヴィヴィを抱きしめ褒めちぎる！

今回は「偶然」上手く出来ただけかもしれないけど、それだつていいじゃない。

「偶然」の重なり合いで世の中は成り立っているのだから！ ヴィヴィとジツクの出逢いだつて……………

ヴィヴィよりも謎がミノを呼ぶ、かたくりこだつて『見た目は30点だけど味は……………91点だなっ！』と料理の評価にヤシビアな彼だつて、合格のフリップを掲げてくれている！

空気読めやとドリル娘にポイ捨てされなかつたのは、彼の言語(ミノ語?)を皆はイマイチ理解が出来ないからだセーフ！

「明日の昼飯もお願ひしい? ヴィヴィの料理をもつと食べたいな!」

「……………ハイツ、いいですよ……………マスターが喜んでくれるなら

………」

お世話になりっぱなしのメコンからは無言で『ジツクさん専属の料理人になっちゃいますか?』と冗談なのか真剣なのか、彼女にしては曖昧な語調であったが紛れもなくヴィヴィの初料理は大成功だと、尾をフリフリさせながら微笑んでくれた。

(わたしでも……マスターに喜んで貰う……出来たんだ………)

メコンの料理を食べている彼を見て『自分も作って彼に喜んで貰いたい』から始まって、実家の件で嫉妬してからは『やっぱり料理なんて……』と実行には移さず仕舞いでフェードアウトするかもしれなかったけど――

(わたしが欲しかった言葉、マスター………いっばいくれる………)

心も身体も、自分が知らない艶っぽい声を発してしまいうくらいに気持ちの良かったマッサージの『御礼の御礼』と言う建前で急遽、お料理思想を立て直したけど………作ってみて良かった。

コアが暖かい、点滅を繰り返して構成物質の循環伝送速度がハイとなり、処理と解説が極めて困難なソースコードを感受していく。

彼が食べる瞬間、嚙下の瞬間、聴きたかったセリフを述べた瞬間、全てメモリに刻ませて貰った………

彼との絆を確実に深めていくヴィヴィは論理の通用しない“気持ち”に困惑しながら

ら、
次のフェーズへ以降させていく——なつきどが
あがった！

Segment・octa——エニグマニティ・トラベラー

神無月の季節、仲秋にはアウターやインナー、1枚多く重ねても「もう1枚あった方が良かった!」と、予告も無しに吹き抜ける突風へ恨み言を連なりながら両手を擦れば、先月では無色透明だった吐息が、新雪色にフライングする。

——ネりに引き続きまして、今回は爽羽佳のバイト風景を窺う!——
運び屋、その情調からダイナマイトやら、麻薬やら大麻などを密輸・取引する、ヤベエ裏職………ではなくつ、空の経路を担当する宅配便である。

陸地ではトラックやバイクでも、まだ代替出来るのだが空中は一件ごとにヘリコプターだのを使うのはコストや騒音やスペース的な問題があるので、信号を始めとした進行を阻む物が陸地と比べて、格段に少ないので飛行や浮遊能力を持つポケモンが、面接に来ればそれだけで「明日から来れる?」と声がけされるのは珍しくは無い。需要があるのだ。

天候の影響を陸地よりも受けやすかったり、メリットだらけでは無いけれど、オニドリル種は大昔から存在と生息が確認されており、人間との距離が近いポケモンの1匹。

図鑑の説明文章は言い伝えそのまま、スタミナを活かし一日中運搬作業の手伝いをしていた。

「だからオニドリルな私にや、天職だろーなと思つてさく♪ ホイツ、とくちやくですす！」

萌えコンテストを境にどの依頼から受諾しようか……？

メコンが明朝カーテンを開ける度、メッセージボックスには確認してるだけで昼食間際となつてしまふ量が送られて来るので、最初は迷惑メールかと思つてしまった。が、どれも彼の実力や手持ちの実力——あと可愛さとか色々——ひっくるめて求められているのだ。

とつても嬉しいのだが、返信対応がとても追いつかないので、暫くは依頼受注を中止せざるを得なくなつた。

ホームページを立ち上げ当時は、どんな小さい頼み事でも来て欲しいと、寝る前にお祈りしていたくらいなのに！

もうネリや爽羽佳がバイトをしなくても、余裕で養つていける収入源を作れてしまつたが、彼女らはタダ寝食いするつもりなし。

人化すれば絶対働く、そんな労働法は無い。

けれど本来の姿だろうか、人化しようが、宅配した住居人から感謝の言葉を贈られた

際に、しみじみと……ちよつと潤つと……右眼は隠れたままだから誤魔化しながら『仕事していて良かったな!』と『ありがとうございます!』と返答出来る人化ならではの悦びを感じたのだ。

バトル時ではない日常での飛行法、ゆつたり羽を動かしながら降下したのは、120番道路と121番道路の中軸。

小高な丘には特殊なマグマから『王』が創りあげた人形、または分身の1匹とされる“くろがねポケモン”が眠る……とは古の書物には残されているが……

周辺を毎日バターになるつて程、グルグル散策している遺跡マニアのおじさんは、虫眼鏡を使って埃も逃してないけど「それにしては遺跡への入り口が見当たらない」と、近頃は諦めムード。

「今日は雨降つてないや。この辺りは天候変化が激しいからなあ」意味深なまでの配置、6つの巨石に囲まれているこだいづか。

目録の様な文字列を刻んだ石碑が、埋め込まれており一応解説には成功しているが、研究者が刻まれた内容を実行しても、何も変化が見られなかった。

なので愉快犯の悪戯として収束されてしまった。

爽羽佳の両腕には、肩幅サイズの立方体、トークバラエティ番組で転がされているデカイサイコロと似た形。

この箱に入った荷物を、こだいづか——の後方に作られた洞窟へと配達するのが受け持ったお仕事。

運搬出来る重さは『大きい土煙が上がらないくらいまで』

「イヨヨカのじつちやくん！ 運び屋です！ 大丈夫？ 倒れてなくい？ 吐血してなくい？ ギックリ腰の調子は？」

「おお、爽羽佳ちゃん、重たい荷物をわざわざありがとグベボアア……………!!……………大丈夫じゃ、今朝食べたチュベ・デ・カマロネス（唐辛子・エビ・ご飯を入れて煮込んだチャウダー）が胃袋に残っていたんじゃゲボハアア……………はあ、はあ……………これは本当の血じゃ……………いやあ、歳を取るとサイコパワーも上手く使えなくなつてのお……………」

ライダースーツ寒くないの？

そんな質問されるけど、この時期になつたら防寒対策として保温性に優れた体幹を守り、携帯カイロを内側ポケットに仕込めるバリアインナーを、スーツ下に採用しなければ機動力は激減しストロブを抱きしめながらじゃないと、一日中休み無く飛び続けるなど叶いやしない。

単純に『ヘソ付近までジッパー下ろすのやめりやいい』だけであるが、それでは彼女が納得しないのでジックが、爽羽佳用にフルオーダーメイド、それが仕事着としても着

用済みのコレだ！

(こんな事思うのは失礼だけど、毎日が命のクライマックス状態だからなあじつちゃん……) “おくりのいずみに片羽突っ込んでる” って言ってたけどさ……)

太陽の動きの変化から地球の自転変化を見極め、未来予知をするポケモンであるが、未来の変化を望まないのも何もしない。

ハイライトの光らない、空虚で真理すらその目で判別してしまえる瞳。先住民の紋章の様な刺繍が入った羽織り物——ちゃんちゃんこ——の腹部には、第三、第四の瞳を浮かび上がらせた腹巻きを着けている老身は、常に、小刻みに、プルプルプルプル……

寒いのではなくて、臨界点を達し続けているパロメーター。

毎秒『ご臨終してもおかしくない』200歳まで数えたけど、現在の年齢は忘れてしまった。

せいれいポケモンのネイティオ、ニックネーム——昔におやが居たのか、自ら付けたのかも忘れた——《イヨヨカ》

「じつちゃん、杖忘れてるよ、玄関口に置きっぱなし」

「そうじゃったわい、何か手が震えていると思つていたんじゃ……………よっこいせえ」
杖を持てば手の震えは収まるけど両脚の震えは現在進行形で累加してしまつている。
あんまり意味が無いのでは……………

能力値が控えめなのは、常に過去と未来を視続けているからで、『視る』のを止めれば
エスパ―随一、それこそ伝説に肩を並べられる力を発揮できるのかもしれないと、学問
的考察を持ち寄られる事がある。

「悪いのお爽羽佳ちゃん、家の中まで運んでくれてのお。身体も衰えればサイコパワー
まで衰える、長寿でも老いはある、それが早いか遅いか、自然理じゃよ」

彼は周辺に住む子供達の、遊び相手になつてあげており、子供達のポケモンでは勝て
ない野生が飛び出して来たたら、化石ポケモンに近いベクトルで残存している枯体を、ス
イーブピンタし、10匹だろうが30匹だろうが、草むらごと空間転移させてしまう強
烈な超能力、その一端を使用し助け出す……………のであるが、力を使えば必ず『ギツク
り腰になつてしまう』

一回技を使用するのが限界、常にPPが1でわるあがきの代わりにギツクリ腰。

「技が使えなくなつたら、いよいよワシも冥府の神の元へ流れ逝くんじやろうなグボ
ハアアア!!!……………はあ、はあ、いつ、今のは血……………と見せかけて絵の具じゃ！ ビツ
クリしたかの？」

「ちよつとオ!? そういふ笑えないジョークは止めてよじつちゃん!! この間絵の具を配達したけど、こんなのを使う為だったのおー!? まったくもー! おちやめー!」

「のほほつ、余裕があるつて事じゃ! 昨日は冥府が『視えた』んじやがお、朝起きたら遠ざかってたわい。まるでワシに来られるのが嫌な……グプツツ、あつ、これは本当の血じゃ……」

洞窟内の何ヶ所かには『吐血した跡の血池』が在ったりするから、ホラー映画のポスター背景として無修正のまま採用出来る。初見では何事かと、口元が血だらけの彼を見て料金を受け取らず飛び逃げしてしまったけど、じつちゃんは、正常なコンディションです、HPは満タンです、メビウスの輪です。

「c o t x y b y i a o q h f e 3 l t @ s 4 b @ x @ e j r d @ Z a ☒ y j q
s : z d q k ?」 そわかさん、こんにちは。たくはいありますがとうございます、じつ
ちゃんまたとけつしたの?

*お使用の画面は正常です

ヒユツ、トンツ、爽羽佳が現住所に入っていく後ろ姿を見つけ、サイケデリックかつ
 デイープトーン、勁烈に主張を示すカラフルな翼は、樹状に分裂したと連想してしまう
 細々さ。

そんな翼………？ で飛べるのか、不安になってしまいそうだが、彼女はこの洞窟
 に住み着いてから毎日、ホウエンの何処かで占い師として活動しており、その翼………？
 こそが交通手段だ。

とりもどきポケモン、彼女が喋れる日本語はたったの2つだけ、その1つが自分の名
 である——

「O q d k u ; j 5 f 《トロン》 w @ r t @ / y k ; j 5 k n u x j 6 | @ 5 w h ; q o
 4 ; d e w @ r ♪」わたしのなまえはトロンです。がめんのまえのみなさん、おぼえて
 くれたらうれしいです♪

通称『トロン語』を操るこの褐色肌の少女、遠くの地方から迷い込んできたとは、古
 代語を翻訳・解読出来るイヨヨカのじっちゃんでも、思案と解読に暮れ、最終的に身振
 り素振りに、情緒などを『フィーリングで察するしか無い』と、解読者としては匙投げ
 な回答になってしまったのだが。

(トロンの言葉はワシにもせうんぜん解き明かせないんじや。シンボラーとネイティ
 オって、雰囲気とか色彩が似ているじやろ？ だから他の者よりかは通じ合えている

……
気がする、
それだけじゃ)

Segment・octa——エキゾチックな語り手

国籍は一体何処なのか、日本語の喋れない外国人さんがハウエンに辿り着いただけで、彼女の母国やら母屋やらでは、あの言語が標準なハズ。

こちら側、爽羽佳やイヨヨカのじっちゃん、占いのお客さんなどの言葉はちゃんとホロンには伝わっているの、彼女自身はハウエンでの生活に不満や不安を抱いていないらしい。

「3sw@6c4d@r.9」あとでおそうじするね

イヨヨカのじっちゃん、ピンポン球サイズの血塊を吐き出しても『後でお掃除するね』で済んでしまっているのだから、トロンも彼との暮らしに馴染んでいる、馴染みすぎて親子と勘違いされる……

(ワシは200歳以上、トロンは17歳(だと思ふ)だから、親子にしちや離れすぎてるがのお。ひいひいひいひいひいおじいちゃん、くらいかのお！)

「d@Za#y rgy」じっちゃん すきー♪

言語が謎なだけで語調や音色、身体を使って表現すればなんとなく、ハウエン側の方々にもトロンの意思は伝わってくる。

彼女はじつちゃんに抱きついて、引つ付いて、頬をスリスリさせるくらい懐いている。篠突く雨の日に、こだいづかの裏側で雨宿りしていたら、じつちゃんに保護されそのままお世話になって一ヶ月。

爽羽佳が運んだサイコロボックスは、トロンが必要としていた雑貨類の追加分だ。さて……そろそろ彼女の形貌を開示しよう。

最初に言っておくと、葵の歌姫と互角、人によつてはこちらの方が『エロい!』

ふくらはぎまで届く、黒髪ロングヘアは彼女の奇つ怪な翼の赤、黄、青、全て原色の信号機を、インナーカラーにも採用している! 知覚体験領域に墜とし込まれた、とつゝてもアンダーグラウンドな集中線にも見える。

本来の姿の下肢が、シルエットとなったピラミッド型のイヤリングや、ドロップ型のヘアバンドを眉の近くで巻いている。先住民族を彷彿とさせる装飾品は、恐らく彼女の母星だか母国では一般的……なのだろう?

「x e b f 「O ー w @ n 5 w j r 9」 さいこばわーでみえますよ

本来の姿はまん丸な一つ目である。しかし、人化した彼女の素顔は誰も見たことがない。

何故かって、一つ目の意匠を凝らした天然繊維布で、『常時セルフ目隠しプレイしているからだ』

隠す理由などは一切不明であるが、フェチズムを煽つてしまう艶容な装身具である事に、異論も反論も正論も受け付けてない。

『ミステリアス・ガールだからしょうがない』

首回りにはフェザーネットクレスを付けているが、彼女の羽で無いのは確かなので素材が、何者のであるのかは神性至妙に暈されている。

上衣なのだが、もう洋服では無く水着に区分される！

それも面積が冗談みたいに崖つぷちで、首から逆Y字型に布を後ろに回しただけの、破廉恥民族衣装。

あまりにも潔くポロリを恐れぬ大胆さ、『大事な部分さえ見えなければいい、寧ろ大事な部分で引っかけます☆』な猥装。

飛行移動すれば、遠心力が働き布から2つのバラスト、もとい、Eカップのアジアンおっぱいから、サロメピンクな丸いミステリーサークルを検出され……………ないのは、サイコパワーで抑止しているからです、残念！

(トロンちゃん、お腹周りがシュツツとしてるから、ふによんふによんな胸との、デコボコ差が判然に出てるんだよね……………ふうふうむ、おへその十字筋、空飛ぶ地上絵かな……………?)

普段は見せないけど、お腹周りの素体造形には自信のあるドリルっ娘も、嗟嘆しながら口舌を『勝手になぞり這わせたくなる、褐色のグランドクロス』

身を守るお呪いなのか、トロンの祖国での習性なのか、腕、腹部、脚、背中の各所には、白いボディペイント描きそれぞれが、本来の姿を散り散りに崩したパーツ模様に見える。

肌のシナモンステイック色との対比色が、外見クオリティをさらに高めているので、エッチでエキゾチックな容姿に釣られて、つい占って貰い言語が不明ながら、フィーリングでなんとなくくく伝わってしまったているのが、彼女の不思議感に一勝っている。

下衣も「罰せられる物なら、罰してみろ」

立ち入り禁止線を全力で跨いでしまっており、並の痴女では到底及ばない、全裸よりもエロい装い。

巻きスカート、パレオはグリーンガーネット色で、ツヤのあるティープゴールドの配色。パターンのラグジュアリー！

もしかしたら彼女の祖国を、統治している「君主の娘」なのでは……と巷で推測されている。

「cyubbsuew@rg gieZqfed) huq@:w@rg」そんなことないですよ きにいったはいしよくなだけですよ

このパレオがまた問題で、結び目スリット部分から丁度、パンツの紐が見えてしまっているのである！

下衣の意味について、夜分遅くまで考えさせてくれる『紐チラ』

おパンツの彩色も、アソートカラーを無視して赤、黄色、白、青で虹から半分持つてきた明快なる組み合わせの横縞である。

なぜ、紐しか見えてないのに柄が分かってしまうのか？

それは、パレオがシースルー素材なので、前方から左右から後方……は、ロングヘアで遮断しているが、前方と左右からは見放題なのである！

もう一度言おう、『パレオはシースルーなので透けちゃってる』

じゃあパレオ巻かなくてもいいじゃん！

この上なく適切な金切り声が、垂直になつた鼻の下の写真と共に聞こえてくるかもしれないが、プラスもう一品を効果的に活用しているのだ。

水着なら何てことは（それでもエツチだが）無いかもしれない、だが、水着つばいが普段着”

彼女は『パンツだけど恥ずかしくないもん！』が座右の銘なのかもしれない。

という事は、トロンの祖国ではパンツを透け魅せ+狭布隠しおっぱいがスタンダードな、格好である可能性が浮上してくる。どんだけエロい民族なのか、男性ならば永住したい夢の世界である……！

太ももにはナイフや拳銃を、収納しておくホルダーと同じ趣旨で占いの道具となり、

バトルでの武器ともなる49枚のカードが入ったケースを巻いている。

「q:jd ekw@Zgwr tuor@tZsdjd」4,♪「たましいのでつきですかならずかつとしましようにね♪」

カードには絵柄や数字が表記されておらず、

対象から流れているスピリチュアルなエネルギーを感受し、結果を提示する際にトロンのサイコパワーで浮かび上がる。

カードを武器にするとは、ファンタジー世界ではメジャーであるが、この世界では前例が見当たらないらしく、武装型にも召喚型にも属さない。

人化現象以前に、ポケモンと似て非なる生物が使用していた『レリック』なのではと、トロンのスピイスの効いたエッチボデイに興味を示し、ついでに武器にも興味を持った研究者が隅々まで（カードをです）調べ上げた憶説。

やはり真相はなぞのぼしよ……本人も内緒のまま。それか憶えていない？ 異世界から取り寄せたなど、他説アリ。

シメとなるのが、やや膝上丈のニーソと、本来の姿の特色が存分に出ているトングサ
ンダル。

（水着だよねえ……海で遊んでる外見だけど、その格好でミナモとかキンセツにもお仕事しに行ってるんだもんなあ、私にやできん……恥ずかしいの概念が私らとはちよつと

違うのか、あの格好がトロンちゃんの家……？　では普通だから、恥ずかしがる必要性を感じないのか……エッチだねえ)

この露出度で秋と冬を乗り越えるつもりなのか……？

口答えできない部下のお尻を触ってそうな、ダメ親父上司な目付きで他の子には無い魅力を持ちエッチアピールしまくっている民族少女を再鑑定。出会う度にしてる。

爽羽佳が「同じ格好をしてください」と頼まれたって絶対に無理である。毎日が生かさず殺さず、何なら裸のが幾分かマシだ……運ばれてきたサイコロ箱から、発注していた荷物を取り出し自室スペースに飾っている、トロンにはとつても失礼であるが。

「O q d k j e . |」 t y p e w @ r !」わたしのまいるーむ　かんせいです!

突起と腹部、3つの目を紋章に見立てたハンモック、ボディペイントと同じ刺繍のカーテン。

全て揃ったオシャランティーかつ、占いの館チックなお部屋が完成し、トロンは大好きなじつちゃんと一緒に、喜びのポーズ!

シルエツトが Y となる、両脚をピタリ密着させながら、両手をお空へと開いて、謎呼ぶパワーを受け取っているかのポーズ!　そして——

「トウートウー!　d@Za☒y k j, w@r!」じつちゃんのまねです!

（孫が言葉を覚えたみたいなの、感動があるの！ 最初に聞いた時は鳥だけに鳥肌立ってしまったわい！）

自分の名前、そして『トゥートゥー』がトロンの喋れる唯一の日本語である！

なんでソレなんだっ……もつと他にあるでしょうなど、ツツコミはさておき、こうやって彼女は日本語を覚えていく様になるのだろうか。

「e5e5 xeb@jw@bkjjw@r トゥートゥー！」 いえいえ さいごまで
このままです

Segment・octa——∞との再会

もう七月と同じ服装では過ぎせない。

ヴィヴィと出逢つて、三ヶ月も経過していた。

かつてチョンチーであつた、メコンを助け出し、後日トレーナー免許を取得。

正式に『ポケモントレーナー』の肩書きを名乗れる様になつたジツク。

始めの仲間は一匹だけでも、仲間を増やして次の街へ……上手く行く保証など無いから、ポケモンとの生活は面白い。

ホウエン以外の地方へ旅立ち、オニスズメの爽羽佳をナナシマで、ニユーラのネリ、コジヨンドのインフィス、ミノムツチのかたくりをこシンオウでゲットした。

みんな一期一会、人生でたった一度きりの大切な出逢い。

それでいて会者定離、素晴らしく運命的な出逢いを果たしても、別れは等しく訪れてしまう。

「……………」

今は考えたくないけれど——

(ヴィヴィ?)

(……………んっ……………♪)

無機質な表情をする方が少なくなってしまうた、胸に情性を宿す様になったメタグロス、ヴィヴィがジツクのアウターと擦れ合う感覚、2 cmの距離をハジツゲからずつくと維持し続けている。

ここが「特等席」と言わんばかり、手を伸ばし肌を接触させる事はしない。

が、限りなく接近して尚且つ、りゆうせいのに続き密林地帯を歩くメコ・そわ・ネリ・ミノの愉快な手持ち達には、真意を悟られぬ為『念話で先程のバトルの反省会をしている』と、自己弁護し勘違いされる対策を打っておいた。

本当は違う、反省会も確かに大事だけれど、『マスターの隣を歩きたい』その思いが一番だった。

(わたしはマスターが居なければ、アビリティの全てを發揮出来ません。他の方がわたしの「マスター」であつたのなら……: 当時は考えもしなかつたですが——)

殆どの人工光が消え、頼れるとは言い辛い月明かりが導を射す、22時過ぎ。

夜目の利くネリを先頭に、『反省会』と言う名目でコミュニケーション中のジツクとヴィヴィ。

その後ろで夜のアウトドアに欠かせぬライト、彼女の種族の特色である発光器官を、あまり野生のポケモンの迷惑にならない、光量に設定し足下を照らすメコン。

秋冬用の裏生地が気に入ったのか、爽羽佳のライダースーツの胸元で、鼻ちようちん膨らませては、フーセンガム割っているかたくりこ。すぐ横に居るのがネリ。

114ばんどうろの北は、田んぼや農場が所有・経営されており、ホウエン各地での野菜流通6割がハジツゲを占めている。

——りゆうせいひのたき——

遙か昔に大量の隕石が飛来し、天体に関連するポケモンが住み着き、流れ落ちた軌跡が竜を描いた影響から、ドラゴンタイプの戦闘力が増大するので、ドラゴン使いの修行の場となっている。

その洞窟までの道のりは、大小様々な起伏が自然の段差を形成しており、障害物などをスルー出来る飛行や、浮遊能力を備えたポケモンを所有していなければ、洞窟へのアクセスが厄介なので時間はそこそこ掛かる。

(マスター……………)

二日に一回、お昼ご飯か晩ご飯のどちらかはメコンではなく、ヴィヴィが作った物をジツクに食べて貰う様に話合って決定した。

昨日はジャンバラヤ——炒めた野菜やお肉やエビの入った炊き込みご飯——を作ってくれた。朝早くから起きて何回も失敗し、いざ本番でも焦がしてしまったけれど絶妙なカレー粉の焦げが、濃い味付けを好むジツクには好評だったので結果オーライ。

もしかしたら「少し失敗しよう」と思って作った方が、逆にジツク好みになるのではともう一度同じ物を作ったら今度は火力が増しすぎて、野菜が全て黒炭になってしまい大失敗してしまった。レシピの手順通りに作っても何処かしら上手く行かないし……料理の適性が無いと判断を下すのは簡単だけど。

（他の人がマスターだったなら……ここまで頑張りたいと思うのでしょうか？……）

それは……無い……ですっ……わたしのマスターはジツクさん以外に考えられません……救出してくださったのも必然の出逢いだった……今ならそう……（――）

彼にマツサージをされてから二人だけの時間が増えた。その場でなら甘え下手で不可解な感情に葛藤しながらだけでも少し……本当にコンマな目盛り程度の物だけでも素直になれる……なっている気がした。

自分はメタグロスなので強い姿を見せなければならぬ、激レア高種族値ポケモン故のプライドと、マスターと認めたジツクには思いつき***……:されたい気持ち、どちらを優先させればいいのか。

数ヶ月前のヴィヴィなら考えるまでも無く前者であった。人肌に触れ言葉を交わすよりも実践、実践、そちらの方が力の結晶として身に収束されている実感があつたから。（でも……ぬくもり……マスターのあつたかい体温……知ってしまったから……んっ……う……）

何気なく彼の顔を覗こうとする回数も増えている。

「……………」

「!?ッ……………むッ……………」

視線を感じた彼にニコツと笑いかけられても、手持ちの皆が居るので焦って下を向いてやり過ぎしてしまう。

ジツクもそれが「ヴィヴィは怒っているのかなあ」とか「今のセクハラだと思われたかなあ」とびくびく心配する事はない。コミュニケーションを重ねて『今のヴィヴィは大丈夫』と分かる様になっているから。

(……………♪)

ほらっ、蒼髪の先っぽを弄りながら一文字だった唇が、Uの字になっているのだから。「おっ……………今の風はキタなあ……………場所が違えば落ち葉が綺麗だったかもね」

秋の味覚を楽しめる10月。寒空に備えた衣替えとして長袖にブルゾンダウンのジャケットトをクローゼットから取り出したジツク。

爽羽佳の秋冬装備は先述した通りだが、他の面子はと言うと……………

ネリ↓寒さに強いポケモンなのでピキニのまんま

メコン↓深海の水温に耐える水タイプなので変更無し

ヴィヴィ↓気温の変化に殆ど影響されない鋼タイプなので無し

かたくりこ↓ミノの中はあつたけえらしい

……メコンは肩とおっぱいの谷間くらいしか肌が露出してないので兎も角、超ミニスカートと水着と変わりない三角ビキニは見てるコツチのが寒くなってしまう。

依頼は数日間に分けて遂行させる予定だ。りゅうせいのはたき内部のマップは借りているけど、依頼の内容が『全てのフロアの砂を集めてきて欲しい』なのでマップで最短ルートを通つても、結構な時間が必要となるからだ。

ハジツゲに自分だけのラボを所有する、地球外物質科学研究者が依頼主であの滝は隕石が落下した事で作られた、ならば砂には成分も隕石に関する成分が含まれているはずだ！………との見解らしい。

しかし彼はポケモンを捕まえた事が無いので、誰かに頼まなくては精々入り口の砂しか集められないだろう。そこでジツクに白羽の矢が立ったのだ。

楽な依頼じゃないけど、りゅうせいのはたきは探索して見たかったしあの場所はドラゴン使いの修行の場となっているから、強いドラゴンを従えるトレーナーとバトル出来るかもしれない。

「海での一件以来だな、皆！」

——放浪と修行の旅に出ていた、無明の武芸家。

カイナシティで再会し、ヴィヴィと一戦火花を散らしてから再び離脱してしまっていたが——

「ししよ〜〜！ さっきのバトル樹木の影から見てたの気がついてたニヤ〜〜！（だから相性苦手な虫タイプ相手に、拳手したんニヤけど♪）」

道中バトルは二回行った。一戦目はドラゴン使いなので、ヴィヴィが出る幕も無く2タテしたが、ヘラクロスとカイロスを操る昆虫マニアは、均整の取れたチームプレーでヴィヴィをも大分苦戦させたが、つるぎのまいによる能力値上昇を逆手にとつて、きあいのタスキを消耗したネリが暗闇から、おしおきで奇襲。

夜目が利くので、夜間戦闘はヴィヴィと並んで得意分野。12年間も劣悪な視界に混ざつて窃盗行為を働いていたのだから。

「やたら出たがってたのは、そういう理由だったのか……おかえり、インフィス！ 暫くホウエンに残ってくれてるって！」

索敵機器に優れているヴィヴィだけは薄ら存在を感知出来ていた。

ジツク含めて他の四名は主を抱きしめながら、武術には邪魔でしか無いであろう、ダブルFを細マッチョな胸板に擦らせるインフィスの気配は、察せられなかった。本来であれば洞窟の入り口で待ち合わせる予定だったのだから。

バトル中でもインフィスが、どんな表情で伺っているのだろう……反応を探る二匹が

特例である。

「私も主が受け持った依頼の、助太刀をさせて貰おう。募集を停止するまでの知名度になつたのだな」

今度はネリと深くハグを交わす。第三者トレーナーからすれば、マニユーラ絶体絶命である！

悪玉と鬪玉がわちやわちやする、反作用を引き起こしながら収束するDとFには、性少年もフィージョンしたくって危険顧みず、ドラゴンダイブしたいだろう……

こうしてジツクメンバーは、数ヶ月ぶりにフルとなった。相変わらずかたくりこは、バトルをしたがらないけど、インフイスの香りでも嗅ぎ取ったのか、見つけ次第胸元へ潜りミノごと回転させる所業。天然のおっぱいレーダーである。

f
] Segment・octa— [h e f

地図を入手したが、フロア数はとても一日では回りきれない多さだ。

手持ちを総動員して、3日目の20時に最深部を除き全てのフロアの砂を回収した。洞窟内でのキャンプ……ミナモに居を構えた現在では、縁の無い行為となつてしまつたけど、旅するトレーナーとして必要なスキル。

1日目はじゃんけんで勝つたメコンが、2日目はインフェイスがジツクのテントにご一緒していたので、鋼鉄ガールは頬を膨らませていたけど、例の一件以降は尾を引かずに「コミュニケーションは平等……ですよね」と、自らを納得させながら隣合うテントへ戻つていった。

ジツクも彼女の心情を察せ無いニブチンではない、洞窟内で勝負を仕掛けてきた——主にドラゴンつかい——とのバトルでは、積極的に使用し勝つたなら沢山頭を撫でてあげた。

鋼タイプはドラゴンに有利、そんな単純理由でヴィヴィを使うのでは無い。

「……………もう終わりですか？ もつと撫でたつていいんですよ。」

存分に撫で回したつもりだけど、ヴィヴィは両手を掴んで彼を見つめてくる。やっばり冷静を装うも頬の色は彼女の、瞳よりも深紅で顔艶が些か良すぎる。

拒むどころか追加要求してくる。インフィスは自分が見てない内に、関係が進んだのだなあと、ブカブカの袖で口元を隠しながらニヤつと笑う。

自分も含んだ♀ポケ勢に対する、強大なライバルが何歩も先を進んでいる。

が、ヴィヴィは隠し通せているつもりでも、インフィス達にはとづくに………最初に出逢ったメコンですら、ご主人様との仲を裂いてやろうだなんて、毛頭思つては無い。

……この場合ヴィヴィが逆にニブチン過ぎるのかもしれない。

「残すは最深部だけだね。たきのぼりをお願いしていいかな？」

地名に反する事は無く、囂々華厳の滝が行く手を阻むりゆうせいのかき。

全フロア探索には、たきのぼりの技を強いられる。ひでんマシンは実力を認められたトレーナーが、免許を提示し発注可能となる品なので、滝をクリアする⇨実力が伴っている。

奥に進めば進むだけ、挑んでくるトレーナーの強さが上昇していたのは、そういう仕組みが自然と形成されているからだ。

「お任せください♪ ギュツて、私の身体を掴んでいてくださいね……／／」

エッチな意図はない、そういう技だから！

でもラツキーだと、背中に当たる彼の胸板と体温を感じながら、ライトの色がピンクになってしまふ。メコンは水タイプ特権で、移動時にもお世話となる事が多い。ホウエンは海が他の地方よりも広いし………

「たああ………ととおおー………!!」

凄まぜても、この気の抜けるまったりな声調。

最後の滝を真つ二つにする頭突き、勢いのまま陸地に飛び乗ったら、どう頑張つても揺れを抑えられない、Hカップが衣装からハミ出てしまふ直前であつたので………後ろを向いて胸元生地を直す。世界の男性トレーナーが欲するランタンであろう!

「出て来て、皆……」

トレーナーへ被害を出さない為に、たきのぼり時は水の防御壁を展開するので、ジツクは髪の毛一本水に濡れていない。

メコンは耐水性のある衣装であるが『カイスのみの先つちよが判別出来そう』な、ピッチピチに地肌へ貼り付いてしまっている事に気づいているだろうか? 彼女へは何も告げずタオルだけ渡す、ジツクは紳士だ。他のトレーナーだったら〇〇浮かんでると、指摘する。メイドスカートまでお股にピッチリって貴女………

「………トレーナー、バトルを行っている音がしますね。採集は終了しましたけど、様子を伺つてみますか?」

依頼を実行するだけだったら、このフロアに辿り着いた段階で、残すは依頼主へ手渡すのみで完了する。

けど、最深部まで辿り着ける技量を持ったトレーナーが、恐らく二人居てバトル真っ只中。強いのは間違いない、是非ともお手合わせ願いたいと珍しく、ジックが掌で抱きしめているミノ以外は賛同した。

音がするのは、なみのりを使つて渡る対岸の方からだ。

なみのりをして貰うので、何度も悪いがメコン以外はボールへ戻そうと、腰のホルダーへ手をなぞらえる——

「ヘアツツハツハツハ！ お待ちしておりましたわあ！ あらあら、アリーに敵対心はありませんので、拳を収めくださいな？」

……………つ、『魔女』

待つていたと彼女は口にしたが、別の空間から転移——ワープ——ようにしたようにしか見えなかった。

星を二つに重ねた台座の上で、大胆に脚を組ませて光量の足りない洞窟内だつて分かる、その美として描く理想像を実体化させた太ももの卓越性が。

（スゲーエッチな格好……ニャーね……見た目がエロくなれば、強くなるって訳でもねーのにニャ）

お前が言うなよっ！

心の中で総ツツコミされる、ネリの眼前で空中浮遊しているのは、自らを『アリー』と呼ぶなぞのポケモン、スターミー。

人化現象が発見される前は、揃って性別不明として纏められていた種族だが、人化を果たしてしまえば……この通りだ。

「へアハハハッ、アリーは確認しに來ただけですから。危害を加える必要など全くありませんわよ」

シックな装飾で色づけされた、ウィッチハットに左右を赤い紐で繋ぎ止めているだけの、ワンピースは必要過多の露出性で、女性ですら目を疑いたくなるスタイルをこれでもかと、押し出してしまっている。

スターミーのコア部を模した眼帯を向かって右へ、何故だかツーサイドアップに結っているテールは、向かって左側のみが耳の辺りで結っているのに、逆側は膝まで伸ばしている。そのミステリアスな輝きを持つ、紫色のヘアーは金箔のような保護膜に包まれ、毛先には星形のアクセサリを付けていた。

「……………」

おっぱいの大きさは、メコンとタメ張れるかもしれない。アリーと名乗るスターミーは奇妙な笑い声を発しながら、ジック達の周りをフヨフヨ一定速度で旋回するが、特に何も仕掛けては来ない。

ヴィヴィは鉄拳を取めようとしなかったが……どうやら彼女、アリーは本当に攻撃姿勢を見せずに、バトルとは別の目的があつてヴィヴィらに近づいた……と推測される。(このスターミー……野生とは考えられない……相当な高レベルだぞつ、りゆうせいのためにスターミーは生息してないし、この洞窟内におやが居るのか?)

「……………要件は何でしょうか?」

彼女が左手に持つ獲物は、オクタグラムを先端に、七色の宝石を展開させている身の丈ほどのロッド。古来より知られる西洋魔女の特徴が、随所に現れているがそれにしてモセクシー過ぎる。

「アリーはですね、ヴィヴィさん? 貴女の姿を一目見たかったです。他には何もありません、安心しましたわ……………」

実体と真意を掴めない、掴ませない、アリーと名乗る魔女はジック、メコン、爽羽佳、ネリ、インフィスへは、見ている側が恥ずかしくなる衣装の下から、玉虫色の声を反響させながらの妖しい笑みはそれだけで、魔法を掛けられているのかと誤認してしまう。

……………が、ヴィヴィにだけは理由は全くの不明だが、妖しい笑みを潜めさせ、長ら

く離れ離れであつた姉妹か、もしくは*****か……

「安心した」の言葉は嘘で無い証明、その瞳に浮かんだ星形マークを捉えた、ヴィヴィの深紅の瞳も警戒心を解かざるを得ない。他人と思えぬ『結び付き』を心で感じてしまった……

(それと……………)

ロッドで顔を隠しながら、ジックが抱えているミノムシを一瞥した。

「……………ミノ……………」

「……………そちらもお元気なようで。ヘアツ—ハツハツ……………！ 今ある未来を歩んでくださいな、マスターのお気持ちがおよく理解出来ましたわ！ 生まれを問わず、行為を問いなさい……………それでは——」

虹彩色の星屑と共に、謎のスターミーの姿は消滅してしまった。まだ洞窟内には去り際の、笑い声が残っているが……

「あのスターミーとは旅路で縁があつた訳では無いのか？ 只者ではなかつたぞ」

「いや……………俺も初めて会つたよ。ヴィヴィを見に来たつて言つてたけど、本当にそれだけで帰つたね。う〜ん……………」

あんなエツチで、ミニ丈なのに脚を組んじやっているから、赤い紐パンがモロ見えだつた。

実はあのスターミー、男が居るのに分かってあの体勢を崩さないのだから、タチが悪い。自分の身体がどれだけの破壊力を持つか、理解し反応を楽しんでいるのだから。色欲を司る魔女なのかもしれない。

スターミーの分類は“など”だけど、アリーと名乗る彼女の行動も謎の謎。

ヴィヴィもあのスターミーとは初対面、心理を分析しようとするが、何の成果も抽出出来なかった。

唯一——

(↑……………? アシンメトリー……独特な笑い声……? ……? ……でも名前は名乗ってた……………?? あれはニツクネームなの……? 本当の名前じゃないって気がする……………
………本当の名前は誰も……………)

キシキシキシシ!

ヘアッーハッハッハ!

あの時、謎のヒートロトムと唯一会遇を果たしていた爽羽佳は、顎に手を当てながら既視体験の正体を見破ろうとしていた。このままでは眠りが浅くなる。

(もしかして……主人が同じ……なのかなッ!? やつ、判断材料少ないけどさっ、ピーンと来たよ私……あのヒートロトム、あてちゃんとは仲間……?)

そういえば、あのヒートロトムと出会った件を誰にも教えていなかった。

教えたところで何になる訳じゃ、ないかもしれないけど……

変な人ならぬ“変なポケモン”だって、居てもおかしくはないし。中二病か何かだと思えば、笑い話で終わってしまおうだろう。

家に帰ったらジツクに伝えよう。思案する爽羽佳は羽を広げながら、二脚遅れて戦闘音のする方面へと向かうのであった——

Segment・Octa——最強のドラゴン

それは見るに堪えない、悲惨な惨状であった。

「キングドラァー！ 参った……！ 降参するっ！ 俺の負けを認めるからっ……！」

マントを身につけている青年、ドラゴンつかいの基本コスチュームだろう。

りゆうせいおのたき内部で、勝負を仕掛けてきたトレーナーは、殆どがドラゴンつかいであつた。

トレーナーランクも上位に位置する存在、扱いが難しく、捕まえる事すら困難な種族がドラゴンタイプ。

ジムリーダーには劣るが、一般トレーナーの一つの憧れ対象として、子共に夢を与えるトレーナー達でもある。

「……………はあ、そこからバトルを挑んできたから、どれ程の強さかと思つたのに……はあ……！ 期待外れ、私をイラつかせるだけに終わったわ、やりなさい……レイカ！」
「下等種は高位種には触れる事も出来ないっ、それでもダメージを与えようと抗つた、褒めてあげるわよ！ 結果は下等種！ アンタの敗北だけど……ねエー！」

青年のキングドラは、既に体力の尽きる寸前、赤ゲージ。

戦えない事は無いかもしれないが、立ち上がったところで勝利はない。

ドラゴンvsドラゴン、己のタイプが弱点となるので、一撃でケリがつくのは珍しくない。

だが、青年の相棒であるドラゴンポケモン、キングドラは一撃で倒れる事は無かった。相手のポケモンがそれをせず、散々に虐め倒し一手一手の火力を、最低限まで落とし遊んでいたからだ……

つまり、相手のポケモンの方がレベルが高く、指示をするトレーナーのスキルも青年より格段と上をマークするに他ならない。

キングドラの悲痛な叫びが響く……青年が降参しても相手のポケモンは、爪を身体に食い込ませ、牙で噛みつき、ヒレで背を叩く。

タイマンであるのにリンチ、公認のレフェリーも居ないので、判定は互いのモラルに任せるしかないのだ。

「なら、さつきとボールへ戻しなさい、その雑魚ポケモンを」

「うううっ………！ お前らぁ………！ 畜生ッ!!」

青年はHP「1」を意図的に残された、相棒をボールへ戻してから、あなぬけのひもを使用し脱出した。その目には涙を流しながら……

「チツ……弱いポケモンに弱いトレーナー………！ はぁぁ！ イラつきが収まらないわ

！ アンタらじゃダメなのよつ、私が会いたいトレーナーは——」

一部終始を目撃していたジツク一同は、ドラゴンつかいの青年と、キングドラの心情を察したら気が気でなかった。

あの女性トレーナーは、関わってはいけぬ者だ。そして——

「……ミノリ、次の相手は少しはマシかもしれないわよ？ ホラツ、あのメタグロス……」

現在発見されている、一般カテゴリのポケモンで『最強』と、謳われるポケモンとは？

恐らくこのポケモンの名を、答える者が大半であろう。

マツハポケモン、ガブリアスであると

生まれながらにして、ポケモンの創造神に愛されている種族。

一切の無駄のない、それでいながら全ての能力が高水準、ドラゴン&じめんの技範囲、このポケモンだけであらゆるポケモンへ、対応が可能となってしまう。

もしこの世界が『ゲーム』であるならば、ガブリアスはバランスブレイカー。誰が使っても一定以上の成果は約束される……それが一線級トレーナーであれば、敗北は皆無となる。

背ビレに切れ込みが無いので、あのガブリアス……レイカはメスである。

スラツとした体格で、レディーススーツを着用しており、フレームレスの眼鏡をかけている。ベースはロングだが、横髪の一部が左右へ張り出しており、本来の姿の形状が反映されているのだろう。

「へえ……！ そのメタグロス！ 全ての個体値が最高値じゃないツ!? やるじゃない少年……！」

（なんだこの人つ、ヴィヴィを見ただけで潜在能力が分かるのかつ……!?）

トレーナーであるミノリが、警戒心を崩さない顔つきのヴィヴィに対し、品定めする視線で近づいて来た。

ジツクは皆を連れて引き返そうとするつもりだったが、その言葉に歩を止めざるを得なかった。

……確かに、ヴィヴィの「個体値」はトレーナーメモで確認させて貰った。その結果がなんと！ 全ての能力値が最高、専門用語で『6V』

10歳で免許を取得したトレーナーが、毎日タマゴを孵化させて90年……100歳になっても、6Vのポケモンと巡り会えるか？ その確立は日常で使う数字とは、桁が違いすぎる。

一生分の運を注ぎ込もうが、会える保証は出来ない。会えたら間違いなく勝ち組であ

る。

「私の手持ちポケモン、残りの5匹をあげるから、そのメタグロス……交換して貰えないかしら？」

「……………はい？」

（あの女、馬鹿ニヤのか？ ご主人が応じる訳ね〜のにニヤ）

ポケモンのトレード交渉。この世界で暮らしていれば一回くらいは経験する。

レートが明らかに釣り合っていないければ、当然断る権利がある。

メタグロスを欲しがるトレーナーは、大勢居る。ポケモン100万円を上乗せされても、メタグロスのトレーナーは決して応じないだろう……「そんなじゃレート釣り合いません」だ。

ミノリがジツクへ提示してきた、5つのボール……

（この人みたいに精緻までは、分からないけど……どれも強力なオーラを持つてる……それは分かるぞ……）

ジツクくらいの実績を持つならば、ある程度までならどんな育成を、施されているのかぼんやりとだが推測出来てしまえる。

ミノリのポケモンを5匹、手に入れたら間違いなく戦力は向上するだろう。それだけのポケモンを交換材料としてまで、ヴィヴィを求めているのだ。

「いえっ、ヴィヴィは交換出来ません。申し訳ありません」

(マスター……………!)

手放すなんて出来っこない。

ヴィヴィと出逢ってまだ数ヶ月だけど、簡単に千切れない絆が芽生えているのだから……他の子達だって同じ、この子達は交換には出せない!

「そう……残念よ、そのメタグロスをもっと強くなれるのだけれど、あなたの下に居るのであれば、それも叶わないわね」

「……………それはどういう意味でしょうか?」

ジツクは純粹なる疑問として、尋ねたのであったが……

次の言葉は、想像だにしない内容だった。

「個体値は最高の6V、だけど『努力値』が適切に振られていないわ。強いポケモンの育て方を、ご存じで無いようね……? 現れたポケモンを無差別に倒していたら、折角の6Vも本来の力を発揮出来ない……宝の持ち腐れ。私の下へ来れば、努力値を振り直して最強のメタグロスにしてあげるのに……ふふっ」

謎のトレーナー、ミノリは『既にメタグロスを持っている』のだが、自分が持つメタグロスよりも、ヴィヴィの方が高い個体値であったので、スカウトに成功したら努力値を下げる、特殊な成分を含んだ木の実を服用させ、一から努力値を振り直す。

既に所有しているメタグロスは、ヴィヴィに座を奪われるので逃がす。

ガブリアスのレイカだってそう、卵から孵化した栄光の6V。ここまで辿り着くのは大変であった……運の良さもトレーナーの質。

厳選し、育て上げ、技を揃える。より強い個体を手にしたら、親として交配するか逃がす。そうして彼女はエリートメンバーを揃えて来た。

「そのメタグロスが可愛そうに想ったのよ。デタラメに努力値を振られて……氷とドラゴンに耐性があるから、レイカの良いパートナーにしてあげるのに……」

まるでポケモンを戦いの道具としか、認識していない言葉……であるが、孵化からの厳選行為は政府も公認しているれっきとした育成。

ジツクはそのような行為を、遠慮しているだけで、大多数のトレーナーがミノリと同じ行為を繰り返している。そうやって強いポケモンは手にできる……人化を果たしたポケモンが相手だろうが、孵化厳選自体は何年も昔から行われている……ボックスに預けて『にがす』スイッチを押せばバイバイできるのだから。

「ミノリ、あのメタグロス以外は眼中になかったけれど、全くもってその通りだったわ……！ あのランターンも、オニドリルも、個体値は最低に近いわよ！ 努力値だってバラバラ、ああ、そうか、メタグロスはあの連中を相手すれば絶対に負けないから、小山の大將気取りが出来なくなってしまうものね！ ミノリの下へ来たならば！」

主人の影響を強く受けているからなのか、レイカもポケモンが生まれながらに持った能力を、見分けられるのだろう。

そう、今の今まで言及していなかった、メコンと爽羽佳は各能力値が、平均以下……強さだけを求めるのならば、彼女らが採用される事は無かったのかもしれない。

「ツツ!!……………」

(はあ……!?! 個体値がなんだつーの! アンタの言う“クソ個体”でも、ご主人は私らを勝たせてくれるんだからつ!!)

当然、ポケモン本人は気がついていない。

『私は他のランターン、他のオニドリルよりも、個体値が低い』のだと。

「そろそろ止めてくれないか? それ以上の物言いは、あなたの道徳意識と品格に疑問を持たれてしまうぞ」

この場から去ろう、主人よりも先に長い袖が割って入る。

が、レイカとミノリの評論——重なるイラつきから来る暴言——は鎮まらなかった。

「へえ! アンタも仲良く低個体値じゃない。攻撃と素早さに優れたコジヨンド種、その長所が死んでるわよ!」

「そうか……………お目に合わず済まないな」

類い希な才能が在るに想われるインフィス。彼女も元主との修行の末に、無名無形を

手にしたが、個体値自体は最低クラスであるのだ。

ネリ以外の者は驚愕の声を上げてしまふ、あのインフィスが低個体値……？ それを感じさせない強さを持つが……レイカの洞察眼に濁りは無い。インフィスがそう肯定付けたのだから……

「そのマニニューラは、この中ではマシンな部類ね。攻撃と素早さはV、その他は悲惨だけれど、きあいのタスキを持たせる前提なら……って感じかしら？」

天敵である筈の水タイプすら、怯えも謙虚も見せず、真実のみを列挙していくレイカ。最強のドラゴンタイプの彼女は、氷の手裏剣を片手でジャグリングするネリとヤリあっても、負ける気がしないのだろう。

当事者のネリは、ジャグリングするのみで言葉は発さない。口笛吹きながら戯けている。

（ああー、やつぱりネリちゃんはずういう出生”なんニヤ〜ね？ 生まれた時からまもるが使えるから、野生のポケモンじゃニヤいのは分かってたんニヤ）

野生の♂と♀の間で生まれたポケモンは、レベルアップで修得出来る技しか使えない。

レベル100まで上げようと、ニューラとマニニューラは、まもるの技は覚ええない。

技マシンはトレーナーが、アンロックを外さなければ例え、ネリが技マシンを盗んで

も扱えぬ物。

「……………? あははっ! 何のポケモンか分からなかったわ! ああ、ミノムツチだったかしら? 進化もしていない虫タイプ、そんなポケモンを採用しているだなんて……トレーナーの器も底が見えてしまっているわね」

「……………ZZZZ」

ミノリからすれば憂さ晴らし。

20年前からずっと探しているトレーナー、探しても探しても、そのトレーナーの足取りは掴めない。

世界中を探し歩き、かつて対決したりゆうせいのときまで辿り着く。

そこで待っていたのは、弱いトレーナーだらけ。

ここまで探しているのに、見つからないなんて……たった一人、ライバルと認めた少女も、今では大人になっている。

息を引き取っているだなんて思わない、ミノリの勘だが、あのトレーナーはハウエンに居る! 全てのダンジョンや街、隅々まで探してやるつもりで、りゆうせいのときを探索していたのだ。

腹いせにジツクらを煽り、対戦の土壌に移ったらゆつくり虐めてやる。そうでなければこの苛立ちは晴れない。

6Vメタグロスの取引に失敗してしまっただが、まあ成功するとは最初から期待していない。

6Vメタグロスを使っても『あの氷ポケモン』に勝てる保証は無い………タイプ相性など無視をする、想像を絶する戦闘力は、伝説級であろう。

（あの強さなら、何処の地方へ居ても噂になっっている筈なのに………っ！ 何処へ居るのよっ………私が戦いたいのは貴女なのよっ、私ともう一度戦いなさい………——）

シエラ………っ！

Segment・octa—— かりそめ

ヴィヴィ達、ジツクの手持ちポケモンは、怒りの感情を浮き上がらせる。

自分が低個体値と蔑まされる……それだけならいい、本当の事だから。

「……………わたしのマスターへの謝罪を要求します。貴女の数々の言動、侮辱行為とみなします……他の皆さんへもですっ」

感情を宿さなかった少女は、特にマスターであるジツクへの不当な発言、仕打ちには敏感だ。

「侮辱と見なしたらどうなるのかしら？ フンッ、地面弱点の分際で……アンタが私らと手を組むのなら話は別だったけど、その気が無いのならもういいわ。文句あるならヤツてあげるわよ？」

「……………」

高位種族と高位種族。ヴィヴィとレイカは弱点を補い合えるタイプなので、タッグとなれば無敵に近い。一貫する水や地面に強い3匹目を控えておくのが、プロトレーナーの常識だ。一般トレーナーはどちらかを手に入れることすら、困難であるので……

「……………はあ、止めましょうレイカ。こんなトレーナーが育てたポケモンなんて、い

くら個体値が6Vでも戦うに値しないわ。時間の無駄……よね？ 最奥部にはシエラは居なかったのだから、さっさと別の場所へ向かうわよ」

「……………そうね、私達が全力を出す相手は、一人だけだものね。命拾いしたわねメタグロス、下等種共」

ライバルと認めた少女が、20年搜索したつて見つからないイラつきを、ジツクらにぶつけてやる予定であった。わざと煽る様な口調でレイカを差し向けてやったが、興が削がれたので呼び戻す。

ミノリだつてジツクがどんな存在か知っている。あらゆる依頼を完遂させて来た、将来有望の少年であると。

(シエラ……何処かでその名前、聞いた筈なんだけどな——)

一色触発ムードも、砂鮫であるレイカがあなをほるで脱出したので、散乱していった。「シエラ……と言う方を探していたそうですね。わたしは戦っても良かったのですけど……」

(マスターを侮辱して……頭にきてましたし……これは内緒……です)

誰だつて「おや」を馬鹿にされて、良い気分にはならない。

やや短気な爽羽佳や、ジツクの事となれば熱くなりやすいヴィヴィが、良く堪えてくれた物だ。心の中では全然穏やかではなかったが……

ネリだつてあれ以上仲間や、ご主人に下手な口をレイカが叩いていけば、後ろから氷の手裏剣をぶん投げてやっただろう。そう思つていても行動には移さないのが盗賊時代。

彼女はおやを持つポケモンとなつたのだから、度を越えた侮辱はタブー。おやが居なければ怒りよりも逃走を優先させていた。

(ネリちゃんも誰かの為に、怒れるポケモンになつたんニャーね。卵から孵化されて、個体値が気に入らニャいから、逃がされたであろうネリちゃんが……ニャ……！)

だとすれば、ヴィヴィは？

6Vのメタグロスを逃がす、如何なるトレーナーでもありえない行為だ。

それではないとすれば、ジツクの推測通りあの電脳空間でヴィヴィは生まれた。生まれた時からメタグロス？ ダンバルから生まれるのが普通なのだが。

(考えてもしょうがない……か。ヴィヴィは大切な子に違いないだから……)

ハプニングはあつたが、砂を譲り渡せばミッシヨン完了。

紅い瞳が何かを言いたそうにしていたので、少しだけ念話にアクセスしてみたら、『隣』の単語だけ返つてきてすぐにロックされてしまった。

家に帰るまで紅い瞳の隣が固定席となつてしまった。

翌日の午後14時。 117番道路。

「我が社のアフターサービスをご利用下さり、誠にありがとうございます」

シダケく118番道路間は、育て屋さんと横にながしい直線路の存在から、孵化ロードと呼称されており卵から厳選する、トレーナーは料金を支払いじてんしゃに最大5個までの卵を取り付け、走る事を許可されている。

デボンコーポレーションの商品を購入した老人宅。アフターサービスは商品を所有している限り、無料で永遠に受けられるので、アフター部門も本社に存在するのだとか。

一礼しキンセツシティの駅へと歩く女性、デボンのスタツフでも特に優秀な頭脳を持ち、現在ラインナップされる殆どの商品開発に関わっている。

「……………」

フレームレス眼鏡に地味な色合いの服装。

冬でも夏でも変わらず、着込んでいる理由は誰も知らない女性、レオネ。

彼女の隣で浮遊しているのは、性別不明のポケモン。ポリゴン2のトロメイン。

彼女はトロメイン以外のポケモンを所有しておらず、バトルをしている姿も見られない。あくまでも研究開発の補佐として、傍に居るらしいのだが……………

「よおーし！ 生まれたあ！ いい個体来てくれよなー！ ………………ちえ、2Vとかイ

ラネー！　俺は4V以上の強いポケモンを手に入れるんだ！　ボックスに預けてすぐ逃がしてつと……面倒くせーな……」

猛烈な速度で走るマツハじてんしやが、レオネの横を通り過ぎる。

その言葉を耳にし、彼女は無表情のまま、落胆する少年が育て屋の扉をノックするまで、瞬きもせず視線を動かさなかった。

「……………」

そんな彼女を心配するトロメイン。人化していないので言語は発せ無いが、手持ちが何を言いたいか彼女には分かるのだろう。

「行きましようトロメイン……………私達のやるべき事、そうでしょう？　昔の私を見ているようだったわ……………」

別のじてんしやが通り過ぎる度に、レオネは一瞬動きを止めてしまう。もうすぐ躰りそうな卵へ対し、彼女は何を想うのだろうか。

1]

おくりびやま——

死者の魂が眠る、ハウエンの霊園山。

お盆の時期は過ぎてているが、墓参りは季節を問わずに行える。

慰霊スポットだけに、ジュペッタやヨマワルなどが徘徊しているが、基本的に墓を荒らしたりはせず、マナーの悪い者達へこっさり制裁を加えてくれたり、掃除を受け持ってくれたり最早スタッフと変わりない野生の、ゴーストタイプが住居している。

「……………」

霧の発生している山頂、全てのお墓が見下ろせるこの場所で、手を合わせている眼鏡の女性。同じく頭を下げているのはポリゴン2。

（あの人ってデボンの社員さんだよな？ あの人が来てから業績が爆上げしたって噂の……）

（こそ、レオネって人だな。頻繁にテレビ出演しているけど、ポリゴン2以外の手持ちって見たことないんだよな。わざわざ頂上でお参りするって、何でだろうな）

正式な霊園管理員の二人が、草むしりをしていたら足音もなく、レオネが出現していたので、ゴーストタイプと接するのに慣れきってしまった二人でも、女の子のような悲鳴を上げてしまうところだった。

唯一の手持ちであるポリゴン2……トロメインへ何かを話しているが、距離が開いているので内容は聞き取れない。

もしかして、過去の手持ちへの墓参りだろうか？

人間の寿命はどんなに長くても100年、対してポケモンは人間よりも長寿な種族が多い。

事故があり失ってしまったのなら、ポケモンとトレーナーの為に、死力を尽くして商品開発に精を出しているのかもしれない。男達の憶測に過ぎないが。

「行きましようかトロメイン、あまり彼を待たせてしまったら悪いわね」

コクンツ、頷いたトロメインが霧の中を先導し、彼女らはおくりびやまを下って行った。

同時刻、おくりびやまの4Fでは――

「マナちゃんーん！ 返事をしてーん！」

「マナー……！　かくれんぼはいいから出てきておくれー！」

夫婦が命よりも大事な、娘を墓石の隙間さえ逃さぬ勢いで探し回っていた。

祖母の墓参りに来ていたが、まだ物心があいまいな幼児だ、退屈になつて両親が花を添えているホンの数秒間、目を離してしまいマナーと呼ぶ一人娘が消えてしまつていた。

係員に連絡し捜索を続けて貰っているが、30分経過しても見つからない。

一つの階層が広めであり、墓石の数も多いので小さな女の子が、もしも倒れていたらずれば完全に姿は隠れてしまう。

他のトレーナーにも声を掛け、一人娘の捜索に協力して貰う。両親は気が気でなく、どんな理由があつても目を離してしまつた件を酷く後悔している。

そこへ――

「……………マナー!!」

ズシンツ、ズシンツ……

巨人のような体躯の男が、夫婦の前に現れたのだ。

ゴーレムポケモンのゴルグは、二足歩行の中でも最長のポケモン。人化すれば多少は縮むがそれでも一般成人男性よりも、遥かに巨大でこのゴルグも2メートルは軽く越えているだろう……

身体の右側のみを隠すポロ布マント、向かつて右眼に縫い跡のような傷があり、頭部

はスキンヘッド。

建造物がそのまま動き出した巨体に、フランケンシュタインを彷彿とさせる強面。

4Fフロアの間人もポケモンも、ゴルグの迫力に思わず背を向けて逃げ出してしま
いそうになった。

「あー！ おじちゃん、このひとたちがマナのおとーさんとおかーさんだよ！ みつ
かったみつかった！」

「……………ソウカ、ハハ……………よかつたな」

夫婦も立ち尽くしたまま悲鳴すら凍り付いてしまったが、右肩には愛しの――

「あのね！ おじちゃんがたすけてくれたの！ だからマナはこわくなかったよ！」

「……………おマエ、このコのりょうしんなら、めをハナすナ……………」

言語を覚えたばかりな、カタコトな日本語でも彼の視線でも敵を倒せる眼力があれ
ば、恐怖と紙一重。

手のひらにマナを座らせ、両親の元へそつと送り返すゴルグへ、恩人と知らずに外
見だけで偏見を持つてしまった。

両親は鼻声で謝罪するも、ゴルグの彼は何も発しなかった。

「おじちゃん、ありがとうね！」

「コラッ、おじちゃんは失礼でしょう！」

「あつ、そーだね！ ごめんね、おじちゃんのおなまえおしえて？ あつ、またおじちゃんっていつちやった！」

「……………なまえ、なまエか……………なまえはダイジ……………ダよな……………ハ、ハ、は……………おレは『おじちゃん』だ、おじちゃんでないぞ。ハ、ハ、は……………！ まスターがおレをまつてイるから、ここでサヨナラだ」

心優しき巨人は、小指だけでマナの右手と握手を交わしたら、次に会ったらまた肩に乗せてやると約束し、ボロマントを翻しながら下層へと立ち去っていった。足音を極力抑えながら……………

Segment・ennea—— たましい

「あのゴルグは……」

おくりびやまを下って行く、一際目立つ外観。

沈黙を貫き直した巨大なゴルグとすれ違い、インフィスは只ならぬオーラ染みた物を彼から感じていた。

主人の下へ戻っているのか、おくりびやまに生息しているポケモンとは思えない。

彼女が出会ってきたどんな地面、ゴーストポケモンよりも恐ろしい戦闘力。手練れとやり合いたいが生憎インフィスとは相性が最悪だ。

「んっ……っ？」

本日はおくりびやまで、とある行事が行われるのだ。

安らぐ魂、生と死の狭間。弔いの光で山が埋め尽くされ、死者へ舞を捧げる。

最近忙しかったがこの日は休暇を取らせて貰った、インフィスも舞に参加する予定だ。

……かつての主が眠る墓に、両手を合わせながら、蒼の気配を察知し振り向く。

「インフィスさん、この辺りに異様な雰囲気を持つポケモン、居ませんでしたか？」

「ヴィヴィイか。……そのポケモンはゴルージュだと思うぞ、すれ違ったが私には分かる、どのような育成をされているのだろうか」

「ゴルージュ、ですか」

「どうした？」

「いえっ、『似たような何か』エナジー反応がありましたので……このお墓はインフィスさんの元マスターの物ですよ」

紅い瞳に蒼い髪、いつだって変わりの無かった出生不明な少女。

そんなヴィヴィイの瞳はとある二戦、いや、謎の仮面との戦闘で三回目となる、蒼く深い輝きを放つ色へ変化していた。

どんな原理なのか、謎は解析されず仕舞いだが、ヴィヴィイが大事な仲間である事実に変わりは無い。

「ああ、老衰だった。思い残すことは無いと逝ってしまったよ」

まるで『ゴルージュに惹かれる形で辿り着いた』

残念ながら一步遅く、すれ違ってしまったが、そんなにゴルージュと因縁めいた物は無かった筈。

妙に突つ掛かるが、インフィスは線香の香りで涙腺がやや緩む。

それは言い訳、親とも師とも認定していた——ゲット時から決して若くは無かつ

た彼を想いだしてしまおうから。

「人は死ぬ、長生きしても百年、それでも何時かは死んでしまう生き物だ。私達ポケモンだって何時かは死ぬ、人間よりも寿命が長い種は多いのだがな、それが悲しみの要因にもなり得る」

もし、永遠の命を与えられる立場にインフィスがなったとしても、彼の寿命を継ぎ足す行為をしていたらどうか？

自然の摂理で死を求めている彼に、インフィスが「死んで欲しくないから」10年、20年、寿命を殖やして行く、なんと恐ろしいエゴなのだろうか。

誰だって死にたくは無い。

だが死が訪れるから、人間は必死に生きられる。

ポケモンだって同じ事、ゴーストポケモンは既に1度は死んだ存在。

永遠の命を持つだなんて、それこそ一握りの伝説と謳われる存在しか許されない。

虹色の翼、輪廻の大樹、そして開闢の千腕神。

「私達はどれでもない、何もせずとも、何かをしても、平等にその刻が訪れる」

「人間も、わたし達も……何かを残そうとするのは生きた証になるから、でしょうか？」
有名になりたい。

お金が欲しいから？ 声援を浴びたいから？

無意識の動力源、承認欲求、命ある限り命を燃やし、生き様を刻む。

「寿命じゃ無くてもだ。難病に冒されるかもしれない、不幸な事故に巻き込まれるかもしれない。明日は我が身、1秒先に何があるのかなど分からない。生きるのは怖いさ、でも——」

夕日が麓へ沈んでいく。

精一杯に、自らの輝きを眼に焼き付けさんとする、火の玉のような見事な紅は、ヴィヴィの瞳にも眼を向けてしまう酷似であった。

（わたしは、何の為に生まれて来たんだろう、何処へ行くの？）

電脳空間で発見され、ジック一味に保護され、ゲットの道を選んだ。

もしも、発見したのがジックでなければ……？

そんな事、想像もしたくは無い。彼で無ければ起動しない方がいい、今なら言い切つてしまえるから。

「時間は永遠だが、寿命は有限だ。止まる事は出来ない、流れる時間は変えられない。ヴィヴィ、私は後悔しているのだ、主と『もつとああしたい』『明日にはこれをしよう』出来なかつたよ、明日じゃ無くて今しておけ、かつての私に忠告したいくらいだ……」

1度でも時間を巻き戻せるなら、メコンは、ネリは、爽羽佳は、インフィスは——
「ジックだつて、「あそこでああすればよかったな」

それが出来ないのが人生。その道筋は自慢出来る名誉も無ければ、後世に語り継がれる逸話でも無い。

（でも、それが、その人の人生。本当はインフィスさんの元主さんだつて、後悔が無い訳……でも最期は幸せだったと）

看取っている最中も、彼はネガティブな発言を一つもしなかった。

心臓が縮こまっていく、血流がせき止められていく、辛い、痛い、でも口にはせず笑顔のまま、冥界へと旅立っていった。

「ヴィヴィ、後悔だけはしないでくれ。伝えたい気持ちは伝えられる刻に。な？」

「わたしはそんなつ……マスターに伝えたい言葉などありません」

「誰も主の事だと言つてはいないのだが……素直じゃないのもヴィヴィの魅力か」

カマを掛けられた気分、ヴィヴィは焦つて後退る視線を下げるわ、随分とリアクションが大きくなった。一昔前では絶対に見られない姿も、彼女の変化は強さと共に脆さも紙一重であると、ヴィヴィ自身が理解はしている。

「怖いかな？ 現状でも居心地がいいだろう」

「……………」

「それでヴィヴィは満足なのか？ 想像してみるんだ、『明日自分が消える』と。後悔してしまわないか？」

おくりびやまに蠟燭の灯りが、点々と浮かび上がり儀式が始まろうとしている。
線香の香りもすっかり無くなっていた。